県立伝習館高校建替え事業関係埋蔵文化財調査報告書

本町遺跡

― 福岡県柳川市本町所在遺跡の調査 ―

福岡県文化財調査報告書第265集

2018

九州歴史資料館

1　本町遺跡 1 次調査
東半全景（上空から）

2　同上
南半全景（南東から）

3　同上
南西突出部全景（北から）

１　本町遺跡２次調査東半部全景（北東上空から）

２　同上西半部全景（上空から）

１　本町遺跡１次調査
１号大土坑（上空から）

２　同上
獣骨集中部イヌ出土状況
（西から）

３　同上
獣骨集中ネコ出土状況
（西から）

本町遺跡 1 次調査出土土師質土器火鉢（第 17 図）

第141図８

１　本町遺跡２次調査出土「弐番寮」「子番寮」銘木札

１次出土地不明

第139図3

第129図20

第128図1

第129図8

第129図9

２　本町遺跡出土金属製品・木製品

序

福岡県では、県立伝習館高校校舎建替えに係る埋蔵文化財の発掘調査を、平成 25 年度から 27 年度にかけて実施しました。本報告書は、福岡県柳川市本町に所在する本町遺跡１・２次調査の記録です。

本町遺跡は近世柳川城下町遺跡の一部で、柳川藩士の武家屋敷が発見されました。また、江戸時代の絵地図にはない近世前期の区画や、明治時代になって作られた教育施設に関する遺構・遺物も発見され、貴重な資料となりました。

本報告書が教育、学術研究とともに、文化財愛護思想の普及・定着の一助となれば幸いです。

なお、発掘調査･報告書の作成にいたる間には、関係諸機関や地元をはじめ多くの方々にご協力・ご助言をいただきました。ここに、深く感謝いたします。

平成 30 年３月３１日

九州歴史資料館

館長　杉光　誠

例　言

１．本書は、県立伝習館高校校舎建替えに伴って平成 25 年度から 27 年度にかけて発掘調査を実施した、福岡県柳川市本町（ほんまち）に所在する本町遺跡１・２次調査の記録である。

２．発掘調査・整理報告は福岡県教育庁教育企画部施設課の執行委任を受けて、九州歴史資料館が実施した。

３．本書に掲載した遺構写真の撮影は、秦憲二が行い、遺物写真は北岡伸一が行った。空中写真の撮影は東亜航技研株式会社に委託し、気球による撮影を行った。

４．本書に掲載した遺構図の作成は秦・吉村靖徳・小澤佳憲と発掘作業員が行い、遺物実測図は木製品については梶佐古孝謙と秦が、その他は秦と整理作業員が作成した。

５．出土遺物の整理作業は九州歴史資料館において、小川泰樹の指導の下に実施した。

６．出土遺物及び図面・写真等の記録類は、九州歴史資料館において保管する。

７．本書に使用した第２図は、国土交通省国土地理院発行の１/25,000、「羽犬塚」「柳川」を改変したものである。本書で使用した座標は世界測地系により、方位は座標北である。

８．本書は、Ⅴ－１をパリノ・サーヴェイ株式会社が、Ⅴ－２を株式会社古環境研究所が執筆し、その他の執筆と編集は秦が行った。

目　次

Ⅰ　はじめに…… 1
　1　調査に至る経緯…… 1
　2　調査の経過 …… 1
　3　調査・整理の組織…… 2

Ⅱ　位置と環境…… 3
　1　地理的環境…… 3
　2　歴史的環境…… 3

Ⅲ　調査の内容…… 7
　1　遺跡の概要…… 7
　2　1次調査の遺構と遺物 …… 9
　3　2次調査の遺構と遺物 …… 87

Ⅳ　まとめ…… 209
　1　本町遺跡検出遺構の変遷…… 209
　2　各時期と古地図との比較…… 209
　3　明治期の遺構について…… 215
　4　本町遺跡出土瓦について…… 217
　5　スタンプについて…… 221
　6　瓦の出土分布と各期の屋根形態について…… 221

Ⅴ　自然科学系の分析…… 225
　1　本町遺跡出土骨について…… 225
　2　本町遺跡出土種実等同定…… 246

Ⅵ　おわりに…… 250

図版目次

巻頭図版１　１　本町遺跡１次調査東半全景（上空から）　２　同上南半全景（南東から）
　　３　同上南西突出部全景（北から）
巻頭図版２　１　本町遺跡２次調査東半部全景（北東上空から）
　　２　同上西半部全景（上空から）
巻頭図版３　１　本町遺跡１次調査１号大土坑（上空から）
　　２　同上獣骨集中部イヌ出土状況（西から）３　同上ネコ出土状況（西から）
巻頭図版４　１　本町遺跡１次調査出土土師質土器火鉢
巻頭図版５　１　本町遺跡２次調査出土「弐番寮」「子番寮」銘木札
　　２　本町出土遺跡出土金属 製品・木製品

図版１　１　１次調査東半全景（上空から）　２　同上　西半全景（上空から）
　　３　同上 渡り廊下部全景（上空から）
図版２　１　１次調査基本層序（南から）　２　１次調査北東部第１遺構面全景（北から）
図版３　１　１次調査１号土坑（南から）　２　１次調査２号土坑土層断面（南から）
　　３　１次調査1・2・4・6号土坑（上空から）　４　１次調査４号土坑土層断面（南から）
図版４　１　１次調査５号土坑･6号溝状遺構（上空から）　２　１次調査６号土坑土層断面（西から）
　　３　１次調査10号土坑・16号土坑（上空から）　４　１次調査15号土坑（南東から）
　　５　１次調査11号土坑・12号溝状遺構（上空から）
図版５　１　１次調査17号土坑（西から）　２　１次調査17号土坑土層断面（南から）
　　３　１次調査17号土坑人骨出土状況（北西から）
　　４　１次調査18号土坑・2号井戸・21号溝状遺構（上空から）
図版６　１　１次調査16号土坑（南西から）　２　同上18号土坑･21号溝状遺構土層断面（北から）
　　３　同上19号土坑（南から）　４　同上20号土坑（西から）
　　５　同上21号土坑遺物出土状況（南から）　６　同上22号土坑（西から）
　　７　１次調査21～24・26号土坑（上空から）
図版７　１　１次調査24号土坑（東から）　２　１次調査25号土坑（東から）
　　３　１次調査58号土坑（東から）　４　１次調査59号土坑（西から）
　　５　１次調査４～６号大溝遺構（上空から）　６　１次調査60号土坑（西から）
図版８　１　１次調査埋甕遺構（北から）　２　１次調査２号井戸（東から）
　　３　１次調査３号井戸（上空から）　４　１次調査１号墓（北から）
　　５　１次調査獣骨集中部（南から）　６　１号大土坑出土イヌワシ骨
　　７　１号大土坑導水施設状況（北西から）
図版９　１　１次調査道路状遺構（上空から）　２　同上土層断面（南から）
　　３　１次調査方形周溝遺構（東から）
図版10　１　１次調査１号溝状遺構土層断面（北から）　２　同上南部土層断面（南から）
　　３　同上磁器出土状況（東から）　４　同上２号溝状遺構土層断面（西から）

5　同上３号溝状遺構土層断面（西から）６　同上４号溝状遺構土層断面（南から）
7　同上土人形出土状況（西から）
図版 11　1　１次調査４号溝状遺構南部土層断面（北から）
2　１次調査９号溝状遺構南部土層断面（西から）
3　１次調査 13 号溝状遺構瓦出土状況（南西から）
4　１次調査 15 号溝状遺構遺物出土状況（西から）
5　１次調査道路状遺構・18 号溝状遺構土層断面（東から）
6　１次調査 15 号溝状遺構土層断面（西から）
図版 12　1　１次調査 28 号溝状遺構・３号大溝（上空から）
2　１次調査 28 号溝状遺構土層断面（東から）
3　同上ウシ骨出土状況（南東から）
図版 13　1　１次調査 32 号溝状遺構土層断面（東から）２　同上 33 号溝状遺構土層断面（西から）
3　１次調査 34 号溝状遺構土層断面（西から）４　同上 35 号溝状遺構土層断面（西から）
図版 14　1　１次調査１号大溝遺構（上空から）２　同上土層断面（南から）
3　１次調査３a 号大溝遺構土層断面（東から）
図版 15　1　１次調査３ｂ号大溝遺構漆器出土状況（上から）
2　同上４号大溝遺構土層断面（西から）
3　１次調査５・６号大溝遺構土層断面（北から）
4　１次調査礎石下栗石検出状況（東から）５　１次調査礎石出土状況（北西から）
6　１次調査礎石下杭検出状況（南から）　7　１次調査基礎転用礎石検出状況（南から）
図版 16　1　２次調査東半全景（北上空から）　2　２次調査西半全景（西上空から）
図版 17　1　２次調査東半全景（上空から）　2　２次調査西半全景（上空から）
図版 18　1　２次調査南西部第１遺構面（南から）　2　２次調査中央南部第１遺構面（南東から）
3　２次調査東半第２遺構面（上空から）
図版 19　1　２次調査１号土坑（北から）　2　同上瓦出土状況（北から）
3　２次調査３号土坑（南西から）
図版 20　1　２次調査３号土坑遺物出土状況（南西から）　２　同上土層断面（南から）
3　２次調査４号土坑（南から）　4　同上土層断面（北西から）
図版 21　1　２次調査５号土坑（上空から）　2　２次６号土坑（北から）
3　２次調査７号土坑（南から）　4　２次調査９号土坑上層遺物出土状況（北西から）
図版 22　1　２次調査９号土坑遺物出土状況（西から）　２　同上（北から）
3　２次調査 10 号土坑（東から）　4　同上遺物出土状況（南から）
図版 23　1　２次調査 11 号土坑（東から）　2　２次調査 13 号土坑（東から）
3　２次調査 15 号土坑（東から）　4　２次調査 16 号土坑（東から）
図版 24　1　２次調査１号大土坑土層断面（北から）　２　２次調査２号大土坑（上空から）
3　同上南側遺物出土状況（東から）
図版 25　1　２次調査２号大土坑土層断面（北から）　２　同上杭列検出状況（北東から）
3　同上土留板検出状況（南西から）　4　２次調査埋甕（上から）

図版 26　1　2 次調査 1 ・ 2 号溝状遺構土層断面（西から）
2　2 次調査 7 ・ 12 号溝状遺構土層断面（東から）
3　2 次調査 11 号溝状遺構（西から）　4　2 次調査柱 1（北から）
図版 27　1　2 次調査 1 号大溝遺構土層断面（南から）　2　2 次調査 3 号大溝遺構（南から）
3　同上土層断面（南から）　4　2 次調査礎石 1（北から）
図版 28　本町遺跡調査出土遺物 1
図版 29　本町遺跡調査出土遺物 2
図版 30　本町遺跡調査出土遺物 3
図版 31　本町遺跡調査出土遺物 4
図版 32　本町遺跡調査出土遺物 5
図版 33　本町遺跡調査出土遺物 6
図版 34　本町遺跡調査出土遺物 7
図版 35　本町遺跡調査出土遺物 8
図版 36　本町遺跡調査出土遺物 9
図版 37　本町遺跡調査出土遺物 10
図版 38　本町遺跡調査出土遺物 11
図版 39　本町遺跡調査出土遺物 12
図版 40　本町遺跡調査出土遺物 13
図版 41　本町遺跡調査出土遺物 14
図版 42　本町遺跡調査出土遺物 15
図版 43　本町遺跡調査出土遺物 16
図版 44　本町遺跡調査出土遺物 17
図版 45　本町遺跡調査出土遺物 18
図版 46　本町遺跡調査出土遺物 19
図版 47　本町遺跡調査出土遺物 20
図版 48　本町遺跡調査出土遺物 21
図版 49　本町遺跡調査出土遺物 22
図版 50　本町遺跡調査出土遺物 23
図版 51　本町遺跡調査出土遺物 24
図版 52　本町遺跡調査出土遺物 25
図版 53　本町遺跡調査出土遺物 26
図版 54　本町遺跡調査出土遺物 27
図版 55　本町遺跡調査出土遺物 28
図版 56　本町遺跡調査出土遺物 29
図版 57　本町遺跡調査出土遺物 30
図版 58　本町遺跡調査出土遺物 31

挿図目次

第 1 図　柳川市位置図 …… 1
第 2 図　周辺遺跡分布図（1/50,000）…… 5
第 3 図　調査範囲図 …… 6
第 4 図　基本土層図（1/40）…… 7
第 5 図　本町遺跡遺構略配置図（1/600）…… 8
第 6 図　1 次調査 1 ～ 5 号土坑実測図（1/60）…… 9
第 7 図　1 次調査 1 ～ 3･5 号土坑出土土器・陶磁器実測図（6･8･11･13･14 は 1/4、他は 1/3）… 11
第 8 図　1 次調査 6・10・11・16 号土坑実測図（1/60）…… 12
第 9 図　1 次調査 10 号土坑出土土器実測図（ 9 ～ 11 は 1/4、他は 1/3）…… 13
第 10 図　1 次調査 10 号土坑出土陶器実測図 1（22・23 は 1/4、他は 1/3）…… 14
第 11 図　1 次調査 10 号土坑出土陶器実測図 2（3 ～ 7・10 は 1/4、他は 1/3）…… 15
第 12 図　1 次調査 10 号土坑出土磁器実測図（1/3）…… 16
第 13 図　1 次調査 10 号土坑出土磁器・瓦実測図（3・4 は 1/4、他は 1/3）…… 17
第 14 図　1 次調査 11 号土坑出土土器・陶磁器・瓦実測図（2・3・8 は 1/4、他は 1/3）…… 19
第 15 図　1 次調査 12 ～ 15・17 ～ 20 号土坑実測図（1/60）…… 20
第 16 図　1 次調査 12 ～ 15 号土坑出土土器・陶磁器実測図（1/3）…… 21
第 17 図　1 次調査 15 号土坑出土土器実測図（1/3）…… 折込
第 18 図　1 次調査 15 号土坑出土陶磁器・瓦実測図（7・8 は 1/4、他は 1/3）…… 23
第 19 図　1 次調査 15a・b 号土坑出土土器・陶磁器・瓦実測図（1/3）…… 24
第 20 図　1 次調査 16・17 号土坑出土土器・陶磁器実測図（1/3）…… 25
第 21 図　1 次調査 18 号土坑出土土器・陶器実測図（11 は 1/4、他は 1/3）…… 26
第 22 図　1 次調査 18・19 号土坑出土土器・陶磁器・瓦実測図（1/3）…… 27
第 23 図　1 次調査 20 号土坑出土土器・陶磁器実測図（1/3）…… 28
第 24 図　1 次調査 21 ～ 26 号土坑実測図（1/60）…… 29
第 25 図　1 次調査 21･22･24･25 号土坑出土土器・陶磁器実測図（ 2 は 1/4、他は 1/3）…… 30
第 26 図　1 次調査 26 号土坑出土土器・陶器実測図 1 （ 4 は 1/4、他は 1/3）…… 31
第 27 図　1 次調査 26 号土坑出土土器・陶器実測図 2 （ 3 ～ 5 は 1/4、他は 1/3）…… 32
第 28 図　1 次調査 26 号土坑出土磁器実測図（ 9 は 1/4、他は 1/3）…… 33
第 29 図　1 次調査 42 号土坑・1 号大土坑導水施設実測図（1/40）…… 34
第 30 図　1 次調査 42 号土坑出土土器・陶磁器実測図（1/ 3 ）…… 35
第 31 図　1 次調査 42・58 ～ 60 号土坑出土陶磁器・瓦実測図（ 2 は 1/4、他は 1/3）…… 36
第 32 図　1 次調査 58 ～ 60 号土坑・その他の遺構実測図（7・8 は 1/30、他は 1/40 ）…… 37
第 33 図　1 次調査 1 号大土坑実測図（1/80）…… 38
第 34 図　1 次調査 1 号大土坑上位出土土器・陶磁器・瓦実測図（ 7 は 1/4、他は 1/3）…… 39

第 35 図　1 次調査 1 号大土坑出土土器・陶器実測図（2・4・16 は 1/4、他は 1/3）…… 40
第 36 図　1 次調査 1 号大土坑出土土器・陶磁器実測図（1/3）…… 41
第 37 図　1 次調査 1 号大土坑出土瓦実測図（6・7 は 1/3、他は 1/4）…… 42
第 38 図　1 次調査 2 号井戸出土土器・陶磁器・瓦実測図（4・6 は 1/4、15 は 1/8、他は 1/3）… 43
第 39 図　1 次調査 2・3 号井戸出土土器・陶磁器・瓦実測図（12 は 1/4、他は 1/3）…… 44
第 40 図　1 次調査 1 号溝状遺構出土土器・陶磁器・瓦実測図（8 は 1/4、他は 1/3）…… 45
第 41 図　1 次調査 1 号溝状遺構出土土器・瓦実測図（1/3）…… 47
第 42 図　1 次調査 1・17・18 号溝状遺構、道路状遺構土層断面図（1/60）…… 48
第 43 図　1 次調査方形周溝遺構、1･3 ～ 5･8･32 ～ 35 号溝状遺構、
5･18 号土坑土層断面実測図（1/60）…… 51
第 44 図　1 次調査 2・3 号溝状遺構出土土器・陶磁器・瓦実測図（1/3）…… 52
第 45 図　1 次調査 4 号溝状遺構出土土器・陶磁器・瓦実測図（1/3）…… 53
第 46 図　1 次調査 5・8・9・12 号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図（4 は 1/4、他は 1/3）…… 54
第 47 図　1 次調査 13 号溝状遺構出土土器・陶器実測図（17 は 1/4、他は 1/3）…… 55
第 48 図　1 次調査 13 号溝状遺構出土土器・陶磁器・瓦実測図（21 は 1/4、他は 1/3）…… 56
第 49 図　1 次調査 14・15 号溝状遺構出土土器・陶磁器・瓦実測図（1 は 1/4、他は 1/3）…… 57
第 50 図　1 次調査 15 号溝下位出土土器・陶器・瓦実測図（1/3）…… 58
第 51 図　1 次調査 16 号溝状遺構出土土器・陶器実測図（1/3）…… 59
第 52 図　1 次調査 16 号溝状遺構出土陶器実測図 1（1/3）…… 60
第 53 図　1 次調査 16 号溝状遺構出土陶器実測図 2（7 ～ 9 は 1/4、他は 1/3）…… 61
第 54 図　1 次調査 16 号溝状遺構出土磁器実測図（1/3）…… 62
第 55 図　1 次調査 16 号溝状遺構出土瓦実測図（1 は 1/3、他は 1/4）…… 63
第 56 図　1 次調査 16 ～ 18 号溝状遺構出土土器・陶磁器・瓦実測図（3 は 1/4、他は 1/3）…… 64
第 57 図　1 次調査 19 号溝状遺構出土陶器実測図（8 は 1/4、他は 1/3）…… 65
第 58 図　1 次調査 20 号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図（1/3）…… 66
第 59 図　1 次調査 20 号溝状遺構出土土器・陶磁器・瓦実測図（3 は 1/4、他は 1/3）…… 67
第 60 図　1 次調査 21 号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図（1/3）…… 68
第 61 図　1 次調査 23・26a 号溝状遺構出土陶磁器・瓦実測図（1/3）…… 69
第 62 図　1 次調査 27 ～ 30 号溝状遺構出土土器・陶磁器・瓦実測図（10 は 1/4、他は 1/3）…… 70
第 63 図　1 次調査大溝遺構土層断面図（1/60）…… 72
第 64 図　1 次調査 1 号大溝遺構一括出土土器・陶磁器実測図（1/3）…… 73
第 65 図　1 次調査 1 号大溝遺構上・中位出土土器・瓦実測図（1 は 1/4、他は 1/3）…… 74
第 66 図　1 次調査 1 号大溝遺構上・中位出土土器・陶器・瓦実測図（18･19 は 1/4、他は 1/3）… 75
第 67 図　1 次調査 3 号大溝遺構出土土器・陶磁器・瓦実測図（2・3 は 1/4、他は 1/3）…… 76
第 68 図　1 次調査 4・5 号大溝出土陶磁器・瓦実測図（1/3）…… 77
第 69 図　1 次調査埋甕遺構実測図（1/3）…… 78
第 70 図　1 次調査ピット出土土器・陶磁器・瓦実測図（2・7 は 1/4、他は 1/3）…… 79
第 71 図　1 次調査黒色土包含層出土陶磁器・瓦実測図（1/3）…… 80

第 72 図　1 次調査北東黒色土整地層出土土器・陶磁器実測図（14・15 は 1/4、他は 1/3）…… 81
第 73 図　1 次調査北東整地層出土土器・陶器・瓦実測図（ 7 は 1/4、他は 1/3） …… 82
第 74 図　1 次調査北東・区画整地層出土土器・陶磁器・瓦実測図（1/3） …… 83
第 75 図　1 次調査礎石・出土地不明・攪乱・検出面出土土器・陶磁器・瓦実測図
（ 3 は 1/4、他は 1/3）…… 84
第 76 図　2 次調査 1 ～ 6 号土坑実測図（1/60）…… 86
第 77 図　2 次調査 1 号土坑出土瓦実測図（1 ～ 3 は 1/4、他は 1/3） …… 87
第 78 図　2 次調査 3 ・ 4 号土坑出土土器・陶磁器・瓦実測図（1/ 3） …… 88
第 79 図　2 次調査 5 号土坑出土陶磁器・瓦実測図（3 ～ 7 は 1/4、他は 1/ 3）…… 89
第 80 図　2 次調査 5 号土坑出土瓦実測図（1/4） …… 90
第 81 図　2 次調査 7・9 号土坑、落ち込み遺構実測図（1/60） …… 91
第 82 図　2 次調査 5 ～ 7 号土坑出土陶磁器・瓦実測図（1/ 3） …… 92
第 83 図　2 次調査 9 号土坑上層出土陶磁器・瓦実測図（1/ 3） …… 93
第 84 図　2 次調査 9 号土坑出土土器実測図（2・5 は 1/4、他は 1/ 3） …… 94
第 85 図　2 次調査 9 号土坑出土土器・陶磁器実測図（4 は 1/8、他は 1/ 3）…… 95
第 86 図　2 次調査 9 号土坑出土陶磁器・瓦実測図（15 ～ 17 は 1/4、他は 1/ 3）…… 96
第 87 図　2 次調査 9 号土坑出土瓦実測図 1 （1/4） …… 97
第 88 図　2 次調査 9 号土坑出土瓦実測図 2（1/4） …… 98
第 89 図　2 次調査 9 号土坑出土瓦実測図 3（1/4） …… 99
第 90 図　2 次調査 9 号土坑出土瓦実測図 4（1/4） …… 100
第 91 図　2 次調査 9 号土坑出土瓦実測図 5（1/3） …… 101
第 92 図　2 次調査 9 号土坑出土瓦実測図 6 （1/3） …… 102
第 93 図　2 次調査 9 号土坑出土瓦実測図 7 （1/3） …… 103
第 94 図　2 次調査 9 号土坑出土瓦実測図 8 （1/4） …… 104
第 95 図　2 次調査 9 号土坑出土瓦実測図 9 （1/4） …… 105
第 96 図　2 次調査 10 号土坑実測図（1/80） …… 106
第 97 図　2 次調査 10 号土坑出土土器実測図 1 （1/3）…… 107
第 98 図　2 次調査 10 号土坑出土土器実測図 2 （1/3）…… 108
第 99 図　2 次調査 10 号土坑出土土器・陶磁器実測図（16 は 1/2、他は 1/3） …… 109
第100図　2 次調査 10 号土坑出土瓦実測図（1・2 は 1/4、他は 1/3） …… 110
第101図　2 次調査 11 ～ 17 号土坑実測図（1/60 ） …… 111
第102図　2 次調査 11 号土坑出土土器実測図（ 4 は 1/4、他は 1/3）…… 112
第103図　2 次調査 11 号土坑出土土器実測図（1/3）…… 113
第104図　2 次調査 1 号大土坑実測図（1/80）…… 114
第105図　2 次調査 2 号大土坑実測図（1/80）…… 115
第106図　2 次調査 1・2 号大土坑出土土器・陶磁器実測図（1/3）…… 116
第107図　2 次調査 2 号大土坑出土陶器実測図（ 1 は 1/2、他は 1/3） …… 117
第108図　2 次調査 2 号大土坑出土磁器実測図（1/3） …… 118

第109図　２次調査２号大土坑出土瓦実測図１（1/4）…… 119
第110図　２次調査２号大土坑出土瓦実測図２（1/4）…… 120
第111図　２次調査埋甕遺構実測図（1/10）…… 120
第112図　２次調査溝状遺構・大溝遺構土層断面図（1/60）…… 121
第113図　２次調査1･2･4号溝状遺構出土土器・陶磁器・瓦実測図（8･10は1/4、他は1/3）… 122
第114図　２次調査４号溝状遺構出土瓦実測図（1/4）…… 123
第115図　２次調査７号溝状遺構出土土器・陶磁器・瓦実測図（９は1/4、他は1/3）…… 124
第116図　２次調査９・10・12号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図（18は1/4、他は1/3）…… 125
第117図　２次調査12号溝状遺構出土磁器実測図（1/3）…… 126
第118図　２次調査12号溝状遺構出土土器・磁器実測図（1/3）…… 127
第119図　２次調査12号溝状遺構出土瓦実測図（8～11は1/3、他は1/4）…… 128
第120図　２次調査１・２号大溝・１号落ち込み・１号埋甕出土土器・陶磁器・瓦実測図
（8・13は1/4、他は1/3）…… 129
第121図　２次調査ピット出土土器・陶磁器・瓦実測図（11・13は1/4、他は1/3）…… 130
第122図　２次調査遺構検出面・黒色土包含層出土土器・陶磁器実測図（1/3）…… 131
第123図　２次調査整地層出土土器・瓦実測図（３は1/3、他は1/4）…… 132
第124図　本町遺跡出土ガラス製品実測図（17・18は1/2、他は1/3）…… 133
第125図　本町遺跡出土石製品実測図（1～6・12・21・22・24は1/2、他は1/3）…… 134
第126図　本町遺跡出土石・鹿角製品実測図（４は1/2、他は1/4）…… 135
第127図　本町遺跡出土銅銭実測図（1/2）…… 136
第128図　本町遺跡出土金属製品実測図（19・29は1/2、他は1/3）…… 137
第129図　本町遺跡１次調査出土木製品実測図１（1/3）…… 138
第130図　本町遺跡１次調査出土木製品実測図２（1/3）…… 139
第131図　本町遺跡１次調査出土木製品実測図３（1/3）…… 140
第132図　本町遺跡１次調査出土木製品実測図４（1/3）…… 141
第133図　本町遺跡１次調査出土木製品実測図５（1・2・9・12～14は1/3、他は1/4）…… 142
第134図　本町遺跡１次調査出土木製品実測図６（1・8は1/4、他は1/3）…… 143
第135図　本町遺跡１次調査出土木製品実測図７（7は1/2、他は1/3）…… 144
第136図　本町遺跡１次調査出土木製品実測図８（1/3）…… 145
第137図　本町遺跡１次調査出土木製品実測図９（3は1/3、他は1/2）…… 146
第138図　本町遺跡２次調査出土木製品実測図１（1/3）…… 147
第139図　本町遺跡２次調査出土木製品実測図２（3は1/2、4～7は1/4、他は1/3）…… 148
第140図　本町遺跡２次調査出土木製品実測図３（1/3）…… 149
第141図　本町遺跡２次調査出土木製品実測図４（4・5・8は1/4、他は1/3）…… 150
第142図　本町遺跡２次調査出土木製品実測図５（18は1/4、他は1/3）…… 151
第143図　本町遺跡２次調査出土木製品実測図６（1/8）…… 152
第144図　本町遺跡２次調査出土木製品実測図７（1/8）…… 154
第145図　本町遺跡２次調査出土木製品実測図８（1/8）…… 155

第146図　1期の遺構と佐賀県姉川城跡との比較 …… 207
第147図　本町遺跡遺構変遷図1（1/800）…… 208
第148図　本町遺跡遺構変遷図2（1/800）…… 209
第149図　2・3期の遺構と古絵図との比較 …… 211
第150図　4期の遺構と古絵図との比較 …… 213
第151図　県立伝習館高校敷地内における施設変遷図 …… 214
第152図　本町遺跡明治・大正期遺構復元図（1/300）…… 折込
第153図　本町遺跡出土軒丸瓦分類図1 …… 216
第154図　本町遺跡出土軒丸瓦分類図2 …… 217
第155図　本町遺跡出土軒平瓦分類図1 …… 218
第156図　本町遺跡出土軒平瓦分類図2 …… 219
第157図　本町遺跡出土軒平瓦分類図3 …… 220
第158図　本町遺跡出土瓦スタンプ拓影1（1/3）…… 222
第159図　本町遺跡出土瓦スタンプ拓影2（1/3）…… 223
第160図　主要瓦分布図 …… 224
付図　本町遺跡遺構全体図（1/200）

表目次

表1　1次調査出土土器・陶磁器・瓦観察表1 …… 156
表2　1次調査出土土器・陶磁器・瓦観察表2 …… 157
表3　1次調査出土土器・陶磁器・瓦観察表3 …… 158
表4　1次調査出土土器・陶磁器・瓦観察表4 …… 159
表5　1次調査出土土器・陶磁器・瓦観察表5 …… 160
表6　1次調査出土土器・陶磁器・瓦観察表6 …… 161
表7　1次調査出土土器・陶磁器・瓦観察表7 …… 162
表8　1次調査出土土器・陶磁器・瓦観察表8 …… 163
表9　1次調査出土土器・陶磁器・瓦観察表9 …… 164
表10　1次調査出土土器・陶磁器・瓦観察表10 …… 165
表11　1次調査出土土器・陶磁器・瓦観察表11 …… 166
表12　1次調査出土土器・陶磁器・瓦観察表12 …… 167
表13　1次調査出土土器・陶磁器・瓦観察表13 …… 168
表14　1次調査出土土器・陶磁器・瓦観察表14 …… 169
表15　1次調査出土土器・陶磁器・瓦観察表15 …… 170
表16　1次調査出土土器・陶磁器・瓦観察表16 …… 171
表17　1次調査出土土器・陶磁器・瓦観察表17 …… 172
表18　1次調査出土土器・陶磁器・瓦観察表18 …… 173
表19　1次調査出土土器・陶磁器・瓦観察表19 …… 174

表 20　1 次調査出土土器・陶磁器・瓦観察表 20 …… 175
表 21　1 次調査出土土器・陶磁器・瓦観察表 21 …… 176
表 22　1 次調査出土土器・陶磁器・瓦観察表 22 …… 177
表 23　1 次調査出土土器・陶磁器・瓦観察表 23 …… 178
表 24　1 次調査出土土器・陶磁器・瓦観察表 24 …… 179
表 25　1 次調査出土土器・陶磁器・瓦観察表 25 …… 180
表 26　1 次調査出土土器・陶磁器・瓦観察表 26 …… 181
表 27　1 次調査出土土器・陶磁器・瓦観察表 27 …… 182
表 28　1 次調査出土土器・陶磁器・瓦観察表 28 …… 183
表 29　1 次調査出土土器・陶磁器・瓦観察表 29 …… 184
表 30　1 次調査出土土器・陶磁器・瓦観察表 30 …… 185
表 31　1 次調査出土土器・陶磁器・瓦観察表 31 …… 186
表 32　1 次調査出土土器・陶磁器・瓦観察表 32 …… 187
表 33　1 次調査出土土器・陶磁器・瓦観察表 33 …… 188
表 34　2 次調査出土土器・陶磁器・瓦観察表 1 …… 189
表 35　2 次調査出土土器・陶磁器・瓦観察表 2 …… 190
表 36　2 次調査出土土器・陶磁器・瓦観察表 3 …… 191
表 37　2 次調査出土土器・陶磁器・瓦観察表 4 …… 192
表 38　2 次調査出土土器・陶磁器・瓦観察表 5 …… 193
表 39　2 次調査出土土器・陶磁器・瓦観察表 6 …… 194
表 40　2 次調査出土土器・陶磁器・瓦観察表 7 …… 195
表 41　2 次調査出土土器・陶磁器・瓦観察表 8 …… 196
表 42　2 次調査出土土器・陶磁器・瓦観察表 9 …… 197
表 43　2 次調査出土土器・陶磁器・瓦観察表 10 …… 198
表 44　2 次調査出土土器・陶磁器・瓦観察表 11 …… 199
表 45　2 次調査出土土器・陶磁器・瓦観察表 12 …… 200
表 46　2 次調査出土土器・陶磁器・瓦観察表 13 …… 201
表 47　本町遺跡出土・ガラス石製品観察表 …… 202
表 48　本町出土金属製品観察表 …… 203
表 49　本町遺跡出土木製品観察表 1 …… 204
表 50　本町遺跡出土木製品観察表 2 …… 205
表 51　本町遺跡出土木製品観察表 3 …… 206

Ⅰ　はじめに

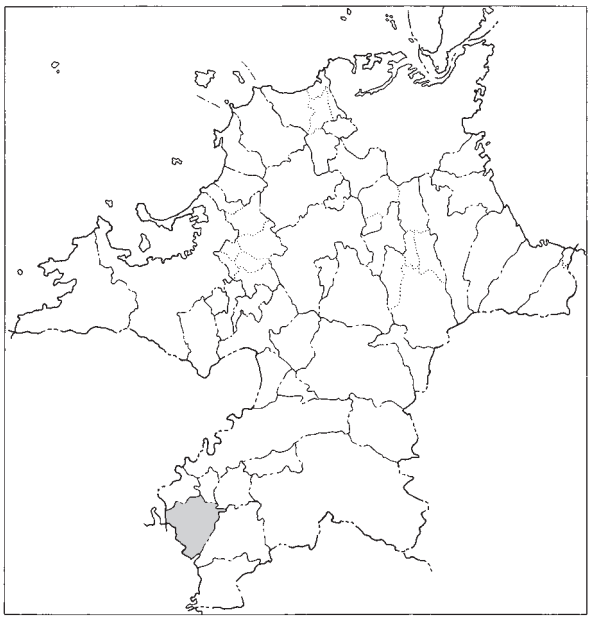
1　調査に至る経緯

平成 25 年度に福岡県教育庁総務部施設課により県立伝習館高校南北校舎の建替事業が計画され、同課から柳川市教育委員会に事業地における埋蔵文化財の有無について問い合わせがあった。事業地は近世柳川城下町遺跡内であったことから、平成 25（2013）年 11 月７・８日に柳川市教育委員会が既存の建築物の下に遺構が残っているかの確認調査を実施し、校舎基礎の間に遺構が残っていることが確認された。その後、柳川市教育委員会が業務繁多であったため、同教育委員会と福岡県文化財保護課が協議を持ち、九州歴史資料館が発掘調査を担当することになり、施設課の執行委任を受け、平成 26 年度と平成 27 年度に、工事工程に合わせて大きく３工程に分けて発掘調査を実施した。なお、伝習館高校と事前協議を持ち、学校行事に配慮し調査を行うことを確認した。

2　調査の経過

平成 25 年 12 月から 26 年度９月までの、南校舎の建て替え範囲とプール前の渡り廊下部分の建設範囲を１次調査とした。既存の建物解体時に、遺構を傷つけない深度を立ち会い確認し、遺構面に達しない基礎のみを、校舎解体時に撤去してから調査に入った。

調査用地周囲は排出土を置く空間がないため、用地内の反転作業を計画し、平成 25 年 12 月８日に 0.7m³ バックホーを入れたところ、校舎基礎が広く残っており、調査できる範囲は想定より狭くなった。１月 27 日、中央部まで高いところで 50㎝の整地層が残っていることが分かり、下位面が存在することが明らかになり、厚いところで 50cm ほどの整地層が残っていた。整地層とはいえ、軟弱地盤の粘土層のため、バックホーを再度入れて整地層を掘削することができず、さらに下位層に大型の溝が検出されたことから、人力で整地層と大型溝を掘削することが必要になった。２月５日に校舎屋上から全景写真を撮り、キャリーダンプを投入して整地面の掘削と下面の遺構の検出に入った。強粘土の作業面では一輪車のタイヤが回らず、スロープは滑って上がれなかったが、キャリーダンプにより作業効率が上がった。排出土量も当初の見込みより多くなったため、施設課と協議して排出土の場外搬出を行った。また、年度内に終了できなかったため、調査期間の延長を申し入れ、年度を改めて５月 16 日に空中写真を撮影し、５月 29 日に撤収した。なお、空中写真撮影には、騒音に配慮してバルーンを使用した。



第１図　柳川市の位置図

プール前の渡り廊下部分は、高校側の要望で夏期休暇期間に実施することになり、７月 29 日に小型のバックホーを入れて表土剥ぎに着手したが、旋回の困難な狭小地で、埋設管も存在したためトレンチ調査のようになった。９月８日に空中写真を撮影し、９月 10 日

に埋め戻しを完了して撤収した。

2次調査は北校舎の取り壊し後の平成27年10月13日に実施した。この調査も用地内の反転調査となり、まず東半から着手した。バックホーを入れたところ、南西部のみ2面残っていた。遺構数・遺物量ともにはそれほど多く、12月16日に空中写真を撮影した。計画どおり進捗していたが、反転して西側に着手したところ、校舎の基礎杭が広い範囲に打ち込まれていたため、バックホーの稼働率が極端に落ちた。上位に瓦が多量に出土する遺構が2基検出されたほか、遺物量が多かったことから、人力掘削にも時間がかかった。また、西北部分に遺構面が2面残っていることが判明し、調査期間が延び、終盤は困難を極めた。平成28年3月4日に空中写真を撮影し、3月25日に撤収した。調査面積は1次調査が1,110㎡、2次調査が1,600㎡で、計2,710㎡となった。

3　調査・整理の組織

平成25～27（2013～2015）年度の調査および平成29（2017）年度の整理報告に関わる関係者は次のとおりである。なお、発掘調査に当たっては、地元の方々、発掘調査に参加された方々、柳川市教教育委員会の関係者の皆様より御協力を賜った。記して感謝いたします。

	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成29年度
九州歴史資料館	（発掘調査）	（発掘調査）	（発掘調査）	（整理報告）
総括				
館長	荒巻俊彦	杉光　誠	杉光　誠	杉光　誠
副館長	篠田隆行	伊崎俊秋	伊崎俊秋	飛野博文
参事（文化財調査室長）	飛野博文	飛野博文	飛野博文	
企画主幹（文化財調査室長）	飛野博文	飛野博文		吉村靖徳
文化財調査室長			吉村靖徳	吉村靖徳
企画主幹（文化財調査室長補佐）	吉村靖徳	吉村靖徳	伊崎俊秋	
庶務				
企画主管（総務室長）	圓城寺紀子	塩塚孝憲	塩塚孝憲	田嶋朋子
企画主査（総務班長）	長野吉博	山崎　彰	中村満喜子	中村満喜子
事務主査	青木三保	南里成子	宮崎奈巳	林田朋子
	南里成子		西村知子	
主任主事	近藤一崇			原野貴生
				秦　健太
主事	三好洸一		秦　健太	
調査				
技術主査	秦　憲二	秦　憲二	秦　憲二	
整理報告				
参事補佐（文化財調査班長）				秦　憲二
参事補佐				小川泰樹

Ⅱ　位置と環境

1　地理的環境

筑後川と矢部川が有明海に注ぐ筑後平野南西部に位置する柳川市は柳川藩 11 万石の城下町であり、掘割が網目状に走る水郷都市である。現在の柳川市は、平成 17(2005) 年の平成の大合併で、旧柳川市と大和町・三橋町が合併しており、人口約 75,000 人、面積 76.9 平方キロメートルの県南部を代表する地方都市である。筑後平野南西部の有明海沿岸にあり、西を筑後川、東を矢部川に挟まれた三角州に立地する。沖積低地を構成するのは、海成層である有明粘土層と非海成層の蓮池層である。市域は標高１～６ｍ程度の平坦な低平地で、網目状に配置された掘割を伴う水田地帯が広がり、独特の景観を見せており、平成 27 年には「水郷柳河」として国の名勝に指定された。また、有明海は干満差が激しいため、沿岸部には国内有数の干潟が広がり、市域南部には鱗上に干拓地が展開している。

2　歴史的環境

柳川市域の遺跡は現在のところ、弥生時代中期初頭から確認されており、東蒲池蓮池遺跡（註１）で中期初頭から後半の遺跡が、徳益八枝遺跡（註２）で弥生時代中期前半の遺跡が見つかっている。中期後半では磯鳥フケ遺跡（註３）が、後期では蒲船津江頭遺跡（註４）が調査されており、後者では礎板をもつ掘立柱建物跡が多数確認されている。また、西蒲池池淵遺跡では卜骨や鐸形土製品が発見された（註５）

古墳時代では、東蒲池門前遺跡（註６）・西蒲池池淵遺跡（註７）で土器貝殻層中から６～８世紀の土器が多量に出土し、貴重な資料となっている。市域では古墳は発見されていないが、削平を受けた古墳が存在するかもしれない。

古代の遺跡は希薄だが、東蒲池榎町遺跡（註８）で８～ 10 世紀の土坑が確認されており、蒲船津水町遺跡（註９）では 9 世紀の墨書土器が発見された。

中世に入ると、市域の沖端川以西・以北は「三潴庄」に、それ以外は「瀬高庄」に属した。「和名抄」の郷としては、筑後国下妻郡の中に「鹿待郷」があり、これが「蒲池」に通ずるとされている。鎌倉後期の永仁４（1296）年「玉垂宮並大善寺仏神事次第写」（御船文書）の三潴荘関係史料の中に「蒲池村」と「簗川村」が見え、このころには柳河地区にも集落が展開していたとわかる。

中世前期は遺跡数としては希薄だが、西蒲池池淵遺跡（註 10）でまとまった資料が出土している。

中世後期では、蒲池城を拠点とする蒲池氏が市域北部を、鷹の尾城を拠点とする田尻氏が市域南部を支配したが、史料に乏しく詳細は不明である。戦国時代後半には蒲池氏は２家に分かれ、蒲池鑑盛は柳川城を永禄年間（1558 ～ 1569 年）に築き、下蒲池を称した。天正９（1581）年に下蒲池氏の蒲池鎮並が龍造寺氏に謀殺されると、田尻鑑種が柳川城を攻め落として下蒲池氏は滅亡した。遺跡は中世後期に増加する。東蒲池門前遺跡（註 11）・蓮池遺跡（註 12）では、15 ～ 16 世紀の祟久寺に関連するものと見られる遺跡が発見され、東蒲池大内曲り遺跡（註 13）・矢加部南屋敷遺跡（註 14）・矢加部五反田遺跡（註 15）・蒲船津西ノ内遺跡（註 16）で中国製陶磁器が多く見られるほか、徳益八枝遺跡（註 17）で方形区画が発見されており、筑後の有力国人であった蒲池氏との関連が考えられる。

柳川は一時龍造寺氏の支配下に入ったが、豊臣秀吉の九州平定後の天正 15（1587）年に立花宗茂が入部した。慶長５（1600）年の関ケ原の戦いで西側に与した立花宗茂は改易となり、西軍の将石田三成を捕らえた田中吉政が慶長６(1601) 年に筑後一国を与えられ、柳川城に入る。吉政は城郭や街道、農業基盤などの整備に力を尽くしたが、2 代忠政に継嗣がなく田中氏は改易となった。その後、立花宗茂が元和６(1620) 年に再封され、幕末まで立花家の治世となる。寛政２(1790) 年の城下町絵図に描かれた地割や道路・掘割は現在にも見られるので、そのころには城下町の整備が完成していたようだ。

柳川市域の近世遺跡の調査は、城下町を中心として行われている。城下町全域が周知の埋蔵文化財包蔵地「柳川城郭跡」にあたり、現在の町名が近世の旧地名に由来していることから、柳川市では「柳川城郭跡」内を町名ごとに細分して遺跡名をつけている。

本町袋町遺跡（註 18）は「袋小路」にあたり、水路沿いの土塁が削平された痕跡らしい空閑地が見つかった。南長柄町遺跡（註 19）は「南長柄小路」にあたり、下級武士の屋敷地跡が発見された。京町遺跡（註 20）では『城下町絵図・瀬高町組（仮題）』に描かれた２軒ないし３軒の屋敷地跡を調査し、土管や瓦敷遺構、丸太基礎などが検出された。細工町遺跡（註 21）では筏地行遺構が発見された。上町遺跡（註 22）では１次調査で竹管を利用した上水道跡が発見され、２次調査では仏具らしい金属製品や景徳鎮など希少な遺物や多量の銅銭が出土しており、川津の荷揚げ場としての賑わいを窺わせている。沖端川の対岸に位置する保加町遺跡（註 22）では石組溝で区画された町屋跡が発見されるなど、面積は小さいながら、調査成果が蓄積されつつある。

註

1　九州歴史資料館 2012『下木佐木安堂遺跡・東蒲池蓮池遺跡・西蒲池池田遺跡』福岡県文化財調査報告書第 236 集

2　柳川市教育委員会 2008『徳益八枝遺跡』柳川市文化財調査報告書第６集

3　柳川市教育委員会 2006『磯鳥フケ遺跡』柳川市文化財調査報告書第１集

4　福岡県教育委員会 2009『蒲船津江頭遺跡Ⅰ』有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告第６集
福岡県教育委員会 2010『蒲船津江頭遺跡Ⅱ』有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告第８集
福岡県教育委員会 2011『蒲船津江頭遺跡Ⅲ』有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告第 10 集

5　九州歴史資料館 2013『東蒲池池淵遺跡Ⅰ』国道 385 号三橋大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告第２集
九州歴史資料館 2014『東蒲池池淵遺跡Ⅱ』国道 385 号三橋大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告第４集

6　九州歴史資料館 2013『東蒲池門前遺跡』国道 385 号三橋大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告第３集

7　前掲註５

8　福岡県教育委員会 2005『東蒲池榎町遺跡』有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告第１集

9　福岡県教育委員会 2012『矢加部町屋敷遺跡Ⅳ　蒲船津西ノ内遺跡　蒲船津水町遺跡』
有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告第 12 集

10　前掲註５

11　前掲註６

12　柳川市教育委員会 2016『蓮池遺跡』柳川市文化財調査報告書第９集

13　福岡県教育委員会 2007『東蒲池大内曲り遺跡』有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告第２集

14　福岡県教育委員会 2009『矢加部南屋敷遺跡・矢加部五反田遺跡』有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告第５集

1　本町遺跡１・２次調査
2　本町遺跡
3　本町袋町遺跡
4　南長柄遺跡
5　細工町遺跡
6　出来町遺跡
7　京町遺跡
8　上町遺跡
9　保加町遺跡
10　御家中（城内）
11　城下町
12　港町
13　東蒲池大内曲り遺跡
14　東蒲池榎町遺跡
15　東蒲池蓮池遺跡
16　東蒲池門前遺跡
17　西蒲池池淵遺跡
18　矢加部五反田遺跡
19　矢加部南屋敷遺跡
20　磯鳥フケ遺跡
21　蒲船津江頭遺跡
22　蒲船津水町遺跡
23　蒲船津西ノ内遺跡
24　徳益八枝遺跡
25　慶長本土居

第２図　周辺遺跡分布図（1/25,000）

15　前掲 14

16　前掲註 9

17　前掲註 2

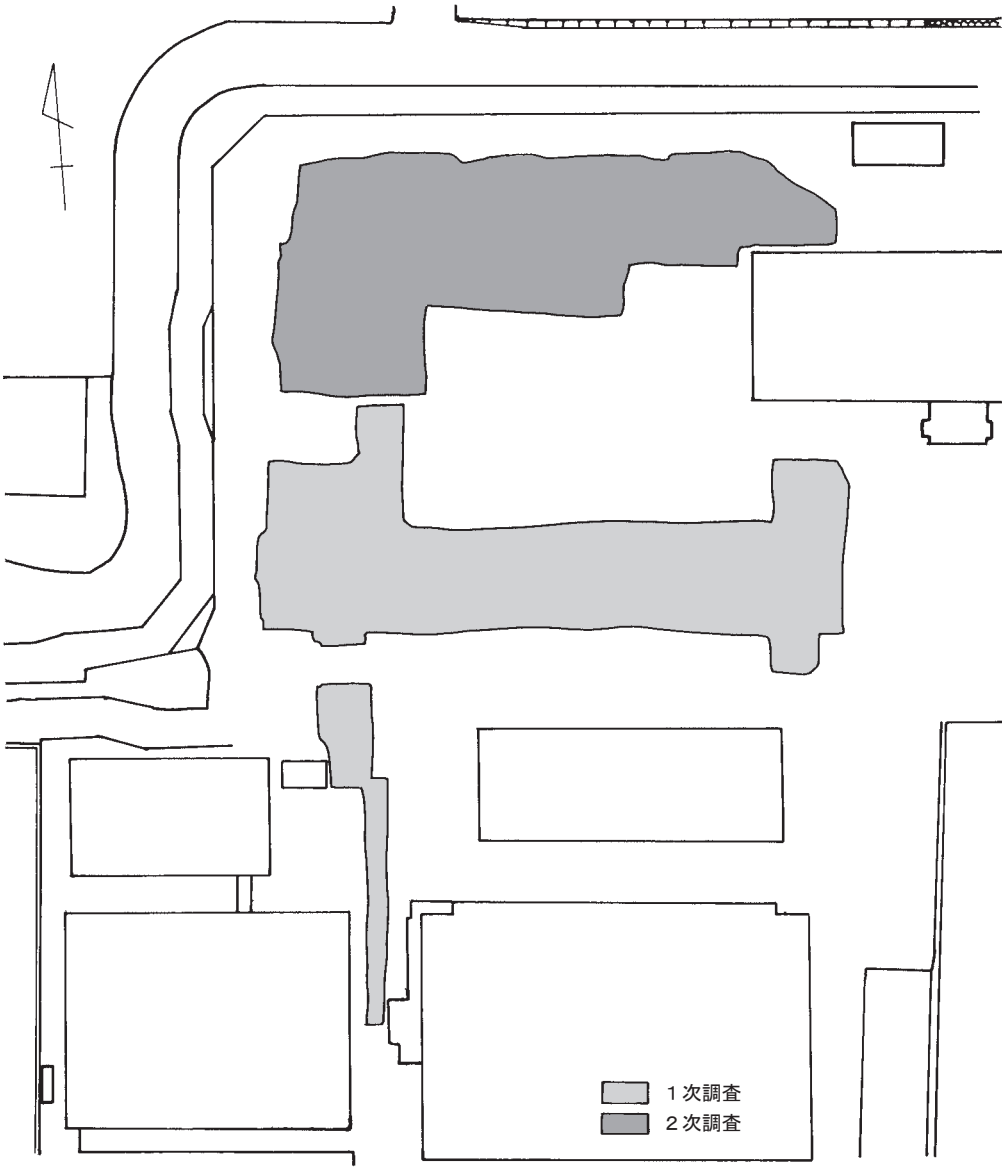
18　柳川市教育委員会 2008『本町袋町遺跡・南長柄町遺跡』柳川市文化財調査報告書第 4 集

19　前掲 18

20　柳川市教育委員会 2009『京町遺跡』柳川市文化財調査報告書第 7 集

21　柳川市教育委員会 2008『細工町遺跡・新町遺跡』柳川市文化財調査報告書第 5 集

22　柳川市教育委員会 2016『上町遺跡』柳川市文化財調査報告書第 10 集



第 3 図　調査範囲図

Ⅲ　調査の内容

1　遺跡の概要

近世柳川城は柳川城を中心として武家屋敷が広がる「城内」地区と、主に町人が居住した「沖端町」「柳河町」の２地区に分かれていた。このうち、本町遺跡は城内地区北西部で、現在の柳川市役所柳川支所の東を南北に走る市道 17 号線を中心とする細長い地区にあたる。この県道は参勤交代にも使用される城内の幹線道路であり、江戸時代の古地図では、道路添いに上級武士の家屋が連なっていた。調査地点は、県立伝習館高校敷地の北西端に位置し、本町遺跡の北端西側で幹線通りの裏手にあたる。

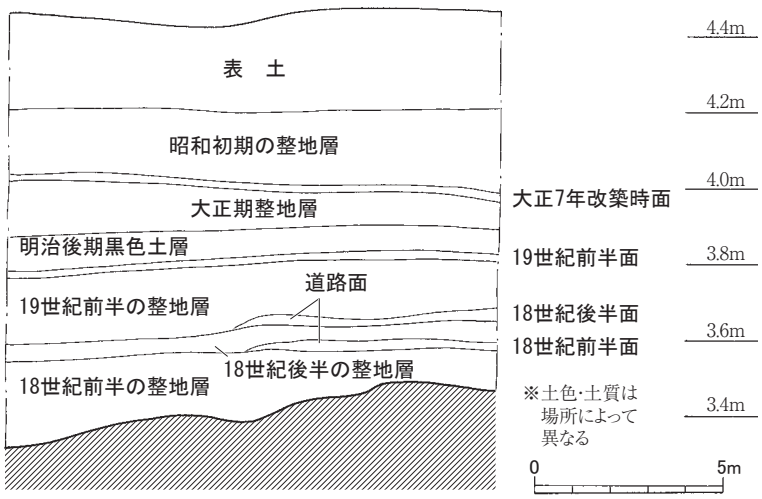
調査範囲は北校舎・南校舎の建替え範囲と、南校舎から体育館への渡り廊下部分であり、北と西は堀割に面している。遺構面は残りの良いところで２面あった。調査地点により上位堆積は異なっているが、これは建物の建替えの時期が異なっているためであり、最も残りのよい南校舎中央の北側部分を基本層序として第４図に示した。

表層は現代の表土層で、昭和 18（1943）年の建替時の地表面を掘り崩していた。深い基礎の掘り込み部分にその礎石が残っており、切石を壁とする溝を伴っていた。標高 3.9 ～ 4.0m の整地面は大正２～７(1913 ～ 18)年の校舎改築後のものと見られ、。整地面下の客土層には瓦を多く含んでいた。次の標高 3.7 ～ 3.8m の整地面は、明治 33 ～ 36（1900 ～ 19063）年の福岡県中学伝習館寄宿舎の増改築時のものと見られる。標高 3.6 ｍの砂礫を含む面は、明治 24（1891）年の橘蔭学館校舎改築時のものであろう。２次調査の中央南側の第１遺構面はこれにあたる。その下の標高 3.5 ｍの砂礫層は側溝を伴う道路状遺構の路面で、１次調査東半の上面と２次調査北西の第１遺構面がこれにあたる。調査成果から 18 世紀後半から明治前期までが第１遺構面で、最終面は標高 3.4m の 17 世紀前葉から 18 世紀前半の遺構面である。

調査地点である県立伝習館高校の敷地は、明治初期から教育機関が置かれた場所である。明治２(1869）年に藩校文武館創立後、明治６（1873）年に公立の伝習小学、明治９（1876）年の柳川師範学校付属小学校、明治 12（1879）年の県立柳河中学校、明治 18（1885）年の公立中学伝習館、明治 20（1887）年に私立尋常中学橘蔭学館と頻繁に改称し、明治 24（1891）年の県立尋常中学伝習館の以降、柳川藩の藩校「伝習館」を称するようになる。(註１)

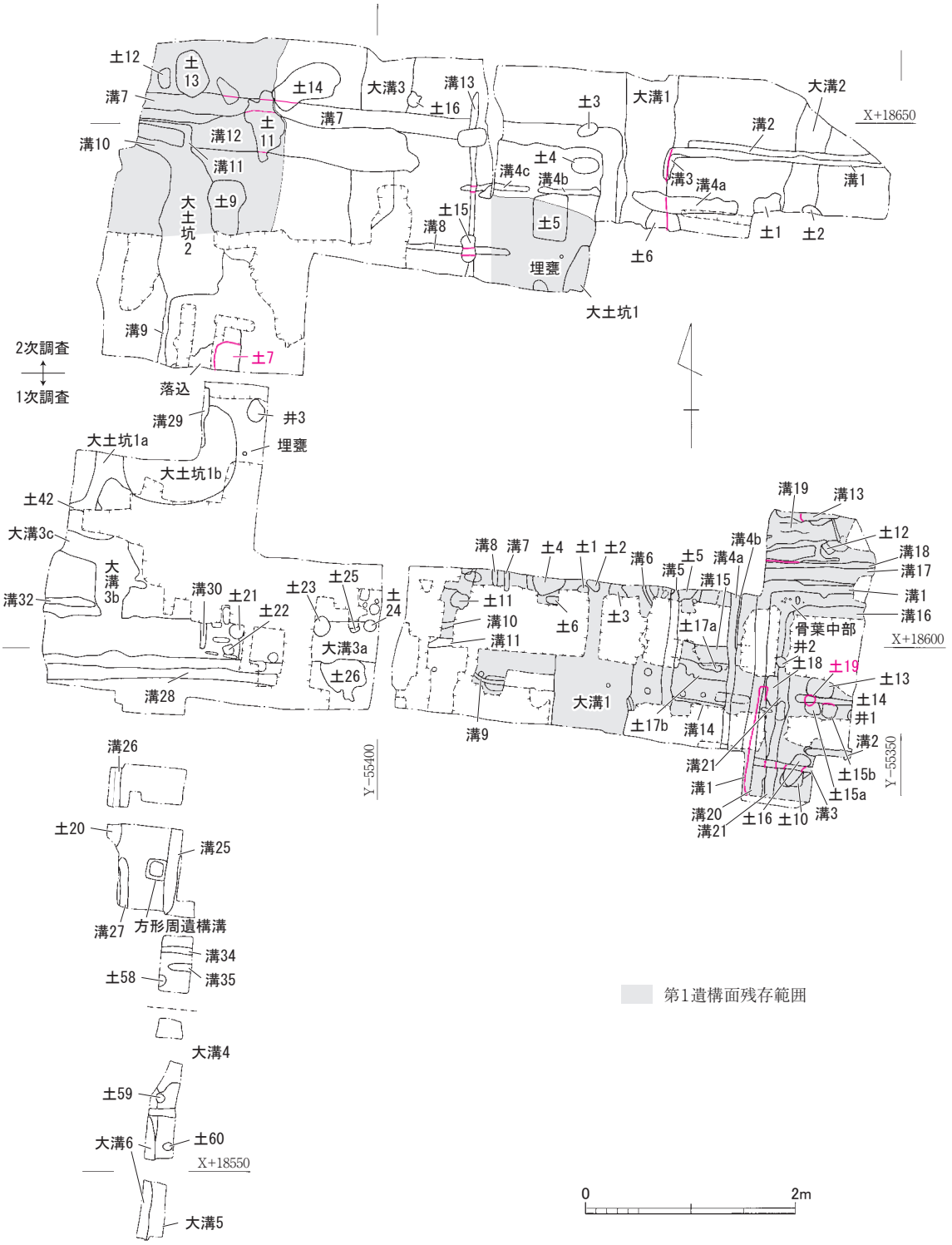
調査期間の制約もあり、明治期の遺構については調査対象としていなかったが、出土遺物の中には明治前期の教育機関に伴う貴重なものもあったので掲載した。

その結果、江戸時代から明治時代前期の土坑 52 基、大土坑３基、溝状



第４図　基本土層図 (1/ 40)

遺構 43 条、大溝遺構 9 条、方形周溝遺構 1 基、井戸 3 基、埋甕遺構 1 基、墓 1 基などが検出された。江戸時代中後期の絵地図で、当該地が武家屋敷 3 軒の敷地にかかる範囲であることがわかっているものの、近世の建物は石場立建物だったと見られ、礎石が失われていたため建物跡は復元できず、掘立柱建物跡も確認できなかった。明治期の建物跡については、礎石が部分的にしか残っていなかったが、礎石の根締石下の沈み込み防止の杭が残っていたことから、昭和の基礎杭と区別して図化している。これらについては、個々の遺構としての報告ではなく、Ⅵ章で建物の復元を試みた。



第 5 図　本町遺跡遺構略配置図（1/600）

２　１次調査の遺構と遺物

１次調査では、土坑 36 基、大土坑１基、溝状遺構 32 条、大溝遺構６条、方形集溝遺構１基、井戸３基、埋甕遺構１基、墓１基などが検出された。

土坑

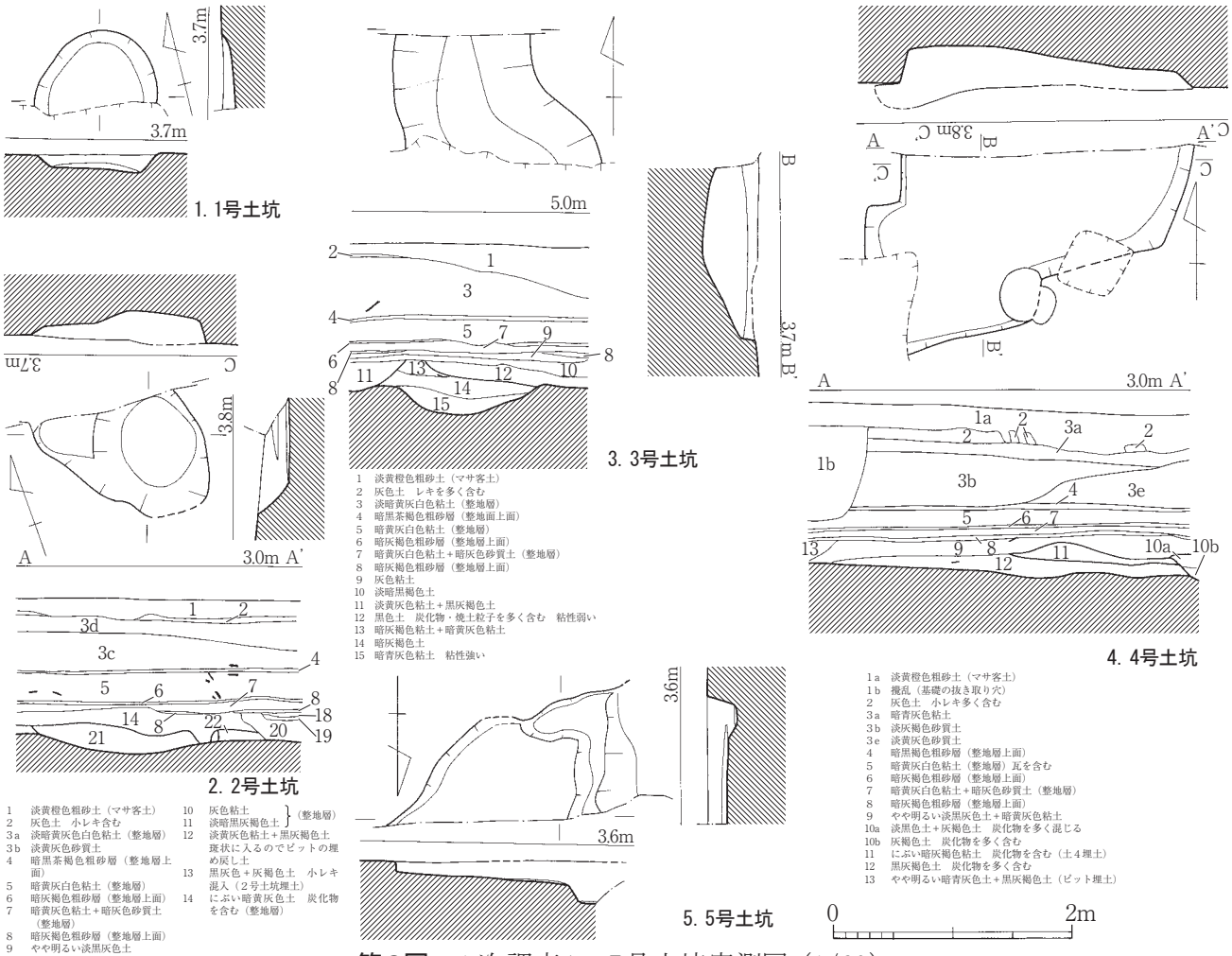
７号土坑は予測より規模が小さくなったので、ピット 33 に変更して欠番となった。8・9 号土坑は 20 号溝状遺構の一部だったので、欠番とした。27 から 41 号、43 から 57 号土坑は遺構番号取得の混乱のため欠番である。また、南東部南端の１号攪乱溝は、板壁をもつ溝で多色銅板刷り染付碗が出土しているので明治後半以降のものであることから報告しないものとした。

１号土坑（図版３、第６図）

中央北部から検出された円形プランで、建物基礎に切られ半分しか検出されなかった。径100㎝で、深さは17㎝ほどしかない。形態から何かを抜き取った痕跡の可能性もある。床面はほぼ平坦なため、埋設桶や甕の掘り方かもしれない。出土遺物が少なく時期を特定しにくいが、18 世紀後半か。

出土遺物（図版 28、第７図）

１は陶器摺鉢で、内面口縁下に浅い摺り目が入るが、ナデ消されたためだろう。２は土人形頭部で、



1　淡黄橙色粗砂土（マサ客土）
2　灰色土　レキを多く含む
3　淡暗黄灰白色粘土（整地層）
4　暗黒茶褐色粗砂層（整地面上面）
5　暗黄灰白色粘土（整地層）
6　暗灰褐色粗砂層（整地層上面）
7　暗黄灰白色粘土＋暗灰色砂質土（整地層）
8　暗灰褐色粗砂層（整地層上面）
9　灰色粘土
10　淡暗黒褐色土
11　淡黄灰色粘土＋黒灰褐色土
12　黒色土　炭化物・焼土粒子を多く含む　粘性弱い
13　暗灰褐色粘土＋暗黄灰色粘土
14　暗灰褐色土
15　暗青灰色粘土　粘性強い

1a　淡黄橙色粗砂土（マサ客土）
1b　攪乱（基礎の抜き取り穴）
2　灰色土　小レキ多く含む
3a　暗青灰色粘土
3b　淡灰褐色砂質土
3e　淡黄灰色砂質土
4　暗黒褐色粗砂層（整地層上面）
5　暗黄灰白色粘土（整地層）瓦を含む
6　暗灰褐色粗砂層（整地層上面）
7　暗黄灰白色粘土＋暗灰色砂質土（整地層）
8　暗灰褐色粗砂層（整地層上面）
9　やや明るい淡黒灰色土＋暗黄灰色粘土
10a　淡黒色土＋灰褐色土　炭化物を多く混じる
10b　灰褐色土　炭化物を多く含む
11　にぶい暗灰褐色粘土　炭化物を含む（土４埋土）
12　黒灰褐色土　炭化物を多く含む
13　やや明るい暗青灰色土＋黒灰褐色土（ピット埋土）

1　淡黄橙色粗砂土（マサ客土）
2　灰色土　小レキ含む
3a　淡暗黄灰色白色粘土（整地層）
3b　淡黄灰色砂質土
4　暗黒茶褐色粗砂層（整地層上面）
5　暗黄灰白色粘土（整地層）
6　暗灰褐色粗砂層（整地層上面）
7　暗黄灰色粘土＋暗灰色砂質土（整地層）
8　暗灰褐色粗砂層（整地層上面）
9　やや明るい淡黒灰色土
10　灰色粘土　（整地層）
11　淡暗黒灰褐色土
12　淡黄灰色粘土＋黒灰褐色土　斑状に入るのでピットの埋め戻し土
13　黒灰色＋灰褐色土　小レキ混入（２号土坑埋土）
14　にぶい暗黄灰色土　炭化物を含む（整地層）

第６図　１次調査１～５号土坑実測図（1/60）

筑後市赤坂焼の土人形に胎土が似る。色付けの有無は不明。

２号土坑（図版３、第６図）

中央北部から検出された不整形プランで、調査区外に延びており、３分の２しか検出されなかったため、全体像がわからないが、長軸 146cm、短軸 0.98 ｍで、深さは 100cmほどしかない。形態から、何かを抜き取った痕跡の可能性もある。出土遺物が少なく時期を特定しにくいが、第７図５・６から 18 世紀後半か。

出土遺物（図版 28・50、第７・125 図）

７は染付錦手の鉢で、断面に膠と思われるもの付着しているので割れたものを継いでいる。第 125 図 14 は石製硯片で、粘板岩製で、表面に赤漆を下塗りした金箔が残る。

３号土坑（第６図）

中央北部から検出された不整形プランで、調査区外に延び、建物基礎に多くの部分を切られているので一部しか検出できなかった。深さは 48cmほどしかない。床面は溝のように中央が窪む。

出土遺物が少なく時期を特定しにくいが、第７図８・9・11 のように、口縁部の肥厚が小さくなる摺鉢から 19 世紀前半か。

出土遺物（図版 49・54、第７・139・141・142 図）

第７図 13 は陶器の壺で、混和剤を意図的に入れた特徴的な胎で、産地不明。14 は備前焼の陶器の摺鉢で、口縁部の摩滅は使用のためか。16 は染付碗だが、肥前陶器の腰折碗を模倣している。19 は円盤形土製品で、陶器の胴部片を転用しているが、鉄釉や糸切り・摺り目がないので転用した器種はわからない。

４号土坑（図版３、第６図）

中央北部から検出された不整形プランで、調査区外に延びるので、半分しか検出されず、建物基礎に多くの部分を切られているため、全体像はわからない。長軸 242cm、短軸 150cm以上で、深さは 47cmほどしかない。床面はほぼ平坦であった。南壁土層では西端をピットに切られているが、平面的にはピットは検出されていない。図化できる出土遺物がないが、磁器碗から 18 世紀中葉か。

５号土坑（図版４、第６図）

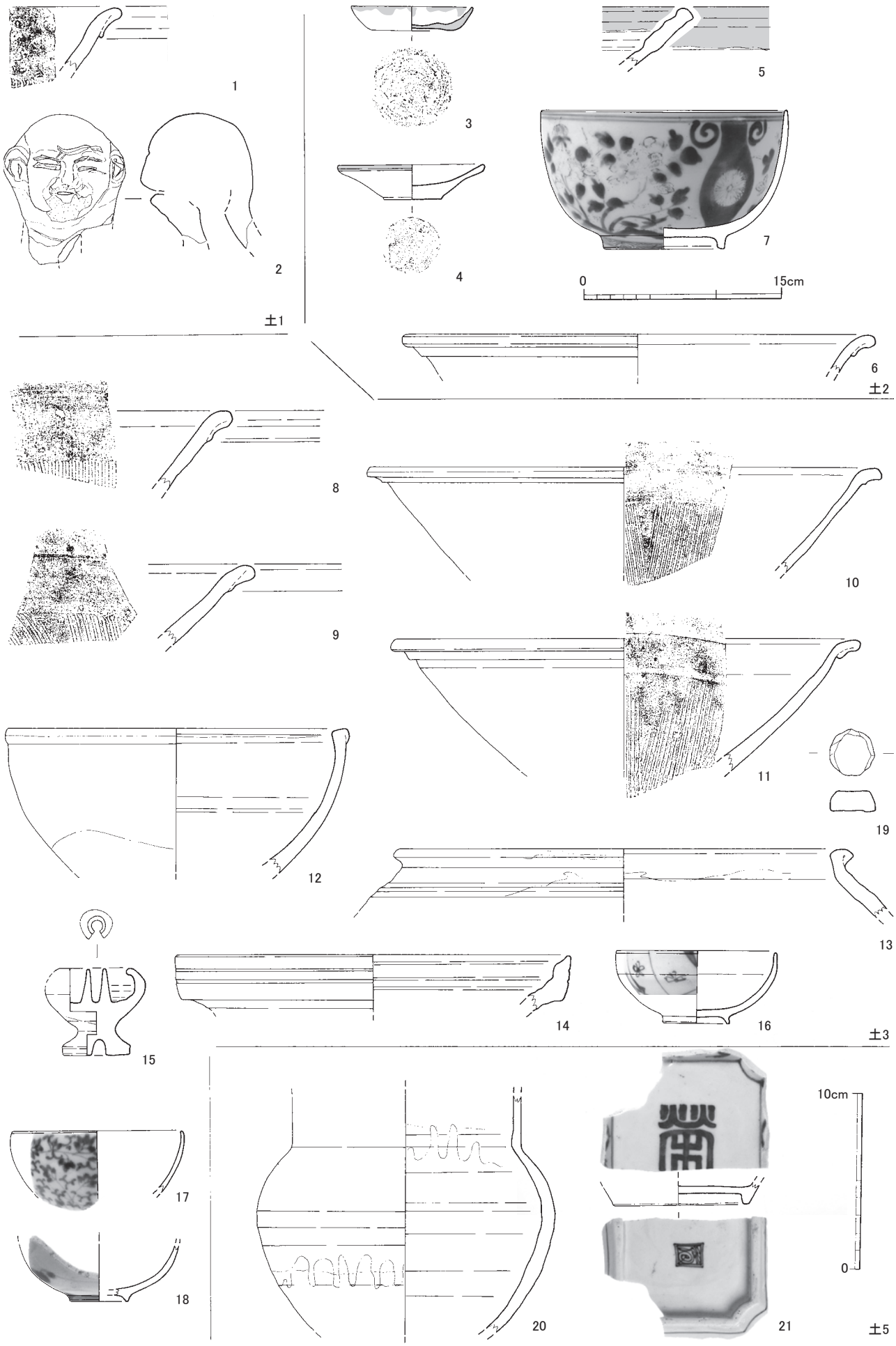
中央北部から検出された不整形プランで、調査区外に延びるので、半分しか検出されず、建物基礎と５号溝状遺構に切られるため一部しか検出できなかったため、全体像はわからない。長軸 188cm以上、短軸 100cmで、深さは 14cmほどしかない。床面はほぼ平坦であった。第７図 18 の花唐草文染付から 18 世紀前葉か。

出土遺物（第７図）

21 は染付の角皿で、外底には渦福、内面のモチーフは不明で、見込みは吉祥句の「榮」。

６号土坑（図版４、第８図）

中央北部から検出された隅丸長方形プランで、建物基礎に切られる。土坑中位まで建物基礎のコ



第7図　1次調査1～3・5号土坑出土土器・陶磁器実測図（6・8・11・13・14は1/4、他は1/3）

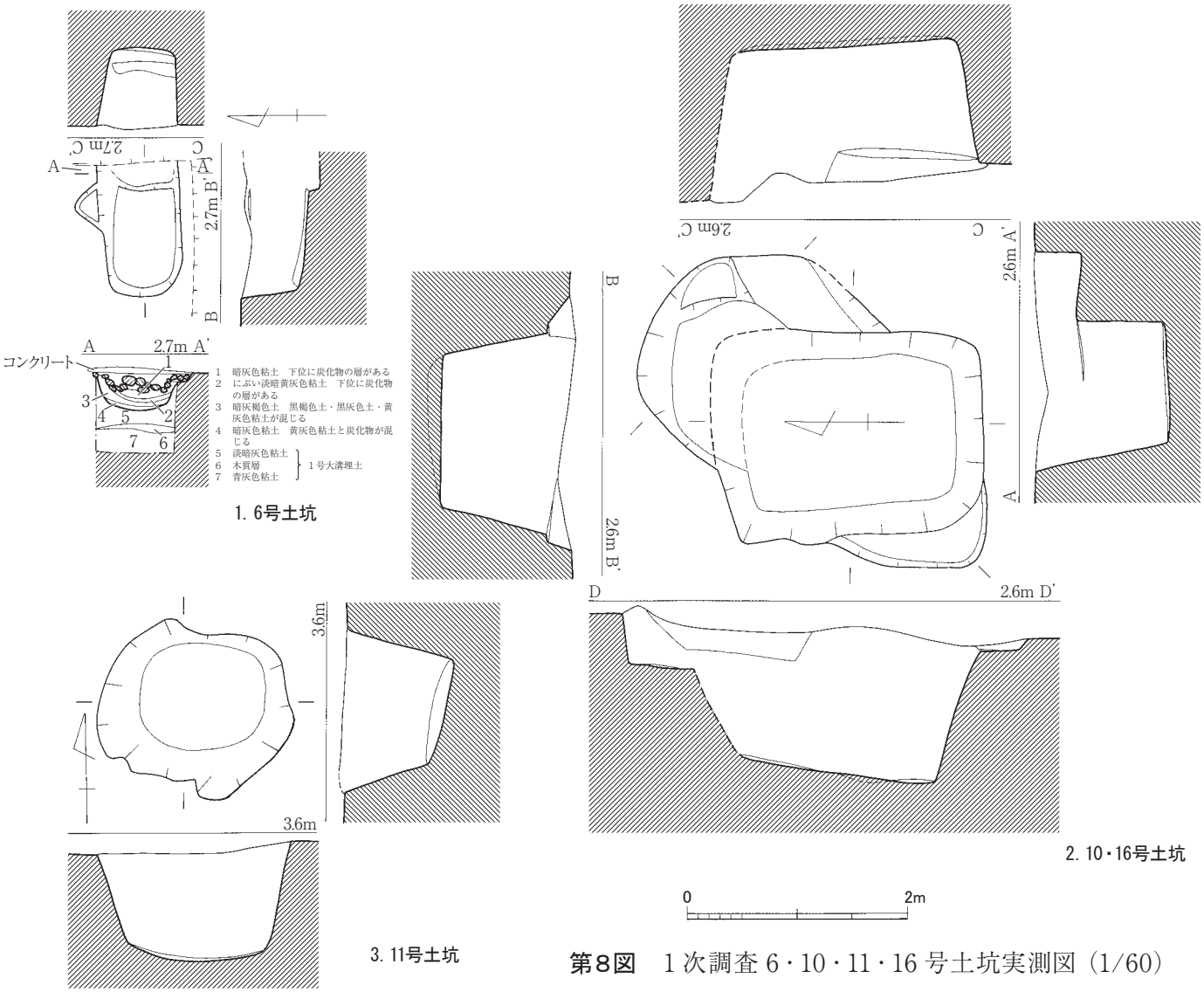
ンクリート栗石が入り込んでいる。1号大溝遺構上面を切っている。N - 89° - Eを主軸とし、長軸120cm、短軸92cm、深さは約52cmと深い。図化できる陶磁器類が出土していないため、時期不明。出土遺物（図版49、第125・136図）

第125図21は粘板岩製で、扁平な円盤形なので、碁石の可能性がある。第136図3の曲げ物底板も出土している。

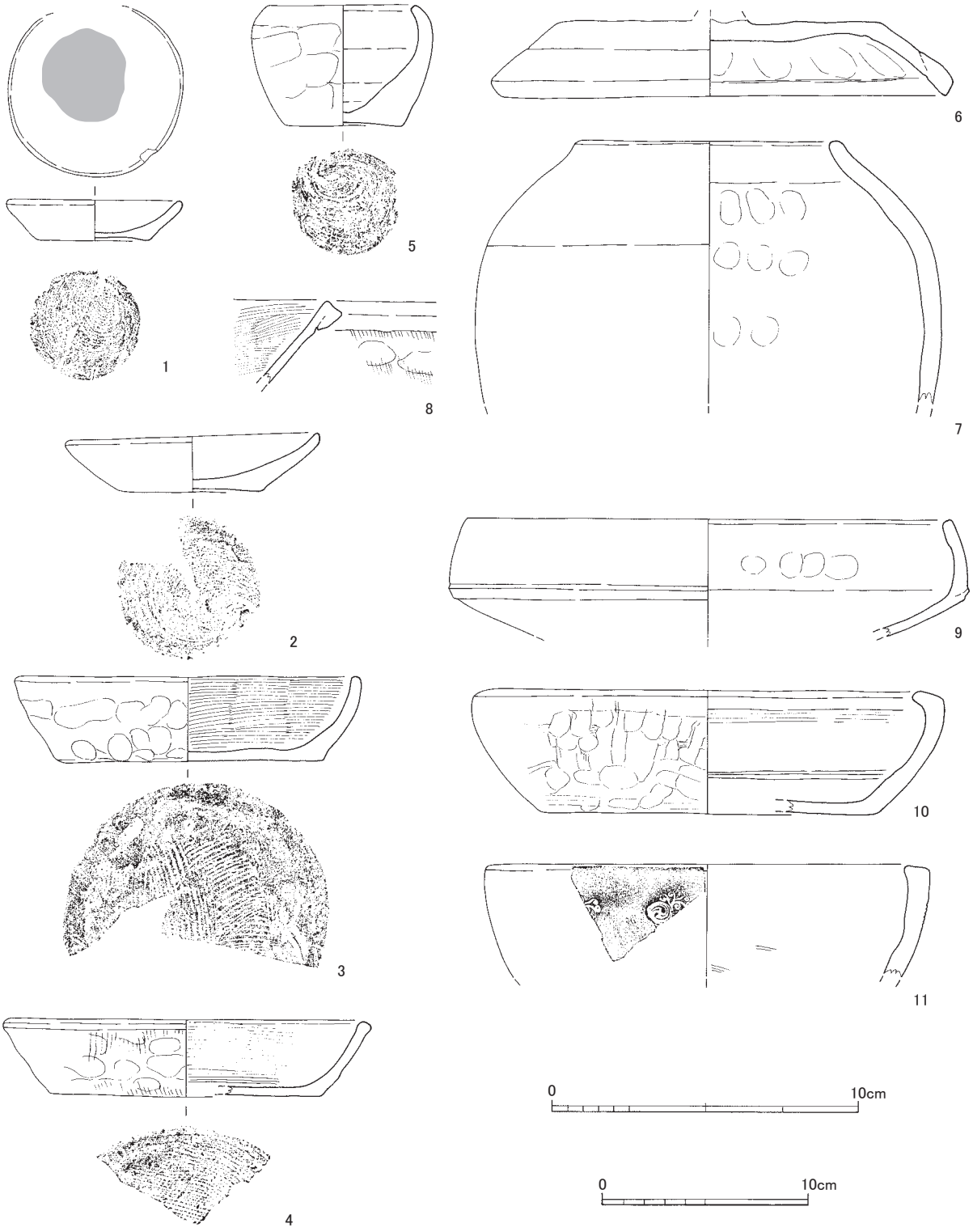
10号土坑（図版4、第8図）

南東端部から検出された方形プランで、16号土坑と切り合うが、切り合う部分に基礎杭が入っていたため先後関係不明。16号土坑との切り合いは不明確だったが、遺物の入り方から16号土坑に切られる。3号溝状遺構には切られる。N - 89° - Eを主軸とし、長軸244cm、短軸198cmを測る。下位が掘りにくかったことからやや掘りすぎたが、深さは約150cmと深い。上位は石炭粒子が混じる埋土で、サンプルを採取した。炭化物も入っていたので、石炭と併用したと見られる。中位には木質と貝殻が厚く堆積し、木製品も残っていた。

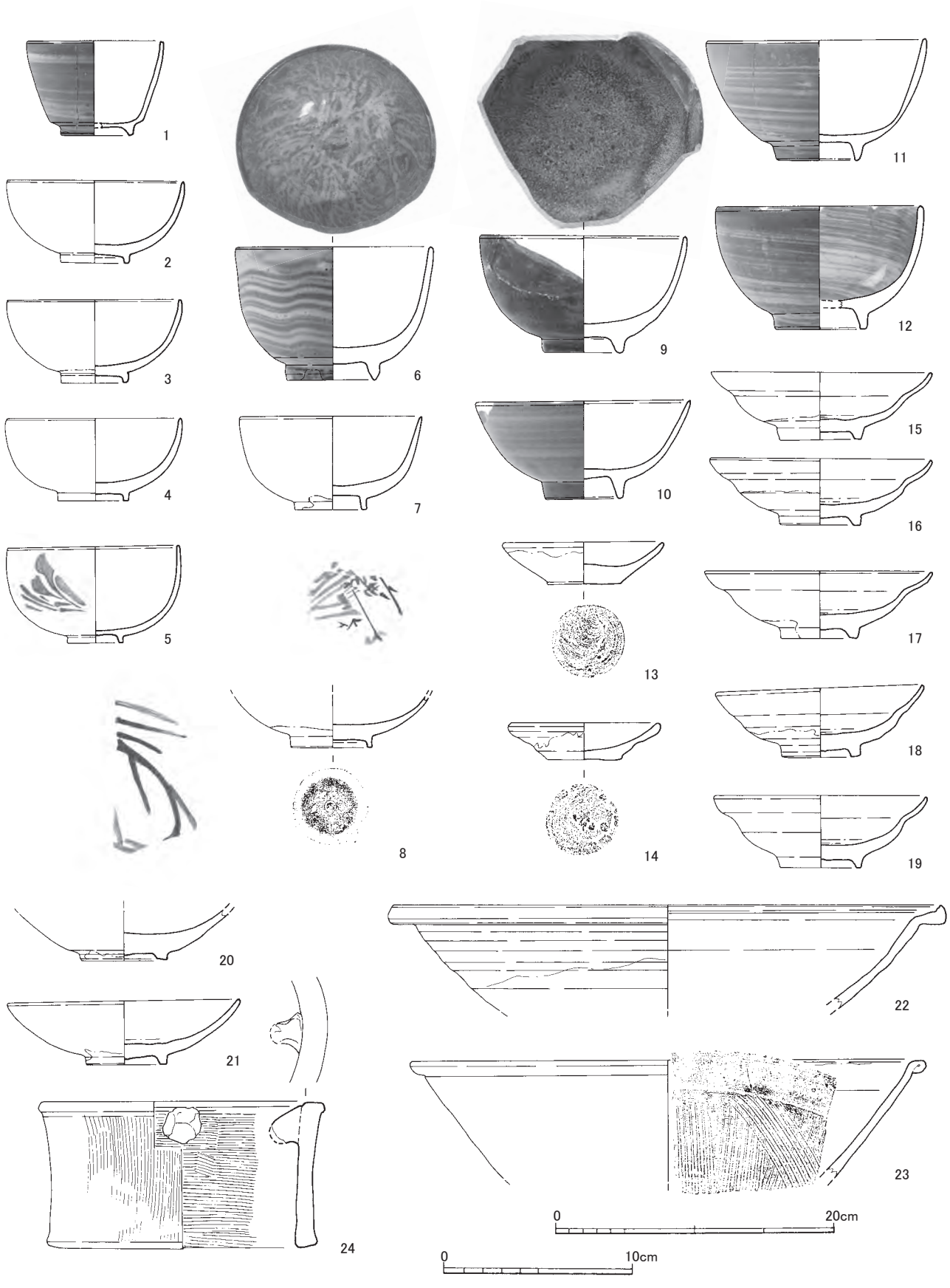
出土遺物の多くは陶器で、碗では白化粧土刷毛掻き取り文、皿では外傾後端部が内湾する口縁、摺鉢では口縁部が丸く肥厚するものが主体であることから18世紀初頭に属し、16号土坑より古いといえる。第13図1の花瓶や第128図30の銅製品は上位から出土しており、下位には貝殻層を多



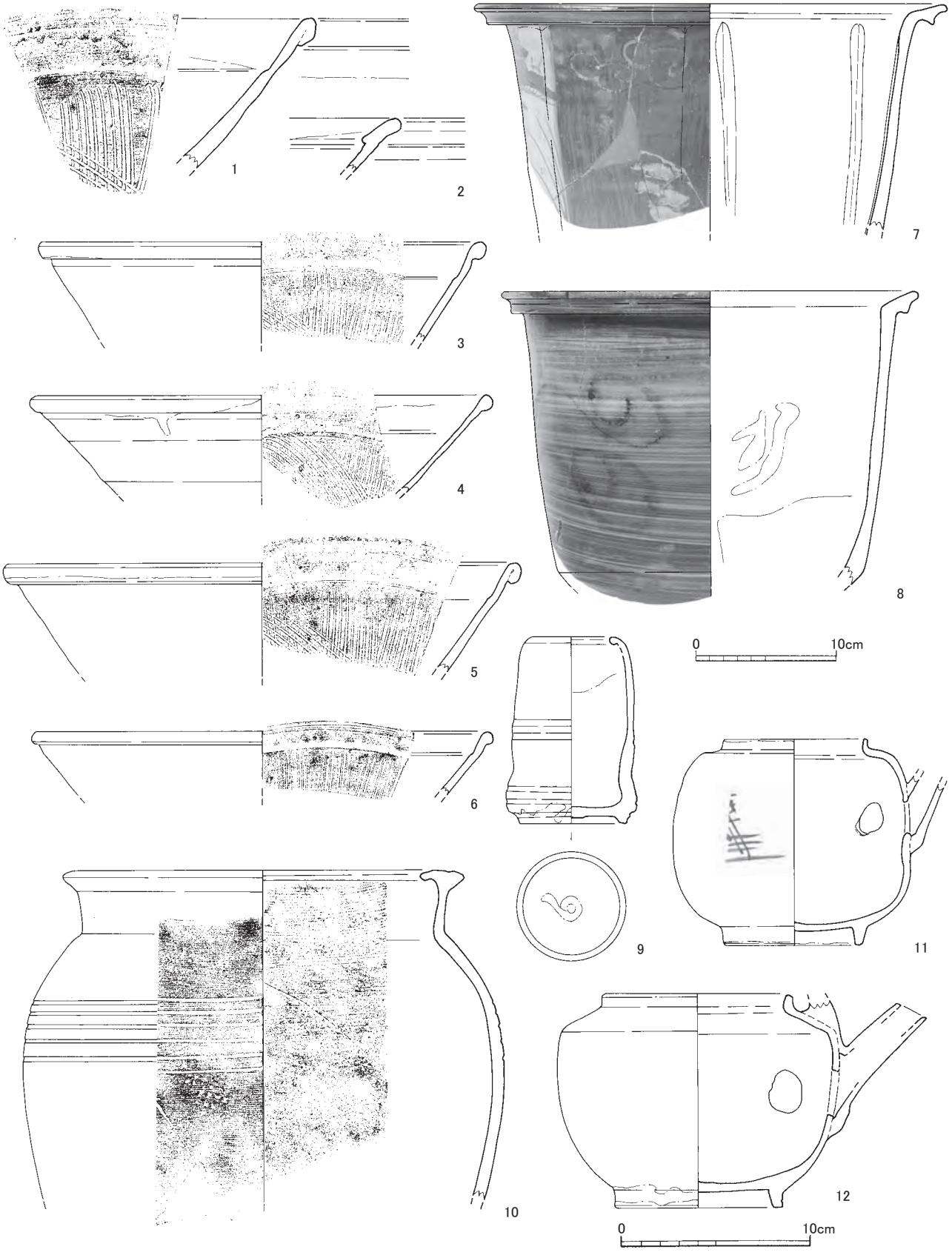
第8図　1次調査6・10・11・16号土坑実測図（1/60）



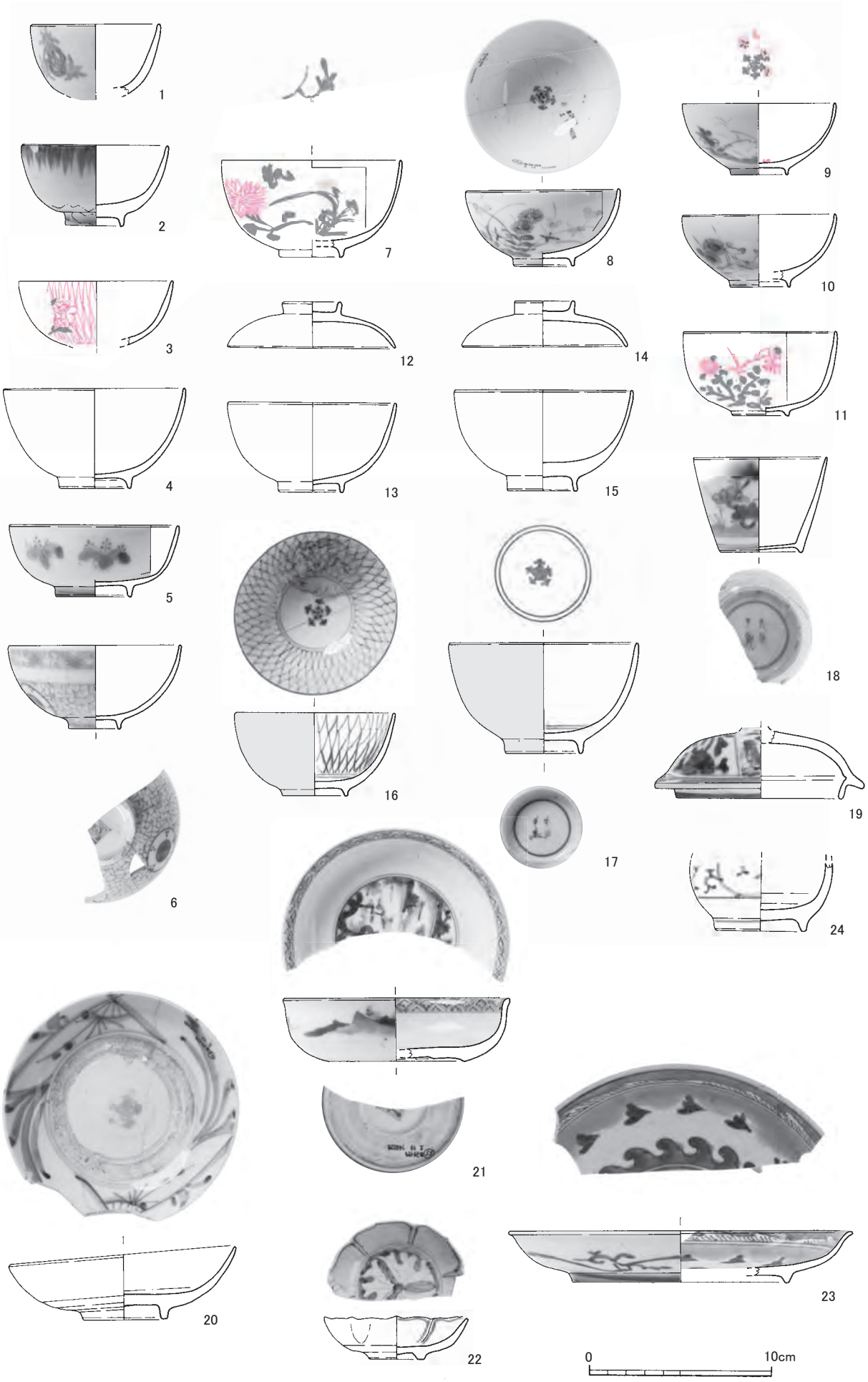
第9図　1次調査10号土坑出土土器実測図（9～11は1/4、他は1/3）



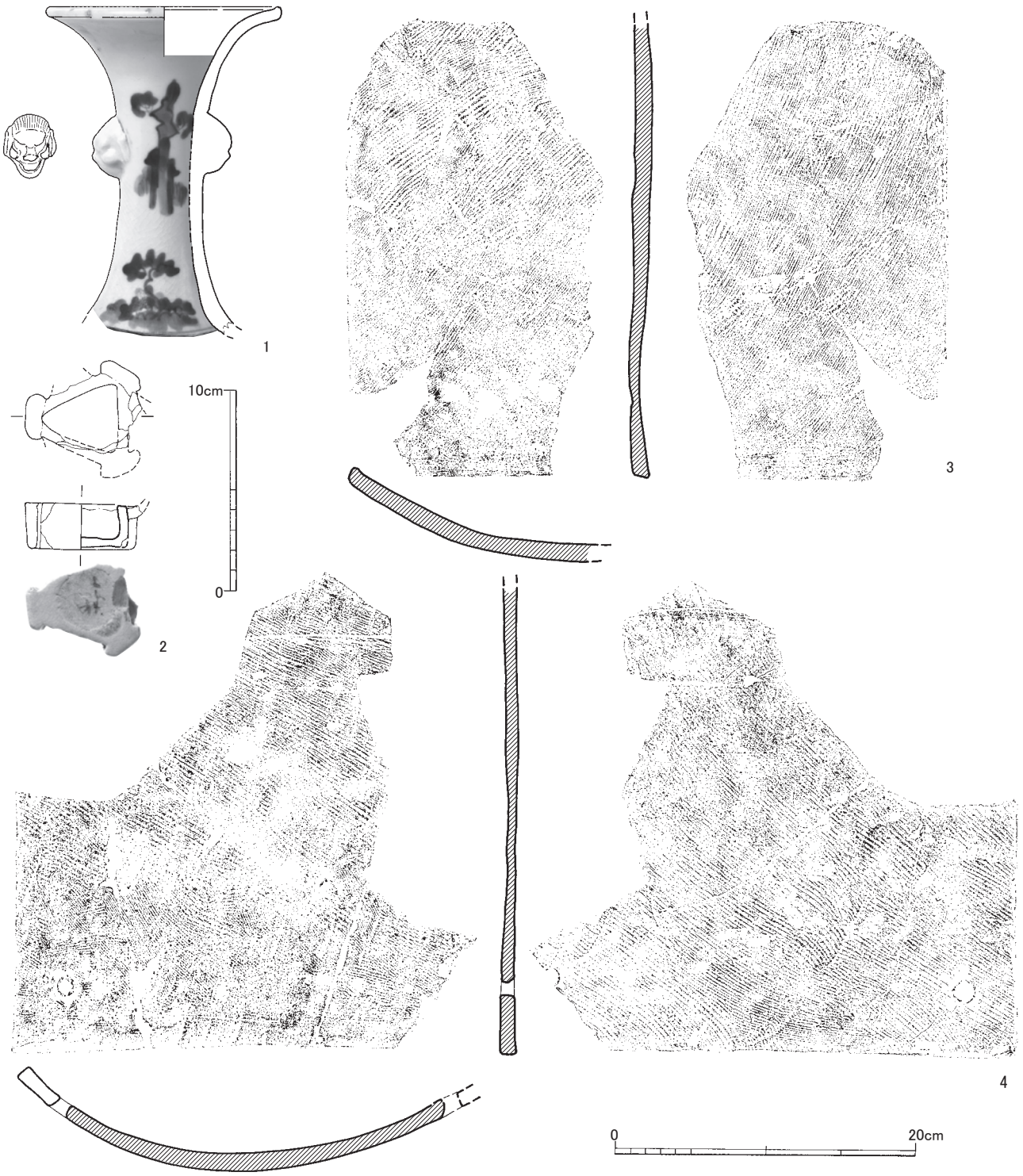
第 10 図　1 次調査 10 号土坑出土陶器実測図（22・23 は 1/4、他は 1/3）



第 11 図　1 次調査 10 号土坑出土陶器実測図2（3 ～ 7・10 は 1/4、他は 1/3）



第 12 図　1 次調査 10 号土坑出土磁器実測図（1/3）



第 13 図　1 次調査 10 号土坑出土磁器・瓦実測図（3・4 は 1/4、他は 1/3）

含んでいた。木質の残りがよく、漆椀も出土している。第 12 図のように揃いの無文碗や染錦手があるので来客用か。土師質瓦は棟瓦と見られ、18 世紀初頭には茅葺屋根だったのだろう。

出土遺物（巻頭図版 5・図版 28・45・46・51・52、第 9 ～ 13・46・51・52・128 ～ 131・133・136 図）

第 9 図 2 は窯道具かと思ったが、突起の存在と口唇部内面側と底面に赤変があり、底面の比熱が激しいことから、火鉢に組み合わせて七輪にするものと考えられる。第 9 図 5 は焼塩壺、11 は巴唐草文のスタンプから水田焼とわかる。23 は 10 号溝状遺構と帰属を分けられなかったが、本遺構に伴う可能性が高いので本項で掲載した。第 11 図 12 は陶器の土瓶で、見込みに径の小さいアルミナ

が輪状に付着しているので小型器種を重ね焼きしている。第12図7は色絵碗で、内面にも紫・緑・黒の葉文がある。大振りでもあることからうがい茶碗か。第13図2は外面中央に二文字の墨書があるが欠損しているため判読できない。第13図4は内外に緊縛痕らしい傷があるので棟瓦だろう。第128図30は不明銅製品で、薄い板状の一端に針金を緊縛したもので、針金の穿孔は打ち掻いたものなので、劣化したのではなく、再利用の可能性もある。第133図1は折敷脚部の部材と見られる黒漆塗りの板で、欠損が多いため掲載していないが組み合わさる可能性のある部材もある。第130図5は漆塗りの櫛で、茶漆が塗布された簡素なものである。掲載していないが、箱材らしい板材や切断痕のある建築材の残欠も出土している。

貝殻層からサンプリングして鑑定に出したところ、ヤマトシジミ・アカニシ・カキ類・ハイガイなど食用に供される貝で占められていた。このほか、トウガン・ウリ類・ヒョウタン類など食用植物残滓の種子が出土している。

11号土坑（図版4、第8図）

中央北部から検出された隅丸方形プランで、N－89°－Eを主軸とし、長軸180cm、短軸146cm、深さは約102cmと深い。12号溝状遺構に切られ、上位は12号溝状遺構の黒色土を埋土とする。その下には木の粉のような木質層が薄く入り、その下に灰色粘土が堆積していた。

摺鉢は18世紀初頭、磁器碗蓋は18世紀前葉に属する。第14図9・10は揃いで、11・12はセットをなしていたものと見られる。13・14の花唐草文や15の変形皿は来客用であろうか。まとまった廃棄である。

出土遺物（図版28、第14図）

第14図1～18は、12号溝状遺構と帰属がはっきりしなかったものだが、本項で報告する。6と7、9と10は同一文なので揃いだろう。このほか、トウガンの種子が出土している。

12号土坑（第15図）

北東端で道路状遺構整地層下から検出された土坑で、ピット12に切られるため全体像がわからない。長軸126cm、短軸110cm以上。深さは18cmほどで、中位に炭化物の層があった。遺物が少なく時期を特定しにくいが、18世紀前葉か。

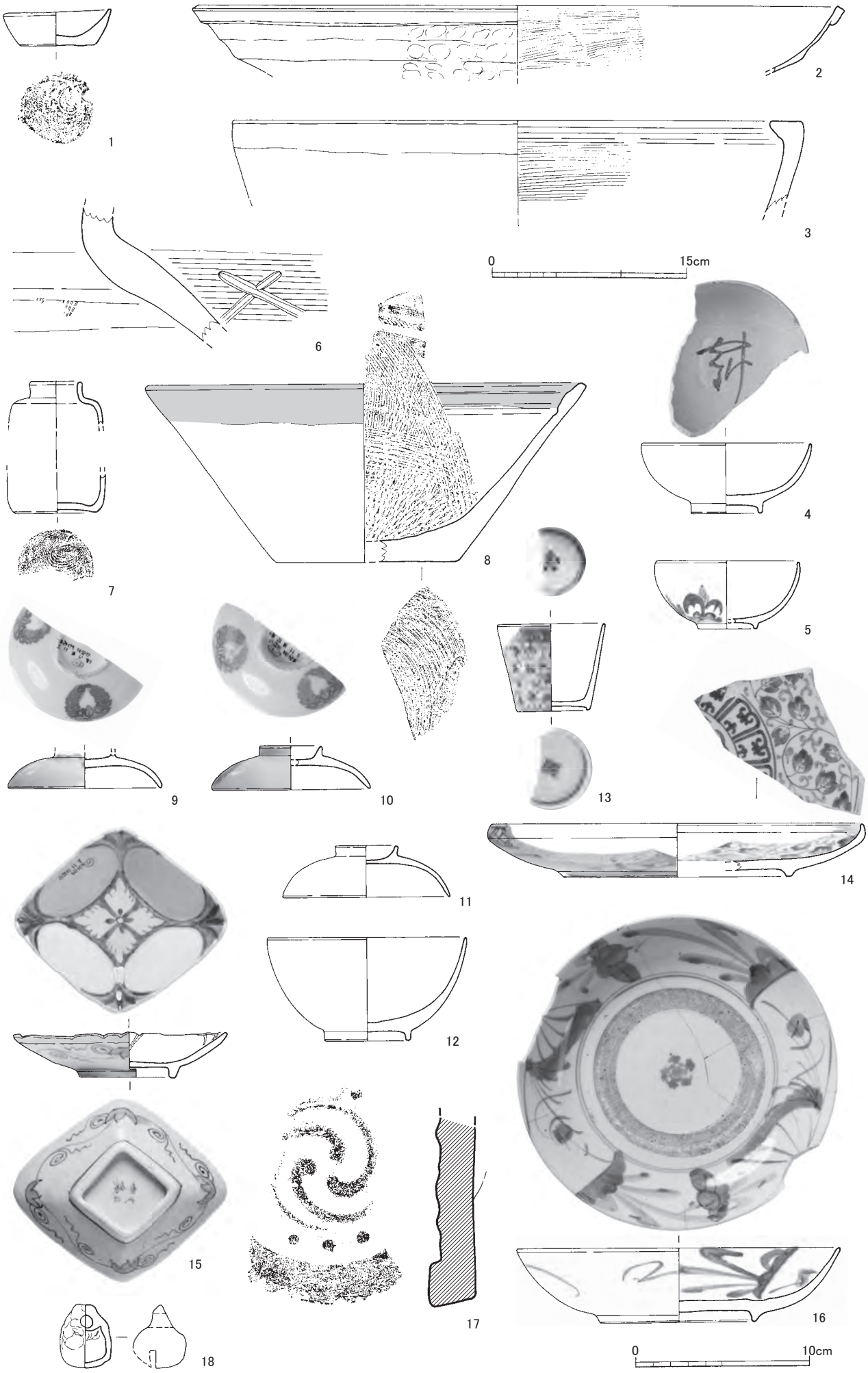
出土遺物（第16図）

第16図1は染付の小型碗である。

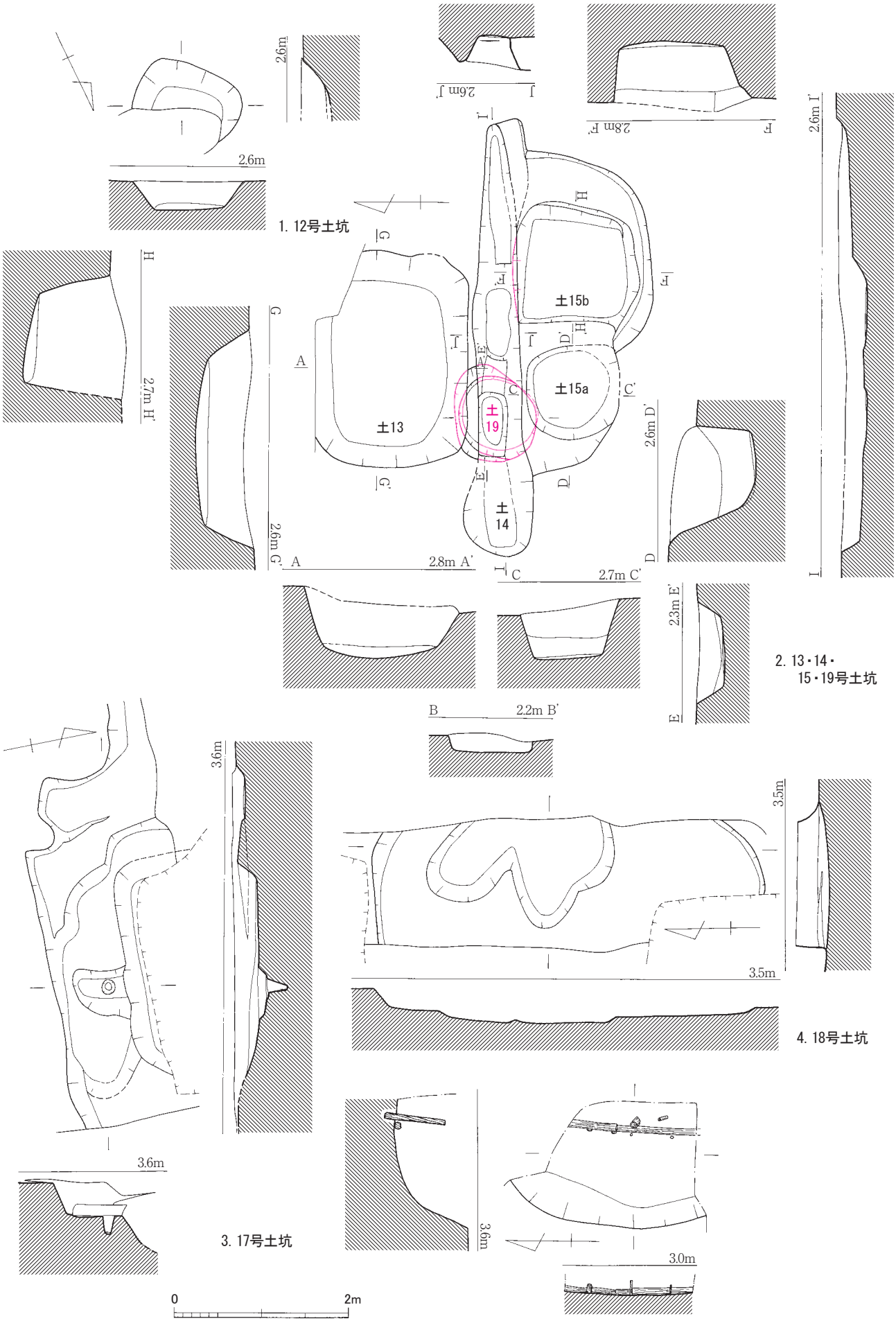
13号土坑（第15図）

東部で検出された平面隅円方形プランの土坑で、N－89°－Eを主軸とし、14・15号土坑に近接してはいるが壁は明瞭に検出されたので切り合いはなかった。19号土坑を切り、北部を大きな基礎に切られる。15号土坑と同一遺構かと思っていたが、南壁が出たので別遺構と判断できた。長軸247cm、短軸180cm以上で、深さは62cmを測る。規模の割に遺物量が少なく、床面は中央部が窪むが、東側との段差があることから別土坑だった可能性もある。平面プランは整っていることから見ても廃棄土坑ではないようだ。磁器碗から18世紀前葉に属する。

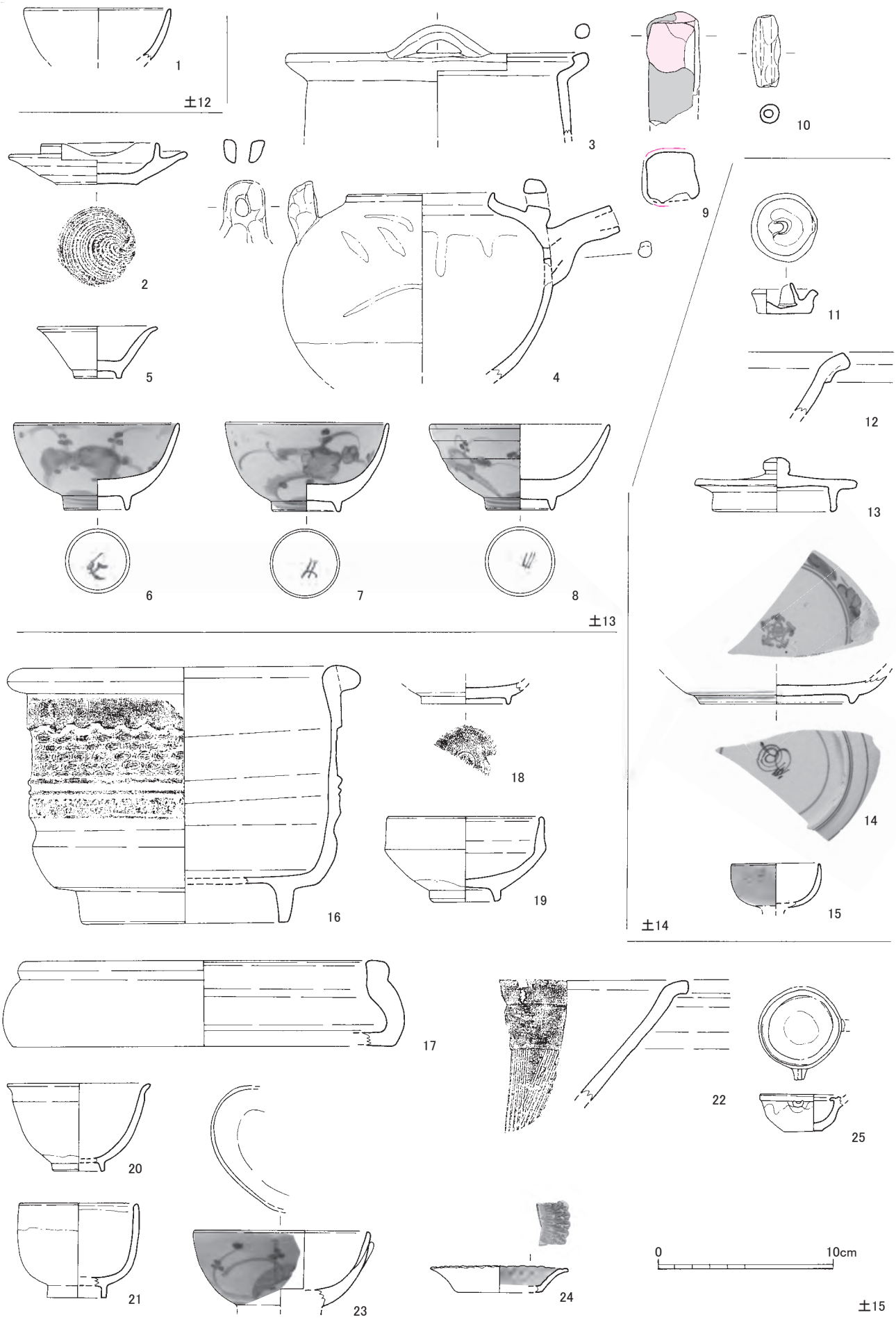
出土遺物（図版29・45・46・48、第16・45・46・127～129図）



第 14 図　1 次調査 11 号土坑出土土器・陶磁器・瓦実測図（2・3・8 は 1/4、他は 1/3）



第 15 図　1 次調査 12 ～ 15・17 ～ 20 号土坑実測図（1/60 ）



第 16 図　1 次調査 12 ～ 15 号土坑出土土器・陶磁器実測図（1/3）

第16図6・7・8は揃いだが、8は焼成時のヒビが入っているため器としては使えない。9は窯道具と考えられる棒状土製品である。第128図19は飾り金具であろう。木製品も多く出土しており、掲載していないがシュロ縄も出土した。

14号土坑（第15図）

東部で検出された細長い略方形プランの土坑で、当初は溝と考えていたが、東西端部で立ち上がりが見つかったため土坑とした。東端については浅くなっているので、削られているだけで、まだ東に延びる溝であった可能性もある。あるいは短い区画溝かもしれない。N－88°－Eを主軸とし、13号土坑に近接しているが壁は明瞭に検出されたので切り合いはないといえる。15・19号土坑との切り合いは明瞭であった。長軸494cm、短軸78cm以上で、深さは38cmを測る。石炭が出土しているのでサンプルを採取した。木質も残っており、西部で砥石が出土するなどさまざまなものが廃棄されているものの、遺物量は少なく時期を特定しにくい。摺鉢の口縁形態と磁器皿から18世紀前葉か。

出土遺物（図版29、第16図）

第16図18は土師質土器の灯明皿で、中央部に芯立がつく。このほか、トウガンの種子やウシの可能性がある獣骨が出土している。

15号土坑（図版4、第15図）

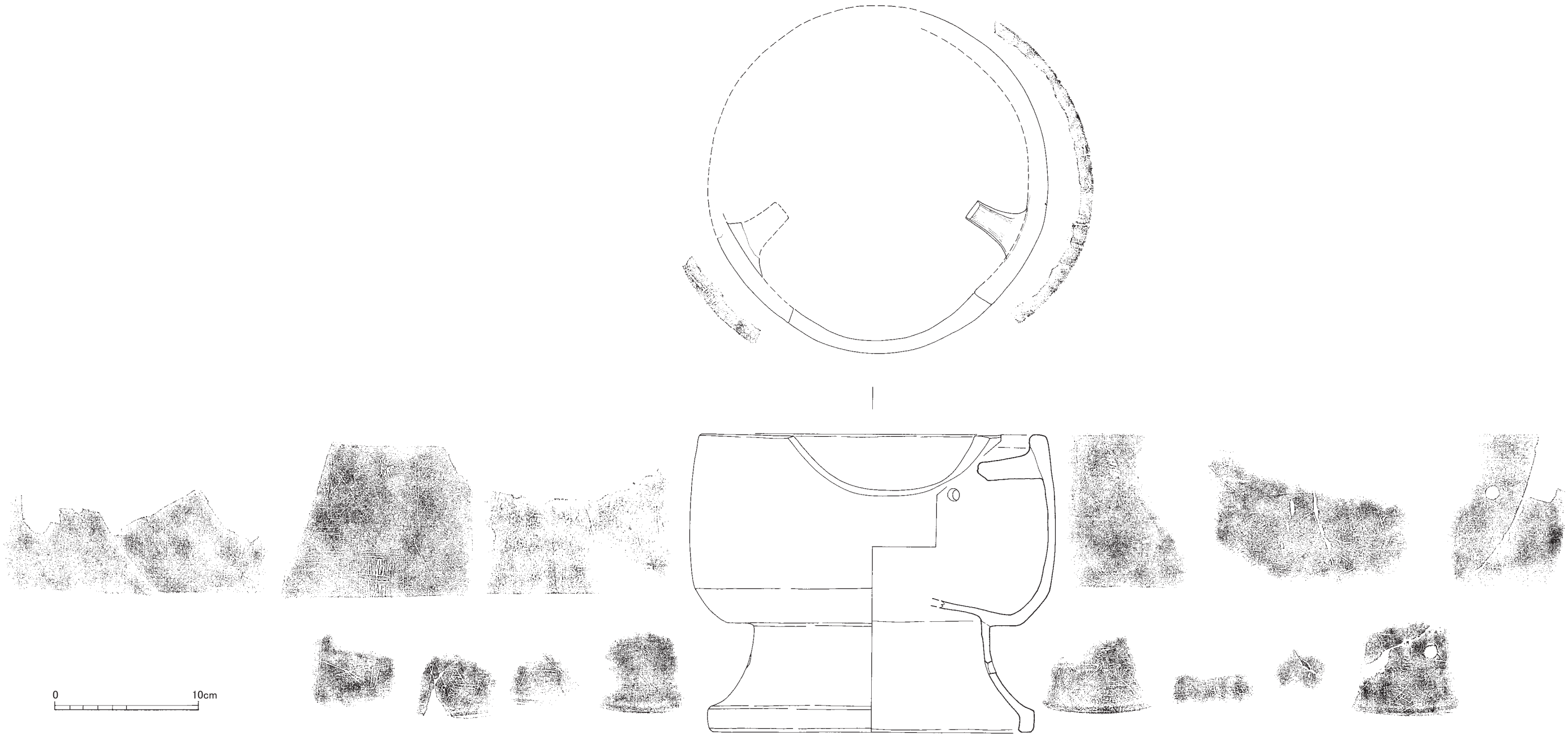
東部で検出された不整形プランの土坑で、掘り下げていくと円形と方形プランの2つの土坑が隣接していることがわかった。上位埋土を共有していたようだ。円形プランを15a号、正方形プランを15b号とした。土層では15a号が15b号を切る。

15a号土坑は径108cmの略円形で、75cmの深さをもつ。19号土坑を切り、14号土坑とは切り合わず隣接する。15b号土坑は1辺145cmの正方形プランで、四隅に腐食した竹が入っていた。竹を角とする板壁があったと見られ、深さが105cmあり壁が直立するので井戸だった可能性がある。埋土上位に礎石が乗っており、この礎石を撤去して絵画火鉢が出土した。14号土坑に近接してはいるが壁は明瞭に検出されたので切り合いはなかった。15・19号土坑を切り、長軸494cm、短軸78cm以上で、深さは38cmを測る。

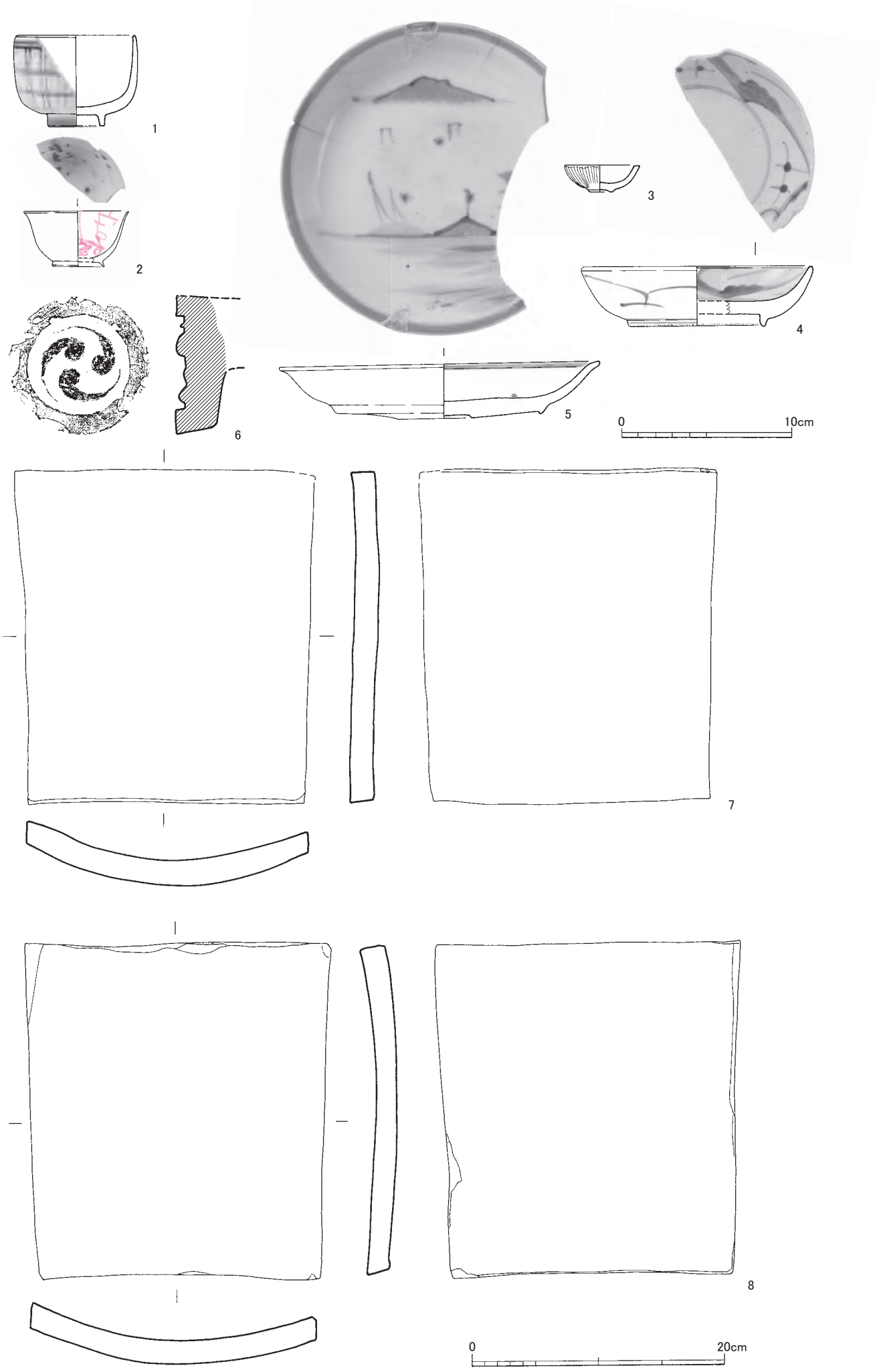
15b号土坑は時期を特定できないが、15号一括の遺物に大きな差はなく、18世紀前葉主体だが第18図1は19世紀前葉か。15号一括の6は軒桟瓦の小丸部であることから、第10図1とともに混入したものか。径8.3cmを測る。

出土遺物（巻頭図版4・51～53、図版29・50～53、第16～19・103・130～135図）

第17図の火鉢は、線刻文字･絵画が外面のほぼ全面に描かれている。口唇部には不明文字があり、胴部は絵画が横書きされている。窓部の下に、護岸施設のある岸辺の桟橋で荷を運ぼうとしている人物と、荷が満載の船2艘がある。手前の浜辺には笠を被った2本差しの武士がおり、奥には平屋の長い建物が4棟あり、背景は岸辺の松原と山水文風の岩山と海を描いている。その絵の左手には、楼閣山水文があり、水上に立てられた楼閣と、木の生えた岩礁に灯籠がある。この絵を切って「弘」と書かれている。「弘化」とすると1845～1848年なので年代が異なるので、推定不能である。その年号の左には天秤で走りながら荷を運ぶ人物と「□用」とあり1文字前は「所」だろうか。その



第 17 図　1 次調査 15 号土坑出土土器実測図（1/3）

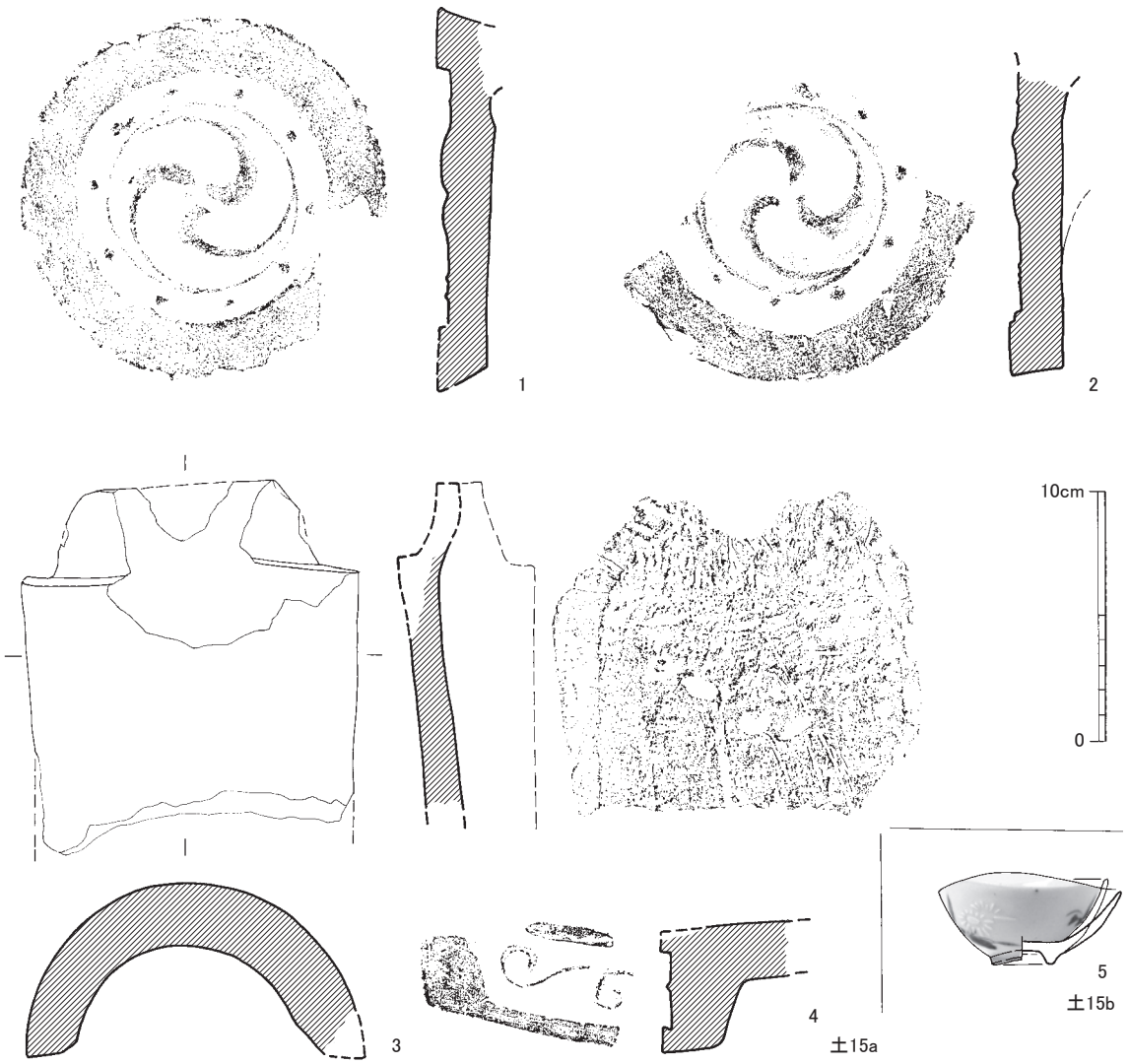


第 18 図　1 次調査 15 号土坑出土陶磁器・瓦実測図（7・8 は 1/4、他は 1/3）

左には「従四位左少将」「源義□」とあり、延長上にも判読できない文字があるので、人名が続いていたことがわかる。その左には□の枠の中に、「戸次丹後守号道雪宗茂公将軍」と書かれている。その横に「佐□〔馬ヵ〕頭」とあり、上が欠損しているのでさらに人名があったとわかる。さらにその左手には、江戸中期頃に島田髷の女性が、右手にキセルらしいものと左手に煙草入れらしいものを持った姿で描かれており、その横に火炎宝珠がある。女性像の脚の部分は摩滅しているが、膝を曲げているようだ。その左手には正方向で、「□□〔弥か〕太郎わだかめあり」「これ天上の外二せんつり」「かくるのや□〔くヵ〕人」と書かれており、判読できない文字があるので意味が通らないが、狂歌だろうか。

高台部分の絵画も横向きに書かれている。まず、窓の下方に、楼閣のテラス部分に十二単衣のような裾の長い袴をはいた長髪の女性が、机に肘をついて空を見上げている絵が描かれている。その左手には長方形で線が組み合わさる不明文があり、その左手には、樹木が描かれている。幹部分が欠損しているが、根元が盛り上がった大木のようだ。丸い葉のまとまりが横方向に広がるのでマツだろうか。その左手には絵としては完結していないが、鳥の頭部のように見える。その左手に「田中内常卿」とある。その左に尾の長い小鳥が身をよじらせて川の上を飛んでいる絵が描かれている。その左手には正方向で樹木のようなものが描かれている。

従四位左少将の源氏で「義」のつく人物は確認できず、「戸次道雪」は丹後守ではないし、宗茂



第 19 図　1 次調査 15a・b 号土坑出土土器・陶磁器・瓦実測図（1/3）

は将軍でもない。卿と称するに相当する「田中内常」なる人物も確認できず、田中吉政を指しているのかもしれないが、いずれの文字も意味をなしていない。当時の人物には理解できる隠語のようなものかもしれないが悪戯書と判断される。

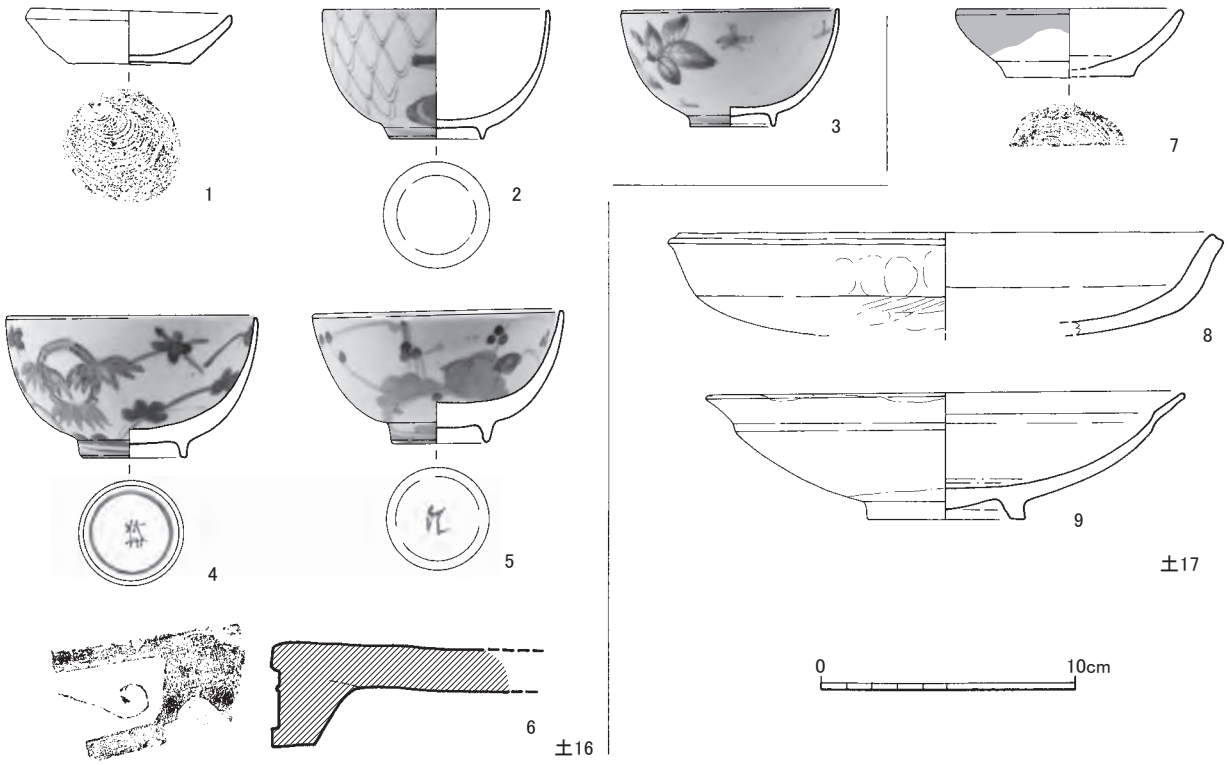
第18図7・8は平瓦で、広い方の小口を下にして立てて焼成したらしく、小口に粘土塊があり、面の縁がへたれている。15a号土坑の第19図1・2の軒丸瓦は同范であり、同じ建物から廃棄された可能性が高い。第103図2は15a号から出土した石塔で、風化の著しい残欠である。木製品も多く出土しており、一括出土の第133図4・5と15b号出土の6は、1個体の黒漆塗りの箱の板材と考えられる。第134図9は建築部材の残欠だろうが、建物を解体したにしては量が少ない。掲載していないがシュロ縄があった。このほか、トウガンの種子、ウメの核・モモの核5点・オニグルミ10点などが出土しているほか、鑑定に出していないが、ヒシの実が9点やハタ科の尾椎骨が出土しており、食料残滓を含んでいる。7と8の法量はほぼ等しく、同一規格である。

16号土坑（図版4・6、第8図）

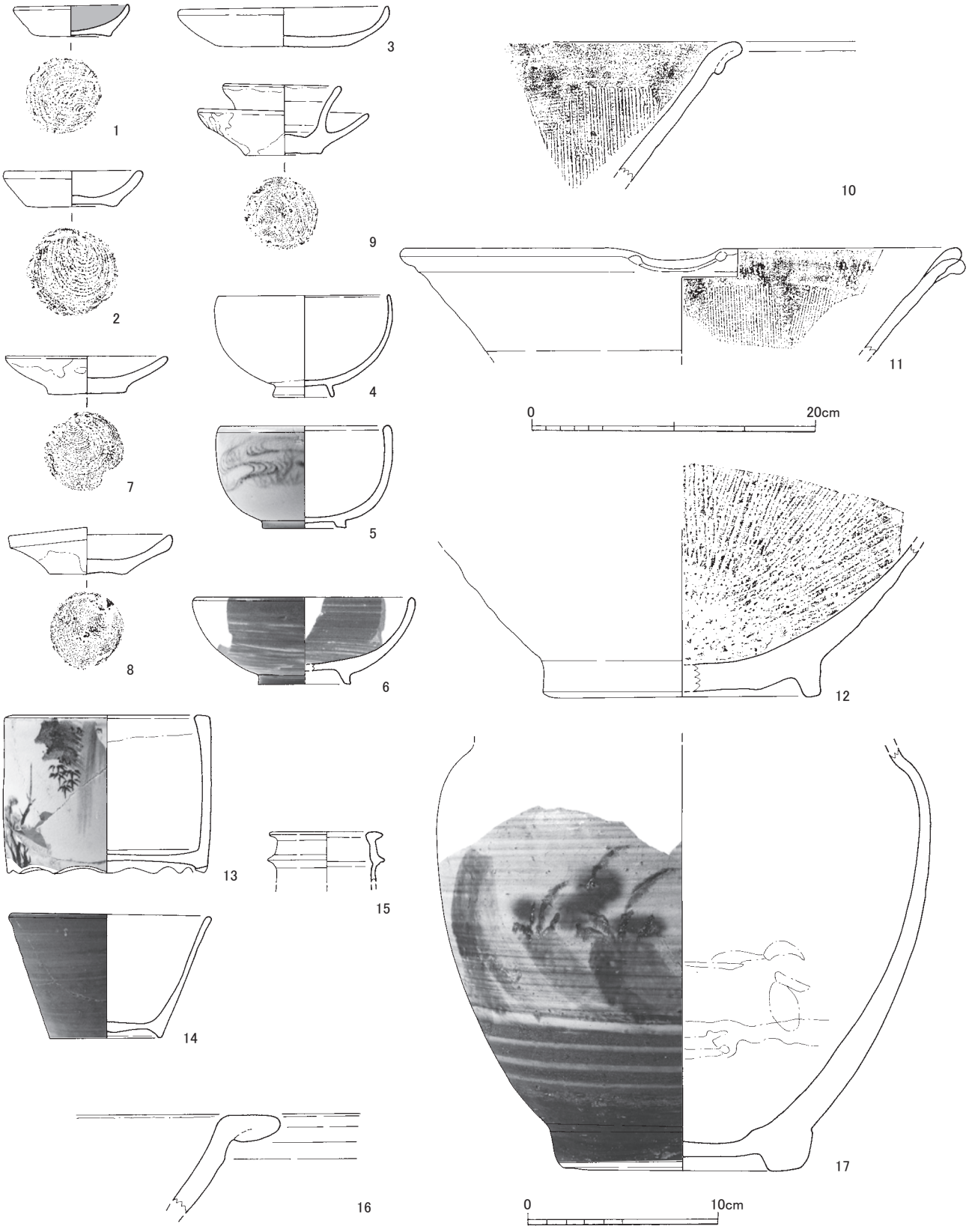
北西端部から検出された不整形プランで、10号土坑と切り合うが、切り合う部分に基礎杭が入っていたため確認できなかった。遺物の入り方から16号土坑が切る。3号溝状遺構に切られる。N - 58° 40′ - Wを主軸とし、長軸140cm以上、短軸204cm、深さは約54cmと深い。東壁はやや抉れる。埋土の中央部から10号土坑の埋土の差異が不明瞭だったため、切り合いが不鮮明だったが、遺物から切っているものと考えられる。瓦がまとまって出土しており、磁器から18世紀前葉に属する。

出土遺物（図版29、第20図）

第20図1は土師器小皿で、見込みが赤変しているので、焼き塩壺の蓋にしているので、転用したものだろう。第20図2・4の裏銘は字体が独特で、4はコンニャク印版と手描きが組み組み合わさっている。このほか食料残滓の貝殻が出土している。



第20図　1次調査16・17号土坑出土土器・陶磁器実測図（1/3）

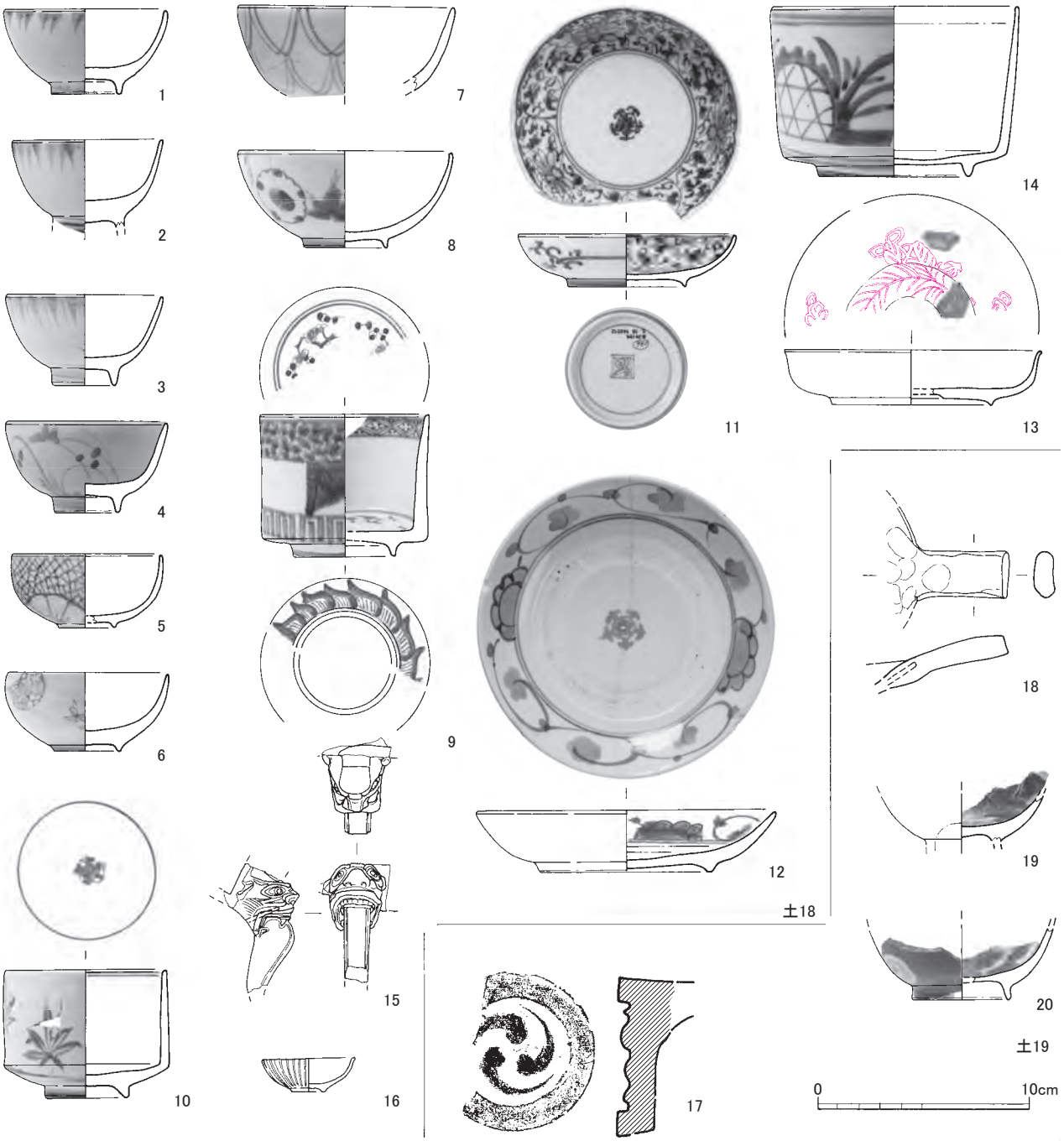


第 21 図　1 次調査 18 号土坑出土土器・陶器実測図（11 は 1/4、他は 1/3）

17 号土坑（図版５、第 15 図）

中央東部で基礎にほとんど切られて検出された土坑で、全体像はわからない。当初１つの不整形土坑と考えていたが、下位にさらに深くなる部分があり、上位とは別の遺構と判断した。下位を 17a 号、上位を 17b 号とした。埋土から見て、17a 号が埋没した後に 17 b 号が作られている。17a 号は長軸 250cmで、深さ 45cm以上である。

17b 号は不整形のため、規模が不明確だが 40cmほどの深さである。17b 号からはヒトの幼児骨の可能性のある骨が１体分出土している。人骨にしては墓壙らしくないものの、隣接する 15 号溝状遺構から五輪塔の空風輪が出土しているので、屋敷墓が存在した可能性もある。遺物が少なく時期を特定しにくいが、陶器皿は 17 世紀後葉に属するだろう。



第 22 図　１次調査 18・19 号土坑出土土器・陶磁器・瓦実測図（1/3）

出土遺物（第 20・129・131・132 図）

第 132 図 10 は一括出土の木製品で、把手の部材である。

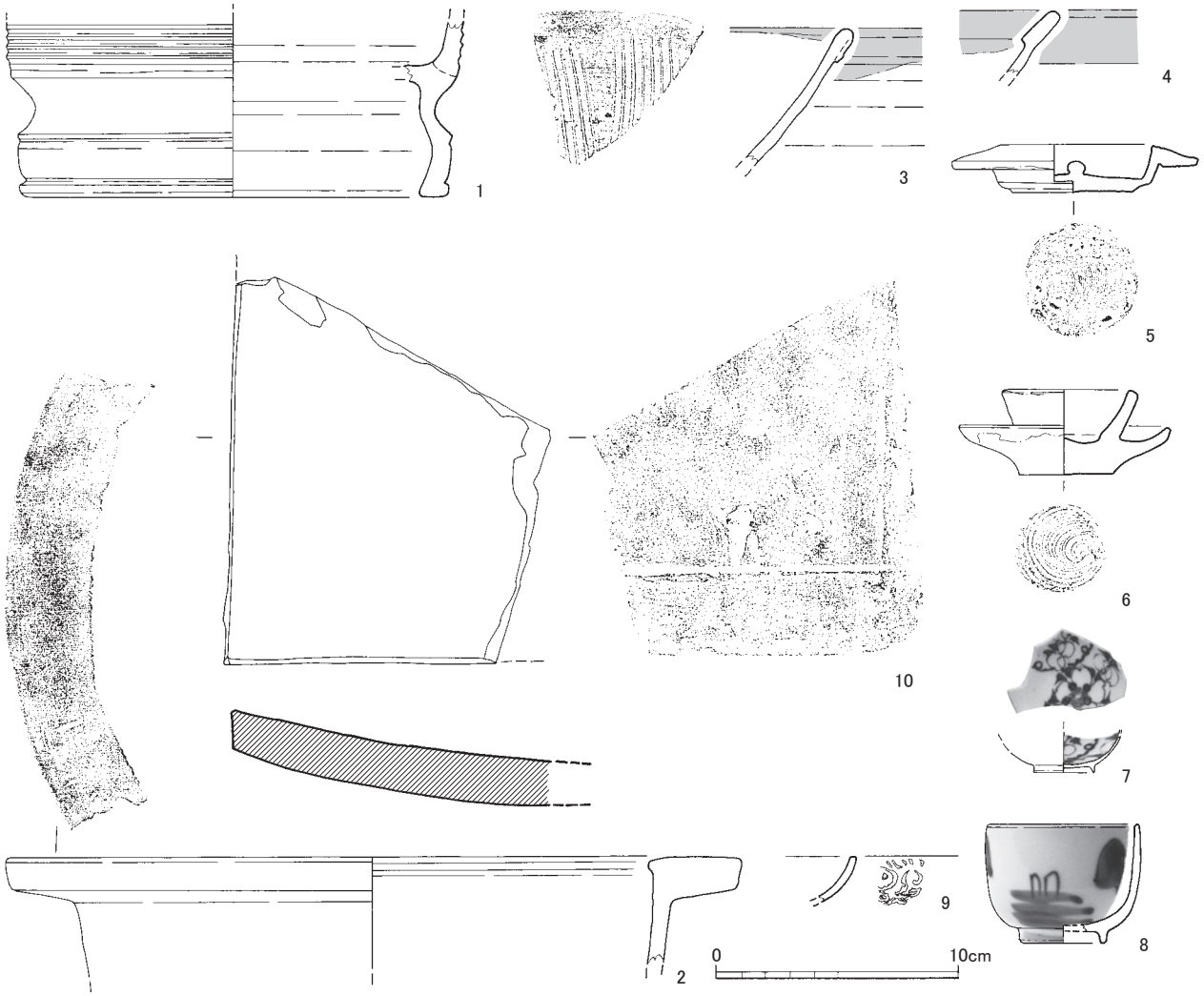
18 号土坑（図版５・６、第 15 図）

東部から検出された略円形の土坑で、東端を 21 号溝状遺構に、西端部を 1 号溝状遺構に切られているため、中央部だけが検出された。長軸 450cm、深さ 41cmを測る。壁の立ち上がりは明瞭だった。磁器から 18 世紀中葉に属する遺構であろう。第 22 図 1 から 3 の雨降文小碗は揃いで、雑器が主体を占める。石炭が出土しており、サンプル（図版 49）を採取した。

出土遺物（図版 29、第 21・22・129 図）

第 21 図 17 は半胴甕で、内面に胎土目跡が５つ残るので別個体を入れて重ね焼きしている。

第 22 図 15 は、磁器の鉢の獣脚部で、型合わせ成形である。鉢体部の平面プランが円形なのか方形なのかもわからない。獣頭部の裏から刺突しているのは焼成のためのものだろう。第 129 図 10 は漆杯で、木質は失われているが、漆が丁寧に塗られているので漆だけが残っている。図上復元で作図しているが、器壁の厚さは根拠がない。緻密な絵が多色で描かれていることから、ハレの器であろう。



第 23 図　1 次調査 20 号土坑出土土器・陶磁器実測図（1/3）

19 号土坑（図版６　、第 15 図）

東部で 14 号土坑の下から検出された略円形の土坑で、長軸 113cm、短軸 94cmで南壁はやや抉れる。13・14・15a 号土坑に切られており、深さも 30cmと浅い。しかし、壁が直立するので井戸だった可能性がある。

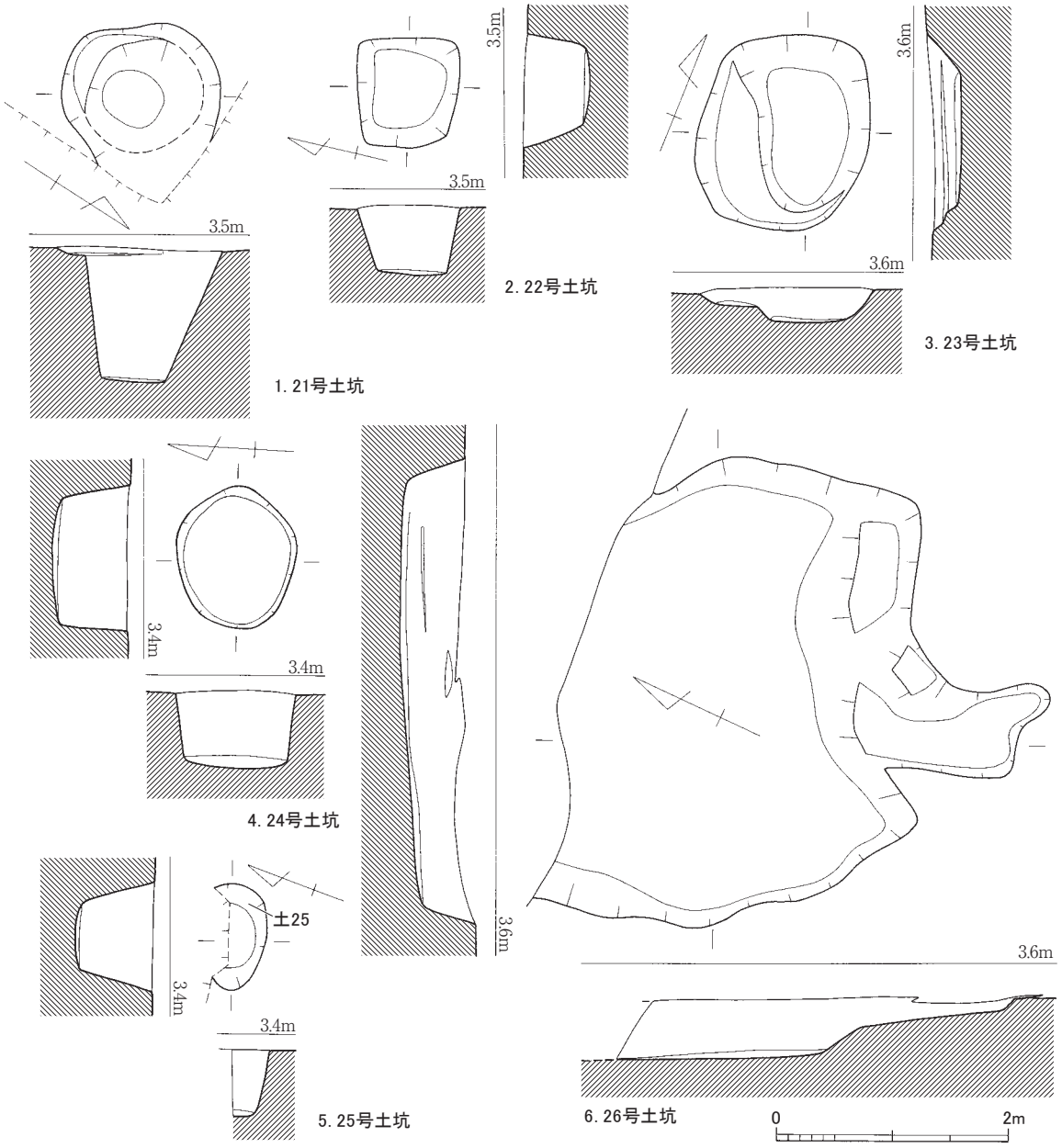
19・20 の現川焼の碗から 18 世紀前葉に属する。17 の桟平瓦の丸は混入か。

出土遺物（第 22 図）

19・20 は同一個体ではなく、揃いであろう。

20 号土坑（図版６、第 15 図）

南西突出部の西壁で検出された土坑で、西壁に沿って杭と板による土留めがなされている。平面プランが湾曲しているので、溝の湾曲部と土坑の一辺を土留めした双方の可能性があるが、南に隣接する 26 号溝状遺構には土留めがないので、一連のものではないことから土坑とした。残存長は

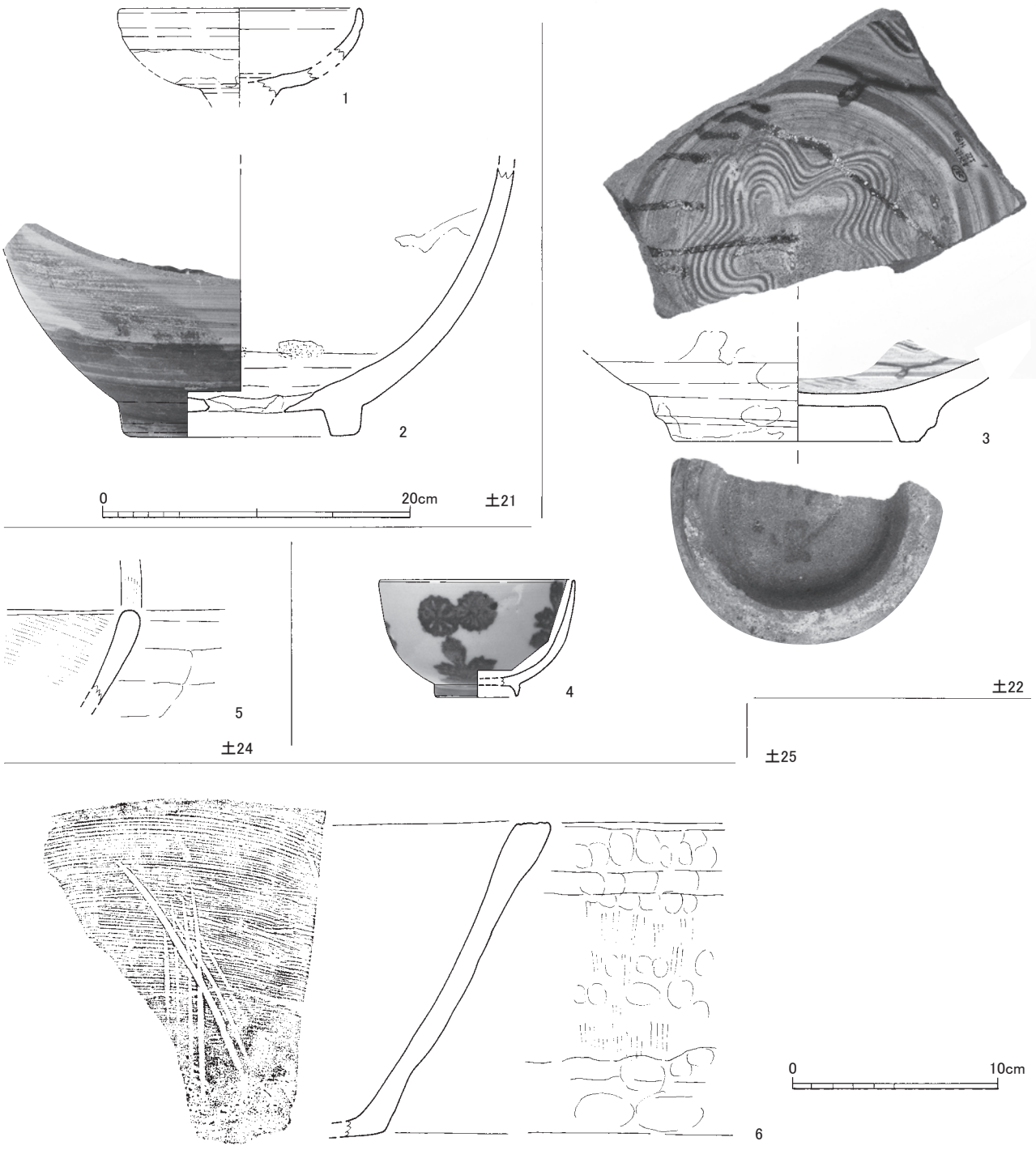


第 24 図　1 次調査 21 ～ 26 号土坑実測図（1/60）

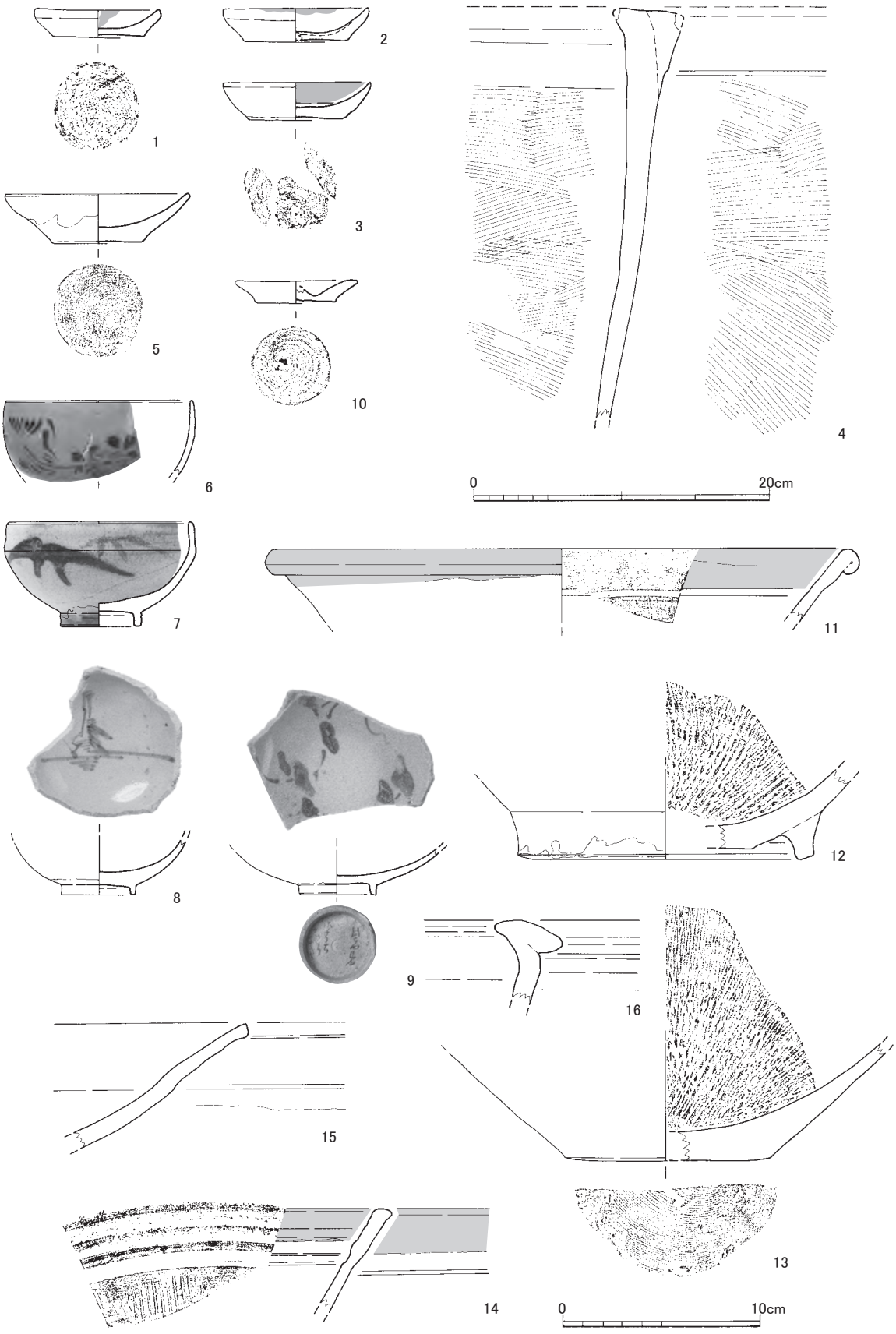
230cmほどで、深さは95cmほどで、床面に140cmにわたって土留めが検出された。土留めは杭が板を挟む構造で、板の厚さは1.5cmほどあった。南側は板が2枚あり、杭は木杭と竹杭があった。1号大土坑に導水施設が付髄していることから、同様の施設であり、26号溝状遺構が大土坑の一部であったのだろう。埋土は異なるが、北に位置する27号溝状遺構と同一遺構の可能性がある。火鉢の刻書とコバルトの杯から19世紀中葉に属する。

出土遺物（図版29、第23図）

2の火鉢には「番兵隊□」と線刻されている。



第25図　1次調査21・22・24・25号土坑出土土器・陶磁器実測図（2は1/4、他は1/3）



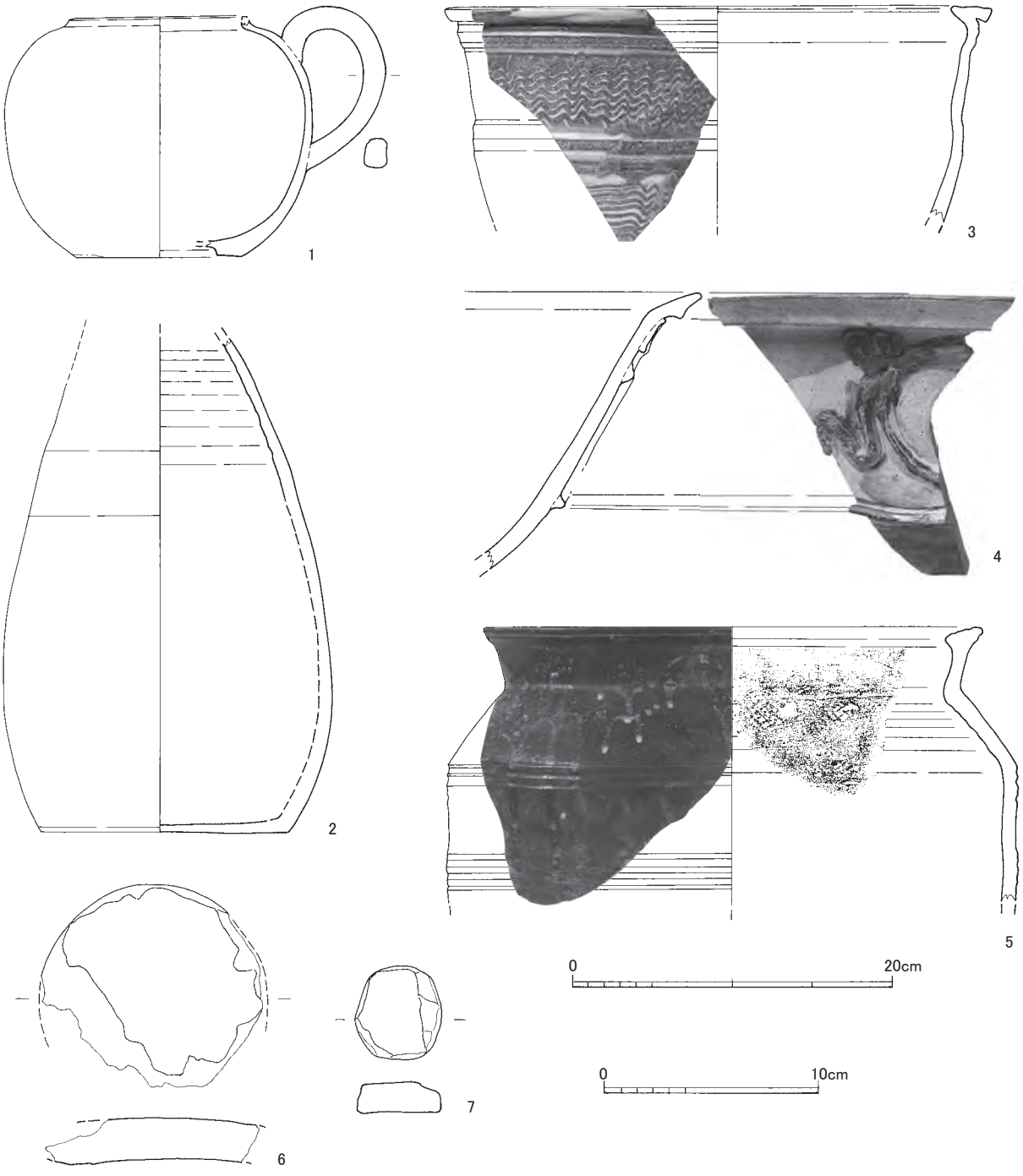
第 26 図　1 次調査 26 号土坑出土土器・陶器実測図1（4は 1/4、他は 1/3）

21 号土坑（図版６、第 24 図）

西部から検出された不整形プランで、31 号溝状遺構を切る。北部が調査区外に延びるため全体像はわからない長軸 146cm以上、短軸 130cm、深さは約 115cmと深い。出土遺物が少なく時期を特定しにくいが 18 世紀以降か。

出土遺物（第 25 図）

２は半胴甕で、見込みに砂目跡が残るので別個体を入れて重ね焼きしている。底部穿孔は植木鉢への転用のためか。



第 27 図　１次調査 26 号土坑出土土器・陶器実測図２（３～５は 1/4、他は 1/3）

22 号土坑（図版６、第 24 図）

西部から検出された正方形プランで、長軸 90cm、短軸 84cm、深さは約 60cmと深い。出土遺物が少なく時期を特定しにくいが、磁器碗から 18 世紀前葉か。

出土遺物（図版 29、第 25 図）

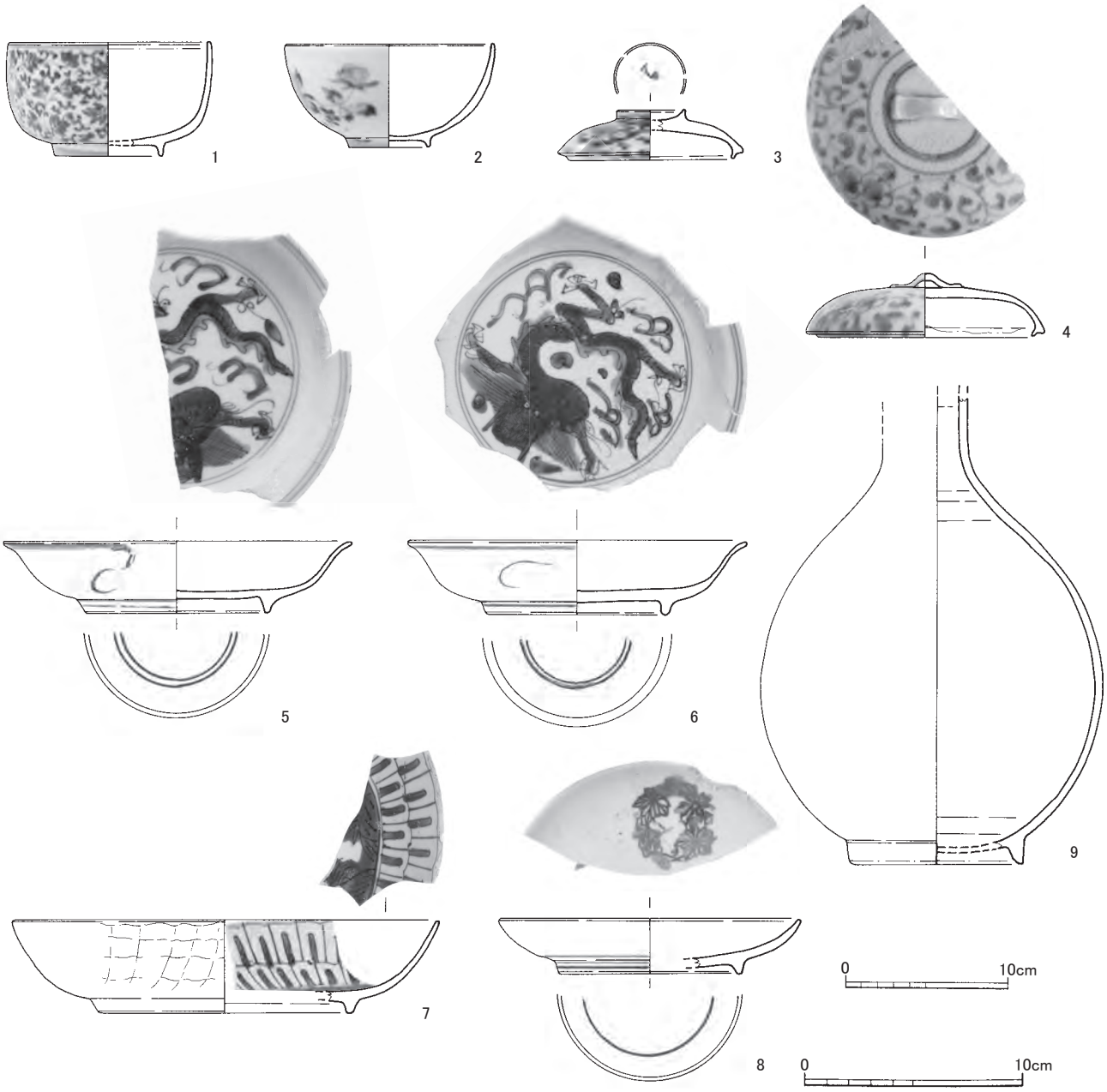
３の陶器鉢の外底には「屋山」と墨書されており、所有者名を表している。

23 号土坑（図版６、第 24 図）

西部から検出された隅丸方形プランで、N － 21° － Wを主軸とし、長軸 172cm、短軸 147cm、深さは約 30cmと深い。出土遺物が少なく時期を特定しにくい。

24 号土坑（図版６・７、第 24 図）

中央西側から検出された略円形プランで、長軸 122cm、短軸 105cm、深さは約 60cmと深い。出土



第 28 図　１次調査 26 号土坑出土磁器実測図（9は 1/4、他は 1/3）

遺物が少なく時期を特定しにくい

出土遺物（第 24 図）

第 24 図 5 は瓦質土器の土鍋である。

25 号土坑（図版 7、第 24 図）

中央西側から検出された楕円形プランの小型土坑で、N - 71° - Wを主軸とし、長軸 120cm、短軸 106cm、深さは約 30cmと深い。寛永通宝 1 枚のみ出土したため時期を特定できない。

出土遺物（第 25 図）

6 は瓦質土器の摺鉢で、内面は使用のため摩滅している。

26 号土坑（図版 6、第 24 図）

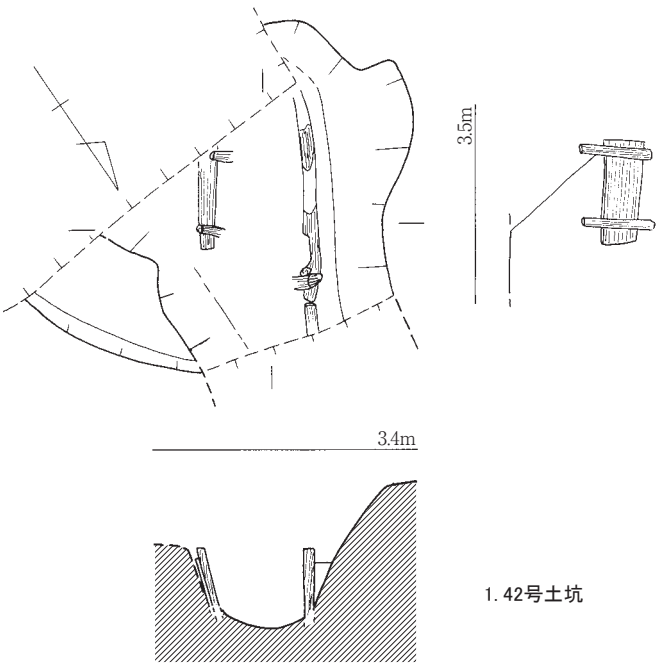
中央西側から検出された不整形プランで、落ち込みといってもよい。長軸 398cm 以上、短軸 404cm、深さは約 52cmと深い。木質が残っており、加工痕のある部材柱が 2 点出土した。28 号溝状遺構を切る。摺鉢の 11 は 17 世紀後半だが、12 は 18 世紀前葉で、8 のコンニャク印判手の皿から 18 世紀前葉だろう。

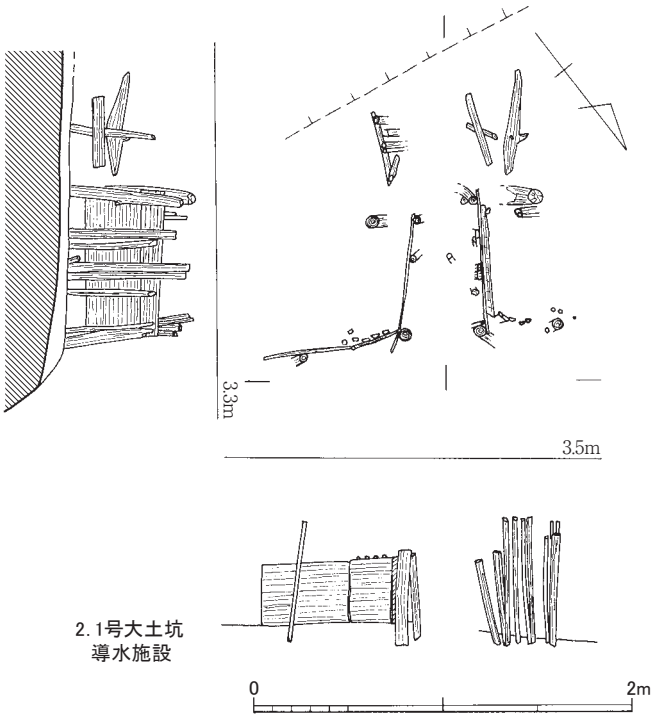
出土遺物（第 26 ～ 28・133・136・137 図）

第 26 図 4 の井戸枠は口唇部が摩滅しており、外面は斑状剥離が見られることから外面は水分の多い土と接していたとわかる。第 26 図 9 の外底の墨書は、左右 2 ヶ所に小さく書かれており、吉祥句ではない。第 28 図 5 ・ 6 は揃いの染付皿である。第 137 図 1 は木札で墨書がわずかに残っている。

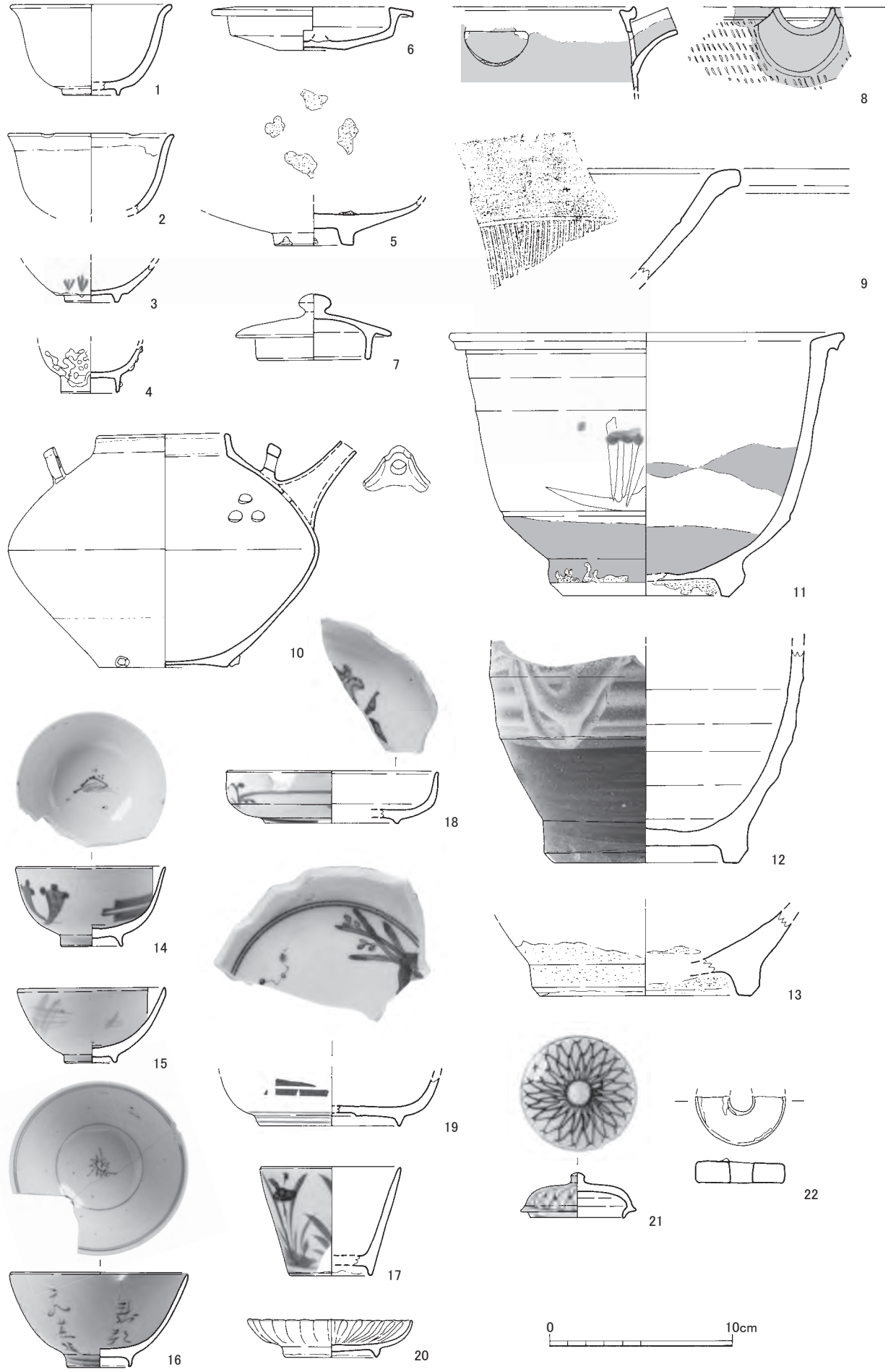
42 号土坑（第 29 図）

西端で検出され、東側を基礎に多く切られ、調査区西壁外に延びるため、全体像がわからない。中央に杭と板による土留めがあり、主軸方向はN - 32° 20′ - E だが、プランは南に傾いており、現在の川に直結しない。同主軸方向の北側には 1 号大土坑の導水施設があり、これと一連の遺構だっ





第 29 図　1 次調査 42 号土坑・1 号大土坑導水施設実測図（1/40）



第 30 図　1 次調査 42 号土坑出土土器・陶磁器実測図（1/ 3）

たようだ。深さは75cmほどで、土留めの幅は約45cmである。板は1枚しか残っていなかったが、基礎木杭が打ち込まれる位置でもあったことから、西側の欠損が著しい。

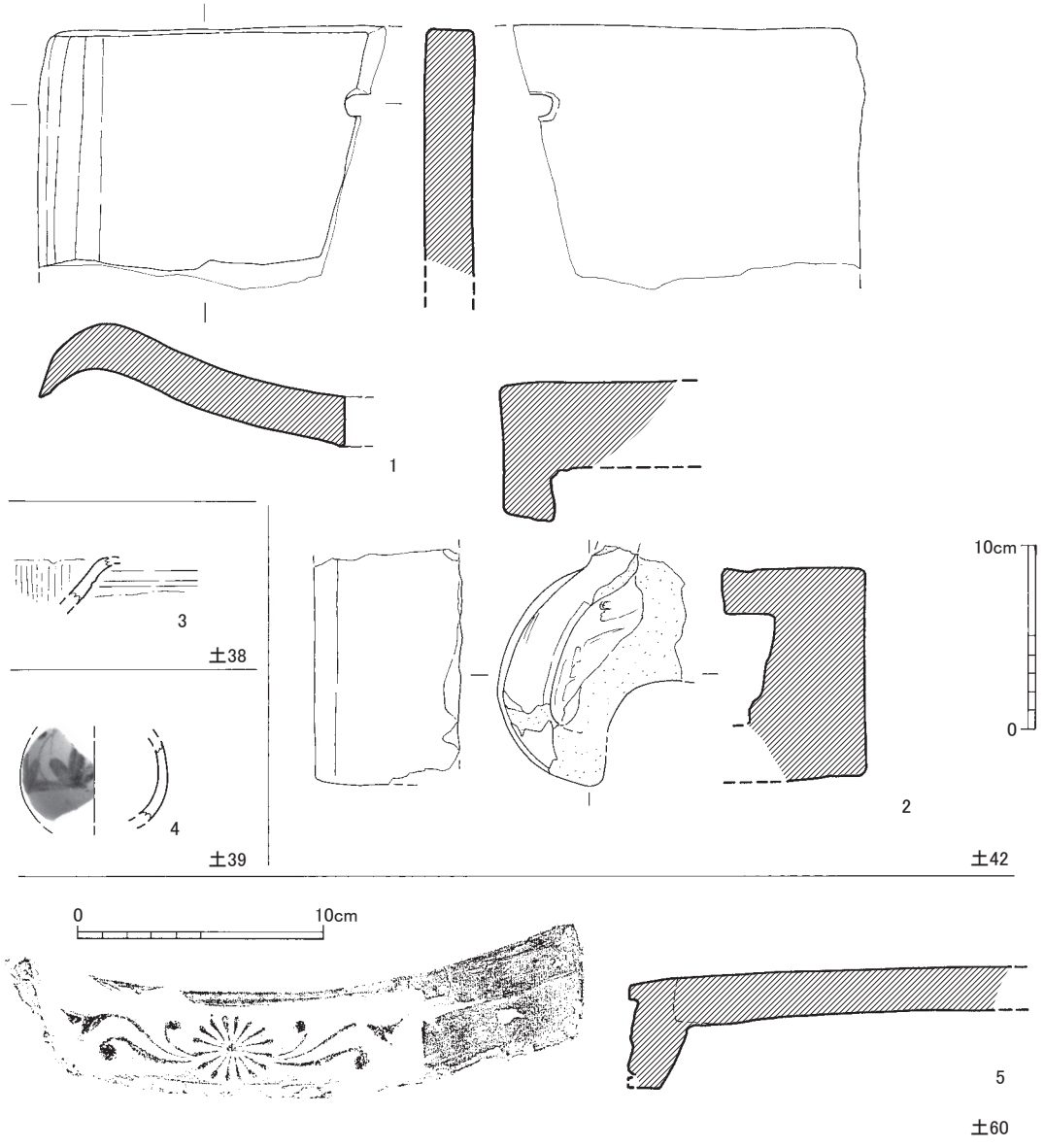
桟瓦と鬼瓦が出土しており、鬼瓦は雲形なので新しいか。第30図1・2の陶器の端反碗やビラ掛け碗から、19世紀前葉に属する。

出土遺物（巻頭図版5・図版30・45・51・52、第30・128・129・131・135図）

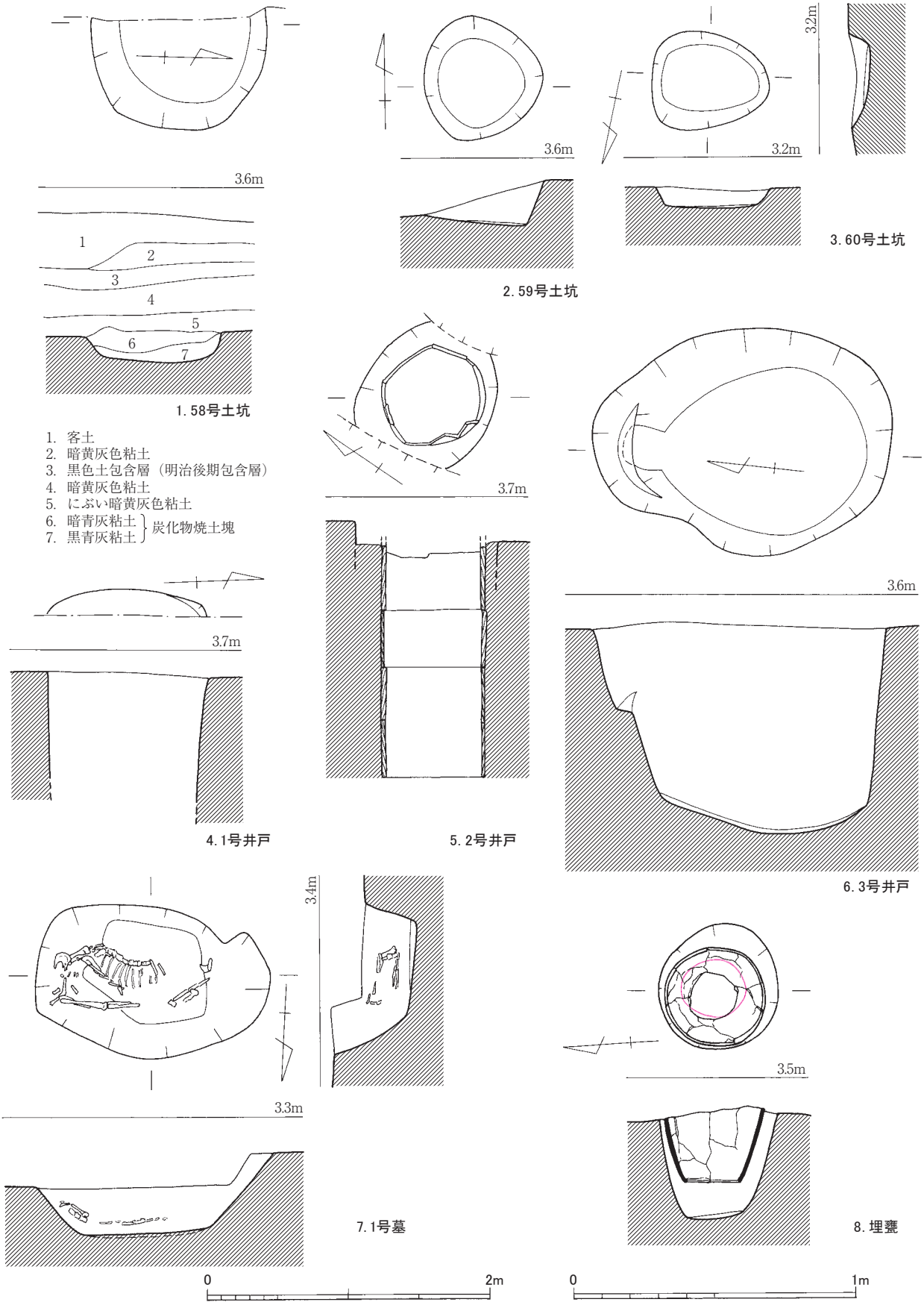
第30図8の行平は、鉄釉が掛かる場所から、釉に接合部の補強の役割や液体と接する部分の補強の役割があるのかもしれない。16の磁の碗は漢詩文で「月□□」「□□」「元在□」「水音」と書かれている。原典はわからない。木質も残っており、第129図20は金箔を貼った板材で、仏壇の可能性がある。第131図9はほぼ未使用の下駄で歯が折れたため廃棄したものである。このほか、掲載していないがシュロ縄や中央に木釘孔、板材、栓らしい棒状製品なども出土している。

58号土坑（図版7、第32図）

渡り廊下部分から検出された円形プランの土坑で、半分が調査区西壁に延びる。径125cmで、深さ20cmと浅い。下位に炭化物・焼土塊を混じる。遺物が少なく、陶器の摺鉢片のみなので時期の特



第31図　1次調査42・58～60号土坑出土陶磁器・瓦実測図（2は1/4、他は1/3）



第 32 図　1 次調査 58 ～ 60 号土坑・その他の遺構実測図（7・8 は 1/30、他は 1/40）

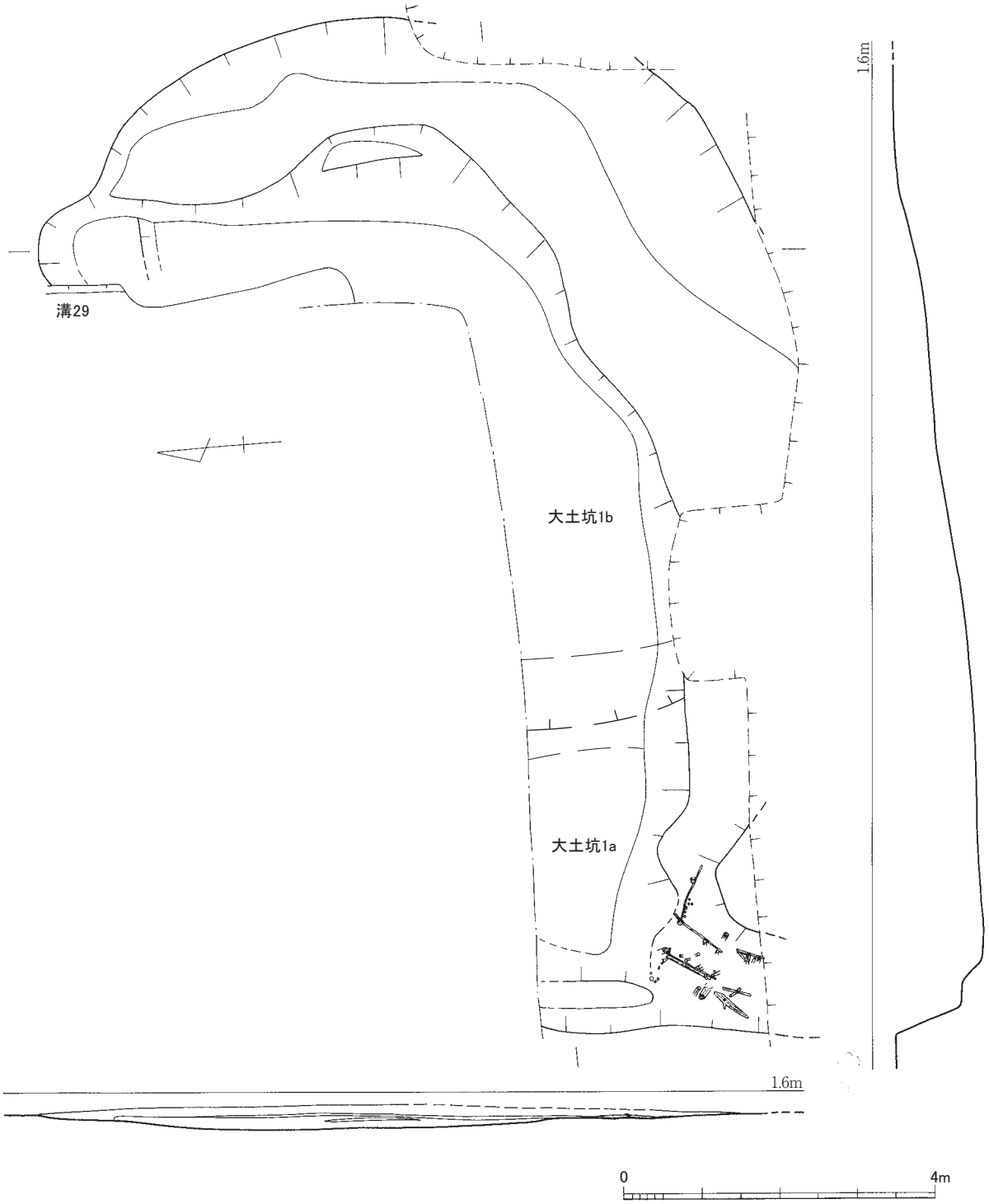
定は難しいが、外面の鉄釉が口縁下までなので、18 世紀後半代か。

出土遺物（第 31 図）

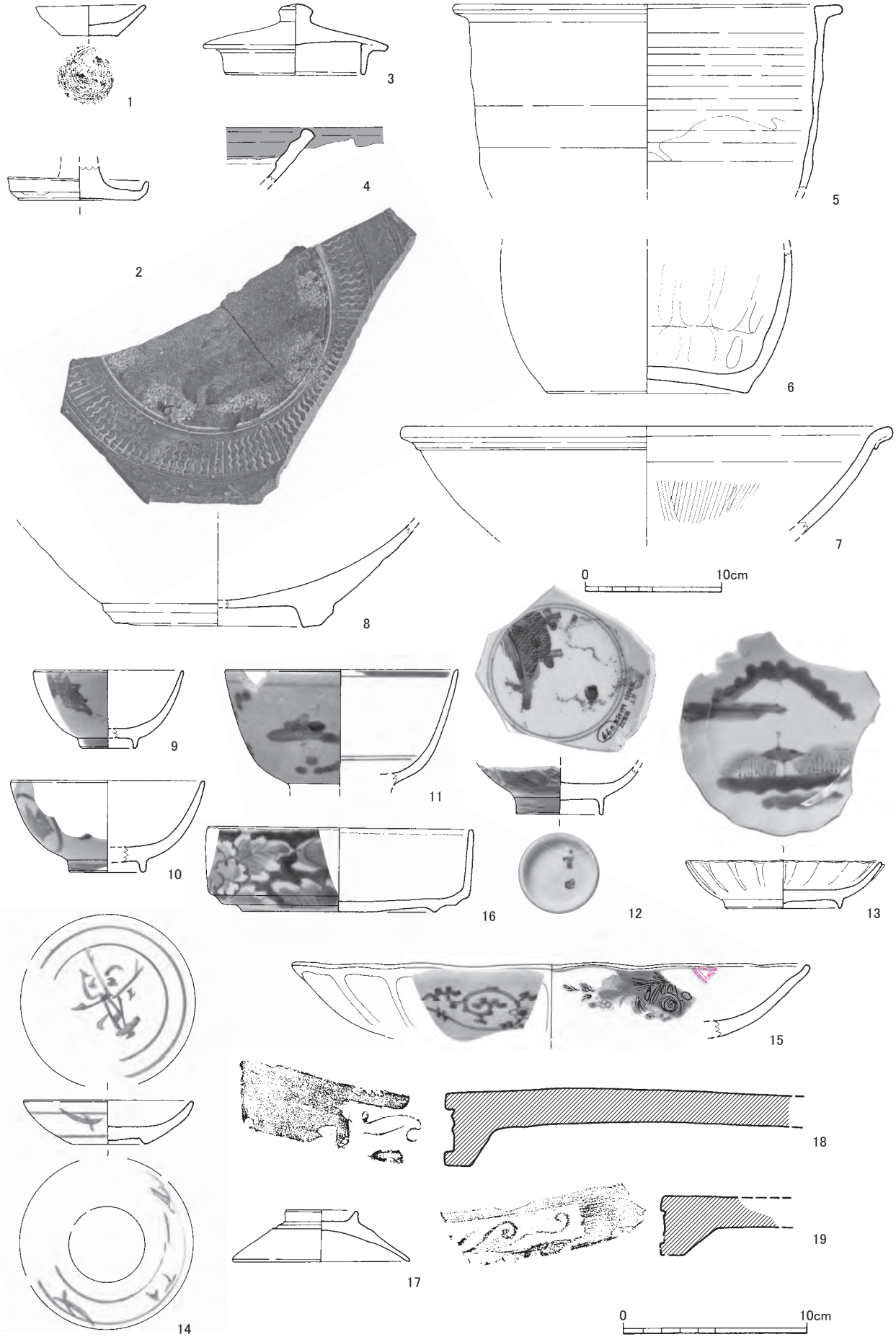
３は陶器の摺鉢で、口縁部内面肥前厚。

59 号土坑（図版７、第 32 図）

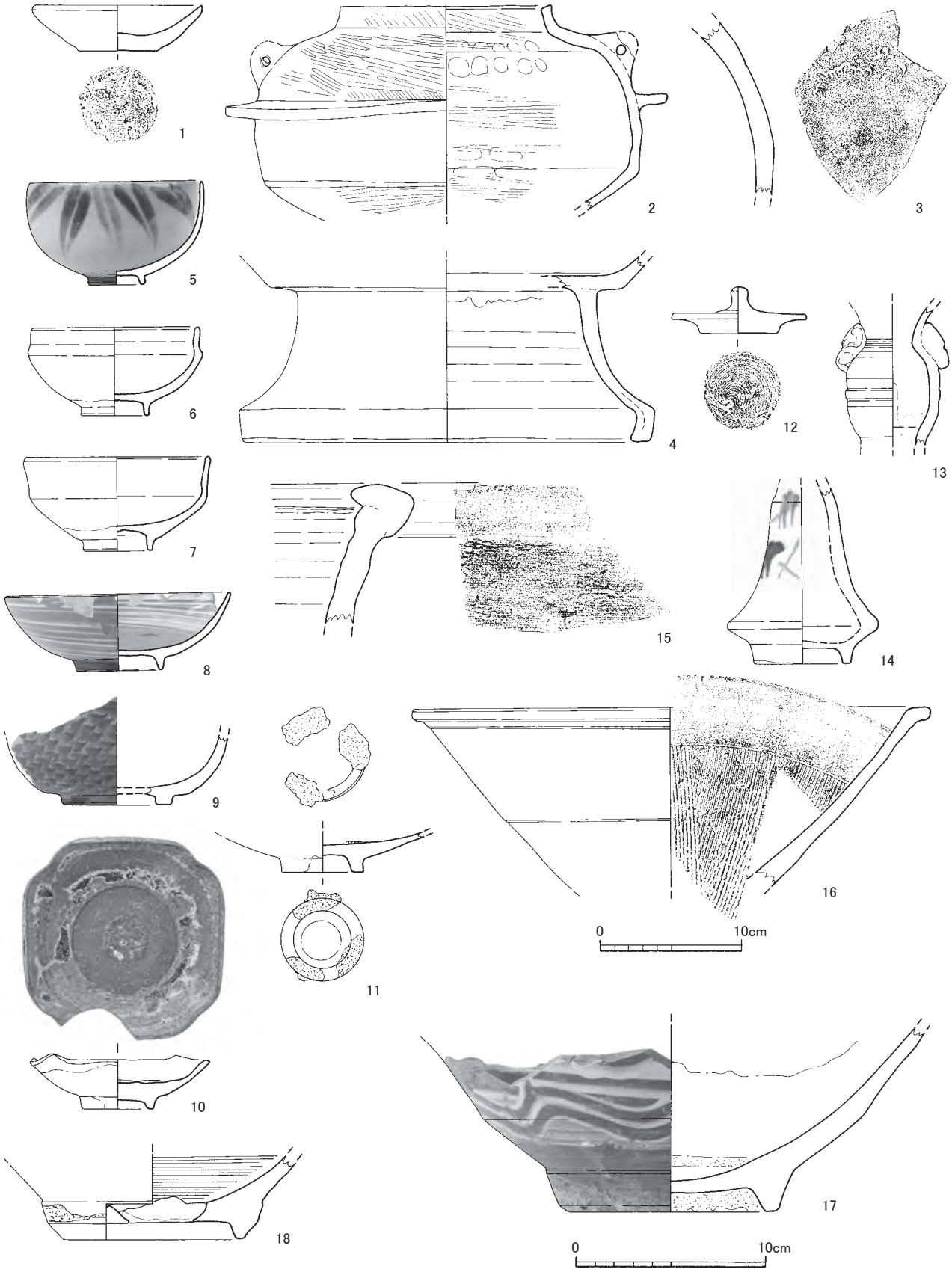
渡り廊下部分から検出された略円形プランの土坑で、5 号大溝遺構を切る。長軸 90cm、短軸 84cm、深さ 31cmと小規模である。半分が調査区西壁に延びる。径 125cmで、深さ 20cmと浅い。出土遺物が



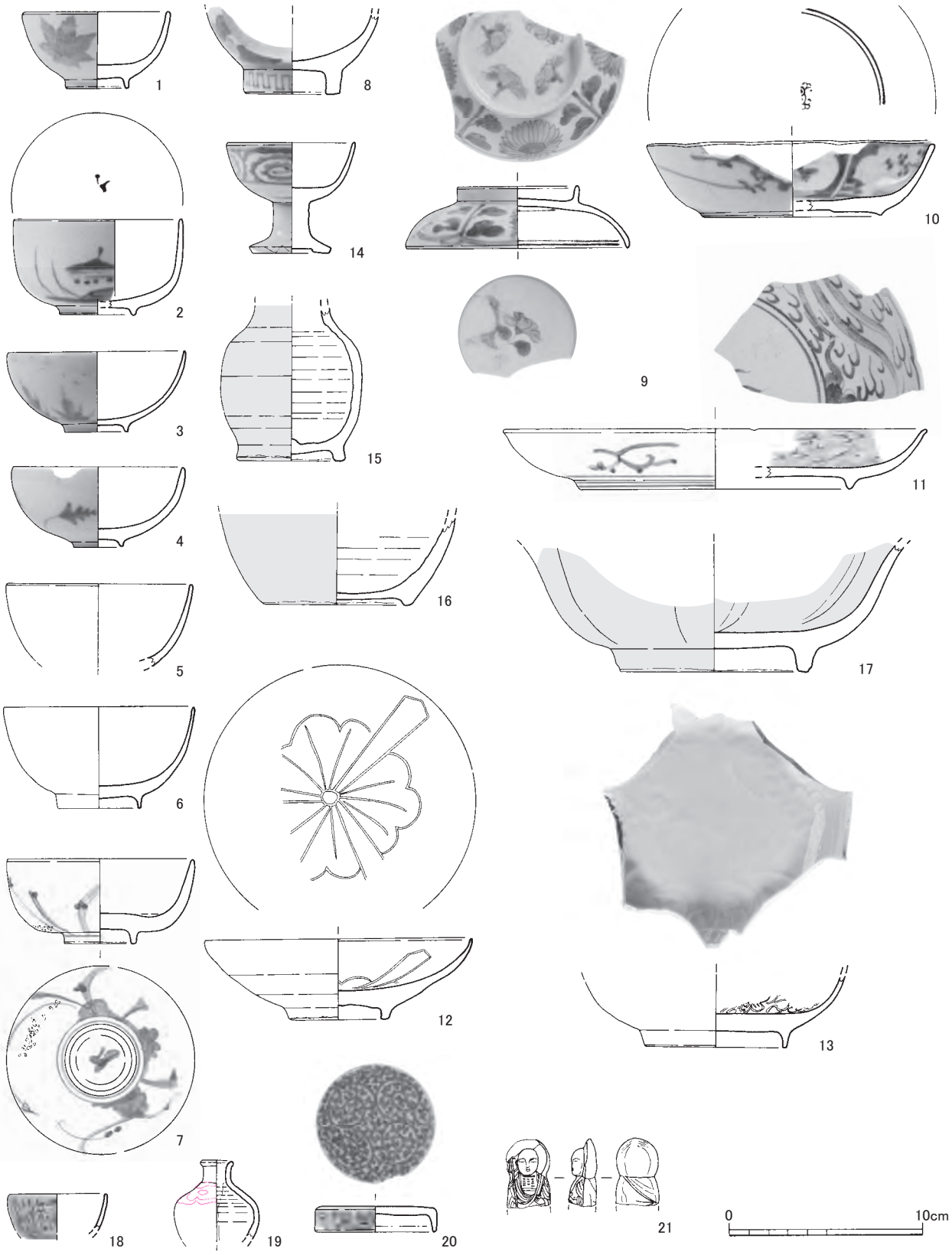
第 33 図　１次調査１号大土坑実測図（1/80）



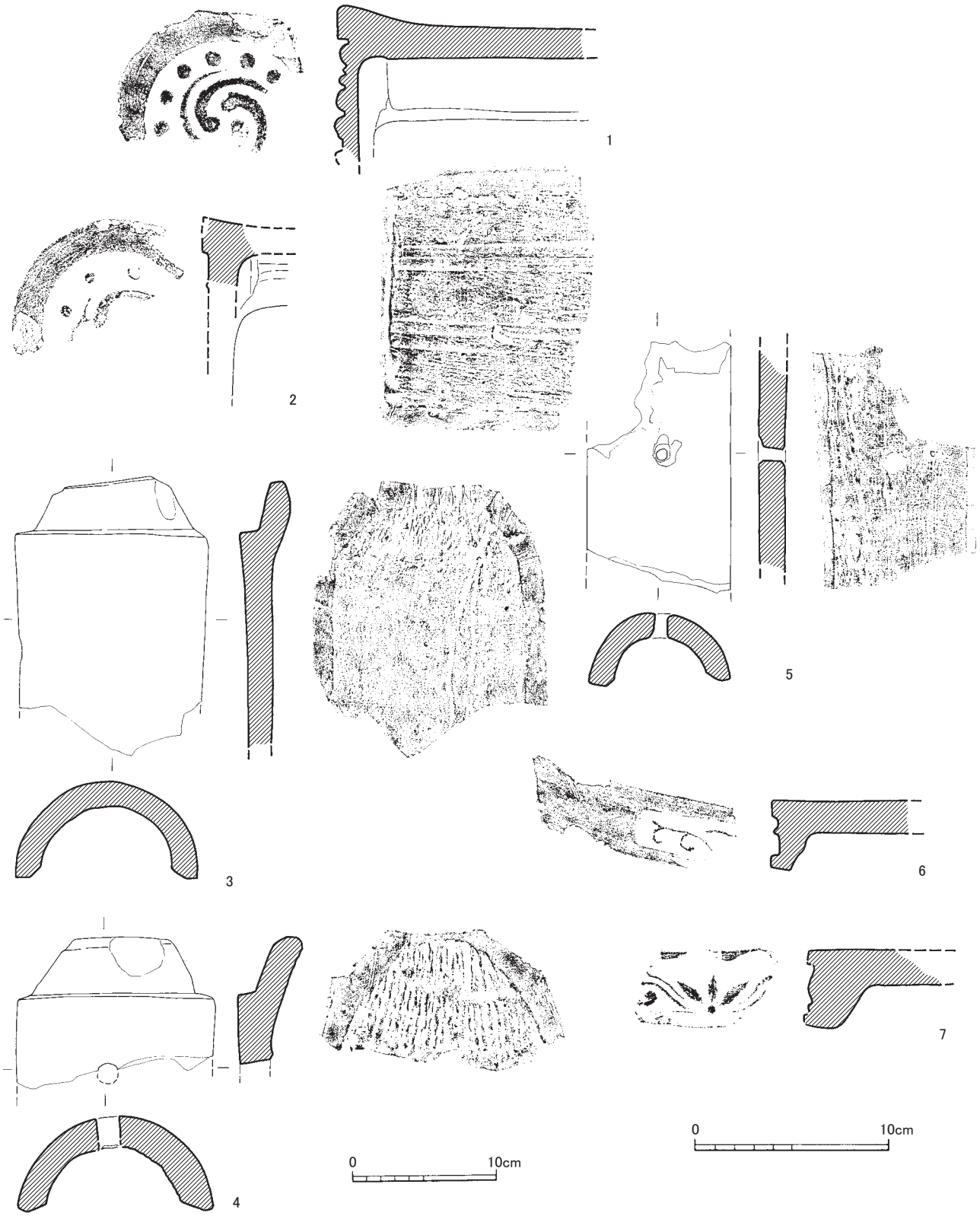
第 34 図　1 次調査1号大土坑上位出土土器・陶磁器・瓦実測図（7は 1/4、他は 1/3）



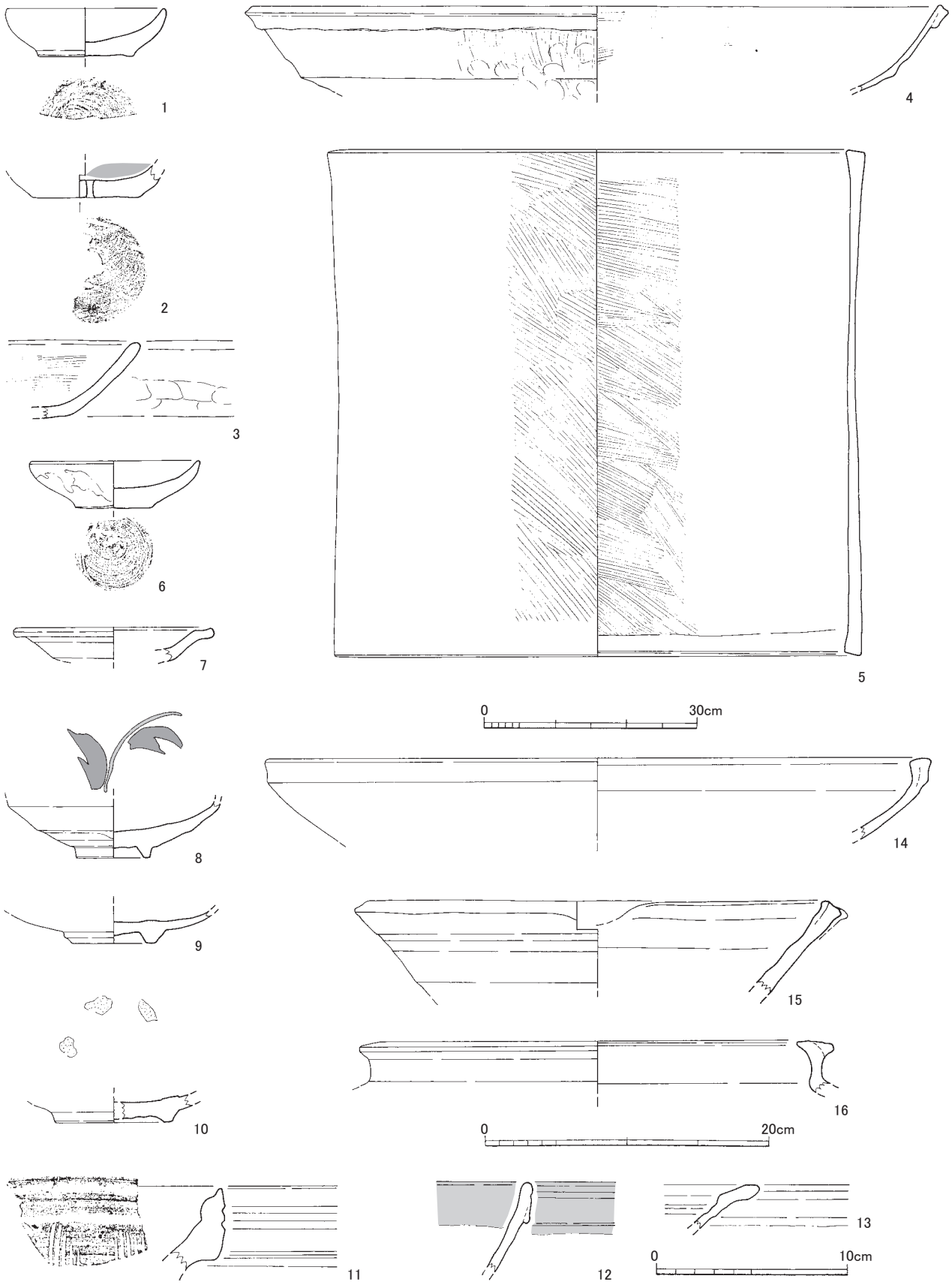
第 35 図　1 次調査1号大土坑出土土器・陶器実測図（2・4・16 は 1/4、他は 1/3）



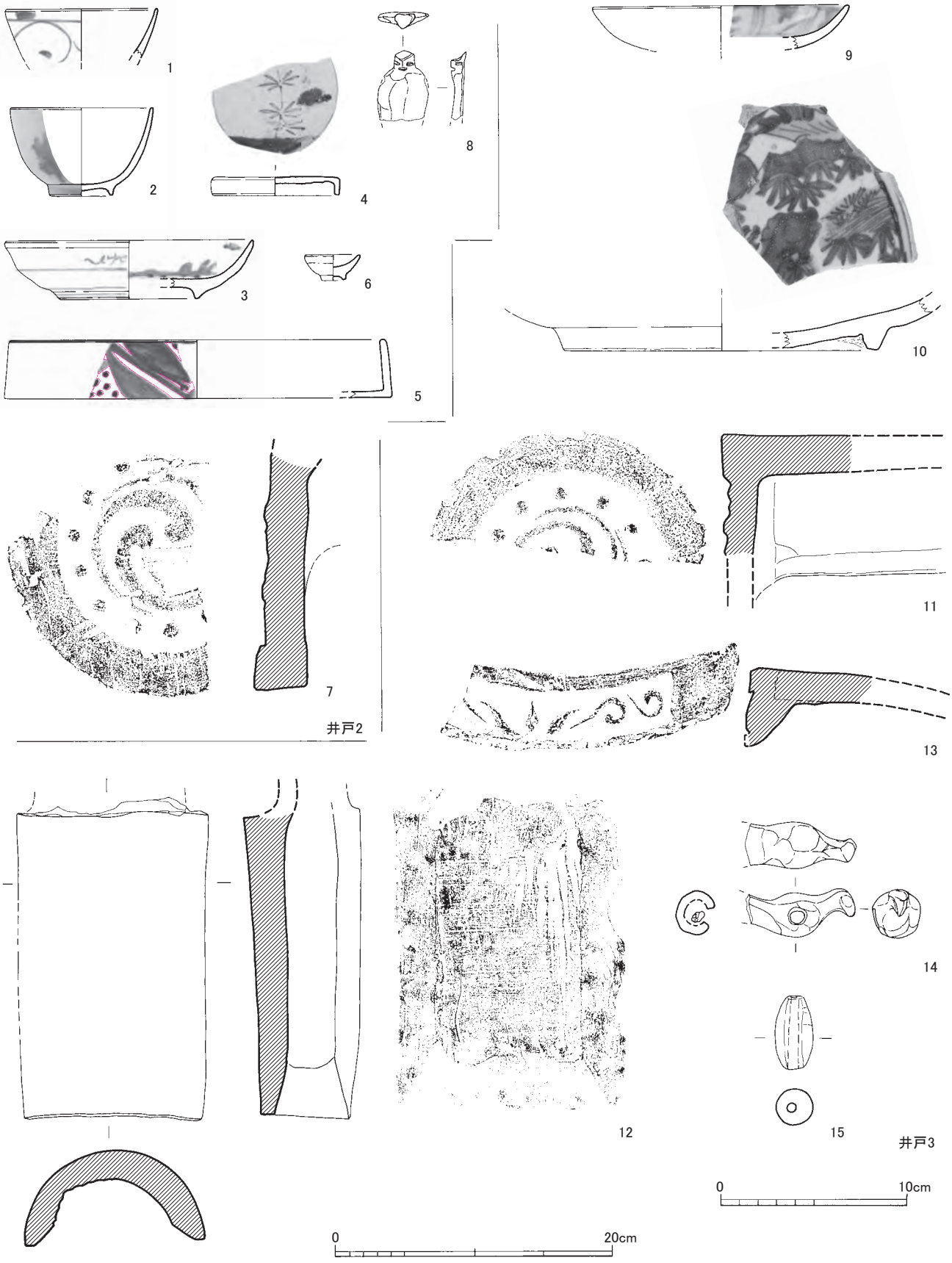
第 36 図　1 次調査1号大土坑出土土器・陶磁器実測図（1/3）



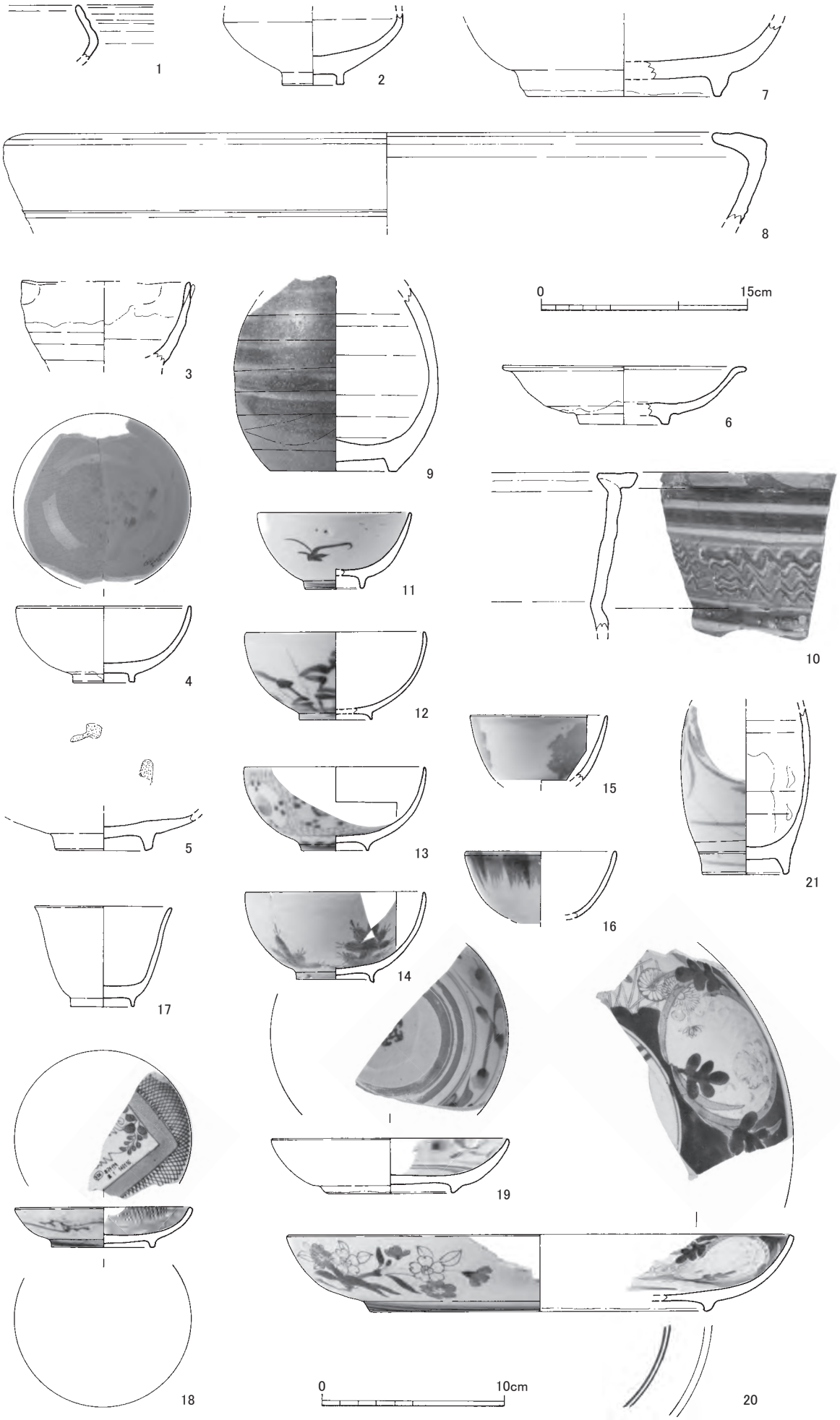
第 37 図　1 次調査1号大土坑出土瓦実測図（6・7 は 1/3、他は 1/4）



第 38 図　1 次調査 2 号井戸出土土器・陶磁器・瓦実測図（4・6は 1/4、15 は 1/8、他は 1/3）



第 39 図　1 次調査 2・3 号井戸出土土器・陶磁器・瓦実測図（12 は 1/4、他は 1/3）



第 40 図　1 次調査1号溝状遺構出土土器・陶磁器・瓦実測図（8は 1/4、他は 1/3）

染付瓶片のみなので時期を特定しにくいが、文様から 19 世紀前半に属するか。
出土遺物（第 31 図）
　４は染付の小型の仏花瓶である。

60 号土坑（図版７、第 32 図）
　渡り廊下部分から検出された略楕円形プランの土坑で、長軸 84cm、短軸 69cm、深さ 15cmと小規模である。５号大溝遺構の床面から検出されたが、切り合い関係はわからなかった。出土瓦が桟瓦なので切っている可能性が高い。時期を特定にしくいが 19 世紀代か。
出土遺物（第 31 図）
　第 31 図５は右平桟平瓦で、菊文を主文としている。

1 号大土坑（巻頭図版３・図版８、第 33 図）
　北西端から検出された隅円方形プランと見られる土坑である。浄化槽南西側に切られてＬ字形に湾曲するプランの南・東壁が 2 条検出され、これを 23・24 号溝状遺構としたが、掘り下げていくと西端に壁が出てきたことから、溝ではなく土坑だとわかったため、大型隅丸方形プランの大土坑とした。また、22 号溝状遺構としていた南北方向の溝も大土坑の緩やかな壁の立ち上がりの一部とわかったことから、これも本遺構に統合した。非常に深く、浄化槽裏込めと接している部分の壁が崩落する危険性があることから、中位までは重機で掘削した。土層観察から ab は別遺構とわかり、床面にも別遺構の西壁が見られたので 1a・1b 号と変更した。浄化槽裏込めが山砂であったため降雨後壁が崩落し、土層の図面写真記録はとれなかった。

1a 号大土坑（巻頭図版３・図版８、第 33 図）
　1b 号に切られ、西側にわずかに残る遺構で、南西隅だけが確認できたのみなので、規模はわからない。深さは 105cmだが、遺構の最深部ではない。南西隅に導水施設が確認された。

1b 号大土坑（巻頭図版３、第 33 図）
　東西を主軸方向とする大型土坑で、長軸約 12m、短軸 9.6m ほどの隅円方形プランで、深さ 135 cmだが、最深部ではない。壁の立ち上がりは緩やかで、特に東側は浅いことから端部にあたるものと考えられる。検出範囲内に杭と板による土留めは見られなかった。床面から鳥の骨 1 体分出土しており、鑑定の結果イヌワシ（図版８）だった。陶器・磁器の碗から 18 世紀前葉に属する。
出土遺物（図版 30・45・47・52、第 35 ～ 37・128・134 図）
　第 35 図 14 は染付の仏花瓶で、外底に透明度の高い透明度の高い灰釉が掛かっているように見えるが、黄灰釉の上澄みが流れたものと考えられる。第 35 図 17 は半胴甕で、内底に異なる器種の砂目跡が付着している。第 36 図５・６は透明釉がかかる無文の磁器である。７は大きく歪んだ不良品だが、片口のように使ったかもしれない。21 は観音像の土人形で、背面のハケ状のものは型の木目跡か。このほか、掲載していないが木製品では漆椀・折敷・曲げ物の側板片などがある。金属製品では５×３cm ほどの真鍮の板片が出土しているが、厚さ 0.8㎜ほどなのに非常に固く錆がない。また、スッポンの甲羅片が出土している。

その他の遺構

その他の遺構として、井戸３基、埋甕遺構１基、土壙墓１基、骨集中部を報告する。

１号井戸（第 32 図）

中央東端の東壁からわずかに検出された。基礎の下面だったので、他の検出面より下面から検出されている。遺構の西壁の一部のみのため径は不明だが、弧から径 140cmに復元できる。壁が直立し、90cm掘り下げても底がでなかったことから井戸と判断した。出土遺物がないので時期を特定できない。

２号井戸（図版５・８、第 32 図）

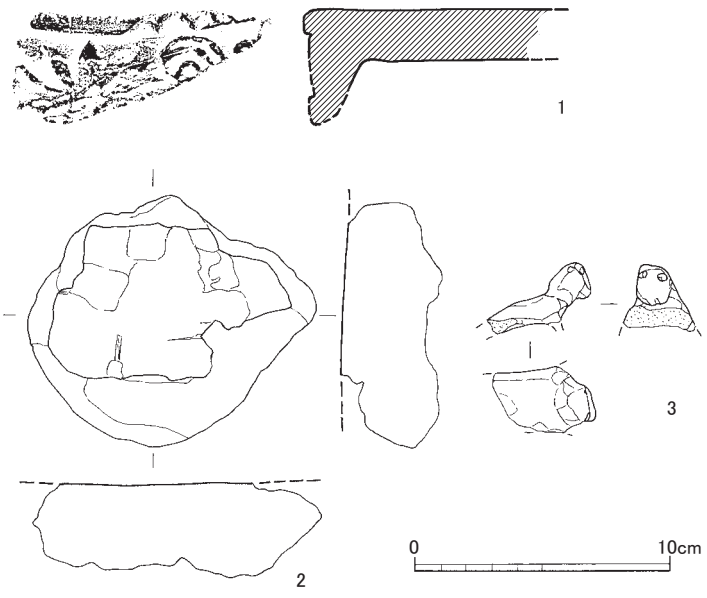
東部中央から検出された土師質土器の井戸枠をもつ井戸で、中学校礎石に隣接している。内法径 62cm、掘り方は径 98cmであった。21 号溝状遺構を切る。井戸枠の最上位は下端だけが残る程度だったが、その下の個体は残りが良かった。東西端の掘り方を基礎に切られているため、掘り方を大きく掘り崩すことができず、３つめの個体は上半分しか取り上げられなかった。また、裏込めには板材が入っていた。検出面から 166cmまで掘り下げて床面が出たが軟弱で強粘土であるため人力による掘り下げは危険と判断し、重機で半裁してみたところ、さらに２つの井戸枠が入っていた。下位については略測であるが、観察したところ床面には取水施設がなかった。埋土は木質の腐食した茶灰粘土が多かったが、木製品は出土せず、井戸封じの竹もなかった。磁器碗から 18 世紀前葉に属するが、本遺構を切っている 21 号溝状遺構に属するものが入り込んだかもしれないので、それより新しいだろう。

出土遺物（図版 30・47、第 38・39 図）

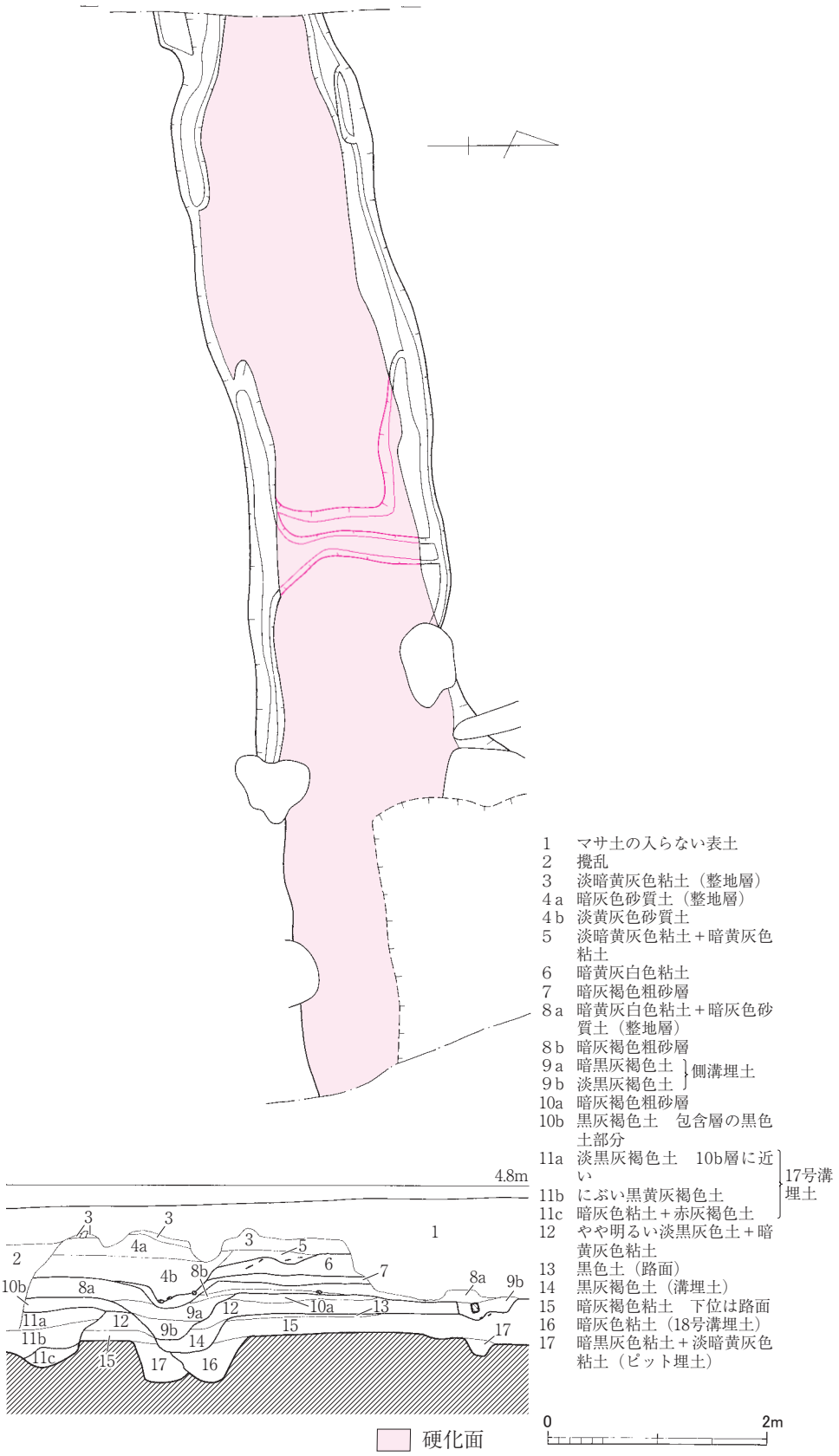
第 38 図５は土師質土器の井戸枠で、上下に同じサイズの別個体がつながるが、繋ぎ目の漆喰は付着していない。

３号井戸（図版８、第 32 図）

北西端に検出された略楕円形プランの井戸で、壁が直に立ち上がることから井戸とした。ピット 41 を掘削していたが、床面が出ず、ピットにしては深いことから、周囲を精査したところ、本遺構が検出された。ピット 14 は本遺構の埋土中央部分だった可能性が高い。中位に貝殻層があり、漆椀片など木質も残っていた。井戸としたが、井戸枠はなく、それほど深くなかったことから井戸ではない可能性もある。南側に突出部があり、裏込めのような異なる埋土だったが、遺物が境界に位置していたことから切り合う別遺構ではないとわかった。長軸 212cm、短軸 162cm、深さ 158cmを測る。時期を特定しにくいが、磁



第 41 図　１次調査１号溝状遺構出土土器・瓦実測図（1/3）



第 42 図　1 次調査 1・17・18 号溝状遺構、道路状遺構土層断面図（1/60）

器皿から 18 世紀代に属する可能性が高い。
出土遺物（図版 47・48・52・54、第 39・130・132・133・135・136・139・141 図）
第 39 図 14 は土人形の鳥で、体部側面に径 1.5cmの円形窓がある。焼成のために中空にしたにしては孔が大きく、棒や指を挿入するには横位置が不自然なので、機能がわからない。第 130 図２の盤は黒漆塗りで退色した彩文の草葉文が残る。このほか掲載していないが、黒漆椀が出土している。第 132 図１の完形の挿し歯下駄は頑丈な作りである。このほか不掲載ながら、黒漆塗りの木製品で、盤か大型杯の高台片がある。

１号墓（図版８、第 32 図）
東端で検出された土壙墓で、２号溝状遺構に中央部を切られる。隅丸方形プランで、N - 83° - Wを主軸とし、長軸 85cm、短軸 54cm、深さは約 28cmと規模が小さい。壁が直立せず、木質の痕跡もないので直葬である。骨が床面形状に合わせて湾曲していることからもそのことがわかる。出土骨の鑑定によりイヌの墓とわかった。体長 50cmほどの中型犬が頭を西に、北を向いて横臥状態で埋葬されているが、全体に腐食していたが頭部はなかった。

骨集中部（巻頭図版３・図版８、付図）
検出面とほぼ同レベルで骨の集中があったことから、精査しつつ骨の検出を行ったところ、墓壙は検出できなかったが、４つの骨の群が確認された。北東部にはイヌ１体分がほぼ完全な形で出土し、その西に隣接して小片の集中部（取り上げ番号:鳥１）があり、その北西に取り上げ番号「鳥３」、南西に「鳥２」、イヌの東に「鳥４」があり、鳥１～３の南側に個体を特定できない骨集中部があった。
「鳥 1」は小骨のみだったので分析に出さなかったが、「鳥２」はネコ可能性がある１個体、「鳥３」はネコ２個体分あった。「鳥４」はニワトリで、南側集中部はネコとイヌが複数個体分だった。これらは墓壙を伴わなかったので、遺構としては図化していないが、浅い墓壙があったのだろう。ピット 21 も近接しており、ネコ骨が出土している。

埋甕遺構（図版８、第 32 図）
北西端から検出された埋甕で、掘り方は長軸 45cm、短軸 42cmを測る。検出段階では底が丸く抜けていたが、埋土内に底部片が入っていたため、意図的に底面を円形に打ち掻いたものを入れたのではなく、機能を失った際に底を打ち割ったのかもしれない。床面までは 40cmほどの深さだった。
出土遺物（図版 33、第 69 図）
瓦質土器の火鉢でカルキの付着はない。

方形周溝遺構（図版９、第 43 図）
南西端で検出された隅円方形に巡る溝状遺構で、25 号溝状遺構に切られる。外法で 196cm、内法で 122cmで、深さ 13cmしかない。床面の深さはほぼ均一で、埋土にも特に特徴がない。鉄小釘片が２点出土しているが、時期を特定できる出土遺物がなく時期不明。

道路状遺構（図版９・11、第 42 図）

北東端から検出された路面で、東西方向に走り、整地面の上に砕石を敷いていた。東西とも調査区外に延びる。調査区壁の土層から見ると検出面の上位にも路面があったが、明治中期と後期の面に対応するものであった。検出面は江戸後期から幕末の面で、側溝と見られる浅い落ちには砂質の多い埋土が入るので、砂を敷いていた可能性がある。

道路面の南北には浅い不整形な側溝があり、東端は路面だけが残っていた。路面の検出段階で確認した側溝は土層観察の結果、上位の路面に対応する側溝であり、その下から検出された溝が路面に対応する側溝だった。側溝間の幅は約 120㎝だった。中央部の整地面下には道路を横断するように溝状の窪みがあるが、意図したものかわからない。この検出整地面の下の面には路面は存在しなかったが、18 号溝状遺構を南側溝、19 号溝状遺構を北側溝とする道路面が存在した可能性がある。

これと別に、南北方向に走る道路が存在した可能性がある。調査区中央東部の４・５号溝状遺構を側溝とする範囲で、調査区北壁にも前述の道路状遺構に対応する路面が残っていた。土層の対応関係から、4b 号溝状遺構は上位検出面の道路面に、4a 号遺構は下位の路面に対応する。基礎が広がる部分だったため平面的には確認できなかったので、土層図のみ掲載する。

溝状遺構

７号溝状遺構は攪乱溝だったので報告しない。22･24 号溝は１号大土坑となったので欠番とする。結果 32 条が検出された。

１号溝状遺構（図版 10、第 42・43 図）

東部から検出されたＬ字状に走る溝で、黒色土を埋土とするので明瞭に検出できた。東西方向に走る部分は 17 号溝状遺構を切り、屈曲部で跨ぐように交差する。南北方向に走る部分では南部で 20 号溝状遺構と 18 号土坑を切る。幅は 120㎝、深さ 45㎝で、コーナー部分が深い。南北軸は 21 号溝状遺構と同一遺構の可能性が高い。17 世紀前半の大甕があるが、陶器皿は 17 世紀後葉、磁器碗は 18 世紀前葉なので、時期幅があるのだろう。掲載していないが、断面４㎜角の小釘片４点出土している。

出土遺物（図版 45・49、第 40・128 図・付図）

第 40 図９は陶器の瓶で、内面に赤橙色の物質が付着しているのでお歯黒壺だろう。このほかネコ骨が出土しているが、これは骨集中部から遊離したものだろう。

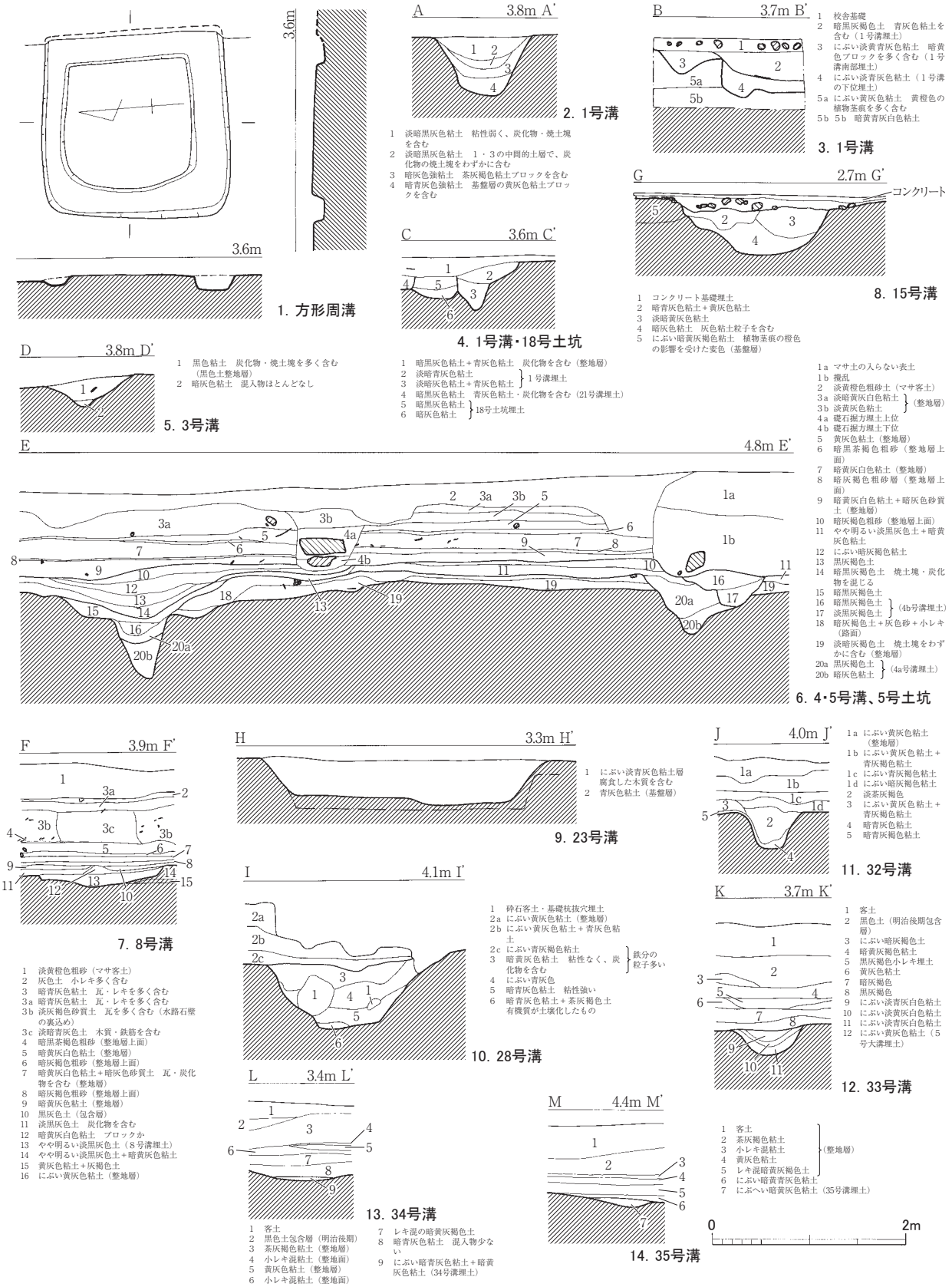
２号溝状遺構（図版 10、付図）

中央東端の石列布基礎の下に残っていた溝で東西方向に走る。西端で１号墓の上位を切る。東端は調査区外に延びる。幅 74㎝、深さ 40㎝で、床面は北に向かって下がっている。

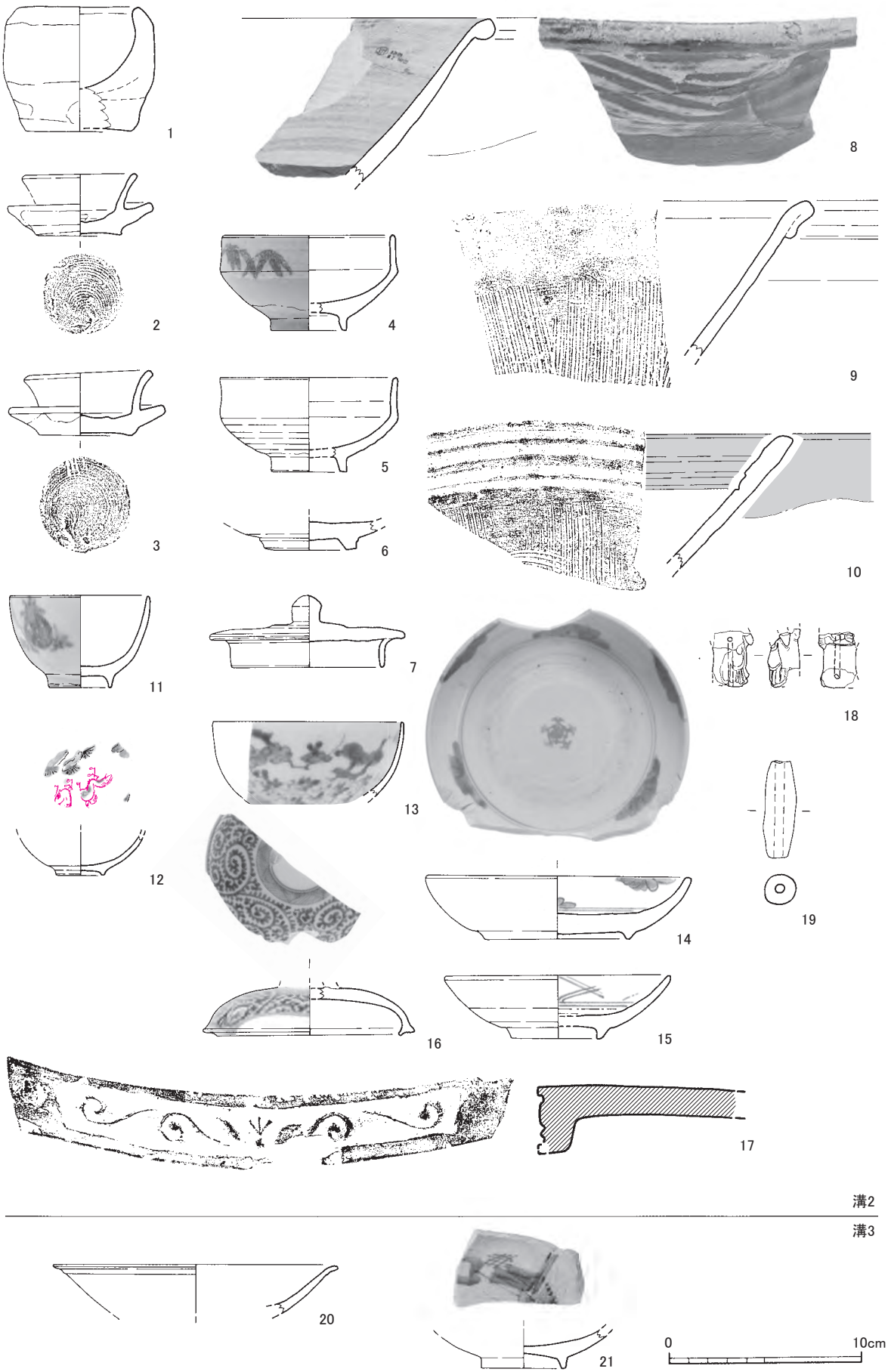
磁器から 18 世紀後葉に属する。

出土遺物（図版 30・45、第 44・128 図）

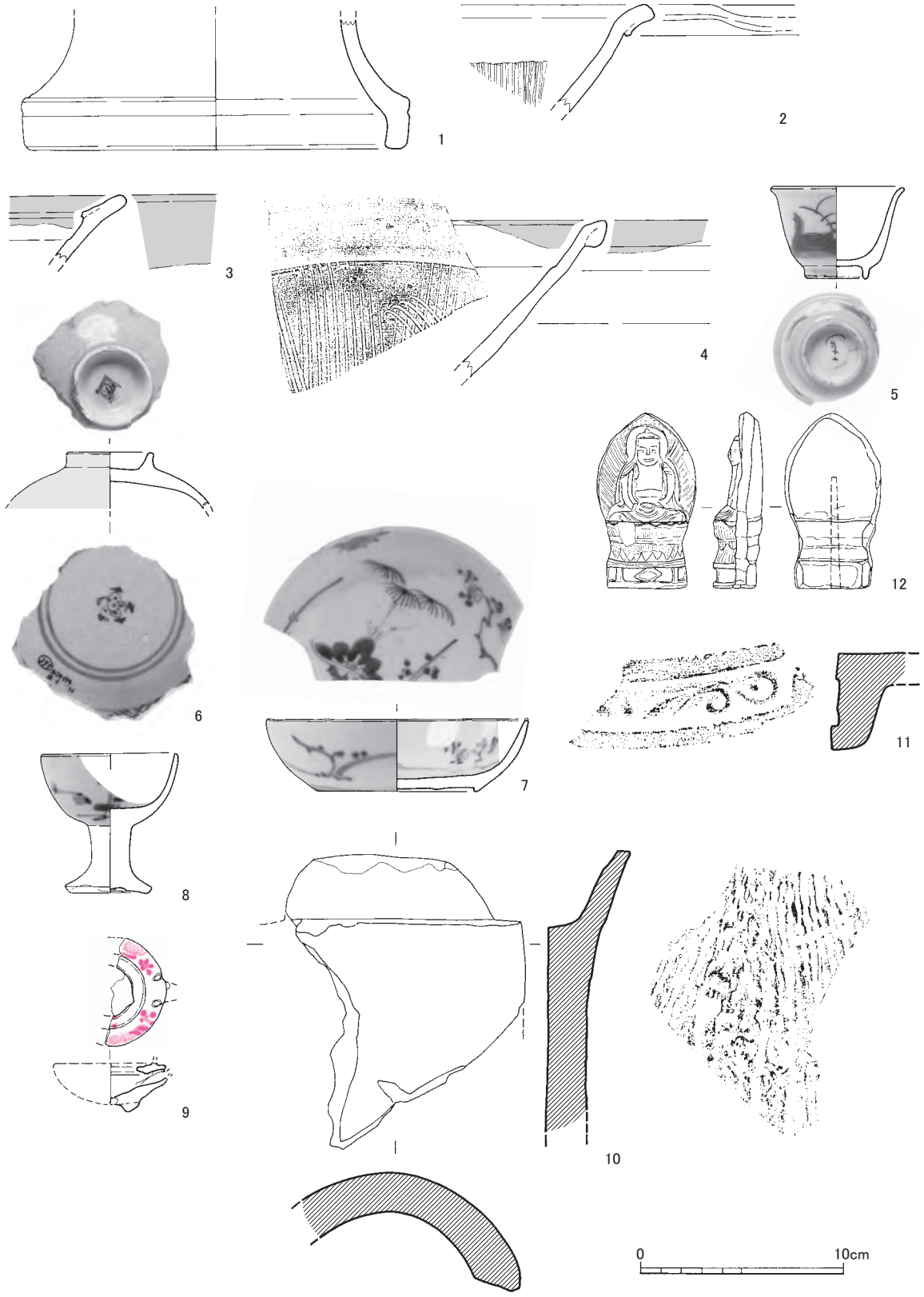
第 44 図 17 は軒平瓦で、三葉文は独特だが瓦当厚は他の三葉文軒平瓦と同じなので組み合わさる。



第 43 図　1 次調査方形周溝遺構・1・3 ～ 5・8・32 ～ 35 号溝状遺構、5・18 号土坑土層断面実測図（1/60）



第 44 図　1 次調査 2・3 号溝状遺構出土土器・陶磁器・瓦実測図（1/3）



第 45 図　1 次調査 4 号溝状遺構出土土器・陶磁器・瓦実測図（1/3）

3 号溝状遺構（図版 10、第 43 図、付図）

南東部から検出された東西方向に走る溝で、8・10 号土坑を切り、東端では壁に別遺構の埋土が見えたので、さらに調査区東壁沿いの別の遺構を切っている。1 号溝状遺構に切られ、20・21 号溝状遺構を切る。壁の立ち上がりは緩やかで、幅 80cm、深さ 35cmで、東に向かって下がっている。埋土中に炭化物と火を受けた土器の砕片らしいものが多く混ざる部分が 2 ヶ所あった。

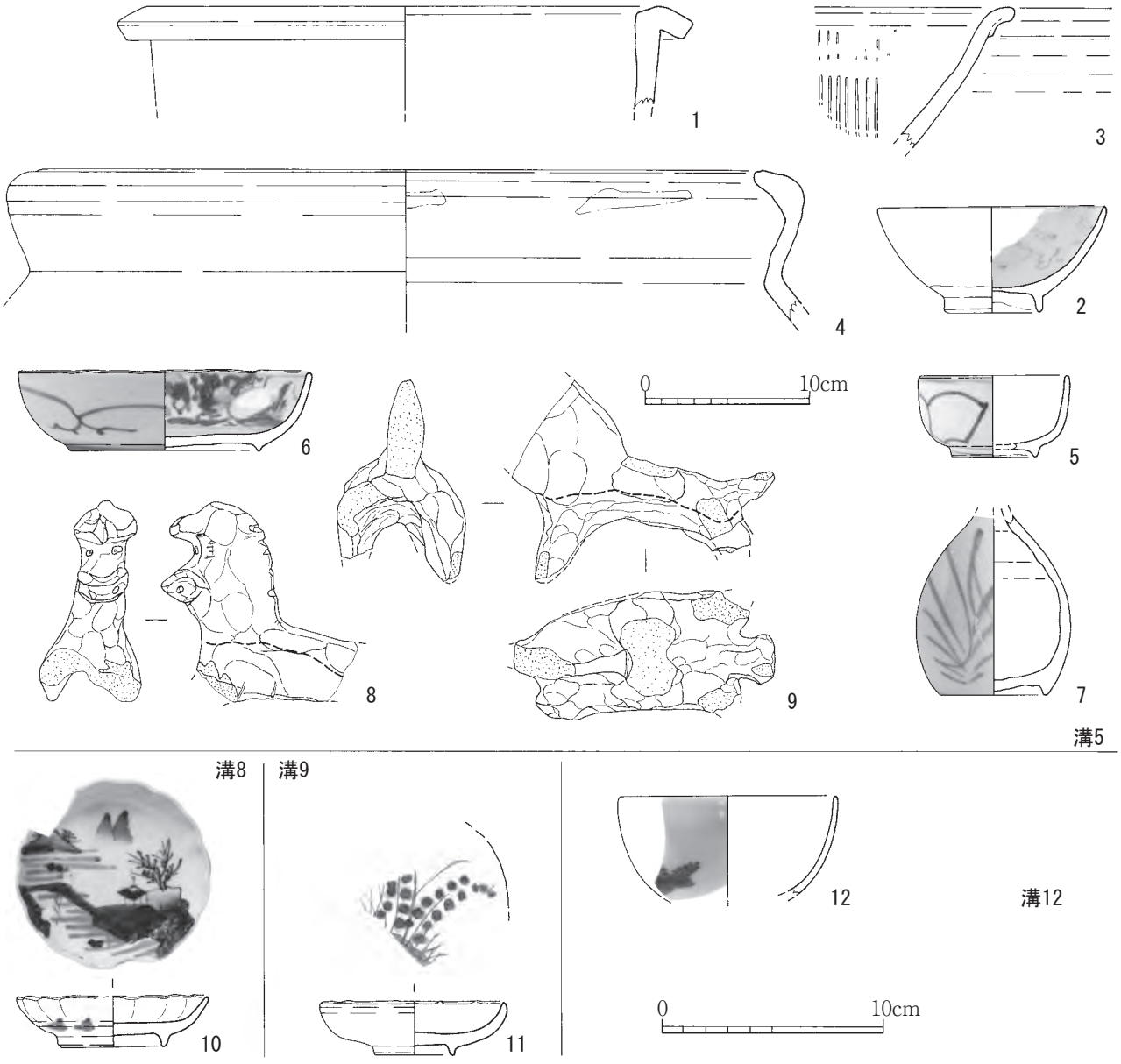
遺物が少なく、20 の溝縁皿や、21 の京焼風の陶器碗は 18 世紀前葉以前のものなので本遺構が切っている 10・16 号土坑に属するものだろう。本遺構はそれより新しいといえる。

出土遺物（図版 30、第 44 図）

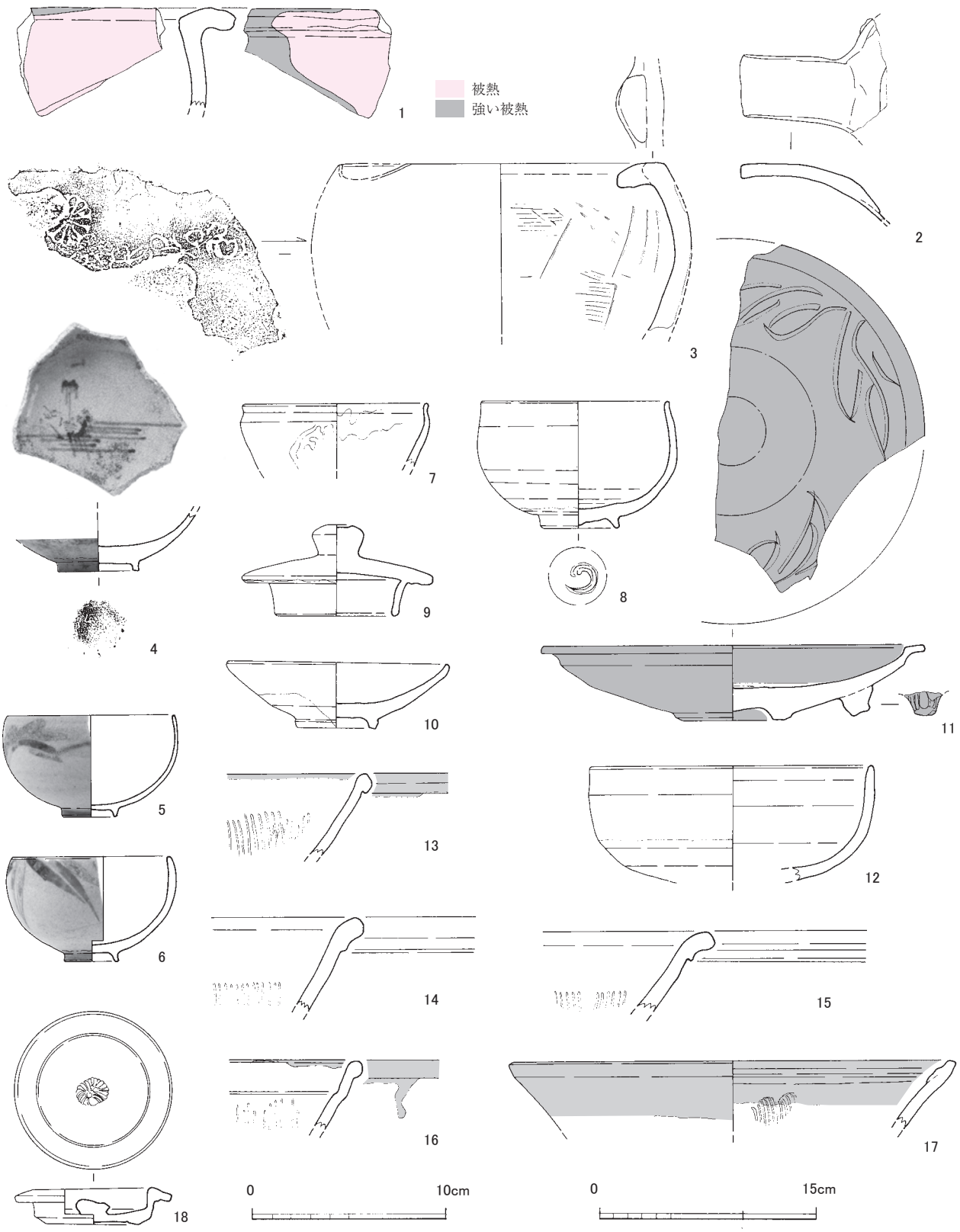
第 44 図 21 は京焼風陶器椀である。

4 号溝状遺構（図版 11、第 43 図、付図）

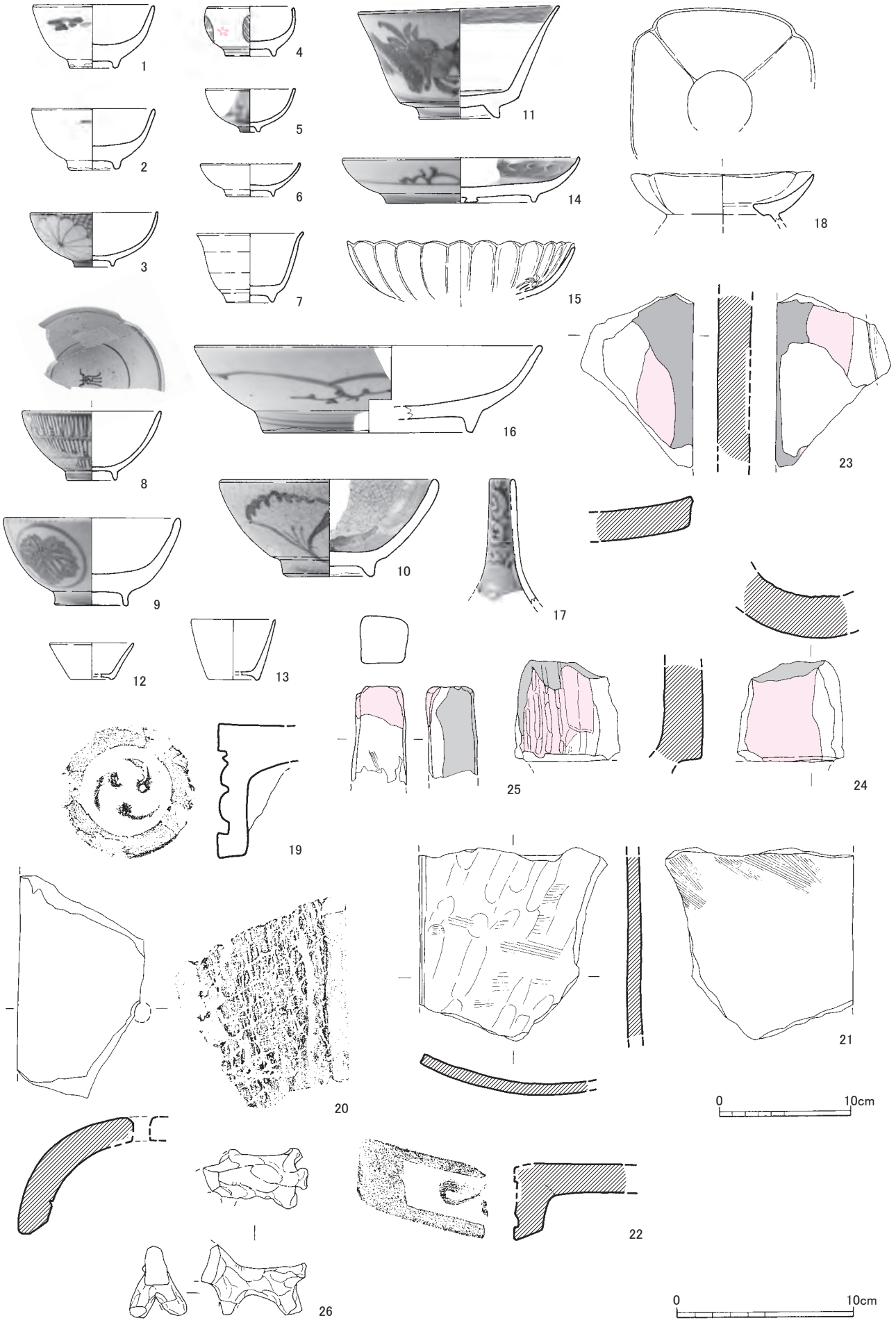
東部で検出された溝状遺構で、南北方向に走る。北は調査区外に延び、北側は底面の深さが明らかに異なることから、掘り直した 2 条の溝と捉え、西側を 4a 号、東側を 4b 号とした。土層から



第 46 図　1 次調査 5・8・9・12 号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図（4は 1/4、他は 1/3）



第 47 図　1 次調査 13 号溝状遺構出土土器・陶器実測図（17 は 1/4、他は 1/3）



第 48 図　1 次調査 13 号溝状遺構出土土器・陶磁器・瓦実測図（21 は 1/4、他は 1/3）

4b 号が 4a 号切っており、4a 号は幅約 125cm、深さ 60cm、4 b 号は幅 87cm、深さ 38cmで、掘り込み面も異なっている。両者とも、北に向かって下がっている。

4a・4b 号で遺物を分けて取り上げるのが遅かったため、図化できる遺物は一括資料しかない。道路状遺構の北側溝になる可能性が高い。磁器と摺鉢から 18 世紀第 2 四半期と考えられる。石炭塊が出土したが、砂状の崩落はないので焼いていない。ウメ核片も出土した。

出土遺物（図版 30、第 45 図）

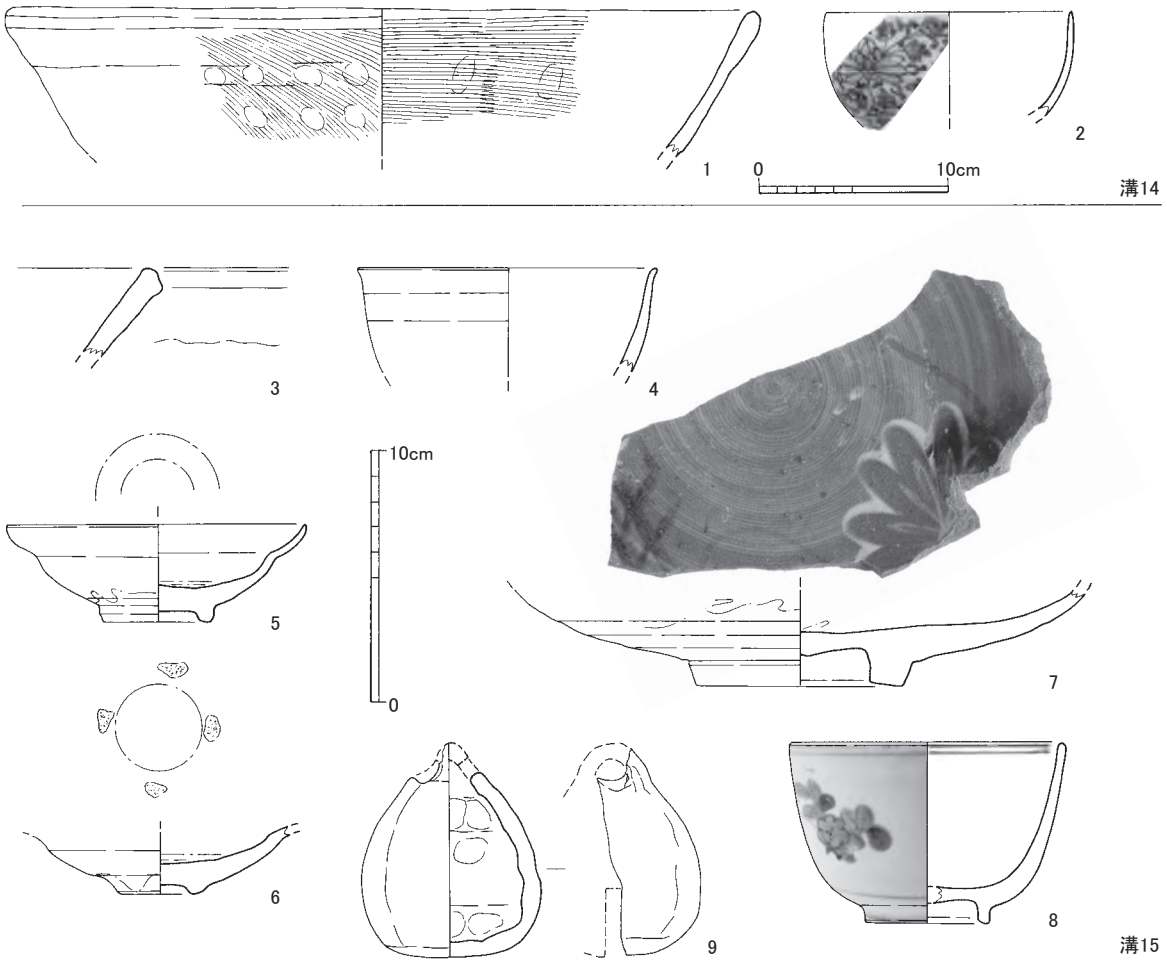
第 45 図 9 は油差しらしい陶器の瓶で、上面は段がつくので蓋がつく可能性があるが、蓋があるなら透明釉を釉剝ぎして重ね焼きしているはずなので蓋はないだろう。12 は 4b 号の床面直上から出土した土人形の観音像である。

５号溝状遺構（第 43 図）

北東部で検出された南北方向に走る溝で、断面 V 字形で深い。この断面形と深さから、校舎基礎で隔てられた南端部の位置を特定できた。幅は 108cm、深さ 70cmで、北に向かって下がっている。15 号溝状遺構と交差するが基礎のところで交わるため切り合い関係は不明。道路状遺構の南側溝になる可能性が高い。

磁器皿・摺鉢から見ると 18 世紀第 2 四半期だが、17 世紀後半の瓶と大甕は伝世品か。深い部分は木製品も残っていた。

出土遺物（図版 31、第 46・136 図）



第 49 図　1 次調査 14・15 号溝状遺構出土土器・陶磁器・瓦実測図（1は 1/4、他は 1/3）

第 46 図 7 は陶器の瓶で、内面に褐色の物質が付着しているのでお歯黒壺である。

6 号溝状遺構（図版 4 、付図）

中央北側から検出された南北方向に、南側が東に湾曲しながら走る小溝で、幅 30cm、深さ 8cmほどしかない。出土した磁器皿は溝上位から出土したため、包含層の可能性もあるが、これから見ると 19 世紀前半代。

8 号溝状遺構（第 43 図・付図）

中央北側から検出された南北方向に走る小溝で、幅 68cm、深さ 20cmで、南端は立ち上がっていたので、区画溝かもしれない。磁器皿は溝上位から出土したため、包含層の可能性もあるため掲載していないが、これから見ると 19 世紀前半代に属する。

出土遺物（第 46 図）

第 46 図 10 は型押し成型による輪花口縁の染付皿である。

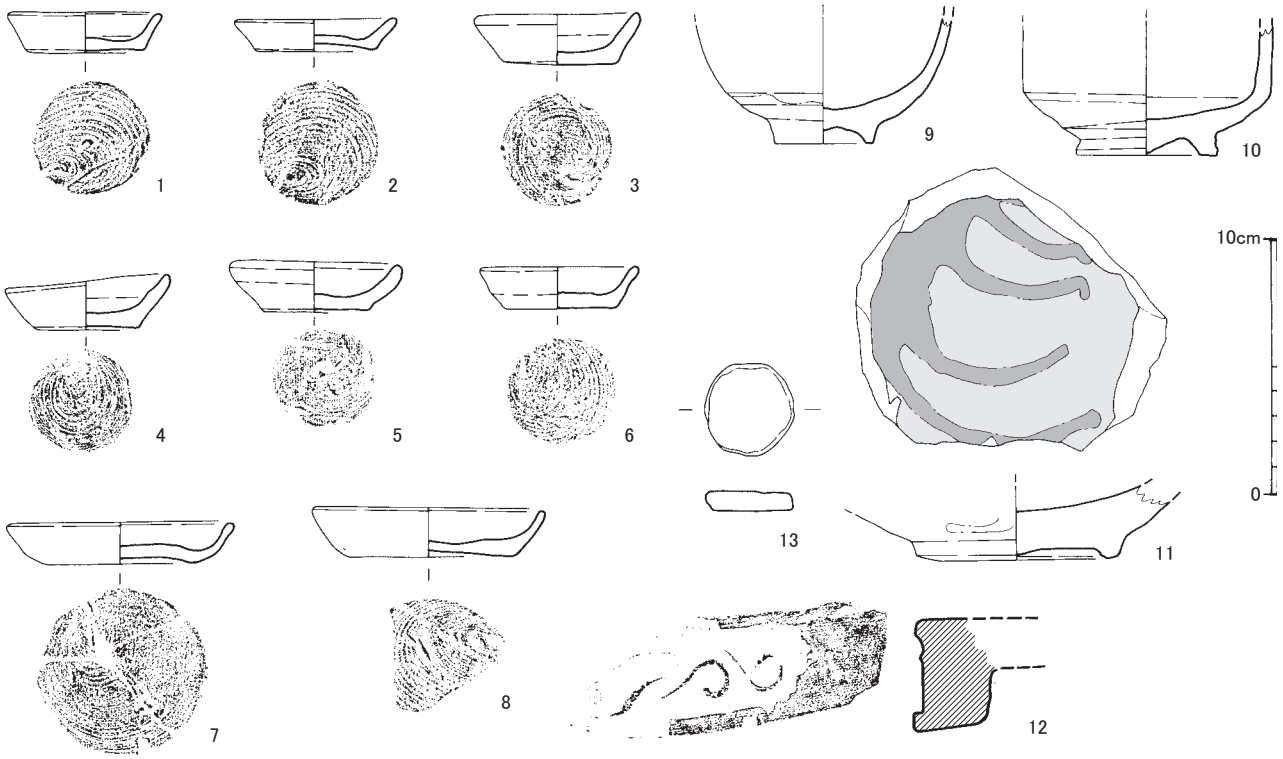
9 号溝状遺構（図版 11、付図）

中央部に位置し、東西方向から西端が北に湾曲する小規模な溝である。東西とも端部は基礎に入り、基礎の先は検出されない。幅は 36cm、深さ 8cmしかない浅い溝なので削られている可能性が高い。

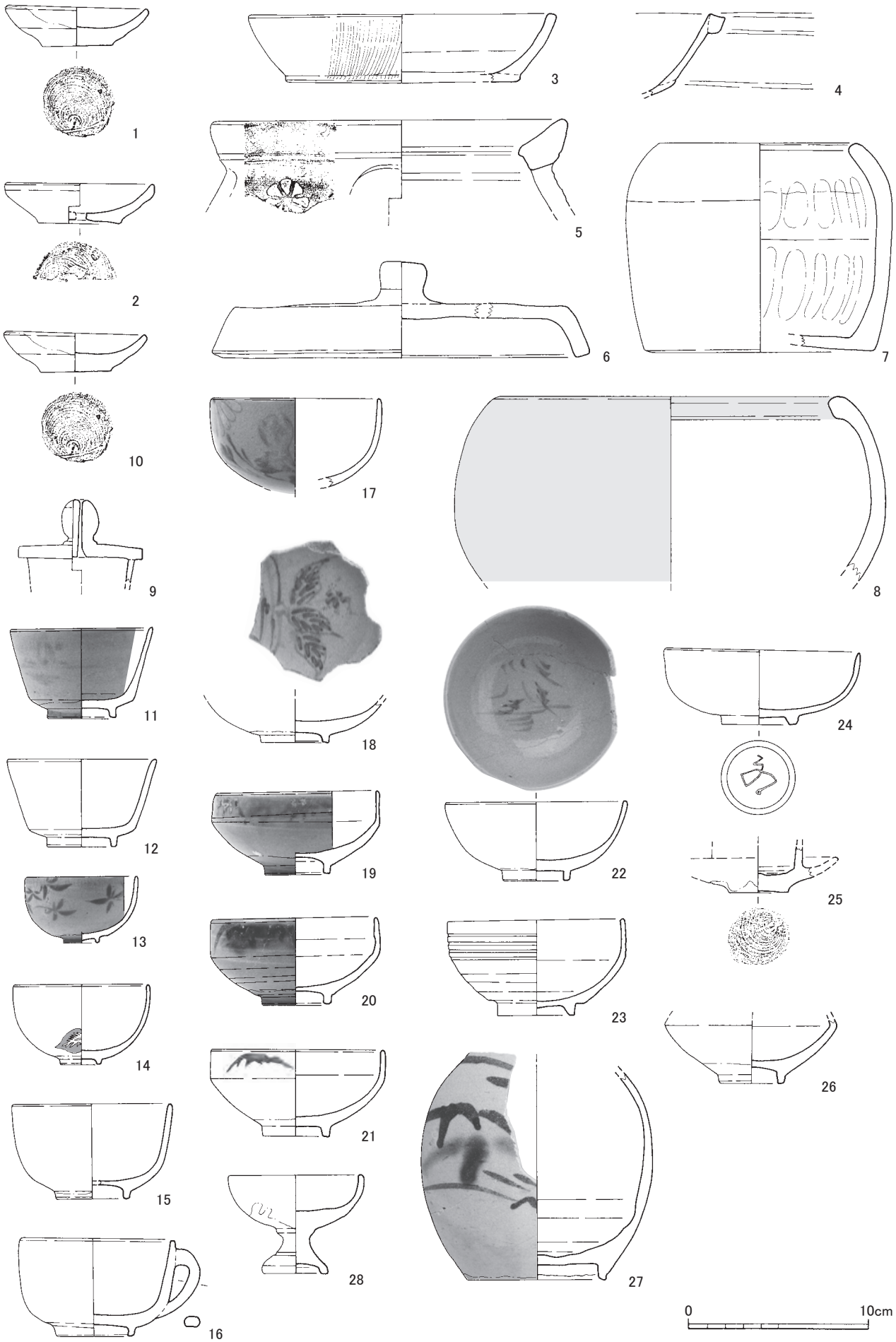
磁器皿から見ると 19 世紀中葉。

出土遺物（第 46 図）

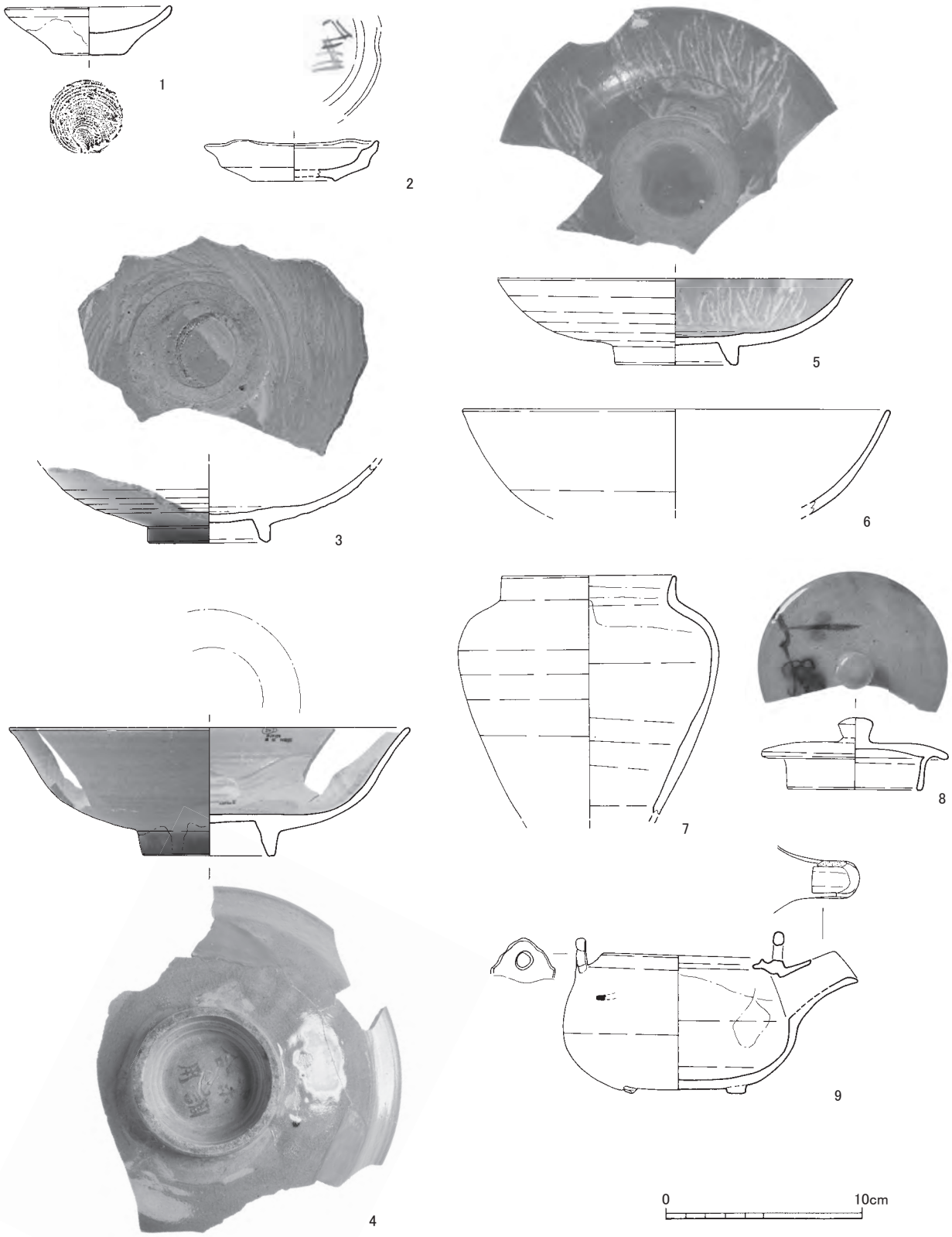
第 46 図 11 は型押し成型による輪花口縁の染付皿である。



第 50 図　1 次調査 15 号溝状遺構下位出土土器・陶器・瓦実測図（1/3）



第 51 図　1 次調査 16 号溝状遺構出土土器・陶器実測図（1/3）



第 52 図　1 次調査 16 号溝状遺構出土陶器実測図1（1/3）

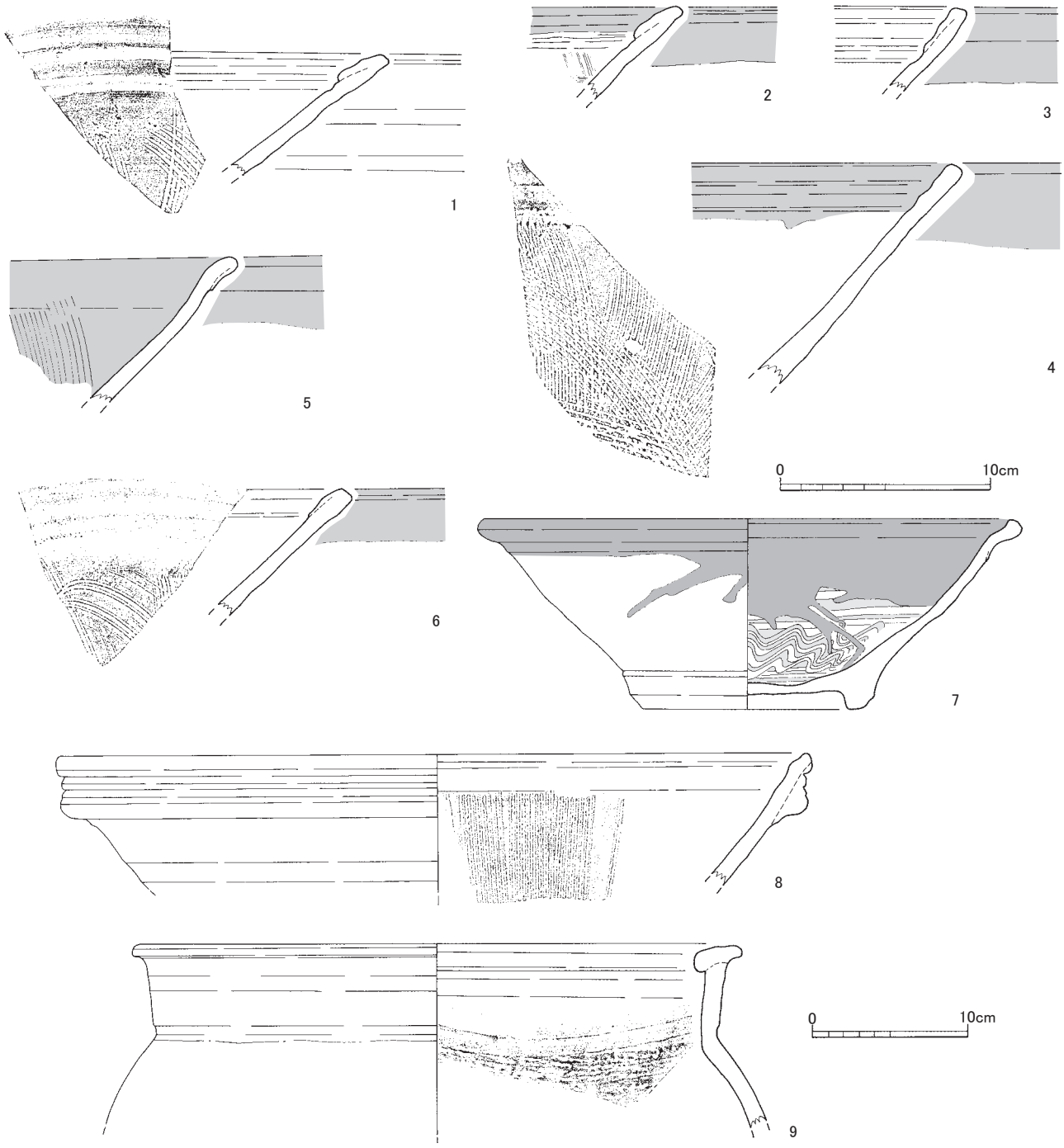
10 号溝状遺構（付図）

調査区中央から検出された東西方向に走る溝で、東西とも基礎に切られている。東側は基礎が長いので、基礎の先の状況はわからない。西側は基礎の西側からは検出されなかった。基礎の中で止まっているか、削られている可能性もある。幅 64cm、深さ 15cmで、北に L 字形に屈曲し、北東に位置する 10・11 号溝に繋がる可能性を残す。

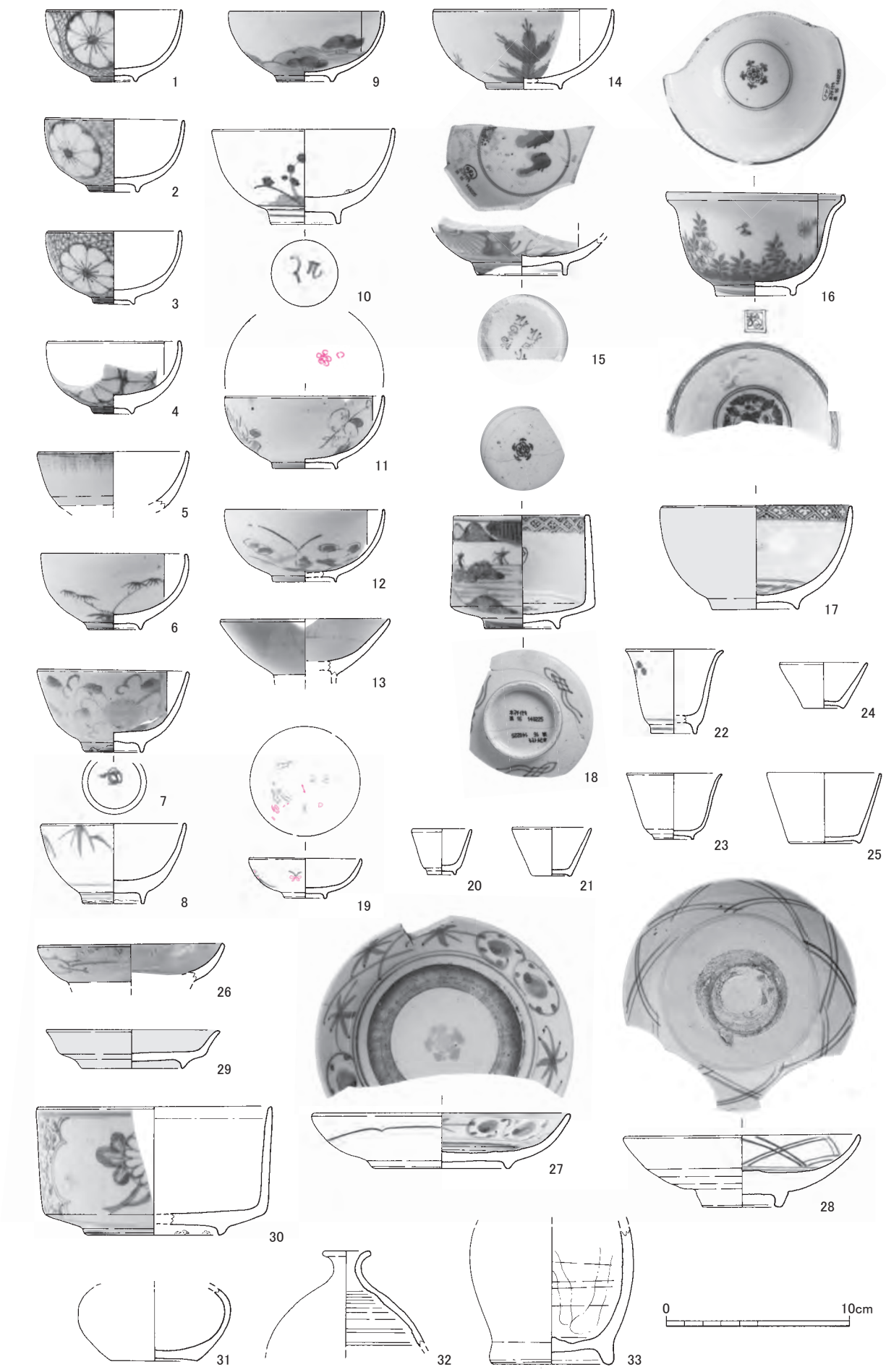
出土遺物がないため時期不明。

11 号溝状遺構（付図）

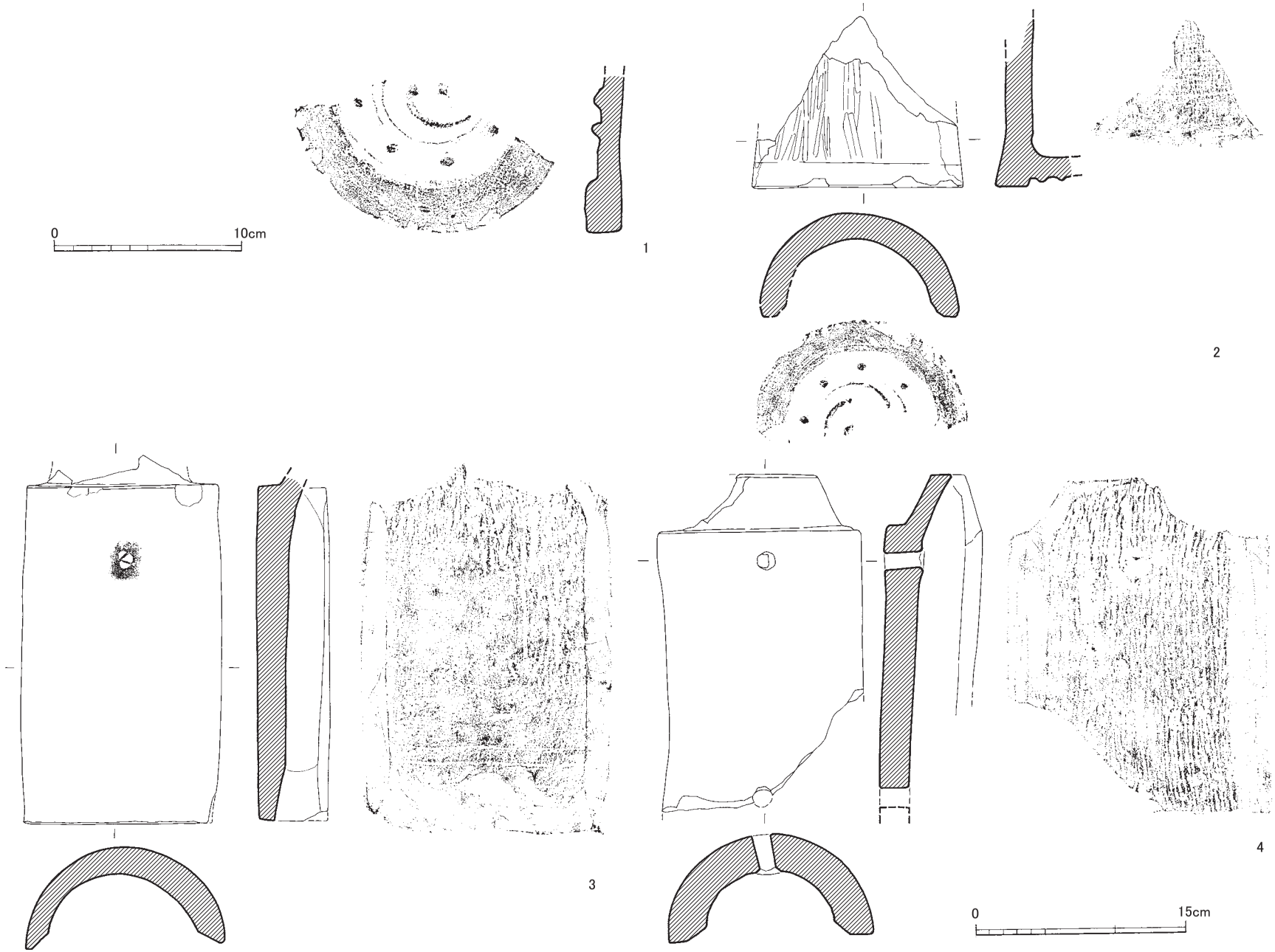
調査区中央から検出された東西方向に走る溝で、東西とも基礎に切られている。東側は基礎が長



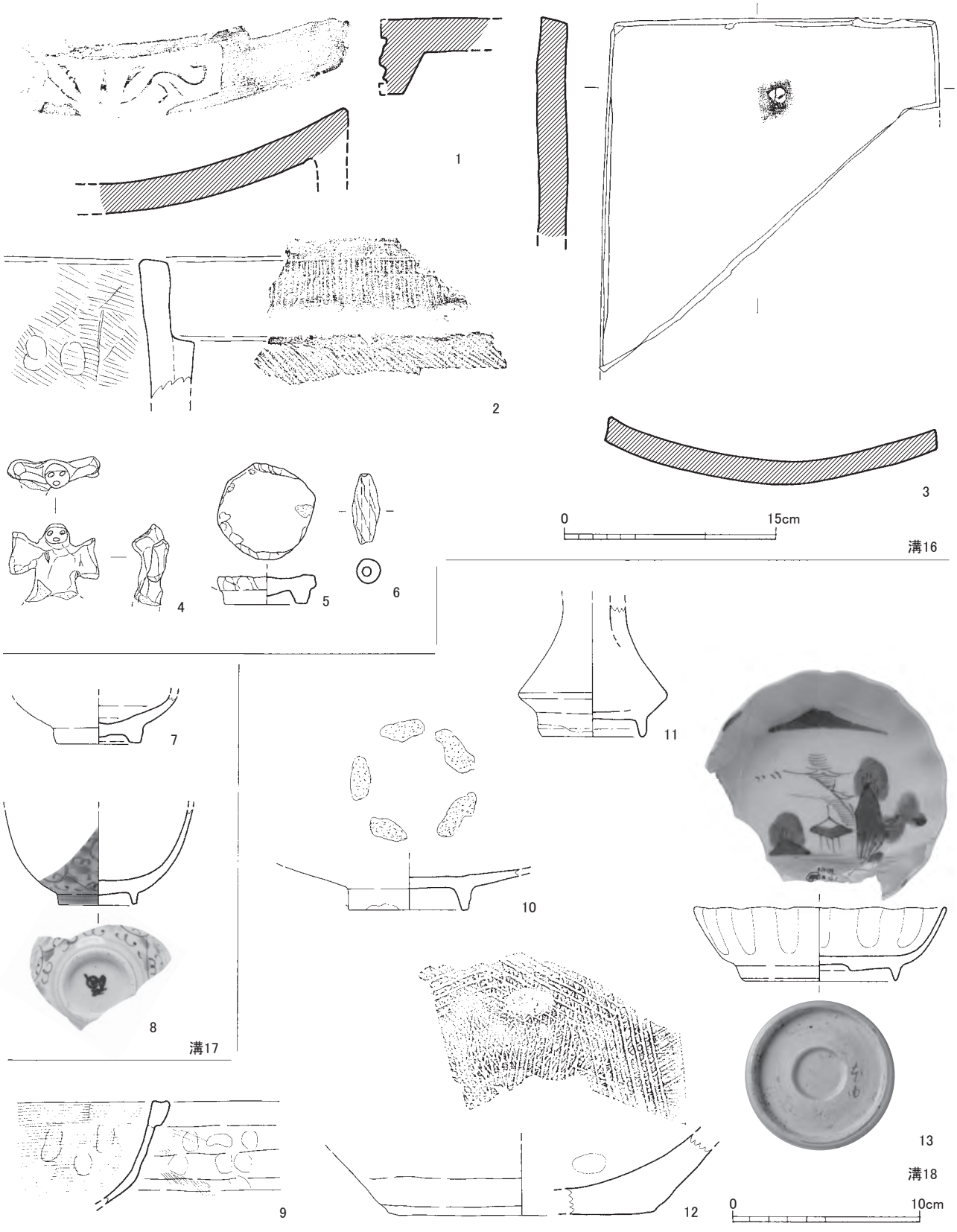
第 53 図　1 次調査 16 号溝状遺構出土陶器実測図2（7 ～ 9 は 1/4、他は 1/3）



第 54 図　1 次調査 16 号溝状遺構出土磁器実測図（1/3）



第 55 図　1 次調査 16 号溝状遺構出土瓦実測図（1は 1/3、他は 1/4）

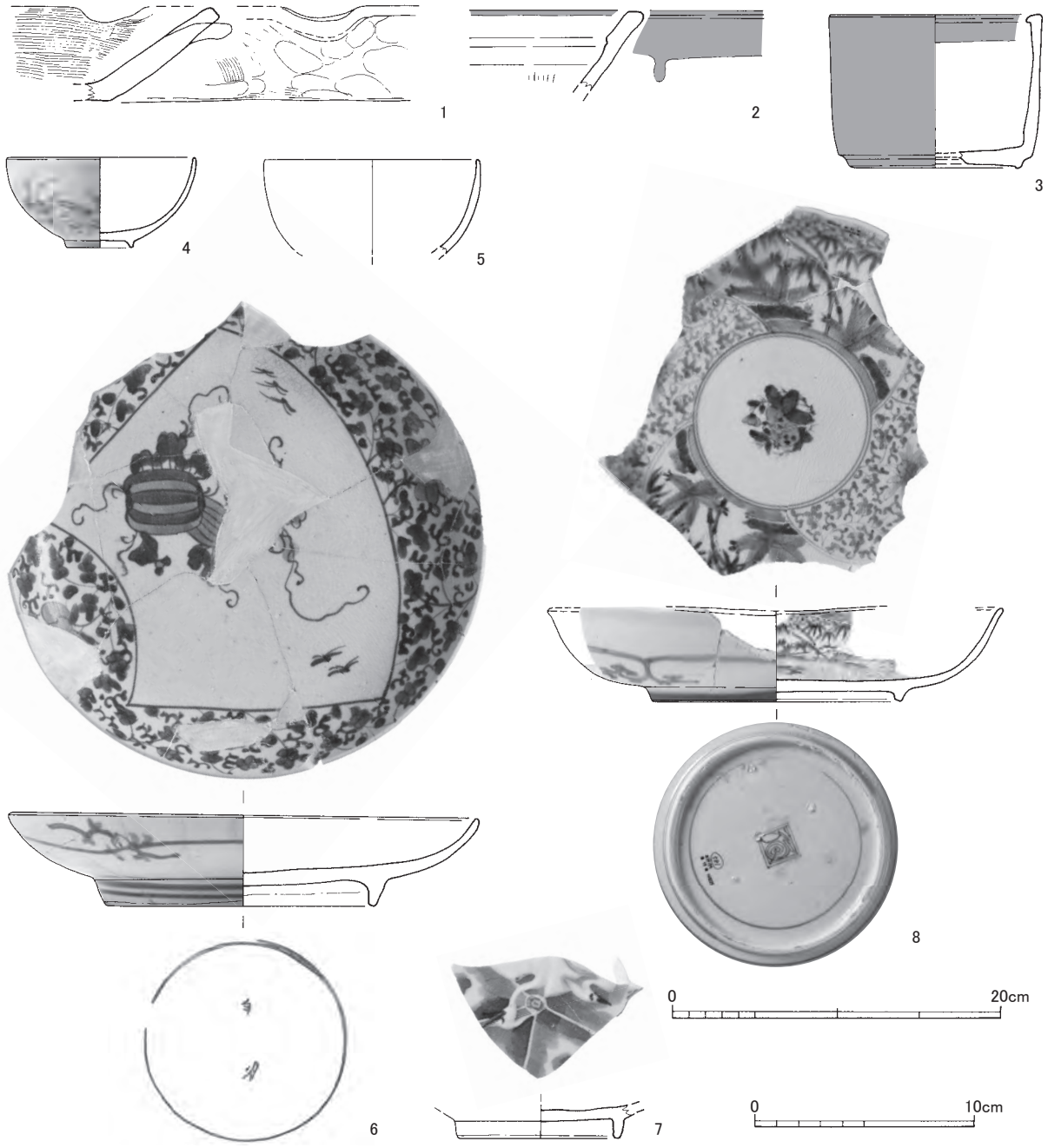


第 56 図　1 次調査 16 ～ 18 号溝状遺構出土土器・陶磁器・瓦実測図1（3は 1/4、他は 1/3）

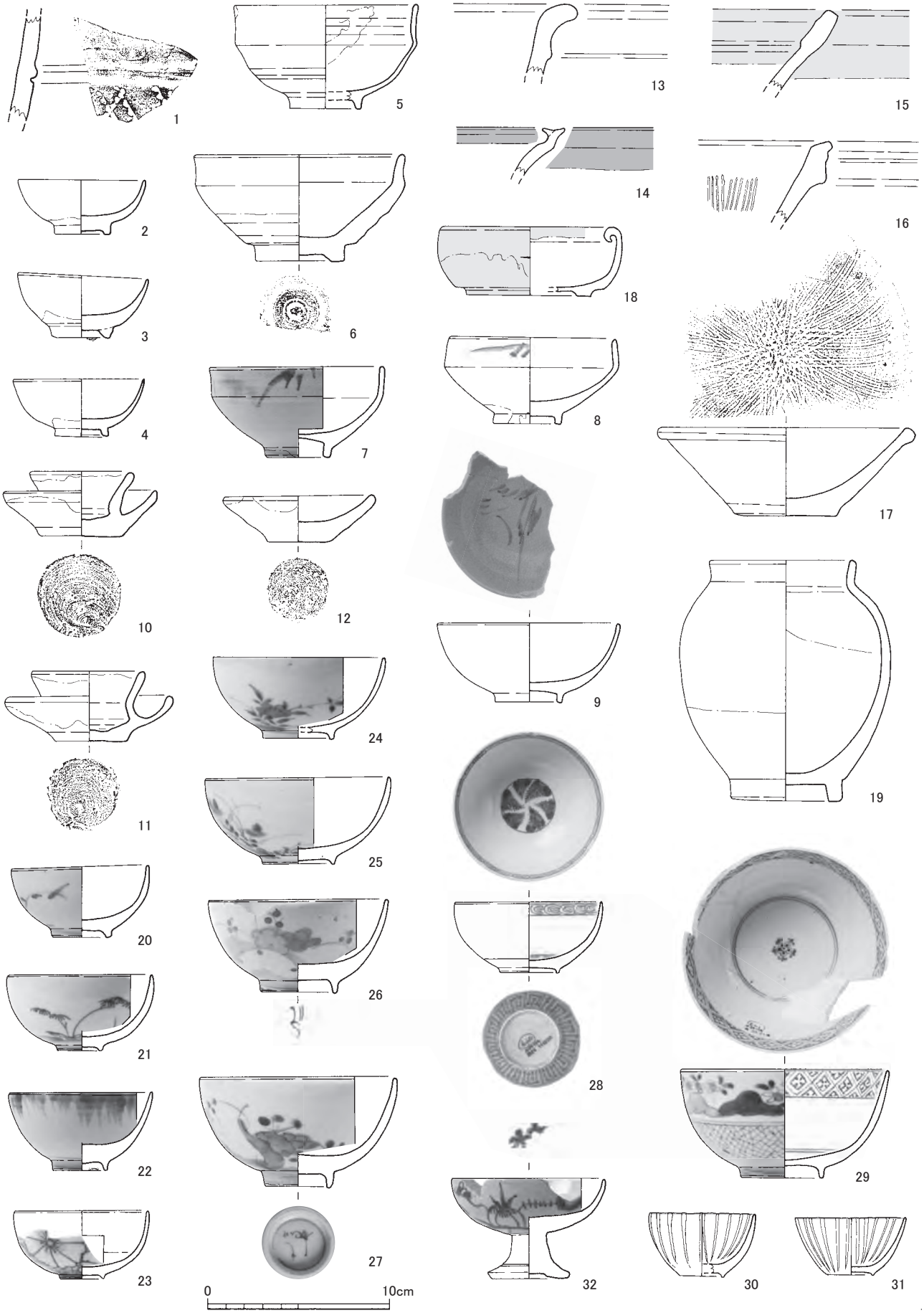
いので、基礎の先の状況はわからない。西側基礎の西側からは検出されなかった。基礎の中で止まっているが、削られている可能性もある。幅 48cm、深さ 9cmで、北に L 字形に屈曲し、北東に位置する 10・11 号溝に繋がる可能性を残す。出土遺物がないため時期不明。

12 号溝状遺構（図版 4 、付図）

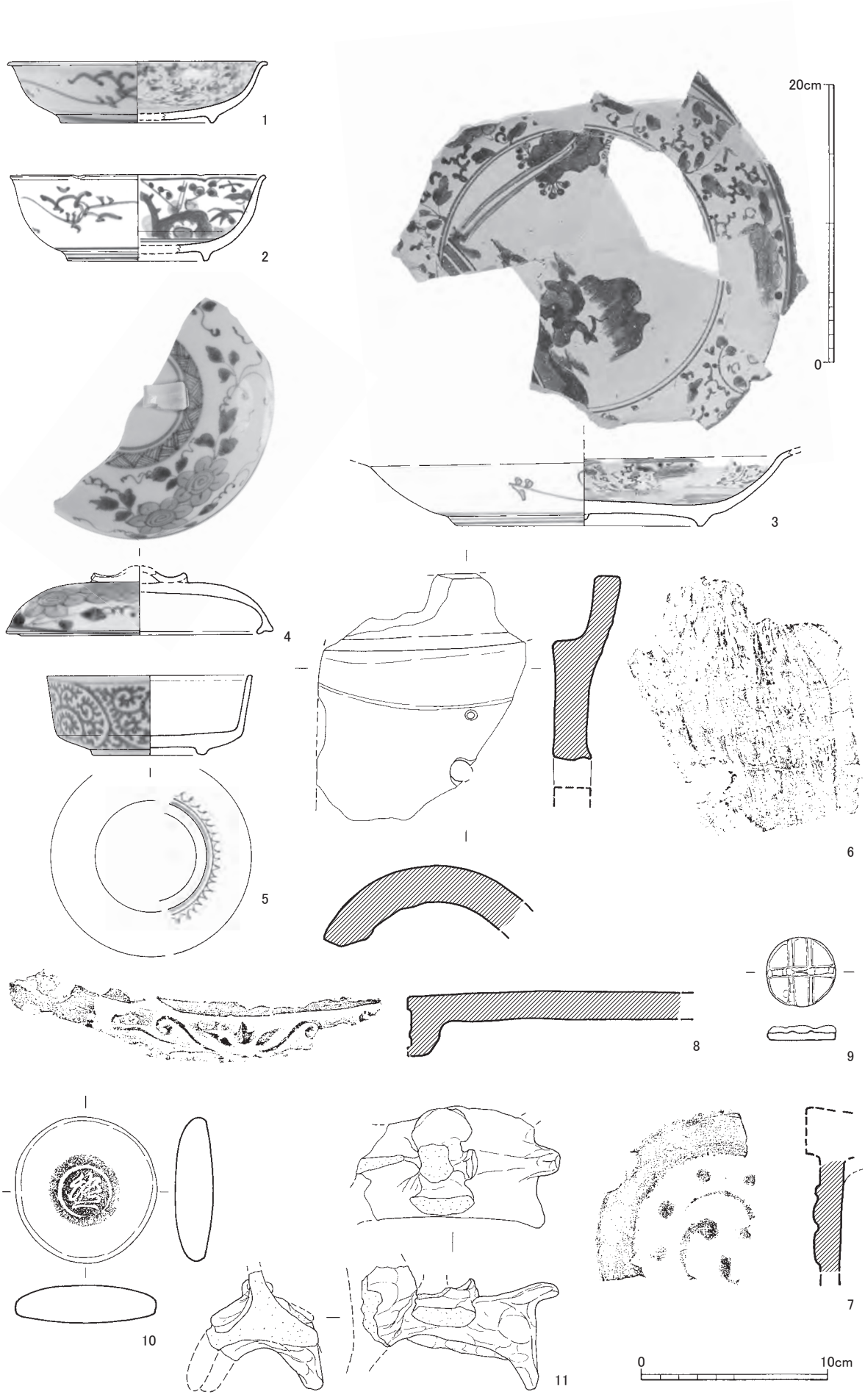
調査区北端から検出された東西方向に走る溝で、両肩が検出されていないので幅は不明。深さ 20 cmで、東西に突出部をもつ。この突出部は緩やかに立ち上がっていたので、別の浅い溝と交差しているとも考えられる。南側は基礎に切られ、基礎の南側からは検出されない。南に L 字形に屈曲し、南西に位置する 10・11 号溝に繋がる可能性を残す。11 号土坑を切っており、11 号土坑の上位は埋土が沈下したためか本溝状遺構の床面が窪んでおり、同じ埋土が被っていた。この黒色土には種子や魚骨など食糧残滓が含まれていた。磁器碗から見ると 18 世紀中葉に属する。



第 57 図　1 次調査 19 号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図（8は 1/4、他は 1/3）



第 58 図　1 次調査 20 号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図（1/3）



第 59 図　1 次調査 20 号溝状遺構出土土器・陶磁器・瓦実測図（3 は 1/4、他は 1/3）

出土遺物（図版　、第 46 図）

第 46 図 12 は染付碗で、コンニャク印版手による蔦文。獣骨の鑑定ではニホンジカの脚部とわかり、食用だった可能性がある。このほかベンガラと見られる赤色顔料塊が出土している。

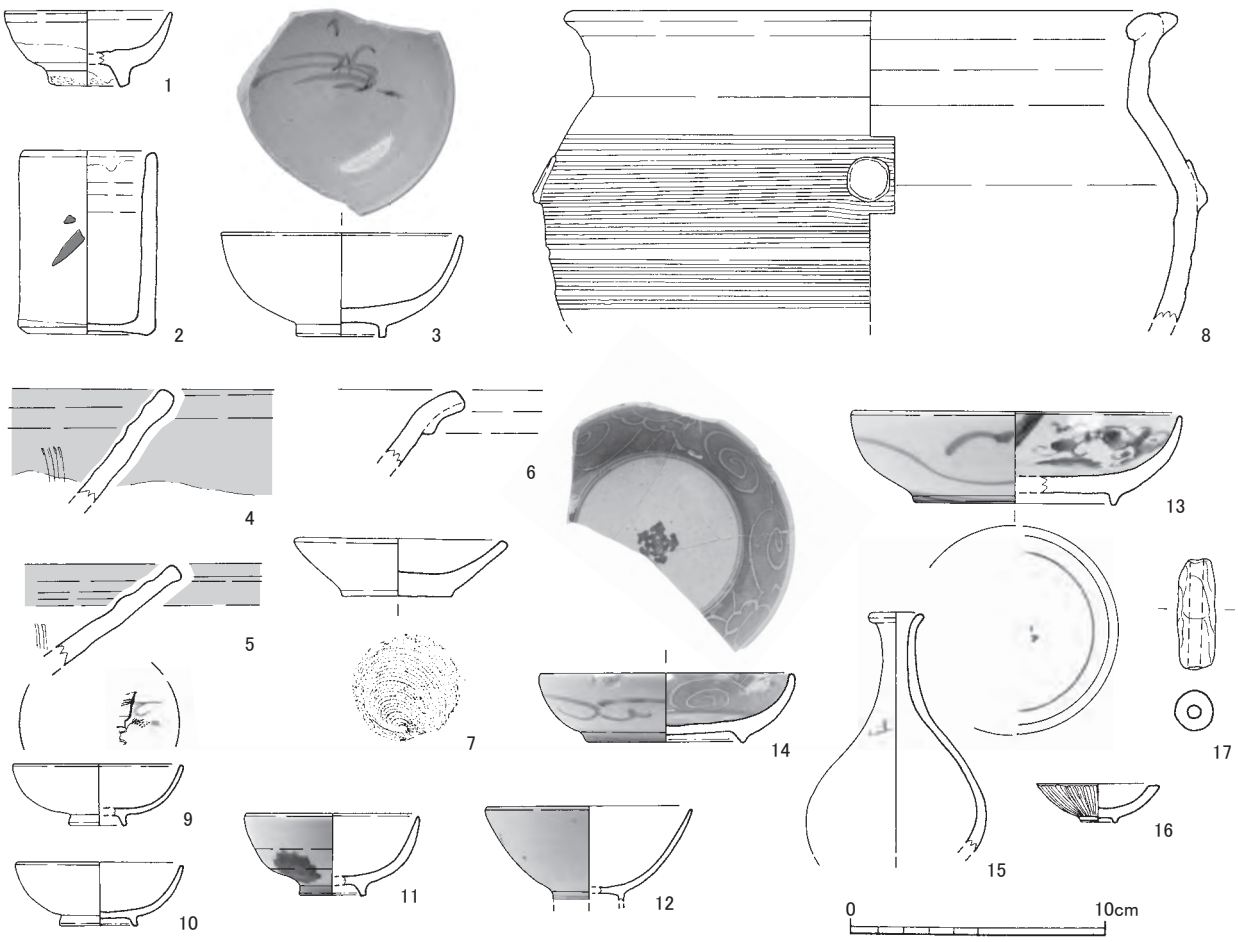
13 号溝状遺構（図版 11、付図）

北東端から検出された南北方向に走る溝としたが、不整形な土坑とするべきだった。西端に瓦が集中していた。19 号溝状遺構を切っているが、同一遺構の埋土の差の可能性もある。幅 126cm、深さ 70cmだが、床面が見つからず、下にある別遺構を掘り抜いた可能性もある。床面はほぼ平坦だが、東に向かって下がっている。埋土の上位層の整地層中から染付中皿がまとまって出土しており、一括廃棄したものと見られる。磁器から見て 18 世紀前葉から中葉に属する。

部分的に焼けた瓦片があるが、棒状土製品があるので、火事ではなく、土製品を焼成する際の窯道具であろうか。わずかな量なので製品に付属してきた可能性もあるが、石炭が出土しているのもこれに関係があるかもしれない。サンプルを採取した。土師質瓦も出土しているが量は多くない。

出土遺物（図版 31・48、第 47・48 図）

第 47 図 7 の天目椀や、8 や 12 は抹茶碗にしてもよいサイズで茶器の可能性がある。第 48 図 4 の赤絵ミニチュア碗は 19 号土坑出土片と接合した。第 48 図 19 は右軒桟瓦の丸部分で、混入か。第 48 図 20 の丸瓦は凹面に網目痕がつく独特なもの。このほか、ニホンカボチャの種子が出土している。



第 60 図　1 次調査 21 号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図（1/3）

14 号溝状遺構（付図）

中央東部から検出された東西方向に走る小溝で、東に向かって幅が狭く浅くなって途切れており、西は 5 号溝状遺構に切られる。最大幅で 27cm、深さ 8cmで、床面はほぼ平坦だがおそらく西に向かって下がっている。磁器碗は 18 世紀前葉だが、整地面上から検出されたものなので、時期を示す資料ではないだろう。

出土遺物（第 49 図・付図）

第 35 図 2 は染付碗で呉須で花唐草文を描く。

15 号溝状遺構（図版 11、付図）

中央東部から検出された東西方向に走る溝で、東西とも基礎に切られ、西は基礎の先が検出されず、1 号大溝遺構と繋がるものと考えられる。東は多くの遺構と基礎に切られるので検出されなかった。4・5 号溝状遺構と交差するが基礎のところで交わるため切り合い関係は不明。17 号土坑との切り合いは不明。幅 226cm、深さ 70cmで、底面に杭と見られるピットがあった。2 号大溝遺構と重複したので、2 号大溝を欠番とする。床面から五輪塔の空風輪片が出土している。

第 49 図 5 の陶器皿は 17 世紀末から 18 世紀前半だが、6 は 17 世紀後半の様相で、8 の磁器碗も 17 世紀後半なので、17 世紀後葉に属する。

出土遺物（図版 31・47・50、第 49・50・126・134 図）

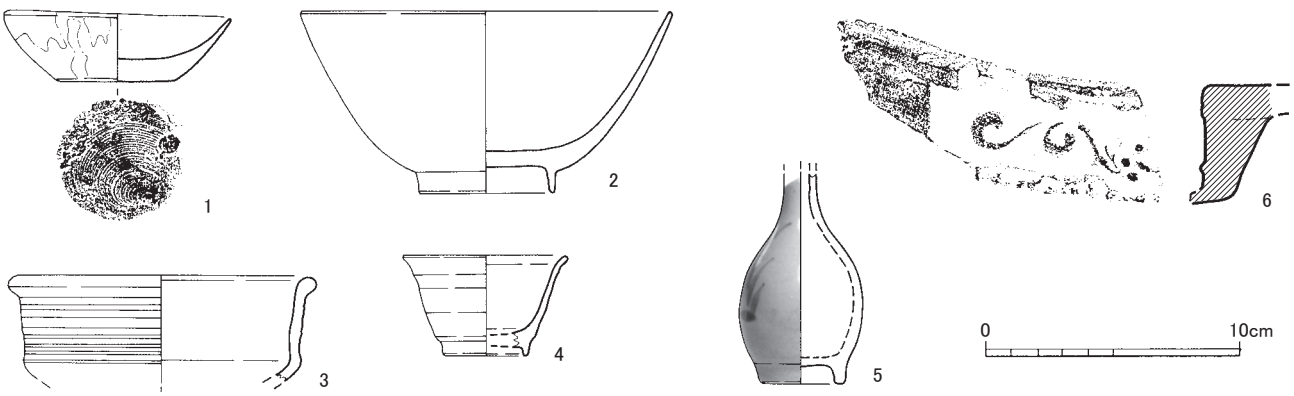
第 50 図 1 は口縁部が外反する器形や調整方法がほかの土師皿とは異なる。

16 号溝状遺構（付図）

東端部で検出された東西方向に走る溝で、西端部が南に L 字に屈曲する。東端は調査区外に延びるが、南端は 21 号溝状遺構と主軸方向と検出面の埋土が一致する。しかし、深さが異なるので、16 号溝状遺構が 21 号溝状遺構を切っている可能性が高い。北壁だけが検出されたので幅はわからない。幅が広くなり、土坑であった可能性もある。深さは 95cmと深いが最深部ではないだろう。中位から下位まで石炭粒子を混じる層で、石炭の粒子のため遺物が黒く変色している。赤色顔料とともにサンプルを採取した。木質が残っており、木製品が出土するが、貝殻層はなかった。第 53 図の摺鉢から見ると 18 世紀後半、陶器・磁器碗も 18 世紀後葉なので、18 世紀後葉に属する。第 54 図 1 ～ 4 の氷裂文地菊花文散らしは揃いで、21・24・25 も揃いなので一括で捨ている。

出土遺物（巻頭図版 5、図版 31・32・45・46・48・49・53、第 51 ～ 56・125・128・134 ～ 136 図）

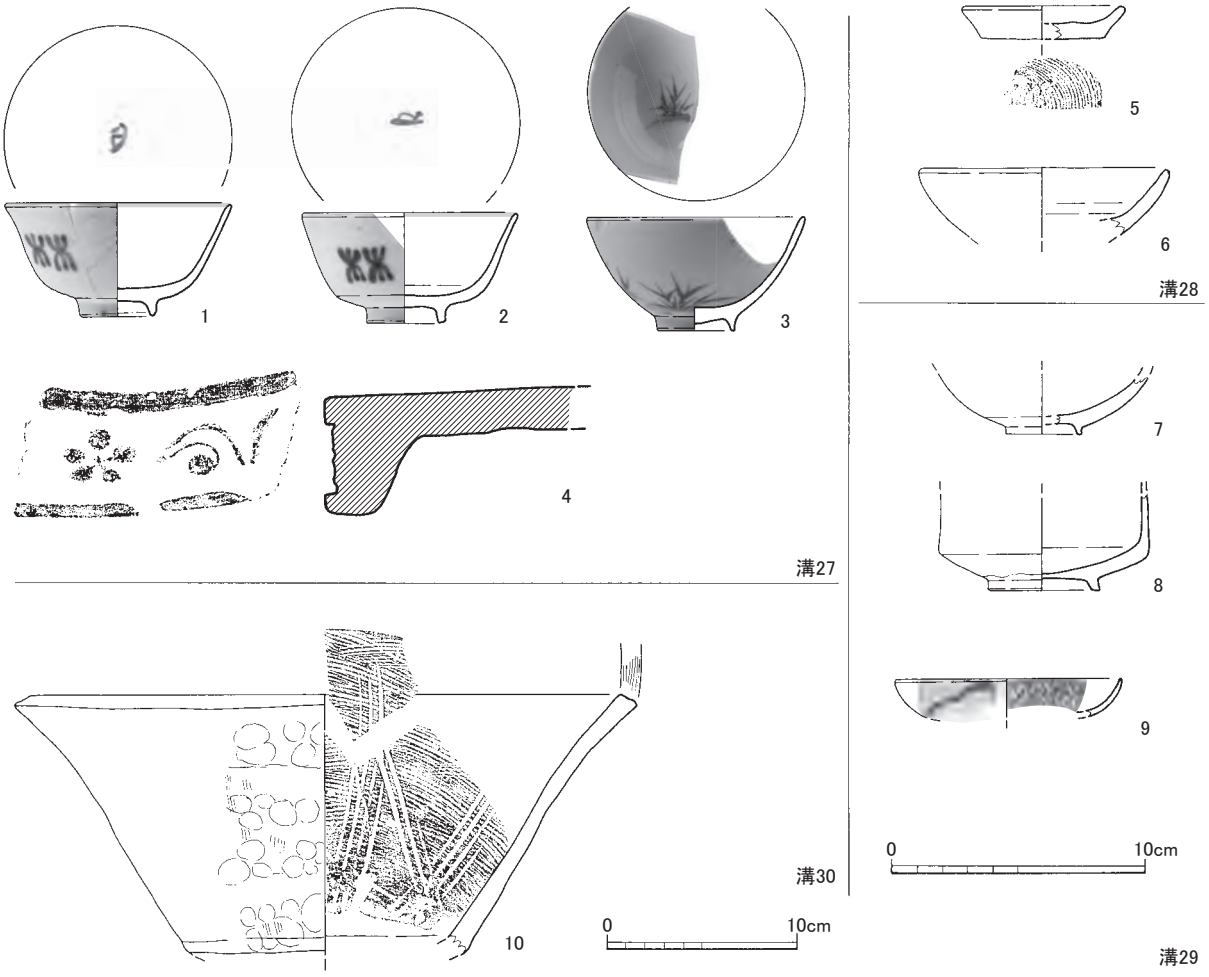
第 51 図 9 は瓦質土器の風炉で、外面に赤漆が塗布されており、残りが悪いが内面口縁部までは



第 61 図　1 次調査 23・26a 号溝状遺構出土陶磁器・瓦実測図（1/3）

間違いなく塗布されている。10は炻器で、中央に撮みまで貫通する孔がある。第51図24の陶器皿の外底には「紅」と線刻されている。紅皿にしては大きく、三潴の豪商「紅粉屋」に関する物か。26は口縁部の内傾が大きい椀。第52図3の陶器皿は見込みに小さい径の畳み付け痕が残るので、小型器種を載せて焼成している。第54図15は染付碗の底部で、裏銘が独特である。第56図1は軒平瓦の隅瓦なので、切妻屋根に葺かれたものである。3の平瓦は先端は欠損しているが、1とセットになる可能性はある。半円にV字形の刻印は1次16号溝状遺構出土第55図3の丸瓦にもあり、同じ工房の瓦でセットになるだろう。第42図2は土管の可能性があるが、土管は発見されていないので、混入か。

第129図7は内外黒漆塗りの椀蓋で、体部に赤漆で「内」と書かれているが、蓋とすると文字上下逆になる。第129図9のように、ハレ用の美しい文様の入った漆椀蓋もあるので、内向き用と来客用を分けるための「内」かもしれない。図化できないが、「内」と赤漆で書かれた内外黒漆の椀身片も存在している。第135図2～5は留め具と見られ、板材の上にあてて打ち込むものであろう。土留めに使用する物かもしれないが、本遺構には土留めの痕跡はない。掲載してないものの厚さ2cmの加工痕のある板材片があり、建築材にしては厚すぎるので、土留め材の残欠を廃棄したのかもしれない。このほか、ほぼ完形ながら大きく変形した内外黒漆椀蓋や、下駄片・低木の枝・桶の側板・赤漆塗り櫛片など多くの木製品があり、種子ではヘチマの種子85点のほか、鑑定に出していないがモモの核やベンガラと見られる赤色顔料塊が出土している。第132図3と4は一揃いの下駄だろう。第55図1と2は同范ではなく、3と4は丸瓦で、凹面の仕上げ方法も厚さも異なる。



第62図　1次調査27～30号溝状遺構出土土器・陶磁器・瓦実測図（10は1/4、他は1/3）

17 号溝状遺構（付図）

東端部で検出された東西方向に走る溝で、1 号溝状遺構に切られる。東西ともに端は調査区外に延びるが、西端は調査区外で南に屈曲し、4 号溝状遺構に繋がる可能性がある。幅は約 65㎝、深さ 35㎝で、西に向かって下がっている。遺物が少なく時期を特定しにくいが、磁器碗から 18 世紀前葉に属するか。

出土遺物（第 56 図）

第 56 図 7 は陶器椀で、胎土が特徴的だが肥前産だろう。

18 号溝状遺構（図版 11、付図）

東端部で検出された東西方向に走る溝で、17 号溝状遺構と規模が近く併走している。東西ともに端は調査区外に延びるが、西端は調査区外で南に屈曲し、4 号溝状遺構に繋がる可能性がある。幅 74 m、深さ 35㎝で、西に向かって下がっている。

出土遺物（図版 32、第 56 図）

第 56 図 13 の染付皿は外底に朱書きで〔本□ヵ〕と書かれている。

19 号溝状遺構（付図）

北東端から検出された南北方向に走る溝で、13 号溝状遺構に切られているが、同一遺構の埋土の差の可能性もある。幅は 100㎝あるが、深さは 10㎝しかなく、東西端は検出できなかった。磁器碗と皿から 18 世紀前葉に属すると考えられる。

出土遺物（第 57 図）

第 57 図 3 は肥前青磁の香炉である。

20 号溝状遺構（付図）

南東隅で検出された遺構で、当初は 9 号土坑としていたが、精査してみると埋土の差異であり、溝状遺構と判断した。 1 号溝状遺構の床面から検出された。南は 1 号攪乱溝に切られ、北は端部のプランが丸みを持つので、陸橋部だった可能性がある。21 号溝状遺構とはわずかしか切り合わず、切り合い関係は不明。幅 164㎝、深さ 40㎝で、南に向かって下がっている。

出土した磁器皿は 18 世紀前葉だが、蓋付の蛸唐草は 18 世紀後葉のものなので時期幅があるか。18 世紀前葉の遺物は、切っている 21 号溝状遺構の遺物が混じったかもしれない。

出土遺物（図版 32・45、第 58・59・128 図）

第 59 図 10 は「熊」とスタンプされた土製円盤で、小川望は東京都で出土する資料から、土製の温石ではないかと推定している。「熊」の刻印は江戸遺跡の焙烙にも見られることから製作工房を示した可能性を提示している。（註２）火に直接かけるものではないのか、2 次焼成の痕跡はない。参勤交代等で江戸から持ち帰られたものだろうか。このほかイヌ骨が出土しているが、獣骨集中部から遊離した可能性が高い。

21 号溝状遺構（図版５・６、付図）

南東端部で検出された南北方向に走る溝で、1 号溝状遺構と同一遺構の可能性が高い。南北端を

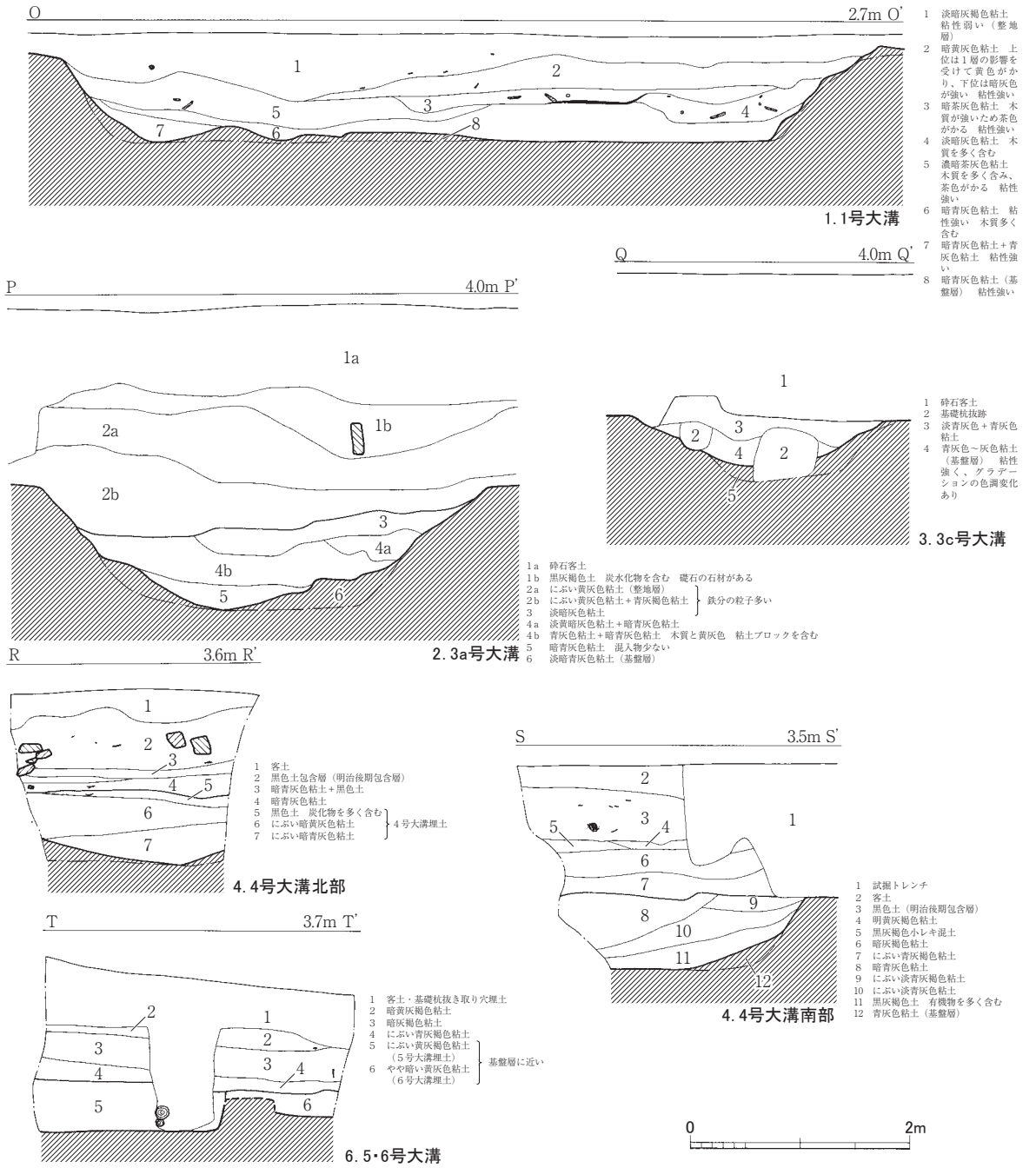
大きな基礎で隔てられているため、確実性に欠けるので、別遺構として報告する。3 号溝状遺構に切られ、北端は 16 号溝状遺構に切られる可能性が高い。幅 98cm、深さ 35cmで、南が深い。18 号土坑を切る。20 号溝状遺構とはわずかしか切り合わず、切り合い関係は不明。陶器摺鉢は口縁形態から 18 世紀前葉主体で、他の陶器碗や磁器碗からもこの時期に属する。

出土遺物（図版 32・46、第 60・128 図）

第 128 図 46 は緻密な文様が叩き出された飾り金具である。掲載していないがウメ核が出土している。また、石炭が出土しており、サンプルを採取した。

23 号溝状遺構（第 61 図・付図）

中央部北側のコンクリート杭側から検出され、コンクリート杭にかかるため土層写真は撮れな



第 63 図　1 次調査大溝遺構土層断面図（1/60）

かった。南北方向に走る溝で、7号溝状遺構に切られる。幅256cm、深さ70cmと規模が大きく、断面は大溝遺構と共通する逆台形で、埋土にも同様に腐食した木質層があり、1号大溝遺構と隣接することから、同時併存の可能性が高い。南側は基礎に大きく切られ、基礎の南側には出なかったので、基礎内で止まっているか土坑の可能性もある。北は調査区外に延びる。陶器の火入れと磁器杯の口縁部から17世紀第4四半期に属するだろう。

出土遺物（図版32、第61・129図）

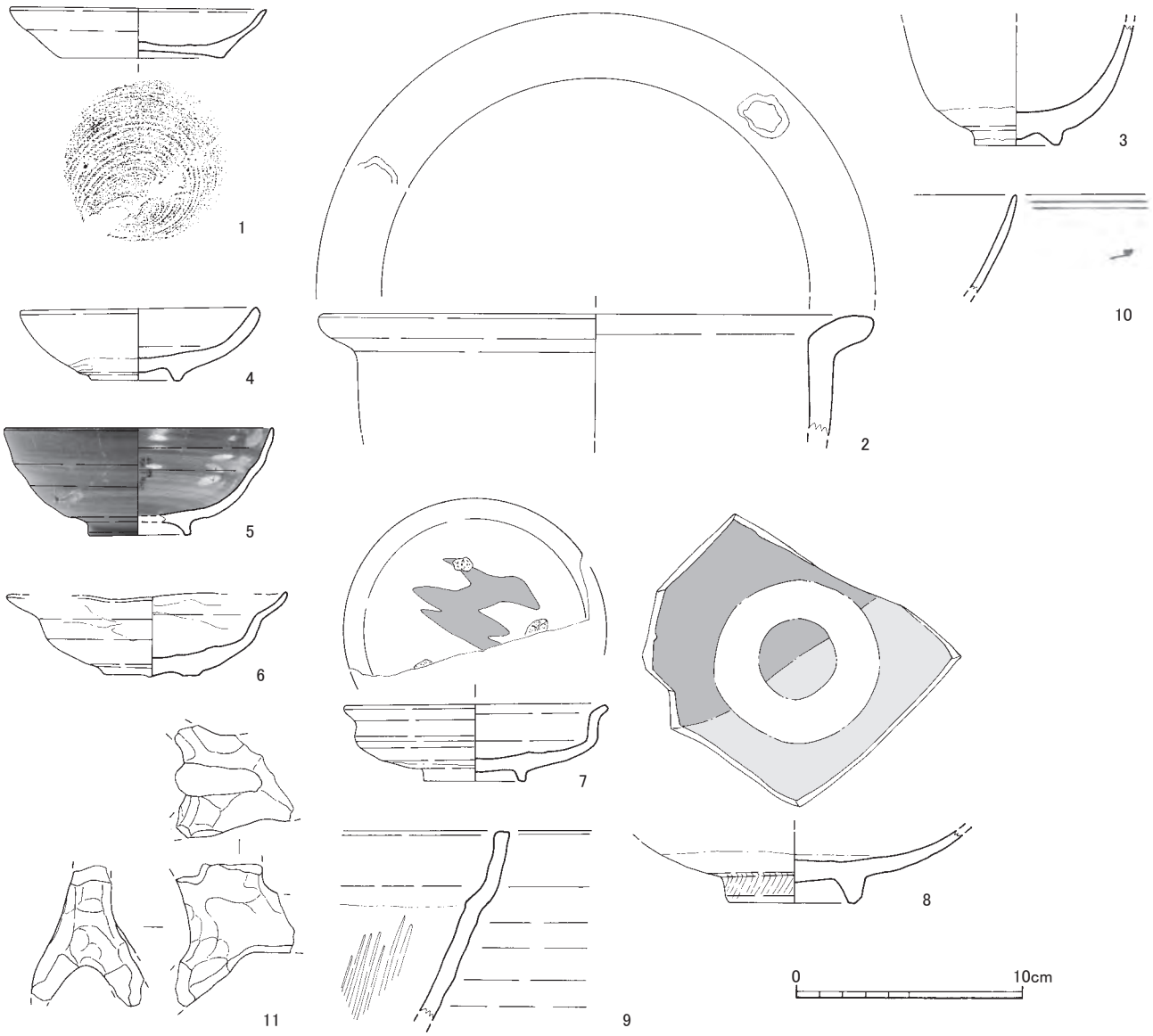
第61図2は大振の磁器碗なのでうがい茶碗の可能性がある。

25号溝状遺構（付図）

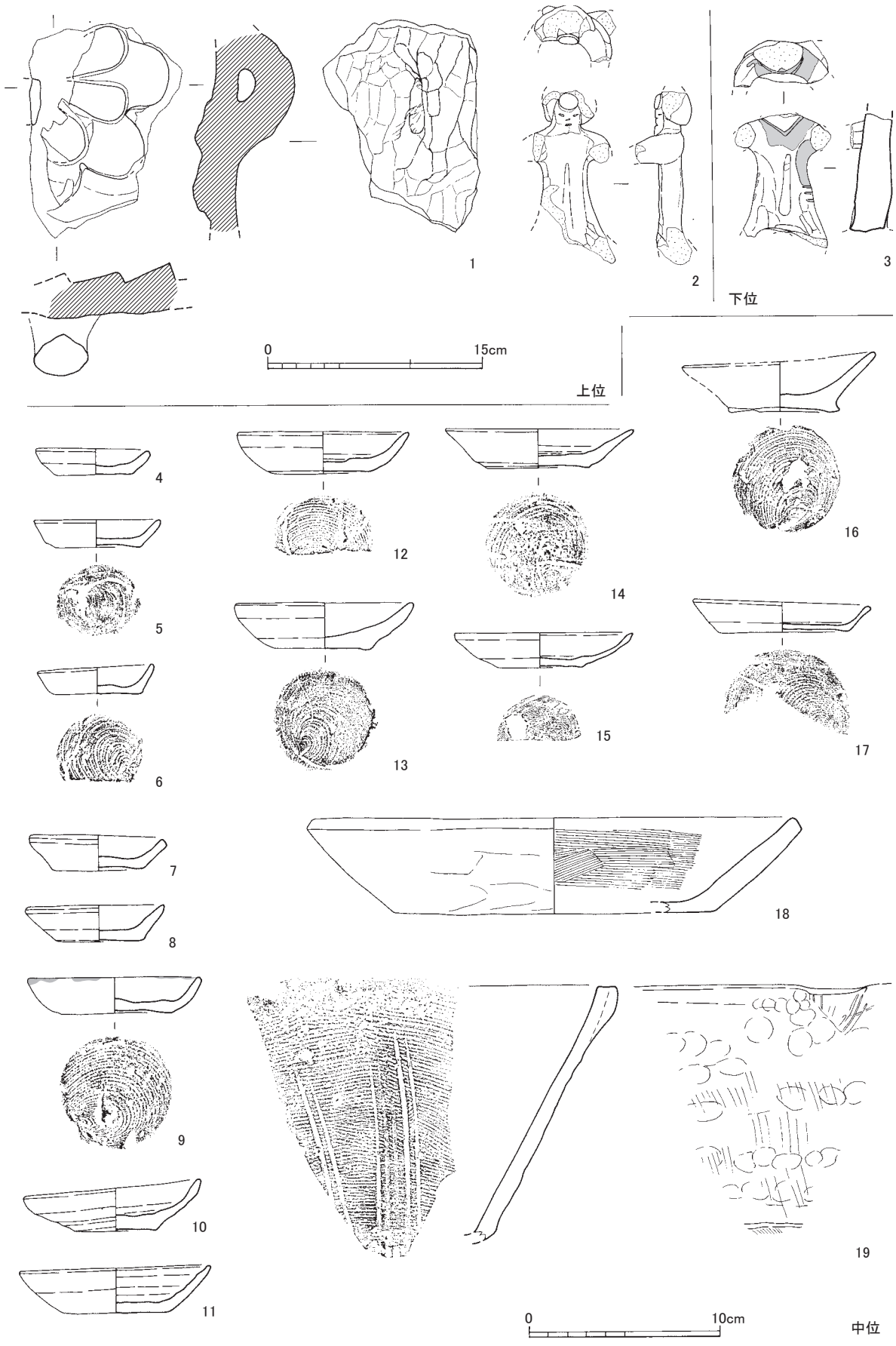
調査区南西隅から検出された南北方向に走る溝で、壁の立ち上がりが緩やかなので検出時は整地地業かと考えたが、両壁が検出されたので溝とした。方形周溝遺構を切る。南北は調査区外に延びる。幅約110cm、深さは30cmしかない。出土遺物が銅銭しかなく、時期不明。

出土遺物（図版44、第127図）

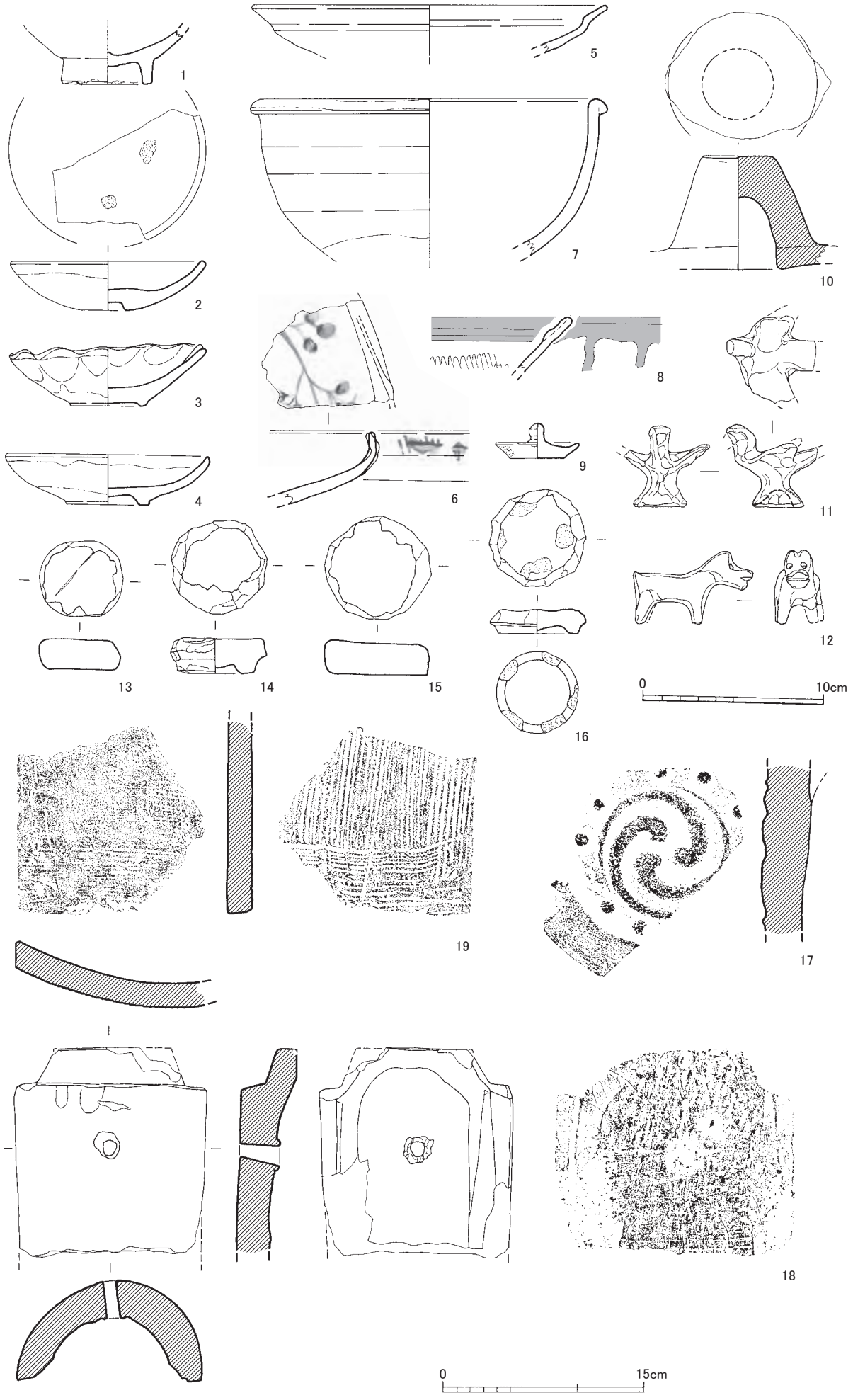
8～10はさし銭状態で出土しており、癒着しているため9・10は銭名不明。



第64図　1次調査1号大溝遺構一括出土土器・陶磁器実測図（1/3）



第 65 図　1 次調査1号大溝遺構上・中位出土土器・瓦実測図（1は 1/4、他は 1/3）



第 66 図　1 次調査1号大溝遺構上・中位出土土器・陶器・瓦実測図（18・19 は 1/4、他は 1/3）

26 号溝状遺構（付図）

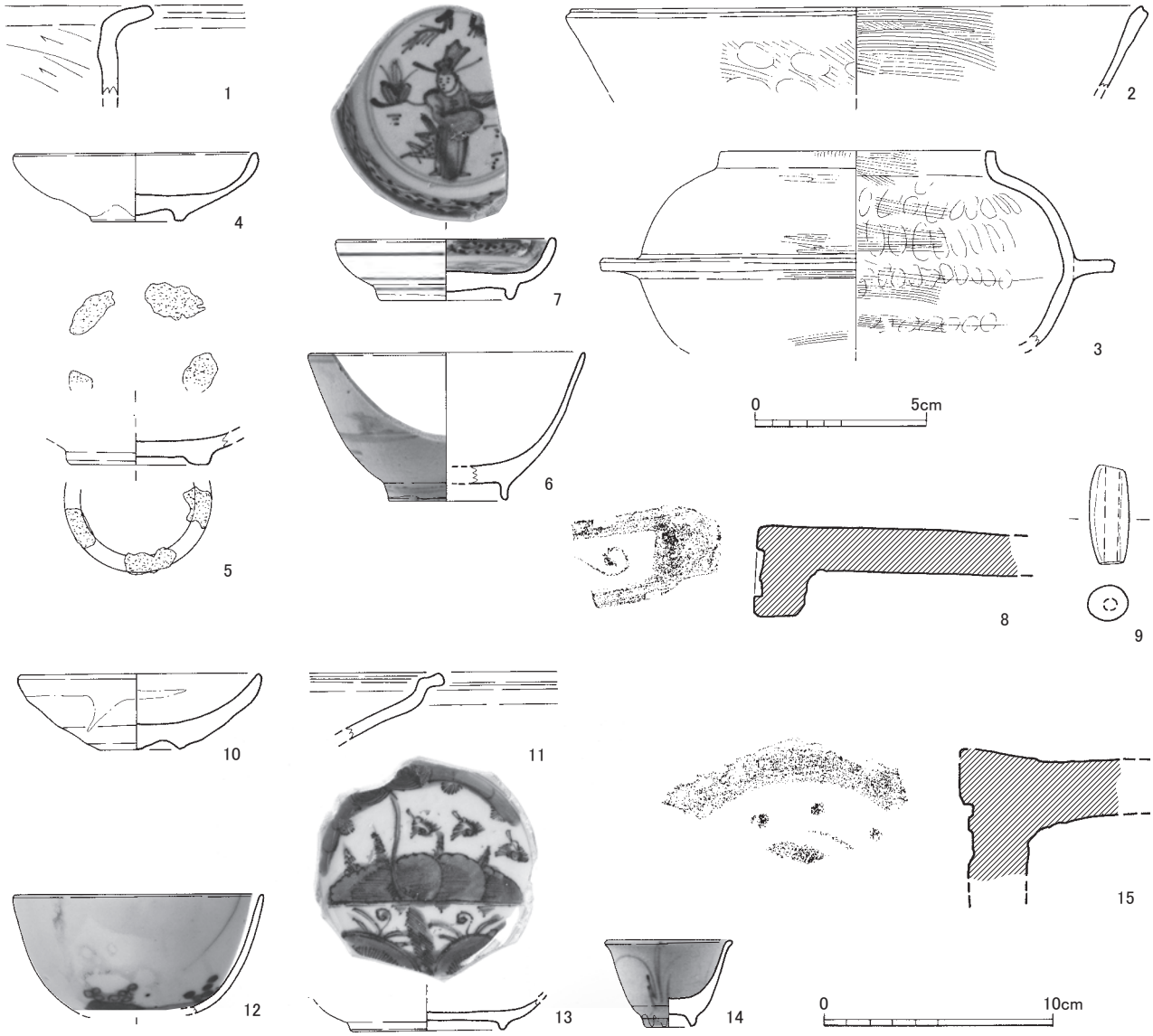
調査区南西隅から検出されたもので、東壁だけが確認されたため規模はわからない。ほぼ同方向に走る 2 条の溝が切り合っており、切っている西側を a 号、東側を b 号とした。26a 号は西に屈曲し、深さは 15cm、26 b 号の北端が止まっており、深さは 20cmほどしかない。20 号土坑に導水施設らしい板と杭による護岸施設があったので 1 号大土坑のような大型土坑の東壁である可能性もある。両者とも南側は調査区外に延びる。26a 号から出土した第 61 図 5 の瓶の形態から 19 世紀前葉か。

出土遺物（第 61 図）

第 61 図 5 は染付の小型瓶である。

27 号溝状遺構（付図）

調査区南西隅から検出されたもので、東壁だけが確認されたため幅はわからないが、深さは 55cm を測る。南北方向に走る溝で、南側の延長上に 20 号土坑があるので、埋土は異なるがこれに繋がる可能性がある。床面に杭が 1 つだけあったが、20 号土坑の土留め杭と同一のものにしては単体なのは不自然である。北側は 28 号溝状遺構と交差する部分が検出されなかったので、未調査範囲内



第 67 図　1 次調査 3 号大溝遺構出土土器・陶磁器・瓦実測図（2・3 は 1/4、他は 1/3）

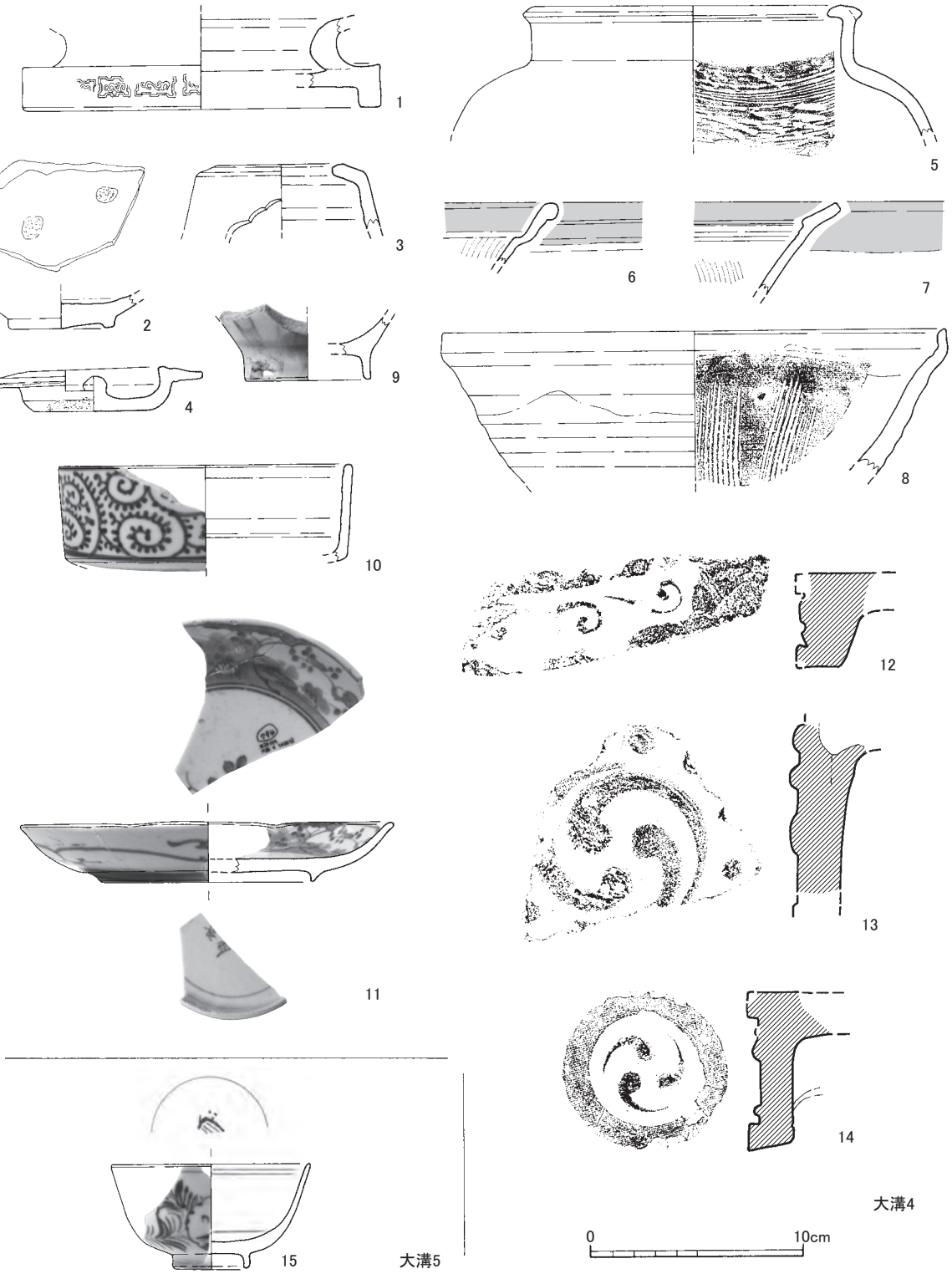
で止まるか、西に折れ曲がっているようだ。瓦が多く出土したが、図化できる出土遺物がなく、小片から 19 世紀中葉と考えられる。

出土遺物（第 62 図）

第 62 図 1・2 の染付碗は揃いである。

28 号溝状遺構（図版 12、付図）

調査区南西隅から検出された東西方向に走る溝で、東端は調査区外に延びるか、26 号土坑内に留



第 68 図　1 次調査 4・5 号大溝遺構出土陶磁器・瓦実測図（1/3）

まる。西端は調査区外に延びる。幅122cm、深さ45cmで、西に下がる。茶褐色がかった黄色粘土を埋土としたため明らかに検出できた。床面直上に木質が広がっており、これを除去した西端からウシの脚部が出土した。肩甲骨から蹄まで残っているので、肩から外した状態だった。大腿骨には木質が横断するように残っており、縛っていたのかもしれない。時期を特定できる出土遺物がなく時期不明だが、3a号大溝遺構とは埋土が異なっていたが、下層で検出される遺構に近い埋土だったので18世紀前葉か。

出土遺物（図版53、第129・135図）

第62図5・6は土師器の小皿で、 灯明皿としての使用の痕跡はない。第135図1は同一規格の板材6枚がセットで出土しており、桶の側板のようだが、箍の痕跡がなく器高が低いので盥であろう。ウシの上腕部はカットマークがあるので、腕の部位で流通していた可能性がある。解体されていないので食用に供したものではない。

29号溝状遺構（付図）

北西端から検出された溝で、1号大土坑を切る。南端は立ち上がりがあるので、西に屈曲している可能性が高い。東壁のみが検出されたので規模はわからないが、深さは30cmを測る。京焼風陶器の形態から18世後葉に属する。

出土遺物（第62図）

第62図8は腰折形の京焼風陶器である。

30号溝状遺構（図版6、付図）

中央西側から検出された南北方向に走る小溝で、南北端は立ち上がっていた。31号溝状遺構に併走する可能性がある。幅53cm、深さ20cmを測り、時期を特定できる出土遺物がないので時期不明。

出土遺物（第62図）

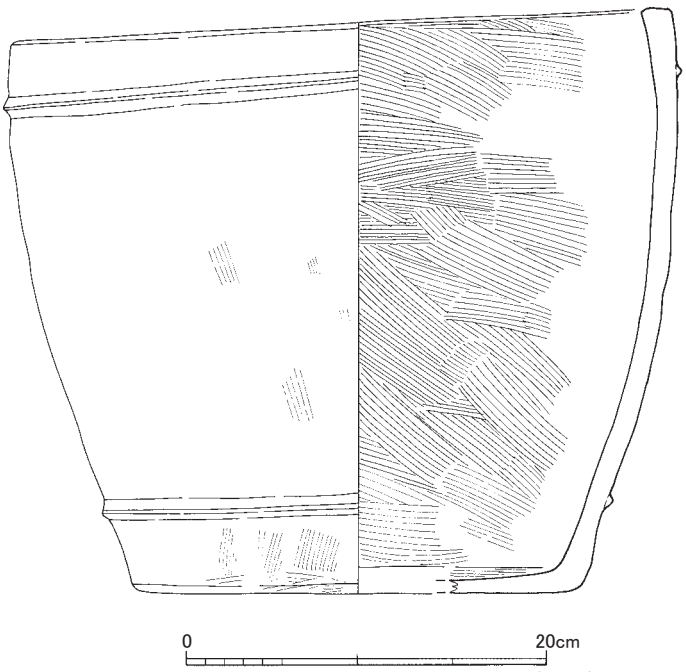
10は摺鉢に、瓦質土器である。

31号溝状遺構（図版6、付図）

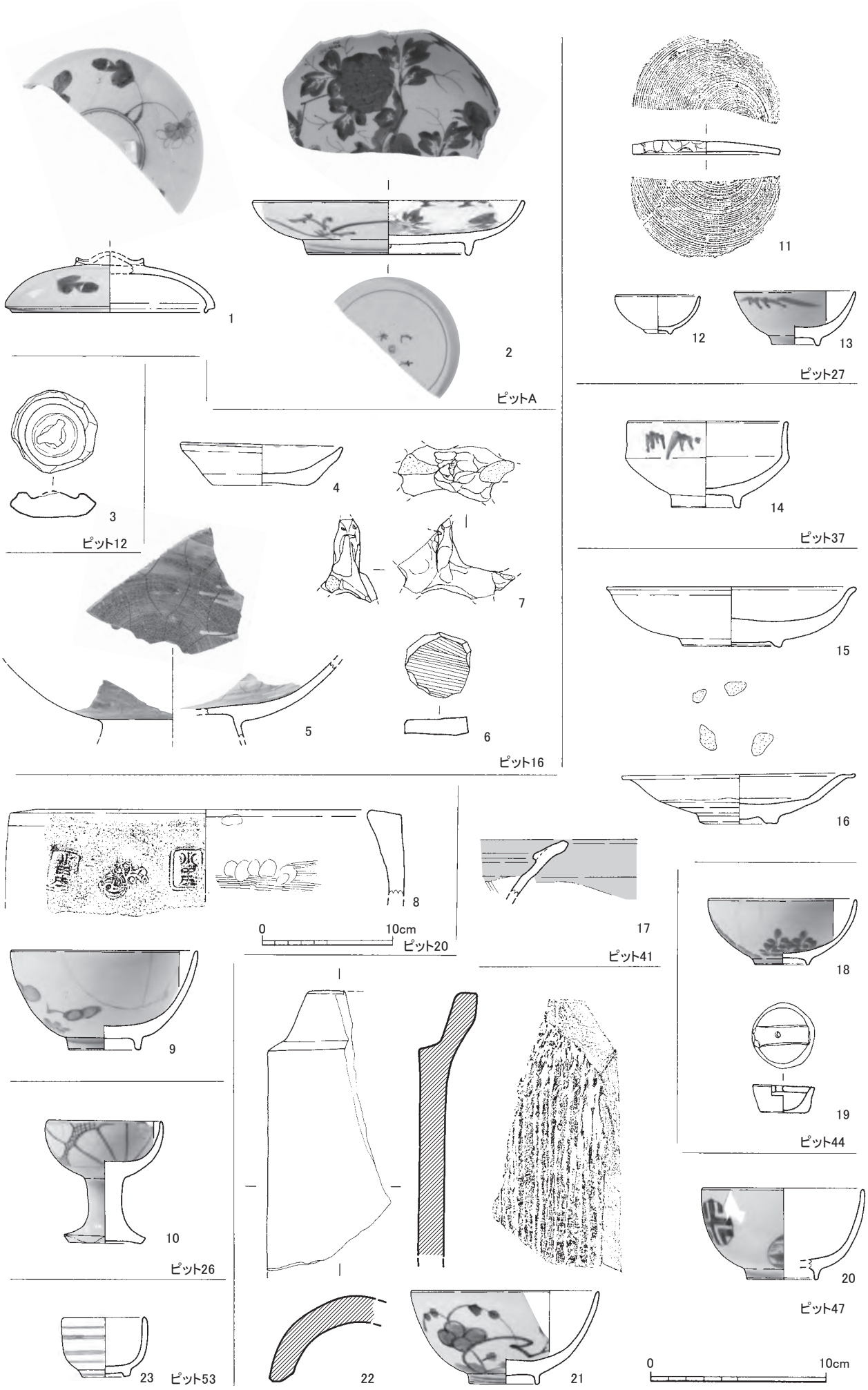
中央西側から検出された南北方向に走る小溝で、南端は立ち上がっていた。北端と東部を基礎に切られる。南の28号溝状遺構か、西の30号溝状遺構と組み合わさる区画溝かもしれない。出土遺物がないので時期不明。

32号溝状遺構（図版13、第43図・付図）

中央西端から検出された東西方向に走る溝で、3号大溝遺構とは切り合わない。東端は立ち上がりがあり、西端は調査区外に延びる。幅75cm、深さ30cmで、西に下がる。埋土は3号大溝遺構に近い。出土遺物はなく、時期不明。



第69図　1次調査埋甕遺構実測図（1/3）



第 70 図　1 次調査ピット出土土器・陶磁器・瓦実測図（2・7 は 1/4、他は 1/3）

33 号溝状遺構（図版 13、第 43 図・付図）

南西端部から検出された東西方向に走る溝で、東西端ともは調査区外に延びる。幅 85cm、深さ 10cmで、床面はほぼ水平だった。にぶい淡青灰白色粘土を埋土としていたので明瞭に 5 号大溝遺構を切っていた。出土遺物がなく時期不明。

34 号溝状遺構（図版 13、第 43 図・付図）

南西端部から検出された東西方向に走る溝で、西端は壁が検出された細い溝である。幅 66cm、深さ 12cmで、床面はほぼ水平だった。出土遺物がなく時期不明だが、明治後期の黒色土包含層が上位にあることから、近世のものだろう。

35 号溝状遺構（図版 13、第 43 図・付図）

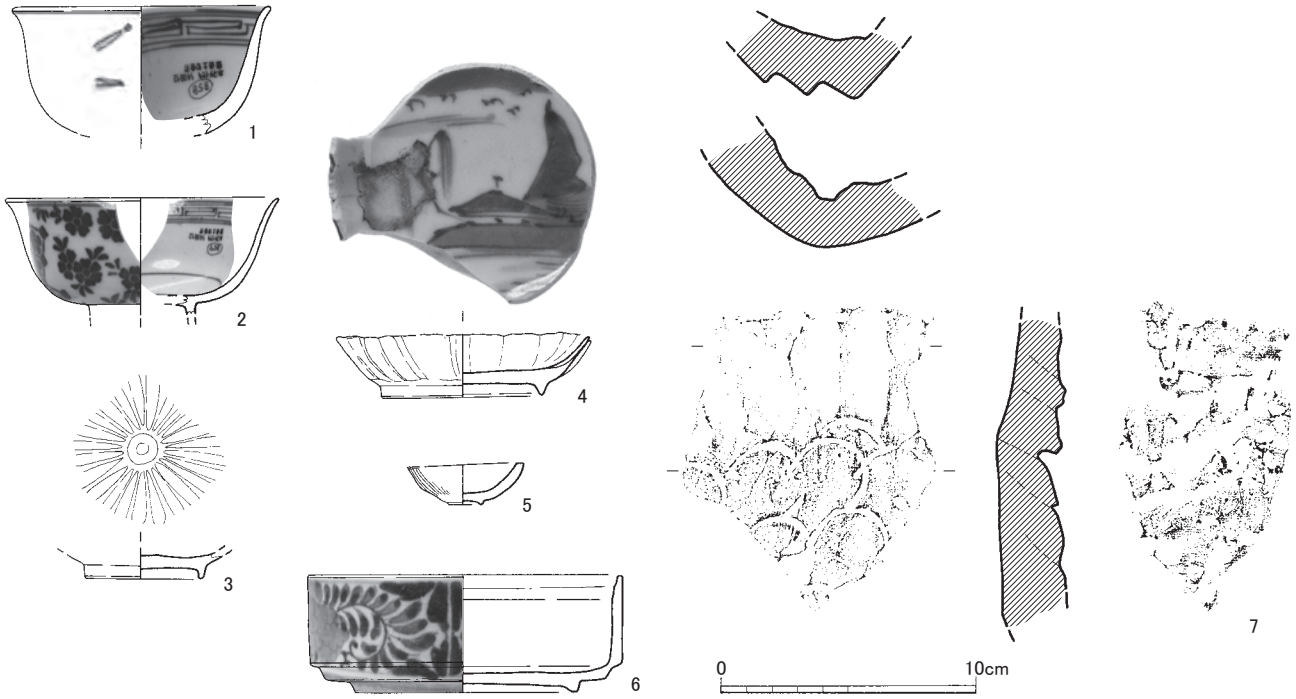
南西端部から検出された東西方向に走る溝で、西端は壁が検出されたので区画溝かもしれない。幅 74cm、深さ 7cmの浅い溝で、出土遺物がなく時期不明だが、明治後期の黒色土包含層が上位にあることから、近世のものだろう。

大溝遺構

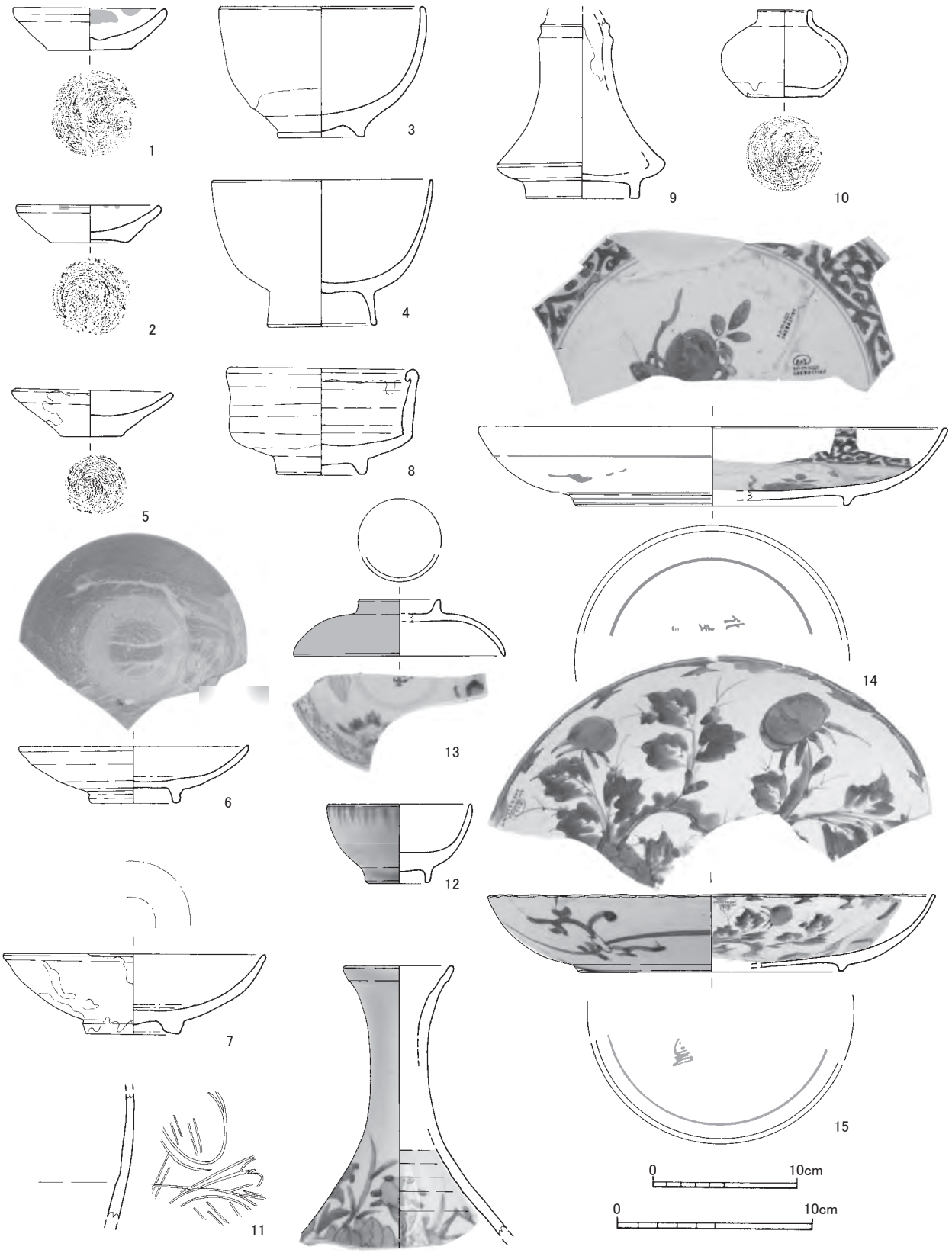
３条の大溝遺構があるが、このうち 2 号大溝遺構は 15 号溝状遺構と同一遺構と判断されたので、2 号大溝遺構を欠番とした。

1 号大溝遺構（図版 14、第 63 図・付図）

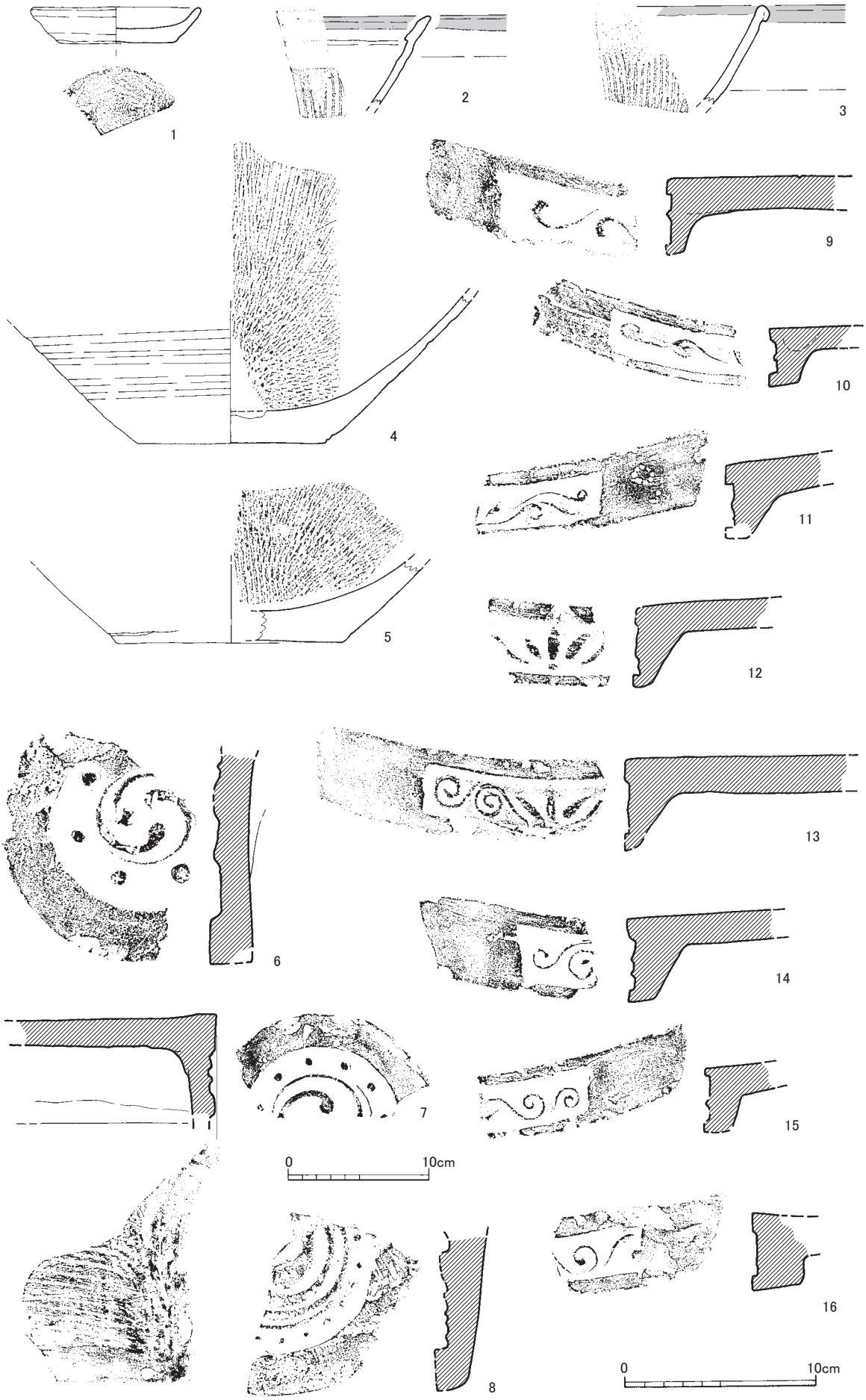
中央部の黄色粘土整地層下から検出された南北方向に走る溝で、幅 740cm、深さ約 100cm。基礎の下にまで広がっていたため、人力で基礎を撤去できず遺物量は少ないので、基礎の間をトレンチ



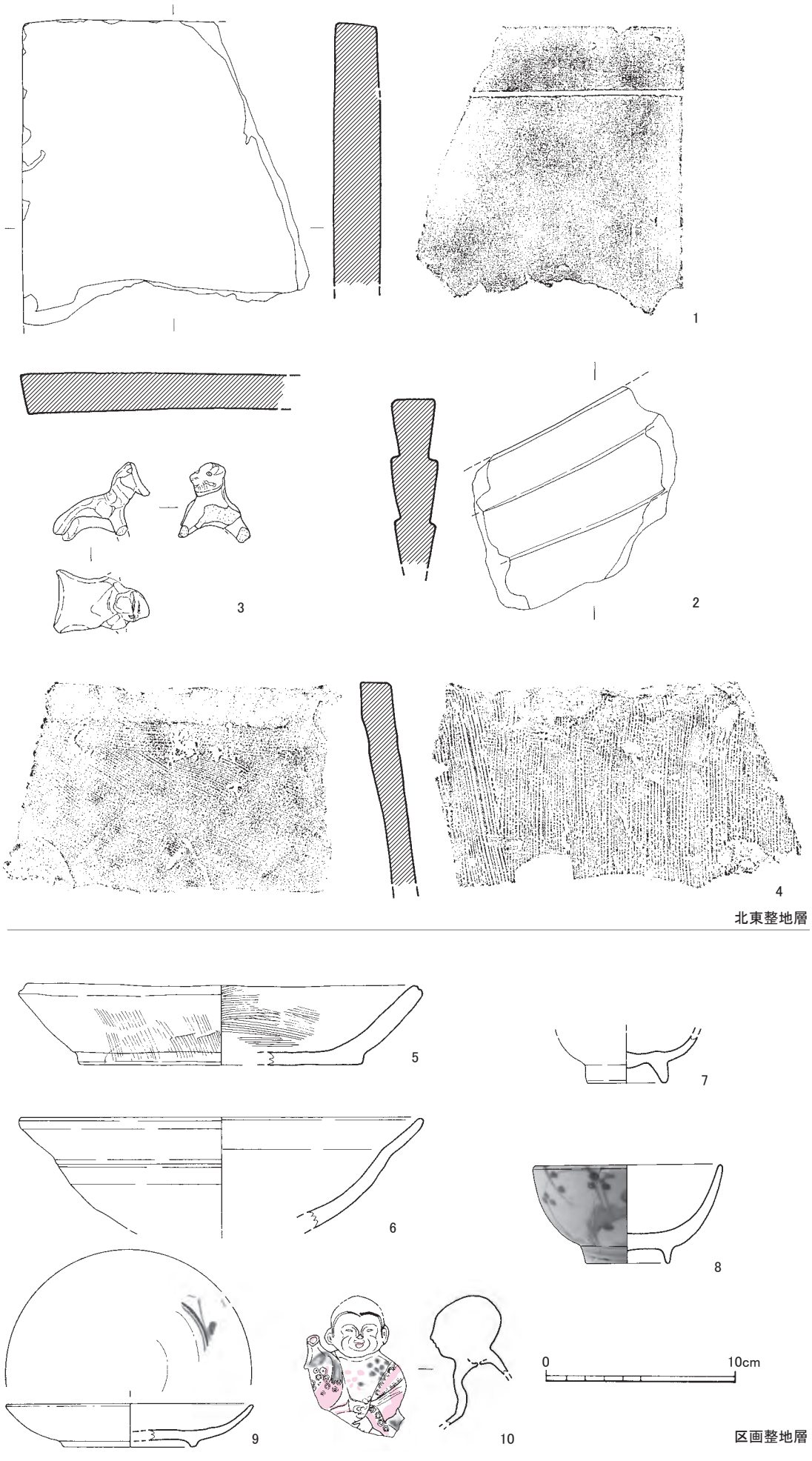
第 71 図　1 次調査黒色土包含層出土陶磁器・瓦実測図（1/3）



第 72 図　1 次調査北東黒色土整地層出土土器・陶磁器実測図（14・15 は 1/4、他は 1/3）



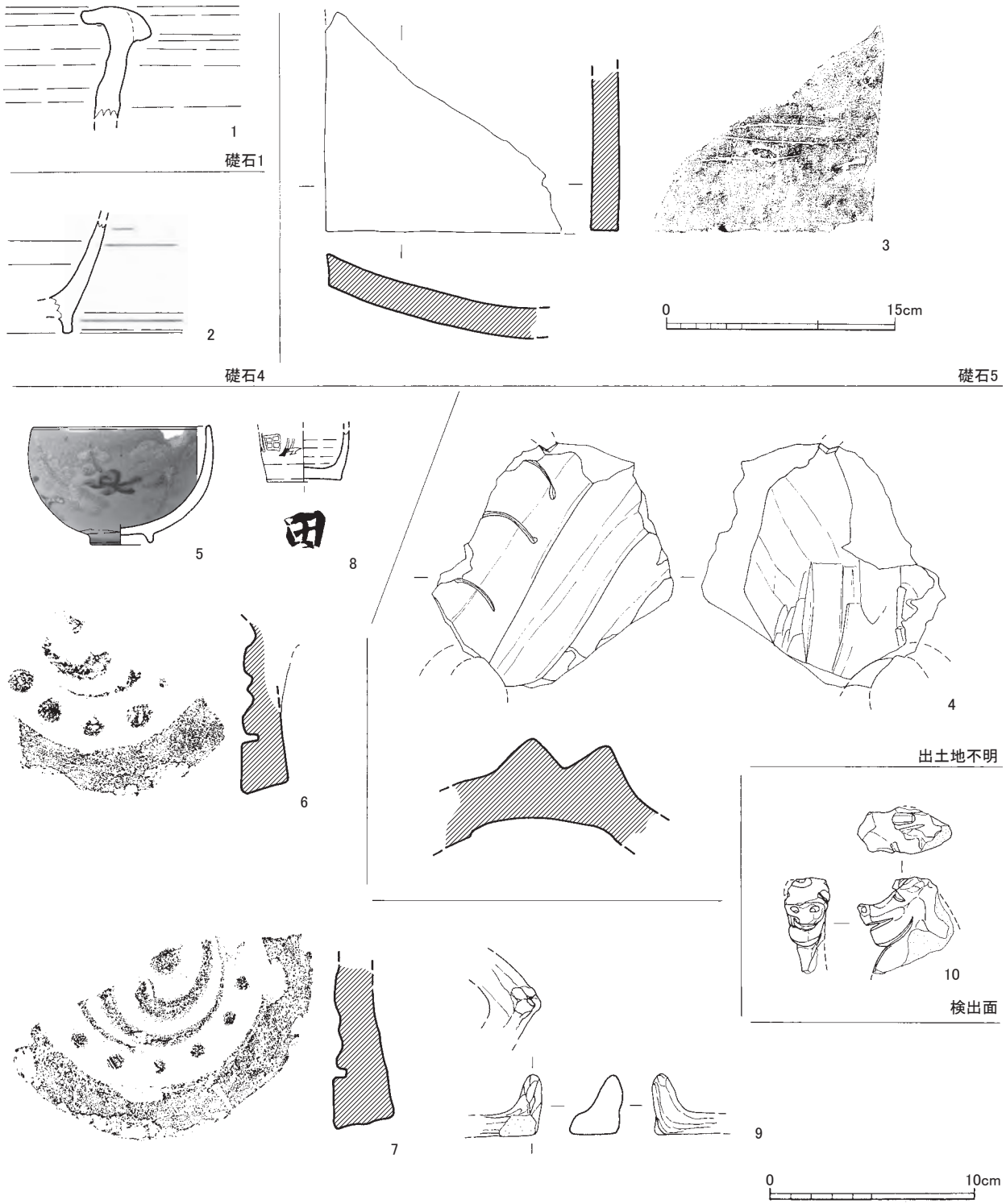
第 73 図　1 次調査北東整地層出土土器・陶器・瓦実測図（7は 1/4、他は 1/3）



第 74 図　1 次調査北東・区画整地層出土土器・陶磁器・瓦実測図 (1/3)

状に掘って範囲と深さを確認するにとどめた。断面逆台形で、壁は急に立ち上がっており、杭が壁に沿って斜めに打ち込まれていたので、板壁による護岸があったかもしれないが、壁から離れた位置にも杭があることから、護岸とは無関係かもしれない。上位はやや締まった粘土で瓦を多く含む。その下に大鋸屑を含む薄い層があり、下位層は土師器小皿が多く出土した。最下層は青灰色にグライ化した粘土で竹などの木質を多く含む。また、わずかながら緑泥片岩片入っており、なんらかの目的で石材が持ち込まれたようだ。

一括出土の９の摺鉢は 17 世紀前葉も考えられが、床着の第 64 図１の土師皿は底径が大きく、古い様相を示している。中位から出土する５の陶器皿や８の摺鉢は 17 世紀後半で埋没時期を示し、



第 75 図　１次調査礎石・出土地不明・攪乱・検出面出土土器・陶磁器・瓦実測図（3は 1/4、他は 1/3）

８の掛け分け皿や６の陶器皿は 17 世紀末から 18 世紀前半なので、最終埋没の時期を示しているものと考えられる。

出土遺物（図版 44 ～ 46・52・53、第 64 ～ 66・127 ～ 132・137 図）

第 65 図１は上位から出土した鬼板瓦で、全体像がわからないが、菊花文だろうか。第 66 図 19 は熨斗瓦だろう。銅銭では元祐通寶や祥符通寶などの北宋銭や、洪武通宝が多く、寛永通寶は少なかった。第 137 図３は人形であろう。形代の形態を残しており、簡素で扁平なので玩具としては考えにくい。斜めに切った部分が頭部で、側面の切り込みが目か口であろう。胴部の２つの穿孔は重なって出土した２つの細長い板の穿孔部分と一致しており、この孔を軸棒で固定して、腕が稼働できるようにしている。したがってもう１つの孔は脚部の部材と繋がるものだろう。第 132 図６は下駄で、先端と基部を短く切って横緒孔を穿孔し直し子供用に転用している。このほか掲載していないが漆椀片が数点出土している。

３号大溝遺構（図版 14・15、第 63 図・付図）

中央西端から東西方向に延びる溝とこれに付随する同規模の溝で、埋土を同じくすることから、同時に機能していた可能性が高いことから同一遺構とし、南側の東西方向に走る部分は 3a 号、南北方向に走る部分を 3b 号、北側の東西方向に走る部分は 3c 号とした。

3a 号は東西方向に走るもので、東西端とも調査区外に延びる。整地層下から検出され、23 ～ 26 号土坑・31 号溝状遺構に切られている。幅 390㎝、深さ 95㎝で、3b 号より深いため、接する部分には段がある。

3b 号は 3c 号と交差し、さらに北に延びるが基礎に切られていた。幅 400㎝、深さ 75㎝で中央部が窪み、3c 号より深い。3c 号は 3b 号と交差し、東には伸びず、西は調査区外に延びる。幅 368㎝、深さ 42㎝で、最も浅い。

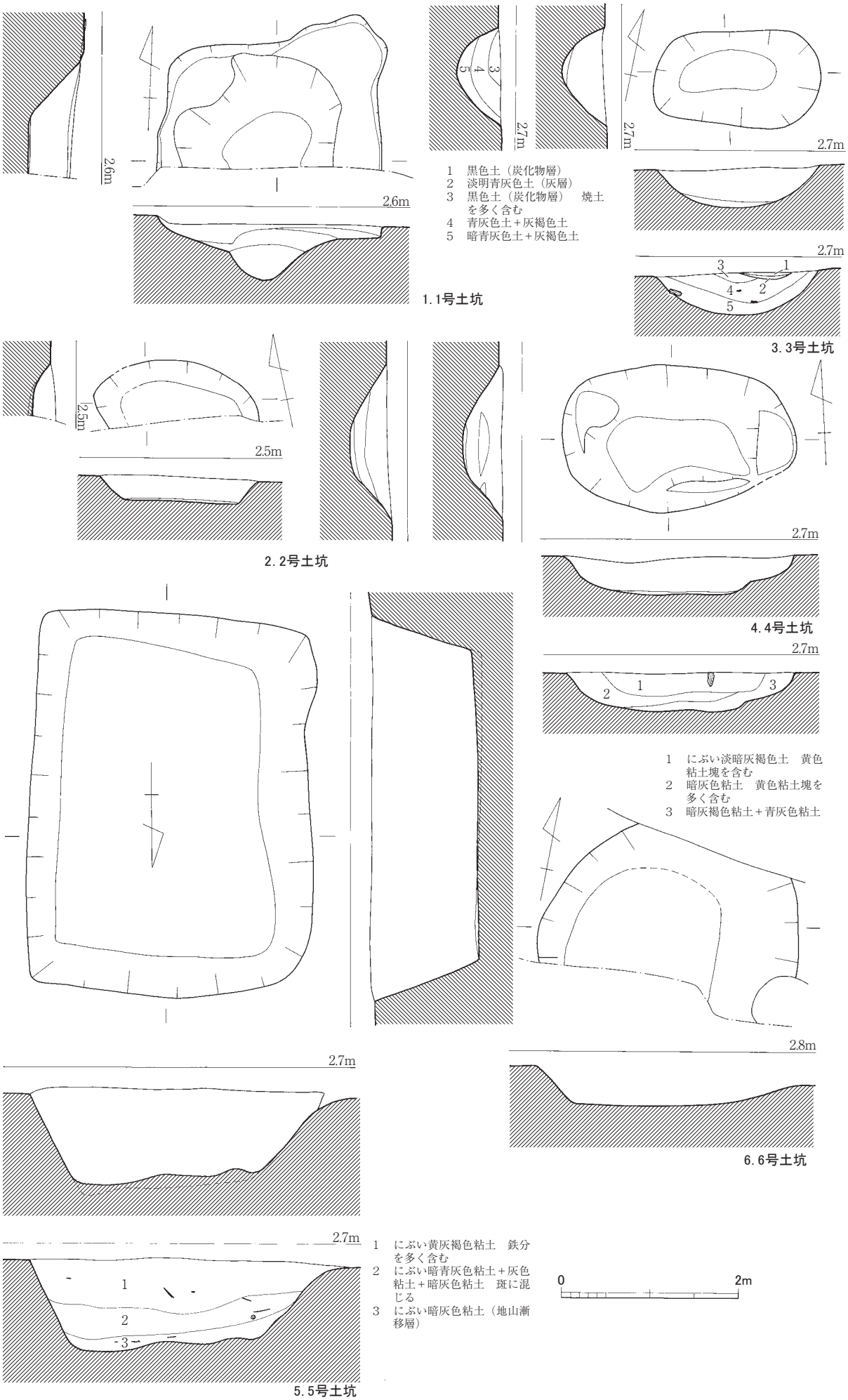
第 67 図 14 の染付杯は 17 世紀前葉で、６の磁器碗は口部に界線が入る 17 世紀中葉、７の染付皿の口縁部に界線が入るので 17 世紀中葉であろう。11 の陶器皿が溝縁皿の形態なので、埋没開始は 17 世紀中葉と考えられる。abc 間に明確な時期差はなく、同時併存の可能性もある。

出土遺物（図版 35・51 ～ 53、第 67・130・135・137 図）

第 67 図７は、清朝磁器を模倣した肥前染付である。第 137 図２は荷札木簡で、表面「米壱斗六□」裏面は判読困難であった。3b 号からは漆塗りの盤が、3c 号からはヘチマの種子 85 点と、不掲載ながら内外黒漆の椀や 1.5cm 角の角材片が出土している。

４号大溝遺構（図版７・15、第 63 図）

渡り廊下部から試掘トレンチに上位を切られて検出された。東西方向に走る溝で、北側の立ち上がりが急で攪乱のため掘り方を確認できず、５号大溝遺構とは切り合い関係がわからなかった。南壁には出入口になるような突出部があった。北壁の端部が検出できなかったので幅は明確ではないが、680㎝ほどと見られ、深さは 160㎝を測る。両壁に杭が見られたが、南側の床面には有機質を多く含む層があったが、明確な護岸の痕跡はなかった。上位に炭化物を多く含む黒色土が入っており、ここからの出土遺物も本遺構に含んだので出土遺物に時期差がある。湧水があったため基盤層はグライ化しており、桶側板片も残っていた。陶器摺鉢は 17 世紀後葉で、五輪塔の火輪が出土している。



第 76 図　2次調査1～6号土坑実測図（1/60）

第68図９の広東碗や10の段重は19世紀前葉なので、これらは上位層の混入で、17世紀後葉に属する。
出土遺物（図版33、第68図）

第68図２の陶器碗は産地不明である。ニホンジカの大腿骨が出土しており、獣骨の鑑定ではカットマークがあるので流通していた可能性がある。

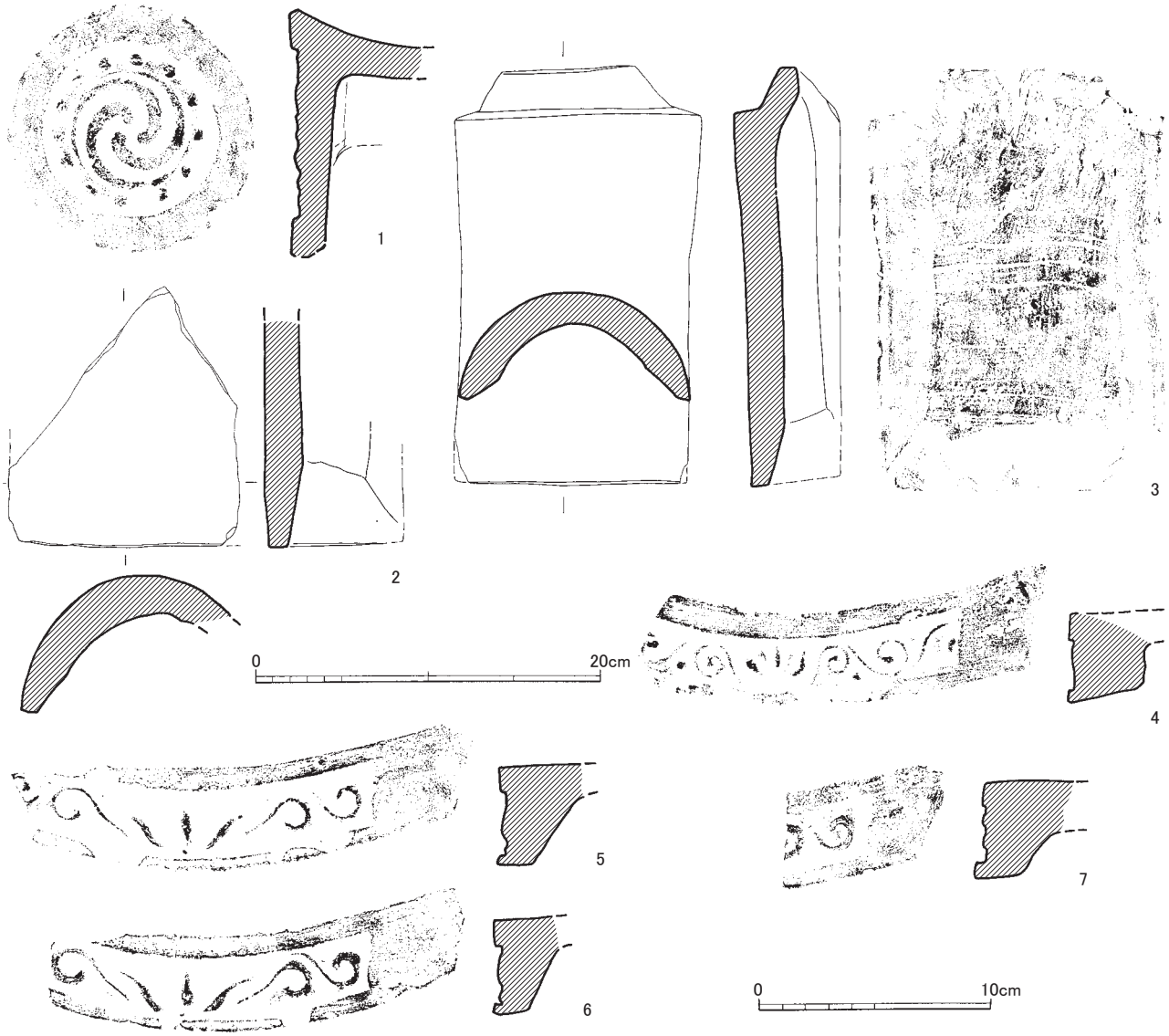
５号大溝遺構（図版７・15、第63図）

渡り廊下部から検出された南北方向に走る溝で、６号大溝遺構を切り、59号土坑・33号溝状遺構・４号大溝遺構に切られる。西壁しか検出されていないので幅はわからないが、360cm以上、深さは40cmほどで床面はほぼ平坦だった。切り合いと出土遺物から、19世紀第２四半期か。
出土遺物（第68図）

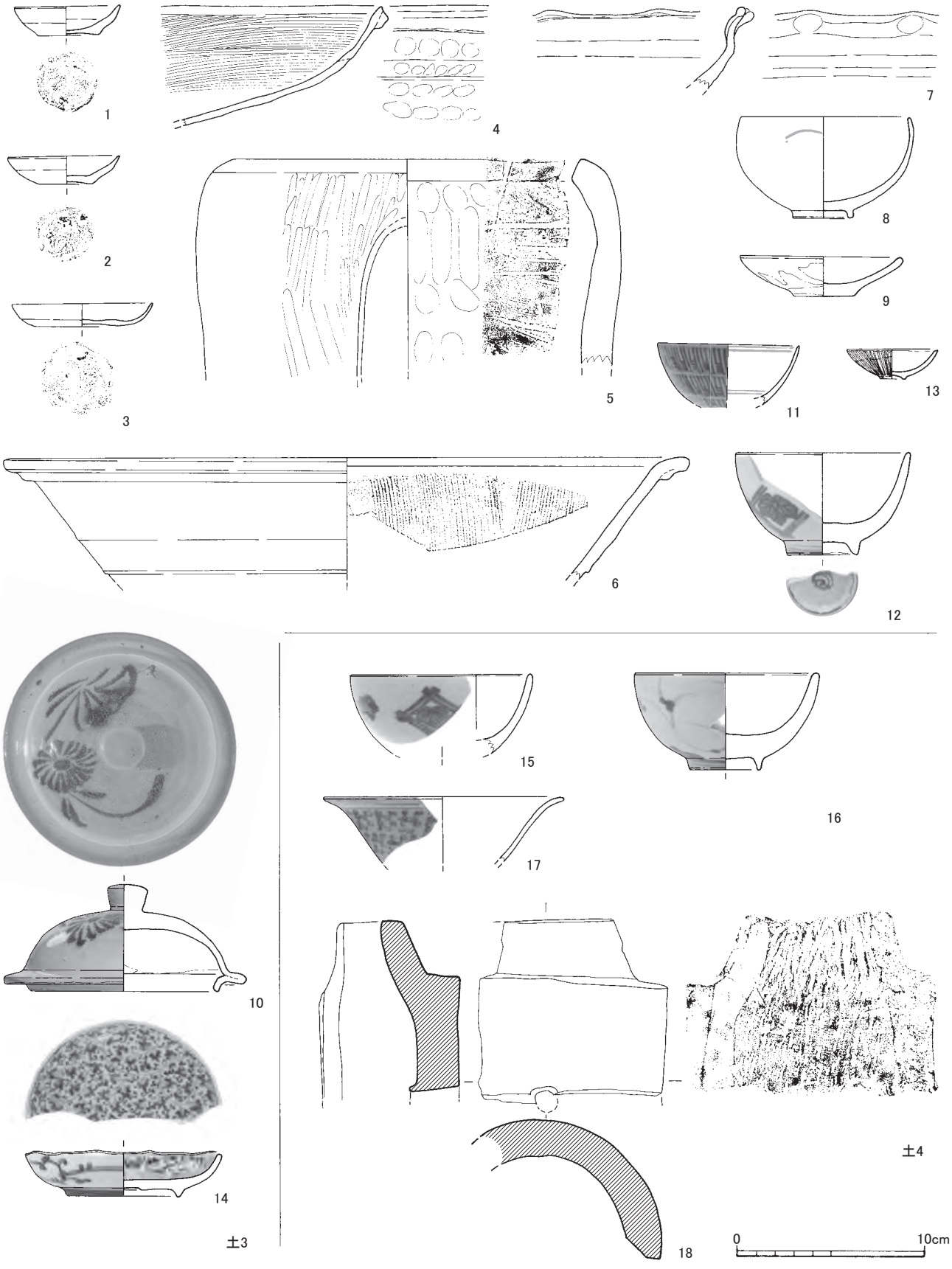
15は端反碗で、見込みは波濤文。

６号大溝遺構（図版７・15、第63図）

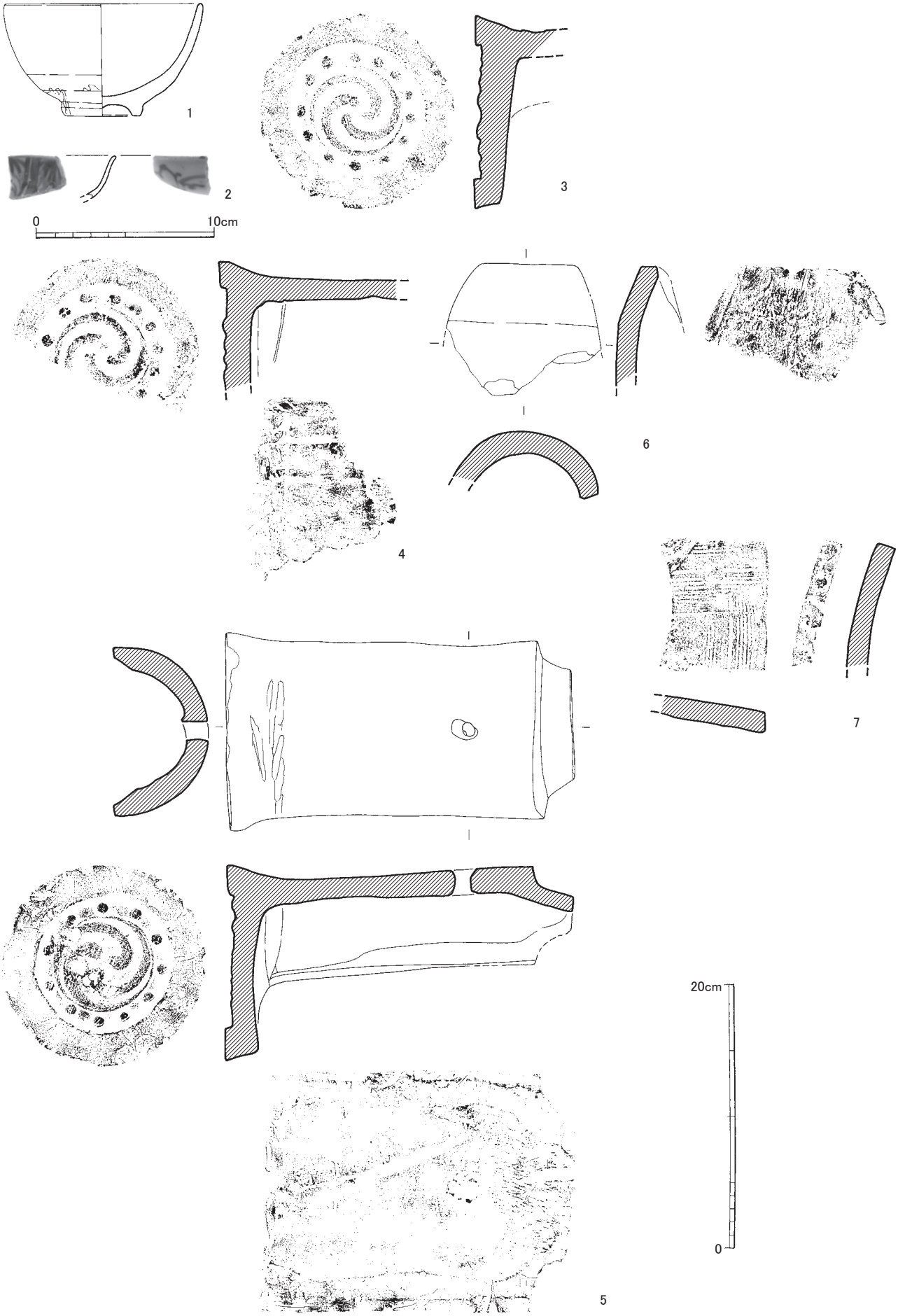
渡り廊下部から検出された南北方向に走る溝で、東壁を５号大溝遺構に切られ、西壁は調査区外に延びるので、幅は不明。深さは16cmと浅く、床面はほぼ均一だった。北側は西に傾くので湾曲す



第77図　２次調査１号土坑出土瓦実測図（１～３は1/4、他は1/3）



第 78 図　2次調査3・4号土坑出土土器・陶磁器・瓦実測図（1/ 3）



第 79 図　2次調査5号土坑出土陶磁器・瓦実測図（3 ～ 7 は 1/4、他は 1/ 3）

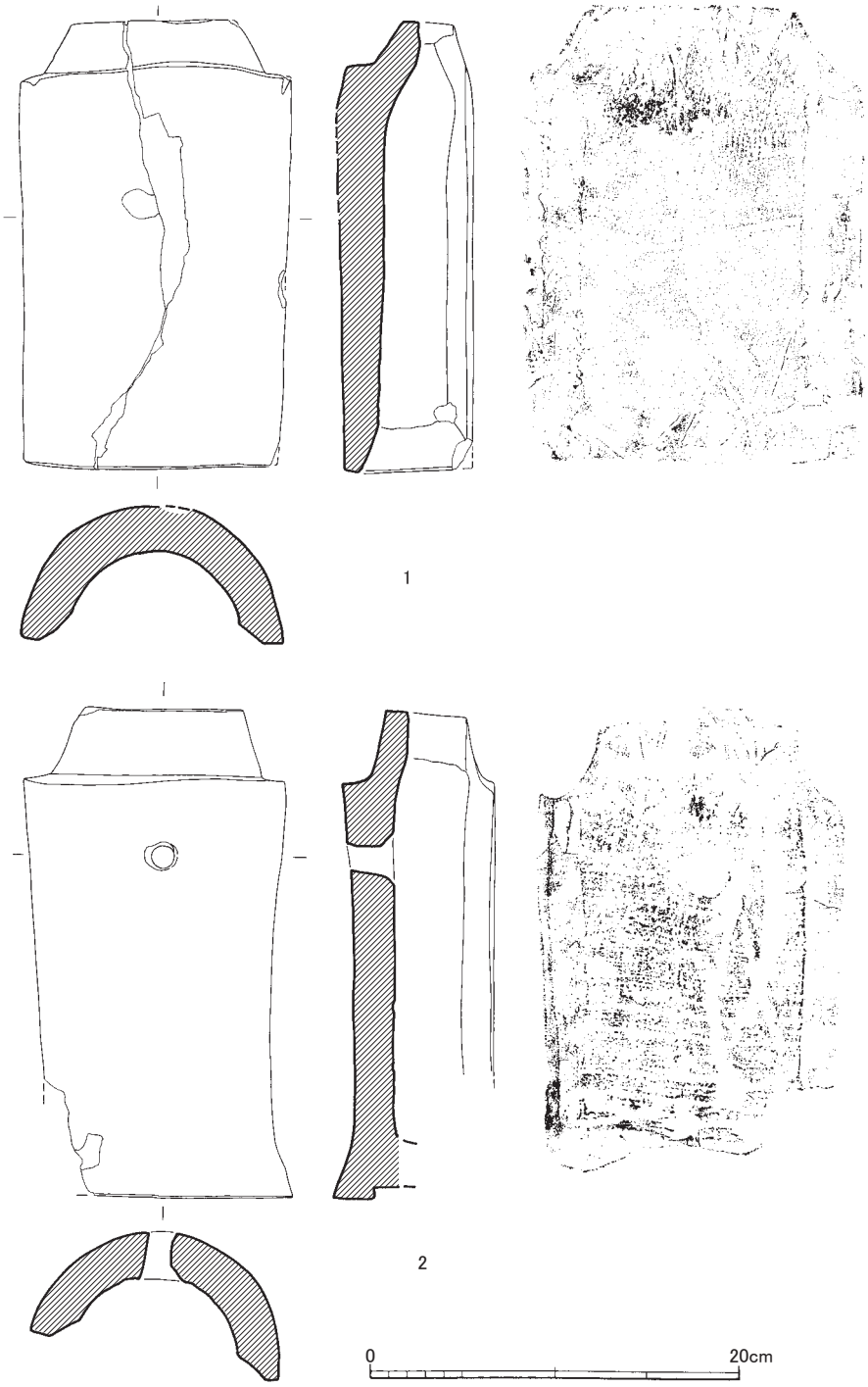
る可能性が高い。埋土は基盤層に近いが、出土遺物から19世紀前葉に属するか。

その他の遺構と遺物（図版15・34、第75図）

礎石1･4･5は年代を特定しづらい。攪乱出土の第75図8は外底に「田」､側面に「山田」とある。8は窯道具と思われるが、磁器のものにしては作りが粗い。

ピット・包含層・整地層等出土遺物（図版33・45・48・49、第70～74・124・125・128図）

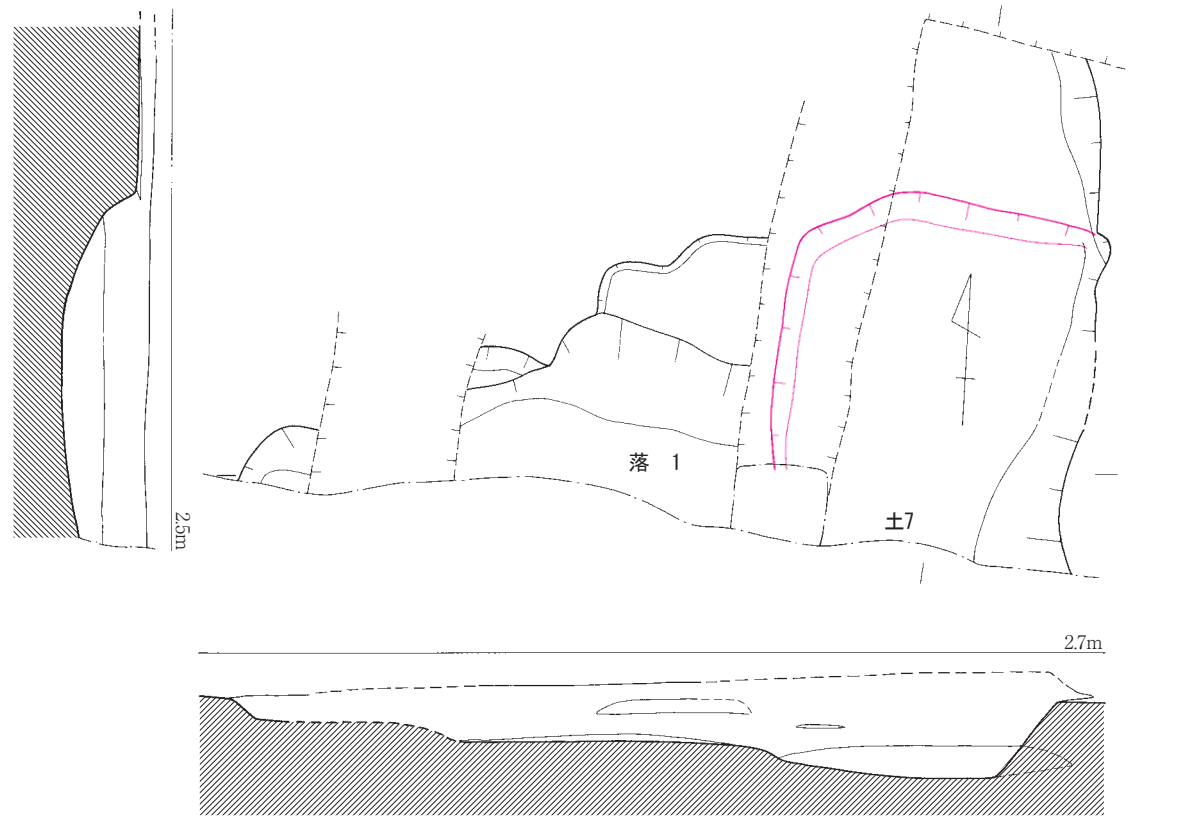
第70図8はピット20出土で､「水田庄」のスタンプから水田焼とわかる。磁器碗から18世紀前葉に属する。



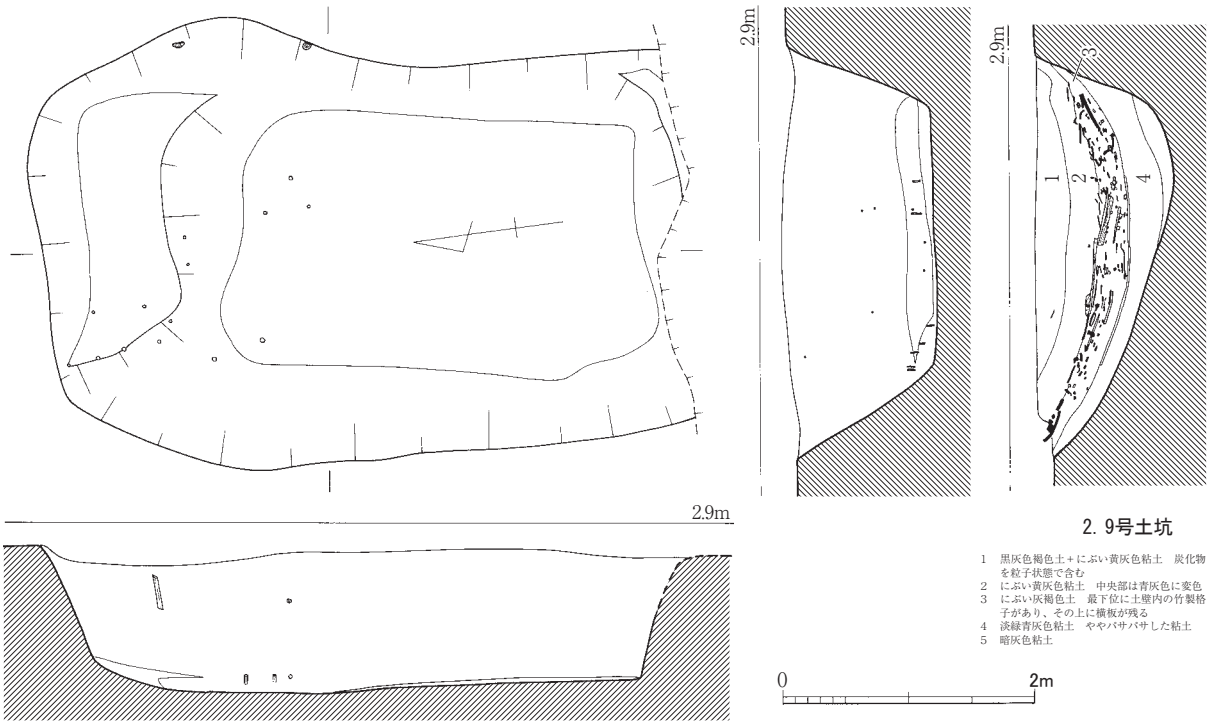
第80図　2次調査5号土坑出土瓦実測図（1/4）

3　2次調査の遺構と遺物

2次調査は北校舎の建て替え部分にあたり、東西で反転調査を行った。西と北端は大きく攪乱を受けていた。中央南部は中庭にあたるため、削平されていなかったので灰黄褐色土の上位整地面が残っていた。この整地面の下に黒色土の包含層があったが、西部には広がっておらず明灰色粘土の整地層になった。西南部にも上位整地層があったものの、先行した東半の調査で、上位層面からは

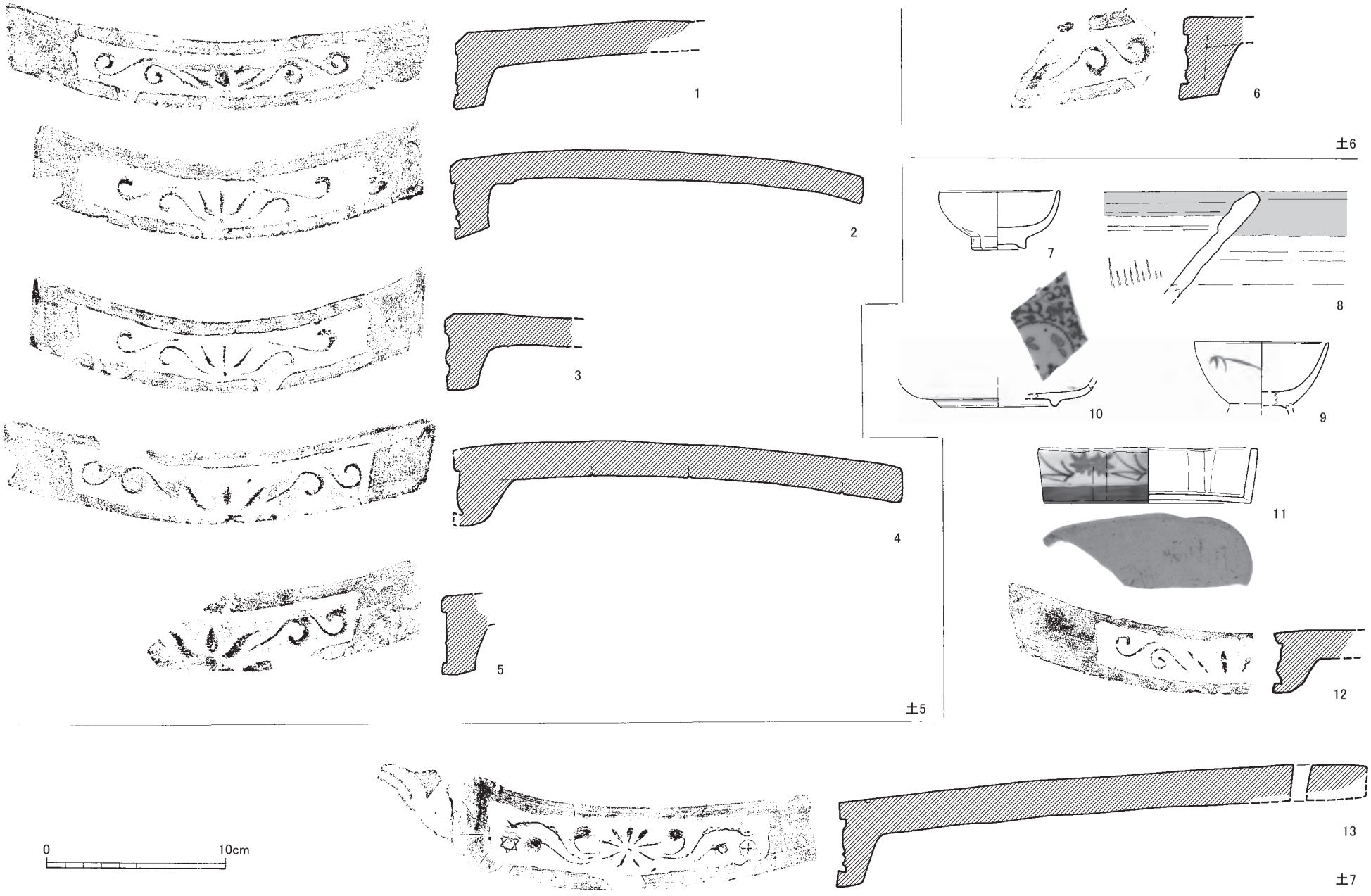


1. 7号土坑・落ち込み状遺構



2. 9号土坑

第 81 図　2次調査 7・9 号土坑、落ち込み遺構実測図（1/60）



第 82 図　2次調査 5 ～ 7 号土坑出土陶磁器・瓦実測図（1/ 3）

近代の遺構しかなかったので、攪乱土坑の遺物だけを回収して掘削することにした。上位層の下には整地層があり、これを除去すると中央部は黄色粘土、西部は傾斜しながらグライ化した青灰色粘土の基盤層だった。北西隅が最も深く、本来現在の川に向かって傾斜していた基盤層を整地して平坦面を形成していた。

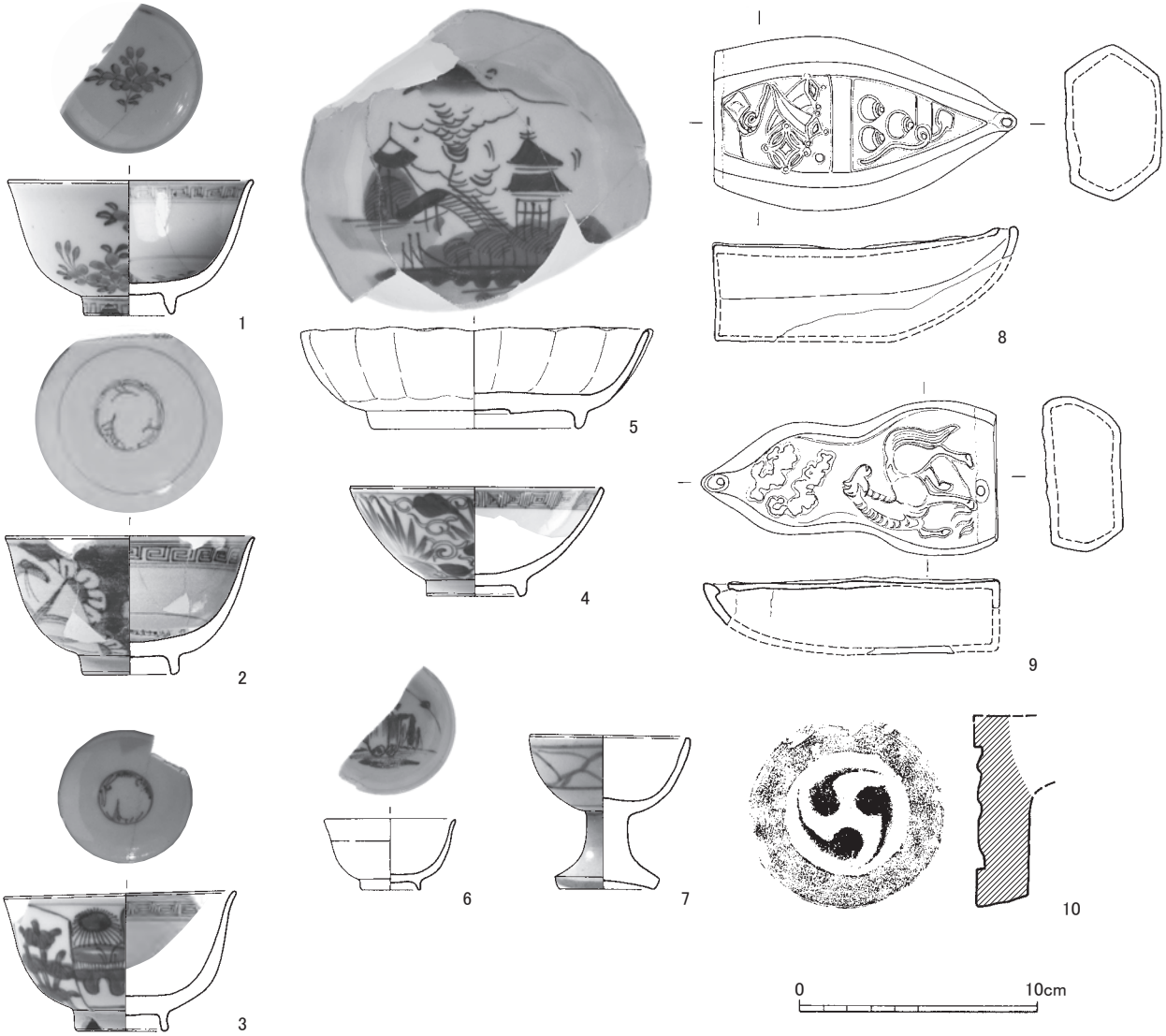
２次調査区では、土坑16基、大土坑２基、溝状遺構11条、大溝遺構３条、埋甕遺構１基が検出された。北校舎の西側はコンクリート基礎の下に基礎杭が打たれており、表土剥ぎと人力掘削には困難を極めた。１次調査のような近代の礎石は残っていなかったものの、礎石下の杭は多く見られたが、杭の新古で見分けられた。

土坑

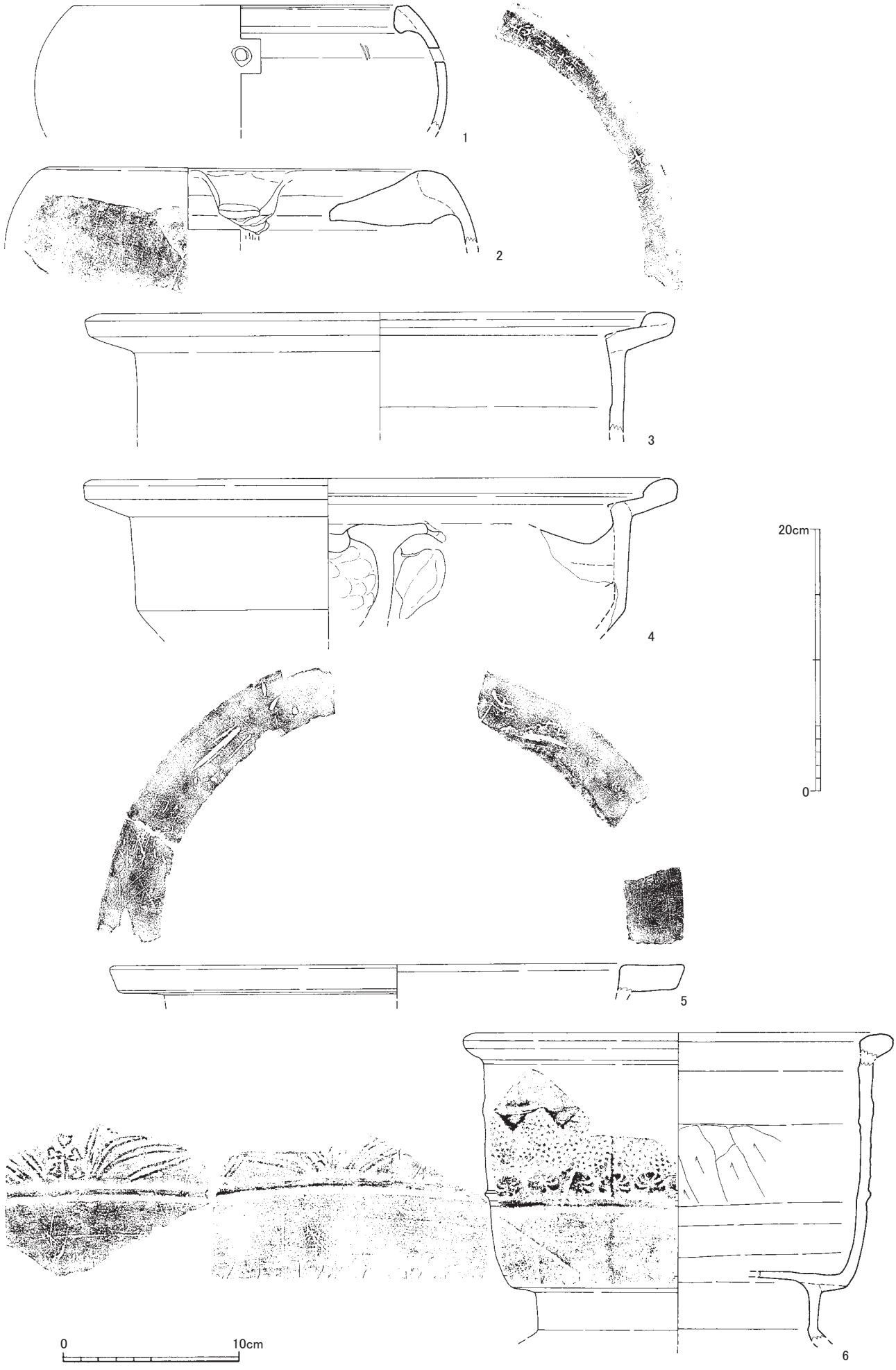
８号土坑は９号土坑の埋土の差だったので欠番とする。

１号土坑（図版 19、第 76 図）

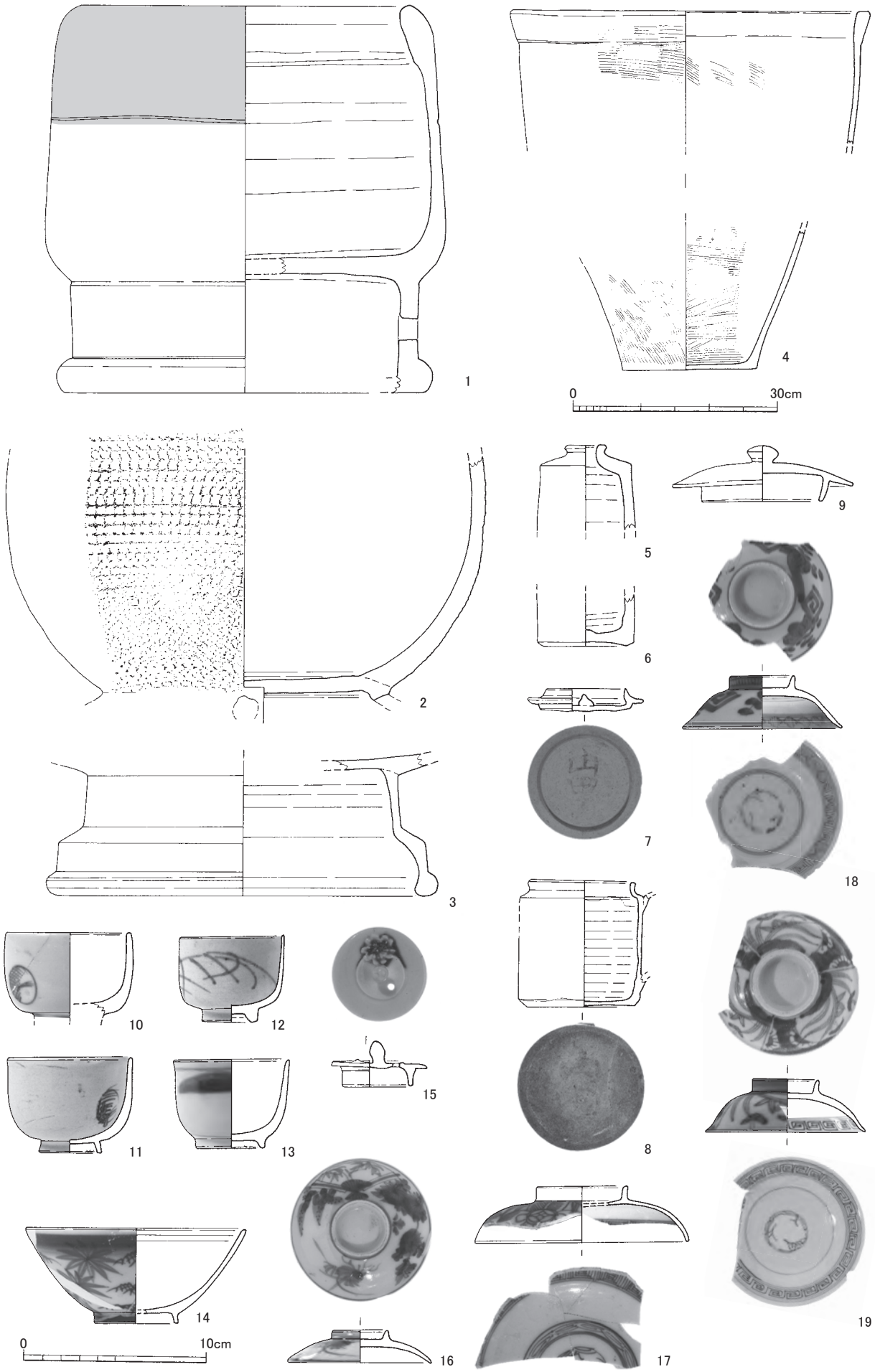
北東から検出された不整形プランで、最初は中央部の瓦が入る部分だけしかわからなかったが、掘り進めると中位から瓦が多く出土し、精査するとプランが広がった。壁が緩やかに立ち上がっており、中央部が窪んでいる。主軸方向は不明で、長軸 253cm、短軸 174cm以上、深さは約 70cmと深



第 83 図　２次調査９号土坑上層出土陶磁器・瓦実測図（1/ 3）



第 84 図　2次調査9号土坑出土器実測図（2・5は1/4、他は1/ 3）



第 85 図　2次調査9号土坑出土土器・陶磁器実測図（4 は 1/8、他は 1/ 3）

い。基盤層に近い青黄灰色粘土を埋土としているため、床面が不明確だった。中位は有機質が互層に入っており瓦が多く出土し、図化していないが最深部で斜めに差し込まれた径 1cm の小杭があった。小杭の先端を長く尖らせており、深く刺さっていたが役割はわからない。出土遺物は瓦しかないが、第 77 図 5・6 の軒平瓦は 5 号土坑と同范なので、18 世紀前葉に属するだろう。

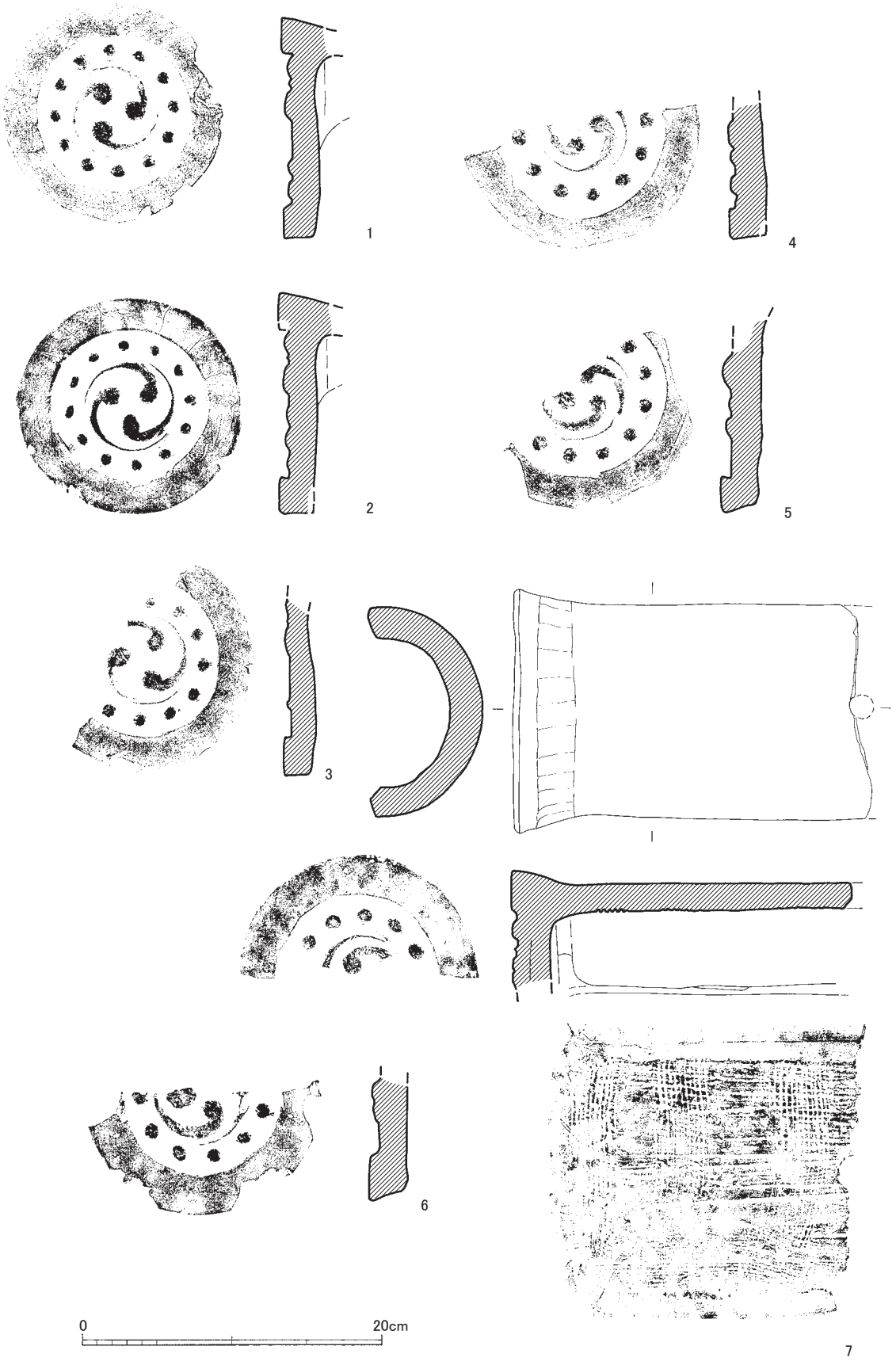
出土遺物（第 77 図）

２は丸瓦で、成形痕が特徴的なので搬入品の可能性がある。

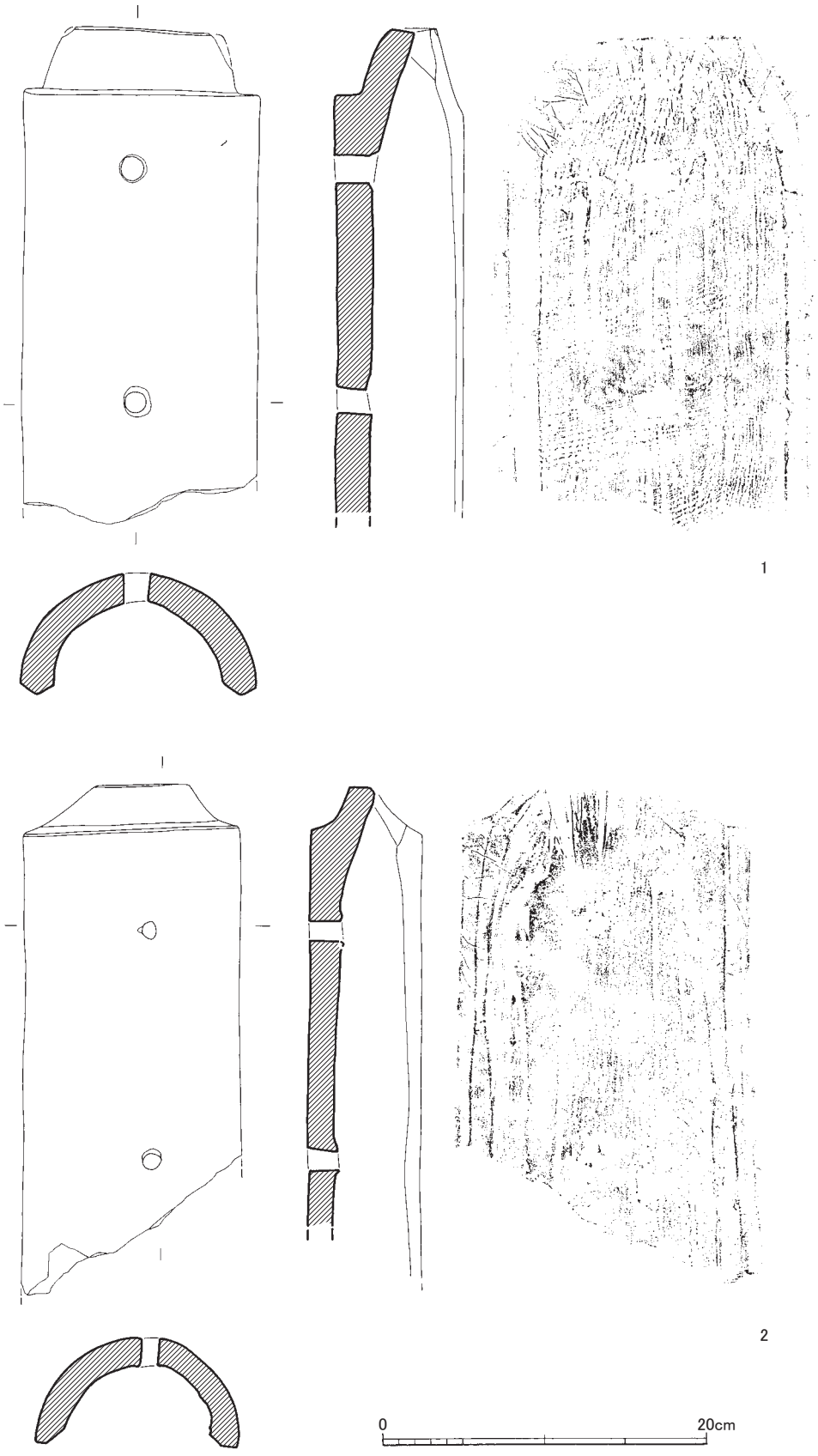
２号土坑（第 76 図）

東端から検出された楕円形プランで、南半分は調査区外に延びる。床面はほぼ平坦である。N - 79° 10′ - Wを主軸とし、長軸 189cm、短軸 80cm以上、深さは約 70cmと深い。図化できる出土遺物なし。

第 86 図　2次調査9号土坑出土陶磁器・瓦実測図（15 ～ 17 は 1/4、他は 1/ 3）

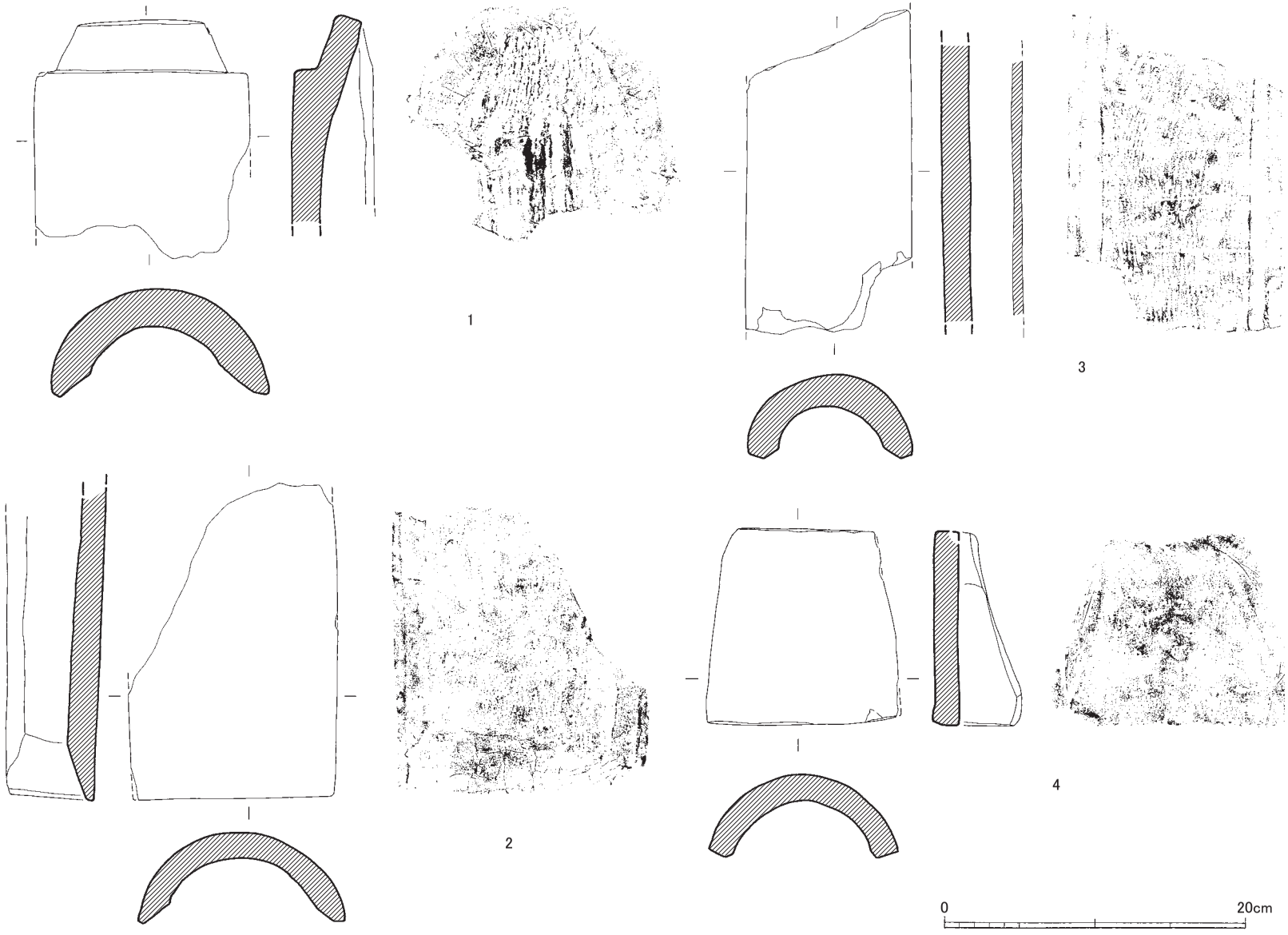


第 87 図　2次調査9号土坑出土瓦実測図1（1/4）

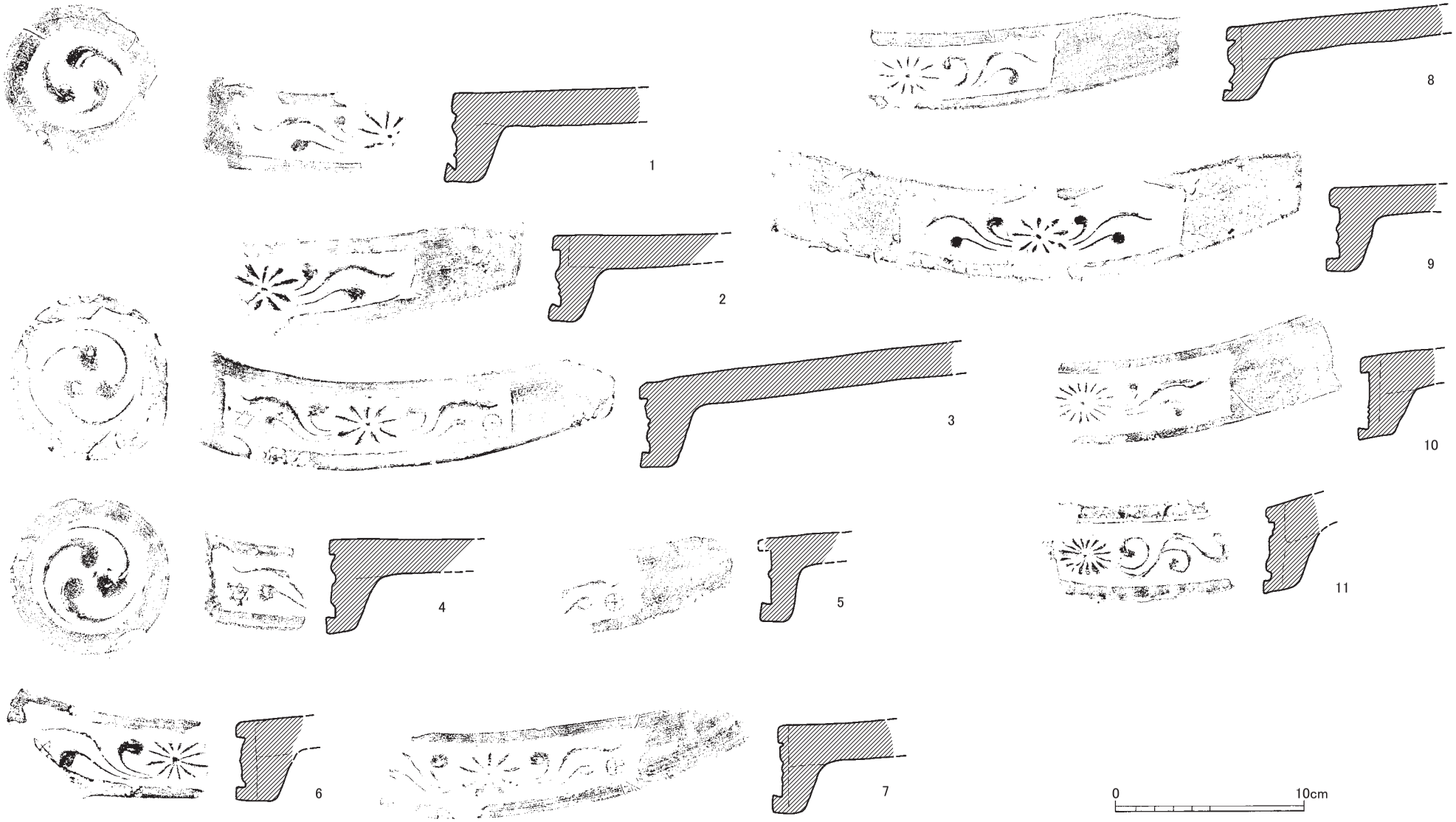


第 88 図　2次調査9号土坑出土瓦実測図 2（1/4）

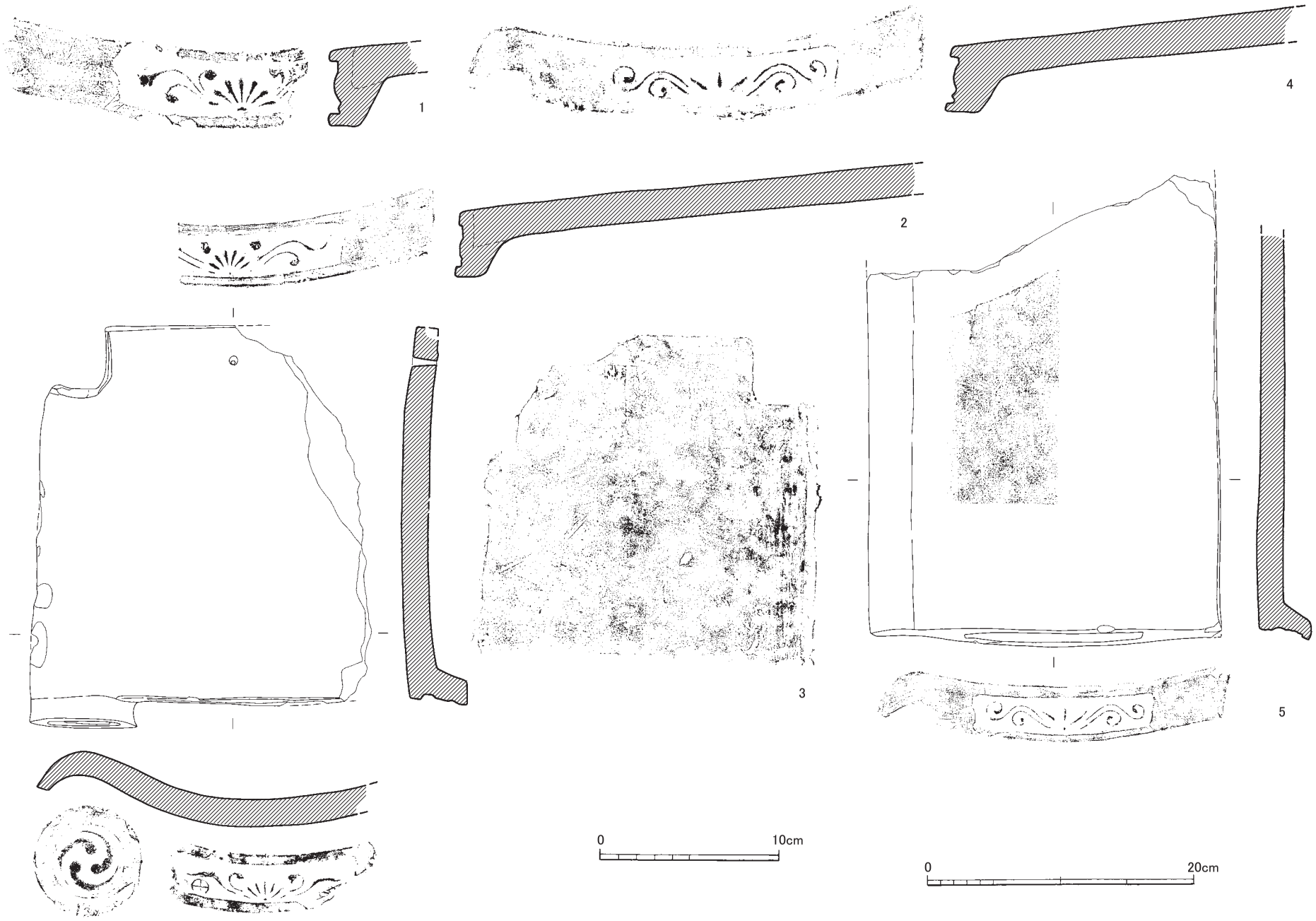
第 89 図　2次調査9号土坑出土瓦実測図 3 (1/4)



第 90 図　2次調査9号土坑出土瓦実測図 4（1/4）



第 91 図　2次調査9号土坑出土瓦実測図 5（1/3）



第 92 図　2次調査9号土坑出土瓦実測図6（3・5は1/4、他は1/3）

第 93 図　2次調査9号土坑出土瓦実測図7（1/3）

３号土坑（図版 19・20、第 76 図）

中央北側から検出された隅円方形プランで、7 号溝状遺構を切る。N － 80° － E を主軸とし、長軸 203cm、短軸 111cm、深さは約 70cm と深く、床面の縦断面は丸みをもち、幅が狭い。上位は埋没過程の窪みを利用した炭化物の廃棄場所にされていたようで、明瞭に検出された。中位にも炭化物と焼土を含む黒色層があり、木質も残る。掲載していないが、小枝や台形の板材が見られる。出土遺物が多いので廃棄土坑だろう。

袈裟襷文帯の染付から 18 世紀第 3 四半期か。

出土遺物（図版 54、第 78・139・141・142 図）

第 78 図 5 は瓦質土器の火鉢で、内面の沈線は入るところと入らないところがあり、意図的なものか不明である。このほかニホンカボチャの種子 15 点が出土している。

４号土坑（図版 20、第 76 図）

中央部から検出された隅円方形プランで、7 号溝状遺構を切る。N － 86° 40′ － W を主軸とし、長軸 263cm、短軸 164cm、深さは約 70cm と深い。瓦が集中して出土した。木質もあり、掲載していないが桶の側板材片があった。時期を特定できる遺物は少ないので、時期不明。

出土遺物（図版 34、第 78 図）

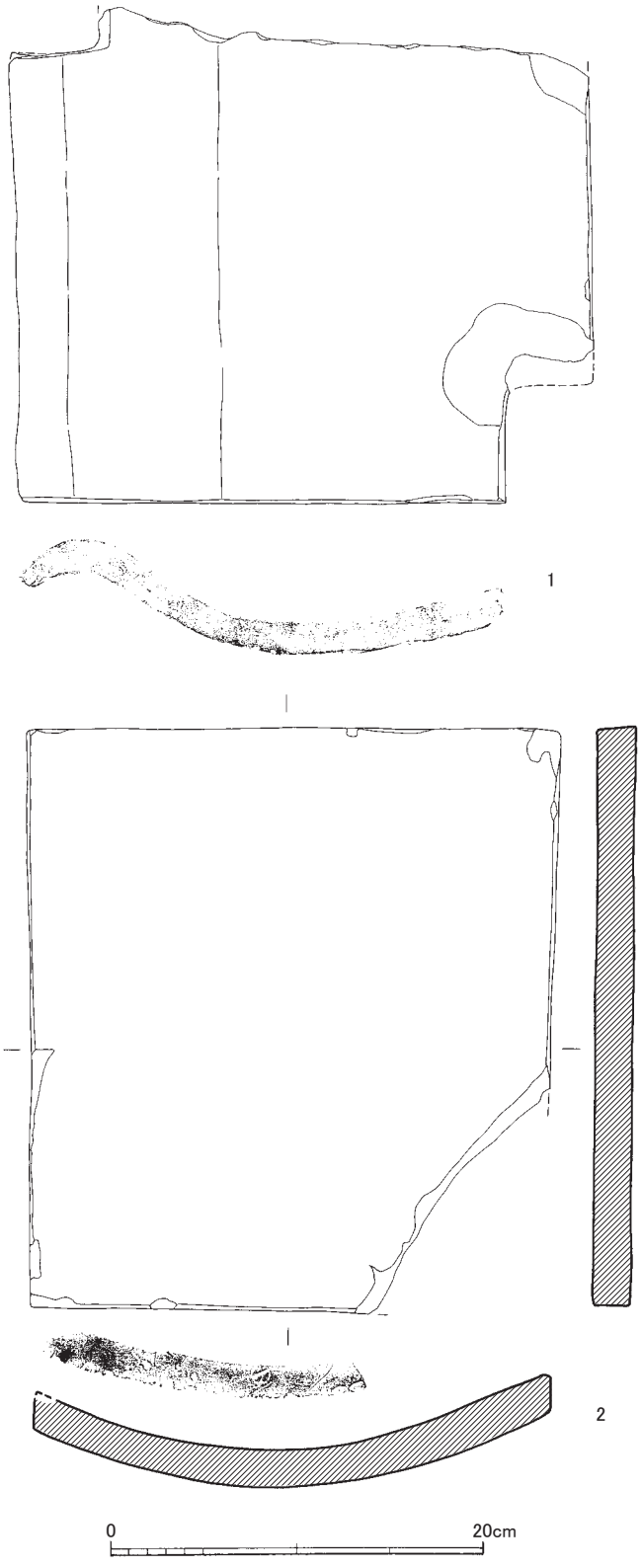
17 の染付は 16 世紀の明の青花にモチーフが似ているので、模倣したものだろう。このほかモモの核が出土している。

５号土坑（図版 21、第 76 図）

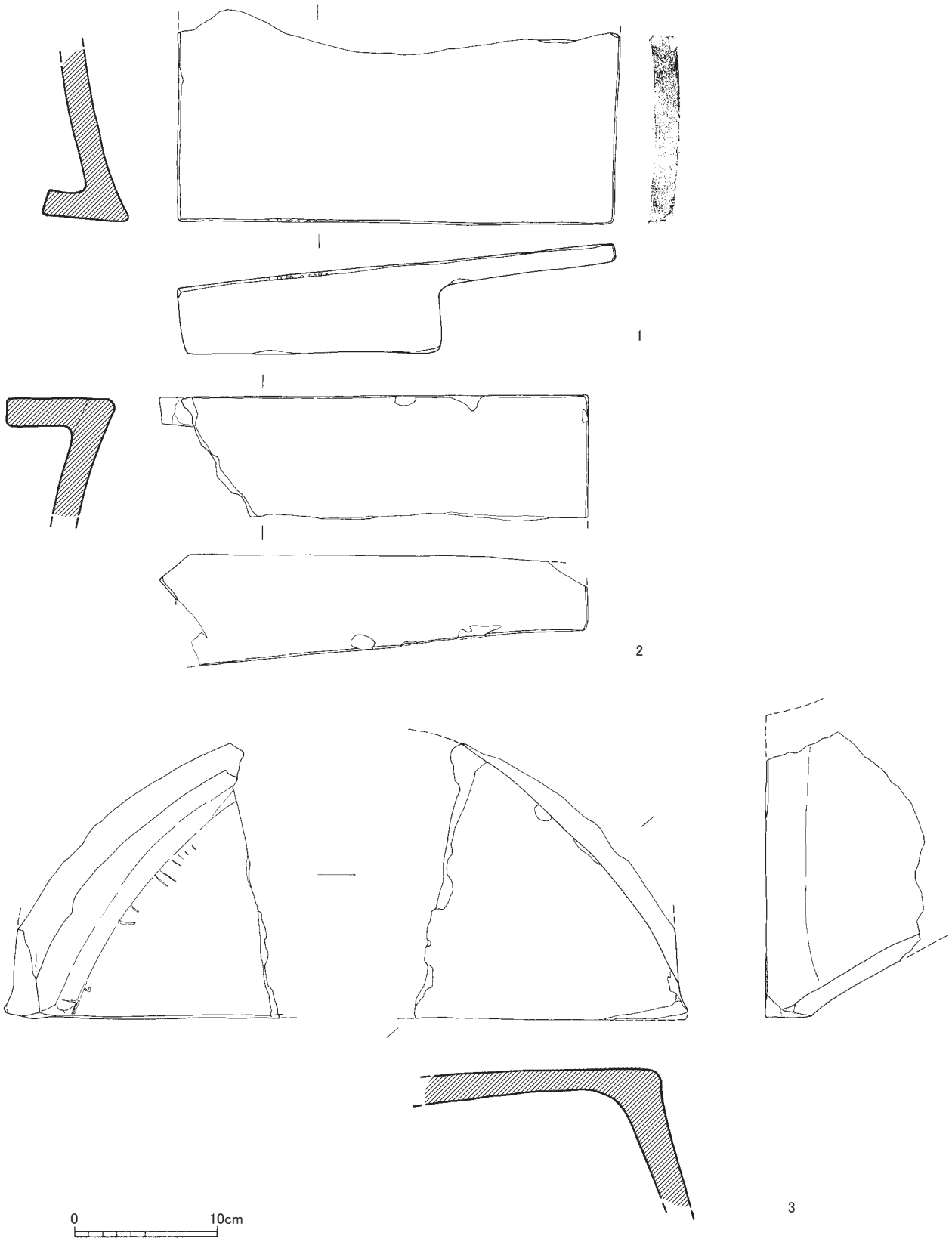
中央部から検出された方形プランで、壁が直に立ち上がり、床面はほぼ平坦で規格的に掘られている。N － 86° 40′ － W を主軸とし、長軸 468cm、短軸 323cm、深さは約 126cm と深い。瓦廃棄土坑と見られ、上位から多量に入っていた。中位にシカらしい下骸骨が出土したが腐食が著しく取り上げられなかった。18 世紀後半か。

出土遺物（図版 49、第 79・80・82 図）

第 80 図 2 は丸瓦だが、釘孔の位置が偏っており、孔を中心にすると大きく傾く。軽石製品が出土しているが、加工は見られない。



第 94 図　2次調査9号土坑出土瓦実測図8（1/4）



第 95 図　2次調査9号土坑出土瓦実測図９（1/4）

６号土坑（図版 21、第 76 図）

中央東北部から検出された土坑で、北を 4 号溝状遺構に切られ、南は調査区外に入るため、全体像がわからない。壁が直に立ち上がり、現存長で 290cm、深さは 42cmを測る。1 号大溝が下にあるため、底面は不明瞭だった。

出土遺物は瓦しかないが、軒平瓦が 5 号土坑と同范なので、18 世紀前葉だろう。

出土遺物（第 82 図）

６は軒平瓦で、三葉文を主文とする。

７号土坑（図版 21、第 81 図）

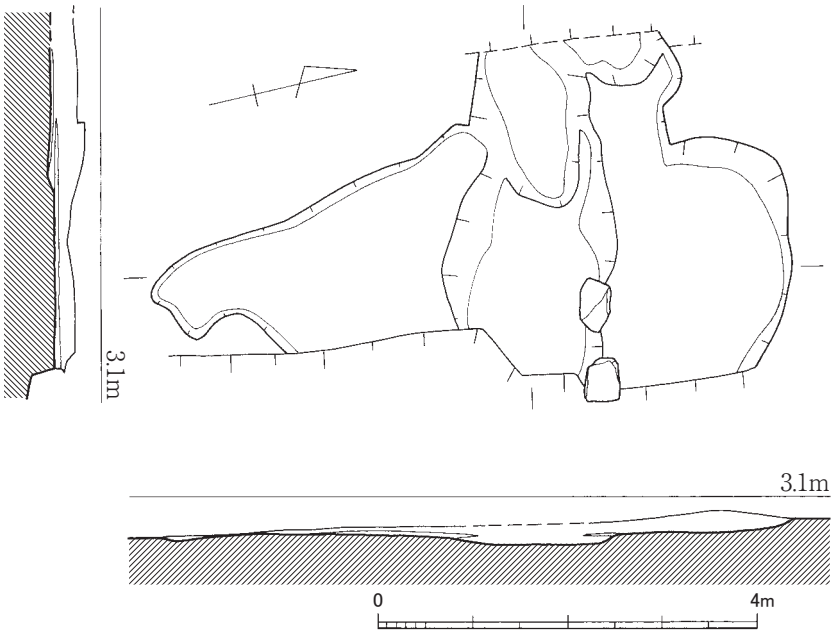
南西端部から検出された土坑で、上位に落ち込み状遺構が被っていた。南は調査区外に入るため、全体像がわからない。北側の立ち上がりが明瞭だったため、落ち込み状遺構とは別の遺構と判断できた。現存で短軸 252cm、深さ 40cmで、南東が深くなる。南側に柱 1 が立っており、切り合いはわからなかったので、上から掘り込まれたものか不明。柱 1 は正置されていた柱材で、上位は横に切られている。径 30cm、高さが 44cmあり、底面は平坦に加工されていたことから、柱材であろう。11 のコンニャク印判手があることから 18 世紀前葉に属するだろう。漆椀片が出土している。

出土遺物（図版 35・45、第 82・127・139 図）

第 82 図 11 には外底に墨書があるが、判読できない。

９号土坑（図版 21・22、第 81 図）

中央西部から検出された方形プランの土坑で、２号大土坑を切り、南端を基礎に切られている。検出時には上位の土色の異なる範囲を８号土坑としていたが、8 号土坑が浅く、中央にあった礎石が９号土坑から露出したものであったことから遺構の埋土の差と考えた。長軸 524cm、短軸 362cmで、深さ 106cmを測る。北側にテラスがあり、その縁沿いと南側の掘り方沿いに杭が打たれていた。中位に瓦と屋根材と見られる木製の格子が大量に廃棄されており、瓦釘も出土したことから瓦屋根建物を取り壊した際の廃棄土坑とわかった。ガラス片や石筆が出土しているが、銅版刷り染付は存在しないので、明治中期のものと考えられる。両口点眼式目薬瓶は、発売されたのは昭和 7 年であり、石筆の使用時期とは合致しないので、最終埋没の時期を示す資料であろう。出土遺物には文房具と見られる物がある一方日用品もあるので、寮の学生の持ち物が廃棄されたものと考えられる。なお、11 号土坑出土第 102 図 4 と本遺構出土



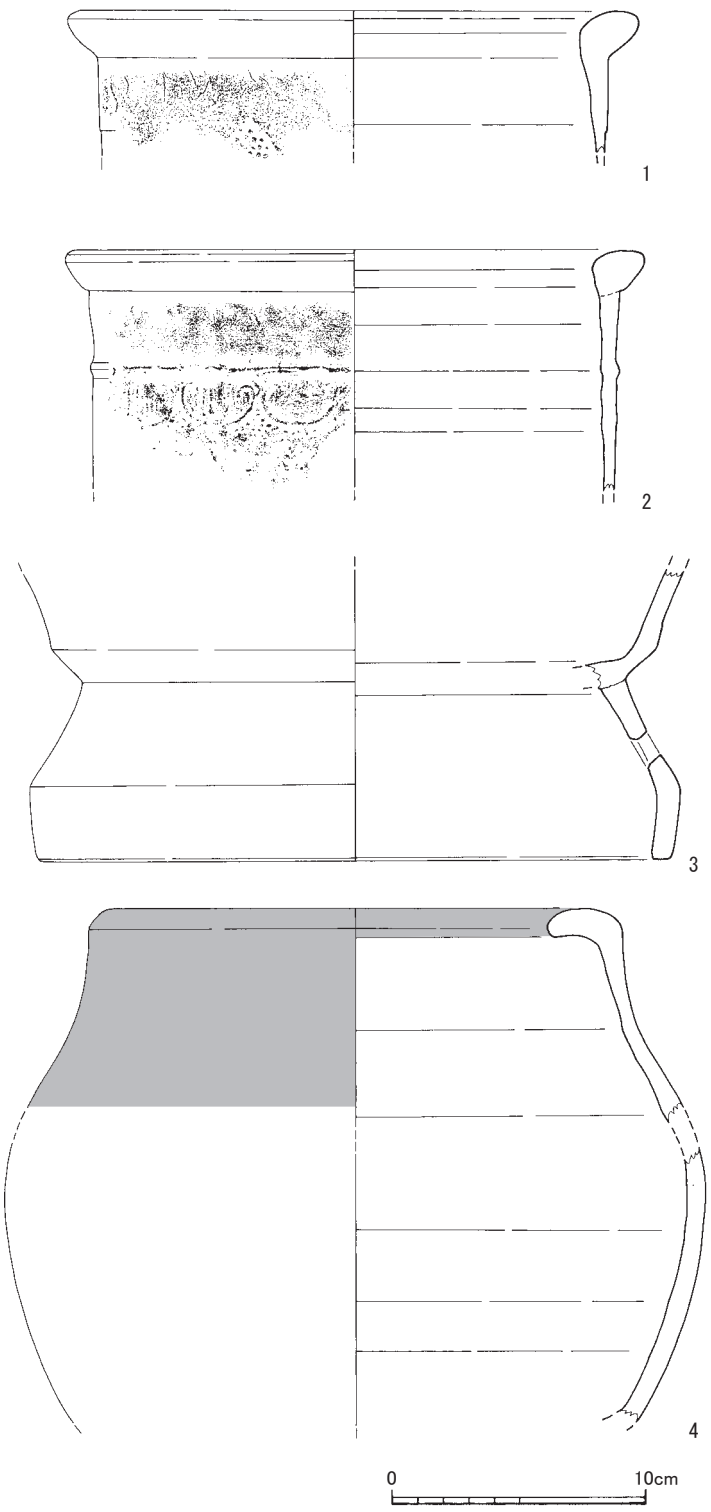
第 96 図　2次調査 10 号土坑実測図（1/80）

破片が接合したので、同時併存である。

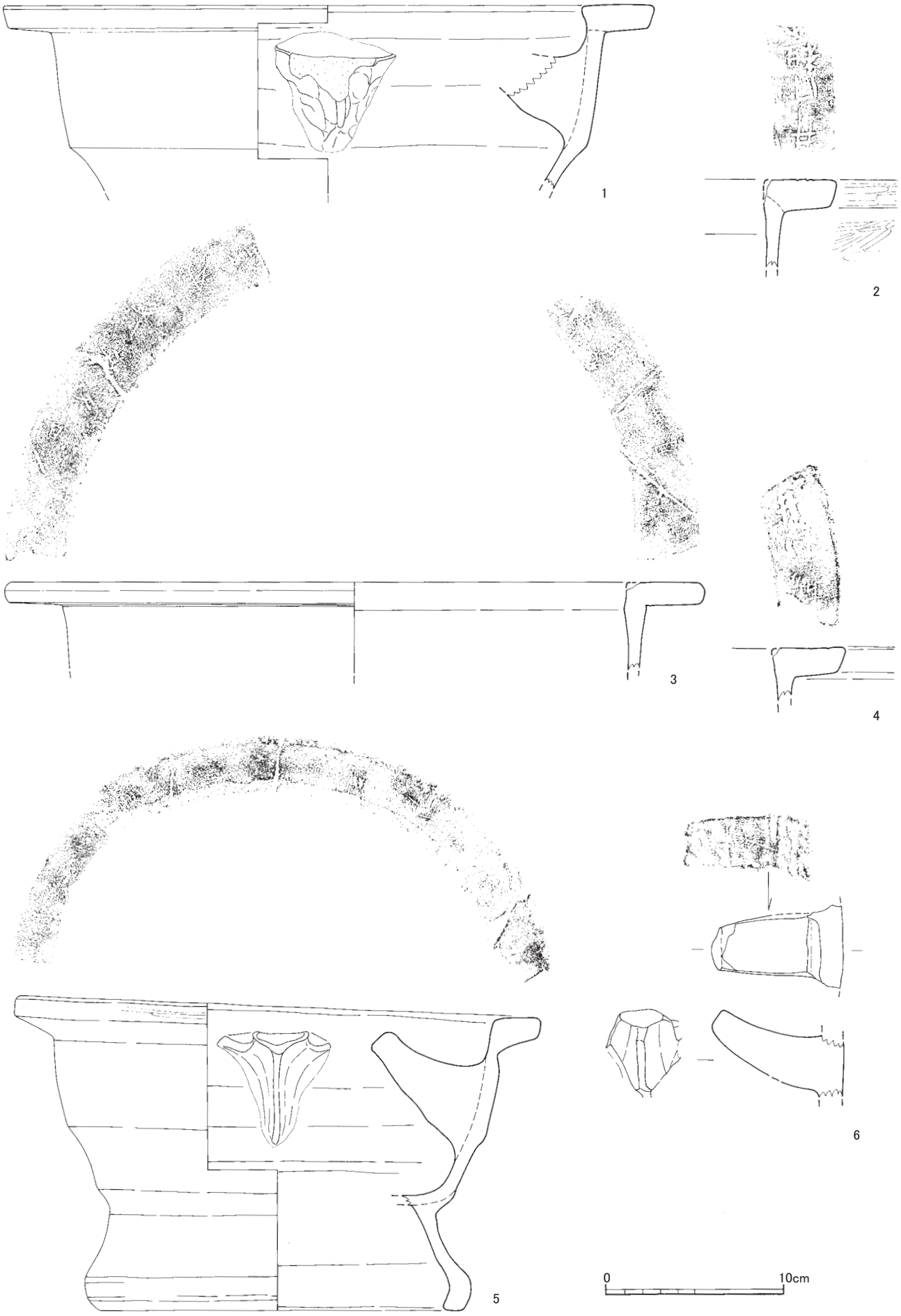
出土遺物（巻頭図版５・図版 34 ～ 36・45・49・50・53 ～ 57、第 83 ～ 109・125・128・139 ～ 142 図）

第 83 図１～９は、当初８号土坑として取り上げた本遺構上位出土遺物である。第 84 図２は土師質土器の火鉢で、外面に縦の沈線があるが、意図的なものか不明。第 84 図３の火鉢は口唇部に線刻「志植森」があるが、意味はわからない。その下に間を開けて「十一」がある。１次調査 20 号土坑出土遺物に不掲載ながら「十」らしい線刻か傷があり、なんらかの関連があるかもしれない。第 84 図５の火鉢には、口唇部に「□九」「立花　筑紫　由布」「梅澤　□　竹原」「□扱渡辺」があり、人物の名字が書かれている。第 84 図６の表面は黒漆を塗布したような光沢がある。第 85 図１は外面胴部中位に２条の線刻があり、そこから上は灰黒色で、下は黄灰白色を呈する。これは意図的に付けられた色調差であろう。

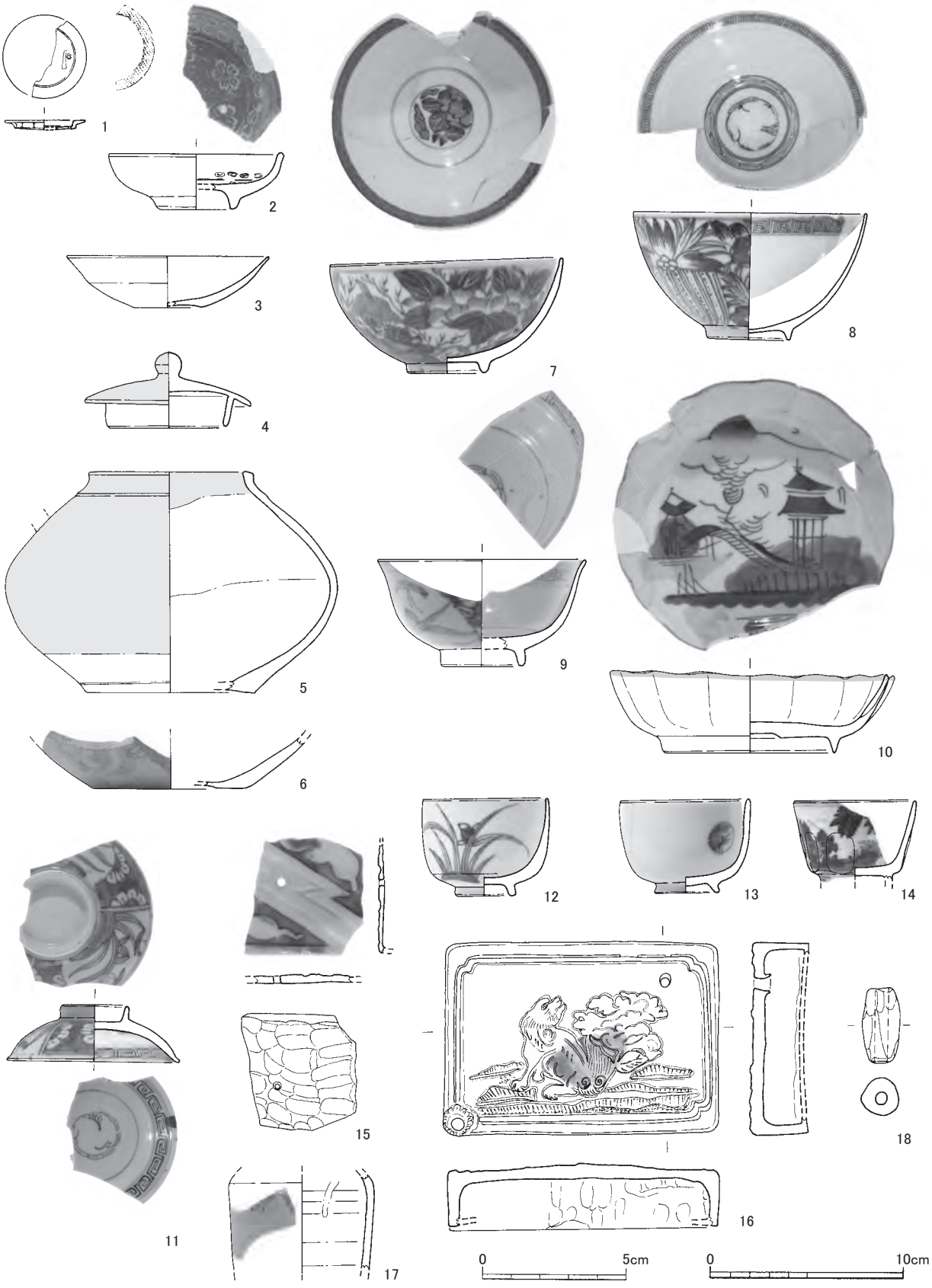
第 85 図５と６は別個体で、同じような炻器の破片を集めてみると、本遺構からは同じものが少なくともあと２個体存在する。掲載していないがこのうち１つには墨が付着してたが真っ黒ではない。同様の瓶がガラス製インク瓶が普及する以前のインクボトルであったが、胎土はヨーロッパの陶器製ワインボトルに近いことから海外製の可能性がある。７と８は１セットの水差しで、墨書がある。７には「山田」、８には「山田」の下にもう１文字あるが「彦」だろうか。第 92 図５は桟瓦で、凹面に「嘉永」と線刻されている。第 125 図４～６は石筆、11 は黒板として使う石板である。石筆の小片はこのほかにも３点出土している。第 125 図 12・13・15・16 は硯であり、このうち 12 には「由布良□」と２度刻まれている。側面にも「由」が書かれている。第 141 図８は木札で、墨書から寮の看板とわかった。片面に「子番寮」、反対面には「弐番寮」とあり、上端に穿孔があるので、紐で提げるか、釘で留めるかしていたのだろう。また、第 138 図１は上下端部欠損で、１面は「為式」その下は



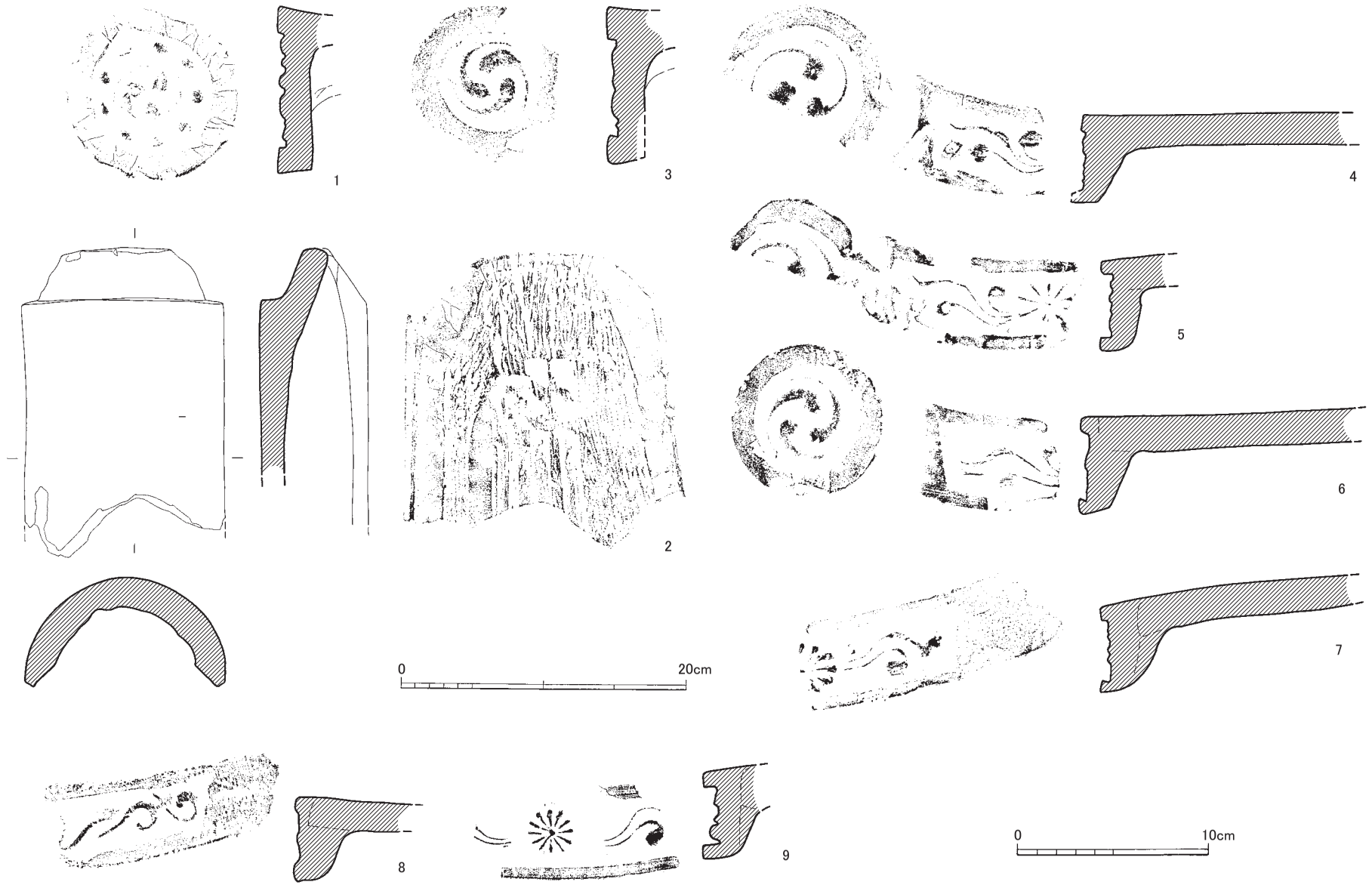
第 97 図　２次調査 10 号土坑出土土器実測図1（1/3）



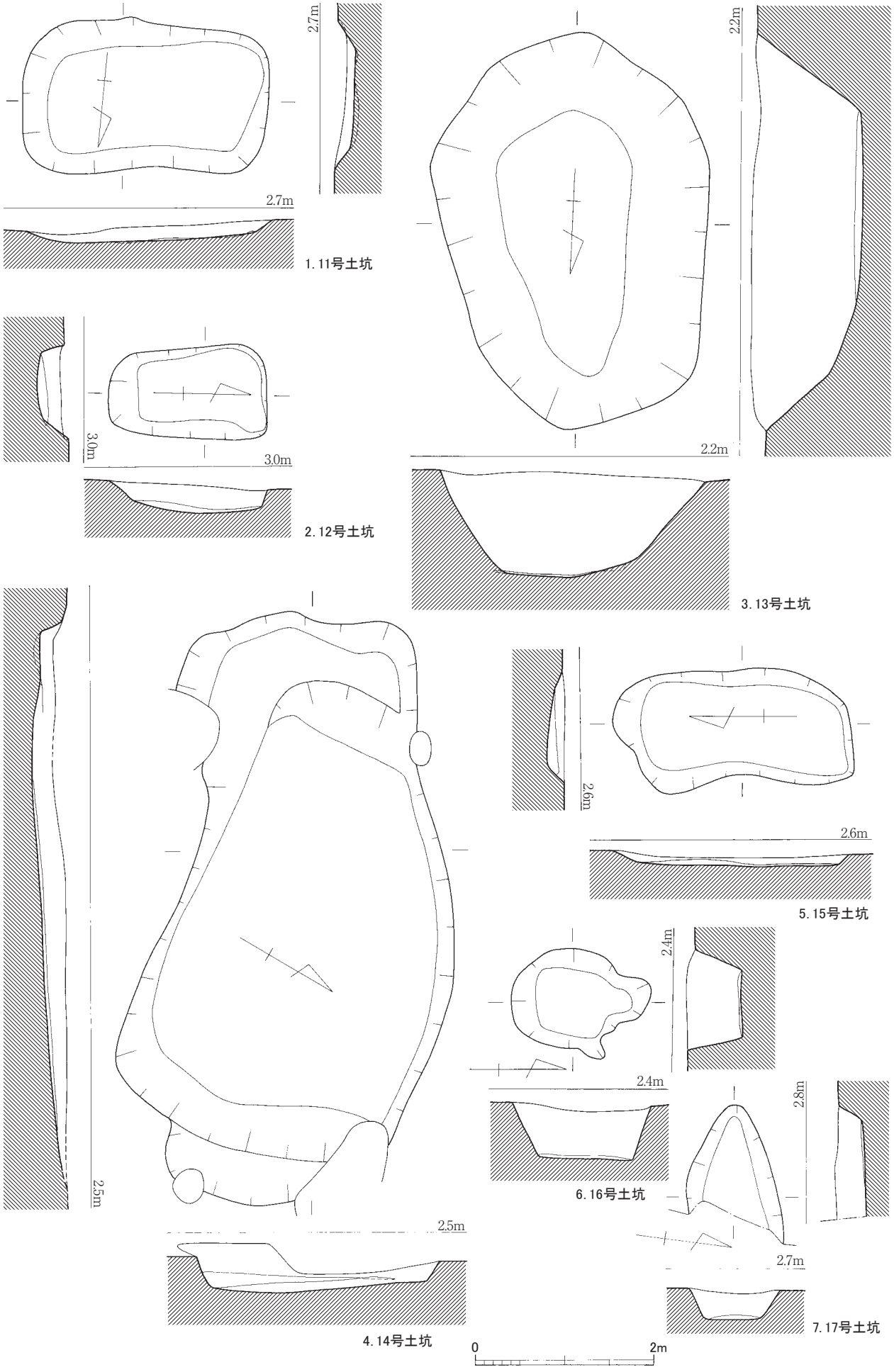
第 98 図　2次調査 10 号土坑出土土器実測図2（1/3）



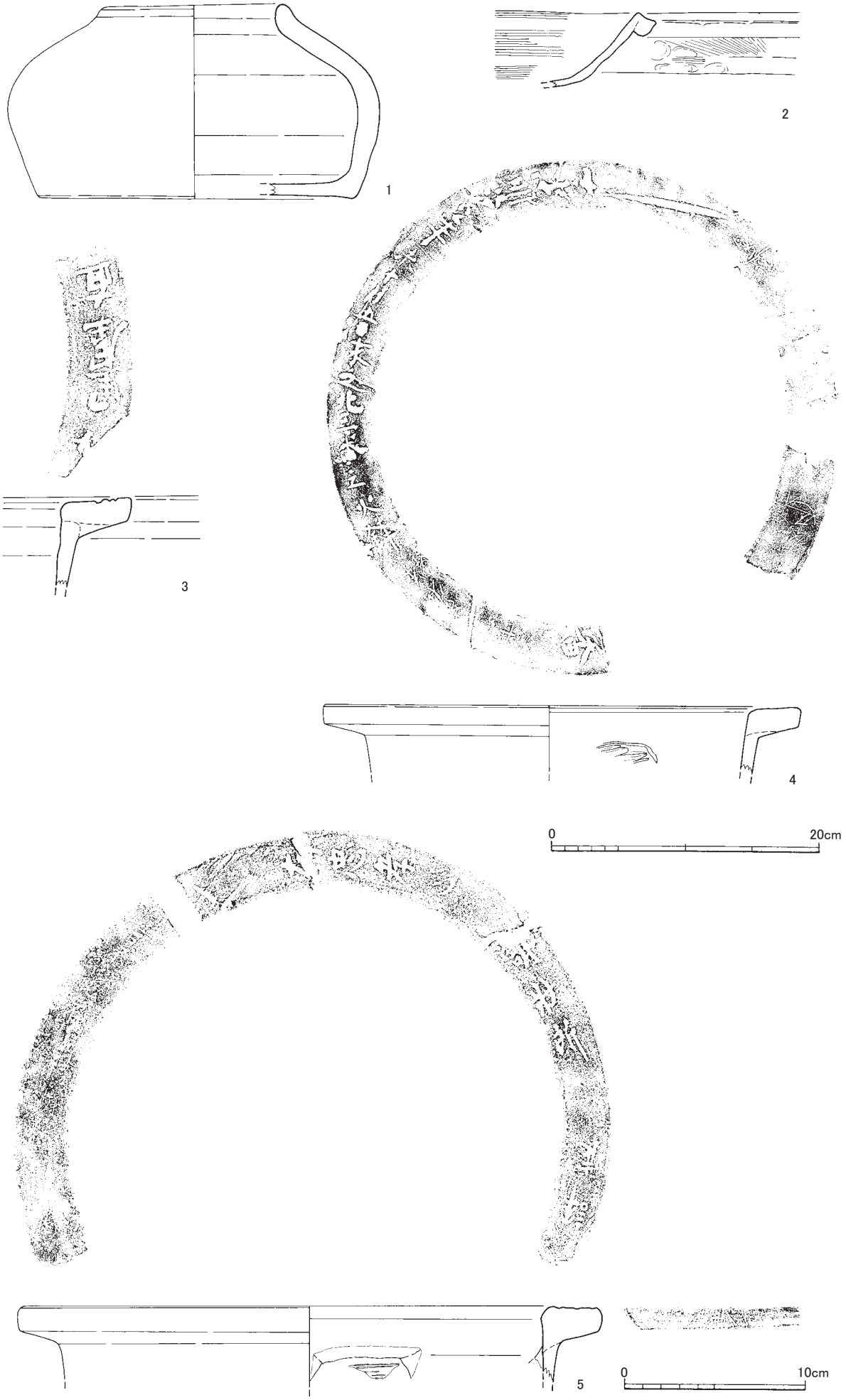
第 99 図　2次調査 10 号土坑出土土器・陶磁器実測図（16 は 1/2、他は 1/3）



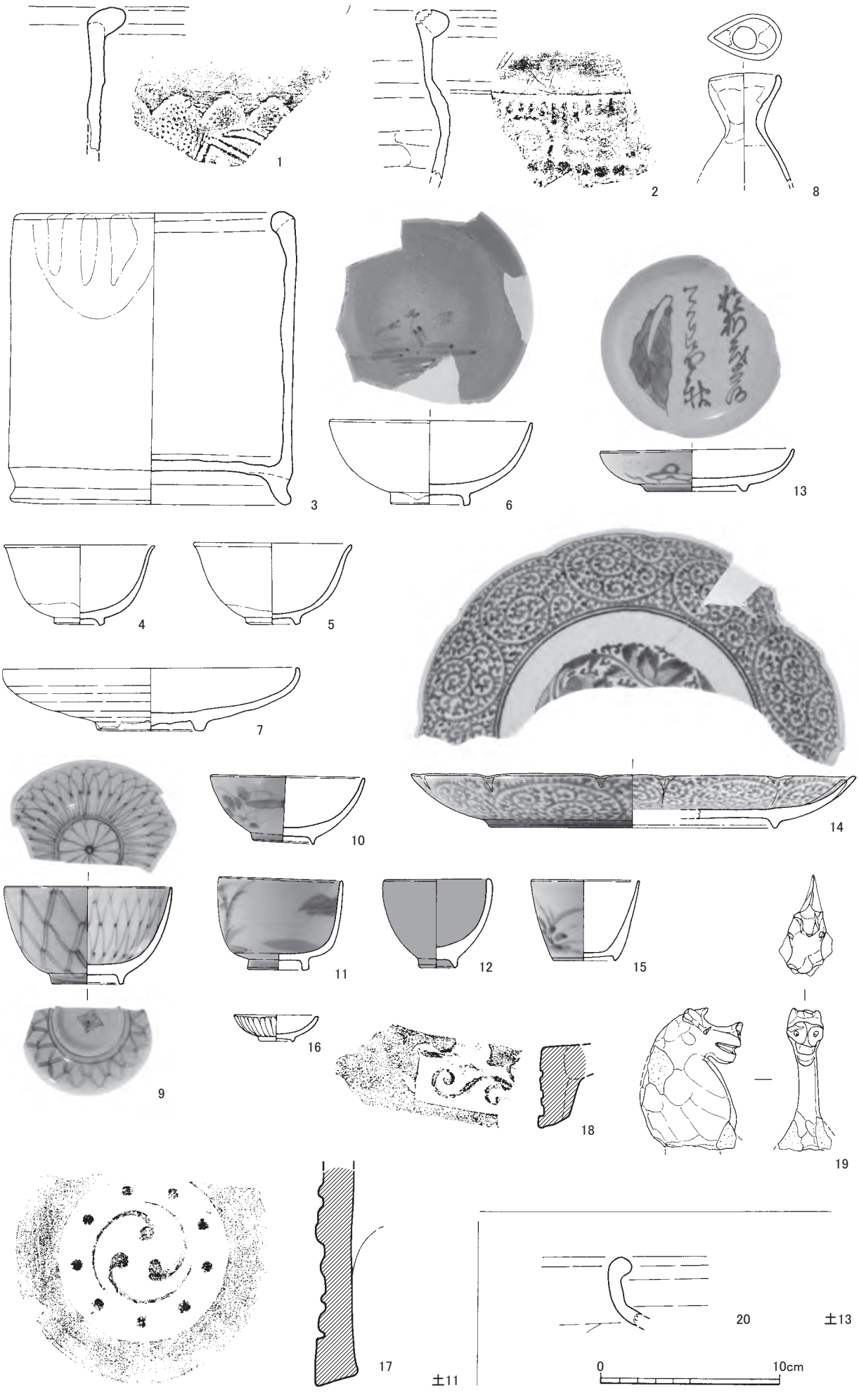
第 100 図　2次調査 10 号土坑出土瓦実測図（1・2 は 1/4、他は 1/3）



第 101 図　2次調査 11 ～ 17 号土坑実測図 (1/60)



第 102 図　2次調査 11 号土坑出土土器実測図（4は 1/4、他は 1/3）



第 103 図　2次調査 11 号土坑出土土器実測図（1/3）

右に「ヲシテイマハ□」左に「□木」「各□〔年ヵ〕」とあり、裏面は上下書く方を変えて、「ら□□□□□し時に」まで読める。漢籍の一部だろうか。第138図4は薄い板材片で、1面が「□不□〔驕ヵ〕小人□」裏面は判読できない。第138図5は方形孔をもつ木札で、両面に文字が書かれている。裏面の文字部分が陽刻のように浮き上がっているのは、墨の部分の木質の劣化が周囲より遅れたため浮き上がって残ったものだろう。1面の表面には孔の横に「□〔登ヵ〕於」と「梅〔楼ヵ〕乃所」、中央に「九大中村」、その下は2行に分かれ、「七□」「□山」とあり、裏面は孔右横に「□□」文字下に「水」、左横に「林□」文字下に「水」、中央に「大〔おヵ〕」その下は小文字で2行あり、右に1文字、文字下に「□〔密ヵ〕」左に三文字、文字下に「月」、これら2行の文字の下に更に1行で2文字入る。第142図1～8・13は一見したところ建築部材の残欠のような方形の板材で、規格がばらばらだが意図的に作られたもののようだ。第138図6は漢数字の墨書が入るので、なんらかの教材だったのだろうか。これらは教員が学生の持ち物だろう。第124図15・16はワイングラスとボトルである。第126図4は鹿角製のボタンなので、洋服を着た人物がいたことわかる。また、皮靴の底も出土していることから、これらは教員の持ち物だったのかもしれない。第124図13は両口点眼式目薬瓶で、エンボスがないので、製作会社がわからない。先端と基部がネジ式になっており、プラスチックのキャップがつくものと考えられる。このほか、写真のみの掲載だが、端部を束ねて紐で縛って柄にするタイプの箒（図版57）が、紐が抜けた状態で出土している。

10号土坑（図版22、第96図）

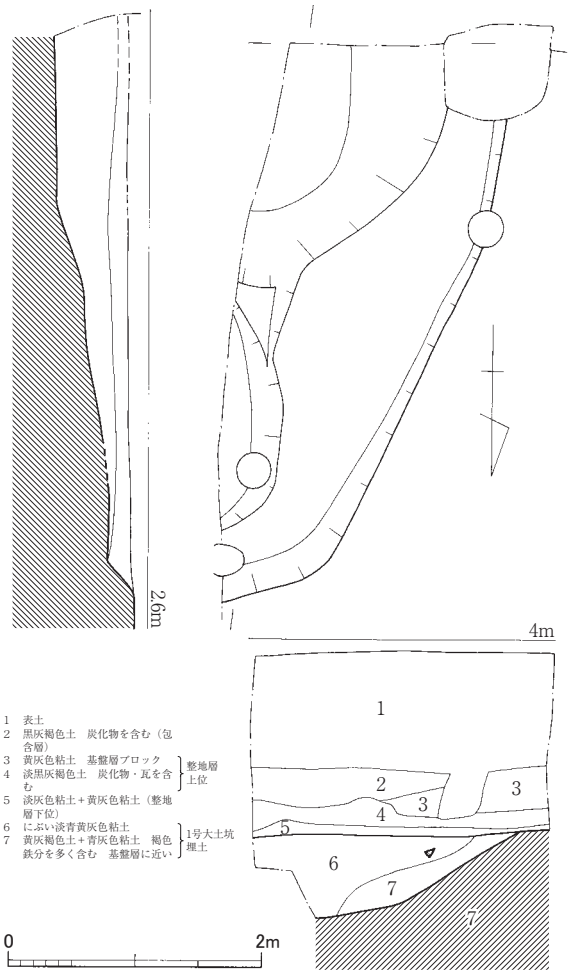
北西部から検出され不整形プランで、東側は校舎基礎に大きく削られているため、全体像がわからない。長軸364cmで、最深部でも25cmしかない低平な掘り方である。桟瓦が大量に出土しているので、明治中期に建物を取り壊した際の廃棄土坑であろう。

出土遺物（図版45・46・48、第97～100・125・128図）

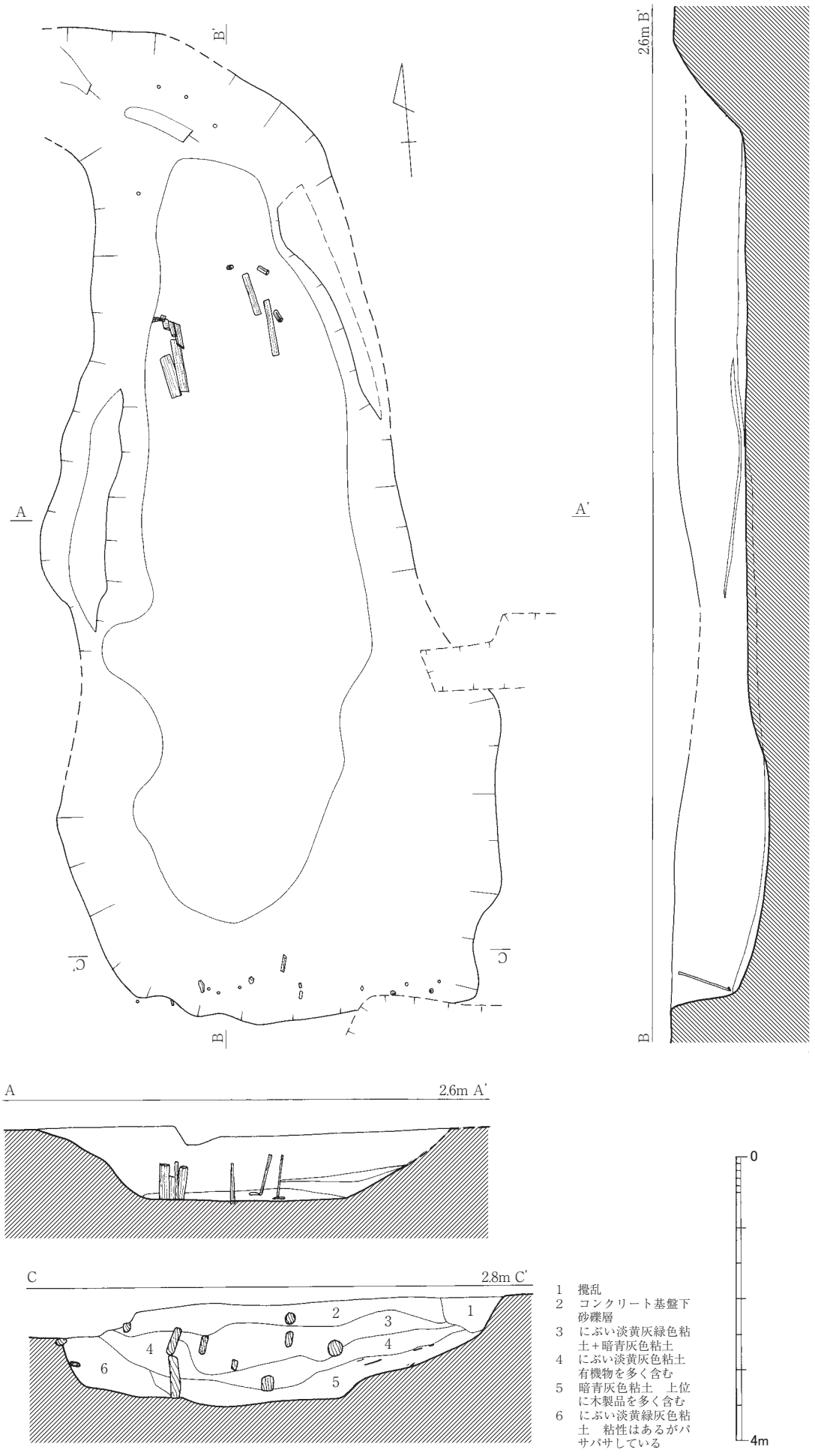
第97図1は、第84図6の9号土坑出土品と同じ文様だが、同一個体ではない。同じ型で製作されたものであろう。2は1と同一個体ではないが、径や口唇部形態と、内面の特徴的なケズリが同じなので、同じ工房のものだろう。第98図5は突起が大きく、3個あったものの2つが残る。内外黒灰色だが摩滅して胎の橙褐色が露出している。線刻は摩滅のため判読できるものは少なく、「表」「表寮」以外は判読できない。第98図6は火鉢の突起部で、上面に「五号」の線刻がある。寮の部屋番号であろう。

11号土坑（図版23、第101図）

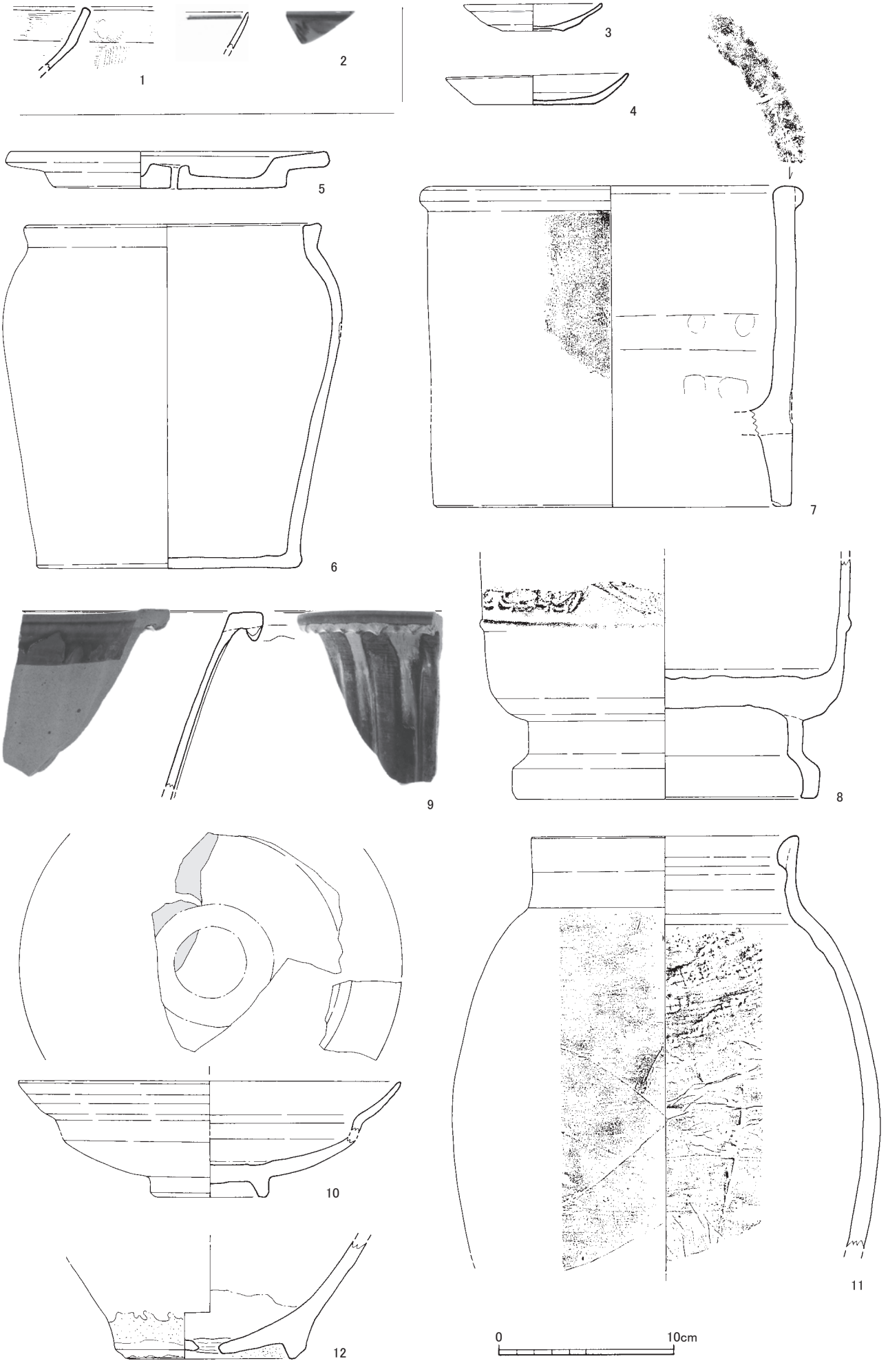
中央部から検出された隅丸方形プランで、N－85°－Eを主軸とし、長軸274cm、短軸176cm、深さは約



第104図 2次調査1号大土坑実測図（1/80）



第 105 図　2次調査 2 号大土坑実測図（1/80）

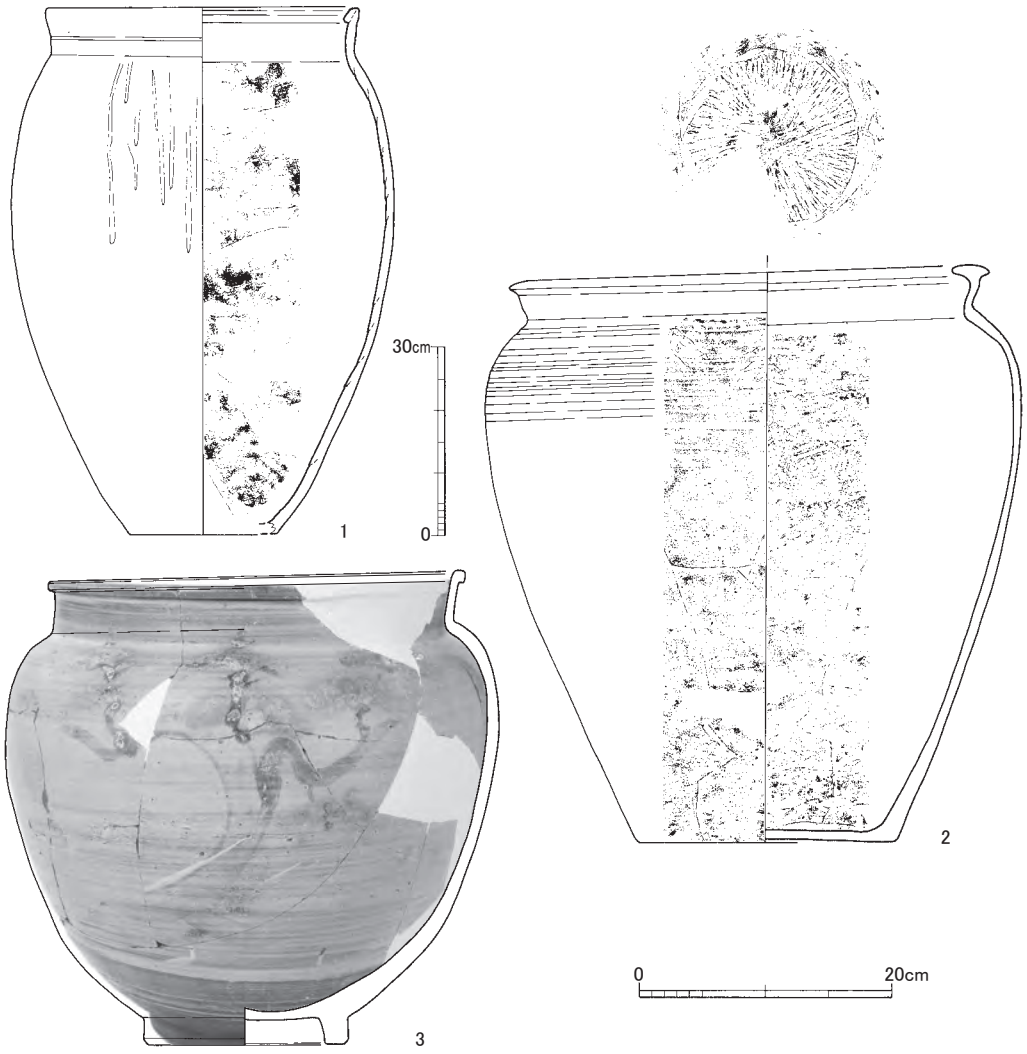


第 106 図　2次調査 1・2 号大土坑出土土器・陶磁器実測図（1/3）

20㎝と浅く、壁の立ち上がりも緩やかである。7・13号溝状遺構を切る。端反碗から19世紀中葉に属するが、切っている18世紀前葉の7号溝状遺構の遺物が混じった可能性がある。

出土遺物（図版39・40・45・46、第102・103・128図）

第102図3～5は土師質土器の火鉢で、口唇部に「□里屋直□」と線刻されている。幕末の柳河藩士名だろうか。第102図4は土師質土器の火鉢で、口唇部の線刻文字は、時計回りに「□番□□□」、方向を変えて「北」、方向を変えて「火鉢」、反時計回りには「北三番□□□□明治四年未十月五日□之北三番之火鉢」と書かれている。第102図5は、時計回りに「存忠孝心」「訴状所」、反時計回りには「評定」、「□将言不説不□」「□火□」と書かれている。評定所は明治四年に文武館の一部に置かれているが、同年7月廃藩置県により文武館は閉鎖となる。本遺物は同年10月の銘があることから、文武館閉鎖後の状況を物語っている。明治5年3月には文武館の建物を利用して「啓蒙社」という小学校が始まっている。この間も火鉢は使用されていたことになるので、何らかの施設として使われていたことが考えられる。なお、「評定」と「訴状所」という2つの機関名が書かれているが、「訴状所」の存在は確認できていない。「□将言不説不□」は漢文の句のようで、「将の言は説かず、○○せず」であろうか。第103図13は染付の小皿で、見込みに書かれている「梧桐一葉落ちて天下皆秋」は、清朝磁器に漢文で「梧桐一叶而天下知秋」と書かれたモチーフを写している。これは中国故事『淮南子・説山訓』に、「一葉の落つるを見て、歳の将に暮れんとするを知る」に基づくもので、「落葉の早い青桐の葉が一枚落ちるのを見て秋の訪れを察するように、わずかな前兆を見て、



第107図　2次調査2号大土坑出土陶器実測図（1は1/2、他は1/3）

その後に起こるであろう大事をいち早く察知する」ことをいう。

12 号土坑（第 101 図）

北西端から検出された隅円方形プランで、N - 2° - Wを主軸とし、長軸 174cm、短軸 106cm、深さは約 35cmと深い。図化できる出土遺物がないため時期を特定できない。

13 号土坑（図版 23、第 101 図）

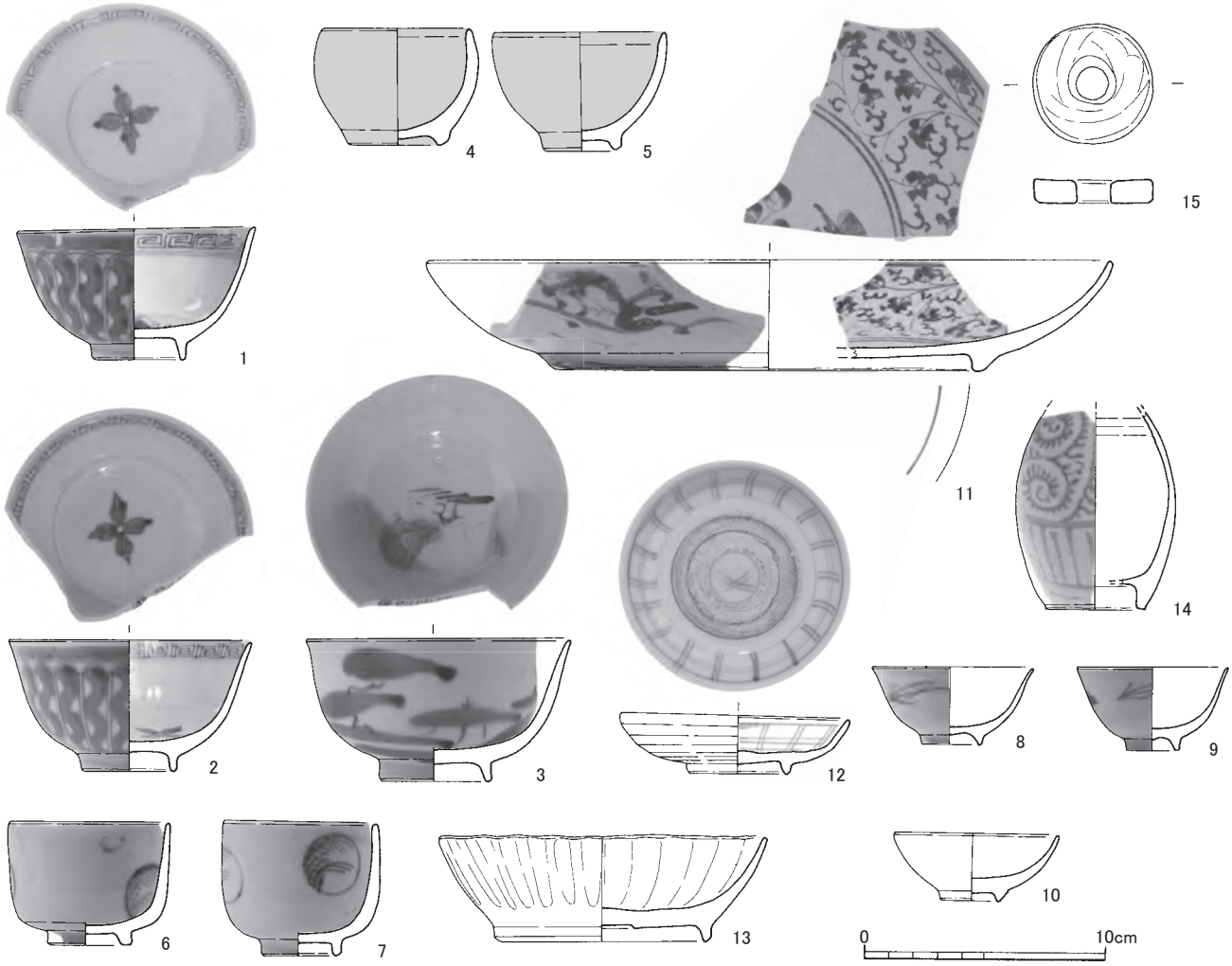
北西部から検出された不整形プランの土坑で、N - 3° 20′ - Wを主軸とし、長軸 446cm、短軸 310cm、深さは約 120cmと深い。7 号溝状遺構を切る。大型だが出土遺物が少なく、時期を特定できない。

出土遺物（第 103 図）

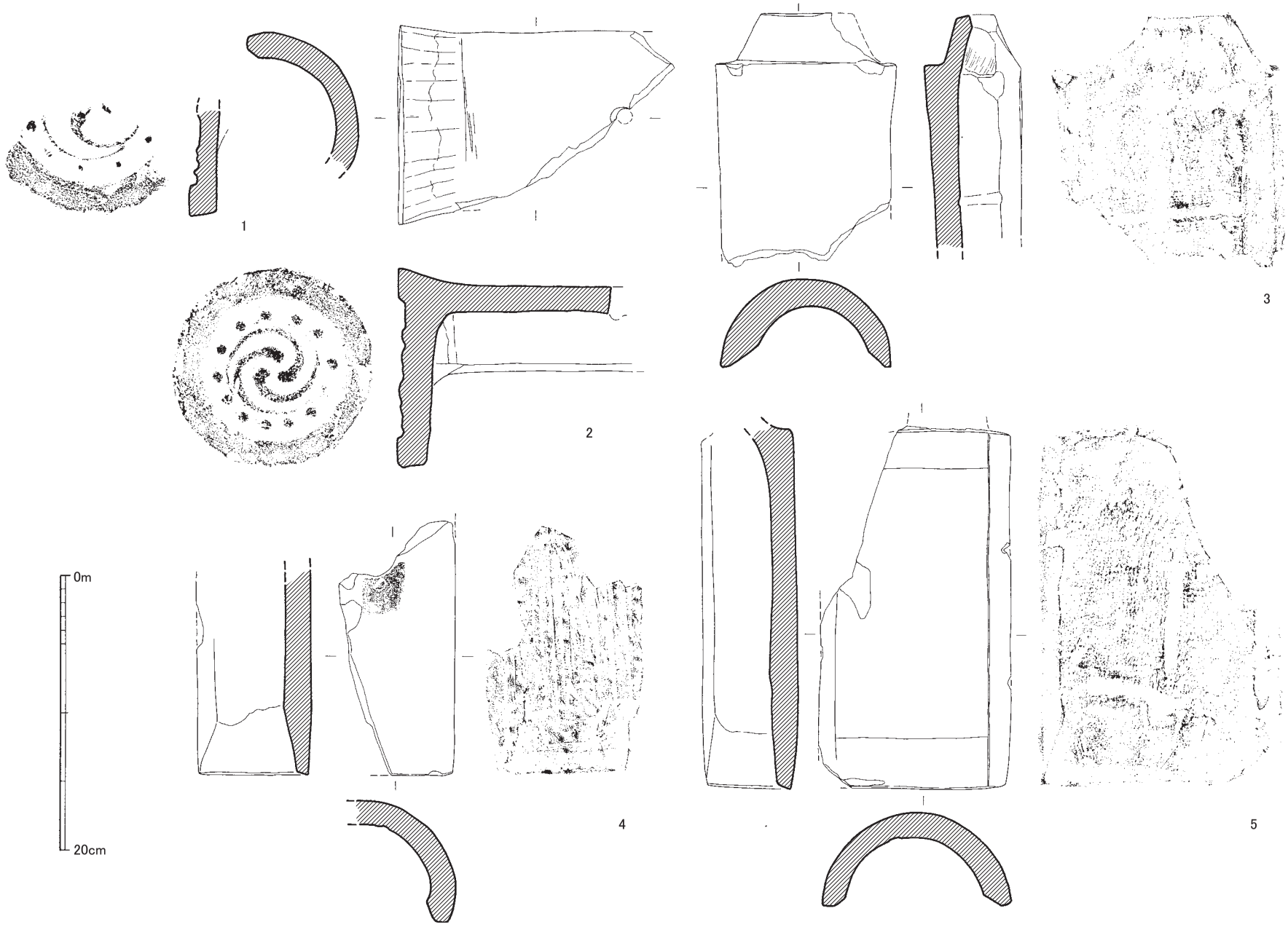
第 103 図 9 は陶器の壺で、褐色の釉薬は灰雄なのか褐釉かわからない。このほか、トウガンの種子が出土している。

14 号土坑（第 101 図）

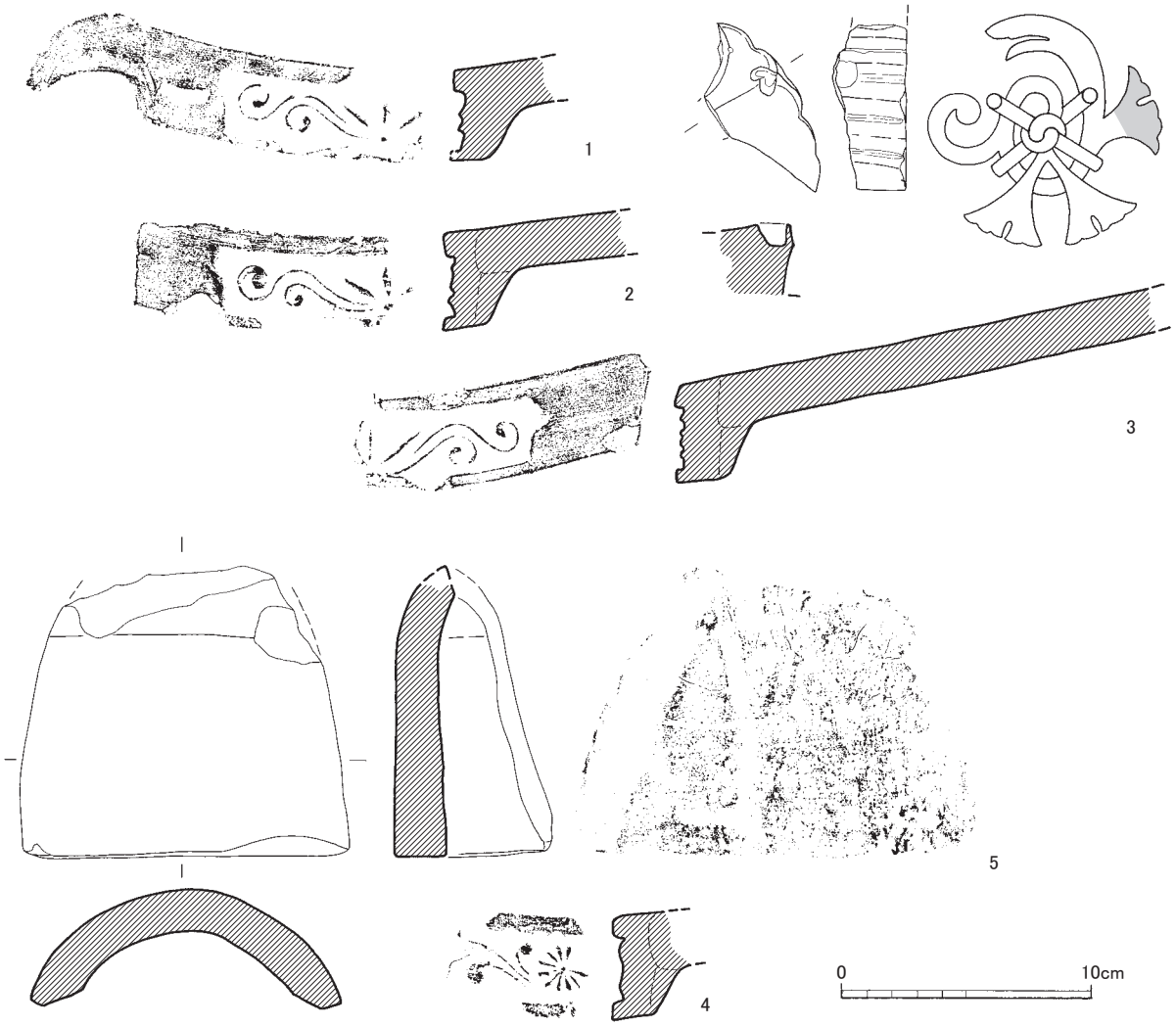
北西部から検出された不整形プランで、7 号溝状遺構を切る。N - 59° 30′ - Eを主軸とし、長軸 668cm、短軸 334cm、深さは約 60cmと深いが、床面は東北に緩やかに立ち上がる。大型の不整形プランで、遺物がほとんど入っていないことから、土取り痕の可能性もある。時期不明。



第 108 図　2次調査2号大土坑出土磁器実測図（1/3）



第 109 図　2次調査2号大土坑出土瓦実測図1（1/4）



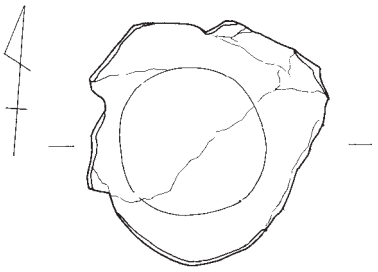
第 110 図　2次調査2号大土坑出土瓦実測図2（1/4）

15 号土坑（図版 23、第 101 図）

中央南部から検出された隅円方形プランで、8･13 号溝状遺構を切る。北を主軸とし、長軸 164cm、短軸 136cm、深さは約 18cmと深い。図化できる出土遺物なく時期を特定できない。

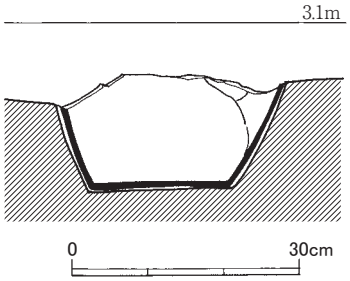
16 号土坑（図版 23、第 101 図）

中央北側から検出された正方形プランの片側に突出している。北を主軸とし、長軸 154cm、短軸 111cm、深さは約 60cmと深く、壁が直に落ち、平面規模に比べて深かった。埋土に炭化物が混じっていたが図化できる出土遺物なし。時期不明。



17 号土坑（第 101 図）

中央部で検出された不整形な土坑で、4c 号溝状遺構を切る。反転の際に東端部は検出できなかったため、長軸規模は不明で、短軸は 107cm、深さ 34cmである。4c 号溝状遺構を切る。上位は整地層で、中位に木質層があり、最下層は基盤漸移層だった。図化できる出土遺物なし。



第 111 図　2次調査埋甕遺構実測図（1/10）

1 号大土坑（図版 24、第 105 図）

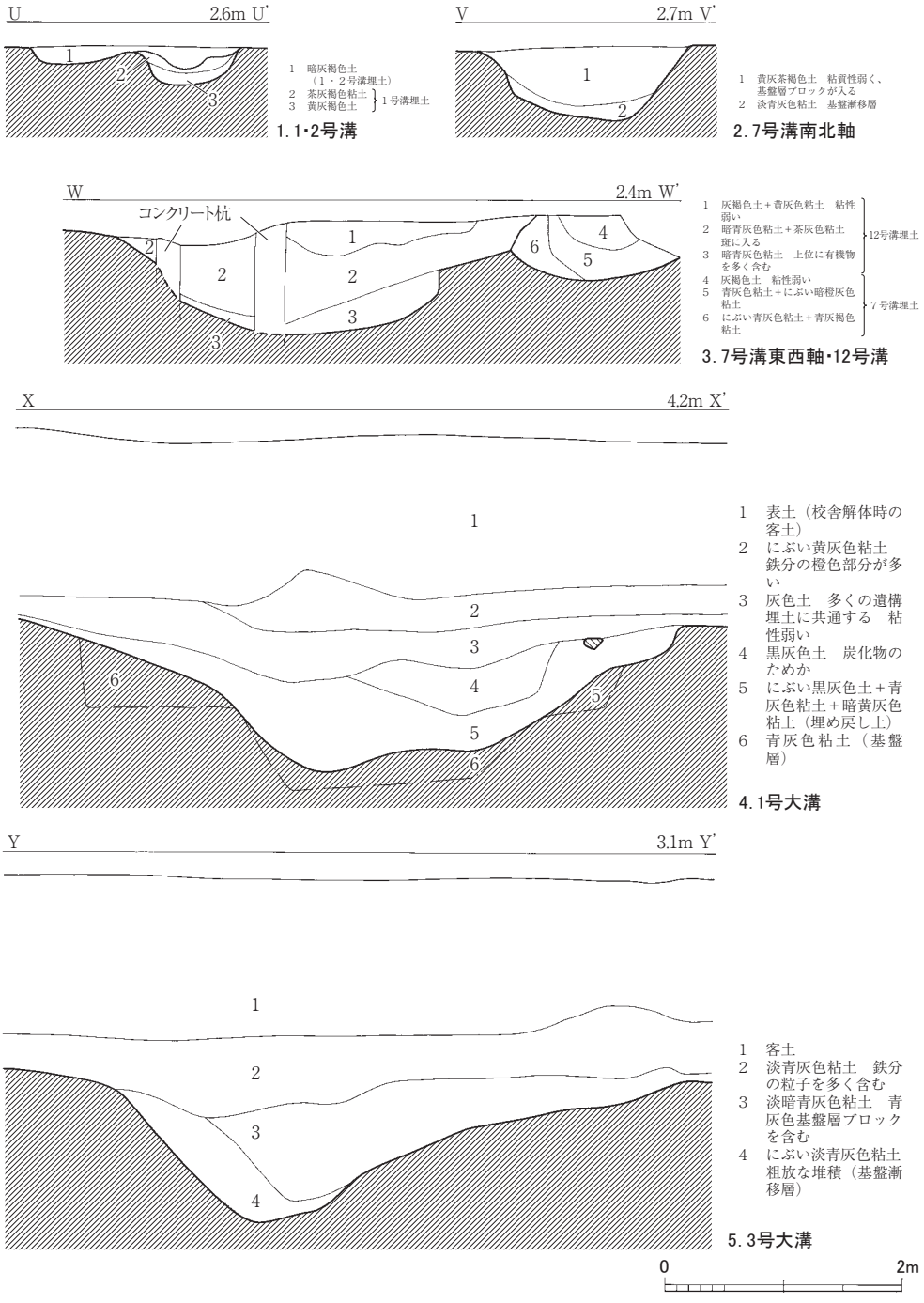
中央南部で検出された不整形な土坑で、1 面目で検出されたのは上位の埋土部分であり、遺構は 2 面目から掘り込まれていた。東側が調査区外に延びるため全体像がわからない。現状で長軸は 500cm以上、短軸は 184cm以上ある。壁際に最深部があり、深さは 60cmを測る。立ち上がりは緩やかで、廃棄土坑にしては遺物量が少ないが、上位で瓦が集中して出土している。

出土遺物（図版 40、第 106 図）

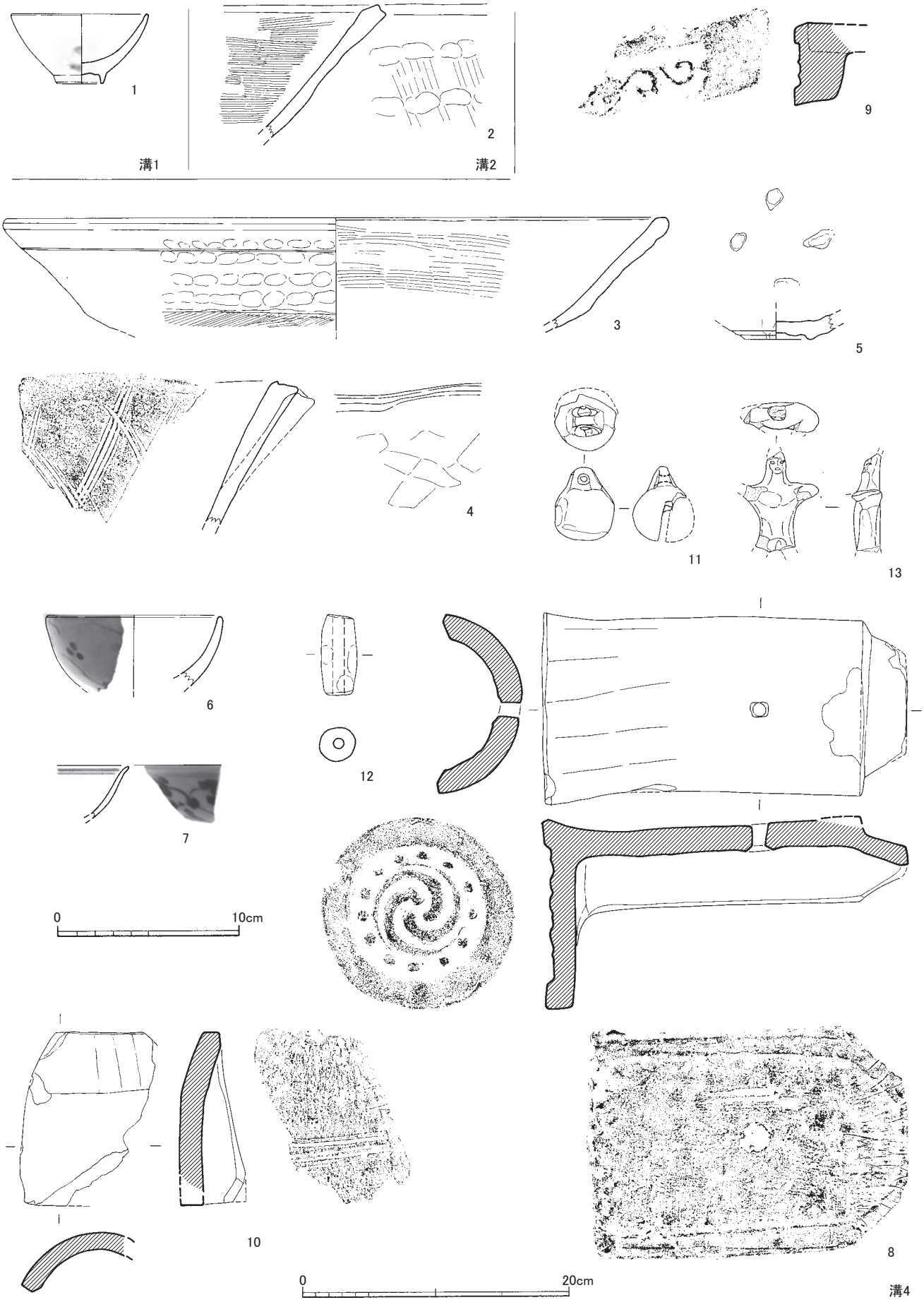
第 106 図 2 は染付碗だが、小片で外面モチーフがわからず時期の特定が難しい。

2 号大土坑（図版 24・25、第 105 図）

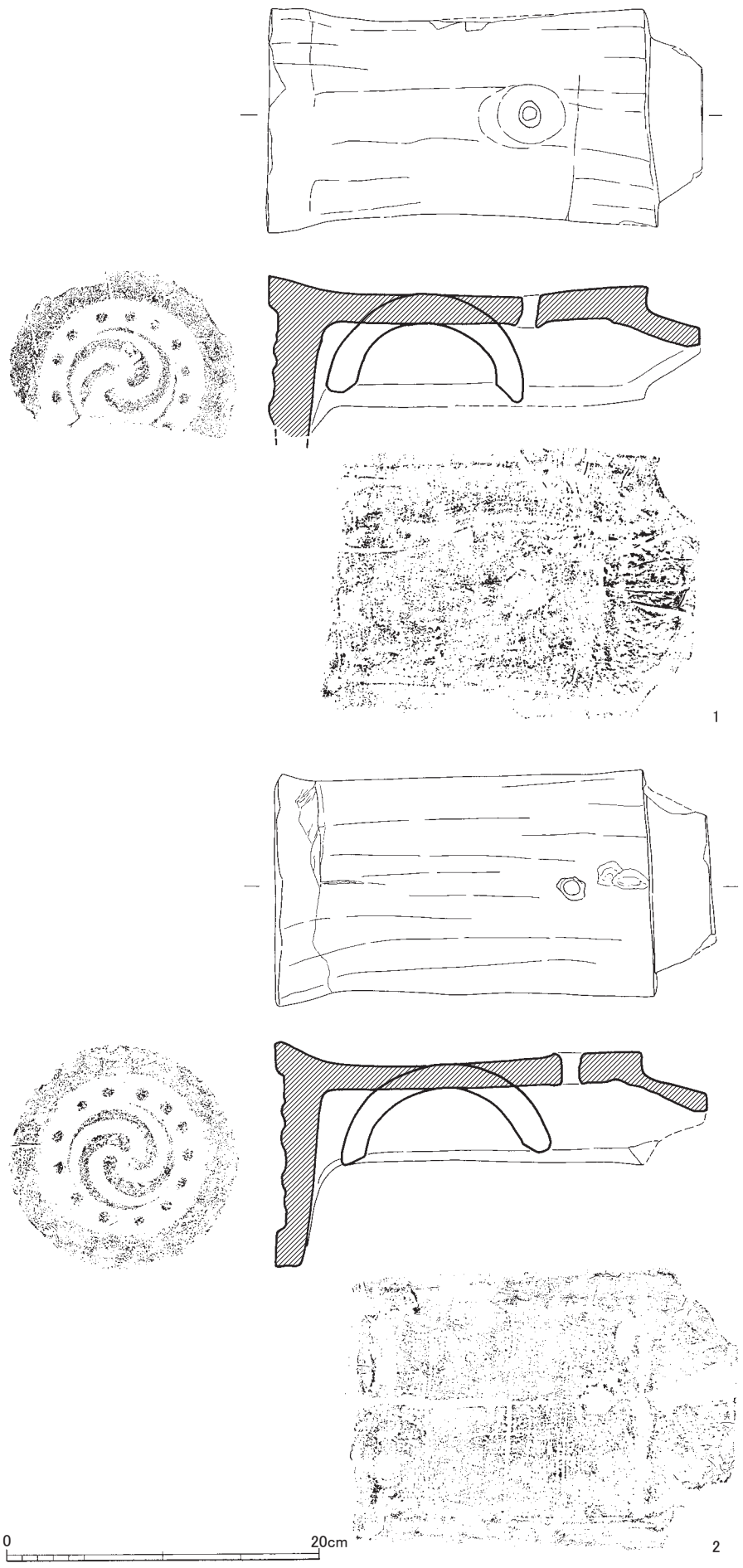
中央西部から検出された不整形プランの土坑で、N－9° 30′－E を主軸とし、9 号土坑に切られ、北辺で 10 号溝状遺構と繋がる。9 号溝状遺構と 11 号溝状遺構とは切り合い関係がわからない。南



第 112 図　2次調査溝状遺構・大溝遺構土層断面図（1/60）



第 113 図　2次調査 1・2・4 号溝状遺構出土土器・陶磁器・瓦実測図（8・10 は 1/4、他は 1/3）

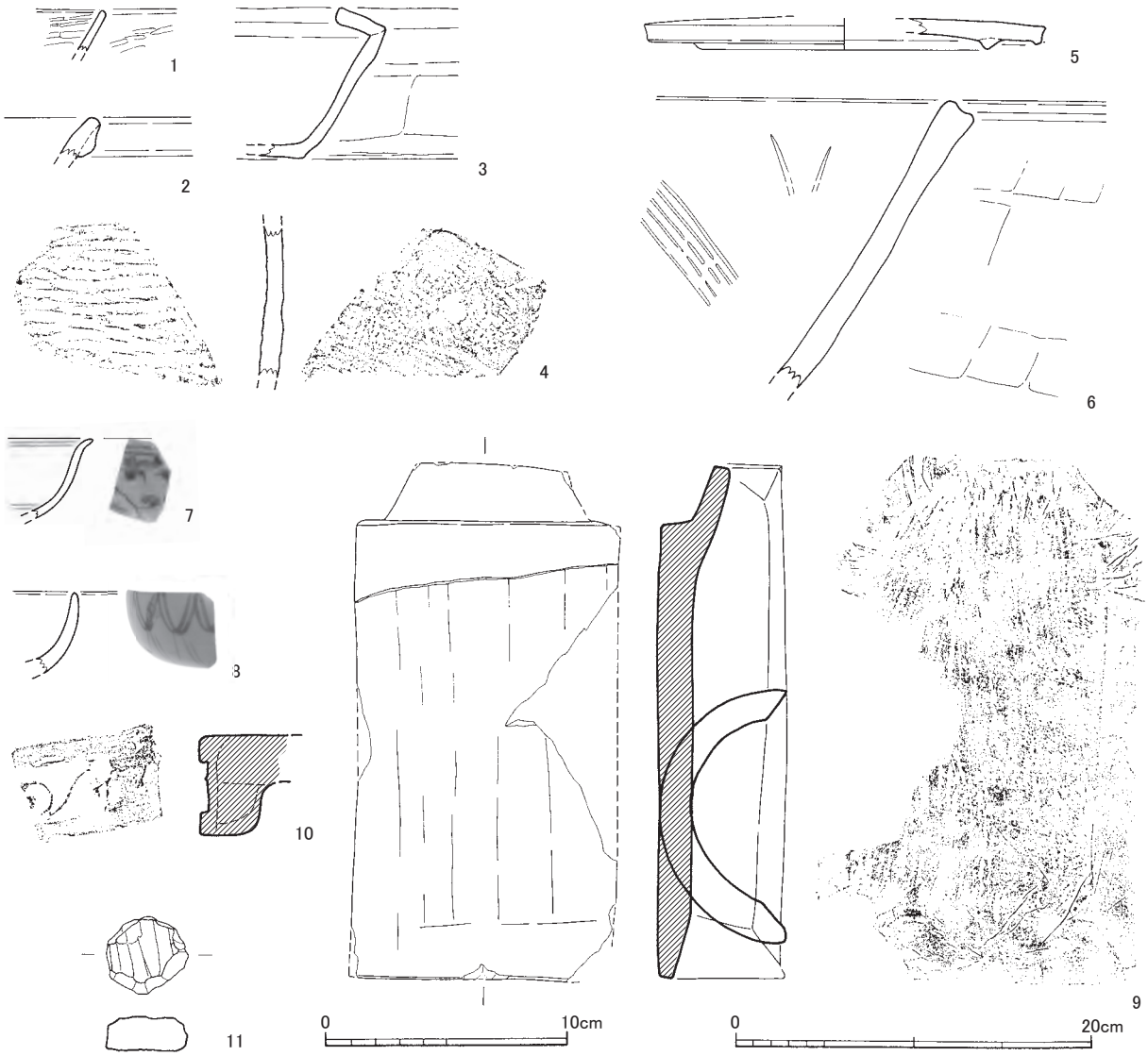


第 114 図　2次調査 4 号溝状遺構出土瓦実測図（1/4）

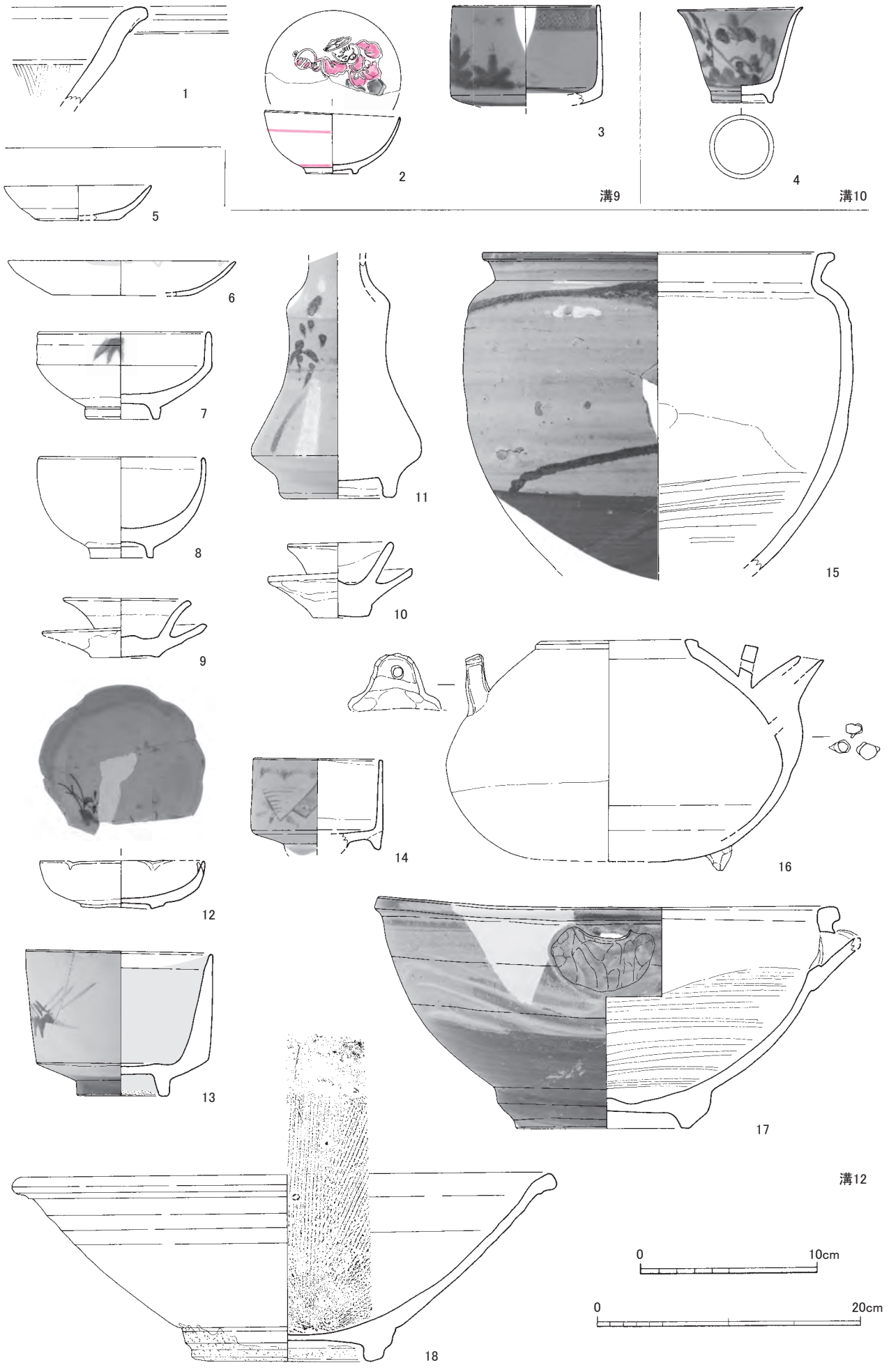
端は基礎の下に位置していたが明確に検出され、壁が直に立ち上がり、壁前面には杭列が残っていた。長軸 1408cmで、短軸 620cmで、深さ 104cmを測る。北側床面に板が倒れており、その北側に杭列があったことから板柵が倒れたものとわかった。板と杭は遺構の中心軸上にはなく、完全に閉塞するものではないのかもしれない。出土遺物は全体的に分布していたが、北側に瓦が集中し、南東隅は西と北に流れ込んだように傾斜する遺物群があった。多くの板材が出土しているが、建築材の残欠らしい小片が多い。掘削時期は 18 世紀前半か。

出土遺物（巻頭図版５・図版 40・45・46・49・54・55・57・58、第 106 ～ 110・125・128・138 ～ 145 図）

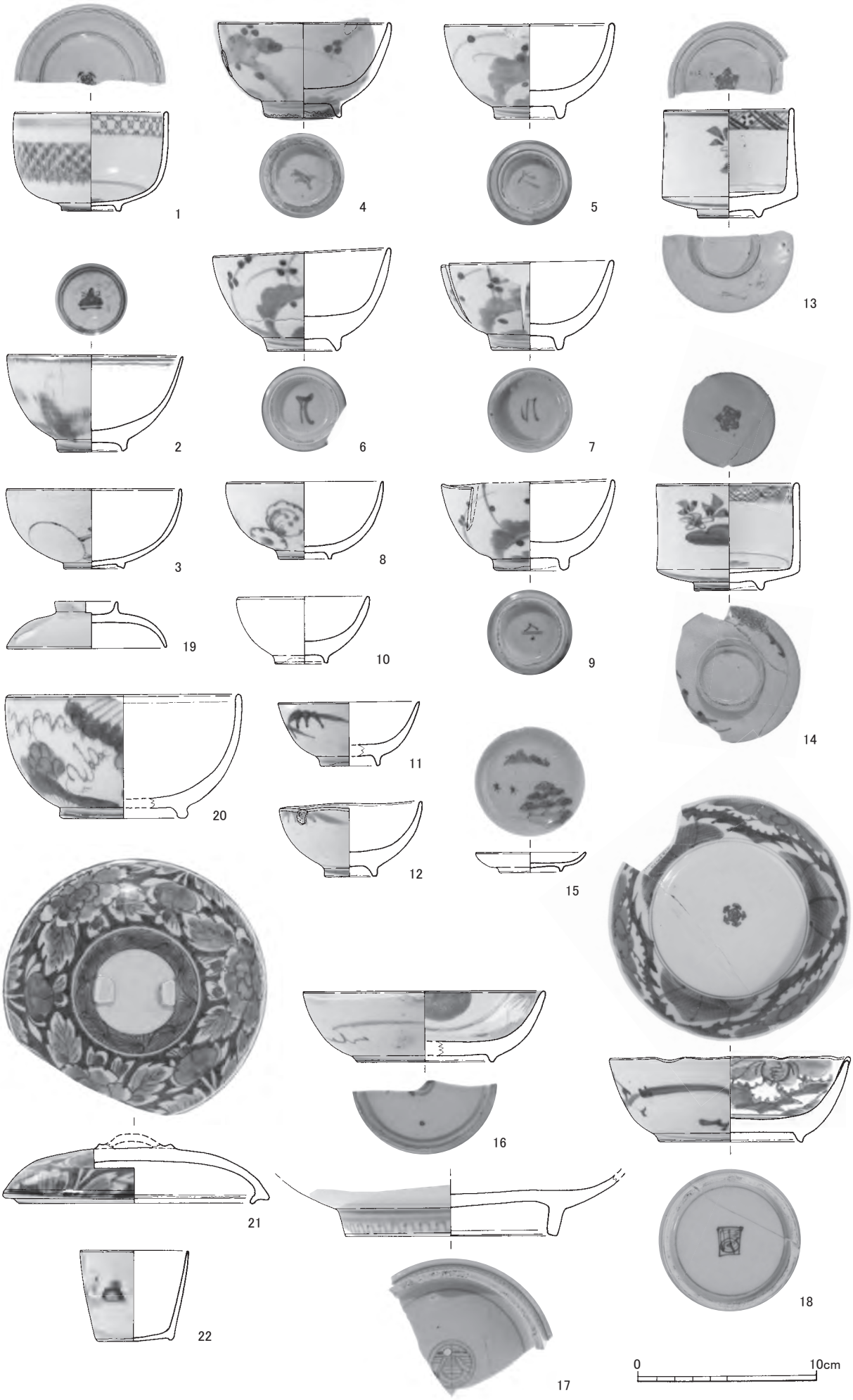
第 106 図７は土師質土器の火鉢で、外面胴部は線刻で「生田」（註３）と横書き、口唇部は「□妻□」まで読める。第 109 図３は丸瓦で、基部のケズリ面が小さく、銀化しているなど、成形技法と焼成法が異なっているので、搬入品の可能性がある。第 139 図３は茶漆塗りの櫛で、背部は真鍮製である。このほかモモの核とマツの毬果が出土している。このうち後者はマツの木が存在していたことを示す。第 138 図１・２は同じ規格ではないが円孔をもつ木札で、１は片面に「古閑省三」と墨書され、２は表面に「三番係」、裏面は墨書が読めないが「学」の焼き印があることから、在席を示す木札だろうか。第 139 図５は折敷転用まな板で、脚の接合面に刃傷があるので、脚を外して両面使用したことがわかる。第 140 図６は下駄で、踵部に３つの金銅製の半頭鋲がある。中心ライン上に鉄釘



第 115 図　２次調査７号溝状遺構出土土器・陶磁器・瓦実測図（9は 1/4、他は 1/3）



第 116 図　2次調査 9・10・12 号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図（18 は 1/4、他は 1/3）



第 117 図　2次調査 12 号溝状遺構出土磁器実測図（1/3）

が露出しているものと埋没しているものがあるが、後者は鋲の頭部が欠損したものだろう。したがって、何かに転用していると考えられる。

溝状遺構

5号溝状遺構は4号溝状遺構と同一遺構と考えられたので、4b号と変更し、欠番とした。6号溝状遺構は1面で検出されたが、整地面下位の黒色土包含層が整地面の薄い裾部分で露出している部分を誤認したものだったので、欠番とする。

1号溝状遺構（図版26、第112図・付図）

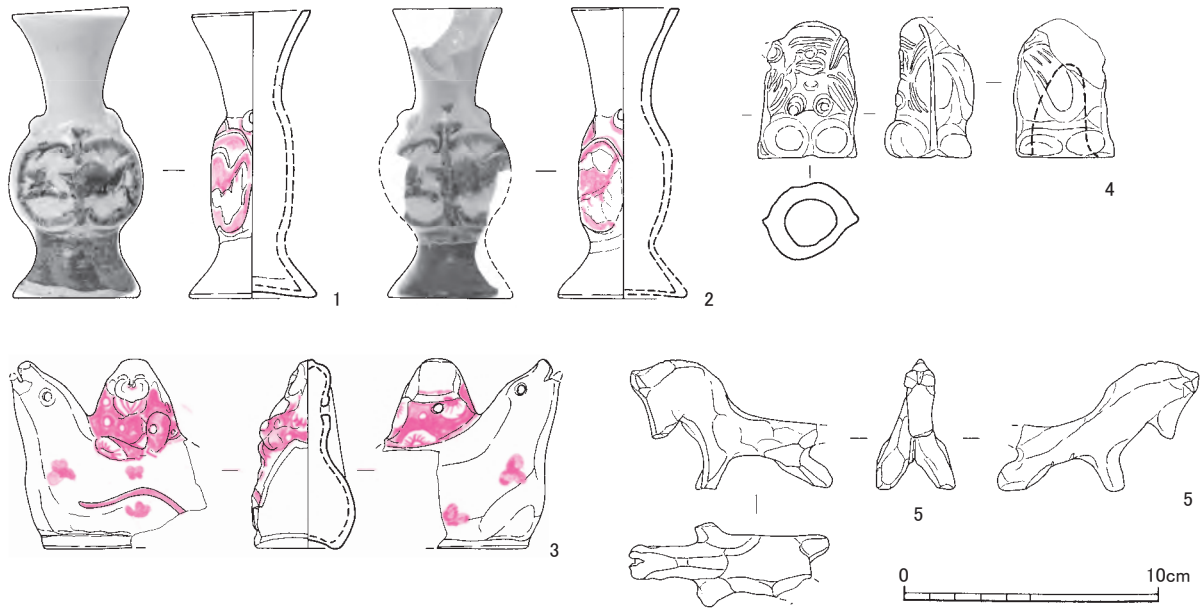
調査区北側を東西方向に走る幅の狭い溝で、2号溝状遺構、1・2号大溝遺構を切り、3号溝状遺構との切り合いは壁際から検出されたため不鮮明だった。1号大溝遺構と接する部分は基礎のため明瞭に検出できず、南にL字形に屈曲する部分が確認できなかった。そのため南北軸の溝が2・3号溝状遺構と合流する可能性がある。1号溝状遺構の南北軸とは断定できないものの、4号溝状遺構に切られるが、4号溝状遺構と交差する北側は検出されなかったので陸橋の可能性がある。幅94cm、深さ30cmで、東に向かって下がっている。

出土遺物（第113図）

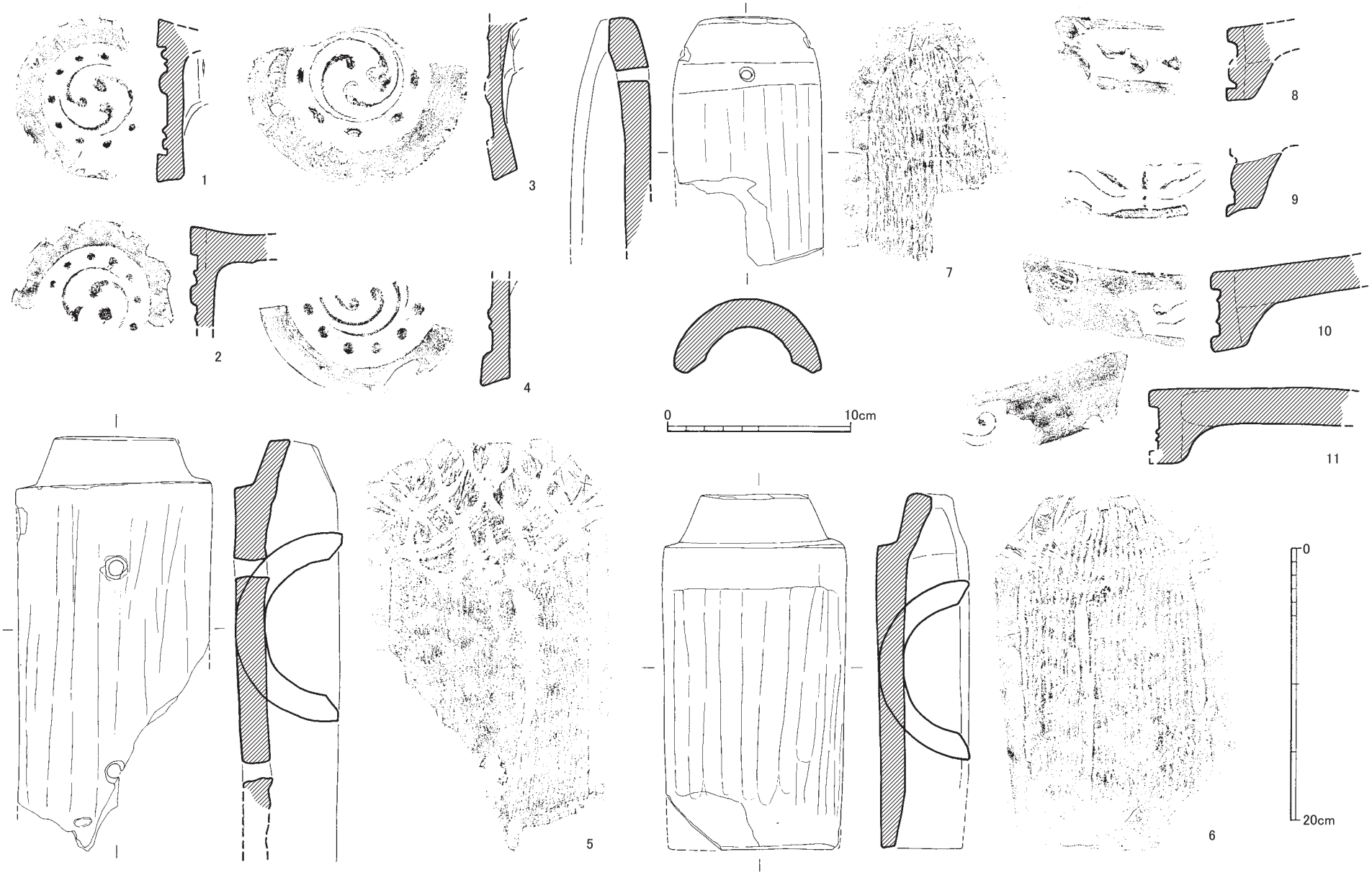
第113図1は染付の小碗で、見込みに灰被りのある不良品。

2号溝状遺構（図版26、付図）

調査区北側を東西方向に走る幅の狭い溝で、1号溝状遺構に切られている。西端は1号大溝遺構に接するところで壁が出ており、南北軸では1・3号溝状遺構と合流していた。この南北軸部分は4号溝状遺構に切られが、4号溝状遺構と交差する北側は検出されなかったので陸橋の可能性がある。幅74cm、深さ15cmで、東に向かって下がっている。図化できる出土遺物なし。



第118図　2次調査12号溝状遺構出土土器・磁器実測図（1/3）



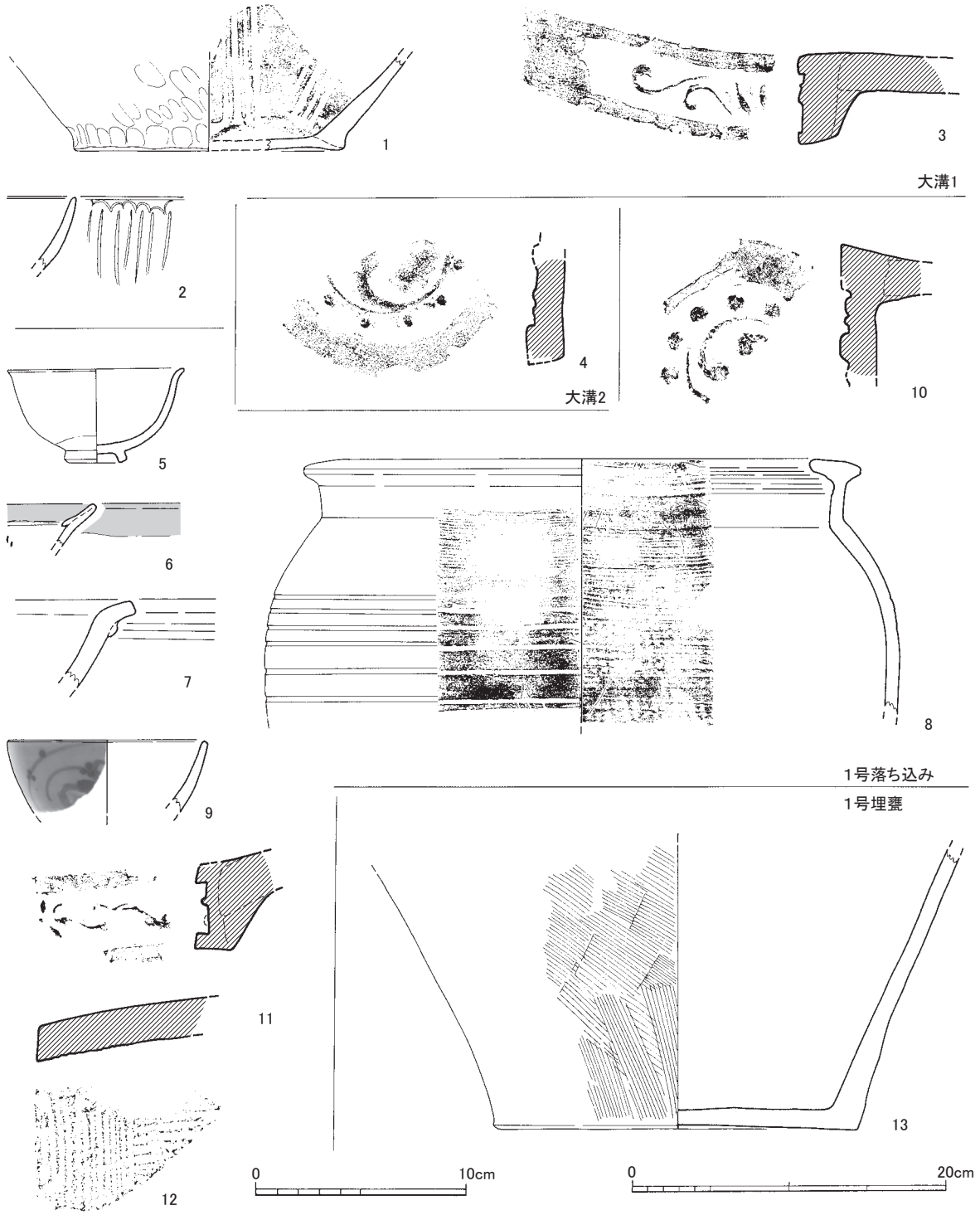
第 119 図　2次調査 12 号溝状遺構出土瓦実測図（8 ～ 11 は 1/3、他は 1/4）

３号溝状遺構（112 図・付図）

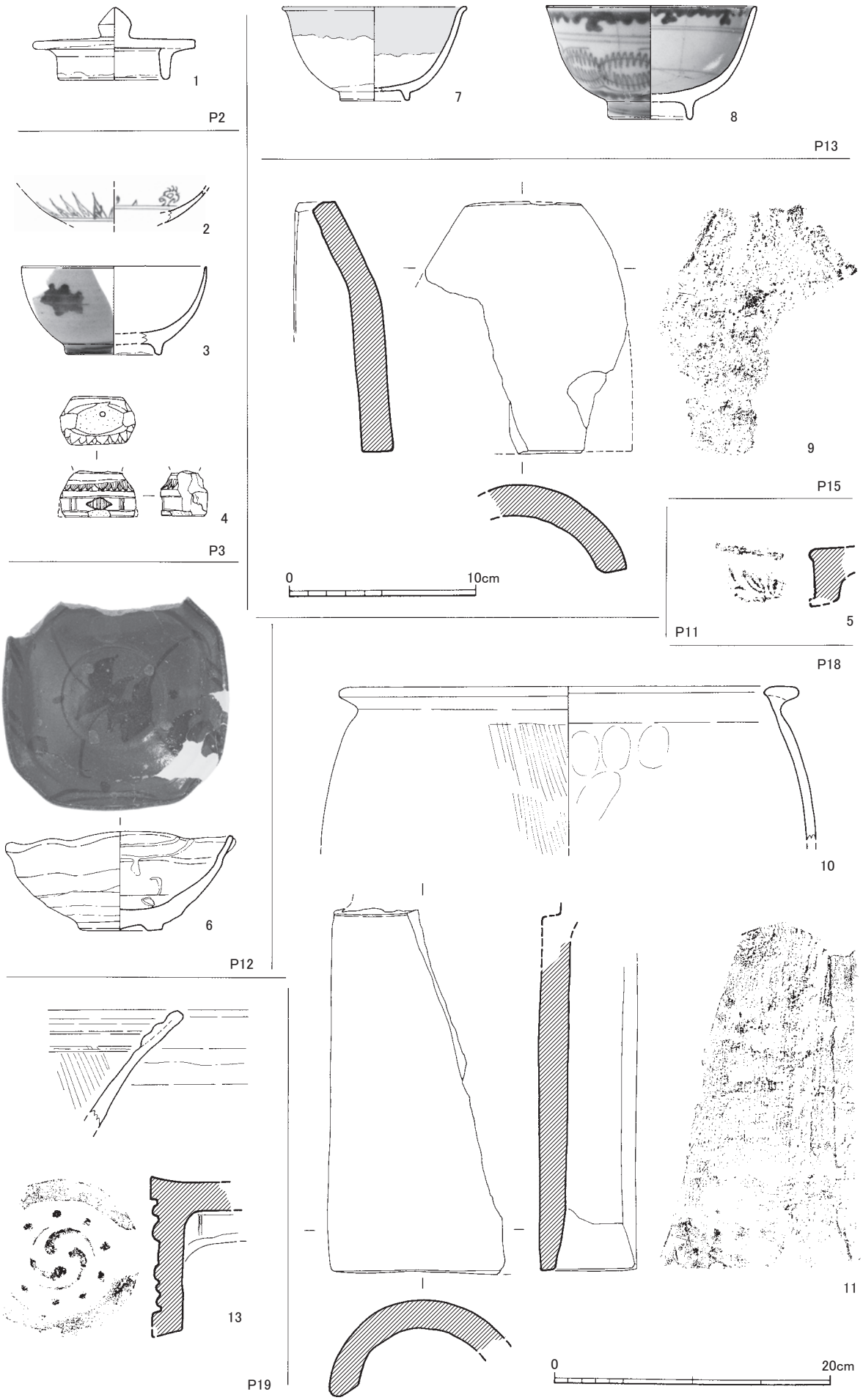
調査区北東で１号溝状遺構の南壁沿いに検出された小溝で、１号溝状遺構の南壁が大きくずれることから別遺構と認定した。本遺構はＬ字形に屈曲していることがわかっており、４号溝状遺構と交差する北側は検出されなかったので陸橋の可能性があるが、幅は西壁が確認できないが約 60cm、深さ 25cmで、北に向かって下がっている。図化できる出土遺物なし。

４号溝状遺構（図版 41、第 112 図・付図）

中央南部から検出された東西方向に走る溝で、陸橋があるものの同一遺構なので、abc 号の３つに分けた。



第 120 図　2次調査１・２号大溝・１号落ち込み・１号埋甕出土土器・陶磁器・瓦実測図（8・13 は 1/4、他は 1/3）



第 121 図　2次調査ピット出土土器・陶磁器・瓦実測図（11・13 は 1/4、他は 1/3）

4a 号溝状遺構

北東部から検出されており、b・c 号に比べて規模が大きい。西壁が出ているので、b・c 号と同一遺構ではない。東端も壁が立ち上がっており、それより東には延びていなかった。6 号土坑・1 号大溝遺構を切り、1 ～ 3 号溝状遺構の南北軸と交差しているが、切り合いは不鮮明だった。幅 168cm、深さ 40cmで、東に向かって下がっている。丸瓦の完形品など多くの瓦が出土した。

4b 溝状遺構

西端は壁が立ち上がっており、4c 号との間に陸端部があるものと考えられる。17 号土坑・13 号溝状遺構に切られ。幅 57cm、深さ 20cmで、西に向かって下がっている。軒平瓦片は 5 号土坑と同范なので、小片が混入したか。

4c 号溝状遺構

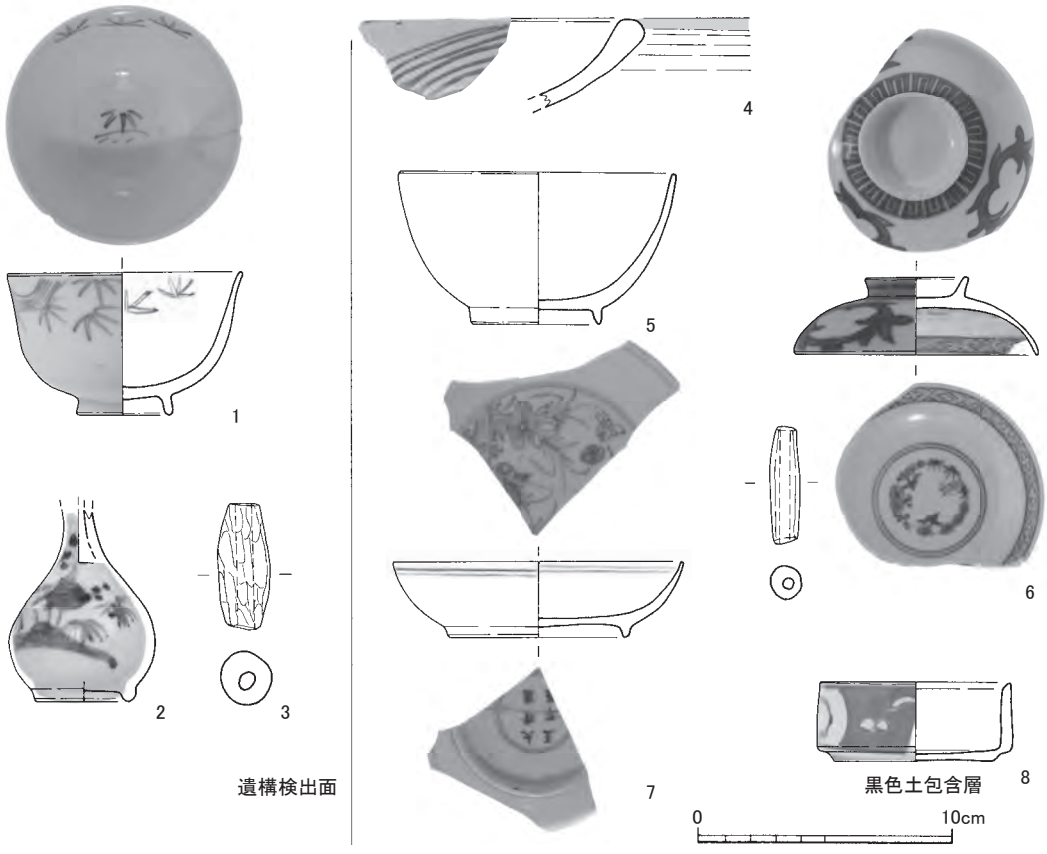
大きな攪乱の下から検出されたため残りが悪い。東西ともに端は途切れているが、東側は壁が立ち上がっているものと考えられる。17 号土坑・5 号溝状遺構に切られ。幅 57cm、深さ 20cmで、東に向かって下がっている。図化できる遺物なし。

出土遺物（図版 41・49、第 18・113・114 図）

第 113 図 7 は明の青花にモチーフが似ているが、崩れが大きいので、模倣した肥前染付だろう。

7 号溝状遺構（図版 26、第 112 図・付図）

中央を東西方向に走り、東端で南に折れ曲がる L 字状の溝で、西部は検出面での幅が狭いが深くなる。幅 242cm、深さ 50cmで、西に向かって下がっている。西端と南端は調査区外に延びる。南北



第 122 図　2次調査遺構検出面・黒色土包含層出土土器・陶磁器実測図（1/3）

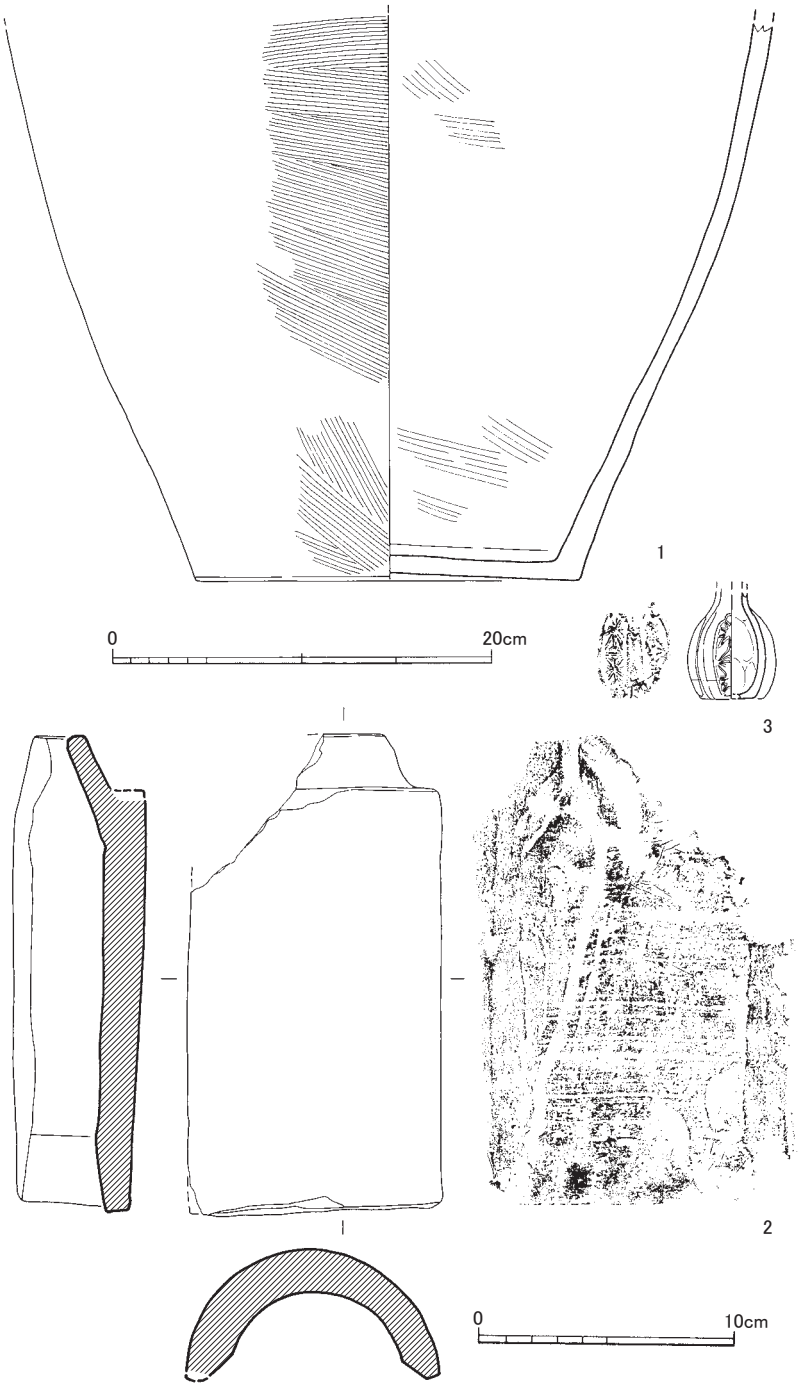
軸部分は上位の黒色土包含層が被っていたため明瞭に検出され、南端で瓦が集中して出土した。3・11・14 号土坑、4b・5 号溝状遺構に切られる。12 号溝状遺構との切り合いは土層の観察から、12 号溝状遺構に切られている。埋土は中位まで同一層が厚く堆積しているので一挙に埋められている。12 号溝状遺構に切られるので、18 世紀前葉か。

出土遺物（図版 49、第 115・125 図）

第 115 図 4 は青灰色で内外にタタキ痕が残ることから須恵器片のようなので、中世須恵器の混入の可能性を残すが、器面はそれほど風化していない。

8 号溝状遺構（第 112 図・付図）

中央南部から検出された東西方向に走る溝で、西端は攪乱に切られ、東端は立ち上がって壁が明



第 123 図　2次調査整地層出土土器・瓦実測図（3は 1/3、他は 1/4）

瞭に検出できた。15号土坑に切られ、5号溝状遺構を切る。幅76cm、深さ43cmで、西に向かって下がっている。図化できる出土遺物なく、時期不明。

9号溝状遺構（第112図・付図）

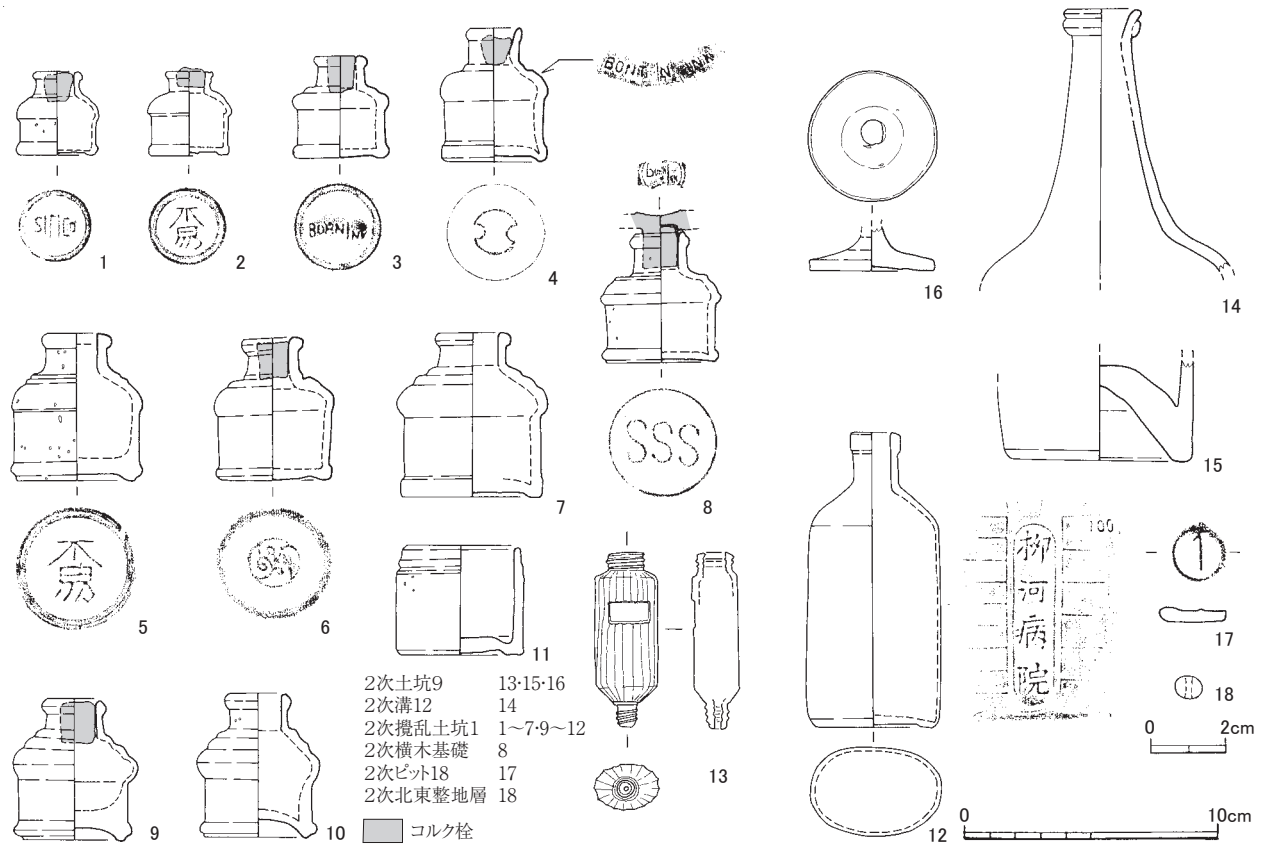
南西部から検出された南北方向に走る溝で、上面が攪乱を受けているため幅が均一でない。溝の縁の杭は、校舎の基礎杭で、本遺構に伴うものはなかった。2号大土坑に繋がるが、2号大土坑との切り合い関係は不明だが、11号溝状遺構の南北軸と繋がる可能性がある。幅88cmで、壁は直に立ち上がっており、深さ50cmで、南に向かって下がっている。18世紀後半か。

出土遺物（第116・143図）

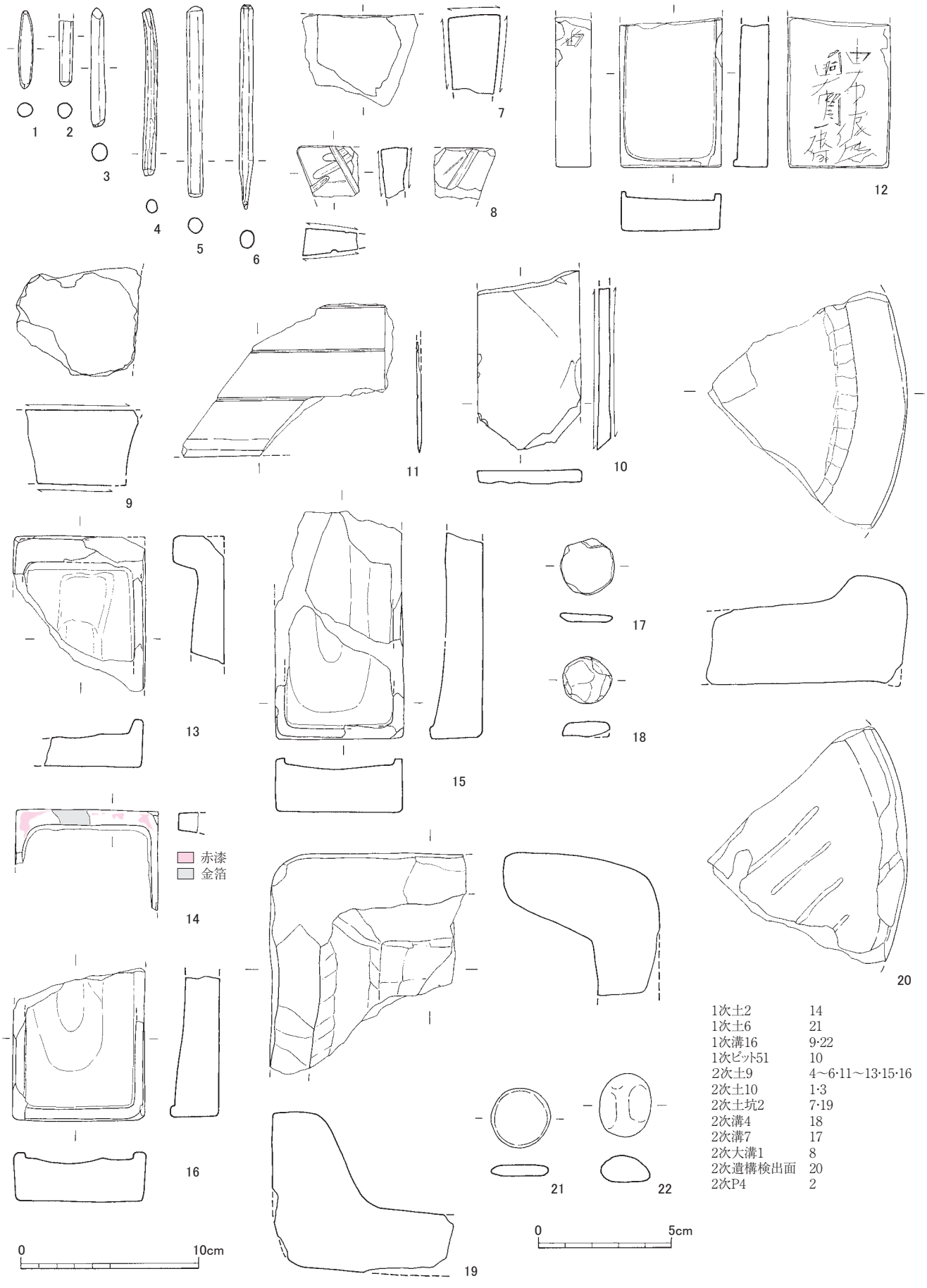
第116図2は色絵杯で、褪色しているが大黒天が描かれている。

10号溝状遺構（第112図・付図）

北西隅から検出された東西方向に走る溝で、湾曲しながら2号大土坑に繋がる。大土坑に近づくほど幅が広くなり、床面がほぼ水平な部分で、最も規模の大きいところは幅120cm、深さ40cmを測る。西に向かって下がっている。壁は直に立ち上がっており、断面方形を呈する。大土坑と接する北壁には竹杭列が残る。40～60cm間隔で打ち込まれているが、護岸の痕跡はなかった。2号大土坑に共伴するので18世紀前半か。



第124図　本町遺跡出土ガラス製品実測図（17・18は1/2、他は1/3）



1次土2	14
1次土6	21
1次溝16	9·22
1次ピット51	10
2次土9	4～6·11～13·15·16
2次土10	1·3
2次土坑2	7·19
2次溝4	18
2次溝7	17
2次大溝1	8
2次遺構検出面	20
2次P4	2

第 125 図　本町遺跡出土石製品実測図（1 ～ 6・12・21・22・24 は 1/2、他は 1/3）

出土遺物（図版 40、第 116 図、表 12）

第 116 図 4 は染付の蕎麦猪口で、高台は蛇の目釉剝ぎである。この他、桟瓦の大きな破片あり。

11 号溝状遺構（図版 26、第 112 図・付図）

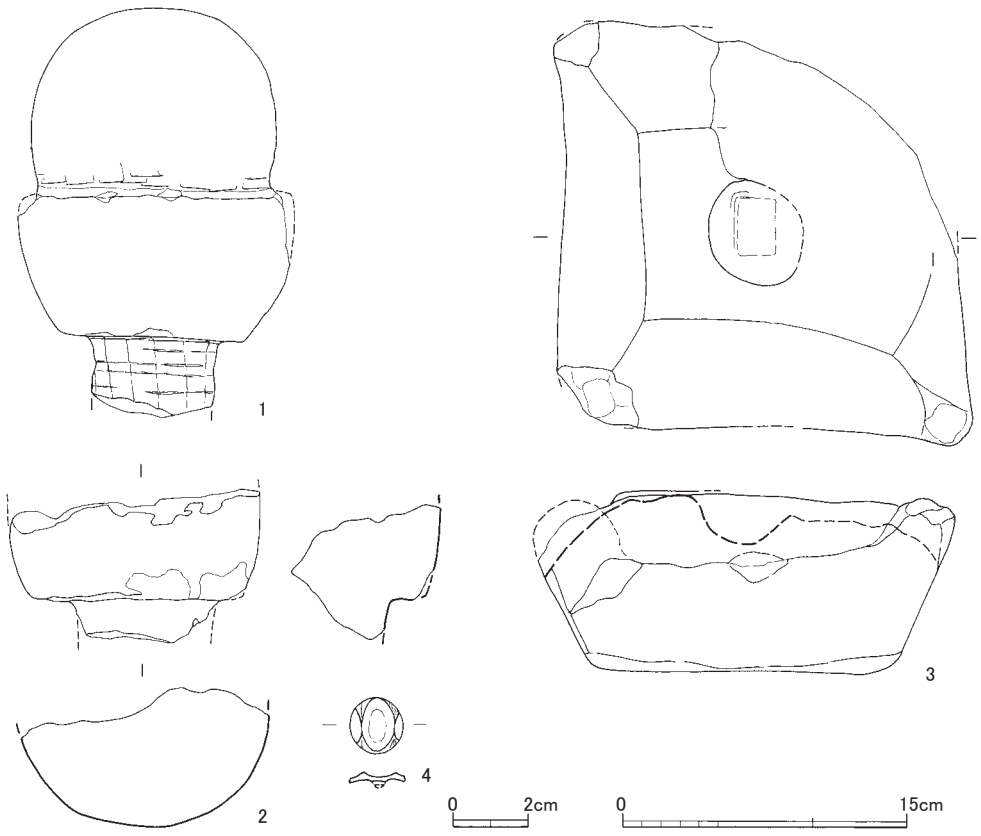
北西から検出されたＬ字状の小溝で、12 号溝状遺構を切り、２号大土坑と繋がる。Ｌ字形は明瞭に検出された意図的なもので、壁は直に立ち上がっている。幅・深さもほぼ均一で、上面が削られている西側が狭くなっている。幅 74cm、深さ 25cmで、西に向かって下がっている。2 号大土坑との切り合い関係は不明だが、南北軸の方向から 9 号溝状遺構と繋がる可能性がある。図化できる出土遺物なく、時期不明。

12 号溝状遺構（図版 26、第 112 図・付図）

北西から検出された湾曲しながら東西方向に走る溝で、10・11 号溝状遺構に切られる。7 号溝状遺構との切り合いは、土層から本遺構が切っている。東端は深く幅が広くなっており、壁が立ち上がっている。東端部は遺物の出土量が多く、木質も多く流れ込んでいる。11 号溝状遺構に切られる西端部は床面が高く､西に向かって流れるようにはなっていない｡最も規模の大きい東端で幅 426cm、深さ 120cmを測る。東端の規模が大きいことから、機能を失った段階で廃棄土坑として利用されたのだろう。漆椀片が出土している。

出土遺物（図版 41・42・54、第 116 ～ 119・124・139 図）

第 116 図 16 は陶器の土瓶で、見込みに径の小さいアルミナが輪状に付着しているので小型器種を重ね焼きしている。第 116 図 18 の土瓶は器高が低いが変形ではない。第 119 図 5 は丸瓦で、端



第 126 図　本町遺跡出土石・鹿角製品実測図（4は 1/2、他は 1/4）

部には漆喰による変色がある。第 139 図 4 は柄鏡箱の板材である。このほか、トウガンの種子が出土している。

13 号溝状遺構（第 112 図・付図）

調査区中央を南北方向に走る幅の狭い溝で、7 号溝状遺構を切り、11・15 土坑、8 号溝状遺構には切られる。4c 号との切り合いは不明瞭だった。南端は調査区外に延びるが、北端は削られて残っていない。幅 63cm、深さ 9cmで、北に向かって下がっている。図化できる出土遺物ないが切り合いから、18 世紀前半か。

1 号大溝遺構（図版 27、第 112 図・付図）

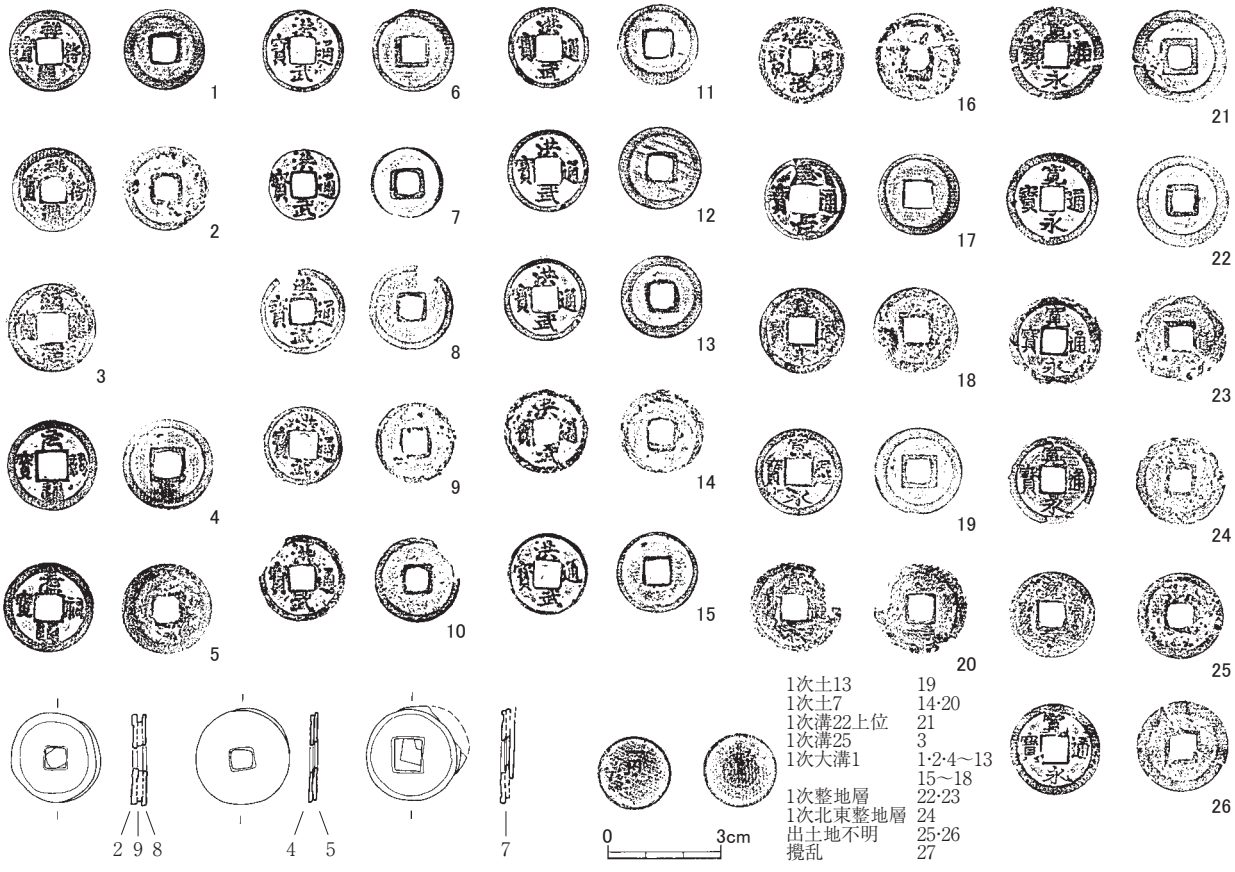
調査区中央北部で検出された南北方向に走る大規模な溝で、南北端とも調査区外に延びる。1 次調査の 1 号大溝遺構に繋がる可能性が高い。幅 474cm、深さ 115cmで、壁は V 字形で壁は直線的で、底面は狭い。遺物はほとんど出土しなかったが、埋土からは最古段階に属するだろう。

出土遺物（第 120 図）

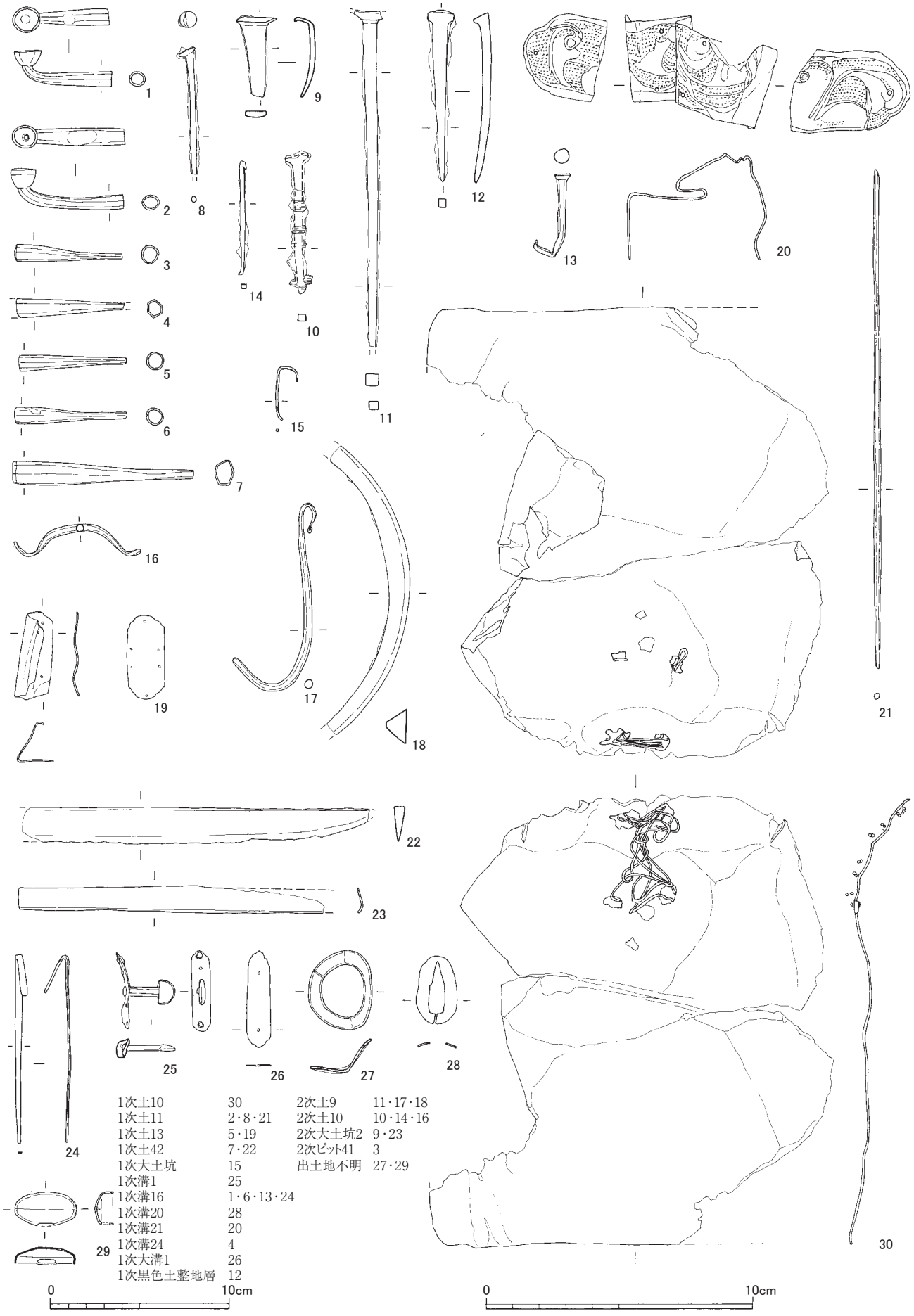
第 120 図 2 は鎬連弁文碗だが、小片であることから見ても中世遺物の混入だろう。

2 号大溝遺構（第 112 図・付図）

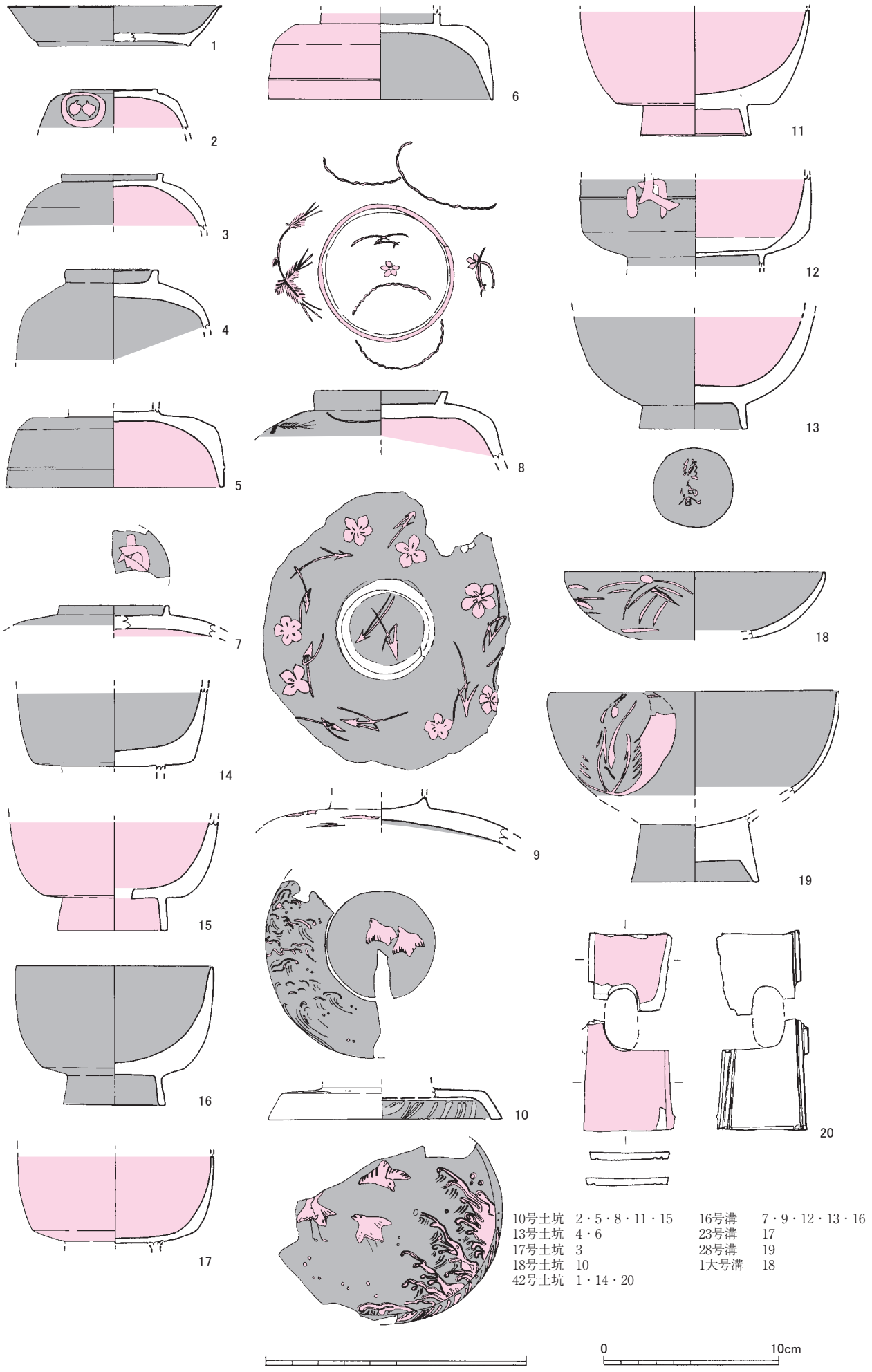
調査区中央北部で検出された南北方向に走る大規模な溝で、検出時は瓦が少量含まれる土坑かと考えたが、わずかな色調差を精査して検出した。2 号土坑、1・2 号溝状遺構に切られている。南北端とも調査区外に延びる。幅 318cm、深さ 45cmだが、基盤層に近い青黄灰色粘土を埋土としており、



第 127 図　本町遺跡出土銅銭実測図（1/2）

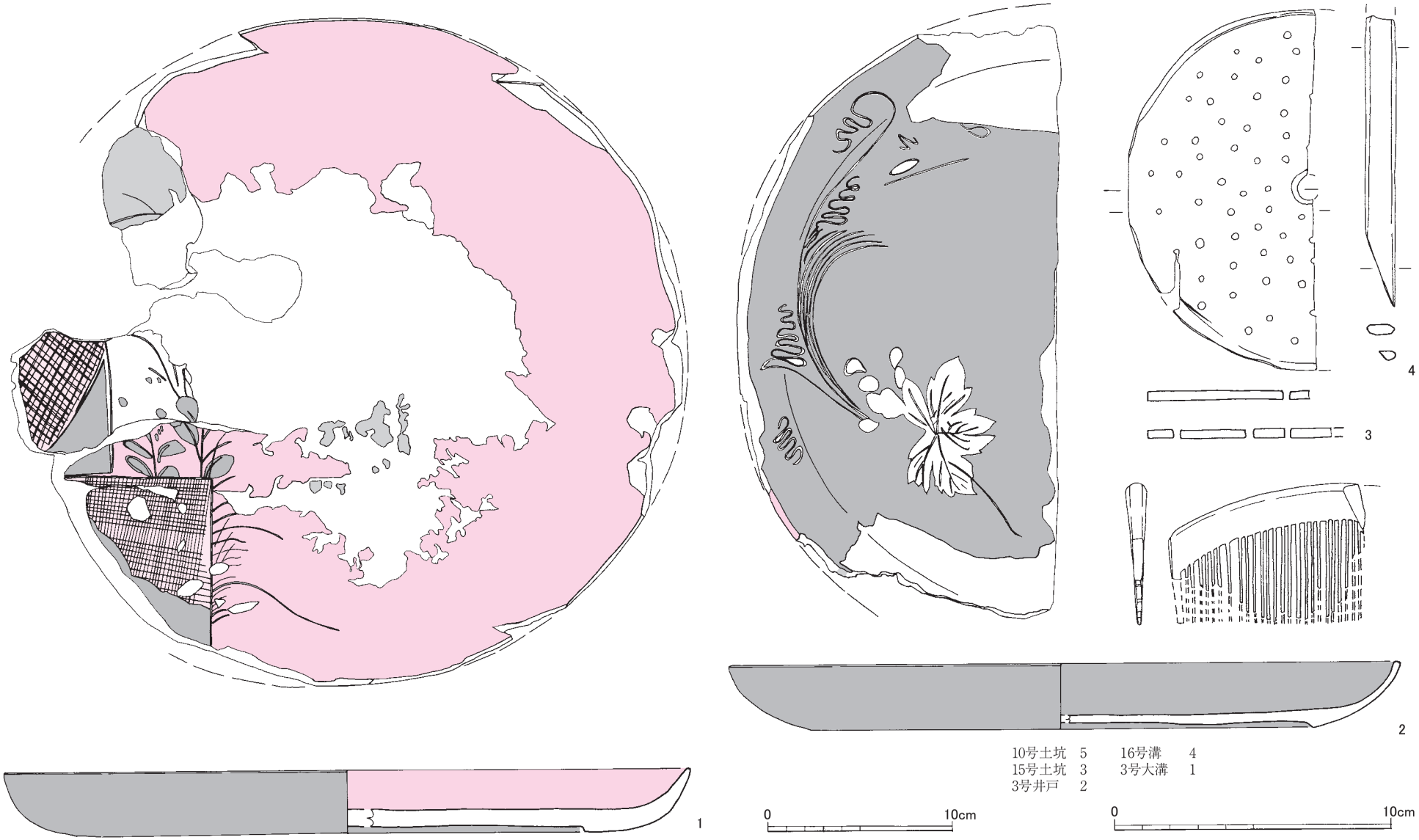


第 128 図　本町遺跡出土金属製品実測図（19・29 は 1/2、他は 1/3）

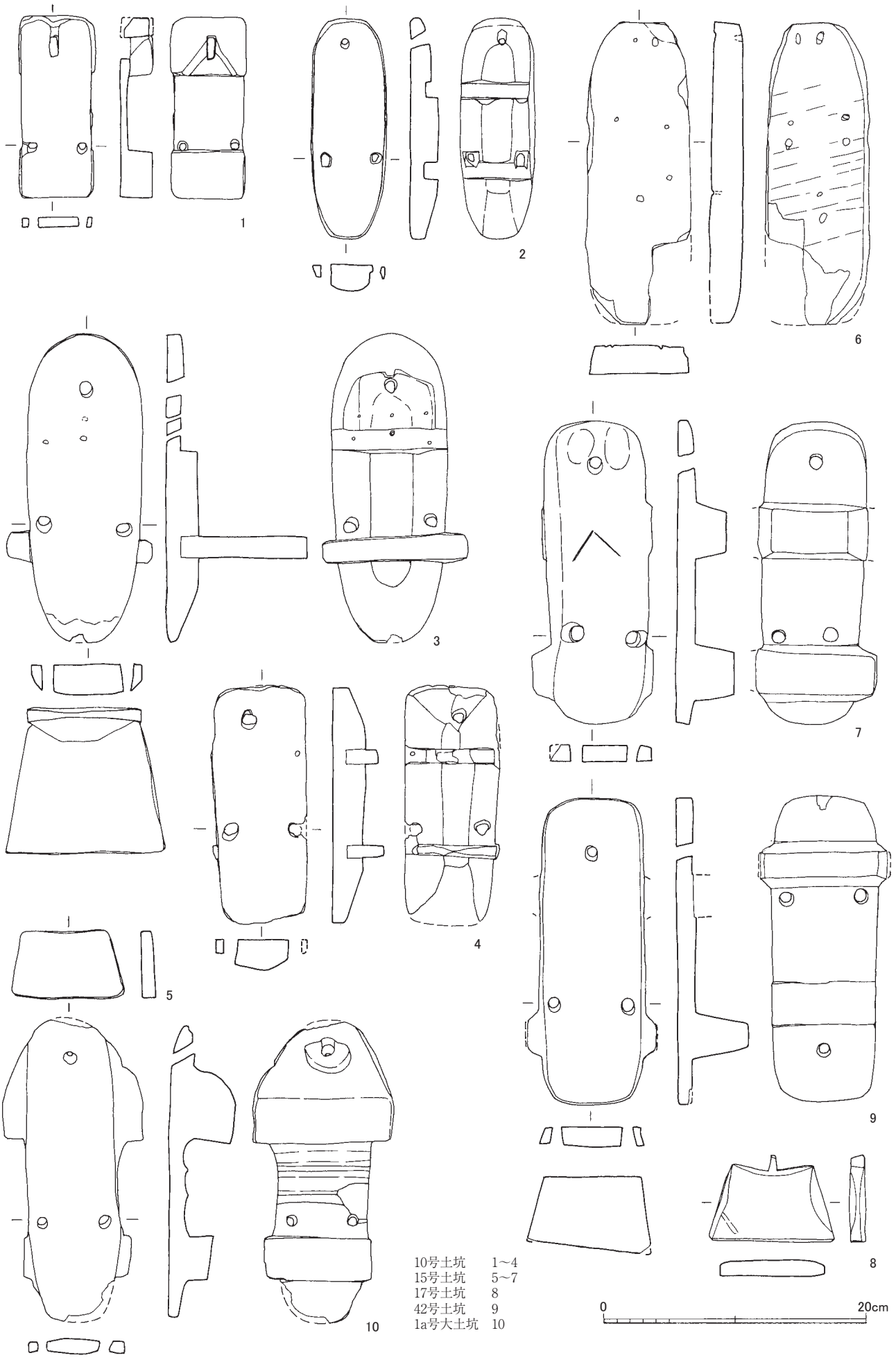


10号土坑	2・5・8・11・15	16号溝	7・9・12・13・16
13号土坑	4・6	23号溝	17
17号土坑	3	28号溝	19
18号土坑	10	1大号溝	18
42号土坑	1・14・20		

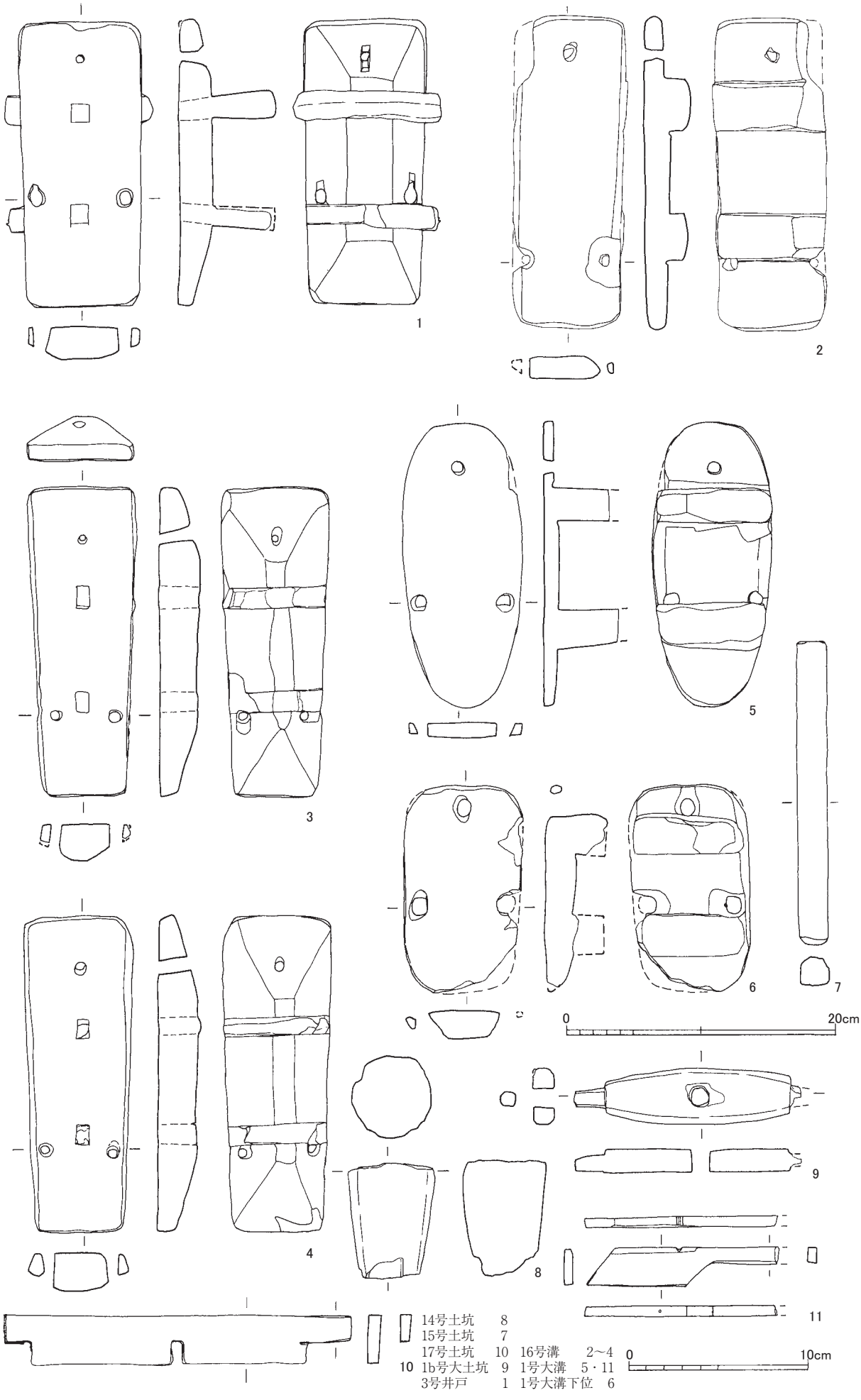
第 129 図　本町遺跡1次調査出土木製品実測図1（1/3）



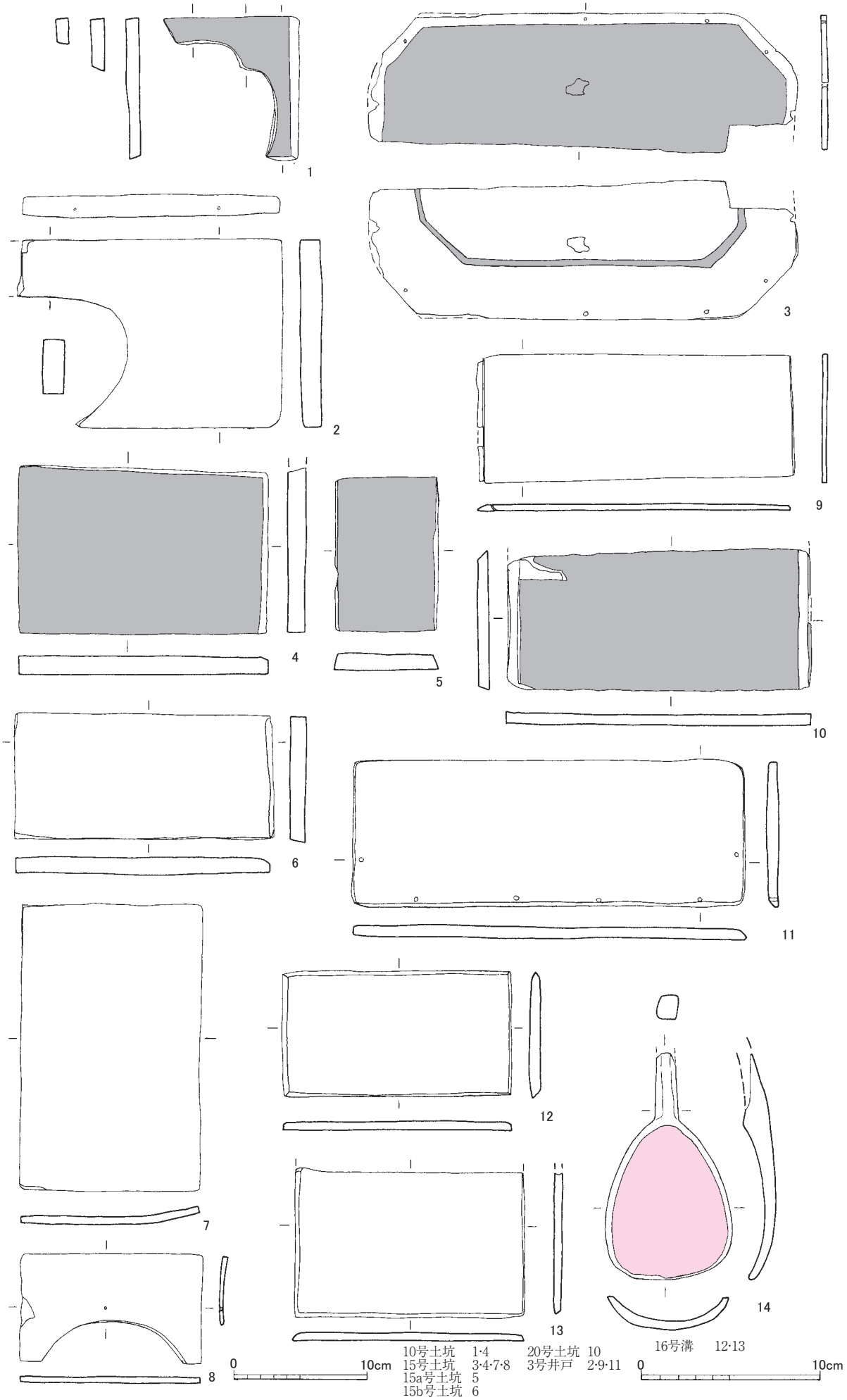
第 130 図　本町遺跡 1 次調査出土木製品実測図 2（1/3）



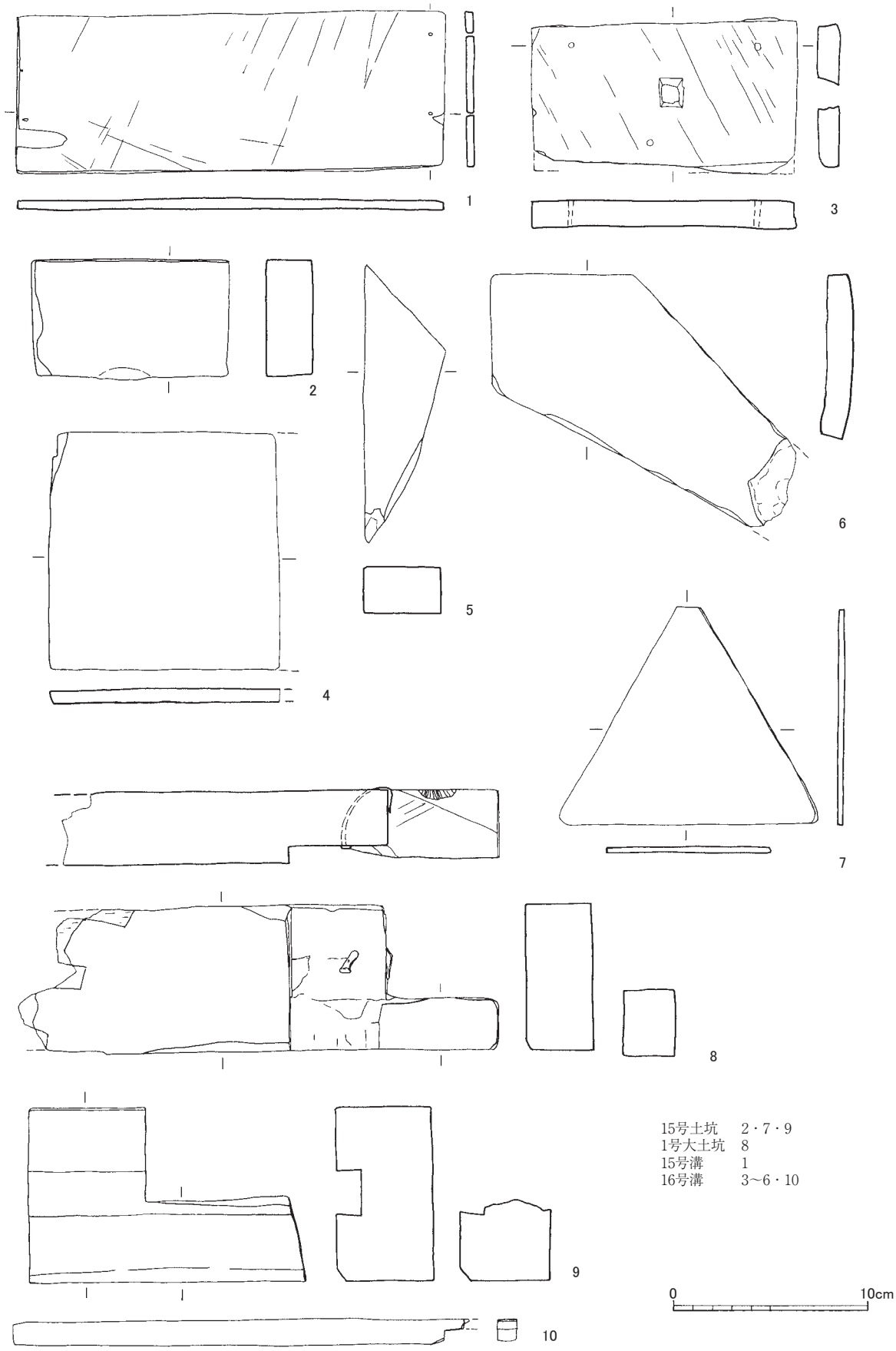
第131図　本町遺跡1次調査出土木製品実測図3（1/3）



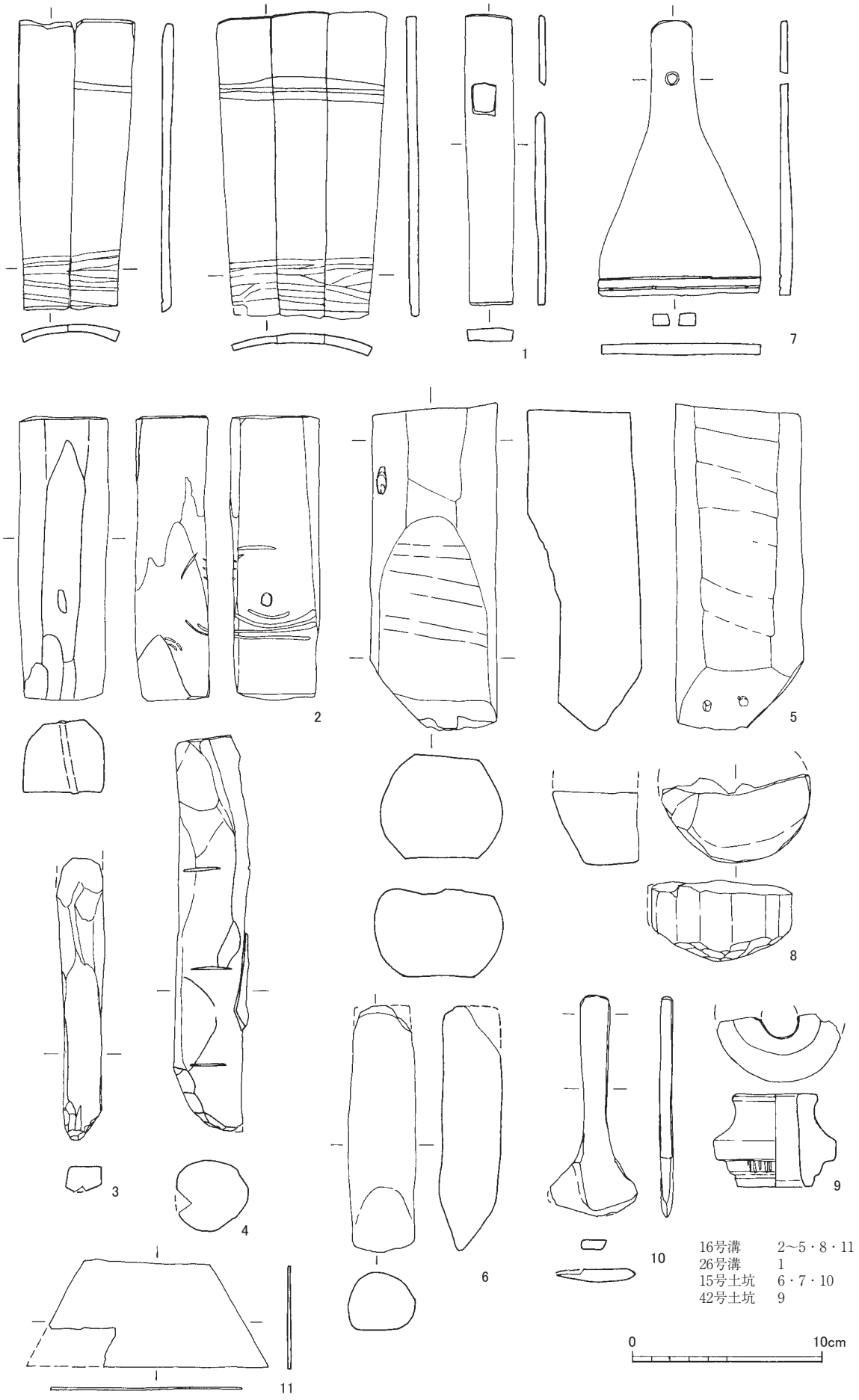
第 132 図　本町遺跡1次調査出土木製品実測図4（1/3）



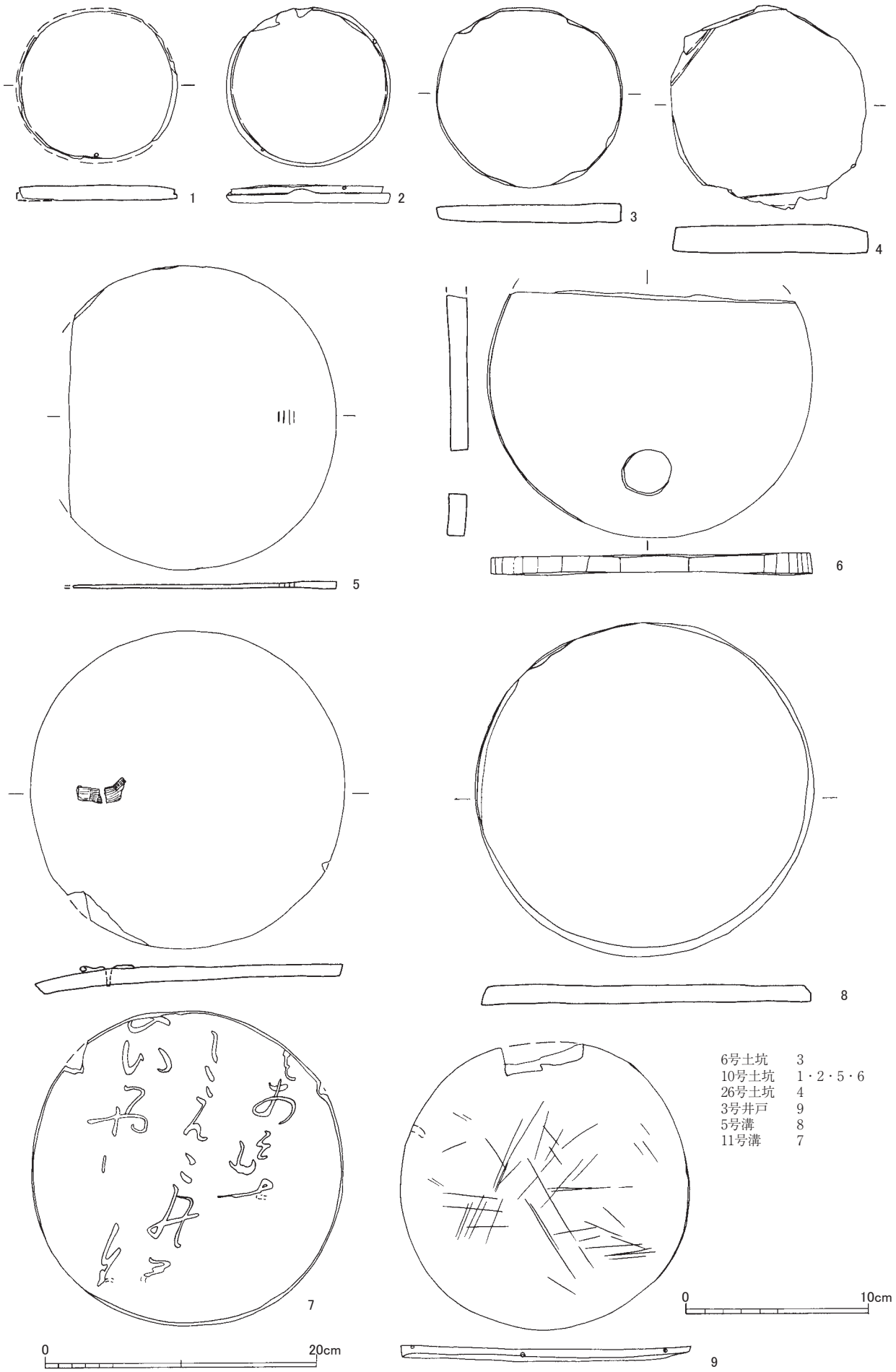
第 133 図　本町遺跡1次調査出土木製品実測図5（1・2・9・12 ～ 14 は 1/3、他は 1/4）



第 134 図　本町遺跡1次調査出土木製品実測図6（1・8は1/4、他は1/3）



第 135 図　本町遺跡1次調査出土木製品実測図7（1/3）



第 136 図　本町遺跡1次調査出土木製品実測図8（7 は 1/2、他は 1/3）

底面がはっきりわからなかったので、掘りすぎた可能性がある。断面は逆台形で、底面はほぼ平坦だった。遺物はほとんど出土しなかった。

出土遺物（第 120 図）

第 120 図 4 は軒丸瓦で、1 次北東整地層出土の第 73 図 7 と同笵である。

３号大溝遺構（図版 27、第 112 図、付図）

調査区中央北端で検出された南北方向に走る大規模な溝で、16 号土坑、７・12 号溝状遺構に切られている。南北端とも調査区外に延び、1 次調査の３号大溝遺構に繋がる可能性が高い。基盤層に近い青黄灰色粘土を埋土としており、幅 450㎝、深さ 130㎝で、底面が狭い。図化できる出土遺物なし。

落ち込み状遺構（付図）

南西端部から検出された北側に緩やかに落ち込む土壌の広がりで、客土層の可能性も考えたが、狭い範囲に限られることから落ち込み状遺構とした。７号土坑が本遺構の下から検出されたが、7 号土坑のプランは明瞭だったので、上位埋土ではない。

出土遺物（第 120 図）

第 120 図 8 は半胴甕で、内面肩部に施釉作業の時に付いた指紋が２つある。口唇部の中央から内面が茶褐色なのは、何か重ねたことによる焼成不良のためであろう。

埋甕遺構（図版 25、第 111 図）

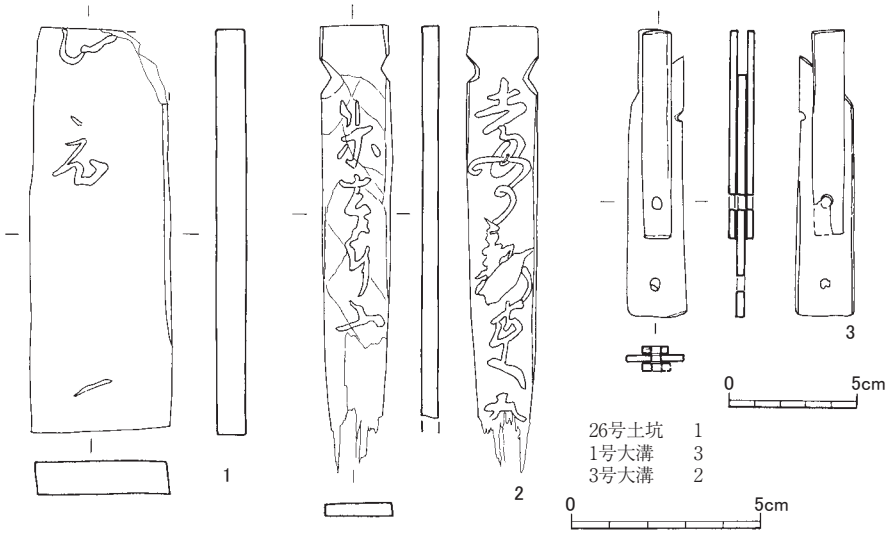
中央南部の 1 面から検出されたもので、上位は削られていた。立ち割りトレンチを入れて裏込めを確かめたが裏込め土はほとんどなかった。径 30㎝、深さ 15㎝で、土師質土器の甕で、内面にカルキが付着していたので便槽だろう。

出土遺物（図版 43、第 120 図）

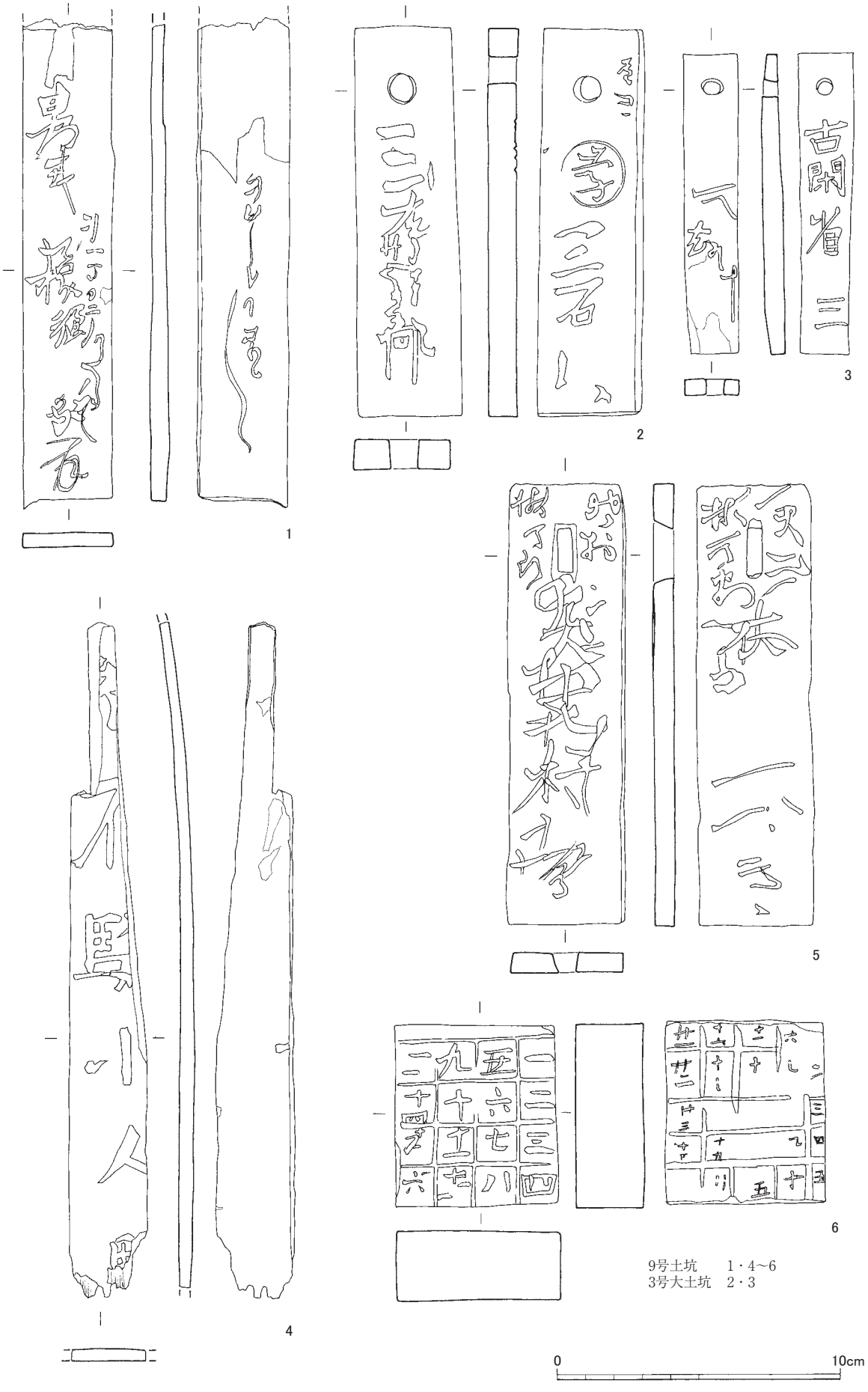
土師質大甕は側面にカルキが見分けられた付着しているのに、内底にはカルキが付着していない。湧水により水が沈殿していたのかもしれない。

その他の出土遺物（図版 44・46、第 121・124・128 図）

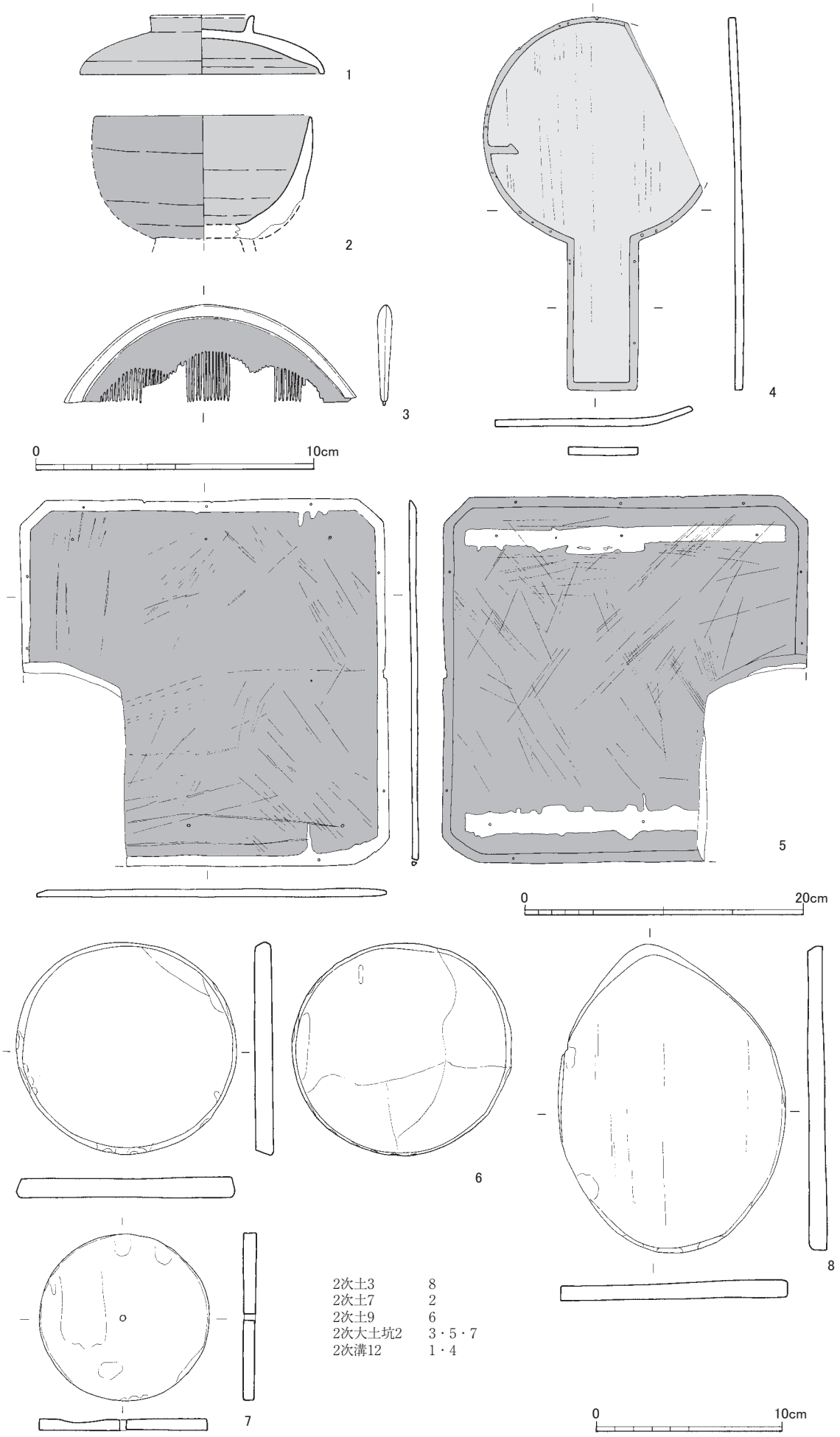
第 121 図 2 はピット 3 出土の染付皿で、明代青花の芭蕉葉文皿と同じモチーフだが内面にも文様



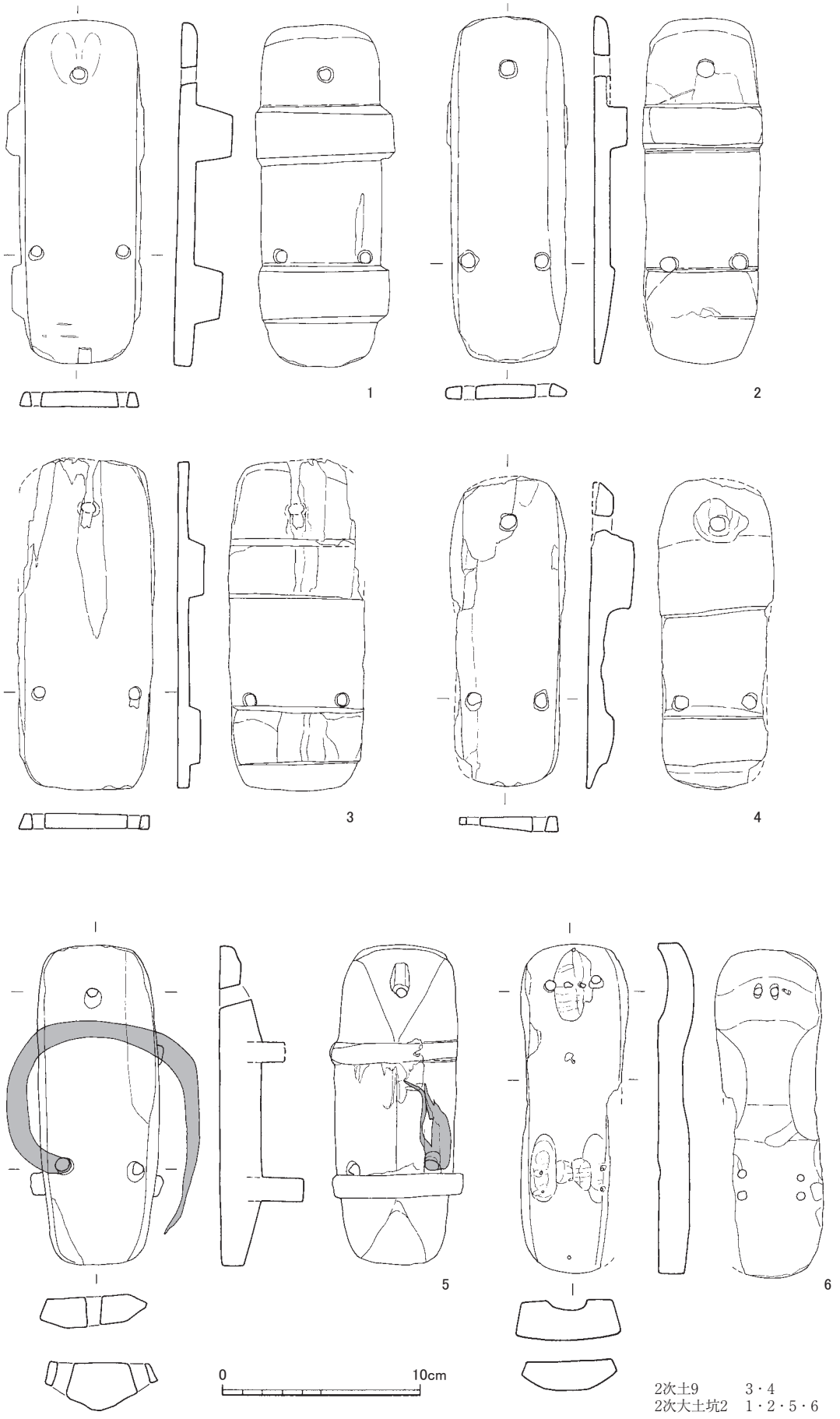
第 137 図　本町遺跡1次調査出土木製品実測図9（3 は 1/3、他は 1/2）



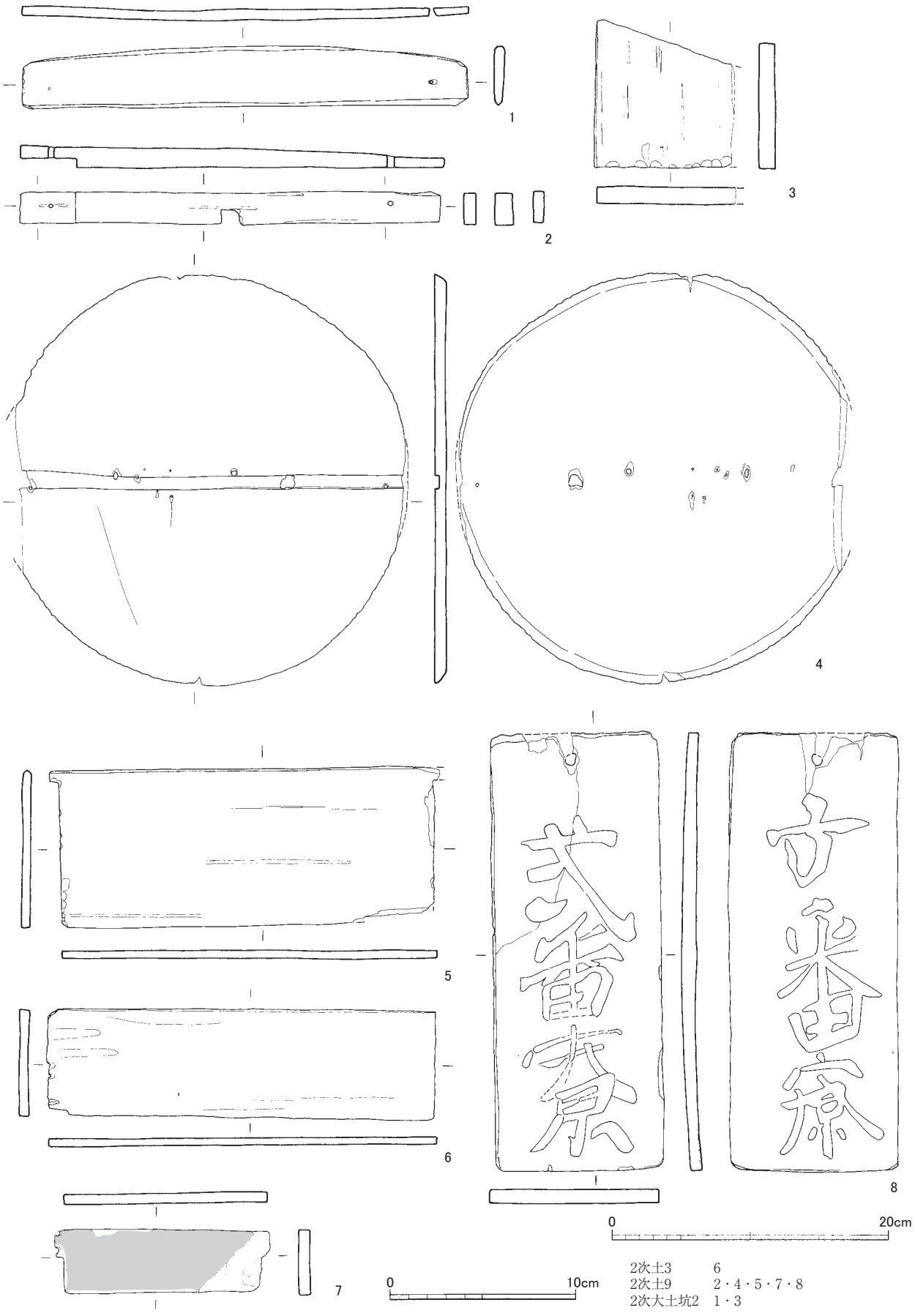
第 138 図　本町遺跡 2 次調査出土木製品実測図1（1/3）



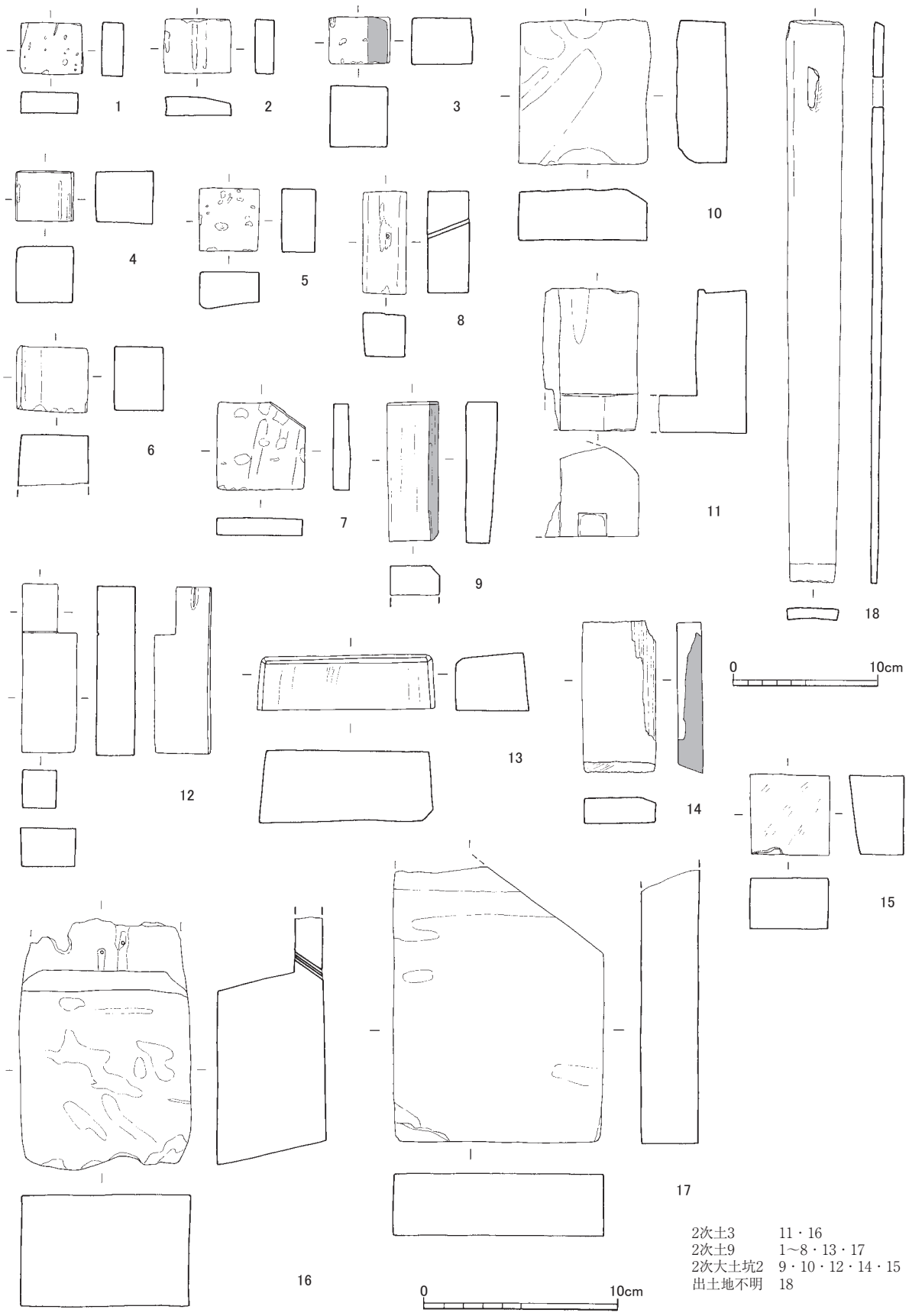
第 139 図　本町遺跡 2 次調査出土木製品実測図 2（3 は 1/2、4・7 は 1/4、他は 1/3）



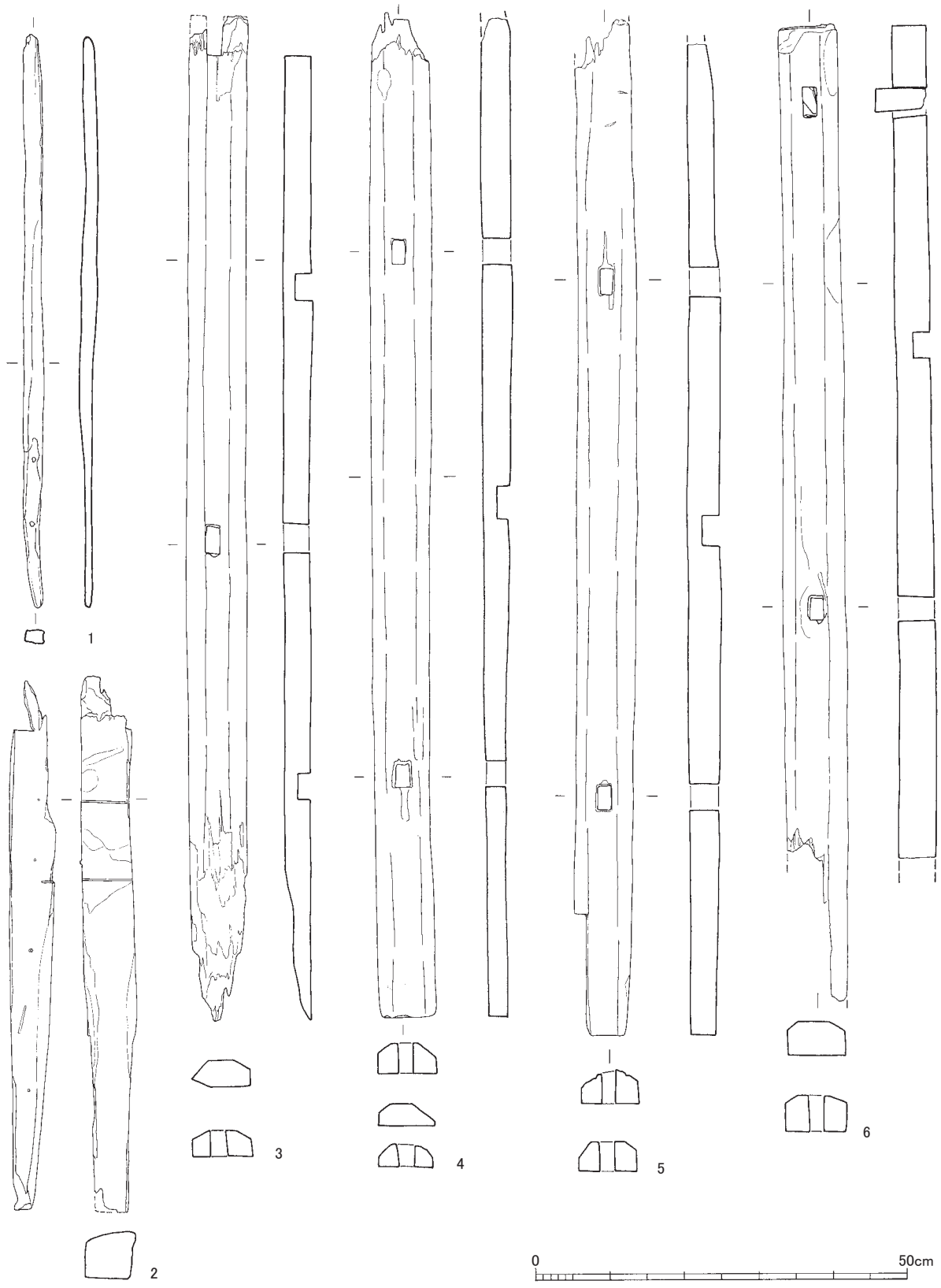
第 140 図　本町遺跡 2 次調査出土木製品実測図 3（1/3）



第 141 図　本町遺跡 2 次調査出土木製品実測図 4（4・5・8 は 1/4、他は 1/3）



第 142 図　本町遺跡 2 次調査出土木製品実測図 5（18 は 1/4、他は 1/3）



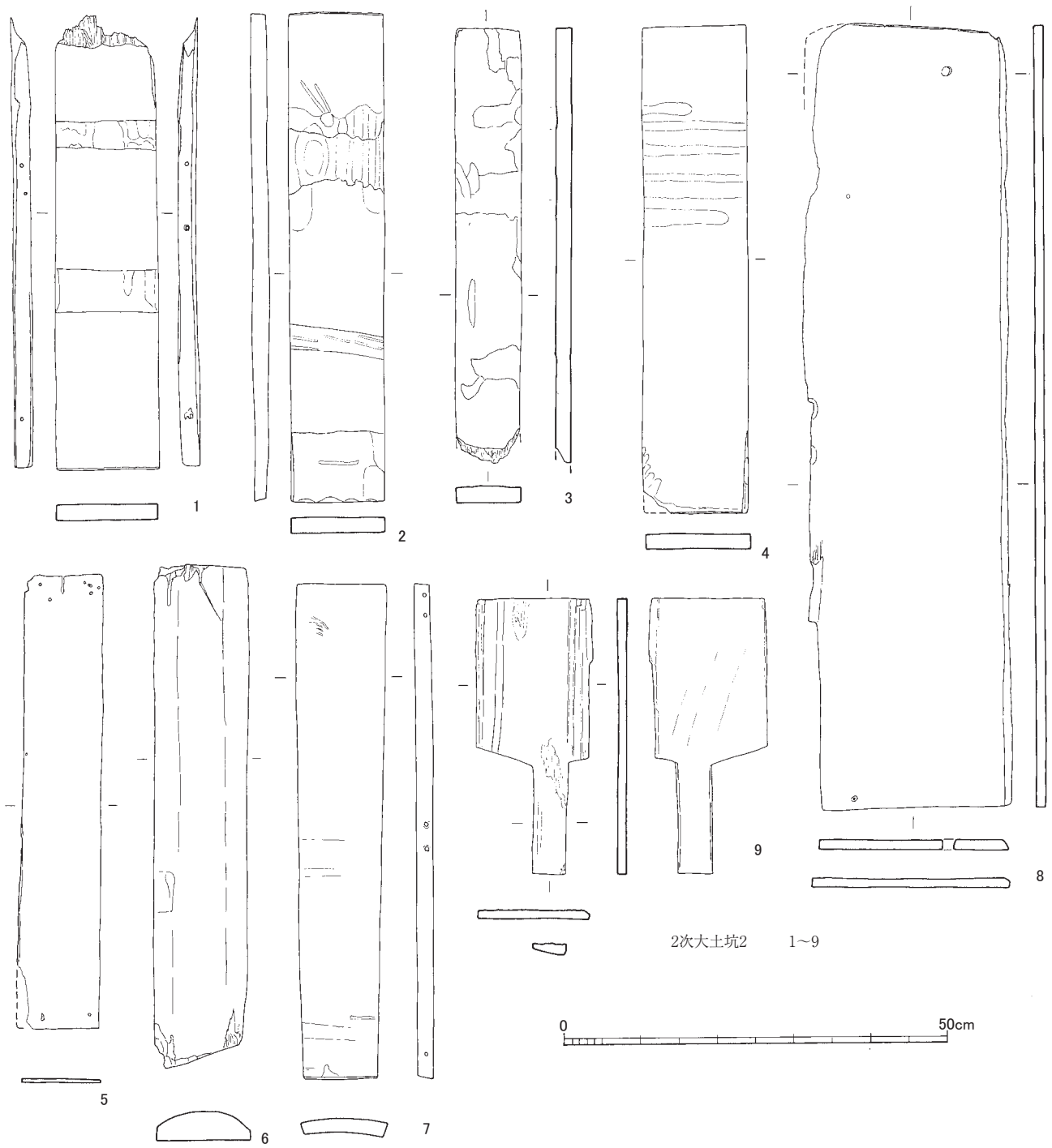
第 143 図　本町遺跡 2 次調査出土木製品実測図 6（1/8）

があるので、模倣した肥前染付であろう。

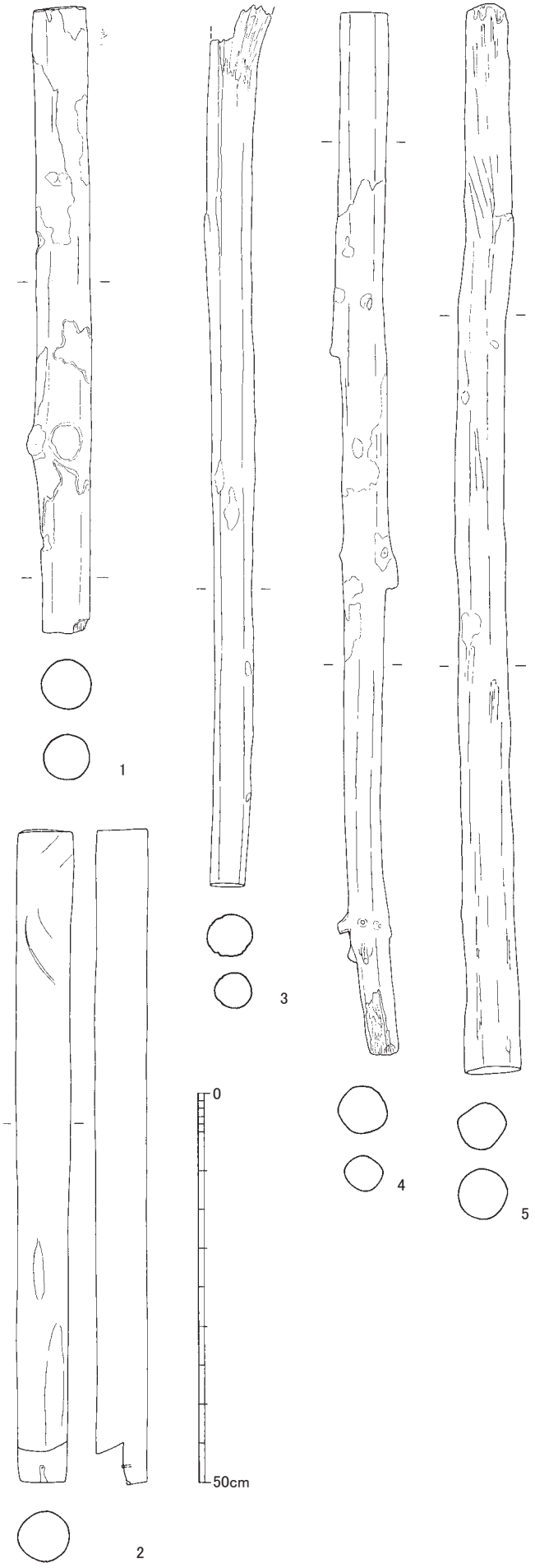
攪乱土坑１は、調査区南西部の横木基礎上から検出した小型の廃棄土坑で、明らかに新しいものだったが、ガラス製品など完形で入っていたので、遺物を回収するに留めた。第124図１～７・９～11はインク瓶とノリの瓶であり、１は外底の「ＳＩＭＣＯ」のエンボスから、明治17（1885）年設立の篠崎インキ製造が製作した篠崎ライトインキとわかる。２と５は「不易」のエンボスから、不易糊工業株式会社の万年筆用ABCインク瓶で、昭和８～20(1933～1945)年まで製造されており、戦後はエンボスがなくなる。３は外底に「ＢＯＨＮＩＮＫ」のエンボスがあったが、不掲載ながら鉛筆も出土したので文房具を廃棄した土坑とわかる。４は外底に分銅文、肩部に「ＢＯＩＴ　ＩＮＩＮＫ」のエンボスがある。

第124図12はガラス瓶で「柳河病院」のエンボスの入った薬瓶である。柳河病院は昭和25（1950）年の「日本商工業別明細図第813号」（註４）では柳川市京町２丁目にあったが、現在は西に100ｍほどにあり、道路改修に伴って移転したものと考えられる。京町２丁目は伝習館高校からわずか50ｍほどなので、最寄りの病院だったのだろう。

横木基礎は最も北の寄宿舎基礎であり、明治36(1903)年に増設された寄宿舎の基礎である。第124図８は横木基礎２から出土したインク瓶で、外底の「ＳＳＳ」のエンボスからサンエスインキとわかる。サンエス万年筆というものが大正９(1920)年に販売されているので、それ以降のものだろう。したがって、寄宿舎が解体された際に混入したものといえる。蓋はコルク製で「burhink」とエンボスがあったが、前述の第124図３の外底のエンボスの「ＢOHNＩNK」とは「u」が違っている。「ＢOHNＩNK」は文房具を取り扱う株式会社文運堂が発売したもので、スペルミスかもしれない。８のインク瓶の蓋ではないかもしれない。横基礎13からは中学伝習館の制服のボタンが出土した（図版46）



第 144 図　本町遺跡 2 次調査出土木製品実測図 7（1/8）



第 145 図　本町遺跡 2 次調査出土木製品実測図 8（1/8）

表１　１次調査出土土器・陶磁器・瓦観察表１

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm,g) ()は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見		
							特記事項	推定産地	推定年代
1号土坑 第7図1	擂鉢	―	陶器	内外鉄釉掛け　焼成やや不良で鉄釉の発色悪い	口縁部外面肥厚　内面口縁下に浅い擂り目が入る	不明		武雄	18世紀後半 ～19世紀前半
1号土坑 第7図2 図版28	土人形 おぼこ人形	高さ8.8 幅7.0 厚さ6.4	土製品		頭部は中空でないので手捏ね成型　体部は中空だが型合わせではない　橙褐色を呈する	不明		赤坂焼か	不明
2号土坑 第7図3 図版28	小皿 灯明皿	口径(7.0) 底径4.6 器高1.4	土師器		底部糸切り　内面2段ナデで、見込みは回転ナデ　外面は口縁部を尖らせるようにナデている　焼成良好で内外灰白色	不明	口縁部内外に油煙あり	在地	不明
2号土坑 第7図4	小皿	口径8.3 底径5.2 器高2.0	陶器	内面に黒褐色の鉄釉掛け　外面は露胎　発色・焼成良好	底部糸切り	砂目跡が2ヶ所につく	完形	武雄	不明
2号土坑 第7図5 図版28	擂鉢	―	陶器	内外暗灰褐色の鉄釉掛け　発色焼成良	口縁部肥厚　擂り目は欠損部に入るだろう	不明		肥前	17世紀後半
2号土坑 第7図6	擂鉢	口径(35.8)	陶器	内外鉄釉掛け　焼成やや不良で鉄釉の発色悪い	口縁部外面肥厚　内面口縁下に浅い擂り目が入る	不明		武雄	18世紀後半 ～19世紀前半
2号土坑 第7図7 図版28	染付 鉢 染錦手	口径(14.0) 底径7.0 器高7.9	磁器	透明釉発色良好	赤で牡丹・菊の花と一部の葉文　葉の大部分は呉須　花弁には金も残る　高台外面には赤絵の複線波状文帯	口縁部内面と畳付は釉剥ぎ	継痕あり　良品	有田	不明
3号土坑 第7図8	擂鉢	―	陶器	内外黒褐色の鉄釉掛け　焼成・発色良	口縁部外面肥厚　内面口縁下に擂り目が入り、上端はナデ消し	不明		武雄	18世紀後半 ～19世紀前半
3号土坑 第7図9	擂鉢	―	陶器	内外黒褐色の鉄釉掛け　焼成・発色良	口縁部外面肥厚　内面口縁下に擂り目が入り、上端はナデ消し　口縁内面に稜線あり	不明		武雄	18世紀後半 ～19世紀前半
3号土坑 第7図10	擂鉢	口径(39.0)	陶器	内外黒褐色の鉄釉掛け　焼成・発色良く光沢あり	口縁部外面肥厚　内面口縁下に擂り目が入り、上端はナデ消し	不明		武雄	18世紀後半 ～19世紀前半
3号土坑 第7図11	擂鉢	口径(25.6)	陶器	内外鉄釉掛け　焼成やや不良で鉄釉の発色悪い	口縁部外面肥厚　口縁内面に稜線あり　内面口縁下に擂り目が入り、上端はナデ消しで、ナデ部分が段をなす	不明		武雄	18世紀後半 ～19世紀前半
3号土坑 第7図12	鉢 片口鉢	口径(19.4)	陶器	内面から外面中位まで暗黒褐色の鉄釉掛け　口唇部は釉ふき取り　鉄釉の発色やや悪い	口縁部は外面肥厚　口縁部内面は2段ナデ	不明		武雄	不明
3号土坑 第7図13	甕	口径(35.0)	陶器	内外鉄漿の上に、暗灰緑褐色の灰釉を上掛け	口縁部外面を玉縁状に肥厚させている	不明	混和剤の入る胎	産地不明	不明
3号土坑 第7図14	擂鉢	口径(39.0)	陶器	焼き締めで、外面が紫褐色を呈するが、外面口縁部は摩滅して胎が露出している	口縁部外面肥厚させ、二条の凹線が入り、口唇部は突出　内面擦り目は欠損部に入る	不明		備前	不明
3号土坑 第7図15	灯明具 秉燭	底径3.8	陶器	内面から外面杯部は鉄釉掛け焼成発色良い	底部糸切り　外底に釘穴開け　芯立ては円筒形の側面の一部が開いているものを貼り付け	粘土粒ないか		武雄	不明
3号土坑 第7図16	染付 碗	口径(9.2) 底径3.8 器高4.1	磁器	透明釉発色良好	呉須　外面に花葉文	畳付は釉剥ぎ	土層の21層出土	有田	18世紀後半 ～19世紀前半
5号土坑 第7図17	染付 碗	底径(3.4)	磁器	透明釉発色良好	呉須　外面に花葉文	畳付は釉剥ぎ		有田	18世紀前葉
5号土坑 第7図18	染付 碗	口径(9.8)	磁器	透明釉発色良好	呉須　外面に花唐草文	不明		有田	18世紀前葉
5号土坑 第7図19	土製品 円盤形土製品	径2.6 厚さ1.2	陶器	焼成・発色良く光沢あり	胴部片を転用か　周縁を丁寧に加工している	不明	転用器種不明	在地	不明
5号土坑 第7図20	瓶 仏花瓶	最大径17.0	陶器	外面は上半分を白化粧土ハケ掛け、下半分を鉄釉ハケ掛けし、内面は胴部に鉄釉を掛けた後、外面上半と内面頸部まで緑灰色の灰釉掛け		不明	垂直頸部の上に皿状に開く口縁部がつくクタイプ	肥前	不明
5号土坑 第7図21	染付 角皿	底径(7.6)	磁器	透明釉発色良好	型押し成型の平面正方形で隅を窪ませている　外面は界線　外底には渦福　内面モチーフ不明　見込みは「榮」	畳付は釉剥ぎ		有田	不明
10号土坑 第9図1 図版28	小皿 灯明受け皿	口径8.6 底径5.4 器高2.0	土師器		底部糸切り　内面1段ナデで、見込みは回転ナデ　焼成良好で本来内外黄灰白色	不明	内面油による変色と油の溜まり痕	在地	不明
10号土坑 第9図2	皿	口径12.4 底径7.0 器高2.5	土師質土器		底部糸切り　内外面2段ナデ　無文　焼成良好で内外黄灰白色だが、内面は変色あり　外面に黒斑あり	不明	内面の変色は煤汚れか	在地	不明
10号土坑 第9図3	鉢 小型鉢	口径17.0 底径13.0 器高4.3	土師質土器		外面底部と胴部のオサエ痕が大きく、胴部は粗いナデ仕上げ、底部はタテハケ、内面は口縁部から底部まで一連のヨコハケで平滑にしている	不明	被熱痕　外面にぶい明黒灰色、内面にぶい暗灰色　底部赤変	在地	不明
10号土坑 第9図4	鉢 焙烙か	口径(18.0) 底径(13.4) 器高3.7	土師質土器		外面タテハケ後オサエが残る　内面ヨコハケ　外底はハケが交差し、内底は回転ハケ　内外にぶい灰色	不明	第51図4に似るが別個体　外面の煤付きは2次的	在地	不明
10号土坑 第9図5 図版28	小型壺 焼き塩壺	口径7.0 底径5.6 器高5.9	土師質土器		外底糸切り　内外ナデで、外面は器面が荒れているのは焼き塩焼成のため	不明		在地	不明
10号土坑 第9図6 図版28	蓋 火消し壺蓋	口径21.7	瓦質土器		天井部に摘みがつく　内外黒灰色で内面は煤変色あり　焼成良好　内外ナデで、内面口縁下に積み上げ痕	不明	良品	在地	不明

表２　１次調査出土土器・陶磁器・瓦観察表２

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm,g) ()は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見		
							特記事項	推定産地	推定年代
10号土坑 第9図7	壺 火消し壺	口径13.3 器高17.8	瓦質土器		外面ナデ、内面オサエ列残る	不明		在地	不明
10号土坑 第9図8	鉢 焙烙	—	土師質土器		口縁部外面肥厚だが、肥厚部の下位の接合痕は残している　口唇部ナデ窪み　外面口縁下はタテハケ　内面は丁寧なヨコハケ	内面と口唇部はにぶい黄白灰色	外面は煤付のため黒褐色	在地	不明
10号土坑 第9図9	鉢 焙烙	口径(31.6)	土師質土器		口縁部内傾で、胴部との接合部はナデによる平坦面を持つ　口縁部はナデ、胴部は器面が荒れている　内面はナデ	不明	胴部内面と口縁部外面に煤付着	在地か	不明
10号土坑 第9図10	鉢 火鉢	口径(30.6) 底径(22.0) 器高8.1	土師質土器		口縁部を内傾させ、底部は内外ハケ　外面はオサエ痕が大きく、ヨコハケで整え、縦方向の幅広い粗いミガキで仕上げている　内面はヨコハケとナデ	不明	外面にぶい明黒灰色で光沢あり、内面にぶい暗灰色	在地	不明
10号土坑 第9図11	火鉢	口径(29.5)	土師質土器		身が浅い　外面・口唇部は丁寧なナデで平滑、内面はカキ目状のヨコナデ　巴唐草文のスタンプ　内外にぶい灰色	不明	巴唐草文のスタンプは水田焼の特徴	水田焼	不明
10号土坑 第10図1 図版28	塊 筒形塊	口径(7.4) 底径(3.9) 器高5.05	陶器	内底外底を除き、内外白化粧土ハケ掛け後透明度の高い灰釉全面掛け高台貼り付け		畳付は釉剥ぎ後陶器だがアルミナ掛け		肥前	17世紀末 ～18世紀前葉
10号土坑 第10図2 図版28	塊 京焼風	口径9.6 底径3.6 器高4.45	陶器	淡黄灰色の灰釉　焼成良好　高台露胎	高台削り出し　螺旋状の沈線が残る 見込みに鉄絵の山水文	痕跡なし		肥前	18世紀前葉
10号土坑 第10図3	塊 京焼風	口径(4.4) 底径(3.6) 器高4.5	陶器	淡黄灰色の灰釉を高台以外に掛ける　焼成発色良好	高台削り出し　灰釉上の鉄釉の山水文は不鮮明	痕跡なし	高台露胎	肥前	18世紀前葉
10号土坑 第10図4	塊 京焼風	口径(9.4) 底径3.8 器高4.5	陶器	淡黄灰色の灰釉を高台以外に掛ける　焼成発色良好	高台削り出し　釉上見込みに鉄釉の山水文を上描き	痕跡なし	高台露胎	肥前	18世紀前葉
10号土坑 第10図5	塊 京焼風	口径(9.4) 底径3.0	陶器	淡黄灰色の灰釉を高台以外に掛けた上に外面に緑彩で葉文　焼成良好	高台削り出し　植物文　見込みの緑彩は垂れたもの	痕跡なし	高台露胎	肥前	18世紀前葉
10号土坑 第10図6 図版28	塊	口径10.7 底径4.9 器高7.1	陶器	高台貼り付け　外底を除き、外面白化粧土掛け後櫛掻き取り、内面白化粧土の布流し掛けによる雑巾手　最後に全面透明度の高い灰釉掛け　発色良好だが底部は釉の沸騰あり		畳付は釉剥ぎ　砂目付		武雄	17世紀末 ～18世紀初頭
10号土坑 第10図7	塊 京焼風	口径(9.8) 底径3.8 器高5.05	陶器	淡黄灰色の灰釉を高台以外に掛ける　焼成発色良好	高台深い削り出し　釉上見込みに鉄釉の山水文なし　焼成発色良好	痕跡なし	高台露胎	肥前	18世紀前葉
10号土坑 第10図8	塊 京焼風	底径(4.4)	陶器	淡黄灰色の灰釉　焼成発色良好	高台削り出し「清水」銘の刻印　釉上見込みに鉄絵の山水文	痕跡なし	高台露胎	肥前	18世紀前葉
10号土坑 第10図9	塊	口径(11.2) 底径4.3 器高6.3	陶器	内外黒釉だが発色不良で、外面は茶褐色の部分あり	内外全面飴釉だが、発色不良　天目のように見える	畳付は釉剥ぎ		肥前	17世紀末 ～18世紀初頭
10号土坑 第10図10	塊	口径(11.6) 底径(4.2)	陶器	内外白化粧土ハケ掛け後透明度の高い灰釉全面掛け	見込みに蛇ノ目釉剥ぎ　高台削り出し	畳付は釉剥ぎ　砂目付		肥前	18世紀前葉
10号土坑 第10図11 図版28	塊	口径11.9 底径6.5 器高6.5	陶器	内外白化粧土ハケ掛け後透明度の高い灰釉全面掛け	高台削り出し	畳付は釉剥ぎ	10号溝状遺構に伴うか	肥前	17世紀末 ～18世紀初頭
10号土坑 第10図12 図版28	塊	口径(11.2) 底径(5.0) 器高6.6	陶器	内外白化粧土ハケ掛け後透明度の高い灰釉全面掛け	高台削り出し	畳付は釉剥ぎ		肥前	17世紀末 ～18世紀初頭
10号土坑 第10図13	皿 小皿	口径(8.6) 底径4.0 器高2.2	陶器	内面黒褐色の鉄釉　外面は露胎　発色良	底部糸切り　完形品　内面にひっつきあり　灯明皿としての痕跡なし	粘土粒わずかにあり		武雄	不明
10号土坑 第10図14	皿 小皿	口径(8.2) 底径4.0 器高2.0	陶器	内面黒褐色の鉄釉　外面は露胎　やや発色不良	底部糸切り　完形品　内面にひっつきあり　灯明皿としての痕跡なし	粘土粒あり		武雄	不明
10号土坑 第10図15 図版28	皿 5寸皿	口径11.8 底径4.4 器高3.7	陶器	底部を除き、淡黄緑灰色の灰釉掛け　焼成良好	高台削り出し	見込みの蛇ノ目釉剝ぎに別個体の畳付痕跡あり　高台露胎		肥前	17世紀末 ～18世紀初頭
10号土坑 第10図16	皿 5寸皿	口径12.0 底径4.4 器高3.5	陶器	底部を除き、淡黄緑灰色の灰釉掛け　焼成良好　灰釉が厚く透明感あり貫入も少ない	見込みに蛇ノ目釉剥ぎ　高台削り出し	見込みの蛇ノ目釉剝ぎに別個体の畳付痕跡あり　高台露胎		肥前	17世紀末 ～18世紀初頭
10号土坑 第10図17	皿 5寸皿	口径12.3 底径4.1 器高3.7	陶器	高台を除き、全面淡黄緑灰色の灰釉　焼成良好　灰釉が厚く透明感あり　貫入も少ない	見込みに蛇ノ目釉剥ぎ　高台削り出し	痕跡なし　高台露胎		肥前	17世紀末 ～18世紀初頭
10号土坑 第10図18	皿 5寸皿	口径11.3 底径4.2 器高3.7	陶器	高台を除き、淡黄緑灰色の灰釉　焼成良好	見込みに蛇ノ目釉剥ぎ　高台削り出し	痕跡なし		肥前	17世紀末 ～18世紀初頭
10号土坑 第10図19	皿 5寸皿	口径11.6 底径4.4 器高3.9	陶器	内面に淡灰色の灰釉　焼成良好　灰釉が厚く透明感あり貫入も少ない	見込みに蛇ノ目釉剥ぎ　高台削り出し	痕跡なし		肥前	17世紀末 ～18世紀初頭
10号土坑 第10図20	皿 5寸皿 二彩唐津	底径(4.6)	陶器	淡緑灰白色の灰釉を高台以外全面掛け　焼成良好	高台削り出し　釉上見込みに鉄釉で花文	高台露胎		肥前	不明
10号土坑 第10図21 図版28	皿 5寸皿	口径12.6 底径4.4 器高3.5	陶器	高台を除き、淡黄緑灰色の灰釉　焼成良好　高台露胎	見込みに蛇ノ目釉剥ぎ　高台削り出し	痕跡なし	灰釉が厚く透明感あり　貫入も少ない	肥前	18世紀前葉
10号土坑 第10図22	鉢 中鉢	口径(40.0)	陶器	内面は白化粧土の掻き取りによる施文、その上に内外口縁部に灰釉掛け口縁跳ね上げ		不明		武雄	17世紀末 ～18世紀前葉

表３　１次調査出土土器・陶磁器・瓦観察表３

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm,g) ()は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見		
							特記事項	推定産地	推定年代
2号溝・10号土坑 第10図23	擂鉢	口径(37.0)	陶器	内外口縁部に黒褐色の鉄釉掛け　焼成・発色良	口縁部外面肥厚　口縁内面に稜線あり内面口縁下に9本単位の擂り目が入り、上端で2単位が交差する	不明		武雄	17世紀末～18世紀初頭
10号土坑 第10図24	七輪 組み合わせ部材	口径(15.4)	陶器	なし　焼き締め	口唇部ナデ　外面タテハケ　内面ヨコハケ	金雲母が入る	火鉢に組み合わせて七輪にするものか	不明	不明
10号土坑 第11図1	擂鉢	—	陶器	口縁部に内外鉄釉二度掛け焼成良	口縁部玉縁状肥厚　内面口縁下に9本単位の擂り目が入り、上端で2単位が交差する	不明		武雄	17世紀末 ～18世紀初頭
10号土坑 第11図2	擂鉢	—	陶器	口縁部に内外黒茶褐色の鉄釉掛け　焼成発色良	口縁部肥厚　内面口縁下の擦り目残っていない	不明		武雄	17世紀末 ～18世紀初頭
10号土坑 第11図3	擂鉢	口径(32.0)	陶器	外面口縁部から口唇部に黒褐色の鉄釉掛け　焼成強すぎ	口縁部肥厚　内面口縁下の擦り目は単位不明、擂り目の浅いものと深いものがある　口縁下に段あり	不明	口唇部に釉が蒸発した部分あり	武雄	17世紀末 ～18世紀初頭
10号土坑 第11図4	擂鉢	口径(33.0)	陶器	外面口縁部から口唇部に黒褐色の鉄釉掛け	口縁部肥厚　内面口縁下の擦り目は単位不明、擂り目の浅いものと深いものがある　口縁下に段あり	不明		武雄	17世紀末 ～18世紀初頭
10号土坑 第11図5	擂鉢	口径(37.0)	陶器	内外口縁部に黒褐色の鉄釉掛け　焼成・発色良	口縁部外面玉縁状　内面口縁下はナデの段　内面口縁下11本単位の擂り目、上端で2単位交差	不明	口唇部がナデのため尖る	武雄	17世紀末 ～18世紀初頭
10号土坑 第11図6	擂鉢	口径(33.0)	陶器	外面口縁部から口唇部に黒褐色の鉄釉掛け　焼成良	口縁部肥厚　内面口縁下の擦り目は単位不明、擂り目の浅いものと深いものがある　口縁下に段あり	不明		武雄	17世紀末 ～18世紀初頭
10号土坑 第11図7 図版28	鉢 植木鉢	口径(32.6)	陶器	外面口縁部突帯貼り付け　胴部は型押し成型で、断面8角形になる　外面口縁部から内面は黒褐色の鉄釉を掛け、内面は茶色の鉄釉をヨコハケ掛けした後、角部に縦線を入れる　外面は鉄釉と白化粧土の面を交互に設け、鉄釉地の面には白化粧土で、白化粧土地の面は鉄釉でマツを描く				肥前	不明
10号土坑 第11図8	甕 半胴甕	口径(22.4)	陶器	内面下位は鉄煤、外面下位は鉄釉掛け、その後灰釉を上半に掛ける。外面から内面口縁部は、白化粧土ハケ掛け後、外面上半から口縁部まで灰釉掛け、外面胴部屈曲部は釉剥ぎ　外面に鉄釉で唐草文と松樹文、松葉は緑灰釉で描く　口縁部外面に突帯貼り付け		不明		肥前	不明
10号土坑 第11図9 図版28	瓶 花入れ	口径(4.3) 底径5.8 器高10.0	陶器	焼成釉の発色良好	胴部外面中位と下位に凹線2条入る　外面から内面口縁部まで鉄釉掛け、外底に鉄釉で「6」字形に銘が入る	高台露胎　砂目付着		肥前	不明
10号土坑 第11図10	甕 半胴甕	口径(18.8)	陶器	暗紫褐色の鉄釉を全面に掛ける	胴部は内外面格子目タタキ痕、外面はカキ目ナデ消し　内面は肩部のみカキ目、中位以下はナデ	底部欠損のため不明	肩部外面に5状の沈線	肥前	17世紀後半
10号土坑 第11図11	土瓶 京焼風陶器	口径(7.7) 底径7.5 器高11.0	陶器	淡黄灰色の灰釉を外面全面掛け　焼成良好　高台露胎	高台貼り付け　型押し成型の注口貼り付け　外面胴部に鉄絵の山水文	畳付にアルミナ付着		肥前	不明
10号土坑 第11図12	土瓶	口径(10.2) 底径9.0 器高11.4	陶器	外面高台以外黒褐色の飴釉掛け	高台削り出し　型押し成型の橋状把手と注口がつく	高台露胎　口唇部釉剝ぎ 畳付にアルミナ付着	内面は底面が変色しているので湯沸かしではない	肥前	不明
10号土坑 第12図1	染付 碗	口径7.2	磁器	透明釉発色良好だが貫入多く、呉須は薄い	呉須　外面にコンニャク印判による不明文	不明		有田	18世紀前葉
10号土坑 第12図2	染付 碗	口径8.2 底径3.3 器高4.5	磁器	透明釉発色良好だが下位は釉切れあり	呉須　外面口縁部に雨降り文	畳付は釉剥ぎ　砂目付		有田	18世紀前葉
10号土坑 第12図3	小型碗か 染錦手	口径(8.6) 器高3.6	磁器	透明釉発色良好	赤で外面網目文と花文　葉の部分は外形線黒で、緑を塗布　花弁には金も残る 口錆	不明	蓋の可能性もある	有田	18世紀前葉
10号土坑 第12図4	碗	口径10.2 底径4.0 器高5.6	磁器	透明釉発色良好	第12図14とセット　見込みに箸痕らしい傷あり	畳付は釉剥ぎ		有田	18世紀前葉
10号土坑 第12図5	碗 染付	口径9.5 底径4.2 器高4.0	磁器	透明釉発色良好　内面にひっつきあり	呉須　外面のコンニャク印判の蔦葉文	畳付は釉剥ぎ		有田	18世紀前葉
10号土坑 第12図6	碗 染付	口径9.6 底径3.0 器高4.6	磁器	透明釉発色良好、呉須は薄い	呉須　外面口縁部に四方襷文帯、胴中位以下は氷裂文地に丸文　外底は角福	畳付は釉剥ぎ		有田	18世紀前葉
10号土坑 第12図7	碗 色絵	口径(10.0) 底径(3.6) 器高5.4	磁器	透明釉発色良好	外面は赤の花と、緑と紫の葉、黒の葉脈を、呉須で描かれた葉文の上に描く	畳付は釉剥ぎ	うがい茶碗か	有田	18世紀前葉
10号土坑 第12図8 図版28	小型碗か 色絵	口径8.6 底径3.35 器高4.3	磁器	透明釉発色良好　貫入多い	外面は呉須の菊文上に、赤絵で花文と蝶　花の一部に黒があるが発色不良か見込みに手描きの五弁花文	畳付は釉剥ぎ	第12図10と揃い	有田	18世紀前葉
10号土坑 第12図9	鉢 染錦手	口径8.6 底径3.4 器高4.0	磁器	透明釉発色良好　良品	呉須の葉の上に赤で花の輪郭、花弁は金　赤でススキと蝶と一部の葉文　見込みに五弁花文の手描き	口縁部内面と畳付は釉剥ぎ		有田	18世紀前葉
10号土坑 第12図10	色絵 小型碗か	口径8.6 底径3.4 器高4.1	磁器	透明釉発色良好	外面は呉須の菊文の上に、赤絵で花文を上に書き込む	畳付は釉剥ぎ	第12図8と揃いなので赤絵部分の破片だろう	有田	18世紀前葉
10号土坑 第12図11	色絵 小型碗か	口径8.6 底径3.2 器高4.75	磁器	透明釉発色良好　良品	外面は赤の菊花と黒と緑で葉と茎を書いている	畳付は釉剥ぎ		有田	18世紀前葉
10号土坑 第12図12	蓋	口径9.4 器高2.6	磁器	透明釉発色良好		摘み部上端は釉剥ぎ		有田	18世紀前葉
10号土坑 第12図13	碗	口径9.4 底径3.6 器高5.0	磁器	透明釉発色良好	無文　口錆	畳付は釉剥ぎ		有田	18世紀前葉
10号土坑 第12図14	蓋	口径9.2 器高2.6	磁器	透明釉発色良好	第12図4とセット	摘み部上端は釉剥ぎ		有田	18世紀前葉

表４　１次調査出土土器・陶磁器・瓦観察表４

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm,g) ( )は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見		
							特記事項	推定産地	推定年代
10号土坑 第12図15	碗	口径9.9 底径3.9 器高5.6	磁器	透明釉発色良好	無文　口錆	畳付は釉剥ぎ　砂目付		有田	18世紀前葉
10号土坑 第12図16 図版28	染付 青磁掛け分け碗	口径8.9 底径3.6 器高4.6	磁器	青磁釉・透明釉ともに良好の良品　貫入あり	外面青磁釉　内面網目文　口錆　見込みは二重界線内にコンニャク印判の五弁花文	畳付釉剥ぎ		有田	18世紀中葉
10号土坑 第12図17	染付 青磁掛け分け碗	口径10.6 底径4.3 器高6.15	磁器	青磁釉・透明釉ともに良好の良品	高台内界線内に「大明年製」 口錆　見込みは二重界線内にコンニャク印判の五弁花文			有田	18世紀中葉
10号土坑 第12図18	染付 蕎麦猪口	口径(7.5) 底径(4.6) 器高5.3	磁器	透明釉発色良好	高台内界線内に「大明年製」 外面は松竹梅の松と竹の部分	畳付は釉剥ぎ		有田	17世紀末 ～18世紀前葉
10号土坑 第12図19	染付 壺蓋	口径(9.2) 底径(11.6)	磁器	透明釉呉須発色良好　良品	天井部に摘みがつく 外面は呉須で区画内に花文	受け部は露胎と釉剥ぎ	断面に膠と思われるもの付着　継いでいるか	有田	18世紀前半
10号土坑 第12図20	染付 皿 5寸皿	口径(12.7) 底径4.7 器高4.0	磁器	透明釉発色良好	厚手のくわらんか手　呉須で内面扇文と蔦葉文　見込みに五弁花文のコンニャク印判	見込みに蛇ノ目釉剥ぎ　畳付は釉剥ぎ　砂目付		有田	17世紀末 ～18世紀前葉
10号土坑 第12図21	染付 鉢	口径12.6 底径7.5 器高6.15	磁器	透明釉は外面から内面口縁部に掛け、発色良好　良品	呉須　島と帆掛け船文　内面は口縁部に袈裟襷文　見込みの界線内に山水文 外底に角福	外底蛇ノ目高台		有田	18世紀後葉
10号土坑 第12図22	染付 変形皿	口径8.0 底径3.0 器高2.4	磁器	透明釉発色良好　貫入多い	見込みに墨弾きで銀杏葉が3枚　内面胴部は型押し成形の花弁口縁を呉須で花弁部の外郭線を縁取る	畳付は釉剥ぎ　砂目付		波佐見	不明
10号土坑 第12図23	染付皿 5寸皿	口径(16.0) 底径12.0 器高2.9	磁器	透明釉発色良好　やや貫入あり	呉須で外面唐草文、内面波濤文と波濤千鳥文　高台貼り付け	畳付は釉剥ぎ		有田	18世紀前葉
10号土坑 第12図24	染付 仏花瓶	底径5.1	磁器	透明釉は外面のみ発色良好	呉須で唐草文	畳付は釉剥ぎ　砂目付		有田	17世紀末 ～18世紀前葉
10号土坑 第13図1	染付 花瓶	口径11.8 器高16.3	磁器	透明釉発色良好　貫入多い	型押し成型による人面を耳部に貼り付けている　呉須で花樹文	不明	口縁部にひっつき多い	有田	不明
10号土坑 第13図2 図版28	白磁 不明	口径(6.3) 底径4.4 器高2.2	磁器	透明釉　発色焼成良好	型押し成型による三角土台の各辺と上面に別の部材が接合されたもの　外面中央露胎部に2文字の墨書	痕跡なし		肥前	不明
10号土坑 第13図3	土師質瓦	厚さ1.0	土師質土器		内外ハケで小口部ナデ、側面は截断後面取り　凹面にオサエ列が顕著に残る　雲母多く、暗灰色を呈する		2つのオサエ列は粘土の幅を示している	在地	不明
10号土坑 第13図4	土師質瓦	厚さ1.1	土師質土器		内外ハケで小口部ナデ、側面は截断後面取り　凹面にオサエ列残る　両端部穿孔　雲母多く、表面灰白色　断面黒色		2つのオサエ列は粘土の幅を示している	在地	不明
11号土坑・12号溝 第14図1 図版28	小皿	口径(6.3) 底径4.4 器高2.2	土師質土器		底部糸切り　内外面1段ナデ　焼成良好で内外黄灰白色	不明	外底・内面の色は油によるもの	在地	不明
11号土坑・12号溝 第14図2	焙烙	口径(50.4)	土師質土器		口縁部肥厚　口唇部ナデ窪み　外面オサエ後胴部上位はヨコナデ、下位は未調整　内面は丁寧なハケ仕上げ　焼成良好で内面胴部上位はにぶい暗橙灰白色、下位は暗灰褐色に変色	不明	外面は煤付着で黒茶褐色に変色	在地	不明
11号土坑・12号溝 第14図3	鉢 火鉢か	口径(44.0)	瓦質土器		外面ケズリ、内面ハケ　外面黒灰色、内面灰白色を呈する	不明	口唇部に傷が多い	在地	不明
11号土坑・12号溝 第14図4	塊 京焼風	口径(9.8) 底径(4.0)	陶器	高台削り出し　淡黄灰色の灰釉を高台以外に掛けた上に見込みに鉄釉の文字と見られる文様を上描き　焼成良好		高台露胎　痕跡なし		肥前	18世紀前葉
11号土坑・12号溝 第14図5	染付 小型碗	口径(8.4) 底径3.4	磁器	透明釉発色良好　貫入多い	呉須　外面にアザミ文か	畳付は釉剥ぎ		有田	18世紀前半
11号土坑・12号溝 第14図6	大甕	－	陶器	内外鉄釉で頸部は釉剥ぎ	内面に格子目タタキ当て具痕ナデ消し　肩部カキ目の上に凹線による井字文	肩部片のため不明		肥前	
11号土坑・12号溝 第14図7	瓶 小型瓶か	底径(4.8)	陶器	灰釉を掛けた痕跡あり　発色不良か　黒灰色を呈する	外底糸切り	胎土目跡が外底に付着		不明	
11号土坑・12号溝 第14図8	擂鉢	口径(34.0) 器高13.8	陶器	口縁部に内外鉄釉掛け　焼成良	口縁部内面側肥厚し、2条の凹線入る　外底糸切り　内面口縁下に12本単位の擂り目が入る	外底に胎土目あり		武雄	
11号土坑・12号溝 第14図9	染付 蓋	底径(9.0)	磁器	透明釉発色良好	天井部削り出し　呉須でコンニャク印判による下がり藤文		第14図10とは別個体	有田	18世紀前半

表５　１次調査出土土器・陶磁器・瓦観察表５

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm,g) ()は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見		
							特記事項	推定産地	推定年代
11号土坑・12号溝 第14図10	染付 蓋	口径(3.6) 底径(9.2)	磁器	透明釉発色良好	天井部削り出し 呉須でコンニャク印判による不明文	摘み上端釉剝ぎ	第14図9とは別個体	有田	18世紀前半
11号土坑・12号溝 第14図11	碗蓋	口径(3.6) 底径(9.8) 器高3.0	磁器	透明釉発色良好	天井部削り出し	摘み上端は釉剝ぎ	第14図12とセットか 良品	有田	18世紀前半
11号土坑・12号溝 第14図12	碗	口径(11.7) 底径5.2 器高6.0	磁器	透明釉発色良好	削り出し高台 無文	畳付は釉剝ぎ	第14図11とセットか 良品	有田	18世紀前半
11号土坑・12号溝 第14図13	染付 小型蕎麦猪口	底径(4.3) 器高6.4	磁器	透明釉発色良好	呉須で外面花唐草文、見込みに手描きによる五弁花文、外底は角福	畳付釉剝ぎ		有田	18世紀前半
11号土坑・12号溝 第14図14	染付 皿 五寸皿	口径(21.4) 底径(13.2) 器高3.0	磁器	透明釉発色良好	呉須で外面口縁部は四方襷文帯、胴部は唐草文、内面胴部は花唐草文、見込みにラマ式連弁文帯 高台貼り付け	畳付釉剝ぎ		有田	18世紀前半
11号土坑・12号溝 第14図15	染付 皿 変形皿	口径12.4 底径4.5 器高2.6	磁器	透明釉発色良好	呉須で外面葉と蔓文、外底は「大明年製」銘、内面胴部は楕円窓文で、見込みは墨弾きによる花文 型押し成型の平面菱形で、角は輪花状を呈す	畳付釉剝ぎ	完形	肥前	18世紀前半
11号土坑・12号溝 第14図16	染付 皿 五寸皿	口径18.8 底径9.0 器高4.3	磁器	透明釉発色良好	高台削り出し 呉須で外面草文、内面扇文と牡丹文、見込みにコンニャク印判による五弁花文	見込みに蛇の目釉剝ぎ 畳付釉剝ぎ 砂目付あり		有田	17世紀後葉 ～18世紀前葉
11号土坑・12号溝 第14図17	軒丸瓦 瓦当	径(16.0)	瓦質		A5類 型から外して縁をナデている 燻はなく青灰色 焼成良好	不明	珠文が扁平	在地	不明
11号土坑・12号溝 第14図18 図版47	土鈴	高さ3.7 幅3.0 厚さ3.0	土師質土器		型合わせ後紐孔穿孔 焼成良好で内外黄灰白色	不明		在地	不明
12号土坑 第16図1	染付 小型碗	口径(8.4)	磁器	透明釉発色やや不良	呉須 外面に草文か			有田	不明
13号土坑 第16図2 図版28	皿 灯明受皿	最大径10.2 底径.6 器高2.3	陶器	柿釉か 光沢あり 焼成良好 高台露胎	受け部の口縁部一端を削っている 外底糸切り 完形	皿部の外面口縁部に油煙あり		武雄か	不明
13号土坑 第16図3	鍋	口径(15.4)	陶器	茶褐色の光沢のある鉄釉を内外に掛かる	型押し成型で把手貼り付け	不明		肥前	不明
13号土坑 第16図4 図版29	土瓶 京焼風	口径8.4 最大径15.4	陶器	焼成発色良好 淡黄灰色の灰釉を掛けた上に鉄釉の不明文を上描き 型押し成型による部材の接合		底部露胎		肥前	不明
13号土坑 第16図5	白磁 杯	口径7.0 底径2.8 器高2.9	磁器	白磁釉Iの発色よい	高台削り出し ほぼ完形	畳付釉剝ぎ 砂目付着		肥前	18世紀中葉 ～18世紀後葉
13号土坑 第16図6	染付 碗	口径(9.8) 底径3.6 器高4.8	磁器	呉須と透明釉の発色良い やや歪みあり	呉須で外面草文 厚手のくわらんか手 外底に崩れた「明」か 完形	畳付釉剝ぎ	第16図7・8と揃い	波佐見	18世紀中葉 ～18世紀後葉
13号土坑 第16図7	染付 碗	口径(8.4) 底径(3.9) 器高5.1	磁器	呉須と透明釉の発色良い やや歪みあり	呉須で外面草文 厚手のくわらんか手 外底に崩れた「明」か 完形	畳付釉剝ぎ	第16図6・8と揃い	波佐見	18世紀中葉 ～18世紀後葉
13号土坑 第16図8	染付	口径(9.8～10.2) 底径(3.8) 器高5.0	磁器	呉須と透明釉の発色良いが、貫入多く歪む	呉須で外面草文 厚手のくわらんか手 外底に崩れた「明」か	畳付釉剝ぎ 砂目付着	焼成時のヒビがあり 第16図6・7と揃い	波佐見	18世紀中葉 ～18世紀後葉
13号土坑 第16図9 図版48	棒状土製品	長さ5.5 幅3.1 厚さ2.9	土製品		断面正方形の柱状で、1面が良く焼けて赤黒く、2面は赤化し、1面は変色していない		窯道具か	在地	不明
13号土坑 第16図10 図版48	管状土錘	長さ4.2 最大径1.6 重量10.10	土製品		小口部は平坦 淡橙白色を呈する 焼成良好 変色なし		完形	在地	不明
14号土坑 第16図11 図版29	灯明皿	口径3.8 底径3.1 器高1.7	土師質土器		型押し成型で手捏ねの芯立てを接合 内面粗いナデ、外面未調整 淡橙白色を呈する 焼成良好		芯立に油煙あり	在地	不明
14号土坑 第16図12	蓋 土瓶蓋	最大径9.3 器高3.1	陶器	鉄釉を上面のみ掛け	受け部と摘みを接合	受け部釉剝ぎ		肥前	不明
14号土坑 第16図13 図版29	摺鉢	—	陶器	内外に鉄釉掛け 焼成良	口縁部玉縁状肥厚 内面口縁下に単位不明の摺り目が入る	不明		武雄	18世紀中葉 ～18世紀後葉
14号土坑 第16図14	染付 皿 五寸皿	底径(8.9	磁器	透明釉発色良好 呉須は下面の発色やや悪い	高台貼り付け 呉須で内面胴部は半菊文、見込みにコンニャク印判による五弁花文、裏銘は渦福	畳付釉剝ぎ		有田	18世紀中葉 ～18世紀後葉
14号土坑 第16図15	埦 京焼風ミニチュア色絵碗	口径(5.2)	陶器	淡黄灰色の灰釉 底部は発色悪い 焼成良好	外面に緑・赤・青彩による花葉文			肥前	不明
15号土坑 第16図16 図版29	風炉	口径(20.2) 底径(11.9) 器高14.6	瓦質土器		型押し成型で脚部と鉢部は別作りで接合 外面から口唇部までミガキ 内面ケズリ 施文は型押しで渦文帯と不明モチーフの帯の間に凹線が入る	不明	高台内と内面は暗灰褐色、それ以外は灰黒色で光沢あり	在地	不明

表６　１次調査出土土器・陶磁器・瓦観察表６

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm,g) ()は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見		
							特記事項	推定産地	推定年代
15号土坑 第16図17	風炉か	口径(19.6 底径(21.8) 器高5.9	瓦質土器		型押成型だろう　外面は光沢のあるミガキ　底面は光沢はないがミガキ、内面はナデ	不明	灰黒色を基調とするが、外面は光沢ある黒灰色	在地	不明
15号土坑 第16図18	埦 京焼風	底径3(5.2)	陶器	淡黄灰色の灰釉発色良い　焼成良好	高台削り出し　外面山水文の有無は欠損のため不明　外底「清水」の刻印	高台露胎		肥前	18世紀前葉
15号土坑 第16図19	埦 京焼風	口径9.0 底径4.1 器高6.9	陶器	淡黄灰色の灰釉が発色悪く灰白色を呈する部分が多い　焼成良好	高台削り出し　無文　腰折れ形　外面竹笹文の有無は欠損のため不明	高台露胎		肥前	18世紀中葉 ～18世紀後葉
15号土坑 第16図20	埦	口径8.2 底径3.0 器高5.0	陶器	灰色の灰釉を底部以外に掛ける　発色良く、貫入多い	端反り形　無文	高台露胎		肥前	18世紀後半
15号土坑 第16図21	埦 湯呑	口径6.8 底径3.4 器高5.4	陶器	淡黄灰色の灰釉を全面に掛けた後、内外口縁部に緑灰色の灰釉上掛け　焼成良好	無文	畳付釉剝ぎ		肥前	18世紀後半
15号土坑 第16図22	擂鉢	―	陶器	内外鉄釉だが、発色・焼成良	口縁部外反　内面口縁下に単位不明の擂り目が入る	不明		武雄	18世紀中葉 ～18世紀後葉
15号土坑 第16図23	染付 碗	―	磁器	透明釉全面掛け　呉須発色ややや不良	外面呉須で花文	高台欠損のため不明	歪みを注口に利用したか	波佐見	18世紀中葉 ～18世紀後葉
15号土坑 第16図24	皿 変形小皿	口径(7.9) 底径(4.8) 器高1.5	軟質施釉陶器	内面緑灰色の灰釉と橙色の柿釉	型押し成型で内側に花弁を作る　外面は無文	外面露胎		肥前	不明
15号土坑 第16図25	ミニチュア 行平か	口径4.6 底径2.1 器高1.7	軟質施釉陶器	内面に透明度の高い灰釉	型押成型だろう　外面は未調整	外面露胎		不明	不明
15号土坑 第17図	風炉	口径(24.4) 底径23.0 器高20.95	瓦質土器		脚・鉢・突起部は個別に型押し作り後接合　突起部は面取りし、上面はハケ　鉢部は内面ケズリ状のナデ　穿孔は2ケ所で突起部と交互に入る　施文は釘書き		口唇部内側と窓部は使用のため剝離　外面は光沢がある黒灰色	在地	不明
15号土坑 第18図1	染付 碗 湯呑碗	口径7.3 底径3.4 器高5.6	磁器	透明釉全面掛け　呉須発色良好	外面呉須で重格子文	畳付釉剝ぎ		肥前	19世紀中葉
15号土坑 第18図2	色絵杯 杯	口径(6.3) 底径(3.1) 器高3.3	磁器	透明釉発色良	赤・緑・茶彩による柿木文	畳付釉剝ぎ		肥前	不明
15号土坑 第18図3	皿 紅猪口	口径4.5 底径1.6 器高1.6	磁器	乳白色の白磁釉　発色良好　焼成良好	外面は型押し成型による菊花文	外面露胎		有田	19世紀中葉
15号土坑 第18図4	染付 皿 五寸皿	口径13.6 底径8.4 器高3.8	磁器	透明釉呉須発色良好	高台削り出し　無文　呉須で外面唐草文、内面は扇文　外底にも界線あり	畳付釉剝ぎ　砂目付着		波佐見	18世紀中葉 ～19世紀中葉
15号土坑 第18図5	染付 皿	口径19.4 底径2.4 器高12.8	磁器	透明釉発色良	外面無文、内面山水文	蛇の目釉剝ぎ		肥前	19世紀中葉
15号土坑 第18図6	右軒桟瓦 軒丸部	径8.8	瓦質		瓦当以外ナデ　灰黒色　良好　巴文	不明		在地	不明
15号土坑 第18図7	平瓦	先端幅22.9 長さ26.2 玉縁端幅23.5	瓦質		型の上に置いて各辺を切っている　各面ナデ　内外黒灰色　銀化はない	焼成時のヒビがある	完形　立てて焼成しているので反りがある	在地	不明
15号土坑 第18図8	平瓦	先端幅22.5 長さ26.5 玉縁端幅24.4	瓦質		型の上に置いて各辺を切っている　各面ナデ　内外黒灰色　銀化はない		完形　立てて焼成しているので反りがある	在地	不明
15a号土坑 第19図1	軒丸瓦 瓦当	瓦当面径15.2	瓦質		A14類　瓦当面は器面荒れ　他の面はナデ　燻はなく灰黒色　良好	不明		在地	不明
15a号土坑 第19図2	軒丸瓦 瓦当	瓦当面径(15.2	瓦質		A14類　瓦当面は器面荒れ　他の面はナデ　版ずれあり　燻はなく灰黒色　良好	不明		在地	不明
15a号土坑 第19図3	丸瓦	基部側幅13.5 玉縁端幅7.8 厚さ2.6	瓦質		基部が薄く湾曲する　燻はなく灰黒色　焼成良好　凹面は摸骨痕が残り、スダレ痕を削っていない	不明	凸面は丁寧なナデ仕上げで成型痕が観察不能	在地	不明
15a号土坑 第19図4	軒平瓦	瓦当厚4.7 軒平瓦	瓦質		三葉文を主文とする唐草文と思われるが分類不能　　発色良好　内外黒灰色	各面丁寧なナデ仕上げで成型痕が観察不能		在地	不明
15b号土坑 第19図5 図版29	染付 碗	口径(6.6) 底径2.6 器高(3.4)	磁器	透明釉全面掛け　呉須発色良好	外面呉須で蝶文と型押しによる陽刻の花と染付の茎葉文	畳付釉剝ぎ　砂目付着	大きく歪んでいるがそれを利用したものか	肥前	不明
16号土坑 第20図1	皿 小皿	口径(8.1) 底径4.7 器高1.95	土師器		底部糸切り　橙黄白色を呈す　外面3段、内面1段ナデ	外底に粘土塊痕なし	内底に2次焼成の赤変あり	在地	不明
16号土坑 第20図2	染付 碗	口径9.1 底径3.9 器高5.2	磁器	透明釉全面掛け　呉須発色良好	貼り付け高台　外面呉須で網目文と不明文、裏銘は「大明年製」	畳付釉剝ぎ　砂目付着	裏銘の字体が独特で、網目文も珍しい	肥前か	18世紀前葉
16号土坑 第20図3	染付 碗	口径(8.7) 底径3.4 器高4.75	磁器	透明釉全面掛け　呉須発色良好　良品	貼り付け高台　外面呉須で蝶と草花文	畳付釉剝ぎ　砂目付着		肥前か	18世紀前葉
16号土坑 第20図4	染付 碗	口径10.0 底径4.1 器高5.6	磁器	透明釉全面掛け　呉須発色良好	貼り付け高台　外面呉須でコンニャク印判による竹笹文と樹文の組み合わせ　裏銘は「大明年製」	畳付釉剝ぎ　砂目付着	珍しいモチーフ	肥前	18世紀前葉
16号土坑 第20図5 図版29	染付 碗	口径10.0 底径(4.0) 器高5.3	磁器	呉須と透明釉の発色暗い	器壁の厚いくらわんか手　呉須で外面草花文、裏銘は崩れた「明」	畳付釉剝ぎで砂目付	ほぼ完形	波佐見	18世紀前葉
16号土坑 第20図6	軒平瓦 瓦当	瓦当厚4.2	瓦質		唐草文のみのため分類不能だが三葉文C1類か　型から外して縁をナデている　燻はなく青灰色　焼成良好	不明		在地	不明

表７　１次調査出土土器・陶磁器・瓦観察表７

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm,g) ()は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見		
							特記事項	推定産地	推定年代
17号土坑 第20図7	皿 灯明受皿	口径(9.0) 底径(5.2) 器高2.7	土師器		底部糸切り　橙黄白色を呈し、内外煤付き　外面3段、内面1段ナデ	外底に粘土塊痕なし	外面は油煙、内面は油汚れであろう	在地	不明
17号土坑 第20図8	鉢 焙烙	口径(22.0)	土師質土器		外面口縁部オサエ痕ナデ消し　体部未調整　面は丁寧なヨコナデ　口唇部ナデ窪み　焼成良　外面一部黄橙灰色　無文		異質　黒い部分は黒斑か、内面は灰黒色	在地	不明
17号土坑 第20図9	皿	口径19.0 底径6.2 器高5.1	陶器	透明度の高い灰釉を底部以外に掛けた後、銅緑色の灰釉を内面から外面口縁部に上掛けする　釉発色・焼成良好	口縁部外傾　高台削り出し　無文	見込みに蛇の目釉剝ぎ　底部露胎		肥前	17世紀末 ～18世紀中葉
18号土坑 第21図1	小皿 灯明皿	口径6.2 底径4.0 器高1.7	土師器		底部糸切り　内外面1段ナデで、見込みは螺旋ナデ　内外黄灰白色だが、焼成強く底部は橙色を呈する	不明	口縁部に油煙、内面には油による変色あり	在地	不明
18号土坑 第21図2 図版29	皿 小皿	口径7.3 底径2.8 器高1.9	土師器		底部糸切り後ナデ消し　橙灰白色を呈し、変色なし　外面2段、内面1段ナデ	外底に粘土塊痕なし	ほぼ完形	在地	不明
18号土坑 第21図3 図版29	皿	口径11.2 底径7.0 器高2.15	土師器		底部糸切り後ナデ消し　灰白色を呈する　内外面ナデ	底面に黒斑あるので接地して焼成している		在地	不明
18号土坑 第21図4 図版29	埦 京焼風	口径9.4 底径3.2 器高5.4	陶器	淡黄灰色の灰釉発色良い　焼成良好で貫入多い	小さな削り出し高台　外面山水文の有無は欠損のため不明	高台露胎		肥前	18世紀中葉
18号土坑 第21図5	埦 京焼風	口径(9.3) 底径4.4 器高5.4	磁器	淡黄灰色の灰釉発色良い　焼成良好で貫入多い	削り出し高台　外面流水文の鉄絵	外面露胎		有田	18世紀中葉
18号土坑 第21図6	皿 小皿	口径(11.8) 底径(4.8) 器高4.6	陶器	高台削り出し　内外白化粧土ハケ掛け後透明度の高い灰釉掛け　釉発色良　焼成良い		畳付は釉剝ぎ	白化粧土と鉄釉もあるか？	肥前	不明
18号土坑 第21図7	皿 小皿	口径(8.6) 底径4.2 器高2.0	陶器	黒茶色の鉄釉を内面に掛け　発色不良でにぶい淡灰褐色を呈する　焼成良好	外底部糸切り	底台露胎		武雄	不明
18号土坑 第21図8 図版29	皿 小皿	口径8.6 底径4.0 器高2.5	陶器	黒茶色の鉄釉を内面から皿部外面口縁部まで掛け　発色良焼成良好	外底部糸切り　外面口縁部に平坦面を持つ	底台露胎　粘土塊痕なし	完形	武雄	不明
18号土坑 第21図9 図版29	皿 灯明受皿	最大径9.0 底径3.9 器高3.8	陶器	黒茶色の鉄釉を内面から皿部外面口縁部まで掛け　発色良焼成良好	外底部糸切り　見込みは螺旋状のケズリ受け部は積み上げ部で欠損している	口縁部にアルミナ塗布　底台露胎	完形	武雄	不明
18号土坑 第21図10	摺鉢	―	陶器	内外暗褐色の鉄釉掛け、発色・焼成良	口縁部外反　片口部周囲は大きく変形していないので型成型か　内面口縁下に単位不明の摺り目が入る	不明		武雄	18世紀後半 ～19世紀前半
18号土坑 第21図11	摺鉢	口径(39.6)	陶器	内外暗褐色の鉄釉掛け、発色・焼成良	口縁部外反　片口部周囲は大きく変形していないので型押し成型か　内面口縁下に15本単位の摺り目が入る	不明		武雄	18世紀後半 ～19世紀前半
18号土坑 第21図12	摺鉢	底径(14.6)	陶器	内外暗黒褐色の鉄釉　釉発色焼成良	高台貼り付け　内面摺り目は13本単位	高台にアルミナ塗布	見込みに重ね焼き痕なし	肥前	18世紀後半 ～19世紀前半
18号土坑 第21図13 図版29	火入れ 京焼風	口径10.8 底径10.6 器高8.35	陶器	淡黄灰色の灰釉を外底と内面口縁下以外に上掛け　釉発色焼成良好	高台下部をS字・逆S字形に交互に削っている　外底に刻印なし　外面呉須と鉄釉で山水文を描き	底部露胎		肥前	不明
18号土坑 第21図14 図版29	埦	口径15.2 底径6.0 器高6.6	陶器	釉発色焼成良い　内外白化粧土ハケ掛け後透明度の高い灰釉掛け高台削り出し		畳付は釉剝ぎ		肥前	不明
18号土坑 第21図15	筆入れ 京焼風	底径(6.0)	陶器	淡黄灰色の灰釉発色良い　焼成良好	突帯貼り付け	不明	膠継ぎの痕跡あり	肥前	不明
18号土坑 第21図16	鉢	―	陶器	内外鉄釉で、口唇部のみ釉剝ぎ	口縁部を外傾させ、折り返して肥厚　無文	不明	マーブル状の胎　肥前か　形態は高取にもある	不明	不明
18号土坑 第21図17 図版29	甕 半胴甕	底径13.2	陶器	外面胴下位に白化粧土塗布後櫛掻き取り　その後底部は鉄釉ハケ掛け、中位は白化粧土ハケ掛けその上に鉄絵と緑彩で松樹文　内面は胴部上半と下半を別々に鉄釉ハケ掛け　その上に灰釉掛け　高台削り出し		畳付は釉剝ぎ　内面に胎土目跡が5つ残る		弓野	不明
18号土坑 第22図1 図版29	染付 小型碗	口径7.8 底径3.4 器高4.1	磁器	透明釉発色やや不良	呉須　外面口縁部雨降り文	畳付釉剝ぎ　砂目付着	完形	有田	18世紀前葉
18号土坑 第22図2	染付 小型碗	口径7.6	磁器	透明釉発色良	呉須　外面口縁部雨降り文	底部欠損のため不明		有田	18世紀前葉
18号土坑 第22図3 図版29	染付 小型碗	口径7.7 底径3.2 器高4.13	磁器	透明釉発色やや不良	呉須　外面口縁部雨降り文	畳付釉剝ぎ	完形	有田	18世紀前葉
18号土坑 第22図4	染付 小型碗	口径7.7 底径3.2 器高4.3	磁器	透明釉発色やや不良	呉須　外面草花文	畳付釉剝ぎ　砂目付着	完形	有田	18世紀前葉

表８　１次調査出土土器・陶磁器・瓦観察表８

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm,g) ( )は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見		
							特記事項	推定産地	推定年代
18号土坑 第22図5	染付碗 小型碗	口径(7.2) 底径(2.7) 器高3.5	磁器	透明釉焼成良好、呉須焼成発色良好	呉須で外面に氷裂文地に菊花文散らし	不明	溝13に同時期のものあり	有田	18世紀前葉
18号土坑 第22図6	赤絵 碗	口径(7.7) 底径3.2 器高3.7	磁器	透明釉は発色良好だが貫入多い	高台貼り付け　外面帯と花文、内面花文	畳付は釉剥ぎ	底部厚い　子供茶碗か	有田	18世紀前葉
18号土坑 第22図7	染付 碗	口径(10.4)	磁器	透明釉呉須焼成発色良好	外面呉須で二重網目文	不明		肥前	18世紀前葉 ～中葉
18号土坑 第22図8	染付 碗	口径(10.2) 底径4.0 器高4.6	磁器	透明釉発色良好	呉須　外面に若松文、丸文、雪輪文	畳付は釉剥ぎ		有田	18世紀前葉
18号土坑 第22図9	染付 筒形碗	口径(8.0) 底径(4.8) 器高6.7	磁器	呉須・透明釉発色良	呉須　外面口縁部葉文帯、胴部は幾何学文と凹凸文、下位は連続葉文、内面口縁部は袈裟襷文、見込みは梅樹文　削り出し高台	畳付釉剝ぎ　見込み蛇の目釉剝ぎ		有田	18世紀中葉
18号土坑 第22図10	染付碗 筒形碗	口径(7.6)	磁器	焼成やや不良で底部が赤くなっている、呉須焼成発色良好	呉須で外面に紅葉文散らし、内面口縁に界線、見込みに手描き五弁花文	畳付は釉剥ぎ		有田	18世紀後葉
18号土坑 第22図11	染付皿 小皿	口径10.4 底径5.6 器高2.5	磁器	透明釉・呉須の発色良　良品	型押し成型による輪花口縁　呉須で外面唐草文、外底角福、内面花唐草文と見込みに五弁花文	畳付は釉剥ぎ		有田	18世紀前葉
18号土坑 第22図12	染付 五寸皿	口径14.2 底径8.2 器高2.9	磁器	呉須は発色良、透明釉発色良	貼り付け高台　くらわんか手　呉須　内面半菊文　見込みはコンニャク印判による五弁花文	畳付釉剝ぎ　見込み蛇の目釉剝ぎ	完形	有田	18世紀中葉 ～19世紀初頭
18号土坑 第22図13	色絵 皿	口径(12 .2) 底径7.2 器高1.6	磁器	透明釉・色絵焼成発色良好	見込みに蛇の目釉剝ぎ、そこにアルミナ塗布、その環に黒彩色枝を書き、枝の先端に緑彩と思われる葉を描き、赤で花を書き、黒彩の斑が入る	底部蛇の目釉剝ぎ	赤と緑の彩色はほぼ失われている	肥前	不明
18号土坑 第22図14	鉢 蓋付	口径11.8 底径7.2 器高8.1	磁器	透明釉発色良	高台貼り付け呉須　外面同じ草花文を対面に描く	畳付釉剝ぎ　内面側口縁は釉剝ぎ		有田	不明
18号土坑 第22図15	不明 獣脚部	高さ6.2 幅3.4 厚さ4.5	磁器	透明釉発色良いが、内面は釉溜まりになっている	型押し成型で、裏から刺突　体部平面プラン不明　獣脚頭部に剥離痕があるのでさらに上にモチーフが続く	不明		有田	不明
18号土坑 第22図16 図版29	皿 紅猪口	口径4.4 底径1.6 器高1.65	磁器	透明釉全面掛け	型押し成型で、菊花文	不明		有田	18世紀代
19号土坑 第22図17	右軒桟瓦 小丸瓦当	径7.6	瓦質		ナデ仕上げ　燻はなく灰黒色　焼成良好　巴文	不明		在地	不明
19号土坑 第22図18	十能	—	土師質土器		発色焼成良好　黄灰白色　外面はオサエ、内面はナデ	不明		在地	不明
19号土坑 第22図19	埦	—	陶器	発色、焼成良好	外面は蛍手、内面は雑巾手	不明		現川	17世紀末 ～18世紀前葉
19号土坑 第22図20	埦	底径(4, 6)	陶器	発色、焼成やや不良	外面は蛍手、内面は雑巾手	不明		現川	17世紀末 ～18世紀前葉
20号土坑 第23図1	鉢 火鉢	底径(17.8)	瓦質土器		外面ミガキ、内面ナデ　型押し成型による外面多条沈線の胴部と脚部を接合している　焼成良好、内外灰黒色			在地	不明
20号土坑 第23図2 図版29	鉢 火鉢	口径(26.7)	瓦質土器		口縁部肥厚し、外面ミガキ、内面ナデ　焼成良好、内外灰黒色		口唇部に線刻文字「番兵隊口」	在地	不明
20号土坑 第23図3	小型擂鉢	—	陶器	内外口縁部に茶褐色の鉄釉、発色・焼成良	口縁部肥厚　内面口縁下に単位不明の擂り目が入る	不明		肥前	18世紀前半
20号土坑 第23図4	擂鉢	—	陶器	口縁部に内外に茶褐色の鉄釉掛け　焼成良	口縁部内面側肥厚し、凹線なし　内面口縁下の擂り目は残っていない	不明		武雄	17世紀後半
20号土坑 第23図5	蓋 土瓶蓋	最大径10.3 底径5.1 器高2.0	陶器	鉄釉を上面のみ掛け　発色良好	摘みを接合　底部糸切り　無文	受け部釉剝ぎ		肥前	不明
20号土坑 第23図6	皿 灯明受皿	口径5.7 底径3.9 器高3.6	陶器	黒茶色の鉄釉　発色不良で灰茶褐色を呈する　焼成良好	見込みは螺旋状のケズリ　受け部は積み上げ部で欠損している	口縁部にアルミナ塗布　底台露胎		武雄	不明
20号土坑 第23図7	染付 杯	底径2.4	磁器	透明釉全面掛け　コバルト発色良好	コバルト吹き付けによる桜花文の染付　内面はコバルト吹き付けによる桜花文	畳付釉剝ぎ		肥前	19世紀代
20号土坑 第23図8	染付 湯呑	底径3.6	磁器	透明釉全面掛け　呉須発色良好	呉須で帆掛け船・島文	畳付釉剝ぎ		肥前	19世紀前葉 ～中葉
20号土坑 第23図9	皿 紅猪口	—	磁器	透明釉全面掛け	型押し成型で、蛸唐草文	不明		有田	19世紀中葉
20号土坑 第23図10	平瓦	厚さ1.8	瓦質		凸面に板痕らしい段がある　黒灰色を呈し銀化なし　全面ナデ仕上げ	不明		在地	不明

表９　１次調査出土土器・陶磁器・瓦観察表９

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm,g) ()は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見		
							特記事項	推定産地	推定年代
21号土坑 第25図1	鉢 台付鉢	口径(12 .0)	陶器	内面から外面口縁部は緑灰色の灰釉掛け	見込みにケズリ		図上接合	武雄	不明
21号土坑 第25図2	甕 半胴甕	底径15.4	陶器	外面は胴下位に白化粧土を塗布した後櫛掻き取り その後底部は鉄釉ハケ掛け、中位は白化粧土ハケ掛けしその上に鉄絵 内面は胴部上半と下半を別一に鉄釉ハケ掛け その上に灰釉を掛ける		畳付は釉剥ぎ	植木鉢に転用しているが、内面に劣化なし	弓野	不明
22号土坑 第25図3 図版29	皿 中皿	底径11.9	陶器	釉発色良 焼成良	削り出し高台 内面白化粧土櫛掻きにより波状文と縦横の縞文を描き、内外口縁部に黒褐色の灰釉を掛ける	胴部以下露胎 高台に砂目付着		武雄	18世紀前半
22号土坑 第25図4	染付 碗	口径(9.4) 底径(4.4) 器高5.7	磁器	透明釉全面掛け発色やや悪い 呉須発色良好	外面コンニャク印判による5葉文 外面呉須でコンニャク印判による花葉文	畳付釉剥ぎ		肥前	17世紀末 ～18世紀前葉
24号土坑 第25図5	鍋 土鍋	—	瓦質土器		口縁部肥厚 焼成良好、内外灰黒色 外面ナデ、内面と口唇部ハケ	不明		在地	不明
25号土坑 第25図6	鉢 擂鉢	器高15.5	瓦質土器		口縁部肥厚 焼成良好、内外灰黒色 外面オサエ・ナデと粗いタテハケ、内面と口唇部ハケ 擂り目は4本単位	不明	内面下位の器面の摩滅は使用のためか	在地	不明
26号土坑 第26図1	小皿 灯明皿	口径6.4 底径4.5 器高1.4	土師器		底部糸切り 内外面1段ナデで、見込みは螺旋ナデ 焼成良好で内外黄灰白色	不明	口縁部に油煙2ケ所と内面も油による変色	在地	不明
26号土坑 第26図2	極小皿 灯明皿	口径(7.4) 底径(5.1)	土師器		焼成良好で内外黄灰白色 底部糸切りだが摩滅 外面2段ナデ、内面1段ナデ	不明	口縁部には油による変色	在地	不明
26号土坑 第26図3	小皿 灯明皿	口径7.5 底径4.65 器高1.9	土師器		底部糸切り 内外面1段ナデで、見込みは螺旋ナデ 焼成良好で内外黄灰白色	不明	外底と内面の変色は垂れた油による変色	在地	不明
26号土坑 第26図4	井戸枠	—	土師質土器		口縁部肥厚 内外丁寧なハケ、口縁部はナデ 口唇部は平坦面をもつ 無文	不明	砂粒が多く、粗放なので筑後産か 外面は斑状剥離		不明
26号土坑 第26図5	皿 小皿	口径9.5 底径4.5 器高2.6	陶器	内面から外面上半は黒褐色の鉄釉 外面は露胎 やや発色不良	底部糸切り 完形品 内面にひっつきあり 灯明皿としての痕跡なし 無文	粘土粒痕は色調による差異のみ	見込みにひっつきの多い不良品	武雄	不明
26号土坑 第26図6	埦 京焼風色絵	口径(9.6)	陶器	淡黄灰色の灰釉 焼成良好	外面に緑・赤・青彩で菊文を描いている	高台露胎	内外底に変色があるのは重ね焼きのため	肥前	18世紀中葉
26号土坑 第26図7	埦 京焼風 腰折形	口径(9.5) 底径4.1 器高5.35	陶器	淡黄灰色の灰釉 焼成不良で ガラス化していない	高台小さな削り出し 外面胴部に互い向いに笹文を緑彩で描き、中央だけを赤と黒、薄い緑の彩色で描いている	高台露胎		肥前	18世紀中葉
26号土坑 第26図8	埦 京焼風	底径3.85	陶器	淡黄灰色の灰釉 焼成良好	高台削り出し 外底に螺旋状に沈線が入る 見込みに鉄絵の山水文	高台露胎		肥前	18世紀中葉
26号土坑 第26図9 図版29	埦 京焼風色絵	底径4.0	陶器	淡黄灰色の灰釉 焼成良好	高台削り出し 見込みに緑・赤・青彩で植物文を描いているか	高台露胎 内外底変色は重ね焼きのため	外底に墨書あるが、文字が小さく判読できない	肥前	18世紀前葉
26号土坑 第26図10	蓋 小壺蓋か	口径(6.2) 底径4.1 器高1.15	土師器		底部糸切り 内外ナデで、天井部は摘みがつく 焼成良好で内外橙白色 変色なし	不明		在地	不明
26号土坑 第26図11	擂鉢	口径(30.0)	陶器	口縁部に内外鉄釉掛け 焼成良	口縁部玉縁状肥厚 内面口縁下に単位不明の擂り目が入る	不明		武雄	17世紀中葉～末
26号土坑 第26図12	擂鉢	底径(15.0)	陶器	内外鉄釉で、畳み付け釉剥ぎ	底部高台貼り付け後、ケズリ 内面に13本単位の擂り目が入る	高台にアルミナ付着 見込みに高台痕		武雄	18世紀前半
26号土坑 第26図13	擂鉢	底径(10.4)	陶器	胴部から底部片なので無釉だが、口縁部に内外鉄釉が掛かいただろう	底部糸切り 内面に14本単位の擂り目が入る	粘土粒痕あり		武雄	17世紀中葉～末
26号土坑 第26図14	擂鉢	—	陶器	口縁部に内外鉄釉掛け 焼成良	口縁部内面側肥厚し、3条の凹線入る 内面口縁下に単位不明の擂り目が入る	不明		武雄	17世紀中葉～末
26号土坑 第26図15	皿 中皿	—	陶器	透明度の高い緑灰色の灰釉の発色良が内面から外面口縁部	外面ナデ	不明		肥前	不明
26号土坑 第26図16	甕 半胴甕	—	陶器	内外面白化粧土塗布後、外面から内面口縁部に白化粧土を塗布し、櫛掻き取り	口縁部折り返してT字形に肥厚	不明		肥前	17世紀後半
26号土坑 第27図1	水注	口径8.0 底径(8.8) 器高11.2	陶器	暗緑灰色の灰釉を外面に掛ける 内面露胎 釉の発色良好だが貫入多い 焼成良好	削り出し高台 型成型の把手貼り付け 無文	口唇部と畳付釉剥ぎ	口唇部釉剥ぎなので蓋と一緒に焼成している	肥前	不明
26号土坑 第27図2 図版29	瓶 徳利		陶器	鉄釉を外面に掛け、外底はハケ掛け 内面露胎 釉の発色、焼成良好	底部糸切りの痕跡見えない 無文	外底に釉剥ぎがない		小石原	不明
26号土坑 第27図3	甕 半胴甕	口径(34.0)	陶器	内外面鉄漿掛け	口縁部折り返してT字形に肥厚 内外はナデ	不明だが、口唇部に灰被りが在るので正置して焼成している		肥前	不明
26号土坑 第27図4	鉢 植木鉢	—	陶器	胴下位は鉄釉ハケ掛け、上半は白化粧土をハケ掛けした後、内面口縁部を波状掻き取りする。内外上位にのみ灰釉を掛け、浮文と凸帯には緑色の灰釉を掛けて植物を表現している 外面は口縁部に凸帯、体部には浮文と曲線の凸線貼り付け				武雄	不明

表10　1次調査出土土器・陶磁器・瓦観察表10

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm,g) ()は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見		
							特記事項	推定産地	推定年代
26号土坑 第27図5	甕 半胴甕	口径(31.0)	陶器	外面から内面肩部まで鉄漿掛け、外面は肩部まで鉄釉流し掛け	口縁部肥厚　内面格子目タタキあて具痕あるが、外面は丁寧にナデ消している 肩部内面はケズリで段ができる　外面肩部に凹線2条と波状文	不明		肥前	17世紀後半
26号土坑 第27図6	平瓦転用瓦玉 円盤型製品 図版49	径(15.8) 厚さ2.0	瓦質		平瓦を転用　側面は平滑にしている　瓦を転用しているため黒灰色	不明	大型品	在地	不明
26号土坑 第27図7 図版49	平瓦転用瓦玉 円盤型製品	長軸4.2 短軸3.9 厚さ1.6	瓦質		平瓦を転用　側面は摩滅　瓦を転用しているため片側が黒灰色、反対側は灰色を呈する			在地	不明
26号土坑 第28図1	染付鉢	口径(9.6) 底径(5.2) 器高5.3	磁器	透明釉・呉須の発色良	高台貼り付け　呉須により外面花唐草文	口縁部内面と畳付は釉剥ぎ		有田	18世紀初頭 ～前葉
26号土坑 第28図2	染付 碗	口径(9.8) 底径(3.8) 器高4.8	磁器	透明釉発色良好　良品	呉須　外面に芙蓉と不明花文	畳付は釉剥ぎ		有田	18世紀第2四半期
26号土坑 第28図3	染付蓋 鉢蓋	口径(7.6) 底径(3.2) 器高2.3	磁器	透明釉・呉須の発色良	摘み部削り出し　呉須により外面花文か、内面見込み龍文	受け部は釉剥ぎし、摘み上端は釉剥ぎしていない		有田	17世紀中葉 ～18世紀初頭
26号土坑 第28図4	染付蓋 鉢蓋	口径(11.1) 底径(3.5) 器高2.95	磁器	透明釉・呉須の発色良　貫入あり	型押し成型による橋状摘み貼り付け　呉須により外面崩れた花唐草文	受け部は釉剥ぎ		有田	18世紀前葉
26号土坑 第28図5	染付 皿 5寸皿	口径(16.2) 底径(8.6) 器高3.35	磁器	透明釉・呉須の発色良	呉須　外面花文か、内面見込み龍文	畳付は釉剥ぎ　高台に砂目付着	断面に膠と思われるもの痕あり　第28図6と揃い	有田	17世紀後葉 ～18世紀初頭
26号土坑 第28図6	染付 皿 5寸皿	口径(20.0) 底径(11.8) 器高4.35	磁器	透明釉・呉須の発色良	呉須　外面花文か、内面見込み龍文	畳付は釉剥ぎ　高台に砂目付着	第28図5と揃い	有田	17世紀後葉 ～18世紀初頭
26号土坑 第28図7	染付 皿 5寸皿	口径(20.0) 底径(11.8) 器高4.35	磁器	透明釉・呉須の発色良	型押し成型で花弁の凹凸をつけている 外面無文か　呉須により内面見込み不明文　胴部は2段の花弁文か	不明		有田	不明
26号土坑 第28図8	染付 皿 5寸皿	口径(14.0) 底径(8.5) 器高2.6	磁器	透明釉・呉須の発色良	呉須　外面界線のみか、内面コンニャク印判による花葉文	畳付は釉剥ぎ		有田	17世紀後葉 ～18世紀初頭
26号土坑 第28図9 図版30	白磁 瓶	最大径21.1 底径10.7	磁器	白磁釉を外面に掛ける　内面露胎	貼り付け高台　無文	畳付釉剝ぎ		肥前	17世紀後葉 ～18世紀中葉
42号土坑 第30図1	椀 端反碗	口径(9.0) 底径(3.2) 器高5.0	陶器	焼成発色良	内外透明度の高い灰釉を底部以外に掛ける　貫入は意匠	底部露胎		肥前	18世紀後半 ～19世紀前半
42号土坑 第30図2	椀 端反碗	口径(9.2)	陶器	焼成発色不良	内外緑色の灰釉を掛ける	不明		肥前	18世紀後半 ～19世紀前半
42号土坑 第30図3	椀 小杉茶碗	底径(2.9)	陶器	焼成・釉の発色良好	削り出し高台　内外透明度の高い灰釉を底部以外に掛けた後、胴部に杉の鉄絵	底部露胎		肥前	19世紀前葉
42号土坑 第30図4	椀 小型碗	底径(3.2)	陶器	焼成・釉の発色良好	削り出し高台　内面灰白色の灰釉掛け、外面は露胎にイッチン掛け	底部露胎		萩	19世紀前葉
42号土坑 第30図5	皿	底径(4.4)	陶器	焼成発色良	削り出し高台　内外淡緑灰色の灰釉を掛ける	見込みに4つ、畳付に3つの胎土目跡あり		肥前	17世紀後半
42号土坑 第30図6 図版30	蓋 土瓶蓋	口径11.2 器高2.4	陶器	外面に鉄釉掛け　焼成・発色良い	底面はケズリ　摘み欠損　無文	受け部は釉剥ぎ		肥前	19世紀前葉
42号土坑 第30図7 図版30	蓋 土瓶蓋	口径6.2 最大径8.6 器高3.6	陶器	外面に透明度の高い灰釉掛け 焼成・発色良い　貫入多い	摘み貼り付け　無文	受け部は釉剥ぎ	完形　下面に茶渋がつく　第30図10とセットをなす	肥前	19世紀前葉
42号土坑 第30図8	行平	－	陶器	焼成発色良好　外面注口接合部と注口内面下面のみ、内面胴部に茶褐色の鉄釉塗布	型押し成型の各部位を接合しており、胴部外面には飛びカンナを施し、注口部は飛びカンナを穿孔している	不明		肥前	不明
42号土坑 第30図9	摺鉢	－	陶器	内外鉄釉掛け　焼成・発色良	口縁部外面肥厚　内面口縁下に単位不明の摺り目が入る	不明		武雄	19世紀前半
42号土坑 第30図10	土瓶	口径7.4 底径7.0 器高12.8	陶器	外面に透明度の高い灰釉掛け 焼成・発色良い　貫入多い	型押し成型の各部位を接合　底部には小さな豆状脚がつく　無文	口縁部・底部は釉剥ぎ	外底は煤付着で内面に茶渋がつく　第30図7とセットをなす	肥前	19世紀前葉
42号土坑 第30図11	甕 小型甕	口径(21.8) 底径(16.0) 器高14.4	陶器	焼成発色良好　内外鉄釉を底部に掛け、胴上半に白化粧土を掛けた後透明度の高い灰釉を上半に掛けるその上に上半に灰白色の灰釉を掛け、外面に鉄釉と緑灰色の灰釉の絵を施す		畳付は釉剥ぎ　高台の釉剥ぎしていない部分に砂目付着		肥前	不明
42号土坑 第30図12	甕 小型甕	底径11.3	陶器	焼成・釉の発色良好　外面胴下位は鉄釉ハケ掛け、中位は外面胴下位は鉄釉ハケ掛け、中位は櫛掻きによる波状文　貼り付け高台　内面はケズリ状ナデ		高台内外にアルミナ塗布、見込みに輪状にアルミナ付着			不明
42号土坑 第30図13	甕 小型甕	底径(12.6)	陶器	焼成・釉の発色良好　内外鉄釉	削り出し高台	高台内外にアルミナ塗布、見込みに輪状にアルミナ付着		肥前	不明
42号土坑 第30図14	染付 小型碗	口径8.3 底径3.4 器高4.4	磁器	透明釉・呉須の発色良	外面呉須で宝散らし文、見込みに波濤文	畳付は釉剥ぎ		有田	19世紀前葉
42号土坑 第30図15	染付 小型碗	口径8.2 底径2.9 器高4.2	磁器	透明釉発色良好	呉須　外面に井形文	畳付は釉剥ぎ		有田	19世紀前葉
42号土坑 第30図16 図版30	染付 碗	口径9.9 底径3.6 器高5.2	磁器	透明釉発色良好　良品	呉須　外面に漢詩文「月□□」「□□」「元在□」「水音」 見込みに火炎宝珠文	畳付は釉剥ぎ		有田	19世紀前葉

表11　1次調査出土土器・陶磁器・瓦観察表11

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm,g) ()は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見		
							特記事項	推定産地	推定年代
42号土坑 第30図17	染付 蕎麦猪口	口径(7.8) 底径4.6	磁器	透明釉・呉須の発色良	外面呉須で八卦文、見込みに花文	底部は蛇の目釉剥ぎ		有田	18世紀後半 ～19世紀前半
42号土坑 第30図18	染付 小型皿	口径(11.6) 底径(7.4)	磁器	透明釉・呉須の発色良	口縁小さく外傾　呉須で外面唐草文、見込みに不明文	畳付は釉剥ぎ		有田	不明
42号土坑 第30図19	染付皿 5寸皿	底径(7.8)	磁器	透明釉の発色良	呉須　外面界線のみか、欠損部に簡略化した唐草文があるか　内面墨弾きによる八卦文　見込みに五弁花文あり	畳付は釉剥ぎ		有田	19世紀前葉
42号土坑 第30図20	皿 小型皿 輪花皿	口径(9.2) 底径5.2 器高2.1	磁器	透明釉・釉の発色良	型押し成型による輪花口縁　口錆あり	畳付は釉剥ぎ		有田	不明
42号土坑 第30図21 図版30	染付 小型蓋	口径5.0 底径6.3 器高2.5	磁器	透明釉・呉須の発色良	摘み貼り付け　呉須で外面網目文	受け部は釉剥ぎ	完形　小型壺の蓋か	有田	不明
42号土坑 第30図22 図版49	戸車	外径4.9 厚さ1.2	磁器	側面に白磁釉	平面糸切り　面取り	糸切り後アルミナ塗布		肥前	不明
42号土坑 第31図1	右桟瓦	厚さ2.0	瓦質		釘穴あり　発色良好　黒灰色	小口部に粘土粒あり		在地	不明
42号土坑 第31図2	鬼瓦	—	瓦質		型押し成型で瓦当面を作り、裏面は外形に合わせて粘土板を貼り付ける　発色良好　黒灰色	屋根に葺いた際に下面になる部分の焼成が悪いので、正置して焼成している　瓦当面は丁寧なナデ仕上げだが、他の面は粗い		在地	不明
58号土坑 第31図3	擂鉢	—	陶器	口縁部に内外茶褐色の鉄釉掛け　焼成良	口縁部内面側が肥厚するタイプだろう 内面口縁下に単位不明の擂り目が入る	不明		武雄	18世紀前半か
59号土坑 第31図4	染付 仏花瓶	—	磁器	透明釉・呉須の発色やや不良 内面露胎	呉須で花文　外面に呉須で草花文	不明		肥前	19世紀前葉
60号土坑 第31図5	右軒桟瓦	面幅(29.2) 瓦当厚4.2 厚さ2.0	瓦質		菊花文A1a類　各面丁寧なナデ仕上げで成型痕が観察できない　凸面の瓦当との接合部はナデ窪んでいる		発色良好　黒灰色で銀化あり	在地	不明
1号大土坑上層 第34図1	皿 灯明皿	口径6.0 底径3.2 器高1.7	土師器		底部糸切り　内外1段ナデ　内外黄灰色を呈する　無文	粘土粒痕あり　外面胴部に黒斑あり	注記を22号溝上層から変更　口縁部に油煙あり	在地	不明
1号大土坑上層 第34図2	灯明具	口径7.8 底径6.6	陶器	底部以外茶褐色の鉄釉掛け	外底糸切り	底部露胎	注記を22号溝上層から変更	肥前	不明
1号大土坑上層 第34図3	蓋 土瓶蓋	口径(10.2) 器高4.0	陶器	外面のみ鉄釉掛け　受け部はふき取り	受け部・摘み部貼り付け　内天井部は切り離し後、ナデ仕上げ	内面露胎	注記を22号溝上層から変更	武雄	18世紀中葉 ～19世紀中葉
1号大土坑上層 第34図4	擂鉢		陶器	内外口縁部鉄釉　焼成良　釉の発色良	口縁部肥厚　内面擂り目は欠損部にあるだろう	不明	注記を22号溝上層から変更	武雄	17世紀後半
1号大土坑上層 第34図5	鉢 植木鉢	口径(21.6)	陶器	外面から内面上半に緑灰色の灰釉掛け	口縁部肥厚	不明	注記を22号溝上層から変更	高取か	不明
1号大土坑上層 第34図6	甕 小型甕	底径11.2	陶器	内外釉掛け　灰釉の質が悪く、ゴマ状にかかっている	上げ底　内面オサエ痕あり	焼台の痕跡がない	注記を22号溝上層から変更	武雄	不明
1号大土坑上層 第34図7	擂鉢	口径(36.2)	陶器	内外鉄釉　焼成良　釉の発色不良	口縁部肥厚　内面口縁下に擂り目21本単位	不明	注記を22号溝上層から変更	武雄	18世紀中葉 ～19世紀中葉
1号大土坑上層 第34図8	鉢 三島手	底径(10.8)	陶器	内面は白化粧土掛けの後灰釉掛け　外底は鉄釉ハケ掛け	高台削り出し　文様帯の低いもの　花文帯の下に縦の重鋸歯文	畳付は釉剥ぎ　砂目付	注記を22号溝上層から変更	武雄	不明
1号大土坑上層 第34図9	染付 小型碗	口径(8.2) 底径(3.2) 器高4.3	磁器	透明釉の発色不良で白濁	呉須　外面のコンニャク印判のモチーフ不明	畳付は釉剥ぎ　砂目付	注記を22号溝上層から変更	波佐見	18世紀前半
1号大土坑上層 第34図10	染付 小型碗	口径(10.8) 底径4.2 器高5.1	磁器	透明釉の発色不良で白濁	呉須　外面のコンニャク印判の蔦葉文 厚手のくらわんか手	畳付は釉剥ぎ	注記を22号溝上層から変更	有田	18世紀前半
1号大土坑上層 第34図11	染付 鉢	口径(12.2)	磁器	透明釉は貫入多い	呉須　外面モチーフは菊文や若松文が崩れたもの　内面は界線		注記を22号溝上層から変更	有田	17世紀末 ～18世紀前葉
1号大土坑上層 第34図12	染付 碗	底径4.8	磁器	透明釉は貫入あり	呉須　外面と見込みのモチーフ不明　外底は「富明」富貴長春と大明年製が混ざったもの	畳付は釉剥ぎ	注記を22号溝上層から変更	有田	17世紀後半
1号大土坑上層 第34図13	染付 皿 5寸皿	口径(10.2) 底径6.2 器高2.6	磁器	透明釉発色良好	型押し成型の輪花口縁　口錆　呉須で富士と山林と楼門	不明	注記を22号溝上層から変更	有田	19世紀前葉
1号大土坑上層 第34図14	染付 小皿	口径(9.4) 底径(4.0) 器高2.4	磁器	透明釉発色不良・呉須焼成発色良	底部削り出しの碁笥底　見込みに「楽」を擬人化したモチーフを入れ、外面にも不明文字文を入れる	外底は釉剥ぎ	注記を22号溝上層から変更	景徳鎮	17世紀前半か
1号大土坑上層 第34図15	染付 大皿	口径(26.6)	磁器	透明釉発色良好	呉須　外面墨唐草文　内面葉文の染付の上に色絵を足している	不明	注記を22号溝上層から変更	有田	18世紀後葉 ～19世紀中葉
1号大土坑上層 第34図16	染付 段重	口径(14.6) 底径(10.6) 器高4.6	磁器	透明釉発色良好	呉須　外面墨弾きによる芙蓉文	口唇部と外面底部縁の受け部は釉剥ぎ	注記を22号溝上層から変更	有田	18世紀後葉 ～19世紀中葉
1号大土坑上層 第34図17	蓋	口径(9.8) 底径(4.0) 器高2.8	磁器	透明釉は貫入あり	無文	摘み部上端は釉剥ぎ	注記を22号溝上層から変更	有田	18世紀後葉

表12　1次調査出土土器・陶磁器・瓦観察表12

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm,g) ()は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見		
							特記事項	推定産地	推定年代
1号大土坑上層 第34図18	軒平瓦 瓦当	瓦当厚4.0	瓦質		主文不明だが文様の特徴から三葉文B5b類とした　型から外して縁をナデている　燻はなく灰黒色　焼成良好　瓦当文の摩滅なし	不明	注記を22号溝上層から変更	在地	不明
1号大土坑上層 第34図19	軒平瓦 瓦当	瓦当厚3.2	瓦質		三葉文B6類　型から外して縁をナデている　燻はなく灰黒色　焼成良好	不明	注記を22号溝上層から変更	在地	不明
1号大土坑 第35図1 図版30	皿 小皿	口径9.0 底径4.2 器高2.5	陶器	内面黒褐色の鉄釉　外面は露胎	底部糸切り　完形品　内面にひっつきあり　灯明皿としての痕跡なし　無文	粘土粒あり	注記を24号溝から変更	武雄	不明
1号大土坑b下位 第35図2 図版30	湯窯	口径14.9	瓦質土器		環状の耳がつく　外面上半は丁寧なヘラミガキ、下半はナデのみ　内面はハケで、胴部上半はナデ消し　黒灰色を呈す	不明	底部は煤の付着が著しい　スタンプ文なし	在地	不明
1号大土坑b 第35図3	火鉢	—	瓦質土器		黒灰色を呈し光沢ある　ミガキだが痕跡なし　スタンプによるモチーフ不明文あり	不明	内面にタール付着傾き不明	在地	不明
1号大土坑 第35図4	風炉	底径29.2	瓦質土器		型押し成型のため内面はナデ窪む　外面はミガキが摩滅している　外面灰黒色、内面暗灰色　無文	不明	注記を24号溝から変更	在地	不明
1号大土坑b下位 第35図5 図版30	埦 京焼風色絵	口径9.2 底径3.0 器高5.5	陶器 腰折れ形	淡黄灰色の灰釉　焼成不良でガラス化していない	高台小さな削り出し　外面胴部に互い向いに笹文を緑彩で描き、中央だけを赤と黒、薄い緑の彩色で描いている	高台露胎	完形	肥前	18世紀第2四半期
1号大土坑b下位 第35図6	埦 京焼風	口径(9.0) 底径3.6 器高4.6	陶器 腰折れ形	淡黄灰色の灰釉　焼成不良でガラス化していない	高台削り出し　無文　外面竹笹文の有無は欠損のため不明	高台露胎		肥前	18世紀第2四半期
1号大土坑b下位 第35図7	埦 京焼風	口径(10.0) 底径3.7 器高5.0	陶器 腰折れ形	淡黄灰色の灰釉　焼成やや不良	高台削り出し　無文　外面竹笹文の有無は欠損のため不明	高台露胎		肥前	18世紀第2四半期
1号大土坑b下位 第35図8	小皿	口径(12.0) 底径2.5 器高4.1	陶器	外面胴下位と見込みは白化粧土ハケ掛け、口縁部から胴部中位までは白化粧土掻き取り後、透明度の高い灰釉掛け　高台削り出し		畳付は釉剥ぎ　砂目付着		肥前	
1号大土坑 第35図9	埦	底径(6.0)	陶器	外面鉄釉　内面緑灰白色の灰釉	外面の籠目状文は型押しだろう　胎はざっくりした多孔質で、肥前か　高台削り出し	底部露胎	注記を24号溝から変更	不明	不明
1号大土坑 第35図10 図版30	皿 変形小型皿	口径9.6 底径4.0 器高2.9	陶器	鉄釉を高台を除き内外掛け　鉄釉中の成分が流れている	高台削り出し　型押し成型による隅切の角皿	高台露胎	注記を24号溝から変更	肥前	不明
1号大土坑b下位 第35図11	皿 小皿 5寸皿	底径4.4	陶器	淡灰白色の透明度の高い灰釉焼成良好	高台削り出し　無文	畳付は釉剥ぎで、畳付と見込みに胎土目跡3あり　見込みに同一器種の高台片が融着している		肥前	不明
1号大土坑 第35図12 図版30	土瓶蓋	最大径7.1 底径4.1 器高2.5	陶器	外面鉄釉　発色不良　焼成良好	摘み貼り付け　底部糸切り	粘土粒不明瞭		肥前	不明
1号大土坑 第35図13	瓶 小型神酒徳利	—	陶器	鉄釉を外面から内面肩部まで掛け	外面頸部と胴部に凹線　肩部に互い向いに耳に貼り付ける	底部欠損のため不明	注記を24号溝から変更	武雄	不明
1号大土坑b下位 第35図14	瓶 仏花瓶	底径5.2	陶器	黄灰色の灰釉を外底以外に掛け　焼成良好	高台削り出し　外面に鉄釉で竹笹文	畳付釉剝ぎ　アルミナ塗布		肥前	不明
1号大土坑 第35図15	甕 大甕	—	陶器	鉄釉内外に掛かるが、口縁部内面の接合部は掛かっていない	外面格子目タタキ痕残る　内面はケズリ	不明	注記を24号溝から変更	肥前か	18世紀代
1号大土坑 第35図16	擂鉢	口径(36.4)	陶器	口縁部内外に鉄釉掛け　発色焼成良好	口縁部を外反させる　外面胴部中位にケズリの段がある　内面口縁部下に19本単位の擂り目が入る		注記を24号溝から変更	肥前	18世紀前半
1号大土坑 第35図17	甕 半胴甕	底径11.7	陶器	底部内面と外面に暗茶褐色の鉄釉のハケ掛け　内面は中位に鉄釉を上掛け、外面は中位の白化粧土をハケ掛けし、その上にさらに白化粧土を塗布して櫛掻き取り		畳付は釉剥ぎ　高台は砂目付	注記を24号溝から変更	肥前	不明
1号大土坑 第35図18	鉢	底径(9.8)	陶器	外面胴下位は鉄漿掛け掛け、内面はカキ目の上に白化粧土をハケ掛け	高台削り出し	高台釉剥ぎで、外面に砂目付着あり	注記を24号溝から変更	武雄	不明
1号大土坑 第36図1	杯 小杯	口径7.7 底径3.3 器高3.9	磁器	透明釉の発色不良で白濁	呉須　外面のコンニャク印判で楓葉文	畳付は釉剥ぎ	注記を24号溝から変更	波佐見	18世紀前半
1号大土坑導水部 第36図2	染付 碗	口径(8.8) 器高5.0	磁器	透明釉発色良好だが貫入多い	呉須で外面は楼閣文　見込み文様不明	畳付は釉剥ぎ	注記を24号溝から変更	有田	18世紀前半
1号大土坑b下位 第36図3	染付 小型碗	口径9.3 底径3.3 器高4.2	磁器	透明釉・呉須の発色良	外面呉須で互い向いに若松文	畳付は釉剥ぎ	完形	有田	18世紀第2四半期
1号大土坑b下位 第36図4	染付 小型碗	口径(9.0) 底径2.6 器高4.2	磁器	透明釉・呉須の発色良	外面呉須で葉文	畳付は釉剥ぎ		有田	18世紀第2四半期
1号大土坑b 第36図5	白磁 小型碗	底径9.7	磁器	透明釉の発色良	無文	底部が残っていないので不明		有田	
1号大土坑b 第36図6	白磁 小型碗	口径(10.0) 底径4.4 器高5.3	磁器	透明釉の発色良	無文	畳付は釉剥ぎ		有田	18世紀前半
1号大土坑b下位 第36図7	染付 碗	口径(9.8) 底径3.8 器高3.4	磁器	呉須と透明釉の発色良いが大きく歪んでいる	呉須で外面草文　厚手のくわらんか手外底に崩れた「明」か	畳付釉剝ぎ　胴部に砂付着		波佐見	18世紀前半

表13　1次調査出土土器・陶磁器・瓦観察表13

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm,g) ( )は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見		
							特記事項	推定産地	推定年代
1号大土坑導水部 第36図8	染付 瓶	底径5.2	磁器	透明釉発色良好	厚い高台貼り付け　外面花葉文、高台に凹凸文	畳付は釉剥ぎ	注記を24号溝から変更	有田	不明
1号大土坑導水部 第36図9	染付 蓋	裾径(11.6) 器高3.2	磁器	透明釉の発色不良で暗いが、良品	外面は側面から見た芙蓉4つを互い向いに配置し、その間に菊花文を入れる、内面は天井部に芙蓉文	摘み部上端は釉剥ぎ	注記を24号溝から変更	有田	18世紀後葉 ～19世紀初頭
1号大土坑導水部 第36図10	染付 皿 5寸皿	口径(15.0) 底径(9.4) 器高3.8	磁器	透明釉・呉須焼成発色良好　良品	型押し成型の輪花口縁　呉須で外面は唐草文、内面は窓文内に梅樹文があるので松竹梅文だろう　見込みに手描きの五弁花文	外底は蛇ノ目高台	注記を24号溝から変更	有田	18世紀中葉
1号大土坑 第36図11	染付 中皿	口径(22.0) 底径(14.0) 器高3.1	磁器	透明釉の発色不良で白濁	型押し成型の花弁口縁　呉須で外面唐草文　内面鳳凰文　見込みのモチーフは不明	畳付は釉剥ぎ	注記を24号溝から変更	有田	18世紀前半
1号大土坑b下位 第36図12	皿 5寸皿	口径(14.0) 底径5.2 器高4.2	白磁	乳白色の白磁釉　焼成良好	高台削り出し　見込みに線刻による剣と花文	畳付は釉剥ぎ		有田	17世紀代
1号大土坑b下位 第36図13	皿 5寸皿	底径7.4	磁器	透明釉の発色良　良品	内面は型押しによる花文	畳付は釉剥ぎ	断面に漆付着継か	有田	不明
1号大土坑 第36図14	染付 仏飯器	口径(6.8) 底径4.2 器高5.8	磁器	透明釉の発色不良で白濁	呉須　外面崩れた蛸唐草文と界線	畳付は釉剥ぎ	注記を24号溝から変更	有田	17世紀末 ～18世紀後葉
1号大土坑 第36図15	青磁瓶	底径5.6	磁器	青磁釉発色不良で緑灰白色を呈する	貼り付け高台　頸部が長く口縁部がラッパ状に開くタイプだろう	畳付釉剥ぎ	注記を24号溝から変更	肥前	18世紀中葉 ～19世紀中葉
1号大土坑導水部 第36図16	青磁瓶	底径7.6	磁器	青磁釉発色良好	削り出し高台	畳付は青磁釉を釉剥ぎ後、鉄釉塗布	注記を24号溝から変更	肥前	不明
1号大土坑b下位 第36図17	鉢 八角鉢	口径(10.0)	青磁	青磁を全面掛け　発色焼成良好の良品	型押し成型による花弁口縁　無文	畳付釉剝ぎ		肥前	不明
1号大土坑b下位 第36図18	染付 ミニチュア碗	口径(5.2)	磁器	透明釉・呉須の発色良	外面呉須で花唐草文	不明		有田	18世紀前葉
1号大土坑 第36図19	赤絵 ミニチュア油壺	口径1.7 最大径(4.4)	磁器	内面ケズリ　白磁釉を外面から内面口縁部まで掛け、外面肩部に赤絵で花文上掛け　白磁釉発色良好		不明	注記を24号溝から変更	肥前	不明
1号大土坑導水部 第36図20	染付 合子蓋	天井径6.3 裾径6.2 器高1.3	磁器	透明釉・呉須ともに発色良	外面は天井部と側面に異なる蛸唐草文、内面は無文	裾端は釉剥ぎ	注記を24号溝から変更	有田	18世紀後半
1号大土坑 第36図21 図版47	土人形 地蔵菩薩像	高さ3.4 幅2.2 厚さ1.4	土製品		型押し成型で表裏面を接合している　黄灰白色を呈し変色なし	表面にキラが残る	注記を24号溝から変更	在地	不明
1号大土坑 第37図1	軒丸瓦 瓦当	面径(16.0) 基部厚2.2	瓦質		B4類　型から外して縁をナデている　凹面のスダレ・模骨痕ケズリ　巴文文様高い	不明	注記を24号溝から変更　面に歪みあり	在地	不明
1号大土坑 第37図2	軒丸瓦 瓦当	玉縁端幅13.6	瓦質		B6類 型から外して縁をナデている　楕円か　燻はなく灰黒色　焼成良好　巴文文様高い	不明	注記を24号溝から変更	在地	不明
1号大土坑b 第37図3	丸瓦	基部側幅13.2 玉縁端幅6.9 厚さ1.6	瓦質		基部成型に失敗して幅が不均一　発色良好　凸面は丁寧なナデ仕上げで成型痕が観察できない　凹面はケズリと面取り後のナデはない　蓆痕を削って消す	凸面端部の灰白色部は、その周囲に磨いたような平滑面があるのは、接地面にして焼成したため、傷を磨き消したか？　黒灰色一部銀化している		在地	不明
1号大土坑b下位 第37図4	丸瓦	基部側幅13.8 玉縁端幅6.7 厚さ2.0	瓦質		釘穴あり　凸面は丁寧なナデ仕上げで成型痕が観察できない　凹面はケズリと面取り後のナデはない　蓆痕　発色良好　黒灰色一部銀化している		凸面中央部が灰白色なので、凸面を下にして焼成したか？	在地	不明
1号大土坑 第37図5	丸瓦	幅10.0 厚さ1.8	瓦質		凹面に布目痕　穿孔あり　発色良好　灰黒色で銀化なし　凸面は丁寧なナデ仕上げで成型痕が観察できない	不明	注記を24号溝から変更　極端に幅が狭く、凹面布目も異なる	在地	不明
1号大土坑b下位 第37図6	軒平瓦 瓦当	瓦当厚3.6 厚さ1.5	瓦質		三葉文を主文とする唐草文と思われるが分類不能　各面丁寧なナデ仕上げで成型痕が観察できない　発色良好　黒灰色			在地	不明
1号大土坑 第37図7	軒平瓦 瓦当	瓦当厚4.1 厚さ1.9	瓦質		三葉文を主文とする唐草文と思われるが分類不能　発色良好　黒灰色で銀化あり各面丁寧なナデ仕上げ	不明	注記を24号溝から変更	在地	不明
2号井戸 第38図1	小皿	口径(8.4) 底径(7.2) 器高2.6	土師器		底部糸切り、内面2段、外面3段ナデ　内外面にぶい黄橙色　無文	不明		在地	不明
2号井戸 第38図2	小皿 灯明受皿	底径(5.6)	土師器		底部糸切りと板状圧痕あり、内外ナデ　外面にぶい黄橙色～橙色だが、内面は油は付着し変色	不明	底面に釘穴の穿孔あり	在地	不明
2号井戸 第38図3	皿	—	土師質土器		外面口縁部はナデで、それ以下はオサエをナデ消し、内面はハケ	不明	外面にぶい灰黒色、内面灰黒色なので、煮沸使用か	在地	不明
2号井戸 第38図4	鉢 焙烙	口径(49.6)	土師質土器		口縁部外面肥厚だが、肥厚部の下位の接合痕は残す　体部上位はオサエ後丁寧なナデで、口唇部はナデ窪み　内面は丁寧なヨコナデ摩滅　無文	不明	内面黄橙灰色だが、外面は煤付着で変色	在地	不明

表14　1次調査出土土器・陶磁器・瓦観察表14

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm,g) ( )は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見		
							特記事項	推定産地	推定年代
2号井戸 第38図5 図版30	井戸枠	口径(75.6) 底径(75.2) 器高71.6	瓦質土器		上下口唇部は同様の平坦面で端部は面取り、外面は目の粗いハケで、内面は細かいハケ 上下端内面はナデ		外面は黒灰色だが、内面は灰色を呈する	在地	不明
2号井戸 第38図6 図版30	皿 小皿	口径(9.0) 底径(4.0) 器高2.5	陶器	内面から外面口縁部まで鉄釉掛け 発色・焼成良	底部糸切り 無文	粘土粒確認できない		肥前	不明
2号井戸 第38図7	皿 小皿	口径(10.6)	陶器	内外黄緑色の灰釉 発色・焼成良	口縁部屈曲後跳ね上げ 無文	不明		瀬戸	17世紀後半
2号井戸 第38図8	皿 小皿	底径(3.8)	陶器	内面から外面胴中位まで暗緑灰色の灰釉掛け後、見込みに鉄絵 発色・焼成良	削り出し高台 見込みに鉄絵の葉文	底部露胎		唐津	不明
2号井戸 第38図9	皿 5寸皿	底径(4.6)	陶器	淡灰白色の灰釉全面掛け 焼成良好	高台削り出しで、断面台形 無文	畳付は釉剥ぎで、畳付と見込みに胎土目跡4つあり		肥前	17世紀後半
2号井戸 第38図10	皿 5寸皿	底径(6.4)	陶器	淡灰白色の透明度の高い灰釉全面掛け 焼成良好	高台螺旋状削り出し 無文	畳付に2つ、見込みに胎土目跡3つあり、位置関係から本来5つ		肥前	17世紀後半
2号井戸 第38図11	摺鉢	—	陶器	焼き締め陶器なので無釉	口縁部肥厚し、上に突出 外面に沈線、内面口縁下に単位不明の摺り目が入る 焼成良	赤紫色だが、外面口縁部のみ暗紫色なので重ね焼きしている		備前	不明
2号井戸 第38図12	摺鉢	—	陶器	内外口縁部に鉄釉掛け 焼成・発色良	口縁部外面肥厚 外面口縁部に沈線 内面口縁下の摺り目は欠損	不明		武雄	不明
2号井戸 第38図13	摺鉢	—	陶器	内外口縁部に鉄釉掛け 焼成・発色良	口縁部内面肥厚 内面口縁下の摺り目は欠損	不明		武雄	17世紀中葉 〜末
2号井戸 第38図14	鉢	口径(35.2)	陶器	口縁部内外に鉄釉を施した後、口縁下に灰白色の砂粒の多い灰釉掛け	口縁部肥厚	口唇部は釉拭き取りなので重ね焼きしている		肥前	不明
2号井戸 第38図15	鉢 こね鉢	口径(26.0)	陶器	内外茶褐色の鉄釉掛け 焼成・発色良好	口縁部に凹線あり、片口の湾曲がある 無文	自然釉が口縁部から流れているので正置して焼成している		肥前か	不明
2号井戸 第38図16	甕	口径(33.6)	陶器	内外黒褐色の鉄釉掛け	口縁部外面側肥厚 無文	口唇部に灰被りがあるので正置して焼成		肥前	17世紀後半
2号井戸 第39図1	染付 小型碗	口径(8.2)	磁器	透明釉発色不良で暗い、呉須は発色良 焼成良	外面呉須で葉文	不明		有田	17世紀後半 〜18世紀前葉
2号井戸 第39図2	染付 小型碗	口径(7.8) 底径3.6 器高4.8	磁器	透明釉・呉須発色良 焼成良	外面呉須でコンニャク印判による葉文	畳付釉剥ぎ		有田	18世紀初頭 〜18世紀前葉
2号井戸 第39図3	染付 皿 5寸皿	口径(13.4) 底径(7.4) 器高3.2	磁器	透明釉の発色良	呉須 外面界線のみか、内面崩れてモチーフ不明文	畳付は釉剥ぎ		波佐見	17世紀後半 〜18世紀前葉
2号井戸 第39図4	染付 合子蓋	口径(7.0)	磁器	呉須・透明釉は発色不良呉須と透明釉の発色良いが大きく歪んでいる	裾部は接合か 上面に呉須で草花文	蓋裾釉剥ぎなので重ねて焼成		有田	不明
2号井戸 第39図5	色絵	底径(21.0)	磁器	透明釉・鉄釉の発色良・焼成良	口縁部に歪みがあるので蓋はない 外底は未調整 外面薄い赤彩を下地にした上に鉄絵で葉文を描き、口錆する	外底露胎	口縁部内面に釉剥ぎがないので段重でも合子でもない	有田	不明
2号井戸 第39図6	ミニチュア碗	口径(3.0) 底径1.4 器高1.4	磁器	白磁釉を内面から外面口縁部まで掛け	型押し成型 無文			有田	不明
2号井戸 第39図7	軒丸瓦 瓦当	径(15.4)	瓦質		A7類 型から外して縁をナデている 内面側の縁もナデ窪んでいる 燻はなく灰黒色 焼成良好	不明	瓦当面は風化しているが裏面は風化してない	在地	不明
2号井戸 第39図8 図版47	土人形 騎馬武人	高さ3.8 幅2.8 厚さ0.8	土製品		手捏ね成型で目・鼻・口を沈線で表現し、頭は指頭で斜めの平坦面にしている 腕は省略されている		下位は馬から剥離 黄灰白色を呈し変色なし	在地	不明
3号井戸 第39図9	染付 皿 五寸皿	口径(14.0)	磁器	呉須は発色良だが、透明釉は貫入あり	呉須で内面崩れた芙蓉手 見込みは植物文	不明		有田	17世紀後半 〜18世紀前葉
3号井戸 第39図10	染付 中皿	底径(17.2)	磁器	透明釉の発色不良で白濁	高台貼り付け 底部中央はへたれている 呉須 外面唐草文か 植物と人物文か山水文	畳付は釉剥ぎせず、砂目大量に付く		有田	不明
3号井戸 第39図11	軒丸瓦 瓦当	面径(15.4) 厚さ2.0	瓦質		A5類 瓦当以外ナデ 凹面にスダレ痕明瞭に残る 燻はなく青灰色 焼成良好	不明		在地	不明

表15　1次調査出土土器・陶磁器・瓦観察表15

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm,g) ()は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見		
							特記事項	推定産地	推定年代
3号井戸 第39図12	丸瓦	先端幅12.8 玉縁端幅13.8	瓦質		凹面に大きなケズリ面　発色良好　凸面は丁寧なナデ仕上げで成型痕が観察不能　凹面は模骨痕と布目痕を削る	不明	灰黒色で銀化なし	在地	不明
3号井戸 第39図13	軒平瓦	面幅(11.4) 瓦当厚4.3	瓦質		三葉文A1b類　顎部分は幅の広いところと狭いところがある　燻はなく灰黒色　焼成良好	不明		在地	不明
3号井戸 第39図14 図版47	土人形 鳥	高さ2.4 幅2.5 奥行6.1	土製品		手捏ね成型で目口の表現はなく、脚もない　体の横に穿孔があるが機能不明　黄橙白色を呈し、変色なし			在地	不明
3号井戸 第39図15 図版48	管状土錘	長さ4.0 最大径2.1 重量16.10	土製品		外面丁寧なナデ、小口部は平坦で、胴部の膨らみが大きい淡　橙黄白色を呈する無文	不明	ほぼ完形	在地	不明
1号溝 第40図1	鉢	－	土師器		口縁部を内傾させ、口縁部に2条の凹線を入れる　焼成良好で内外灰白色で変色なし	不明		在地	不明
1号溝 第40図2	埦 腰折埦	最大径9.8 底径3.4	陶器	淡黄灰色の灰釉　焼成良好　高台露胎	高台削り出し　外面の鉄釉の笹文は欠損	痕跡なし		肥前	18世紀前葉
1号溝 第40図3	埦 変形埦	口径(9.6)	陶器	内外飴釉の上に口縁部に暗緑灰色の藁灰釉を流し掛け	口縁部は手捏ねで凹凸を作っている	底部は釉剥ぎか		肥前	不明
1号溝 第40図4	埦 京焼風	口径(9.7) 底径(3.4) 器高4.25	陶器	焼成良好　高台露胎　淡黄灰色の灰釉を高台以外に掛ける	高台削り出し　釉上見込みに鉄絵の山水文を上描き	痕跡なし		肥前	18世紀前葉
1号溝 第40図5	皿 5寸皿	底径(5.4)	陶器	全面胴に淡灰色の灰釉を掛け焼成良好	見込みに蛇ノ目釉剥ぎ　高台削り出し	砂目跡見込みに本来3ケ所、畳付に本来4ケ所		肥前	不明
1号溝 第40図6	皿 5寸皿	口径(13.4) 底径(5.0) 器高3.2	陶器	内面から外面胴中位に淡黄緑灰色の灰釉を掛け　焼成良好	見込みに蛇ノ目釉剥ぎ　高台削り出し	痕跡なし		肥前	17世紀後半
1号溝 第40図7	青磁	底径(10.8)	磁器	暗緑色の緑釉を全面掛け　内面貫入多く発色悪い	無文	畳付は釉剥ぎ		肥前	不明
1号溝 第40図8	大甕	口径(56.0)	陶器	内外茶褐色の鉄釉	口縁部を内傾させ、逆L字形をなす　無文	口縁部に目跡なし		肥前	17世紀後葉
1号溝 第40図9	瓶 小型瓶	底径7.0	陶器	外面は中位まで白化粧土を掛けた後櫛掻き取りし、淡緑灰釉を中位まで上掛け　透明度が高く貫入多い　高台削り出し		下位露胎	内面に赤橙色物質が付着しているのでお歯黒壺	肥前	17世紀後葉
1号溝 第40図10	甕 半胴甕	－	陶器	外面から内面口縁部まで白化粧土掛けた後、外面と口唇部は櫛描き、その後全面灰釉掛け　灰釉は透明度の高いもの　口縁部T字に折り曲げ		口唇部に目跡なし		肥前	不明
1号溝 第40図11	染付 小型碗	口径(8.4) 底径(3.2) 器高4.2	磁器	透明釉・呉須の発色不良	外面蝶文	畳付は釉剥ぎ　砂目付		有田	18世紀初頭から前葉
1号溝 第40図12	染付 碗	口径(10.0) 底径(4.0) 器高4.8	磁器	透明釉・呉須の発色良	外面樹葉文と鳥文	畳付は釉剥ぎ		有田	18世紀第2四半期
1号溝 第40図13	染付 碗	口径(10.0) 底径3.5 器高4.6	磁器	透明釉・呉須の発色良好の良品	外面口縁下に松竹梅文　下位は花唐草文	不明		有田	18世紀第2四半期
1号溝 第40図14	染付 碗	口径5.0 底径4.2 器高4.8	磁器	透明釉は発色不良で白濁	外面若松文のコンニャク印判、内面無文	畳付は釉剥ぎ		有田	18世紀第2四半期
1号溝 第40図15	染付 小型碗	口径(7.36)	磁器	透明釉の発色良だが、口縁部だけ不良	外面菊葉文のコンニャク印判、内面無文	不明		有田	18世紀初頭から前葉
1号溝 第40図16	染付 小型碗	口径(8.2)	磁器	透明釉発色やや不良	呉須　外面口縁部雨降り文	不明		有田	18世紀初頭から前葉
1号溝 第40図17	染付 小型碗	口径12.7 底径(2.5) 器高5.5	磁器	焼成良好　畳付釉剝ぎ	内外無文　外底に銘	痕跡なし		有田	17世紀後葉 ～18世紀前葉
1号溝 第40図18	染付 小皿	口径(9.8) 底径(5.6) 器高2.2	磁器	焼成良好　畳付釉剝ぎ	斜格子文地の中に方形窓を描き、その中に花葉文	痕跡なし		有田	18世紀前半
1号溝 第40図19	染錦手 5寸皿	口径(13.0) 底径(7.2) 器高3.0	磁器	透明釉は発色不良で暗い　呉須は良好　焼成不良で胎が暗い	見込みに蛇ノ目釉剥ぎし、口縁部に口紅、釉剥ぎ部に赤絵を上描き　呉須で内面口縁下に唐草文、見込みに五弁花文	畳付は釉剥ぎ　砂目付	厚手のくらわんか手	波佐見か	18世紀中葉 ～19世紀初頭
1号溝 第40図20	染付 中皿 染錦手	口径(28.0) 底径(18.6) 器高4.2	磁器	透明釉・呉須の発色良好の良品	内外染付の上に赤・黒・白で花文を上描き	畳付は釉剥ぎ		有田	不明
1号溝 第40図21	染付 瓶	最大径7.1 底径4.8	磁器	透明釉は外面　内面中位まで白磁釉　発色良好	削り出し高台　呉須で花葉文	畳付は釉剥ぎ　砂目付		有田	18世紀後葉 ～19世紀中葉

表 16　1 次調査出土土器・陶磁器・瓦観察表 16

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm,g) ( )は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見		
							特記事項	推定産地	推定年代
1号溝 第41図1	軒平瓦	厚さ2.1	瓦質		三葉文C2b類　発色不良のため瓦当部はにぶい黄灰色を呈し、他は青灰色	瓦当面を下にして焼成したか		在地	不明
1号溝 第41図2 図版48	土壁	厚さ3.5	土製品		片側の面のみ残る　植物質はほとんどない　小礫は粒が大きい　火事や漆喰の痕跡なし			在地	不明
1号溝 第41図3 図版30	土人形 猿	高さ2.5 幅2.7 厚さ4.1	土製品		手捏ね成型で目を刺突で、口を沈線で表現しているようだが、口の沈線は偶発的なものか		黄橙白色を呈し変色なし	在地	不明
2号溝 第44図1	小型壺 焼塩壺	口径(6.2) 底径(5.6) 器高6.5	土師質土器		粘土板からひねり出して成型したか　内面回転ナデ　外面荒いヨコナデでオサエ痕あり	外底は糸切りで不明	焼成良好　黄灰色を呈し、断面は赤化	在地	不明
2号溝 第44図2	皿 灯明受皿	口径6.1 底径4.6 器高3.3	陶器	柿釉か　光沢あり　焼成良好 高台露胎	外底糸切り　見込みは螺旋状ナデ　無文	外底に粘土粒あり		武雄	不明
2号溝 第44図3	皿 灯明受皿	口径6.9 底径4.8 器高3.4	陶器	柿釉か　光沢あり　焼成良好 高台露胎	外底糸切り　見込みは螺旋状ナデ　無文			武雄	不明
2号溝 第44図4 図版30	碗 腰折碗	口径(9.1) 底径(4.0) 器高5.0	陶器	内外淡黄灰色の灰釉掛け　焼成良好	高台削り出し　外面口縁部に鉄釉の笹文を上描き	痕跡なし	高台露胎	肥前	18世紀中葉
2号溝 第44図5	碗 腰折碗	口径(9.4) 底径(4.0) 器高5.0	陶器	内外淡黄灰色の灰釉掛け　焼成良好	高台削り出し　外面口縁部に鉄釉の笹文を上描き	痕跡なし		肥前	18世紀中葉
2号溝 第44図6	皿 皿	底径4.9	陶器	内外にぶい白灰色の灰釉掛け 焼成良好	高台削り出し　無文	畳付釉剥ぎ　畳付と見込みに目跡が残る		肥前	17世紀代
10号土坑・2号溝 第44図7	土瓶蓋	口径8.0 最大径10.2 器高3.8	陶器	焼成良好	摘みと受け部貼り付け　外面黒釉　発色良好			肥前	18世紀前半
2号溝 第44図8	鉢	—	陶器	口縁部玉縁肥厚　外面下位は鉄漿、外底は鉄釉ハケ掛け　外面は白化粧土櫛歯掻き取り　内面は白化粧土をハケ掛けし、上位に灰釉を掛け		見込みに砂目跡あり		武雄	18世紀前半
2号溝 第44図9	摺鉢	—	陶器	内外黒褐色の鉄釉　焼成・発色良	口縁部外面肥厚　内面口縁下に単位不明の摺り目が入り、上端はナデ消し	不明		武雄	18世紀中葉
2号溝 第44図10	摺鉢	—	陶器	口縁部に内外鉄釉だが、発色やや不良　焼成良	口縁部肥厚	不明		武雄	17世紀後半
2号溝 第44図11	染付 小型碗	口径(7.4) 底径3.4 器高4.85	磁器	透明釉貫入多い　呉須の青が滲む	呉須　外面のコンニャク印判の不明文	畳付は釉剥ぎ		有田	18世紀前半
2号溝 第44図12	染付 赤絵	底径2.5	磁器	透明釉	赤で馬の外形線を入れた後金彩、松葉は緑彩で黒彩の枝を入れる	畳付は釉剥ぎ		有田	不明
2号溝 第44図13	染付 碗	口径(10.0)	磁器	透明釉の発色良好だが高台だけやや不良	外面花樹文			有田	18世紀前葉
2号溝 第44図14	染付 皿 5寸皿	口径13.9 底径7.6 器高3.4	磁器	透明釉呉須焼成発色ともに良好	見込みに蛇ノ目釉剥ぎ　体部は半菊文 見込みに五弁花文コンニャク印判	畳付は釉剥ぎ	厚手なのでくらわんか手	波佐見	17世紀後葉 ～18世紀前葉
2号溝 第44図15	染付 皿 5寸皿	口径(12.0) 底径(4.8) 器高3.3	磁器	透明釉呉須焼成発色ともに良好	見込みに蛇ノ目釉剥ぎ　二重網目文	畳付は釉剥ぎ　砂目付		波佐見	17世紀後葉 ～18世紀前葉
2号溝 第44図16	染付蓋	口径(9.6)	磁器	透明釉発色良好	天井部に橋状の摘みがつく　外面は天井部に斜線鋸歯文帯、中位から下位は蛸唐草文内面無文	受け部釉剥ぎで砂目付		有田	18世紀末 ～19世紀中葉
2号溝 第44図17 図版30	軒平瓦	瓦当厚3.5 幅27.0	瓦質		三葉文C1類　発色良好　黒灰色　各面丁寧なナデ仕上げで成型痕が観察できない	不明		在地	不明
2号溝 第44図18 図版47	土人形 おぼこ人形	高さ2.8 幅2.1 厚さ1.7	土製品		型押し成型で底部に穿孔している　帯があるのでおぼこ人形ではないか　型合わせの痕跡なし　焼成良好	不明		在地か	不明
2号溝 第44図19 図版48	管状土錘	長さ5.2 最大径1.7 重さ12.35	土製品		小口部は平坦　淡橙白色を呈する	不明	ほぼ完形	在地	不明
3号溝 第44図20	皿 小皿	口径(15.0)	陶器	灰色の灰釉を内面から外面胴上半に掛ける	外面口縁部下の段はナデ窪みによるもの	不明		肥前	不明
3号溝 第44図21	碗 京焼風	口径(19.0) 底径(4.8) 器高3.3	陶器	淡黄灰色の灰釉　焼成良好　高台露胎	高台削り出し　見込みに鉄絵の山水文	痕跡なし		肥前	18世紀中葉
4号溝 第45図1	風炉	底径(19.0)	土師質土器		脚部片　内外ナデのみでミガキはない	不明　胎土精良	にぶい白灰色でやや黒く変色している	在地	不明
4号溝 第45図2	摺鉢	—	陶器	口縁部に内外鉄釉だが、発色不良　焼成やや不良	口縁部肥厚　内面口縁下の摺り目は欠損部にある	不明		武雄	17世紀中葉～末
4号溝 第45図3	摺鉢	—	陶器	内外黒褐色の鉄釉　焼成良	口縁部肥厚　内面口縁下に単位不明の摺り目が入り、上端はナデ消し	不明	片口部の歪みあり	武雄	18世紀中葉 ～19世紀中葉
4号溝 第45図4	摺鉢	—	陶器	口縁部に内外鉄釉だが、発色やや不良　焼成良	口縁部肥厚　内面口縁下に10本単位の摺り目が入り、上端はナデ消し			武雄	17世紀中葉～末

表17　1次調査出土土器・陶磁器・瓦観察表17

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm,g) ()は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見		
							特記事項	推定産地	推定年代
4号溝 第45図5 図版30	青磁掛け分け小型碗	口径6.6 底径3.2 器高4.55	磁器	外面淡緑灰色の青磁釉	外面は染付の上に鉄釉で鳥と水草　外面にも漢字らしいものあり、外底に銘入れ	畳付は釉剥ぎ		有田	17世紀中葉 ～18世紀後葉
4号溝 第45図6	染付 青磁掛け分け 蓋	底径4.4	磁器	青磁釉の発色悪く 暗淡緑灰色を呈す　透明釉は貫入多い	高台内角福　内面口縁部鋸歯文　天井に界線と手描き五弁花文			有田	18世紀後葉
4号溝ab混ざり 第45図7	染付 皿 5寸皿	口径(13.0) 底径(8.0) 器高8.6	磁器	透明釉発色良好	型押し成型の輪花口縁　厚手のくわらんか手　呉須で外面唐草文　内面松竹梅	外底蛇ノ目高台　砂目付着		有田	18世紀後葉 ～19世紀前葉
4号溝 第45図8	仏飯器	口径(6.8) 底径4.0 器高6.9	磁器	透明釉発色良好	外面は染付花文か　蛇ノ目高台は削り出し	底部は釉剥ぎ		有田	17世紀末 ～18世紀中葉
4号溝 第45図9	油差しか？	口径(5.4)	磁器	透明釉発色良好　透明釉全面掛け	口唇部に赤と黒で上絵付け　型押し成型の鉢部と天井部を接合し、注口を穿孔している　上面は段がつく	上部辺なので不明	蓋の有無は不明	有田	不明
4号溝 第45図10	丸瓦	玉縁端幅12.4	瓦質		発色焼成良好　凸面は丁寧なナデ仕上げで成型痕が観察できない　凹面は摸骨痕が残り、スダレ痕を削っていない	不明	凸面器面荒れ　基部が薄く湾曲する	在地	不明
4号溝 第45図11	軒平瓦	瓦当厚4.8 厚さ1.6	瓦質		三葉文A1c類　瓦当面は下端が高い 発色焼成良　黒灰色		26a号溝状遺構の第61図6と顎の特徴が同じ	在地	不明
4号溝 第45図12 図版30	土人形 観音像	高さ8.7 幅4.9 厚さ2.4	土製品		型押し成型で接合部を面取りし、底部に型合わせ痕あり　中央部に穿孔があり、5.5cm入る	型離れ材のキラが付着している		在地	不明
5号溝 第46図1	鉢 火消し壺	口径(26.0)	瓦質土器	外面口唇部黒灰色で内面茶赤変しているので火入れだろう	外面口縁下位に切り目を入れてから大きく外傾　外面無文	不明		在地	不明
5号溝 第46図2	埦 京焼風	口径(10.4) 底径(4.4) 器高4.8	陶器	底部に鉄漿をハケ掛けした後、淡黄灰色の灰釉をかけ、口唇部に口錆　焼成良好	高台削り出し　見込みに鉄絵で山水文が入るが、発色不良	畳付は釉剥ぎ　高台露胎		肥前	不明
5号溝 第46図3	擂鉢		陶器	内外黒茶色の鉄釉で発色良焼成良	口縁部肥厚　内面口縁下の擂り目は単位不明　口縁部まで入れているがナデ消し	不明		武雄	18世紀中葉 ～19世紀中葉
5号溝 第46図4	甕 大甕	口径(21.0)	陶器	鉄釉内外に掛かる	口縁部湾曲　内外ナデ	不明		肥前	17世紀後半
5号溝 第46図5	鉢 合子	口径(6.8) 底径(3.8) 器高3.7	磁器	透明釉発色やや不良	外面界線内に扇文	畳付は釉剥ぎ		有田	不明
5号溝 第46図6	染付 皿 5寸皿	口径(13.2) 底径(8.6) 器高3.6	磁器	透明釉発色良好	型押し成型の輪花口縁　呉須で外面唐草文　内面芙蓉文　見込みに手描きの五弁花文	外底蛇ノ目高台　砂目付着		有田	18世紀前葉 ～中葉
5号溝南部 第46図7 図版31	染付 小型瓶	底径(5.0)	磁器	透明釉貫入多い	呉須で外面草文	畳付は釉剥ぎ　高台内に砂が付着	内面に褐色の物質が付着しているのでお歯黒壺	有田	18世紀中葉
5号溝 第46図8 図版31	土人形 土馬	高さ9.0 幅4.6 厚さ8.8	土製品		鞍や騎人の痕跡なし　手捏ね成型	淡黄橙白色		在地	不明
5号溝 第46図9 図版31	土人形 土馬	長さ11.9 高さ10.0	土製品		鞍がありその上が欠損しているので騎人がいただろう　手捏ね成型	淡黄橙白色		在地	不明
8号溝 第46図10	染付 小型皿	口径8.8 底径5.0 器高2.3	磁器	透明釉貫入あり呉須焼成発色良好	型押し成型による輪花口縁　呉須で外面は崩れた若松文　内面に山水文	畳付は釉剥ぎ		有田	不明
9号溝 第46図11	染付 小型皿	口径(8.6) 底径3.8 器高2.4	磁器	透明釉貫入あり、呉須焼成発色良好	型押し成型による輪花口縁　呉須で内面に草花文	畳付は釉剥ぎ		有田	不明
12号溝 第46図12	染付 碗	口径(10.0)	磁器	透明釉・呉須の発色良好	外面にコンニャク印判による蔦文	不明		有田	18世紀第2四半期
13号溝 第47図1 図版48	鉢転用窯道具 火鉢か	長さ7.6 幅5.6 厚さ2.9	瓦質土器		内外ナデ　外面は摩滅のため不明　無文	不明	内外黒と赤に変色している	在地	不明
13号溝 第47図2	十能	－	土師質土器		型押し成型で板状把手がつく　鉢部との接合部に段が残る　内外ナデ	不明	外面に煤が付着しており、炭か	在地	不明
13号溝 第47図3	風炉 小型品	口径(16.6) 最大径(19.8)	瓦質土器		口縁部にU字形の窓があり、内側に突起がつく　外面はミガキ、内面はハケ　外面黒色、内面暗灰色を呈す　外面にスタンプによる菊花文と花文	不明		在地	不明
13号溝 第47図4	埦 京焼風	底径4.2	陶器	淡黄灰色の灰釉を底部以外に掛ける　焼成良好	高台削り出しで「清水」のスタンプあり　見込みに鉄絵で山水文が入るが、発色不良	底部露胎		肥前	18世紀前葉
13号溝 第47図5	埦 色絵	口径(8.8) 底径2.9 器高5.3	陶器	高台以外透明度の高い灰釉掛け、外面に赤・黒・緑で葉文を上描き	球形で小さい削り出し高台	高台露胎		肥前	18世紀第2四半期
13号溝 第47図6	埦 色絵	口径8.3 底径2.8 器高5.5	陶器	高台以外透明度の高い灰釉掛け、外面に赤・黒・緑で葉文を上描き	球形で小さい削り出し高台	高台露胎		肥前	18世紀第2四半期

表 18　1 次調査出土土器・陶磁器・瓦観察表 18

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm,g) ( )は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見		
							特記事項	推定産地	推定年代
13号溝 第47図7	埦 天目碗	口径(4.7)	陶器	焼成良 内外に暗茶褐色の鉄釉外面には発色不良で灰白色を呈する釉薬の上掛け	口縁部内傾	不明		肥前か	不明
13号溝 第47図8	埦	口径9.8 底径4.1 器高6.6	陶器	藁灰釉を内面から外面胴部に掛けた後、胴下位は釉拭き取り	高台削り出しで外底に螺旋沈線	底部露胎	藁灰釉は胎から剥がれているが本来は良品	肥前	不明
13号溝 第47図9 図版31	土瓶蓋	口径6.5 最大径10.0 器高4.7	陶器	外面黒褐色の鉄釉　発色焼成良好	摘みと受け部貼り付け	下面露胎		肥前	不明
13号溝 第47図10	皿 5寸皿	口径(10.6) 底径2.5 器高4.0	磁器	透明釉発色良い　良品	削り出し高台　無文	高台露胎で、見込みに蛇の目釉剥ぎ		有田	17世紀後葉 ～18世紀中葉
13号溝 第47図11	青磁皿 中皿	口径(20.0) 底径(5.2) 器高3.9	磁器	全面にぶい黄緑灰色の青磁釉を掛け、畳み付けは釉剥ぎ　見込みは蛇の目釉剥ぎ	型押し成型で、ケズリ出し高台　外面に型押し成型の獣脚がつく 内面は片切り彫りの花弁文	畳付に砂目付着		肥前	17世紀後半
13号溝 第47図12	埦 大埦	口径(14.8)	陶器	淡黄緑灰色の灰釉を内外に薄く掛ける	外面の胴部と内面はナデ、外面胴下位はケズリ　無文	不明	大きさのまばらな粒子を含むざっくりした胎土	不明	不明
13号溝 第47図13	摺鉢	—	陶器	口縁部に内外鉄釉　発色良　焼成良	口縁部肥厚　内面口縁下に単位不明の摺り目が入り、上端はナデ消さない	不明		肥前	17世紀中葉～末
13号溝 第47図14	摺鉢	—	陶器	焼成良 内外に暗紫褐色の鉄釉	口縁部肥厚　内面口縁下に単位不明の摺り目が入り、上端はナデ消し	不明		武雄	18世紀中葉 ～19世紀中葉
13号溝 第47図15	摺鉢	—	陶器	焼成良 内外に暗茶褐色の鉄釉	口縁部肥厚　内面口縁下に単位不明の摺り目が入り、上端はナデ消し	不明		武雄	18世紀中葉 ～19世紀中葉
13号溝 第47図16	摺鉢	—	陶器	口縁部に内外鉄釉だが、発色不良で灰緑色に発色　焼成良	口縁部肥厚　内面口縁下に単位不明の摺り目が入る　口縁下に段あり	不明		肥前	17世紀中葉～末
13号溝 第47図17	摺鉢	口径(31.0)	陶器	口縁部に内外鉄釉　焼成良	口縁部肥厚　内面口縁下に単位不明の摺り目が入る	不明		肥前	17世紀中葉～末
13号溝 第47図18 図版31	蓋 急須蓋	口径6.1 最大径8.3 器高1.9	陶器	緑灰色の灰釉を上面に掛ける	底部の中央に窪みがあるので、中央に工具端を刺して、回転するようにヘラケズリしている	下面露胎		肥前	不明
13号溝 第48図1	染付 小杯	口径7.0 底径2.8 器高3.6	磁器	透明釉焼成良好、呉須焼成発色良好	外面呉須よる雲文か	畳付釉剥ぎで砂目付		肥前	不明
13号溝 第48図2	染付 小杯	口径(7.0) 底径(3.0) 器高3.6	磁器	透明釉焼成良好、呉須焼成発色良好	不明のモチーフがわずかに残る	畳付釉剥ぎ		肥前	不明
13号溝 第48図3	染付皿 小型皿	口径(7.4) 底径(2.4) 器高3.1	磁器	透明釉焼成良好、呉須焼成発色良好	呉須で外面に氷裂文地に菊花文散らし	畳付は釉剥ぎ		有田	不明
13号溝 第48図4	碗 ミニチュア碗	口径(5.0) 底径(2.8) 器高2.8	赤絵	透明釉の赤釉の発色よい	外面は染付で丸文散らしを描きその中に赤絵の花を入れる	畳付釉剥ぎ	19号土坑出土片と接合	肥前	不明
13号溝 第48図5	杯 小杯	口径(5.2) 底径(12) 器高2.5	磁器	透明釉焼成良好、呉須焼成発色良好	高台が極端に小さい　外面に扇中桧垣文を呉須で染付	畳付釉剥ぎ		肥前	不明
13号溝 第48図6	杯	口径(5.8) 底径2.8 器高2.9	磁器	透明釉発色良い　貫入あり	貼り付け高台　無文	畳付釉剥ぎ　砂目付着		肥前	不明
13号溝 第48図7	杯	口径(6.2) 底径2.8 器高5.0	磁器	透明釉発色良い	外面にケズリ痕が残る　貼り付け高台	畳付釉剥ぎ　砂目付着		肥前	17世紀後葉 ～18世紀中葉
13号溝 第48図8	染付 小型碗	口径(8.0) 底径(3.0) 器高4.0	磁器	透明釉焼成良好、呉須焼成発色良好	外面呉須で寿文、見込みに梵字文	畳付釉剥ぎ		肥前	18世紀初頭 ～18世紀前葉
13号溝 第48図9	染付 碗	口径(10.2) 底径4.2 器高5.1	磁器	呉須と透明釉の発色暗い　見込みにひっつきあり	器壁の厚いくらわんか手　呉須で外面コンニャク印判による葉文	畳付釉剥ぎで砂目付		波佐見	18世紀初頭 ～18世紀前葉
13号溝 第48図10	埦	口径(12.6) 底径5.2 器高6.5	陶器	透明釉を厚く掛け、貫入多い発色・焼成は良い	外面胴部に鉄絵の銀杏葉文	畳付釉剥ぎ		瀬戸か	不明
13号溝 第48図11 図版31	染付 碗	口径(11.4) 底径(4.4) 器高6.4	磁器	呉須が流れて透明釉は青みがかる	呉須で外面花文　口縁部内面に幅の広い帯文　見込みは「寿」	畳付釉剥ぎ		肥前	18世紀後葉 ～19世紀初頭
13号溝 第48図12	杯 極小杯	口径(4.9)	磁器	透明釉の発色よいが貫入あり	水引き痕があるので型押し成型ではない	畳付釉剥ぎ	歪みがあるので傾き不正確	肥前	不明
13号溝 第48図13	杯 小杯	口径(4.8) 底径2.9 器高2.5	磁器	透明釉の発色よい	水引き痕があるので型押し成型ではない	畳付釉剥ぎ		肥前	不明
13号溝 第48図14	染付 小皿	口径(13.6) 底径(8.6) 器高2.6	磁器	透明釉・呉須ともに発色良い	外面崩れた唐草文、内面胴部は墨弾きでよろけ縞文、見込みに手描き五弁花文	外底にハリ目が融着している　畳付釉剥ぎ		肥前	不明

表19　1次調査出土土器・陶磁器・瓦観察表19

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm,g) ()は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見		
							特記事項	推定産地	推定年代
13号溝 第48図15	皿 変形皿	口径(13.0) 底径(8.6) 器高2.6	磁器	透明釉焼成発色良い	型押し成型による花弁口縁で、内面には型押しによる花文様が陽刻されている	不明		肥前	不明
13号溝 第48図16	染付 小皿	口径(20.0) 底径(12.0) 器高5.0	磁器	透明釉・呉須ともに発色良い	外面唐草文、内面胴部は笹文か	畳付釉剝ぎ		肥前	17世紀後葉 ～18世紀前葉
13号溝 第48図17	染付 仏花瓶	口径1.7	磁器	透明釉・呉須ともに発色良い 貫入あり	外面口縁部は蛸唐草	不明		波佐見	不明
13号溝 第48図18	壺 瘦壺か	口径(10.5)	磁器	透明釉の発色よい　肩部内面は露胎だが、口縁部は全面施釉なので、口縁部施釉下後体部と接合したか	型押し成型の平面正方形口縁部と胴部を接合	不明	断面に膠と思われるものがあるので接合している	肥前	不明
13号溝 第48図19	右軒桟瓦 小丸瓦当	面径7.7	瓦質		型から外して縁をナデている　顎部分は接合のための凹線が入る　燻はなく黒灰色　焼成良好　隆起した巴文	不明	瓦当にキラコあり	在地	不明
13号溝 第48図20	丸瓦	幅(14.0)	瓦質		凹面に網目　発色良好　暗青灰色　凸面は丁寧なナデ仕上げで成型痕が観察できない	不明	幅狭い丸瓦	在地	不明
13号溝 第48図21	瓦 土師質瓦	—	土師質土器		側面はケズリ後ナデ　凸面は目の細かいハケ　凹面は斜めのオサエの上にハケ		凸面黄橙色　凹面は器面摩滅で灰白色が露出	在地	不明
13号溝 第48図22	軒平瓦 瓦当	瓦当厚4.3 厚さ1.6	瓦質		三葉文を主文とする唐草文だが分類不能　型から外して縁をナデている　顎部分は接合のための凹線が入る　燻はなく青灰色　焼成良好	不明	銀化している	在地	不明
13号溝 第48図23 図版48	平瓦転用窯道具	長さ9.5 幅6.5 厚さ1.8	窯道具		凸面側段があるが意図的なものかも　側面が最も燃えている	不明	土師質瓦ではないが火を受けて橙色化している	在地	不明
13号溝 第48図24 図版48	丸瓦転用窯道具	厚さ2.5	瓦質		凸面ナデ　凹面にスダレ当て具痕が残る　内外とも赤変しているが、下端は黒変している			在地	不明
13号溝 第48図25 図版48	棒状土製品	幅3.2 厚さ2.8	窯道具		側面が最も火を受けている	不明	火を受けて橙色化している	在地	不明
13号溝 第48図26 図版31	土人形 土馬	高さ4.1 幅3.3 厚さ6.0	土製品		鞍はないが平坦面を作っている　手捏ね成型	にぶい黄灰白色～にぶい淡暗灰色	下面に切れ目があるので、折り重ねたものか	在地	不明
14号溝 第49図1	鍋	口径(40.0)	土師質土器		外面オサエ列とハケ　口縁部はナデ　内面ヨコハケ　無文	不明	内外暗黒灰褐色を呈する	在地	不明
14号溝 第49図2	染付 碗	口径(9.8)	磁器	透明釉・呉須ともに発色良い 貫入あり	呉須で外面花唐草文	不明		肥前	18世紀前葉
15号溝 第49図3	鍋	—	瓦質土器		内面ナデ、外面積み上げ痕残る　摺り目なし		外面煤付き	在地	不明
15号溝 第49図4	埦	口径(11.9)	陶器	内外緑灰色の灰釉掛け	口縁部は外反　無文	不明		肥前	17世紀代
15号溝 第49図5	皿 小皿	口径(6.0) 底径4.4 器高3.9	陶器	淡暗緑灰色の灰釉を底部以外全面掛け　焼成良好、釉の発色は底部が不良	高台削り出し　無文	見込みに蛇の目釉剝ぎ　底部露胎		肥前	17世紀末 ～18世紀中葉
15号溝 第49図6	皿 小皿	底径3.3	陶器	緑灰色の灰釉を内面から外面口縁部まで掛ける　釉発色良い 焼成良	削り出し高台	底部露胎　見込みに胎土目跡あり		肥前	不明
15号溝 第49図7	皿 中皿	底径(8.2)	陶器	外面は緑灰色の灰釉を底部以外に掛け、内面は透明度の高い灰釉掛け　焼成・発色良好	内面白化粧土櫛描き取り後、白化粧土を花弁形に掻き取り、その中に白化粧土で花弁を描き、緑彩の灰釉で鉄絵の井字文を上掛け　高台削り出し	底部露胎		肥前	不明
15号溝 第49図8	椀	口径(11.0) 底径(5.0) 器高7.2	磁器	透明釉は呉須が流れて青みがかっている　呉須は発色良い 貫入あり	削り出し高台　呉須で外面花文、内面口縁部は2重界線	畳付釉剝ぎ　砂目付着		肥前	17世紀中葉 ～後葉
15号溝 第49図9 図版47	土鈴	高さ8.5 幅7.0 厚さ7.0	土師質土器		底部は平たく、内面は3段のナデ窪み　外面ナデ後、透かし孔を開けている　焼成良好で内外黄灰白色	不明	型合わせでない	在地	不明
15号溝下位 第50図1 図版31	皿 極小皿	口径6.1 底径4.8 器高1.6	土師器		底部糸切り　板状圧痕あり　外面1段ナデ　内面は見込みがハケ状工具による螺旋状ナデで、体部は1段ナデ内外黄灰白色		2号大溝遺構から注記変更	在地	不明
15号溝下位 第50図2 図版31	皿 極小皿	口径(6.6) 器高1.3	土師器		底部糸切り　板状圧痕の端部から外が歪む　内外面1段ナデ　見込みは高く残る　内外黄灰白色を呈し、変色なし	不明	見込みの処理の仕方がほかと異なる　2号大溝遺構から注記変更	在地	不明
15号溝下位 第50図3 図版31	皿 極小皿	口径6.5 底径4.5 器高2.1	土師器		底部糸切り　板状圧痕は見られない　内外2段ナデ　見込みは螺旋状ナデ内外灰白色を呈し、変色なし		2号大溝遺構から注記変更	在地	不明

表 20　1 次調査出土土器・陶磁器・瓦観察表 20

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm,g) ( )は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見		
							特記事項	推定産地	推定年代
15号溝下位 第50図4 図版31	皿 極小皿	口径6.6 底径4.1 器高2.3	土師器		底部糸切り 板状圧痕なし 外面1段ナデ 内面は2段ナデで見込みがハケ状工具による螺旋状ナデ	不明	2号大溝遺構から注記変更	在地	不明
15号溝下位 第50図5 図版31	皿 極小皿	口径6.8 底径4.3 器高2.0	土師器		底部糸切り 板状圧痕は見られない 内外2段ナデ 見込みは螺旋状ナデ 内外黄灰白色を呈し、変色なし	不明	2号大溝遺構から注記変更	在地	不明
15号溝下位 第50図6	皿 小皿	口径(6.3) 底径4.4 器高1.7	土師器		底部糸切り 板状圧痕なし 内面回転ナデ 内外黄灰白色を呈し、変色なし		2号大溝遺構から注記変更	在地	不明
15号溝下位 第50図7	皿 小皿	口径(9.0) 底径(6.0) 器高1.6	土師器		底部糸切り 板状圧痕部から底部が大きく歪んでいる 内面回転ナデ 内外黄灰白色を呈し、変色なし		2号大溝遺構から注記変更	在地	不明
15号溝下位 第50図8	皿 極小皿	口径9.2 底径6.7 器高2.0	土師器		底部糸切り 板状圧痕部から底部が大きく歪んでいる 内面回転ナデ 内外黄灰白色を呈し、変色なし		2号大溝遺構から注記変更	在地	不明
15号溝下位 第50図9	埦	底径4.0	陶器	暗緑灰色の灰釉を内面から外面胴下位に掛ける 発色・焼成良好	削り出し高台 無文	底部露胎	2号大溝遺構から注記変更	肥前か	不明
15号溝下位 第50図10	埦	最大径10.0 底径5.6	陶器	内面黒釉、外面胴中位まで灰白色の灰釉	削り出し高台 無文	底部露胎		武雄	不明
15号溝下位 第50図11	鉢	底径7.6	陶器	内面から外面胴下位まで灰白色の灰釉を掛けた後、見込みに暗灰緑釉による流し掛け	削り出し高台			武雄か	不明
15号溝下位 第50図12	軒平瓦	瓦当厚4.5 厚さ1.9	瓦質		三葉文A1b類 各面丁寧なナデ仕上げで成型痕が観察できない 発色良好 黒灰色			在地	不明
15号溝下位 第50図13 図版49	円盤型製品	径3.5～3.8 厚さ0.8	土師質土器		底部糸切りの皿底部を転用 円形で側面は平滑にしている		内外黄灰白色を呈し、底部側の面がやや黒変	在地	不明
16号溝 第51図1 図版31	極小皿	口径6.3 底径4.4 器高2.9	土師器		底部糸切り、外面2段ナデ、内面1段螺旋ナデ 内外黄白色で変色なし	外底に粘土粒あり		在地	不明
16号溝 第51図2 図版31	小皿 灯明受皿	口径(8.4) 底径(4.8) 器高2.2	土師器		底部糸切り口縁部が玉縁状で口唇部が尖っている 内外ナデ 底面に釘穴の穿孔あり		内外にぶい黄白色で変色や油の痕跡がない	在地	不明
16号溝 第51図3	鉢 焙烙か	口径(17.2) 底径(13.1) 器高3.7	土師質土器		外面タテハケ 内面2段ナデ 外底はハケ 内外にぶい灰色を呈する	不明	第9図4とは別個体 外面に煤付は使用のためか	在地	不明
16号溝 第51図4 図版31	鉢 焙烙	－	土師質土器		口縁部外面肥厚だが、肥厚部の下位の接合痕は残している 体部上位は丁寧なナデで、下位は未調整 口唇部ナデ窪み 内面は丁寧なヨコナデ	本来にぶい黄白灰色だが、外面は黒褐色に煤付きで、内面は底部の変色が著しい		在地	不明
16号溝 第51図5	器種不明	口径(2.0)	瓦質土器		口縁部肥厚 断面は橙灰褐色だが、外面は黒灰色 外面に透し穴と花文スタンプが交互に入る	不明		不明	不明
16号溝 第51図6	蓋 火消し壺蓋	口径(21.0)	土師質土器		摘み部は接合 内外ナデ 本来にぶい灰白色だが、外面はにぶい灰白褐色	内面は黒灰色に変色している	第51図8とセットか	在地	不明
16号溝 第51図7	壺 火消し壺蓋	口径11.2 底径12.8 器高11.8	土師質土器		外面はナデ、内面はオサエが残る 底部はナデで上げ底 底部のみ本来のにぶい灰白色で、外面はにぶい暗灰白色	外面口縁部から内面は黒灰色に変色している	第51図7とセットか	在地	不明
16号溝 第51図8	風炉	口径(18.8) 最大径(24.2)	土師質土器		型押し成型か 外面単位不明のミガキ、内面ナデ 赤漆全面塗布 焼成良 黒色磨研の上に赤漆を施す	不明		在地	不明
16号溝 第51図9	蓋 急須蓋	最大径7.0	炻器		摘み貼り付け後、穿孔 受け部貼り付け 無文	不明		不明	不明
16号溝 第51図10 図版31	皿 小皿	口径8.0 底径4.0 器高2.3	陶器	茶褐色の鉄釉を内面から外面口縁部に掛ける 釉の発色・焼成良好	底部糸切り	底部露胎	完形	肥前	不明
16号溝 第51図11 図版31	埦 京焼風筒形椀	口径8.0 底径3.9 器高5.1	陶器	灰釉発色良く焼成もよいが貫入多い 鉄絵は発色不良	高台小さく削り出し 無文 外面鉄絵の山水文、その後淡黄灰緑色の灰釉を高台以外に掛ける	底部露胎	完形	肥前	不明
16号溝 第51図12	埦 京焼風筒形椀	口径(8.4) 底径(4.0) 器高4.9	陶器	淡黄灰色の灰釉 焼成良好	高台削り出し 外面竹笹文の有無は欠損のため不明	高台露胎		肥前	不明
16号溝 第51図13 図版31	色絵小型埦 京焼風	口径6.3 底径2.0	陶器	透明度の高い灰釉を底部以外に掛け 焼成・発色も良好 良品	削り出し高台 赤・青・緑彩で外面に紅葉文	底部露胎		肥前	18世紀第2四半期
16号溝 第51図14	埦 京焼風	口径(7.6) 底径2.8 器高4.5	陶器	淡黄灰緑色の灰釉を高台以外に掛けた後、外面口縁部に緑灰色の灰釉で葉文を描いた後、葉脈部分は描き取り、中央部分は青彩を使用 高台小さく削り出し		痕跡なし 高台露胎	焼成やや強すぎのため変色している	肥前	18世紀第2四半期
16号溝 第51図15	埦	口径(9.0) 底径4.2 器高5.3	陶器	内外全面飴釉 発色良好	高台削り出し	畳付は釉剥ぎ アルミナ付		肥前	18世紀第2四半期
16号溝 第51図16 図版31	椀 把手付碗	口径8.7 底径4.4 器高5.6	陶器	全面茶褐色の鉄釉掛け 釉発色・焼成良好	手捏ねの把手貼り付け	畳付は釉剥ぎ	把手は2面をナデで平坦にし、側面を丸くしている	肥前	18世紀第2四半期

表 21　1 次調査出土土器・陶磁器・瓦観察表 21

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm,g) ( )は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見		
							特記事項	推定産地	推定年代
16号溝 第51図17	色絵埦 京焼風	口径(9.6)	陶器	透明度の高い灰釉掛け　焼成強く、赤彩の発色も悪い	赤と緑で外面に菊文	不明		肥前	18世紀第2四半期
16号溝 第51図18	色絵埦 京焼風	底径3.8	陶器	淡黄灰色の灰釉　焼成良好	高台削り出し　鉄絵と青で見込みに花葉文	高台露胎		肥前	18世紀第2四半期
16号溝 第51図19	埦 京焼風腰折埦	口径9.2 底径3.7	陶器	淡黄灰色の灰釉を高台以外に掛けた後、外面口縁部に緑灰色の灰釉と鉄絵で竹笹文上掛け　発色焼成良好　高台削り出し		高台露胎		肥前	18世紀中葉
16号溝 第51図20 図版31	埦 京焼風腰折埦	口径9.4 底径3.9 器高4.9	陶器	淡黄灰色の灰釉　焼成良好	高台削り出し　外面鉄絵と緑彩の灰釉の竹笹文を上書き	高台露胎		肥前	18世紀中葉
16号溝 第51図21	埦 京焼風腰折埦	口径(9.8) 底径3.7 器高4.8	陶器	淡黄灰色の灰釉を高台以外に掛けた後、外面口縁部に緑灰色の灰釉と鉄絵で竹笹文上掛け　発色焼成良好　高台削り出し		高台露胎		肥前	18世紀中葉
16号溝 第51図22	埦 京焼風	口径10.2 底径3.8 器高4.5	陶器	淡黄灰色の灰釉　焼成良好　高台露胎	高台削り出し　鉄絵で見込みに崩れた山水文	痕跡なし		肥前	18世紀中葉
16号溝 第51図23	埦	口径(10.0) 底径4.3 器高5.3	陶器	茶褐色の鉄釉を全面掛け	高台貼り付け　胎が黒灰色で鉄釉の色合いから肥前だろう　外面口縁下にカキ目	畳付は釉剥ぎ		肥前	不明
16号溝 第51図24 図版31	皿 小皿	口径11.0 底径4.2 器高4.3	陶器	茶褐色の鉄釉を内外に掛る	貼り付け高台　無文	畳付釉剝ぎ	釘書きで外底に「紅」と入る	肥前	不明
16号溝 第51図25	皿 灯明受皿	底径3.4	陶器	黒茶色の鉄釉　焼成良好　高台露胎	見込みは螺旋状のケズリ　受け部は積み上げ部で欠損している　無文	受け部の底部側に重ね焼き痕あり		武雄	不明
16号溝 第51図26	瓶	最大径9.8 底径3.6	陶器	黄灰色の灰釉　焼成良好	高台削り出し　無文　外面の鉄釉の文様は欠損	底部露胎	腰部が張り出すタイプ	肥前	18世紀後半
16号溝 第51図27	瓶 京焼風	最大径13.0 底径8.0	陶器	淡黄灰色の灰釉を高台以外に掛けた後、外面口縁部に緑灰色の灰釉と鉄絵で竹笹文上掛け　発色焼成良好　高台削り出し		畳付にアルミナ塗布		肥前	18世紀代か
16号溝 第51図28 図版31	仏飯器	口径7.6 底径3.7 器高5.5	陶器	飴釉を内面から外面皿部まで掛ける　発色焼成良好	裾は削り出しにより上げ底	裾部露胎	光沢のある飴釉で良品	肥前	不明
16号溝 第52図1	皿 小皿	口径8.6 底径3.9 器高2.5	陶器	鉄釉を内面から外面口縁部まで掛ける	外底糸切り	底部露胎		肥前	不明
16号溝 第52図2	皿 変形小型皿	口径9.0 底径9.2	陶器	見込みに二重網目文を呉須で描いたのち淡緑灰色の透明度の高い灰釉掛け　底部削り出しで碁笥底　口縁部は指オサエによる花弁口縁成型		底部削り出しによる釉剝ぎ		瀬戸か	不明
16号溝 第52図3	皿	底径6.3	陶器	内面に白化粧土をハケ掛けし、その上に透明度の高い灰釉を掛ける　高台削り出し　釉発色良　焼成良		見込みに蛇の目釉剝ぎ　高台露胎		肥前	17世紀後半
16号溝 第52図4	皿 中皿	口径(20.6) 底径6.8 器高6.6	陶器	外面は胴部に1周、内面に白化粧土を波状に2周横にハケ掛けし、その上に透明度の高い灰釉を掛け、緑色の灰釉で葉文を描く　高台削り出し　釉発色良　焼成良		底部露胎　見込みに蛇の目釉剝ぎ	外底に「薬調合用」と楷書で墨書している	肥前	不明
16号溝 第52図5	皿	口径(18.2) 底径6.1 器高4.5	陶器	内面に白化粧土をハケ掛けし、その上に透明度の高い灰釉を掛ける　高台削り出し　釉発色良　焼成良		見込みに蛇の目釉剝ぎ　底部露胎		肥前	17世紀末
16号溝 第52図6	鉢 高台付鉢か	口径(22.0)	陶器	外面はケズリ痕に釉が掛かってカキ目のように見え、内面は白化粧土の文様らしいものがある　最後に内外透明度の高い灰釉掛け　発色焼成良好		不明		肥前	不明
16号溝 第52図7	壺	口径(9.0)	磁器	全面に白磁釉を掛けて後、口唇部から内面口縁部を釉剝ぎ				有田	不明
16号溝 第52図8 図版31	蓋 土瓶蓋	口径(7.0) 最大径(9.6) 器高3.7	陶器	黄灰色の灰釉　発色・焼成良好	摘み部・受け部は接合　上面に鉄絵と緑色の灰釉で梅樹文を描く	下面釉剝ぎ	受け部は茶渋がつく	肥前	17世紀末
16号溝 第52図9	急須	口径8.0 底径5.3 器高8.3	陶器	透明度の高い灰釉を外面に掛ける　釉発色良く貫入多い　焼成良	型押し成型の部材を組み合わせている　外面胴部に鉄絵があるがモチーフ不明	底部露胎　口縁部の受け部は釉剝ぎ	底部には粘土豆状の脚3つ　注口部断面U字形	肥前	不明
16号溝 第53図1	摺鉢	–	陶器	口縁部に内外鉄釉焼成良釉発色やや不良	口縁部肥厚　内面口縁下に摺り目が入り、上端で2単位が交差する	不明	小片	武雄	17世紀中葉～末
16号溝 第53図2	摺鉢	–	陶器	口縁部に内外黒茶褐色の鉄釉掛け発色やや不良　焼成良	口縁部肥厚　内面口縁下に浅い摺り目が入り別の擦り目単位と交差している	不明		武雄	17世紀中葉～末
16号溝 第53図3	摺鉢	–	陶器	口縁部に内外黒茶褐色の鉄釉焼成良	口縁部肥厚後、2条の凹線を入れる　摺り目は欠損のため残っていない	不明		武雄	17世紀中葉～末
16号溝 第53図4	摺鉢	–	陶器	口縁部に内外鉄釉焼成良	口縁部肥厚　内面口縁下に12本単位の摺り目が入り、上端で2単位が交差する	不明		武雄	17世紀中葉～末

表 22　1 次調査出土土器・陶磁器・瓦観察表 22

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm,g) ( )は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見		
							特記事項	推定産地	推定年代
16号溝 第53図5	摺鉢	—	陶器	口縁部に内外鉄釉だが、発色不良で灰緑色に発色　焼成良	口縁部肥厚　内面口縁下に10本単位の摺り目が入り、上端で2単位が交差する	不明		武雄	17世紀中葉～末
16号溝 第53図6	摺鉢	—	陶器	口縁部に内外黒褐色の鉄釉 焼成良	口縁部肥厚　内面口縁下に単位不明の摺り目が入り、上端はナデ消し	不明		武雄	17世紀中葉～末
16号溝 第53図7	鉢	口径34.7 底径15.5 器高12.2	陶器	削り出し高台　内面白化粧土描き取りにより波状文と縦横の縞文を描き、内外口縁部に黒褐色の鉄釉を掛ける　釉発色良　焼成良		胴部以下露胎		武雄	17世紀末 ～18世紀中葉
16号溝 第53図8	摺鉢	口径(29.0)	陶器	なし　焼き締め	口縁部肥厚　外面の沈線は型押し成型か　内面口縁下に9本単位の深い摺り目が入る　焼成良	不明		堺か	18世紀代
16号溝 第53図9	甕 半胴甕	口径(39.0)	陶器	頸部に露胎部があり、それ以外は内外黄灰褐色の鉄釉が厚く掛かる	口縁部T字に肥厚　胴内面は格子目タタキあて具痕残り、外面はナデ消し	口唇部に目跡なし		肥前	18世紀代
16号溝 第54図1	染付 碗	口径(7.6) 底径(2.6) 器高4.0	磁器	透明釉呉須発色良好　焼成良好	高台小さい　呉須　外面は氷裂文地に菊花散し文	畳付は釉剥ぎ		有田	18世紀後葉
16号溝 第54図2	染付 小型蕎麦猪口	口径(7.7) 底径(2.8) 器高4.0	磁器	透明釉呉須発色良好　焼成良好	高台小さい　呉須　外面は氷裂文地に菊花散し文	畳付は釉剥ぎ	第54図2・21・24は揃い	有田	18世紀後葉
16号溝 第54図3	染付 碗	口径(7.6) 底径(2.4) 器高4.05	磁器	透明釉呉須発色良好　焼成良好	高台小さい　呉須　外面は氷裂文地に菊花散し文	畳付は釉剥ぎ		有田	18世紀後葉
16号溝 第54図4	染付 碗	口径(7.4) 底径(2.4) 器高4.0	磁器	透明釉呉須発色良好　焼成良好	高台小さい　呉須　外面は氷裂文地に菊花散し文	畳付は釉剥ぎ		有田	18世紀後葉
16号溝 第54図5	染付 小型碗	口径8.4	磁器	透明釉発色良好　呉須は発色不良	外面に呉須で雨降り文	不明		有田	18世紀代
16号溝 第54図6	染付 小型碗	口径8.1 底径3.1 器高4.5	磁器	透明釉呉須発色良好　焼成良好	削り出し高台　外面に呉須で松竹梅文	畳付は釉剥ぎ		有田	18世紀前葉
16号溝 第54図7	染付 小型碗	口径8.4 底径3.4 器高4.5	磁器	透明釉の発色不良	貼り付け高台　外面に呉須で太い花唐草文	畳付は釉剥ぎ	第56図8に近い	有田	18世紀前葉
16号溝 第54図8	碗 小型碗	口径(5.9) 底径(2.4) 器高2.5	磁器	内外透明釉掛け　発色良好	高台貼り付け　無文	畳付は釉剥ぎ		有田	18世紀前葉
16号溝 第54図9	染付 碗	口径(8.7) 底径3.3 器高3.9	磁器	透明釉・呉須の発色良好	削り出し高台　外面に呉須による山木文	畳付釉剝ぎ		有田	18世紀前葉
16号溝 第54図10	染付 碗	底径3.9	磁器	呉須と透明釉の発色暗い　見込みにひっつきあり	呉須で外面不明植物文　外底は崩れた「大明」	畳付釉剝ぎで砂目付		波佐見	18世紀第3四半期
16号溝 第54図11	色絵 杯	口径8.8 底径3.6 器高4.0	磁器	透明釉発色良好	貼り付け高台　外面に染付による茎・葉に赤彩で花・清の子供を上絵付け　見込みにも赤彩の花文が入る	畳付釉剝ぎ	見込みに箸傷が多く残る	肥前	18世紀前葉
16号溝 第54図12	赤絵 小型碗か	口径(8.8) 底径(3.6)	磁器	透明釉発色良好	貼り付け高台　染付による茎・葉に、赤で外面花と茎文、緑彩で葉文を上絵付け	畳付は釉剥ぎ		有田	18世紀前葉
16号溝 第54図13	赤絵 小型碗か	口径(9.4)	磁器	透明釉発色良好	赤で外面網目文、内面口縁部鋸歯文口唇部にも赤塗布	不明	蓋の可能性もある	有田	不明
16号溝 第54図14	染付	口径(5.0) 底径(4.2) 器高5.4	磁器	透明釉・呉須の発色良好	削り出し高台　外面に呉須で若松文	畳付釉剝ぎ		有田	18世紀前葉
16号溝 第54図15	染付 碗	底径(5.0)	磁器	透明釉・呉須の発色良好	外面に呉須による菊花文、見込みに不明モチーフ	畳付釉剝ぎ	裏銘は「鶴亀□□田□」	有田	不明
16号溝 第54図16	染付 小型鉢	口径(9.8) 底径(4.5) 器高5.7	磁器	透明釉呉須焼成発色良好　良品	削り出し高台　口縁外反後跳ね上げ　外面蝶・草文　見込みに手描き五弁花文　外底に角福　口唇部に口錆	畳付は釉剥ぎ		有田	18世紀第3四半期
16号溝 第54図17	青磁掛け分け碗	口径10.6 底径5.7 器高4.0	磁器	釉薬・呉須の発色、焼成良好 外面青磁釉	貼り付け高台　内面口縁部四方襷文帯 見込みに花文	畳付は釉剥ぎ		有田	18世紀中葉 ～後葉
16号溝 第54図18	染付 筒形碗	口径(7.6) 底径4.2 器高6.2	磁器	呉須は発色良、透明釉発色良	貼り付け高台　外面胴部に山水文、胴下位に七宝文、内面口縁部四方襷文帯 見込みに手描き五弁花文	畳付釉剝ぎ		有田	18世紀中葉 ～後葉
16号溝 第54図19	赤絵 杯	口径(6.0) 底径2.4 器高2.2	磁器	透明釉発色良好	外面は花と蝶　花は葉の部分に別色を使ったかも　内面はモチーフ不明	畳付釉剝ぎ		肥前	18世紀前葉
16号溝 第54図20	碗 ミニチュア	口径(3.2) 底径(1.6) 器高2.5	磁器	内外飴釉掛け　発色良好	高台貼り付け　無文	畳付は釉剥ぎ		有田	不明

表 23　1 次調査出土土器・陶磁器・瓦観察表 23

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm,g) ( )は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見		
							特記事項	推定産地	推定年代
16号溝 第54図21	小杯 小型蕎麦猪口	口径(4.4) 底径(2.4) 器高2.7	磁器	透明釉発色良好	高台削り出し　無文	畳付は釉剥ぎ	第54図2・21・24は揃い	有田	不明
16号溝 第54図22	染付 小型碗	口径(5.4) 底径2.5	磁器	透明釉の発色不良でやや暗い	呉須　外面に点文と界線	畳付は釉剥ぎ		有田	不明
16号溝 第54図23	染付 碗	口径(8.0) 底径3.4 器高4.4	磁器	呉須と透明釉の発色良い	呉須で外面笹文　厚手のくわらんか手	畳付釉剝ぎ		波佐見	不明
16号溝 第54図24	小杯 小型蕎麦猪口	口径(4.5) 底径(2.4) 器高2.5	磁器	透明釉発色やや悪い	高台削り出し　無文	畳付は釉剥ぎ	第54図2・21・24は揃い	有田	不明
16号溝 第54図25	杯 小型蕎麦猪口	口径(6.3) 底径4.0 器高3.9	磁器	透明釉発色良好	高台削り出し　無文	畳付は釉剥ぎ	第54図21・24より大きい	有田	不明
16号溝 第54図26	染付皿 小型皿	口径(10.4)	磁器	透明釉の発色不良で白濁	1次21号溝出土の第60図14と揃い　呉須で外面唐草文内面墨弾きで半菊文と渦文	不明	透明釉が薄いので、内面文様は呉須部分が盛り上がり、文様部分は窪んでいる	波佐見	不明
16号溝 第54図27	皿 5寸皿	口径14.2 底径7.6 器高3.0	磁器	透明釉発色良い	削り出し高台　外面崩れた唐草文、内面胴部雪輪文と葉文、見込みにコンニャク印判による五弁花文	高台露胎で、見込みに蛇の目釉剝ぎ		有田	17世紀後葉 ～18世紀中葉
16号溝 第54図28	染付 皿 5寸皿	口径13.0 底径4.4 器高4.0	磁器	透明釉呉須焼成発色良好	見込みに蛇ノ目釉剝ぎ　粘土塊付着　呉須で二重網目文	畳付は釉剥ぎ　砂目付		波佐見	18世紀中葉 ～19世紀初頭
16号溝 第54図29 図版32	青磁 小皿	口径9.7 底径5.7 器高2.1	磁器	青磁釉の発色・焼成良好	貼り付け高台　無文	畳付釉剝ぎ	完形	肥前	不明
16号溝 第54図30	染付 段重	口径19.0 底径7.8 器高7.1	磁器	透明釉発色良好	呉須　外面胴部は花唐草文地に窓内に花文	口唇部と畳付は釉剥ぎ　畳付に砂目		有田	不明
16号溝 第54図31	白磁 瓶 鬢付油壺	底径4.7	磁器	透明釉内外掛け　発色良好	無文	底部は釉剥ぎ		有田	不明
16号溝 第54図32	白磁 瓶 鬢付油壺	口径2.6	磁器	透明釉外面から内面口縁部に掛け　発色良好	無文　内面ケズリ　丁寧なナデ仕上げの良品	不明		有田	17世紀後半
16号溝 第54図33	瓶 肥前	底径6.9	青磁	緑灰色の青磁釉を外面掛け　発色良好	高台貼り付け　見込みはケズリ　無文	畳付は釉剥ぎ			18世紀代
16号溝 第55図1	軒丸瓦 瓦当	瓦当面径16.8	瓦質		A4類　型から外して縁をナデている　燻はなく青灰色　焼成良好	不明		在地	不明
16号溝 第55図2	軒丸瓦	瓦当面径15.6 厚さ1.8	瓦質		A3類　瓦当面外縁ナデ　凸面は一部にミガキ　凹面は蓆痕が残る　黒灰色で光沢はない　焼成良好	瓦当面は黒化が弱いので下にしたか	片端に漆喰残り、反対は漆喰剥がれの器面荒れ	在地	不明
16号溝 第55図3	丸瓦	先端幅13.3 玉縁端幅13.8 厚さ2.3	瓦質		先端部分を大きく面取り　凹面はスダレ痕ケズリ　穿孔あり　発色良好　黒灰色　凸面にV字形のスタンプあり	不明	第56図3とセットか	在地	不明
16号溝 第55図4 図版31	軒丸瓦 瓦当欠損	基部側幅14.6 厚さ2.3	瓦質		凸面は縦ナデで、片端はナデが入っていない　凹面は蓆痕が残る　端部はケズリ重厚　黒灰色で光沢はない	凸面は黒く、凹面は青灰色なので凹面が下か	釘穴の周囲に擦れた痕跡があり、釘隠しがあったか	在地	不明
16号溝 第56図1	角瓦	幅(26.4) 瓦当厚4.0	瓦質		三葉文B4類　型から外して縁をナデている 燻はなく灰黒色　焼成良好	不明		在地	不明
16号溝 第56図2	井戸枠か	－	瓦質土器		受け部のある端部で径が大きい　受け部に擦れた痕跡はないが内面は摩滅している　焼成やや不良で胎中央黒灰色　凸面は重ね部と肥厚部でハケの方向が異なる　凹面は短いハケ		凹面が青灰色、凸面が黒灰色なので、凹面を接地するか重ねて焼いたもの	在地	不明
16号溝 第56図3	平瓦	幅18.7 厚さ1.7	瓦質		型から外して縁をナデている　燻はなく灰黒色　焼成良好　凹面にV字形のスタンプあり	不明	第55図3は第56図3はセットか　凸面が摩滅	在地	不明
16号溝 第56図4 図版47	土人形 騎人	長さ4.3 幅4.9 厚さ2.0	土製品		土馬の背中に貼り付けていたもので、手捏ね成型　目口は刺突で表現	淡黄橙白色		在地	不明
16号溝 第56図5	塊底部転用円盤形製品 図版49	径4.3 厚さ1.5	陶器	淡灰白色の透明度の高い灰釉焼成良好	無文　高台削り出し　さっくりした胎土で肥前だろう	畳付は釉剥ぎ　見込みに胎土目跡4あり		肥前	不明
16号溝 第56図6 図版48	管状土錘	長さ3.8 最大径1.5 重量4.88	土製品		片側の小口部は平坦だが、片側は芯棒に擦りつけて成型している　淡橙白色を呈する	完形		在地	不明
17号溝 第56図7	塊	底径4.5	陶器	淡灰白色の透明度の高い灰釉焼成良好　高台露胎	高台削り出し　無文	痕跡なし	さっくりした胎土なので肥前だろう	肥前	不明

表 24　1 次調査出土土器・陶磁器・瓦観察表 24

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm,g) ( )は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見		
							特記事項	推定産地	推定年代
17号溝1層 第56図8	染付 小型碗	底径4.2	磁器	透明釉の発色良　良品	貼り付け高台　呉須で外面胴部は崩れた花唐草とコンニャク印判の花文、外底は線の太い渦福	畳付は釉剥ぎ		有田	18世紀前半
18号溝 第56図9	鉢 焙烙	―	土師質土器		口縁部外面肥厚だが、肥厚部の下位の接合痕は残している　口唇部ナデ窪み　外面口縁下はハケとオサエ、胴中位以下は未調整、内面は丁寧なヨコハケ　無文	不明	外面は煤付きで暗灰褐色に変色するが、本来は内面の淡黄橙色	在地	不明
18号溝 第56図10	台付皿	底径6.4	陶器	淡黄灰色の灰釉　焼成良好	高台貼り付け	畳付けと見込みに胎土目跡4あり		肥前	不明
18号溝 第56図11 図版32	瓶 仏花瓶	最大径8.0 底径5.7	陶器	黄灰色の灰釉　焼成良好	高台削り出し　外面に鉄釉と緑の灰釉で竹笹文	畳付釉剝ぎ　アルミナ塗布		肥前	不明
18号溝 第56図12	摺鉢	口径(14.2)	陶器	内外に鉄釉がないので、口縁部に内外鉄釉を施すタイプだろう	底部糸切り内外ナデ　内面口縁下に14本単位の摺り目が入る	外底と見込みに粘土塊痕あり		武雄	17世紀中葉 ～末
18号溝 第56図13 図版32	染付 皿 五寸皿	口径13.5 底径8.4 器高3.9	磁器	呉須・透明釉の発色良	型押し成型により口縁部輪花　呉須で内面見込みに山水文	蛇の目高台	外底に赤で墨書「本口」	有田	19世紀中葉
19号溝西 第57図1	鉢 片口鉢	器高4.3	瓦質土器		外面ハケが部分的に残るが、下位は底部との積み上げ部のオサエが残り、体部もオサエが残る　内面は目の細かい横ハケ	外面黒灰色、内面灰白色なので伏せ焼きか		在地	不明
19号溝西 第57図2	摺鉢	―	陶器	口縁部に内外黒茶褐色の鉄釉掛け　焼成良	口縁部肥厚　内面口縁下に浅い摺り目が入る	不明		武雄	17世紀中葉 ～末
19号溝西 第57図3	青磁 香炉	口径9.8 底径8.0 器高8.0	磁器	緑灰色の青磁釉を外面から内面口縁部まで掛け　発色良好	口縁部を内側に肥厚　内外無文	底部は蛇ノ目高台		肥前	17世紀後葉 ～18世紀中葉
19号溝西 第57図4	染付 小型碗	口径(8.7) 底径3.0 器高4.15	磁器	透明釉・呉須の発色不良	削り出し高台　呉須で外面に花草文	畳付は釉剥ぎ		有田	18世紀初頭 ～前葉
19号溝西 第57図5	白磁 碗	口径10.0	磁器	透明釉の発色良	内外無文	不明		有田	18世紀初頭 ～前葉
19号溝東 第57図6	染付皿 中皿	口径21.4 底径12.4 器高3.3	磁器	透明釉の発色不良で白濁	呉須で外面唐草文、外底「大明年製」、内面花唐草文と扇窓内に瓜文	畳付は釉剥ぎ		有田	18世紀中葉 ～後葉
19号溝西 第57図7	染付皿 小皿	底径(7.3)	磁器	透明釉の発色良　良品	貼り付け高台　呉須で見込みに不明文を地とし、陽刻で水鳥を描く	畳付は釉剥ぎで砂目付き		有田	不明
19号溝東 第57図8	染付皿 中皿	口径27.3 底径15.0 器高5.8	磁器	透明釉の発色良、貫入多いが良品	呉須で外面唐草文、外底「二重格子内に丸福」、内面胴部は4つの区画に互い向いに花唐草文と竹文・若松文、見込みに蕾と花文	畳付は釉剥ぎで砂目付き　釘目4ケ所あり		有田	18世紀中葉 ～後葉
20号溝 第58図1	鉢 火鉢	―	瓦質土器		内外ナデ　内外青灰色　外面に凸帯と板材小口状のスタンプによる不明モチーフ	不明		在地	不明
20号溝 第58図2	埦 小埦	口径7.1 底径3.2 器高3.0	陶器	内面から外面胴部中位に暗茶褐色の鉄釉掛け　発色焼成良好	削り出し高台	底部露胎		武雄	17世紀末 ～18世紀中葉
20号溝 第58図3	埦 小埦	口径3.3 底径3.2 器高3.3	陶器	茶褐色の鉄釉を底部以外に掛けるが、発色不良　焼成良好	高台削り出し　無文	高台露胎だが、畳付に釉が融着		武雄	17世紀末 ～18世紀中葉
20号溝 第58図4 図版32	埦 小埦	口径7.4 底径3.0 器高3.25	陶器	茶褐色の鉄釉を底部以外に掛ける　焼成・発色良好	高台削り出し　無文	高台露胎		武雄	17世紀末 ～18世紀中葉
20号溝 第58図5	埦 腰折埦	口径(10.2) 底径(4.0) 器高5.8	陶器	茶褐色の鉄釉を全面に掛けた後、藁灰釉流し掛け	京焼風タイプの器形　高台削り出し	畳付は釉剥ぎ		肥前か	18世紀第2四半期
20号溝 第58図6 図版32	埦 天目埦	口径(11.6) 底径(4.85)	陶器	飴釉を内面から外面中位まで掛け	高台削り出し中央に沈線の円が入るので京焼風か	底部露胎	胎はざっくりした多孔質で、肥前系かかわからない	不明	不明
20号溝 第58図7	埦 京焼風	口径9.8 底径3.8 器高5.0	陶器	淡黄灰色の灰釉　焼成良好　高台露胎	高台削り出し　外面に鉄絵と緑色の灰釉で竹笹文上書き	畳付釉剝ぎ		肥前	18世紀第2四半期
20号溝 第58図8	埦 京焼風 腰折埦	口径(9.3) 底径1.9 器高4.8	陶器	淡黄灰色の灰釉　焼成良好	高台削り出し　外面に鉄絵で竹笹文上書き	高台露胎		肥前	18世紀第2四半期
20号溝 第58図9	埦 京焼風	口径(10.2) 底径(5.8) 器高4.4	陶器	淡黄灰色の灰釉が発色不良で暗く、貫入多い　焼成強い	高台削り出し　外面に鉄絵で竹笹文上書き	高台露胎		肥前	18世紀第2四半期
20号溝 第58図10 図版32	灯明受皿	口径5.8 底径4.5 器高3.5	陶器	暗黒茶色の鉄釉　焼成良好　高台露胎	見込みは螺旋状のケズリ　受け部は別作りで接合　外底糸切り	受け部の口縁にアルミナ付着　外底に粘土粒なし		武雄	不明

表 25　1 次調査出土土器・陶磁器・瓦観察表 25

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm,g) ( )は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見		
							特記事項	推定産地	推定年代
20号溝 第58図11 図版32	灯明受皿	口径6.4 底径4.0 器高3.9	陶器	発色不良で暗黒茶色の鉄釉 焼成良好　高台露胎	見込みは螺旋状のケズリ　受け部は別作りで接合　外底糸切り	受け部の口縁にアルミナ付着　外底に粘土粒あり		武雄	不明
20号溝 第58図12 図版32	皿 小型皿	口径8.5 底径3.6 器高2.5	陶器	暗黒茶色の鉄釉を内面から外面口縁部に塗布　焼成良好	外底糸切り	粘土粒不明		武雄	不明
20号溝 第58図13	摺鉢	－	陶器	内外鉄釉　焼成良、釉発色不良	口縁部外反、口縁下に突帯　内面の摺り目欠損部のため単位不明	不明	マーブル手の胎土	武雄か	17世紀末 ～18世紀中葉
20号溝 第58図14	摺鉢	－	陶器	内外鉄釉　焼成良、釉発色良い	口縁部内面側に肥厚　内面の摺り目欠損部のため不明	不明		肥前	17世紀前葉
20号溝 第58図15	摺鉢	－	陶器	内外鉄釉　焼成良、釉発色良い	口縁部内面側に肥厚　内面の摺り目欠損部のため不明	不明		武雄	17世紀中葉～末
20号溝 第58図16	摺鉢	－	陶器	なし　焼き締め	口縁部肥厚　外面に沈線2条　内面口縁下に単位不明の深い摺り目が入る　焼成良	不明		高取か	17世紀後半
20号溝＋21号溝 第58図17	摺鉢	口径14.2 底径4.8 器高4.9	陶器	内外鉄釉　焼成良釉発色良い	口縁部肥厚　外底糸切り　内面に7本単位の摺り目	底部露胎		武雄	17世紀中葉～末
20号溝 第58図18	鉢	口径(10.0) 底径(7.0) 器高3.8	陶器	柿釉を外面胴部から内面口縁部まで掛け、鉄絵を施した後透明度の高い灰釉を上掛け	口縁部を丸めて内傾　外面に鉄絵の一部が残る	底部釉剥ぎ		肥前か	不明
20号溝 第58図19 図版32	壺 小型壺	口径7.2 底径6.2 器高13.5	陶器	緑灰色の灰釉を内外上半に掛ける	高台削り出し　外面胴部下半にケズリあり	底部露胎	灰釉の発色は不良で沸騰あり	肥前	17世紀中葉～末
20号溝 第58図20 図版32	染付 小型碗	口径7.7 底径3.4 器高4.0	磁器	透明釉の発色良	呉須　外面は樹文　ややひずみ在り　高台径に比べて畳み付け幅が広い	畳付は釉剥ぎ　砂目付		波佐見	17世紀後葉 ～18世紀中葉
20号溝 第58図21	染付 碗	口径(8.0) 底径2.7 器高4.2	磁器	透明釉発色良好	高台小さい　呉須　外面は竹文と梅文があるので、松文が欠損部にあるか	畳付は釉剥ぎ		有田	18世紀第2四半期
20号溝 第58図22	染付 小型碗	口径8.0 底径3.1 器高4.3	磁器	透明釉発色良好	口縁部外面に雨降文	高台釉剝ぎ、砂目付着　見込みにひっつき		有田	18世紀初頭 ～前葉
20号溝 第58図23	染付 碗	口径(7.6) 底径2.5 器高3.8	磁器	透明釉発色良好	高台小さい　呉須　外面は氷裂文地に花散し文	畳付は釉剥ぎ		有田	18世紀第2四半期
20号溝 第58図24	染付 小型碗	口径(9.6) 底径(4.0) 器高4.5	磁器	透明釉・呉須の発色良	呉須　外面に花草文	畳付は釉剥ぎ		有田	18世紀初頭 ～前葉
20号溝 第58図25	染付 碗	口径10.3 底径4.1 器高4.8	磁器	透明釉発色良好	呉須　外面は花文	畳付は釉剥ぎ		有田	18世紀第2四半期
20号溝 第58図26 図版32	染付 碗	口径11.0 底径4.2 器高5.1	磁器	透明釉・呉須発色やや不良	削り出し高台　胴部に歪みあり　呉須　外面に梅花文　裏銘崩れた「明」	畳付は釉剥ぎ		有田	18世紀初頭 ～前葉
20号溝 第58図27 図版32	染付 碗	口径(11.0) 底径3.8 器高6.2	磁器	透明釉の発色不良で白濁	呉須　外面は梅樹文　外底は「大明年製」くわらんか手	畳付は釉剥ぎ		有田	18世紀初頭 ～前葉
20号溝 第58図28 図版32	染付 小型碗	口径8.4 底径3.3 器高4.0	磁器	透明釉の発色不良でやや白濁	呉須　外面は源氏香文帯　内面は口縁部に変形雷文帯、見込みに筍文　完形品	畳付は釉剥ぎ		有田	18世紀中葉 ～後葉
20号溝 第58図29 図版32	染付 小型碗	口径11.6 底径4.6 器高6.0	磁器	透明釉の発色不良でやや白濁	呉須　外面は上半に岩と花文、下半に氷裂文帯　内面は口縁部に袈裟襷文帯、見込みに界線と手描き五弁花文	畳付は釉剥ぎ		有田	18世紀中葉 ～後葉
20号溝 第58図30	染付 小型碗	口径(6.0) 底径(2.6) 器高3.5	磁器	透明釉発色やや不良	型押し成型の輪花口縁で、削り出し高台　口唇部に口錆	畳付は釉剥ぎ	第58図31と揃い	有田	不明
20号溝 第58図31	染付 小型碗	口径(6.2) 底径(2.6) 器高3.2	磁器	透明釉発色やや不良	型押し成型の輪花口縁で、削り出し高台　口唇部に口錆	畳付は釉剥ぎ	第58図30と揃い	有田	不明
20号溝 第58図32 図版32	染付 仏飯器	口径8.6 底径4.5 器高5.5	磁器	呉須発色良好だが、透明釉はやや白濁で貫入あり　焼成良好	蛇ノ目高台は削り出し　呉須で外面に花樹文、上面にも花文	底部は蛇の目釉剝ぎ		有田	17世紀第4四半期
20号溝 第59図1	染付皿 小皿	口径(14.0) 底径(8.4) 器高3.3	磁器	透明釉の発色良　良品	貼り付け高台　呉須で外面に唐草文、内面胴部は花唐草文で、見込みに五弁花文らしいものあり	畳付は釉剥ぎ	外底に銘があるが欠損のため判読できない	有田	18世紀前葉
20号溝 第59図2	染付 中皿	口径13.8 底径7.7 器高4.7	磁器	透明釉の発色良、貫入多い	型押し成型により口縁部輪花　呉須による外面唐草文　内面胴部は梅文他の植物文	畳付は釉剥ぎ		有田	18世紀中葉 ～後葉
20号溝 第59図3	染付 中皿	底径17.6	磁器	透明釉の発色不良で白濁	呉須で外面唐草文　内面胴部は牡丹文　見込みは山水文	畳付は釉剥ぎ　外底に針目跡2ケ所	中央に粘土塊が付着する不良品	有田	18世紀中葉 ～後葉
20号溝 第59図4	染付 段重蓋	口径14.4 底径14.5	磁器	透明釉発色良好	天井部に型押し成型の橋状の摘みがつく　外面は天井部に呉須で斜線鋸歯文帯、中位から下位は花文	受け部釉剥ぎで砂目付		有田	18世紀後葉 ～19世紀中葉
20号溝 第59図5	染付 段重	口径(11.0) 器高4.3	磁器	透明釉発色良好	呉須　外面胴部は蛸唐草文、下位は鋸歯文	口唇部と畳付は釉剥ぎ		有田	18世紀後葉 ～19世紀中葉
20号溝 第59図6	丸瓦	－	瓦質		釘穴あり　穿孔は凸面から　凹面は蓆痕を軽くナデている　凸面に小さな竹管スタンプあり　意図的なものか不明		灰黒色で銀化なし	在地	不明

表 26　1 次調査出土土器・陶磁器・瓦観察表 26

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm,g) ( )は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見		
							特記事項	推定産地	推定年代
20号溝 第59図7	軒丸瓦 瓦当	径(14.6)	瓦質		A15類　型から外して縁をナデている　内面側の縁もナデ窪んでいる　焼成良好	不明	燻はなく灰黒色を呈す　小型の軒丸	在地	不明
20号溝 第59図8	軒平瓦 瓦当	瓦当厚3.3 幅12.8 玉縁端幅26.7	瓦質		三葉文B6類　型から外して縁をナデている　顎部分は接合のための凹線が入る　焼成良好	不明	顎が薄い　燻はなく青灰色を呈す	在地	不明
20号溝 第59図9 図版47	蓋 ミニチュア鍋蓋	口径3.7 器高0.8	土師質土器		型押し成型　にぶい黄灰白色を呈する	不明	木製の蓋を正確に模倣している	在地	不明
20号溝 第59図10 図版32	有印土製円盤	径9.6 厚さ2.0	土製品		手捏ね成型で表面を丁寧にナデ仕上げ　1面の頂部に「熊」のスタンプ　にぶい黄灰白色を呈する	下面に黒斑あり		在地	不明
20号溝 第59図11 図版32	土人形 土馬	長さ10.5 高さ6.6 幅6.5	土製品		鞍がありその上が欠損しているので騎人がいただろう　手捏ね成型	にぶい黄灰白色～にぶい淡暗灰色		在地	不明
21号溝 第60図1	杯	口径(6.8) 底径(3.4) 器高3.0	陶器	内外黒茶褐色の鉄釉　焼成良釉	高台削り出し	底部露胎　畳付にアルミナ付着		肥前	不明
21号溝 第60図2	筆立か 京焼風色絵	口径(5.6) 底径(5.6) 器高7.3	陶器	外面から内面口縁部のみ淡黄灰色の灰釉掛け　焼成良好　外底釉剥ぎ	底部ケズリ　外面鉄絵	痕跡なし		肥前	不明
21号溝 第60図3	埦 京焼風	口径(9.8) 底径3.6 器高4.1	陶器	淡黄灰色の灰釉　焼成良好　高台露胎	高台削り出し　鉄絵で見込みに崩れた山水文	痕跡なし		肥前	18世紀第2四半期
21号溝 第60図4	摺鉢	—	陶器	口縁部に内外鉄釉　焼成良釉	口縁部肥厚　内面口縁下に摺り目	不明		武雄	17世紀中葉～末
21号溝 第60図5	摺鉢	—	陶器	口縁部に内外鉄釉焼成良	口縁部肥厚　内面口縁下に摺り目が入り、上端で2単位が交差する	不明		武雄	17世紀中葉～末
21号溝 第60図6	摺鉢	—	陶器	内外暗黒褐色の鉄釉　焼成良釉	口縁部肥厚　内面摺り目は欠損部にある	不明		武雄	18世紀中葉 ～19世紀中葉
21号溝 第60図7	皿 小皿	口径8.5 底径4.4 器高2.3	陶器	内面黒褐色の鉄釉　外面は底部以外に不均一に掛かる	底部糸切り　無文	底部露胎		武雄	不明
21号溝 第60図8	甕 小型甕	口径(24.4)	陶器	鉄漿掛け	口縁部は丸く肥厚した外側に貼り付け　外面肩部にカキ目後凹線を入れ、その上に円形浮文貼り付け　内面ナデ	不明		肥前	18世紀代
21号溝 第60図9	染付 杯	口径(6.8) 底径2.4 器高2.4	磁器	透明釉の発色良好	外面高台に凹凸文呉須染付、内面見込みに人工呉須と金で不明モチーフを上描き	畳付欠損で不明		瀬戸	不明
21号溝 第60図10	染付 杯	口径(6.8) 底径(3.0) 器高2.5	磁器	透明釉の発色良好	高台削り出し　外面無文、内面見込みに何か上描き文様があったが剥落している	畳付は釉剥ぎ砂目付着		有田	不明
21号溝 第60図11	杯 小杯	口径(7.0) 底径(2.8) 器高3.3	磁器	透明釉の発色不良で白濁	呉須　外面に手描きで花文か	畳付は釉剥ぎ		有田	18世紀第1四半期
21号溝 第60図12	染付 小型碗	口径(8.4) 底径(3.0)	磁器	透明釉の発色不良で白濁	外面山島帆掛け船文	畳付欠損で不明		有田	18世紀初頭 ～18世紀前葉
21号溝 第60図13	染付 皿 5寸皿	口径13.2 底径7.8 器高3.5	磁器	透明釉呉須焼成発色良好	外面唐草文　外底に丸福　内面に扇文と花樹文　見込み中央に五弁花文	畳付は釉剥ぎ　砂目付		有田	18世紀中葉
21号溝 第60図14	染付 皿 小皿	口径(9.6) 底径(6.0) 器高2.6	磁器	透明釉呉須焼成発色やや不良	外面唐草文　内面に墨弾きで雲文　見込み中央に五弁花文	畳付は釉剥ぎ		有田	17世紀後葉 ～18世紀中葉
21号溝 第60図15	仏花瓶	口径(2.2)	磁器	透明釉外面から内面口縁部まで掛け、発色不良で白濁　呉須は発色良好	口縁部小さく外反	不明	外面に文字らしいものあり	有田	17世紀末 ～18世紀中葉
21号溝 第60図16 図版32	紅猪口	口径5.0 底径1.6 器高1.5	磁器	乳白色の白磁釉　発色良好　焼成良好	外面は型押し成型による菊花文	外面露胎		有田	18世紀後葉
21号溝 第60図17 図版48	管状土錘	長さ4.4 最大径1.7 重量10.76	土製品		小口部は平坦　淡橙白色を呈し、変色なし	完形		在地	不明
23号溝 第61図1 図版32	皿 小皿	口径9.0 底径4.6 器高2.8	陶器	内面黒褐色の鉄釉　外面は露胎	底部糸切り　無文	粘土粒あり		武雄	不明
23号溝 第61図2	碗 うがい茶碗か	口径(14.8) 底径(5.4) 器高7.2	磁器	透明釉は発色良好	高台削り出し　無文	畳付は釉剥ぎ　砂目付		有田	不明
23号溝 第61図3	鉢	口径(12.4)	陶器	外面から口唇部に掛けて白化粧土を塗布し櫛掻き取り　その上に口縁部に暗灰釉を掛ける　口縁部肥厚		不明		武雄	18世紀代
23号溝 第61図4	白磁 小杯	口径(6.6) 底径(3.6) 器高4.0	磁器	白磁釉は青みを持つ　発色良好	高台削り出し　無文	畳付は釉剥ぎ　砂目付		有田	18世紀初頭 ～18世紀前葉
26a号溝 第61図5	染付 小型瓶	底径3.4	磁器	透明釉の発色不良で暗いが、良品　呉須発色良い	削り出し高台　呉須で花文	畳付は釉剥ぎ		有田	18世紀後葉 ～19世紀中葉

表 27　1 次調査出土土器・陶磁器・瓦観察表 27

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm,g) ( )は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見		
							特記事項	推定産地	推定年代
26a号溝 第61図6	軒平瓦 瓦当	瓦当面4.8 厚さ1.3	瓦質		三葉文を主文とする唐草文と思われるが分類不能　型から外して縁をナデている　燻はなく青灰色　焼成良好	不明		在地	不明
27号溝 第62図1	染付 端反碗	口径(9.0) 底径3.0 器高4.5	磁器	透明釉の発色良	外面「林」字状の文様、見込みに崩れた波濤文　口錆あり	畳付は釉剥ぎ	第62図1・2は揃い	有田	19世紀中葉
27号溝 第62図2	染付 端反碗	口径(8.8) 底径3.1 器高4.4	磁器	透明釉の発色良	外面「林」字状の文様、見込みに崩れた波濤文　口錆あり	畳付は釉剥ぎ	第62図1・2は揃い	有田	19世紀中葉
27号溝 第62図3	染付 碗	口径(8.6) 底径3.0 器高4.5	磁器	透明釉の発色不良で暗いが、文様は精緻な良品	外面と見込みに草葉文	畳付は釉剥ぎ		有田	19世紀前葉
27号溝 第62図4	軒平瓦	瓦当面4.7 厚さ1.6	瓦質		梅花文を主文とする唐草文　梅花文類発色良好　黒灰色を基調とする　各面丁寧なナデ仕上げ　発色良好	不明	凹面は摩耗して灰白色を呈する	在地	不明
28号溝 第62図5	皿 小皿	口径(6.4) 底径(4.8) 器高1.4	土師器		外面1段ナデ　内面2段ナデでで見込みは粗いナデ　外底糸切り　内外灰白色で、変色なし	不明		在地	不明
28号溝 第62図6	皿 小皿	口径(10.0)	土師器		外面2段ナデ　内面2段ナデで　内外暗黄灰白色を呈す　変色したものか	胴部片のため不明		在地	不明
29号溝 第62図7	埦 京焼風	底径(3.0)	陶器	淡黄灰色の灰釉　焼成良好　高台露胎	小さい削り出し高台　文様の有無不明	痕跡なし		肥前	18世紀中葉
29号溝 第62図8	埦 京焼風	底径4.4	陶器	淡黄緑灰色の灰釉だが、底部は発色不良　焼成良好　高台露胎	削り出し高台　文様の有無不明	痕跡なし	腰折れだが京焼風	肥前	18世紀中葉
29号溝 第62図9	染付 小型蓋	掘径(9.0)	磁器	透明釉・呉須ともに発色良	外面は窓文、内面は口縁に袈裟襷文	摘み部上端は釉剥ぎ		有田	18世紀中葉
30号溝 第62図10	鉢 擂鉢	口径(32.8) 底径(14.0)	瓦質土器		口縁部肥厚　焼成良好、内外灰黒色　外面オサエ・ナデと粗いタテハケ、内面と口唇部ハケ　摺り目は4本単位	不明		在地	不明
1号大溝床面 第64図1	皿 小皿	口径11.5 底径7.3 器高2.3	土師器		底部糸切り　板状圧痕あり　外面2段ナデ　内面4段ナデ　内外橙黄灰白色を呈し、変色なし　無文		内面ナデエ具端が段になる	在地	不明
1号大溝 第64図2	風炉	口径24.8	瓦質土器		外面と口唇部は単位不明のミガキ、内面はナデ　外面漆黒色、内面青灰色　無文	口唇部に目跡あり　胎土ではないので貝目か		在地	不明
1号大溝 第64図3	埦	底径3.8	陶器	暗緑灰色の灰釉を胴中位から内面に掛け　内面にはやや釉切れがある	削り出し高台で、　高台底部中央突出	胴下位以下露胎		肥前か	17世紀前葉
1号大溝 第64図4	皿 小皿	口径10.7 底径4.0 器高3.3	陶器	内面から外面胴部に灰白色が混じる灰褐色の灰釉を掛ける　発色焼成もよい	削り出し高台で、高台中央が突出する	底部露胎	良品	肥前か	不明
1号大溝 第64図5	皿 5寸皿	口径(12.0) 底径(4.5)	陶器	灰釉は透明度が高く、発色良好	内外白化粧土をハケ掛け後、暗灰緑色の灰釉掛け	畳付は釉剥ぎ		肥前	18世紀第1四半期
1号大溝 第64図6	皿 小皿	口径(13.0) 底径4.1 器高3.9	陶器	内面から外面口縁部ににぶい緑色の灰釉を掛ける　発色焼成よい	口縁部はオサエによる波状口縁で、削り出し高台で、高台中央が突出する	底部露胎　見込みに胎土目跡3つあり	内面口縁部に釉切れあり	肥前	17世紀末 ～18世紀中葉
1号大溝 第64図7	皿	口径(11.8) 底径4.5 器高3.4	陶器	青灰白褐色の灰釉を内面から外面胴中位まで掛け	高台削り出し　口縁部外傾　見込みに鉄絵　モチーフ不明	底部露胎　見込みに胎土目跡あり		不明	不明
1号大溝 第64図8	皿 5寸皿	底径6.0	陶器	外面灰黄白色の灰釉　見込みは鉄釉を掛けた後、緑色の灰釉掛け分け　灰釉は発色良好	削り出し高台で、外面にカンナ痕目立つ	見込みに蛇の目釉剝ぎ		肥前	17世紀末 ～18世紀中葉
1号大溝 第64図9	擂鉢	—	陶器	内外口縁部に黒褐色の灰釉　焼成良　釉の発色不良	口縁部屈曲　内面口縁下に単位不明の摺り目	不明		武雄	17世紀前葉
1号大溝 第64図10	染付 碗	—	磁器	透明釉の発色良　呉須発色良い	外面口縁部に界線2条、胴部にモチーフ不明文	畳付は釉剥ぎ		有田	17世紀代
1号大溝 第64図11 図版47	土人形 土馬	高さ5.3 幅5.0 厚さ5.4	土製品		手捏ね成型　橙色を呈し変色なし　発色良好　黒灰色		鞍や鬣の表現はない	在地	不明
1号大溝上位 第65図1 図版43	鬼板瓦	厚さ2.8	瓦質		表面は型押し成型で、裏面はナデ、把手を接合	不明		在地	不明
1号大溝 第65図2 図版47	土人形 騎馬武人	高さ9.3 幅4.3 厚さ1.9	土製品		手捏ね成型で目・鼻・口を沈線で表現し、兜を貼り付け　脚は剥離　黄灰白色を呈し変色なし		馬と接合していたか	在地	不明
1号大溝下位 第65図3 図版47	土人形 騎人	高さ7.0 幅5.0 厚さ1.8	土製品		土馬の背中に貼り付けていたもので、手捏ね成型　目口は刺突で表現	淡暗茶灰色	服や甲冑は描かれていない	在地	不明
1号大溝中位 第65図4 図版32	皿 極小皿	口径6.0 底径4.0 器高1.4	土師器		底部糸切り　板状圧痕わずかに残る　内外2段ナデ　内外黄灰白色から橙灰白色を呈し、変色なし			在地	不明
1号大溝 第65図5	皿 小皿	口径6.3 底径4.4 器高1.4	土師器		底部糸切り　外面4段ナデ　内面3段ナデで見込みは螺旋状ナデをナデ消し　内外橙黄灰白色を呈し、変色なし	粘土粒痕なし		在地	不明

表 28　1 次調査出土土器・陶磁器・瓦観察表 28

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm,g) ( )は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見		
							特記事項	推定産地	推定年代
1号大溝中位 第65図6	皿 極小皿	口径6.2 底径4.4 器高1.5	土師器		底部糸切り 外面1段、内面2段ナデで見込みは螺旋状ナデをナデ消し 内外黄灰白色から橙灰白色を呈す		板状圧痕わずかに残る	在地	不明
1号大溝中位 第65図7	皿 極小皿	口径7.3 底径4.7 器高2.9	土師器		底部糸切り 外面2段ナデ、内面1段ナデで見込みは螺旋状ナデをナデ消し 内外黄灰白色を呈し、変色なし		糸切りは摩滅 板状圧痕残る	在地	不明
1号大溝中位 第65図8 図版32	皿 極小皿	口径7.3 底径4.6 器高1.8	土師器		底部糸切り 板状圧痕あり 内外2段ナデ 内外黄灰白色を呈し、変色なし			在地	不明
1号大溝中位 第65図9	小皿 灯明皿	口径9.2 底径5.9 器高1.9	土師器		底部糸切り 外面1段ナデ 内面2段ナデで見込みは螺旋状ナデをナデ消し 内外にぶい黄白色	粘土粒痕あり	口縁部に油煙あり	在地	不明
1号大溝 第65図10 図版32	皿 小皿	口径9.3 底径4.1 器高2.7	土師器		底部糸切り 外面4段ナデ 内面2段ナデで見込みは螺旋状ナデ		板状圧痕は見られない	在地	不明
1号大溝中位 第65図11 図版32	皿 小皿	口径10.1 器高2.5	土師器		底部糸切り 外面2段ナデ 内面4段ナデで見込みは螺旋状ナデをナデ消し 内外橙黄灰白色 無文	上げ底を呈する	板状圧痕あり	在地	不明
1号大溝中位 第65図12	皿 小皿	口径9.1 底径5.2 器高2.3	土師器		底部糸切り 外面2段ナデ 内面4段ナデで見込みは螺旋状ナデをナデ消し 無文	粘土粒痕あり	板状圧痕あり	在地	不明
1号大溝 第65図13 図版33	皿 灯明受皿	口径9.3 底径5.2 器高2.5	土師器		底部糸切り 外面3段ナデ 見込み螺旋状ナデ にぶい黄灰白色を呈す		内面に付着変色ある	在地	不明
1号大溝中位 第65図14	皿 小皿	口径11.1 底径5.5 器高2.1	土師器		底部糸切り 外面2段ナデ 内面4段ナデで見込みは螺旋状ナデをナデ消し 内外黄灰白色を呈し、変色なし	不明	板状圧痕あり	在地	不明
1号大溝 第65図15	皿 小皿	口径9.4 底径4.3 器高1.8	土師器		底部糸切り 外面4段ナデ 内面3段ナデで見込みは螺旋状ナデをナデ消し 内外橙黄灰白色 無文	粘土粒痕あり	板状圧痕なし	在地	不明
1号大溝中位 第65図16	小皿 灯明皿	口径10.2 底径5.8 器高3.2	土師器		底部糸切り、底部端が突出 内外ナデ 内外にぶい黄白色で口縁部に油煙あり			在地	不明
1号大溝中位 第65図17	皿 小皿	口径9.2 底径6.8 器高1.8	土師器		底部糸切り 外面2段ナデ 内面2段ナデで見込みは螺旋状ナデをナデ消し 内外橙黄灰白色を呈し、変色なし	粘土粒痕なし	板状圧痕なし	在地	不明
1号大溝 第65図18	皿 中皿	口径(26.0) 底径(16.8) 器高5.0	土師器		外面ケズリ状のナデ 内面丁寧なハケ 内外暗灰褐色を呈し、口縁部がやや暗く変色 無文	不明	底部糸切りなし	在地	不明
1号大溝中位 第65図19	鉢 擂鉢	—	土師質土器		体部上位はオサエ後粗いナデと夕テハケで、口縁部だけはヨコナデ、口唇部はナデ窪み 内面は丁寧なヨコハケ 焼成良 内面に4本単位の擂り目あり	内面口縁部から外面は灰黒色なので重ね焼きしたか	内面口縁部は器面が荒れており、内面の炭化物の付着が著しい	在地	不明
1号大溝中位 第66図1	埦	底径5.1	陶器	内外灰色の灰釉を掛けた後、高台内以外に暗緑灰色の灰釉掛け	削り出し高台 無文	畳付に4つ砂目跡あり		肥前か	17世紀代
1号大溝中位 第66図2	皿 小皿	口径(11.0) 底径(2.0)	陶器	内面から外面胴中位まで緑灰色の灰釉掛け	高台を削り出し後、外してから焼成している	底部露胎 見込みに胎土目あり		武雄	17世紀前葉
1号大溝中位 第66図3 図版33	皿 変形小型皿		陶器	灰褐色の灰釉を高台を除き内外掛け 鉄釉中の成分が流れている	高台削り出し 型押し成型による花弁口縁 完形	高台露胎		肥前	17世紀前葉
1号大溝中位 第66図4	皿 小皿	口径(11.6) 底径4.7 器高2.9	陶器	内面から外面胴中位まで灰色の灰釉掛けで、内外口縁部に暗緑灰色の灰釉上掛け	高台削り出し	底部露胎	3号大溝出土第67図4と同じようなもの	武雄	17世紀前葉
1号大溝中位 第66図5	皿	口径(20.0)	陶器	内外オリーブ色の灰釉掛け 発色不良で灰白色を多く残す	無文	不明		肥前	17世紀後半
1号大溝中位 第66図6	皿 変形皿	—	陶器	鉄絵で植物文を描いた後、内外長石釉掛け 焼成良 釉の発色良	口縁に歪みあり	不明		不明	17世紀前葉
1号大溝中位 第66図7		口径(20.0)	陶器 鉢	内面から外面胴下位まで鉄釉掛け	口縁部外面を肥厚 片口の注口の痕跡残る 無文	口唇部釉剥ぎで、剥離痕もあり、胴下位が灰被りしているので、倒立して焼成している		武雄	不明
1号大溝中位 第66図8	擂鉢	—	陶器	内外口縁部に茶黒褐色の鉄釉焼成良 釉の発色良	口縁部内面肥厚 内面口縁下に単位不明の擂り目	不明		武雄	17世紀中葉 ～17世紀末
1号大溝 第66図9	蓋 急須蓋	最大径4.8 器高2.0	陶器	外面発色の悪い鉄釉	底部糸切りナデ消し	裾部の下面にアルミナ塗布		肥前	不明
1号大溝中位 第66図10	不明	最大径4.0	瓦質土器		外面ナデ仕上げ平滑 平坦面に突起を接合して内面を削る 発色良好 内面青灰色なので瓦の一部ではない 無文	不明	突起の平坦面は摩滅していないので脚ではない	在地	不明
1号大溝 第66図11 図版33	土人形 犬	高さ4.6 長さ5.0 幅4.7	土製品		目の表現がない 脚は上げ底の高台になっている 黄灰白色を呈し変色なし			在地	不明
1号大溝 第66図12 図版33	土人形 犬	高さ6.7 長さ2.6 幅4.0	土製品		手捏ね成型で目を刺突で表現している 黄灰白色を呈し変色なし			在地	不明
1号大溝中位 第66図13	平瓦転用瓦玉 円盤型製品 図版49	径 厚さ	瓦質	瓦を転用しているため両面黒灰色	平瓦を転用 楕円形を呈し、側面は平滑作業時のものか沈線あり	不明		在地	不明

表 29　1 次調査出土土器・陶磁器・瓦観察表 29

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm,g) ( )は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見		
							特記事項	推定産地	推定年代
1号大溝 第66図14	碗転用 円盤型製品 図版49	径5.5 厚さ2.0	陶器	内面黒釉	削り出し高台の碗底部を転用　高台底部中央突出　無文	不明		肥前	不明
1号大溝中位 第66図15	平瓦転用瓦玉 円盤型製品 図版49	径 厚さ	瓦質		平瓦を転用　瓦を転用しているため片側が黒灰色、反対側は灰色を呈する	不明		在地	不明
1号大溝中位 第66図16	陶器転用 円盤型製品 図版49	径4.5 厚さ	陶器	内面と外面高台以外に黄緑灰色の灰釉掛け	底部糸切り後高台削り出し　無文	見込みと畳付に4つ胎土目跡あり	打ち掻いた面と面の間が尖っている	肥前	不明
1号大溝中位 第66図17	軒丸瓦 瓦当	径(16.0)	瓦質		A1b類　発色良好　黒灰色	不明	打ち掻き後の側面は平滑になっている	在地	不明
1号大溝中位 第66図18	丸瓦	基部側幅14.1 玉縁端幅(8.8)	瓦質		内面簾痕のケズリ消し　釘穴あり　発色良好　黒灰色	不明	凸面に漆喰痕が残る	在地	不明
1号大溝中位 第66図19	熨斗瓦	幅2.0	瓦質		発色良好　黒灰色　凹面はナデ、凸面は目の粗いハケが、基部は横に、中央部はタテに入る	基部は粘土痕がついているので焼成時に下にした面		在地	不明
3号大溝 第67図1	甕	—	土師器		外面器面摩滅で調整不明、内面ケズリ　外面にぶい黄灰褐色を呈す	内面黒色なので伏せ焼きしている　砂粒を含む	古墳時代後期から奈良時代の土師器甕片		不明
3号大溝 第67図2	鍋	口径(34.0)	瓦質土器		口唇部に段あり　外面は口縁部がナデ、口縁下は粗いハケでオサエ痕を残す、内面は口縁部まで丁寧なハケ　焼成良好		外面は煤付着のため黒色、本来は内面の暗青灰色	在地	不明
3号大溝床面 第67図3	湯窯	口径(16.0) 最大径30.0	瓦質土器		胴部の接合に鍔貼り付け、外面ミガキ、内面はオサエ痕を丁寧なハケで仕上げている　焼成良好で、外面の上半はミガキで黒色を呈す	不明	炭化物の付着著しい　外面の下半は煤付着、内面は暗灰茶褐色	在地	不明
3号大溝 第67図4	皿 小皿	口径(10.8) 底径4.1 器高3.05	陶器	内面から外面胴中位まで灰色の灰釉掛けで、内外口縁部に暗緑灰色の灰釉上掛け	高台削り出し	底部露胎　窯内の砂が付着	1号大溝出土第66図4の類似品	武雄	17世紀初頭
3号大溝 第67図5	皿	底径6.3	陶器	内外黄緑灰色の灰釉掛け	貼り付け高台　無文	見込みと畳付に胎土目跡あり　本来5つだろう	胎土目大きい	肥前	17世紀前半
3c号大溝 第67図6	椀	口径(12.2) 底径(5.3) 器高6.5	磁器	透明釉・呉須発色良いが　焼成不良で貫入多い　陶胎	外面呉須で山水文か	畳付釉剝ぎ	大振り	有田	17世紀第2四半期
3号大溝 第67図7 図版33	皿 小皿	口径9.7 底径5.7 器高2.7	磁器	透明釉の発色悪く暗い、呉須は発色良い　焼成良い	器壁の厚さが一定しない　呉須で外面界線、内面は口縁部に袈裟襷文、見込みに人物文	畳付釉剝ぎ	中国景徳鎮を模倣しているが質が悪いので日本製	有田か	17世紀前半
3号大溝上位 第67図8	軒平瓦	瓦当厚4.0 厚さ2.0	瓦質		三葉文B1類　各面丁寧なナデ仕上げで成型痕が観察できない　発色良好　黒灰色			在地	不明
3号大溝上位 第67図9 図版48	管状土錘	長さ4.3 最大径1.7 重量10.07	土製品		ナデで平滑にしているため、オサエ痕なし小口部は平坦　焼成良好で橙黄色	不明		在地	不明
3号大溝 第67図10 図版33	皿 小皿	口径10.7 底径3.5 器高3.4	陶器	内面から外面口縁部に灰色の灰釉掛け　発色不良のためか長石釉のように見える	高台削り出し　器壁厚い	底部露胎	全体的に煤付着	武雄	17世紀初頭
3c号大溝 第67図11	皿	—	陶器	内外オリーブ色の灰釉掛け　発色不良で灰白色を多く残す	無文	不明		肥前	17世紀前半
3c号大溝 第67図12	椀	口径11.0	磁器	透明釉・呉須発色良い　焼成良好	外面呉須で山水文か	不明	大振り	有田	17世紀第2四半期
3c号大溝 第67図13	皿 小皿	底径7.6	磁器	透明祐釉切れあり　呉須・釉の発色良好	削り出し高台で、カンナ痕を中央部だけナデ消している　呉須で見込みに鳥と草木文	高台釉剝ぎ	畳付だけでなく、高台を釉剝ぎしている異質	有田か	17世紀中葉
3c号大溝 第67図14 図版33	杯 小杯	口径5.8 底径2.2 器高3.8	磁器	透明釉を高台以外に掛ける　釉の発色良好　焼成良好	削り出し高台　外面に水草文	高台露胎		有田	17世紀第2四半期
3c号大溝 第67図15	軒丸瓦 瓦当	径(15.0)	瓦質		発色良好　黒灰色だが、凸面は擦痕多い　凹面はスダレ状か桶状を削っている	不明	残欠なため分類不能	在地	不明
4号大溝 第68図1	火鉢	底径(17.0)	陶器	緑灰色の灰釉が外面にかかり、内面露胎	型押し成型の部材を接合したもので、脚部外面に方形窓唐草文帯が入る	畳付釉剝ぎ		瀬戸	不明
4号大溝 第68図2	碗	底径5.0	陶器	長石釉を内面から外面胴下位まで掛ける	削り出し高台　無文	見込みに胎土目痕あり		肥前か	17世紀代
4号大溝 第68図3	ミニチュア湯窯か	口径(6.0)	陶器	内外鉄釉を掛けた後、外面のみ鉄釉二度掛け	外面に雲形透かし彫りで、内面側は窓を面取りしている			肥前	不明
4号大溝 第68図4 図版33	蓋 土瓶蓋	口径10.2 底径57 器高2.1	陶器	黒釉を上面のみ掛け	摘みを接合　底部糸切り　無文	受け部釉剝ぎ　外底にアルミナ付着		肥前	不明
4号大溝 第68図5	壺 小型壺	口径(16.0)	陶器	暗茶褐色の鉄釉を掛け、口唇部内面側のみ釉剝ぎしているので蓋がつく	口縁部肥厚後、L字形に内傾　内面格子目タタキ当て具痕　外面カキ目跡　無文	不明		肥前	17世紀前半
4号大溝 第68図6	擂鉢 小型擂鉢	—	陶器	口縁部内外に黒褐色の黒釉掛け	口縁部を屈曲後直立させる　内面口縁部下に8本単位の幅広の擂り目が入る	不明		肥前	17世紀中葉～末

表30　1次調査出土土器・陶磁器・瓦観察表30

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm,g) ()は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見		
							特記事項	推定産地	推定年代
4号大溝 第68図7	擂鉢	—	陶器	内外口縁部に茶褐色の鉄釉焼成良　釉の発色良	口縁部内面肥厚　内面口縁下にナデ窪みあり　内面口縁下に単位不明の擂り目	不明		肥前	17世紀中葉～末
4号大溝 第68図8	擂鉢	口径(24.0)	陶器	口縁部内外に鉄釉掛け	口縁部を屈曲後直立させる　内面口縁部下に単位不明の擂り目が入る			肥前	17世紀前葉
4号大溝 第68図9	染付 広東碗	底径(6.0) 器高3.0	磁器	透明釉の発色良　呉須発色良いが流れている	貼り付け高台　呉須で外面モチーフ不明文	畳付は釉剥ぎ		有田	19世紀初頭
4号大溝 第68図10	段重	口径(14.0)	磁器	透明釉・呉須発色良い　焼成良好	呉須で外面蛸唐草文	口縁部内面と底部端は釉剝ぎ		有田	19世紀前葉
4号大溝 第68図11	皿	口径17.8 底径10.2 器高2.8	磁器	透明釉・呉須発色良い　焼成良好	型押し成型による輪花口縁　呉須で外面唐草文、外底に「大明年製」、内面は胴部に花草文、見込みに花文	畳付釉剝ぎ		有田	17世紀後葉 ～18世紀初頭
4号大溝 第68図12	軒平瓦	瓦当厚4.5	瓦質		三葉文を主文とする唐草文　C1類に近い　発色良好　黒灰色を呈す　各面丁寧なナデ仕上げで成型痕が観察できない			在地	不明
4号大溝 第68図13	軒丸瓦 瓦当	—	瓦質		B1類　文様がやや扁平　発色良好　黒灰色を呈す			在地	不明
4号大溝 第68図14	右軒桟瓦	径7.6	瓦質		巴文　発色良好　黒灰色を呈す　各面丁寧なナデ仕上げで成型痕が観察できない			在地	不明
5号大溝 第68図15	染付 端反碗	口径(9.5) 底径(3.7) 器高5.0	磁器	透明釉の発色良　呉須発色良い	貼り付け高台　呉須で外面窓文樹葉文、内面界線と見込みに波濤文	畳付は釉剥ぎ		有田	19世紀中葉
埋甕 第69図 図版33	火鉢	口径(34.7) 底径23.6 器高31.0	瓦質土器		断面三角形の凸帯が口縁下と胴下位につく　灰白色を呈す　口唇部は摩滅　外面ハケをナデ消しており部分的に残る　内面は丁寧なハケ　外底ハケ		断面は灰色を挟むスタンプ文なし	在地	不明
ピットA 第70図1	染付蓋 段重蓋	底径(12.2)	磁器	透明釉発色良好	天井部に型押し成型の橋状の摘みがつく　外面は天井部に牡丹文	受け部釉剥ぎなので重ねて焼成している		有田	18世紀初頭 ～18世紀後葉
ピットA 第70図2	染付 皿	口径(20.8) 底径12.5 器高4.3	磁器	透明釉・呉須発色良好　焼成良好	高台貼り付け　呉須で外面唐草文で外底に「大口化年」 内面は芙蓉文	畳付は釉剝ぎ　外底中央に胎土目跡付着	裏銘は「大明化年」か	有田	17世紀後葉 ～18世紀初頭
ピット12 第70図3 図版49	円盤形土製品	長軸4.9 短軸4.4 厚さ1.5	陶器	上面鉄釉掛け　焼成・発色良く光沢あり	蓋の摘み部を転用　下面糸切り摩滅		周縁を丁寧に加工している	在地	不明
ピット16 第70図4 図版33	皿 灯明皿	口径(9.4) 底径5.5 器高2.5	土師器		底部糸切り　外面3段ナデ　内面残りが悪く観察できない　内外にぶい橙黄灰白色		口縁部油煙　内外面口縁部にぶい茶灰褐色に変色	在地	不明
ピット16 第70図5	鉢 高台付鉢	—	陶器	内外白化粧土刷毛掛けの後、内面は白化粧土流し掛け後、緑彩で植物文らしいものを手描きし、最後に内外透明度の高い灰釉掛け　発色焼成良好　貫入多い　高台削り出し		不明		肥前	18世紀中葉 ～19世紀中葉
ピット16 第70図6 図版49	円盤型製品 擂鉢転用	長軸3.8 短軸3.6 厚さ1.0	陶器		胴部外面ナデ、内面擦り目　釉薬が掛かっていないので、口縁部のみ鉄釉が掛かるものだろう	不明		肥前	不明
ピット16 第70図7 図版47	土人形 騎馬武人	高さ5.0 幅3.3 厚さ6.7	土製品		手捏ね成型で目・鼻・口を沈線で表現し、頭は指頭で斜めの平坦面にしている　腕は省略　黄灰白色を呈す		馬と密着しているが、別に作ってある	在地	不明
ピット20 第70図8 図版33	カマド	口径(30.0)	土師質土器		内外面丁寧なナデ仕上げだが、外面は平滑で、内面はオサエ痕を残す　焼成良好　口唇部が黒変しているが本来は橙褐色	不明	内面は煤で黒化　巴唐草文のスタンプの横に「水田庄」のスタンプ	水田焼	不明
ピット20 第70図9	染付 碗	口径(10.8) 底径4.3 器高5.8	磁器	透明釉発色焼成良好	厚手のくらわんか手　呉須による外面崩れた梅花文	畳付は釉剥ぎ		有田	18世紀初頭 ～前葉
ピット26 第70図10 図版33	染付 仏飯器	口径6.7 底径4.8 器高7.0	磁器	透明釉の発色不良で白濁	完形のため中実か中空か不明　呉須で外面格子目地に半菊文帯	底部は釉剥ぎ		有田	18世紀前葉 ～後葉
ピット27 第70図11 図版48	窯道具 ハマ	径8.5 厚さ0.7	陶器		色調から製品を載せて焼成したことがわかるが、両面にあることから2回使用している　焼成良好	糸切後ナデ消さない	円筒から糸切りで切り出した円盤状製品	肥前	不明
ピット27 第70図12	杯 小杯	口径5.0 底径1.65 器高2.2	磁器	透明釉発色良好	外面に皺が多いので型押し成型　無文	高台露胎		有田	不明
ピット27 第70図13 図版33	染付 杯	口径7.0 底径2.8 器高3.1	磁器	呉須と透明釉の発色良い	呉須で外面笹文　厚手のくわらんか手	畳付釉剝ぎ	16号溝第54図8と同類	有田	不明
ピット37 第70図14	埦 京焼風	口径9.4 底径4.0 器高5.0	陶器 腰折れ形	淡黄灰色の灰釉　焼成良好　高台露胎	高台削り出し　無文　外面鉄釉の竹笹文	痕跡なし		肥前	18世紀中葉
ピット41 第70図15 図版33	皿 小皿	口径14.4 底径5.3 器高3.4	陶器	暗緑灰色の灰釉は発色不良縮れもある	高台貼り付け　無文	畳付は釉剥ぎ		肥前	17世紀前半
ピット41 第70図16	皿	口径13.4 底径4.5 器高2.8	陶器	灰白色の灰釉内面から外面胴部中位まで掛ける　焼成良好	高台削り出し　さっくりした胎土で肥前だろう　無文	底部露胎　見込みに胎土目跡4あり		武雄	17世紀前半
ピット41 第70図17	擂鉢	—	陶器	口縁部に内外鉄釉掛け　焼成良	口縁部内面側肥厚　内面口縁下に単位不明の擂り目が入る	不明		肥前	17世紀中葉～末

表 31　1 次調査出土土器・陶磁器・瓦観察表 31

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm,g) ( )は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見		
							特記事項	推定産地	推定年代
ピット44 第70図18	染付 碗	口径(8.6) 底径3.2 器高3.8	磁器	透明釉呉須発色良　貫入ありきあり	呉須　外面植物文	畳付は釉剥ぎ		有田	18世紀前葉
ピット44 第70図19 図版33	灯明皿	口径3.6 底径2.7 器高1.6	陶器	内面・上面は明黄灰色で、外面は灰白色なので挿入して組み合わせて焼成している	型押し成型の鉢に、型押し成型の橋状部がつく　橋状部の中央には穿孔			不明	不明
ピット47 第70図20	染付 碗	口径(9.4) 底径4.2 器高5.3	磁器	呉須透明釉の発色　焼成良好	呉須　外面丸文散らし			有田	18世紀初頭 ～18世紀後葉
ピット47 第70図21	染付 碗	口径(10.8) 底径4.2 器高5.4	磁器	呉須の発色はやや不良だが、透明釉の焼成良好	呉須による外面崩れた梅花文	畳付は釉剥ぎ　砂目付　見込みに蛇の目釉剥ぎ		有田	18世紀初頭 ～18世紀後葉
ピット47 第70図22	丸瓦	－	瓦質		へたっているため扁平　発色良好　側面と基部が灰白色なのは漆喰か　凸面は丁寧なナデ仕上げで成型痕が観察できない　蓆痕を削って当て具痕消している	凸面端部が灰白色で、その周囲に磨いたような平滑な面があるので、そこを接地面にして焼成し、傷をミガキ消したか？　黒灰色銀化なし		在地	不明
ピット53 第70図23	染付 ミニチュア合子	口径4.8 底径2.8 器高3.5	磁器	透明釉発色良好　内面口縁部は露胎なので蓋がつく				有田	不明
黒色土包含層 第71図1	染付 端反碗	口径(9.4)	磁器	透明釉の発色良　コバルト発色良い	外面に界線下にモチーフ不明文、内面口縁部に雷文帯、見込みにも界線があるのでモチーフがあるだろう	不明		有田	19世紀中葉
黒色土包含層 第71図2	染付 端反碗	口径(10.8)	磁器	透明釉の発色良　コバルト発色良い	外面に型紙摺りの花文、内面口縁部に雷文帯、見込みに不明モチーフがある	不明		有田	19世紀中葉
黒色土包含層 第71図3	皿 小皿	底径4.8	磁器	発色は不良で乳白色を呈す　焼成不良	型押し成型の菊花文皿	畳付釉剥ぎ		有田	19世紀中葉
黒色土包含層 第71図4	染付 皿 五寸皿	口径(10.1) 底径6.5 器高2.5	磁器	呉須は発色良、透明釉発色良	型押し成型で輪花口縁　呉須により見込みは山水文　口錆あり	畳付釉剥ぎ		有田	19世紀中葉
黒色土包含層 第71図5 図版33	紅猪口	口径4.6 底径1.3 器高1.6	磁器	乳白色の白磁釉　発色良好　焼成良好	外面は型押し成型による菊花文	外面露胎	器壁厚い　完形	有田	不明
黒色土包含層 第71図6	染付 段重	口径(12.5) 底径8.8 器高4.7	磁器	透明釉発色良好	口縁部内面側と底部端を釉剥ぎ　呉須外面は牡丹文			有田	18世紀後葉 ～19世紀中葉
黒色土包含層 第71図7 図版43	鯱瓦	－	瓦質		型押し成型で内面側には粘土積み上げ痕が残る　U字形のスタンプで鱗を刻印する　内外黒灰色を呈する			在地	不明
北東黒色土整地層 第72図1 図版33	皿 小皿	口径8.0 底径4.5 器高2.2	土師器		外底糸切り　内面2段で見込みは螺旋ナデ、外面3段ナデ　焼成良好	不明	内外面にぶい黄橙色　外面口唇部に油煙　外面に変色もある	在地	不明
北東黒色土整地層 第72図2 図版33	皿 小皿	口径7.6 底径4.0 器高2.0	土師器		外底糸切り　内面2段で見込みは螺旋ナデ、外面3段ナデ　焼成良好　内外にぶい黄橙色	不明	完形　口唇部に油煙がわずかに見られる	在地	不明
北東黒色土整地層 第72図3	椀	口径(10.7) 底径4.5 器高6.8	陶器	淡灰白色の灰釉を底部以外全面に掛ける　釉発色・焼成良好	削り出し高台 無文	底部露胎		肥前	17世紀後半
北東黒色土整地層 第72図4	椀 漆椀模倣	口径11.4 底径5.6 器高7.7	磁器	透明釉は発色良、焼成も良	貼り付け高台 無文	畳付釉剥ぎ	珍しい器形　良品	肥前	17世紀後半
北東黒色土整地層 第72図5	皿 小皿	口径8.4 底径3.3 器高2.6	陶器	内面口縁部から外面胴部まで暗茶褐色の鉄釉掛け　焼成釉の発色良好	底部糸切り 無文	粘土塊の痕跡なし		武雄	不明
北東黒色土整地層 第72図6	皿	口径12.0 底径4.5 器高3.0	陶器	淡黄茶灰色の灰釉　焼成良好　高台露胎	高台削り出し　内面白化粧土の雑巾掛け	見込みに蛇の目釉剥ぎ　底部露胎	16号溝に類似品あり	肥前	18世紀後半 ～19世紀中葉
北東黒色土整地層 第72図7	皿	口径13.7 底径5.0 器高4.2	陶器	透明度の高い灰釉を底部以外に掛けた後、胴緑釉を内面から外面口縁部に上掛けする　釉発色・焼成良好	高台削り出し 無文	見込みに蛇の目釉剥ぎ　底部露胎		肥前	17世紀後半
北東黒色土整地層 第72図8 図版33	香炉	口径10.0 底径4.6 器高5.6	陶器	内面口縁部から外面胴部まで青緑色の灰釉掛け　焼成釉の発色良好	削り出し高台　無文	底部露胎　見込みに器面の荒れている部分があるが、焼成時に小さい器種を重ね焼きしたものか		肥前	18世紀前半 ～18世紀中葉
北東黒色土整地層 第72図9	瓶 京焼風	口径5.9 最大径8.7	陶器	淡黄灰色の灰釉を外面に掛ける、内面には鉄釉が流れているので口縁部は鉄釉掛けだろう　焼成良好	高台削り出し　外面に鉄絵で笹文、緑灰色の灰釉で葉文を上描き	畳付釉剥ぎしていない　高台露胎		肥前	不明
北東黒色土整地層 第72図10 図版33	壺 小型壺	口径(2.9) 底径4.0 器高4.5	陶器	底部以外暗茶褐色の鉄釉を厚く掛ける	底部糸切り　無文	底面に粘土塊目跡の痕跡あり		肥前	
北東黒色土整地層 第72図11	壺	口径8.0 底径4.5 器高2.2	陶器	灰茶褐色の灰釉を外面に掛ける	線刻で木葉文	不明		瀬戸か	

表 32　1 次調査出土土器・陶磁器・瓦観察表 32

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm,g) ( )は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見		
							特記事項	推定産地	推定年代
北東黒色土整地層 第72図12	染付 小型碗	口径7.6 底径3.4 器高4.1	磁器	透明釉・呉須は発色良、焼成も良	口縁部外面に雨降文	畳付釉剝ぎ		有田	18世紀前半
黒色土包含層 第72図13	染付 青磁掛け分け 碗蓋	口径(11.0) 底径(4.3) 器高3.0	磁器	外面は摘み部内面以外青磁釉、呉須・青磁釉は発色不良、透明釉・焼成は発色良	摘み部削り出し　内面胴上半に煤がついているので、線香立てかもしれない　呉須で天井部は内外モチーフ不明、内面口縁部は袈裟襷文、胴部は葉文	摘み部端釉剝ぎ	口縁部が欠けていないので灰落としではない	有田	18世紀後葉～19世紀初頭
北東黒色土整地層 第72図14	染付 中皿	口径(32.4) 底径(19.0) 器高5.5	磁器	呉須は発色良、透明釉発色良	貼り付け高台　呉須で外面は唐草文、内面は蛸唐草文、見込みはザクロ文　裏銘は「大明成化年製」の一部	畳付釉剝ぎ　砂目付着		有田	18世紀前半
北東黒色土整地層 第72図15	染付 中皿	口径(31.0) 底径(8.4) 器高5.4	磁器	呉須は発色良、透明釉発色良	貼り付け高台　呉須　外面は唐草文、見込みは芙蓉文　裏銘は「富貴長春」の一部	畳付釉剝ぎ		有田	18世紀前半
北東黒色土整地層 第72図16	染付 瓶	口径(5.8)	磁器	透明釉内外掛け、発色・焼成良好	口縁部肥厚　呉須で外面胴部に花文	不明		有田	17世紀中葉～末
北東整地層 第73図1	皿 極小皿	口径(9.0) 底径(6.4) 器高1.9	土師器		内外黄灰白色を呈し、変色なし　底部糸切り　外面3段、内面2段ナデ　見込みは螺旋状ナデ　無文	不明		在地	不明
北東整地層 第73図2	擂鉢	—	陶器	口縁部に内外薄く鉄釉掛け　焼成良	口縁部内面側肥厚　内面口縁下に単位不明の擂り目が入る	不明		肥前	17世紀中葉～末
北東整地層 第73図3	擂鉢	—	陶器	口縁部に内外鉄釉掛け　焼成良	口縁部外面側玉縁状に肥厚　内面口縁下に単位不明の擂り目が入る	不明		肥前	17世紀中葉～末
北東整地層 第73図4	擂鉢	底径10.0	陶器	口縁部に鉄釉が掛かるタイプ　焼成良好	底部糸切り　内面単位の擂り目	底面に粘土塊目跡の痕跡あり		肥前	17世紀中葉～末
北東整地層 第73図5	擂鉢	底径(12.0)	陶器	口縁部に鉄釉が掛かるタイプ　焼成良好	底部糸切り　内面12本単位の擂り目	底面に粘土塊目跡の痕跡あり		肥前	17世紀中葉～末
北東整地層 第73図6	軒丸瓦 瓦当	径(15.2)	瓦質		B5類 瓦当以外ナデ　燻はなく青灰色　焼成良好	不明		在地	不明
北東整地層 第73図7	軒丸瓦 瓦当	径(16.2)	瓦質		A8類 瓦当以外ナデ凹面の簾痕ナデ消し　燻はなく全面青灰色　焼成良好　巴文は異様に細長い	不明	珠文の珠に段があるのは型に彫り込む工具痕か	在地	不明
北東整地層 第73図8	軒丸瓦 瓦当	径(15.0)	瓦質		A9類 瓦当以外ナデ　燻はなく青灰色　焼成良好	上部は灰黒色、それ以外は青灰色なので、凸面を下にして焼成したか		在地	不明
北東整地層 第73図9	軒平瓦	瓦当厚4.5 厚さ1.9	瓦質		三葉文A1b類　各面丁寧なナデで、凸面の瓦当との接合部は粘土を被せている　発色良好　黒灰色		凹面火を受けている	在地	不明
北東整地層 第73図10	軒平瓦	瓦当厚3.2 厚さ1.1	瓦質		三葉文C1類の崩れ　発色良　凹面は黒灰色だが、凸面と瓦当面は青灰色		瓦当面は調整粗く、未調整部分も残る	在地	不明
北東整地層 第73図11	軒平瓦	瓦当厚3.3 厚さ1.6	瓦質		三葉文B5a類　各面丁寧なナデ仕上げで成型痕が観察できない　発色良好　黒灰色		瓦当面右に菊花文のスタンプあるが、類例ない	在地	不明
北東整地層 第73図12	軒平瓦	瓦当厚4.2 厚さ1.6	瓦質		三葉文を主文とする唐草文だが分類不能　発色良　全面は暗灰色　全面ナデ仕上げ	不明		在地	不明
北東整地層 第73図13	軒平瓦	瓦当厚(4.8) 厚さ2.0	瓦質		三葉文A3類　発色良好　青灰色を呈す　各面丁寧なナデ仕上げで成型痕が観察できない	不明		在地	不明
北東整地層 第73図14	軒平瓦	瓦当厚4.5 厚さ1.5	瓦質		三葉文を主文とする唐草文と思われるが分類不能　各面丁寧なナデ仕上げ　発色良好　暗灰色			在地	不明
北東整地層 第73図15	軒平瓦	瓦当厚(3.4) 厚さ1.5	瓦質		三葉文B3類　発色良　凹面は黒灰色だが、凸面と瓦当面は青灰色		瓦当面は調整粗く、未調整部分も残る	在地	不明
北東整地層 第73図16	軒平瓦	瓦当厚4.1	瓦質		三葉文A2類　各面丁寧なナデ仕上げで成型痕が観察できない　発色良好　青灰色			在地	不明
北東整地層 第74図1	熨斗瓦	厚さ2.3	瓦質		反りがない　発色良　暗灰色を呈す　全面ナデ仕上げ後に沈線が入る	不明		在地	不明
北東整地層 第74図2 図版43	鯱瓦 鰭部	厚さ2.6	瓦質		型押し成型だろうか　各面丁寧にナデ　先端に向かって薄くなている　燻はなく全面青灰色　発色良好　無文	不明		在地	不明
北東整地層 第74図3 図版33	土人形 猿	高さ4.1 幅3.8 奥行5.1	土製品		手捏ね成型で目・鼻を刺突で、口を沈線で表現している　黄灰白色を呈し変色なし		片目がないのは偶発的なものか	在地	不明
北東整地層 第74図4	土製カマド	—	瓦質土器		外面タテハケ、内面ナナメハケで口縁部はケズリ、ケズリの下端をヨコハケ　灰黒色～青灰色で使用変色なし		大きな開口部をも筒形で、未使用か？	在地	不明

表33 1次調査出土土器・陶磁器・瓦観察表33

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm,g) ()は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見		
							特記事項	推定産地	推定年代
区画整地層 第74図5	皿	口径(21.8) 底径(15.2) 器高4.3	土師器		底部ナデ 外面目の細かいタテハケ、内面ヨコハケ 焼成良好 内面にぶい灰褐色	不明	底部は糸切りナデ消しか 外面黒褐色は使用変色	在地	不明
区画整地層 第74図6	皿	口径(21.8)	陶器	内外面灰黄色の灰釉を内面から胴部中位まで掛け、内面にモチーフ不明の鉄絵上描き 焼成・発色良好		不明		肥前	17世紀末 ～18世紀中葉
区画整地層 第74図7	塊	底径(4.4)	磁器	焼成強く貫入多い 発色やや不良	削り出し高台 文様の有無不明	畳付に砂目付着		有田	不明
整地層 第74図8	染付 碗	口径10.1 底径4.5 器高5.3	磁器	透明釉の発色不良で白濁 見込みにひっつきあり	呉須 外面雪輪文 厚手のくらわんか手ややひずみあり 外底に崩れた「大明」	畳付は釉剥ぎ		有田	18世紀初頭 ～前葉
区画整地層 第74図9	染付 皿 5寸皿	口径(13.4) 底径(7.2) 器高2.3	磁器	透明釉呉須発色良好 焼成良好 良品	小片のため外面唐草文・外底銘は不明 内面は唐草文か	見込みに蛇の目釉剝ぎ、畳付は釉剥ぎ		有田	不明
整地層 第74図10 図版47	土人形 土馬	高さ7.6 幅5.5 厚さ4.3	土製品		手捏ね成型で、沈線と刺突で顔を表現している 黄橙色を呈し焼成良好			在地	不明
礎石1 第75図1	甕 半胴甕	—	陶器	内外茶褐色の鉄釉 発色焼成良好	口縁部内傾後、外面側を肥厚	不明		肥前	17世紀後半
礎石4 第75図2	染付瓶	—	磁器	焼成・発色やや不良	内面ケズリ 外面に界線のみ残る	畳付釉剝ぎ、砂目付着		有田	不明
礎石5 第75図3	平瓦	厚さ1.9	瓦質		各面ナデ 黄灰白色を呈し変色なし 凸面に緊縛痕らしい傷あり	不明		在地	不明
20号溝か22号溝 第75図4 図版43	鯱瓦	—	瓦質		手捏ね成型か 内面はケズリとナデ 青灰色 焼成良好 外面に突帯と弧線の沈線	不明		在地	不明
攪乱 第75図5 図版33	塊 京焼風色絵	口径(8.5) 器高5.8	陶器	淡黄灰色の灰釉 焼成良好 高台露胎	高台削り出し 透明度の高い淡黄灰色の灰釉を掛け、外面緑彩で葉、鉄釉で枝、赤で花文を上描き	痕跡なし		肥前	18世紀第2四半期
攪乱 第75図6	軒丸瓦 瓦当	面径(15.8)	瓦質		B1類 型から外して縁をナデている 燻はなく青灰色 焼成良好	不明	巴文の風化が著しい	在地	不明
攪乱 第75図7	軒丸瓦 瓦当	面径(15.0)	瓦質		A1b類 型から外して縁をナデている 内面側の縁もナデ窪んでいる 燻はなく青灰色 焼成良好	不明	厚手 瓦当側の径が大きい	在地	不明
攪乱 第75図8 図版33	小型器種	底径3.6	土師器		底部糸切り 内外ナデ 外底に「田」、外面は「山田」を右から書いたもの 内外灰白色を呈し、変色なし			在地	不明
出土地不明 第75図9	不明 窯道具か	高さ3.1	土師質土器		手捏ねで角のつく環を作り、角に突起を貼り付ける 焼成は良い		窯道具にしては被熱がない 土師窯だからか	在地	不明
検出面 第75図10 図版47	土人形 土馬	高さ2.8 幅2.2 奥行4.6	土製品		たてがみ部分と顔の一部が欠損している 手捏ね成型 黄橙色を呈し、変色なし	不明		在地	不明

表34　2次調査出土土器・陶磁器・瓦観察表1

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm,g) ()は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見		
							特記事項	推定産地	推定年代
1号土坑 第77図1	軒丸瓦 瓦当	面径14.5 厚さ2.0	瓦質		A1a類　凹面の成型痕不明　焼成良好 内外黒灰色		瓦当面摩滅著しい 砂粒多い	在地	不明
1号土坑 第77図2	瓦 丸瓦	厚さ2.0	瓦質		凸面ナデ仕上げ　凹面ざらつきあり　摸骨か不明　下端凸面ケズリ　発色良好 黒灰色		搬入品	不明	不明
1号土坑 第77図3 図版34	丸瓦	長さ24.2 連結部幅14.2 厚さ2.0	瓦質		スダレ痕ケズリで基部には残る　凸面ミガキ、凹面ナデ仕上げ　下部凹面ケズリ 発色良好　黒灰色　一部に銀化		完形	在地	不明
1号土坑 第77図4	瓦 軒平瓦	瓦当厚4.3 厚さ2.3	瓦質		三葉文A2類　瓦当面に歪みあり　凹面 欠損　焼成良好　内外黒灰色		摩滅著しい　顎が厚い	在地	不明
1号土坑 第77図5	瓦 軒平瓦 瓦当	面幅(22.2) 瓦当厚4.1 先端厚さ1.5	瓦質		三葉文A1b類　瓦当面に歪みあり　凹面 ミガキ、凸面ナデ　焼成良好　内外黒灰色		范に変形があるのか、外すときの失敗	在地	不明
1号土坑 第77図6	瓦 軒平瓦 瓦当	面幅(25.0) 瓦当厚4.4 先端厚さ1.5	瓦質		三葉文A1b類　凹面ナデ、凸面ナデ　焼 成良好　内外黒灰色を呈す　胎土に砂 粒多い			在地	不明
1号土坑 第77図7	瓦 軒平瓦 瓦当	面幅(232) 瓦当厚4.1 先端厚さ1.5	瓦質		三葉文A1b類　凹面ナデ、凸面ナデ　焼 成良好　内外黒灰色　胎土は砂粒多い			在地	不明
3号土坑 第78図1	小皿 極小皿	口径(5.8) 底径3.3 器高1.6	土師器		底部糸切り　外面2段ナデ、内面2段ナ デ　焼成良好で内外明橙色	底部縁に粘土塊あり	赤変があるので焼塩壺の蓋か	在地	不明
3号土坑 第78図2 図版34	小皿	口径6.2 底径3.4 器高1.5	土師器		底部糸切り　内面1段ナデで、見込みは 回転ナデ　焼成良好で黄橙色だが、内 外に変色あり		完形　焼塩壺の蓋か	在地	不明
3号土坑 第78図3	土師器 小皿	口径7.55 底径4.4 器高1.3	土師器		底部糸切り　外面2段ナデ、内面2段ナ デで見込みは螺旋ナデ　焼成良好で内 外灰白色	底部縁に粘土塊あり	器壁が薄い　赤変があるので焼塩壺の蓋か	在地	不明
3号土坑 第78図4	鉢 焙烙	—	土師質土器		口縁部外面肥厚、外面オサエ列、内面 は丁寧なヨコハケで、下位は使用による 摩滅　焼成良好		外面は煤付着、内面は胴下位が使用による変色	在地	不明
3号土坑 第78図5	鉢 火鉢	口径(18.5)	瓦質土器		型押し成型で、内面オサエを残す　口縁 部内傾で側面に窓あり　外面から口唇 部はミガキ　焼成良好で内外灰黒色		光沢あり　佐賀で多く見るタイプ	在地	不明
3号土坑 第78図6	摺鉢	口径(36.8)	陶器	内外鉄釉掛け　焼成・発色良	摺り目単位不明で、上端ナデ消し　口縁 部に片口の端部あり　口唇部肥厚　胴部 外面にナデにより段ができる			武雄	18世紀中葉 ～19世紀中葉
3号土坑 第78図7	変形皿	—	陶器	内外鉄釉掛け　内面の灰釉は 上掛　焼成・発色良	口縁部はオサエで突起を作り、波状口 縁を成す　無文			肥前	不明
3号土坑 第78図8	埦 京焼風	口径(9.5) 底径3.3 器高5.6	陶器	高台深い削り出し　無文　淡暗黄灰色の灰釉を高台以外に掛けた上に外 面に鉄絵の山水文　焼成良好		高台露胎		肥前	18世紀中葉
3号土坑 第78図9	皿 小皿	口径8.8 底径3.4 器高2.2	陶器	内面から外面口縁部に鉄釉	無文	底部にアルミナ塗布	見込みにはアルミナなし	肥前	不明
3号土坑 第78図10 図版34	蓋 壺蓋	最大径13.3 受け部径9.9 器高5.8	陶器	外面に黄緑色の灰釉掛け、裾 下面は釉剥ぎ　焼成・発色良い	鉄絵の花文の上に灰釉掛け　摘み部は 貼り付け	受け部は釉剥ぎ	完形　内面の変色は茶渋か	肥前	不明
3号土坑 第78図11	染付 小型碗	口径(7.6)	磁器	透明釉は全面掛け　呉須発色 良好	呉須で　外面に寿文充填		1次13号溝第48図8と近いが接合しない	有田	18世紀後葉
3号土坑 第78図12	染付 杯	口径(9.4) 底径4.0 器高5.5	磁器	透明釉・呉須の発色良	厚手のくわらんか手　呉須で外面コン ニャク印判で井戸形窓に蔦葉紋　外底 渦福		第62図15と同一モチーフ	波佐見	18世紀後葉
3号土坑 第78図13 図版34	紅猪口	口径3.2 底径1.6 器高1.7	磁器	乳白色の白磁釉　発色良好 焼成良好	外面は型押し成型による菊花文	外面露胎	完形	有田	18世紀後葉
3号土坑 第78図14	染付皿 輪花小皿	口径(24.4) 底径(7.8) 器高2.5	磁器	透明釉・呉須の発色良	型押し成型　呉須で外面唐草文、内面 花唐草	外底は蛇の目釉剝ぎ		有田	18世紀前葉
3号土坑 第78図15	染付 小型碗	口径(9.8)	磁器	透明釉・呉須発色やや不良 焼成良好	厚手のくわらんか手　呉須で外面コン ニャク印判で井戸形窓に蔦葉紋			波佐見	18世紀後葉
4号土坑 第78図16	染付 杯	口径(9.6)	磁器	透明釉・呉須の発色良	厚手のくわらんか手　呉須で外面コン ニャク印判で井戸形窓に蔦紋		第62図10と同一モチーフ	波佐見	18世紀後葉
4号土坑 第78図17	染付 碗	口径10.1 底径3.8 器高5.3	磁器	透明釉の発色不良　呉須の発 色と焼成は良好	厚手のくわらんか手　呉須で外面梅樹 文、外底に崩れた「明」	畳付釉剝ぎ		波佐見	18世紀後葉
4号土坑 第78図18	染付 碗	口径(13.0)	磁器	透明釉全面掛け　呉須発色良 好	外面呉須で唐草文	畳付釉剝ぎ　砂目付着	明代青花の唐草文様が簡略化したもの	有田	17世紀代か
4号土坑 第78図19	瓦 丸瓦	—	瓦質		凸面ヨコナデ、凹面スダレ痕　穿孔あり 発色良好　黒灰色		凹面のスダレ痕はナデ消さない	在地	不明
5号土坑 第79図1 図版34	埦	口径10.8 底径4.4 器高6.2	陶器	外面に暗緑灰色の灰釉掛けを内面から外面胴部中位まで掛け　発色・ 焼成良好		胴下位露胎		肥前	17世紀代
5号土坑 第79図2	染付 五寸皿	—	磁器	透明釉発色良好 呉須は下面 の発色やや悪い	呉須で外面唐草文、内面竹文			有田	17世紀後半
5号土坑 第79図3	瓦 軒丸瓦 瓦当	径14.5 厚さ1.7	瓦質		A1a類　凹面の成型痕不明　焼成良好 内外黒灰色		瓦当面摩滅著しい 砂粒多い	在地	不明
5号土坑 第79図4	瓦 軒丸瓦 瓦当	径14.3 厚さ1.75	瓦質		A1a類　凸面ミガキ、凹面に摸骨痕ケズ リ　布撚痕あり　焼成良好　内外黒灰色		瓦当面摩滅著しい 砂粒多い	在地	不明
5号土坑 第79図5 図版34	瓦 軒丸瓦 瓦当	長さ26.4 径14.9 厚さ2.0	瓦質		A1a類　凸面ナデ仕上げ　接合部はケズ リ　凹面布目ナデ消し　穿孔1　焼成良 好　内外黒灰色		凹面に布目の擦り痕残る　完形	在地	不明
5号土坑 第79図6	瓦 輪違い瓦	基部端幅7.8 厚さ1.6	瓦質		凸面ミガキ、凹面ナデ仕上げ 凹部のス ダレ痕ケズリ、基部には残る　発色良好 黒灰色			在地	不明

表35　2次調査出土土器・陶磁器・瓦観察表2

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm,g) ()は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見		
							特記事項	推定産地	推定年代
5号土坑 第79図7	瓦 熨斗瓦	厚さ1.5	瓦質		凸面に櫛歯沈線縦横にあり 側縁に沈線あり 発色良好 淡黒灰色 砂粒混入あり	小口部に粘土塊あり	摩滅著しい	在地	不明
5号土坑 第80図1 図版34	瓦 丸瓦	長さ25.2 連結部幅14.6 厚さ2.6	瓦質		凸面ミガキ、凹面スダレ痕ケズリ 基部にのみ残る 先端部ケズリ 発色良好 黒灰色		ほぼ完形	在地	不明
5号土坑 第80図2	瓦 軒丸瓦 瓦当	長さ26.4 連結部幅14.1 厚さ2.3	瓦質		凸面ナデ仕上げ 凹面布目ナデ消し 穿孔1 分類できないが面径が14.0cmに復元できるので、小型品 焼成良好 内外黒灰色		凹面に布目擦り痕残る 穿孔が中心軸からずれる	在地	不明
5号土坑 第82図1 図版34	瓦 軒平瓦	幅24.0 瓦当厚4.3 厚さ2.1	瓦質		三葉文B1類 凹面ミガキ 発色良好 淡黒灰色		凹面ナデ仕上げだが瓦当部接合痕残る	搬入品か	不明
5号土坑 第82図2 図版34	瓦 軒平瓦	幅22.2 瓦当厚4.1 厚さ1.7	瓦質		三葉文A1a類 凸面ミガキ、凹面ナデ仕上げ 瓦当面の裏面ナデ窪む 発色良好 淡黒灰色		瓦当面裏側の仕上げ方と三葉文が特徴的	搬入品か	不明
5号土坑 第82図3 図版34	瓦 軒平瓦 瓦当	幅22.4 瓦当厚4.4 厚さ1.5	瓦質		三葉文A1a類 凹面ナデ、凸面ナデ 瓦当面上端部面取り 焼成良好 内外黒灰色 砂粒多い			在地	不明
5号土坑 第82図4 図版34	瓦 軒平瓦	幅24.7 瓦当厚4.2 厚さ2.0	瓦質		三葉文A1b類 凸面ミガキ、凹面ナデ仕上げ 粘土積み上げ痕が残る 発色良好 黒灰色			在地	不明
5号土坑 第82図5	瓦 軒平瓦 瓦当	幅(23.6) 瓦当厚4.45 厚さ1.9	瓦質		三葉文A1b類 凹面ミガキ、凸面ナデ 焼成良好 内外黒灰色 砂粒多い		摩滅著しい	在地	不明
6号土坑 第82図6	瓦 軒平瓦 瓦当	瓦当厚4.45 厚さ1.65	瓦質		三葉文A1b類 凹面ミガキ、凸面ナデ 瓦当面裏面はナデで平坦 焼成良好 内外黒灰色			在地	不明
7号土坑 第82図7 図版35	小椀	口径6.8 底径2.1 器高2.6	陶器	発色不良の鉄釉を底部以外全面に掛ける 焼成良好	削り出し高台 無文	底部露胎	ほぼ完形	武雄	17世紀末 ～18世紀中葉
7号土坑 第82図8	摺鉢	－	陶器	口縁部内外に鉄釉を掛ける 焼成・発色良	口縁部内面肥厚 内面口縁下に単位不明の摺り目が入る	口縁部片のため		武雄	17世紀後半
7号土坑 第82図9	染付 杯	口径7.55	磁器	透明釉・呉須の発色良	呉須で外面竹笹文	高台欠損のため		有田	不明
7号土坑 第82図10	染付 皿 小皿	底径(6.6)	磁器	透明釉・呉須の発色良	高台貼り付け 外面文様の有無不明、呉須で内面花唐草文と丸文	畳付は釉剥ぎ		有田	不明
7号土坑 第82図11 図版35	染付 筆洗い	長さ(12.4) 幅(4.7) 器高2.1	磁器	胴下位に鉄釉を掛けた後、上半に透明釉掛け 透明釉・呉須発色・焼成良好	型押し成型 外底の布目ナデ消し 呉須で外面コンニャク印判の紅葉文と手描きの折れ松葉文 外底に所有者の墨書	底部釉剥ぎ	「口喜」「和之」まで判読できる	有田	不明
7号土坑 第82図12	瓦 軒平瓦 瓦当	幅(25.0) 瓦当厚3.45 厚さ1.85	瓦質		三葉文B2類 凹面ミガキ、凸面ナデ 焼成良好 内外黒灰色	焼成不良部が凹面にある	器面荒れほとんどない	在地	不明
7号土坑 第82図13 図版35	瓦 左袖瓦	軒平幅(19.9) 瓦当厚4.7 厚さ2.1	瓦質		A3b類 凹面ミガキ、凸面ナデ 穿孔あり 星形と丸十のスタンプ陽刻あり発色良好 黒灰色		凹面に銀化あり	在地	不明
8号土坑 第83図1	染付 端反碗	口径9.7 底径3.8 器高4.9	磁器	呉須は発色良、透明釉発色良	削り出し高台 外面に呉須で花樹と蝶、高台に凹凸文、内面口縁部に雷文帯、見込みに花文	畳付釉剝ぎ		有田	19世紀中葉
8号土坑 第83図2	染付 端反碗	口径10.5 底径3.9 器高4.9	磁器	透明釉の発色不良 呉須の発色と焼成は良好	高台が開く 呉須で 外面半菊文と蝶・草文	畳付釉剝ぎ	第99図9と同一種で、第85図19・第99図11の蓋とセット	有田	19世紀中葉
8号土坑 第83図3	染付 端反碗	口径10.0 底径3.95 器高4.9	磁器	呉須透明釉の発色 焼成良いが別個体との融着痕あり	高台貼り付け 呉須で外面草花文、見込みに松竹梅文	畳付釉剝ぎ		有田	19世紀中葉
8号土坑 第83図4 図版35	染付 端反碗	口径10.4 底径4.1 器高3.8	磁器	呉須は発色良、透明釉発色良	貼り付け高台 外面に呉須で花文、内面口縁部に雷文帯	畳付釉剝ぎ		有田	19世紀中葉
8号土坑 第83図5	染付皿 輪花五寸皿	口径14.9 底径9.0 器高3.2	磁器	透明釉・呉須の発色良	型押し成型 呉須で内面楼閣山水文 口錆あり	外底は蛇の目釉剝ぎ	第99図10と同じモチーフ	有田	19世紀中葉
8号土坑 第83図6	染付 杯	口径5.8 底径(2.8) 器高2.1	磁器	透明釉・呉須の発色良	外面胴部中位に段あり 内面はコバルト吹き付けによる帆掛け船文	畳付釉剝ぎ		肥前	19世紀中葉
8号土坑 第83図7	染付 仏飯器	口径(6.8) 底径4.3 器高5.7	磁器	透明釉呉須発色・焼成良好	外底はケズリで上げ底 外面は染付花半菊文帯	底部は釉剥ぎ		有田	18世紀後葉 ～19世紀中葉
8号土坑 第83図8 図版35	染付 水注	長さ12.9 高さ5.9 幅6.5	磁器	後部は釉剥ぎ 釉の発色・焼成良好	型押し形成の宝船形で先端と中位に穿孔 呉須で上面宝珠と七宝文のエンボスにダミなし	後部は釉剥ぎなので立てて焼成している	第86図15と同形でダミが掛からない 墨書なし	有田	19世紀中葉
8号土坑 第83図9 図版35	染付 水注	長さ12.5 高さ3.3 幅6.4	磁器	釉の発色・焼成良好	型押し形成の瓢箪形で先端と下位に穿孔、後部は釉剥ぎ エンボスにダミなし	後部は釉剥ぎなので立てて焼成している	墨書なし	有田	不明
8号土坑 第83図10	瓦 右軒桟丸 小丸瓦当部	径8.2	瓦質		凸面ミガキ、凹面ナデ 瓦当裏面に接合加工痕あり 巴文 焼成良好 内外黒灰色		摩滅なし 分類不能	在地	不明
9号土坑 第84図1	鉢 火鉢	口径(19.2)	土師質土器		型押し成型、外面ミガキ、内面ヨコナデ 無文 焼成良好 褐色パミス入り軟質			蒲池	不明
9号土坑 第84図2	鉢 火鉢	口径(30.8)	土師質土器		口縁部内面肥厚し内傾、内面口縁部から外面スリップ掛けてミガキ、内面はナデ 内面口縁部に手捏ねの突起接合 焼成良好 外面はスリップが掛かり灰白色で黒斑あり、内面は黄橙褐色		口唇部は使用により摩滅 突起部上面は使用変色あり	板東寺か	不明
9号土坑 第84図3 図版34	鉢 火鉢	口径(33.6)	土師質土器		頸部を逆L字状に外傾させ、口縁部は玉縁状に肥厚させる 外面ミガキ、内面ナデ窪む 無文で、頸部内面に線刻あり 内外黒灰色、金ウンモ目立つ		線刻「志植森」の下に間を開けて「十一」	在地	不明

表 36　2 次調査出土土器・陶磁器・瓦観察表 3

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm,g) ()は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見		
							特記事項	推定産地	推定年代
9号土坑 第84図4	鉢 火鉢	口径(33.0)	土師質土器		型押し成型、外面ミガキ、内面ヨコナデ 大型の突起がつく 無文 焼成良好 褐色パミス入り軟質			在地	不明
9号土坑 第84図5 図版35	鉢 火鉢	口径(43.8)	土師質土器		口縁部を肥厚させ逆L字状に外傾する 外面ミガキ、内面ナデ窪む 口唇部に線刻あり 外面黒灰色、内面は黄灰色		「口九」「立花 筑紫 由布」「梅澤 口 竹原」「口扱渡辺」	在地	不明
9号土坑 第84図6	焜炉	口径24.6	土師質土器		型押し成型、高台貼り付け 外面ミガキ、内面ヨコナデと中位はケズリ 外面は珠文の下に樹文の型押し 焼成良好		高台を接合して正置したため上げ底になる	在地	不明
9号土坑 第85図1 図版35	鉢 火鉢	口径18.1 底径19.8 器高21.5	土師質土器		高台接合、口縁部内面肥厚、内面口縁部から外面ミガキ、内面は丁寧なナデ 焼成良好 軟質 精良		外面胴部中位に2条の線刻があり、そこから上は灰黒色で、下は黄灰白色	蒲池	不明
9号土坑 第85図2	焜炉	最大径26.5	土師質土器		型押し成型、高台貼り付け 外面に格子目文の型押し、高台に穿孔 内外黒灰色だが胎はにぶい黄灰色 焼成良好			在地	不明
9号土坑 第85図3	焜炉	底径21.6	土師質土器		型押し成型、外面ミガキ、内面ヨコナデ 内面口縁下にはオサエ列 無文で焼成良好の良品			在地	不明
9号土坑 第85図4 図版36	大甕	口径52.8 底径19.8	土師質土器		口縁部肥厚、外面口縁部は目の粗いハケをナデ消し、胴部は目の細かいハケで丁寧な仕上げ、内面目の粗いハケナデ消し 内外面橙灰色で、内面底部と外面はやや色落ちしている 焼成良好			在地	不明
9号土坑 第85図5	瓶 インク瓶	口径2.3	炻器		外面ナデ、内面ケズリ 外面から内面口縁部は淡茶灰色 焼成・発色良好			不明	不明
9号土坑 第85図6	瓶 インク瓶	底径5.4	炻器		底部縁は面取り、外面ナデ、内面ケズリ 外面から内面口縁部は淡茶灰色 焼成・発色良好	外底が火を受けていないので、正置焼成		不明	不明
9号土坑 第85図7 図版36	水差し蓋	口径4.3 底径3.2 器高1.3	陶器	上面に透明度の高い灰釉を掛ける	下底ケズリ 摘み部手捏ね成型貼り付け 無文 下底に墨書	裾部の下面釉剝ぎ		肥前	不明
9号土坑 第85図8 図版36	水差し	口径6.0 底径6.0 器高6.6	陶器	内面口縁部から外面胴部に透明度の高い灰釉掛け	外底ケズリ無文 下底に墨書	外底釉剝ぎ	墨書は「山田口〔彦ヵ〕」	肥前	不明
9号土坑 第85図9 図版36	蓋 土瓶蓋	裾径10.0 受け部径6.6 器高2.1	陶器	外面に発色不良の釉掛け 焼成良い	摘み貼り付け 上面に鉄絵の花文	受け部釉剝ぎ	第99図6とセット	武雄	不明
9号土坑 第85図10	染付 碗 湯呑碗	口径6.8	磁器	呉須透明釉の発色 焼成良好	腰が張る器形 呉須で 外面丸文にススキ		第85図11・第99図13と同文様	有田	19世紀中葉
9号土坑 第85図11	染付 碗 湯呑碗	口径6.8 底径3.4 器高5.3	磁器	透明釉の発色不良 呉須の発色と焼成は良好	呉須で 外面丸文にススキ	畳付釉剝ぎ	第85図10・第99図13と同文様	有田	19世紀中葉
9号土坑 第85図12 図版36	染付 碗 湯呑碗	口径5.9 底径3.0 器高4.7	磁器	透明釉の発色不良 呉須の発色と焼成は良好	高台直立 呉須で 外面ススキ	畳付釉剝ぎ	完形	有田	19世紀中葉
9号土坑 第85図13	染付 碗 湯呑碗	口径6.4 底径3.8 器高4.9	磁器	透明釉・呉須の発色良	高台直立 呉須で 外面波文か	畳付釉剝ぎ		有田	19世紀中葉
9号土坑 第85図14	染付 碗	口径12.2 底径4.6 器高5.3	磁器	呉須・透明釉発色良	削り出し高台 外面に呉須で竹笹文、外面口縁部と高台と内面口縁部には太界線	畳付釉剝ぎ		有田	19世紀中葉
9号土坑 第85図15	蓋 急須蓋	最大径5.4 受け部径3.8 器高2.5	磁器	乳白色の白磁釉上面掛け、裾下面は釉剝ぎ 発色良好 焼成良好	型押し成型・摘み貼り付け後、穿孔 受け部貼り付け 上面に桜花文のエンボス、その上に灰釉掛け	下面露胎	完形 下面変色は茶渋か	不明	不明
9号土坑 第85図16 図版36	染付 碗蓋	裾径8.0 撮み部径3.2 器高1.9	磁器	呉須は発色良、透明釉発色良	摘み部貼り付け コバルトで外面に扇文と菊文	摘み部端釉剝ぎ	完形	有田	19世紀中葉
9号土坑 第85図17	染付 蓋	裾径11.8 撮み部径5.0 器高3.1	磁器	呉須は発色良、透明釉発色良	外面に2種の花文交互入れ、内面口縁部に雷文帯、見込みに渦文帯の中に崩れた松竹梅文	摘み部上端は釉剝ぎ		有田	19世紀中葉
9号土坑 第85図18	染付 碗蓋	裾径8.8 撮み部径3.7 器高3.0	磁器	呉須は発色良、透明釉発色やや不良、焼成良好	摘み部貼り付け 呉須で外面に三升文と蔦葉文、高台に櫛歯文、内面は口縁部に雷文帯、見込みに崩れた松竹梅文	摘み部端釉剝ぎ		有田	19世紀中葉
9号土坑 第85図19 図版36	染付 碗蓋	裾径9.2 撮み部径3.7 器高3.0	磁器	呉須は発色良、透明釉発色良	摘み部貼り付け 呉須で外面に半菊文と蝶・草文、内面は口縁部に雷文帯、見込みに崩れた松竹梅文	摘み部端釉剝ぎ	第99図11の蓋と同一種、第83図2・第99図9とは同一セット	有田	19世紀中葉
9号土坑 第86図1	染付 皿 輪花小皿	口径8.6 底径4.0 器高2.4	磁器	透明釉の発色不良	型押し成型 無文	畳付釉剝ぎ 見込みにハリ目跡		有田	17世紀第4四半期
9号土坑 第86図2	染付 皿 輪花五寸皿	口径(13.0) 底径8.4 器高3.1	磁器	透明釉・呉須の発色良	型押し成型 呉須で内面口縁部に雷文帯、草花文と蝶文	外底は蛇の目釉剝ぎ	完形	有田	18世紀第2四半期
9号土坑 第86図3	白磁 花弁口縁碗	口径(9.6) 底径(4.4) 器高6.7	磁器	透明釉の発色良	型押し成型 無文	畳付釉剝ぎ		有田	不明
9号土坑 第86図4	染付 段重	口径(13.2) 底径6.6 器高7.4	磁器	透明釉の発色不良 呉須の発色と焼成は良好	呉須で 外面鳳凰文	口唇部と畳付は釉剝ぎ		有田	不明
9号土坑 第86図5	染付 筆入れ	口径5.4 底径(5.8) 器高9.9	磁器	透明釉内面口縁部から胴外面胴部に掛ける 透明釉・呉須発色良好 焼成良好	外面呉須で山水文	外底釉剝ぎ		有田	不明
9号土坑 第86図6	染付 筆入れ	口径5.1 底径(6.6)	磁器	透明釉内面口縁部から胴外面胴部に掛ける 透明釉・呉須発色良好 焼成良好	外面呉須で、口縁部には雷文帯、頸部と胴部は丸文散らし	外底釉剝ぎ	完形	有田	不明

表 37　2 次調査出土土器・陶磁器・瓦観察表 4

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm,g) ()は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見		
							特記事項	推定産地	推定年代
9号土坑 第86図7	染付 筆入れ	底径6.9	磁器	透明釉内面口縁部から胴外面胴部に掛ける 透明釉・呉須発色良好 焼成良好	呉須で外面胴部に草花文、胴下位は複線草文帯 外底に墨書	外底釉剥ぎ	墨書は判読不能	有田	不明
9号土坑 第86図8 図版34	染付 深形紅皿	口径7.0 底径(2.8) 器高2.9	磁器	透明釉・呉須発色・焼成良好	型押し成型 外底の布目ナデ消し 呉須で外面コンニャク印判の紅葉文と手描きの折れ松葉文 外底に墨書	畳付釉剥ぎ 砂目付着	完形 外面は右書きで「お笹紅大坂新町」	有田	不明
9号土坑 第86図9 図版36	ミニチュア瓶 神酒徳利	口径1.8 底径3.0 器高7.3	磁器	透明釉の発色不良 呉須の発色と焼成は良好	削り出し高台 外面に呉須で梅鉢文と竹笹文	畳付釉剥ぎ	型合わせの痕跡なし	有田	18世紀後葉 ～19世紀中葉
9号土坑 第86図10	瓶 仏花瓶	口径2.5 底径5.3	磁器	外面から内面口縁部瑠璃釉掛け 発色良好	無文	畳付釉剥ぎ	図上接合	有田	17世紀末 ～18世紀後葉
9号土坑 第86図11 図版36	蓋 急須蓋	裾径4.15 器高1.8	磁器	透明釉・呉須の発色良	摘み貼り付け後、穿孔 上面に呉須で竹笹と三日月文	裾部は釉剥ぎ	完形	有田	不明
9号土坑 第86図12 図版36	紅猪口	口径5.4 底径2.65 器高1.9	磁器	乳白色の白磁釉全面掛け 発色良好 焼成良好	外面は型押し成型による蛸唐草文	外面露胎	完形	有田	19世紀中葉
9号土坑 第86図13 図版36	染付 水注	長さ12.6	磁器	呉須透明釉の発色・焼成良好	型押し形成の宝船形で先端と中位に穿孔 呉須で上面宝珠と七宝文のエンボスをダミにする	後部は釉剥ぎなので立てて焼成している	第83図8と同形でダミが掛からない	有田	19世紀中葉
9号土坑 第86図14	瓦 軒丸瓦 瓦当	径(7.8) 厚さ2.05	瓦質		A11類 文様が扁平 凸面に布目あり 焼成良好 内外黒灰色			在地	不明
9号土坑 第86図15	瓦 軒丸瓦 瓦当	径(7.4) 厚さ1.8	瓦質		A10類 凹面に摸骨痕と布目が残る 焼成良好 内外黒灰色			在地	不明
9号土坑 第86図16	瓦 軒丸瓦 瓦当	径12.1 厚さ2.4	瓦質		A13類 ナデ仕上げ 焼成良好 内外黒灰色		小型の軒丸	在地	不明
9号土坑 第87図1	瓦 軒丸瓦 瓦当	径14.9 厚さ2.0	瓦質		A11類 ナデ仕上げ 焼成良好 内外黒灰色			在地	不明
9号土坑 第87図2	瓦 軒丸瓦 瓦当	径14.95 厚さ2.05	瓦質		A11類 ナデ仕上げ 焼成良好 内外黒灰色		小型の軒丸	在地	不明
9号土坑 第87図3	瓦 軒丸瓦 瓦当	径14.9 厚さ2.1	瓦質		A11類 ナデ仕上げ 焼成良好 内外黒灰色			在地	不明
9号土坑 第87図4	瓦 軒丸瓦 瓦当	径16.3	瓦質		B4類 ナデ仕上げ 焼成良好 内外黒灰色		第87図5と同範	在地	不明
9号土坑 第87図5	瓦 軒丸瓦 瓦当	径(15.6) 厚さ2.0	瓦質		B2類 ナデ仕上げ 焼成良好 内外黒灰色		第87図4と同範	在地	不明
9号土坑 第87図6	瓦 軒丸瓦 瓦当	径(15.8)	瓦質		B4類 瓦当裏面ケズリ後ナデ 焼成良好 内外黒灰色			在地	不明
9号土坑 第87図7	瓦 軒丸瓦	径(15.4) 厚さ2.3	瓦質		B4類 スダレ痕と摸骨痕を軽くナデ消し深いカキ目を3つ入れる 釘穴あり 発色良好 黒灰色			在地	不明
9号土坑 第88図1	瓦 軒丸瓦	連結部幅14.6 玉縁端幅8.4 厚さ2.2	瓦質		瓦当欠損 凸面ミガキ 凹面スダレ痕・摸骨痕にヨコハケ 焼成良好 内外灰黒色		2つ穿孔なので、軒丸だろう	在地か	不明
9号土坑 第88図2	瓦 軒丸瓦	連結部幅13.4 玉縁端幅6.3 厚さ1.8	瓦質		瓦当欠損 凸面ミガキ 凹面布目・摸骨痕、基部にスダレ痕あり ナデ消しなし 焼成良好 内外灰黒色		2つ穿孔なので、軒丸だろう	在地か	不明
9号土坑 第89図1	瓦 丸瓦	連結部幅14.3 玉縁端幅6.3 厚さ2.0	瓦質		摸骨・スダレ痕を消さない 凸面整ったミガキ、凹面ナデ仕上げ 発色良好 黒灰色		凹面基部にケズリが入らない	搬入品	不明
9号土坑 第89図2 図版36	瓦 丸瓦	長さ28.0 連結部幅14.3 厚さ2.4	瓦質		摸骨痕あり スダレ痕を削っている ナデ仕上げ 発色良好 黒灰色	凸面の一部の灰白色は焼成時接地のためだろう	小口部の変形は乾燥時に接地したため ほぼ完形	在地	不明
9号土坑 第89図3	瓦 丸瓦	長さ29.6 連結部幅14.9 厚さ1.65	瓦質		スダレ痕を削っている ナデ仕上げ 発色良好 黒灰色			在地	不明
9号土坑 第89図4	瓦 丸瓦	下部幅(14.1) 厚さ2.0	瓦質		布目・摸骨痕ナデ消し ナデ仕上げ 発色良好 黒灰色			在地	不明
9号土坑 第90図1	瓦 丸瓦	連結部幅14.2 玉縁端幅8.6 厚さ1.85	瓦質		スダレ痕と摸骨痕をナデ消していないナデ仕上げ 発色良好 黒灰色	凸面中央に焼成不良部がある		在地	不明
9号土坑 第90図2	瓦 丸瓦	下部幅13.6 厚さ1.85	瓦質		スダレ痕ナデ消し 凸面ミガキ 発色良好 黒灰色			在地	不明
9号土坑 第90図3	瓦 丸瓦	幅11.0 厚さ2.0	瓦質		スダレ痕ナデ消し 発色良好 黒灰色		他の丸瓦より幅狭い	搬入品	不明
9号土坑 第90図4 図版37	瓦 輪違い瓦	長さ12.85 下部幅12.95 厚さ1.65	瓦質		スダレ痕ナデ消し 凹面基部ケズリ 発色良好 黒灰色		器面摩滅 完形	在地	不明
9号土坑 第91図1	瓦 左軒桟瓦 瓦当	下部幅(20.6) 瓦当厚4.7 厚さ2.0	瓦質		菊花文A3a類 凸面ミガキ、凹面ナデ仕上げ 発色良好 黒灰色			在地	不明
9号土坑 第91図2	瓦 左軒桟瓦 瓦当	下部幅(27.6) 瓦当厚4.55 厚さ2.0	瓦質		菊花文A3a類 凹面ミガキ、凸面ナデ隆起大きい 焼成良好 内外黒灰色			在地	不明
9号土坑 第91図3 図版37	瓦 右軒桟瓦	軒平幅23.3 瓦当厚4.5 下側厚1.7	瓦質		菊花文A3b類 凸面ミガキ、凹面ナデ仕上げ 粘土積み上げ痕が残る 右に丸十、左に星形のエンボス 発色良好 黒灰色		第99図3とセットか	在地	不明

表 38　2次調査出土土器・陶磁器・瓦観察表 5

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm,g) ()は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見		
							特記事項	推定産地	推定年代
9号土坑 第91図4	瓦 左軒軒平瓦	瓦当厚4.65 厚さ2.05	瓦質		菊花文A3b類　凸面ミガキ、凹面ナデ仕上げ　主文を菊文とする唐草文に大きな星型のエンボス　C1類色良好　黒灰色			在地	不明
9号土坑 第91図5	瓦 左軒軒平瓦 瓦当	厚さ1.85	瓦質		菊花文A3b類A3b類　凹面ミガキ、凸面ナデ　欠損のため主文不明の唐草文　○十マークあり　焼成良好　内外黒灰色		瓦当面高は最大高の中央が欠損しているため不明	在地	不明
9号土坑 第91図6	瓦 軒平瓦	瓦当厚4.65 厚さ2.05	瓦質		菊花文A2類　凹面ミガキ、凸面ナデ　☆形マークあり　焼成良好　内外黒灰色			在地	不明
9号土坑 第91図7	瓦 軒平瓦 瓦当	幅(28.4) 瓦当厚4.65 厚さ2.25	瓦質		菊花文A3b類　凹面ミガキ、凸面ナデ　菊を主文とする唐草文　○十マークあり　焼成良好　内外黒灰色		瓦当面高の最大高は中央部	在地	不明
9号土坑 第91図8	瓦 軒平瓦	幅(29.6) 瓦当厚4.1 厚さ1.9	瓦質		菊花文A3d類　凸面ミガキ、凹面ナデ仕上げ　発色良好　黒灰色			在地	不明
9号土坑 第91図9 図版37	瓦 軒平瓦 瓦当	幅28.5 瓦当厚4.4 厚さ1.6	瓦質		菊花文A3c類　凹面ミガキ、凸面ナデ　焼成良好　内外黒灰色			在地	不明
9号土坑 第91図10	瓦 右軒桟瓦 瓦当	瓦当厚4.35 厚さ2.25	瓦質		菊花文A1c類　凹面ミガキ、凸面ナデ　焼成良好　内外黒灰色			在地	不明
9号土坑 第91図11	瓦 軒平瓦 瓦当	瓦当厚4.65 厚さ2.1	瓦質		菊花文B類　凹面ミガキ、凸面ナデ　焼成良好　内外黒灰色			在地	不明
9号土坑 第92図1	瓦 左軒桟瓦	幅(27.2) 瓦当厚4.25 厚さ2.05	瓦質		半菊文B類　凹面ミガキ、凸面ナデ　7弁半菊文を主文とする唐草文　焼成良好　内外黒灰色			在地	不明
9号土坑 第92図2	瓦 右軒桟瓦	幅(23.4) 瓦当厚3.7 厚さ1.85	瓦質		半菊文C類　凸面ミガキ、凹面ナデ仕上げ　発色良好　黒灰色		幅が狭く、面高も低い	在地	不明
9号土坑 第92図3 図版37	瓦 軒桟瓦	軒平長さ27.6 瓦当厚4.4 厚さ1.85	瓦質		半菊文A類　凸面ミガキ、凹面ナデ仕上げ　小さい釘穴あり　発色良好　黒灰色			在地	不明
9号土坑 第92図4 図版37	瓦 軒桟瓦 鎌形	下弦幅22.7 瓦当厚3.8 厚さ2.1	瓦質		三葉文D類　凸面ミガキ、凹面ナデ仕上げ　発色良好　淡黒灰色		第92図5とは桟瓦の異なる型式の同笵文様	不明	不明
9号土坑 第92図5 図版37	瓦 右鎌軒桟瓦	下弦幅24.6 瓦当厚3.8 厚さ2.1	瓦質		三葉文D類　凹面ミガキ、凸面未調整　凹面と瓦当面に線刻　発色良好　黒灰色		凹面に「嘉永」、瓦面に「申」あるいは「田」と線刻	在地	不明
9号土坑 第93図1	瓦 軒平瓦 瓦当	瓦当厚4.75 厚さ2.05	瓦質		菊花文E2類　凹面ミガキ、凸面ナデ　不明マークは「石」の崩れか　焼成良好　内外黒灰色			在地	不明
9号土坑 第93図2	瓦 右軒桟瓦	瓦当厚4.6 厚さ2.95	瓦質		菊花文E3類　凸面ミガキ、凹面ナデ仕上げ　主文を菊文とする唐草文　発色良好　黒灰色			在地	不明
9号土坑 第93図3	瓦 右軒桟瓦	瓦当厚4.75 厚さ2.25	瓦質		菊花文E2類　凸面ミガキ、凹面ナデ仕上げ　発色良好　黒灰色			在地	不明
9号土坑 第93図4	瓦 軒桟瓦	軒平幅(24.2) 瓦当厚4.8 厚さ1.8	瓦質		菊花文E1類　凸面ミガキ、凹面ナデ仕上げ　篆書の「石・本」エンボスあり　発色良好　黒灰色			在地	不明
9号土坑 第93図5	瓦 右軒桟瓦 瓦当	瓦当厚4.6 厚さ2.0	瓦質		菊花文E1類　凹面ミガキ、凸面ナデ　篆書の「石・本」エンボスあり　焼成良好　内外黒灰色		器面剥落あり　「石本」は右読み	在地	不明
9号土坑 第93図6	瓦 軒平瓦	瓦当厚3.73 厚さ2.0	瓦質		唐草の巻き方がやや異なるが三葉文D類　凹面ミガキ、凸面ナデ　隆起大きい　焼成良好　内外黒灰色			在地	不明
9号土坑 第93図7	瓦 右軒桟瓦 瓦当	軒平幅(29.0) 瓦当厚4.6 厚さ2.2	瓦質		菊花文E3b類　凹面ミガキ、凸面ナデ　隆起が大きい　焼成良好　内外黒灰色			在地	不明
9号土坑 第93図8	瓦 右軒桟瓦	瓦当厚4.45 厚さ1.95	瓦質		菊花文E4類　凹面ミガキ、凸面ナデ　不明マークあり　焼成良好　内外黒灰色			在地	不明
9号土坑 第93図9	瓦 軒桟瓦 瓦当	瓦当厚4.45 厚さ1.95	瓦質		菊花文D1b類　凹面ミガキ、凸面ナデ　隆起が大きい　焼成良好　内外黒灰色		両端欠損のため左右不明	在地	不明
9号土坑 第93図10	瓦 右軒桟瓦	軒平幅(29.0) 瓦当厚4.4 厚さ2.1	瓦質		菊花文D1a類　発色良好　主文を菊文とする唐草文　黒灰色		瓦当右端部に面取りあり	在地	不明
9号土坑 第94図1	切り込み桟瓦	幅31.0 厚さ2.0	瓦質		ナデ仕上げ　小口部に星形のスタンプ　発色良好　黒灰色		差し込み部に漆喰付着	在地	不明
9号土坑 第94図2	瓦 平瓦	長さ31.1 幅27.7 厚さ2.1	瓦質		凹面ミガキ、凸面ナデ仕上げ　基部小口部に記号文2類スタンプ　発色良好　黒灰色　一部は銀化			在地	不明
9号土坑 第95図1	瓦 左袖瓦	長さ30.7 厚さ1.85 面厚1.85	瓦質		ナデ仕上げ　小口部に星形文1類のスタンプ　発色良好　黒灰色		重ねた部分は摩滅していない	在地	不明
9号土坑 第95図2	瓦 左袖瓦	厚さ1.8 面厚1.95	瓦質		ナデ仕上げ　袖垂れ端部を山形に加工している　発色良好　黒灰色			在地	不明
9号土坑 第95図3	瓦 隅振瓦	厚さ2.05	瓦質		ナデ仕上げ　発色良好　黒灰色			在地	不明
10号土坑 第97図1	鉢 火鉢	口径(22.6)	土師質		口縁部肥厚　外面型押し成型後ミガキ、内面ナデ　内外にぶい黒灰褐色			在地	不明
10号土坑 第97図2	鉢 火鉢	口径(22.9)	土師質		口縁部肥厚　外面型押し成型後ミガキ、内面ケズリ　内外にぶい黒灰褐色			在地	不明
10号土坑 第97図3	鉢 火鉢	底径(24.8)	土師質		外面ミガキ、内面ナデ　高台接合面に格子目加工あり　外面黒灰色褐色、内面暗褐色　焼成良好			在地	不明

表 39　２次調査出土土器・陶磁器・瓦観察表６

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm,g) ()は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見		
							特記事項	推定産地	推定年代
10号土坑 第97図4	鉢 火鉢	口径21.1 最大径(27.5)	土師質		外面ミガキ、内面ヨコナデ　口縁部に互い向かいに鍔形に焼成不良部分を文様化している　焼成良好　軟質			板東寺か	不明
10号土坑 第98図1	鉢 火鉢	口径(37.2)	土師質		外面ミガキ、内面ナデ 大型の手捏ね成型突起をもつ　残存部分に口唇部線刻なし　外面黒灰褐色、内面黄橙色　焼成良好			在地	不明
10号土坑 第98図2	鉢 火鉢	―	瓦質土器		口縁部肥厚して逆L字に外傾　外面ミガキ、内面ナデ　口唇部に線刻　上面は黒色、外面は暗黄灰色、内面は灰色			在地	不明
10号土坑 第98図3 図版37	鉢 火鉢	口径(38.0)	土師質		口縁部肥厚して逆L字に外傾　外面ミガキ、内面ナデ　口唇部に線刻　外面は光沢のある黒色、内面は暗黄橙色			在地	不明
10号土坑 第98図4 図版37	鉢 火鉢	―	土師質		口縁部肥厚して逆L字に外傾　外面ミガキ、内面ナデ　内面は暗黄橙色　胎土にウンモ多い		口唇部に線刻 外面は光沢のある黒褐色	在地	不明
10号土坑 第98図5 図版38	鉢 火鉢	口径30.0 器高17.9 底径21.0	瓦質土器		頸部を逆L字状に外傾させ、口縁部は肥厚させる　外面ミガキ、内面ナデ窪む　無文で、頸部内面に線刻あり		線刻文字は「表」「表寮」以外は判読できない	在地	不明
10号土坑 第98図6 図版38	鉢 火鉢	―	瓦質土器		突起部片で、上面に平滑面を設け、側面も整形している　上面に線刻あり　にぶい淡灰黒色、胎土にウンモ多い		線刻は「五号」	在地	不明
10号土坑 第99図1	急須蓋	口径(4.5) 器高0.5 底径(3.4)	拓器		型押し成型で天井部裾外面に布目痕があり、裾部下面にオサエあり　発色良好　灰白色　焼成良好		上面に判読できない墨書あり	不明	不明
10号土坑 第99図2	小皿 三島手	口径(9.2) 器高2.8 底径(4.2)	陶器	透明度の高い灰釉全面掛け	高台削り出し　見込みに、桜花文と渦文帯の象嵌	畳付は釉剥ぎ		武雄	19世紀前半
10号土坑 第99図3	小皿	口径(10.6) 器高2.7 底径(1.8)	陶器	内面のみ白磁釉で貫入あり	外底はケズリで上げ底、外面胴部もケズリで稜を持つ　口唇部にわずかだが炭化物付着		口唇部の炭化物から灯明皿か	不明	不明
10号土坑 第99図4 図版38	蓋 土瓶蓋 青土瓶	裾径8.6 器高3.9 受け部径6.4	陶器	外面に銅緑釉掛け　裾下面は釉剥ぎ　焼成・発色良い	摘み貼り付け　無文	受け部は釉剥ぎ	完形　第99図5とセット	肥前	19世紀前半
10号土坑 第99図5	土瓶 青土瓶	口径8.7 器高11.6 底径13.7	陶器	外面胴下位から内面口縁部まで白化粧土を掛け、外面胴中位から銅緑釉上掛け　口唇部は白化粧土のみ露出　内面胴下位は灰釉　焼成・発色良い　型押し成型　無文			第99図4の蓋とセット	肥前	19世紀前半
10号土坑 第99図6	土瓶	底径(8.0)	陶器	内外面発色不良の釉が掛かり、内面の透明度の高い灰釉は発色良い・焼成良	上げ底　外面に鉄釉による墨書か文様らしいものあり		9号土坑第85図9とセット	武雄	不明
10号土坑 第99図7	染付 碗	口径12.2 器高6.0 底径4.2	磁器	呉須と透明釉発色良	削り出し高台　呉須で　外面口縁部鳥・芙蓉・朝顔文、内面口縁部は四方襷文、見込みは半芙蓉文			有田	19世紀中葉
10号土坑 第99図8	染付 端反碗	口径12.2 器高6.7 底径4.4	磁器	呉須と透明釉発色良	削り出し高台　外面に2種の花文交互入れ、内面口縁部に雷文帯、見込みに渦文帯の中に崩れた松竹梅文	畳付釉剝ぎ		有田	19世紀中葉
10号土坑 第99図9	染付 端反碗	口径(10.8) 器高5.6 底径(4.2)	磁器	透明釉・呉須の発色と焼成は良好	高台貼り付け　呉須で外面に半菊文と蝶・草文、内面は口縁部に雷文帯、見込みに渦文帯　中央は不明	畳付は釉剥ぎ	第83図2・7、第99図11は揃い	有田	19世紀前葉
10号土坑 第99図10	染付皿 輪花五寸皿	口径14.9 器高4.3 底径9.0	磁器	透明釉・呉須の発色良	型押し成型　呉須で内面に楼閣山水文　口錆あり	外底は蛇の目釉剝ぎ	第83図5と同一モチーフ	有田	19世紀前葉～中葉
10号土坑 第99図11	染付 碗蓋	裾径(9.0) 器高3.0 撮み径3.5	磁器	呉須は発色良、透明釉発色やや不良、焼成良好	摘み部削り出し　呉須で外面に半菊文と蝶・草文、内面は口縁部に雷文帯、見込みに崩れた松竹梅文	摘み部端は釉剝ぎ	第85図19の蓋と同一種、第83図2・第99図9とは同一セット	有田	19世紀前葉
10号土坑 第99図12	染付 碗	口径6.8 器高5.0 底径3.4	磁器	透明釉全面掛け　呉須発色良好　良品	高台直立　外面呉須で蝶と菖蒲	畳付釉剝ぎ	完形	有田	19世紀前葉～中葉
10号土坑 第99図13	染付 碗	口径6.8 器高4.9 底径3.6	磁器	呉須透明釉の発色　焼成良好	高台直立　呉須で　外面丸文にススキ	畳付釉剝ぎ	第85図10・11と同文様	有田	19世紀前葉～中葉
10号土坑 第99図14	染付 碗	口径(6.6)	磁器	透明釉・コバルトの発色と焼成は良好	胴部面取り　コバルトで外面菊花文			有田	19世紀中葉
10号土坑 第99図15	染付 水注	―	磁器	呉須透明釉の発色・焼成良好	型押し形成で、下面に丁寧なオサエ列あり　中央に穿孔　呉須で上面瓢箪のエンボスをダミにする			瀬戸か	不明
10号土坑 第99図16 図版38	染付 水注	長軸9.5 短軸6.8 高さ2.3	磁器	白磁釉の発色・焼成良好	型押し形成の箱形で隅と対面に穿孔　上面の犬文に呉須でのダミが掛かる	底部は釉剥ぎなので正置して焼成		有田	不明
10号土坑 第99図17	染付 コンプラ瓶	最大径(7.2)	磁器	透明釉・呉須の発色と焼成は良好	内面ケズリ　呉須で　外面アルファベット「JAPANSCHZAKY」のうち「PA」のみ残る		第85図17の蓋とセット	波佐見	19世紀前葉～中葉
10号土坑 第99図18	土錘 管状土錘 図版48	長さ3.9 最大径2.0 重量11.37	土師質		手捏ね成型　明黄橙色で褐色パミス入る　精良		ほぼ完形	在地	不明
10号土坑 第100図1	瓦 軒丸瓦	径12.1 厚さ2.15	瓦質		A13類　凸面にスダレ痕あり　焼成良好　内外黒灰色		小型の軒丸瓦	在地	不明
10号土坑 第100図2	瓦 丸瓦	連結部幅14.0 玉縁端幅7.8 厚さ1.65	瓦質		凸面ミガキ、凹面ナデ仕上げ　下部凹面ケズリ　スダレ痕・摸骨痕が残る　発色良好　黒灰色　一部に銀化			在地	不明
10号土坑 第100図3	瓦 右軒桟瓦 巴文部	面径8.45 厚さ2.05	瓦質		内外摩滅で調整不明　焼成良好　内外黒灰色		摩滅あり	在地	不明
10号土坑 第100図4	瓦 右軒桟瓦	瓦当厚4.75 厚さ1.95	瓦質		菊花文A3b類　凸面ミガキ、凹面ナデ仕上げ 粘土積み上げ痕が残る　主文不明の唐草文　☆形のエンボス類　発色良好　黒灰色		摩滅あり　類例から朱文は9弁菊花文	在地	不明
10号土坑 第100図5	瓦 右軒桟瓦	瓦当厚4.7 厚さ2.05	瓦質		菊花文A3b類　凸面ミガキ、凹面ナデ仕上げ 粘土積み上げ痕が残る　☆形のエンボス　C1類　発色良好　黒灰色を呈する			在地	不明

表 40　2次調査出土土器・陶磁器・瓦観察表 7

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm,g) ( )は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見		
							特記事項	推定産地	推定年代
10号土坑 第100図6	瓦 右軒桟瓦	瓦当厚4.5 厚さ2.0	瓦質		菊花文A1c類　凸面ミガキ、凹面ナデ仕上げ 粘土積み上げ痕が残る　崩れた☆形のエンボス　発色良好　黒灰色を呈する		やや摩滅あり　☆形の上下の三角が失われた形	在地	不明
10号土坑 第100図7	瓦 右軒桟瓦	瓦当厚4.5 厚さ2.0	瓦質		菊花文E2類　凹面ミガキ、凸面ナデ　12弁菊文を主文とする唐草文　菊花文D5類　顎突出　灰黒色だが、焼成不良のため摩滅している		摩滅あり「石」か「古」のエンボス	在地	不明
10号土坑 第100図8	瓦 右軒桟瓦	瓦当厚4.25 厚さ1.6	瓦質		三葉文A1b類　凹面ミガキ、凸面ナデ　欠損のため主文不明の唐草文とスタンプ　焼成良好　凸面灰白色		接合痕に割れ目残る　類例から主文は三葉文	在地	不明
10号土坑 第100図9	瓦 軒平瓦	瓦当厚4.65 厚さ1.95	瓦質		菊花文D2類　凹面ミガキで光沢あり、凸面ナデ　顎突出　焼成良好　内外黒灰色		瓦当面キラコ多い	在地	不明
11号土坑 第102図1 図版40	蓋 火消し壺	口径10.5 底径(17.9) 器高10.9	土師質土器		厚手で内外ナデ　外面は灰白色だが、内面は煤付き、焼成良好　無文		外底の摩滅は使用のため	蒲池	不明
11号土坑 第102図2	鉢 焙烙	―	土師質土器		口縁部外面肥厚、口縁下はハケの上にオサエで、中位以下は未調整、内面は丁寧なヨコハケ　高台貼り付け　焼成良		内外黄灰色で変色なし　未使用か	在地	不明
11号土坑 第102図3 図版38	火鉢	―	土師質土器		口縁部肥厚して逆L字に外傾　口唇部に線刻　焼成良好で内外黄灰白色		第102図5と同一個体だろう「口里屋直口」	在地	不明
11号土坑 第102図4 図版39	火鉢	口径(37.6)	土師質土器		外面ミガキ、内面ナデで、内面に突起部の接合痕がある　口唇部に明治4年銘の後刻の線刻　外面黒灰色、内面にぶい淡灰色、胎は橙灰色　焼成良好		10号土坑にも非接合同一個体の破片があった	在地	不明
11号土坑 第102図5 図版39	火鉢	口径32.6	土師質土器		口縁部肥厚して逆L字に外傾　口唇部に線刻　焼成良好で内外黄灰白色　口縁部に複線鋸歯文が入る。		第102図3と同一個体だろう　線刻は「訴状所」「評定」「存忠孝心」「口将言不説不口」「口火口」	在地	不明
11号土坑 第103図1	鉢 火鉢	―	土師質土器		口縁部を肥厚外傾　内外ナデ　内外灰黒色、金ウンモ目立つ　外面胴部は型押し成型による文様で、珠文と2本線のみ残る		2次9・10号土坑に同范あり　同一個体の可能性もある	在地	不明
11号土坑 第103図2	鉢 火鉢	―	土師質土器		口縁部を肥厚外傾させ、内外ナデだが、内面の文様背面はケズリ　外面黒色、内面にぶい黄灰褐色　外面胴部の型押し成型による文様は珠文・菊文以外に剥離した文様がある			在地	不明
11号土坑 第103図3 図版40	鉢 火鉢	口径16.0 底径19.4 器高16.5	土師質土器		高台接合　中央部が押し上げられて上げ底状　外面口縁部に焼成不良部分を鍔文を対面に付ける　内外面黒色			蒲池焼	不明
11号土坑 第103図4	埦 端反碗	口径8.6 底径2.9 器高4.5	陶器	内面から外面胴下位まで透明度の高い灰釉掛け　灰釉の発色良で貫入あり　焼成良	口縁部に向かって器壁が薄い　高台削り出し	底部は露胎	第103図5と揃い	肥前	19世紀前葉
11号土坑 第103図5	碗 端反埦	口径9.0 底径2.6 器高4.5	陶器	内面から外面胴下位まで透明度の高い灰釉掛け　灰釉の発色良で貫入あり　焼成良	高台削り出し　貫入を意匠	底部は露胎	第103図4と揃い	肥前	19世紀前葉
11号土坑 第103図6	埦 京焼風	口径(11.4) 底径4.6 器高4.7	陶器	淡黄灰色の灰釉　焼成良好	高台削り出し　見込みに鉄絵の山水文	高台露胎		肥前	18世紀中葉
11号土坑 第103図7	皿	口径(16.8) 底径6.2 器高3.5	陶器	藁灰釉発色不良　焼成良好	高台螺旋削り出し　見込みには鉄絵の山水文が入る	高台露胎	胎に白色粒子を混じる	萩か	不明
11号土坑 第103図8	瓶 銚子	口径長軸4.2 口径短軸2.8	陶器	口縁部をつまんで注口を成型　透明度の高い灰釉を内面口縁部から外面に掛けた上に口縁部に銅緑釉を掛ける　焼成良好　釉の発色				肥前	不明
11号土坑 第103図9	染付 碗	口径(11.4) 底径4.6 器高4.7	磁器	透明釉・呉須の発色良　焼成良でひずみわずかにあり	高台貼り付け　呉須で　外面に二重、内面一重の網目文、見込みは菊花文	畳付釉剥ぎ、砂目付		有田	18世紀前半
11号土坑 第103図10	染付 碗	口径8.8 底径3.6 器高3.8	磁器	透明釉・呉須の発色良　焼成良でひずみわずかにあり	高台貼り付け　呉須で　外面に草花文	畳付は釉剥ぎ		有田	18世紀前葉
11号土坑 第103図11	染付 碗 湯呑碗	口径7.1 底径3.4 器高5.0	磁器	呉須発色不良、透明釉の発色・焼成良好	腰が張る器形　呉須で　外面山水文			有田	19世紀前葉 ～中葉
11号土坑 第103図12	青磁 小碗	口径6.2 底径2.0 器高5.0	磁器	内外に青磁釉掛け	高台削り出し　無文	畳付は釉剥ぎ		肥前	19世紀前葉
11号土坑 第103図13 図版40	染付 皿	口径10.8 底径5.8 器高2.3	磁器	透明釉の発色不良、焼成不良で貫入あり、呉須発色は良	高台貼り付け　呉須で外面唐草文、見込みに桐葉と中国故事が入る	底部蛇の目釉剥ぎ	見込みは清朝青花をかな文字混じりの写し	有田	17世紀後半 ～18世紀初頭
11号土坑 第103図14	染付 中皿	口径(25.2) 底径(16.0) 器高3.0	磁器	透明釉・呉須の発色良　焼成良でひずみわずかにあり	型押し成型で、輪花口縁　呉須で内外面胴部は蛸唐草文、見込みに芙蓉文、外面高台に〇×文帯、	畳付は釉剥ぎ	欠損のため裏銘・ハリ目跡の有無不明	有田	18世紀前葉
11号土坑 第103図15	染付 蕎麦猪口	口径6.2 底径3.8 器高3.5	磁器	透明釉・呉須の発色良　焼成良　貫入あり	高台削り出し　外面呉須で草花文			有田	18世紀後半
11号土坑 第103図16	白磁 紅猪口	口径(4.8) 底径2.0 器高1.45	磁器	乳白色の白磁釉　発色良好 焼成良好	外面は型押し成型による菊花文	外面底部露胎		有田	18世紀後半
11号土坑 第103図17	瓦 軒丸瓦 瓦当	面径14.7	瓦質		A12類　ナデ仕上げ　焼成良好　内外黒灰色		キラコ多い　摩滅あり　均整なモチーフ	在地	不明
11号土坑 第103図18	瓦 軒平瓦	瓦当厚4.7 厚さ1.75	瓦質		三葉文A1c類　凹面ミガキ、凸面ナデ　焼成良好　内外青灰色　土に砂粒多い		胎土に砂粒多く、瓦当が扁平なので搬入品か	不明	不明
11号土坑 第103図19	土製品 土人形 土馬	高さ8.0 幅3.0 厚さ5.3	土師質		手捏ね成型　目鼻は刺突で表現　淡黄橙白色　変色なし		見込みに箸傷が多く残る	在地	不明

表 41　2次調査出土土器・陶磁器・瓦観察表 8

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm,g) ()は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見		
							特記事項	推定産地	推定年代
13号土坑 第103図20	壺	－	陶器	外面から口唇部に褐色の釉薬	内面肩部ケズリ 無文			不明	不明
1号大土坑 第106図1	鉢 焙烙	－	土師質土器		外面は口縁部オサエ後ナナメハケ、胴部はタテハケ、内面は丁寧なヨコハケ 無文 焼成良好		口縁部は内外赤橙色、胴部は使用による変色	在地	不明
1号大土坑 第106図2	染付 碗	－	磁器	透明釉の発色不良で口縁部が暗い、焼成良、呉須発色は良	呉須で外面不明文、内面界線			有田	不明
2号大土坑 第106図3	小皿 灯明皿	口径8.0 底径3.6 器高1.6	陶器	内面灰釉掛け	外底部ケズリ 外面胴部はケズリ、内面は2段ナデ 無文		外面口縁下に油煙あり	肥前	不明
2号大土坑 第106図4	皿 灯明皿	口径10.6 底径7.1 器高1.7	土師器		外底部ヘラケズリ 内外1段ナデ 無文 内外暗灰褐色	内外底部に黒斑があるので正置して焼成	完形 内面にタール、外面口縁部に油煙あり	在地	不明
2号大土坑 第106図5 図版40	壺蓋 火入れ	最大径18.6 底径13.5	土師質土器		内外ナデだが、外底は未調整、ボタン状の摘み部に穿孔 焼成良好 軟質 精良 黄橙色で、下面の煤付き顕著		穿孔しているので火消し壺ではないほぼ完形	板東寺か	不明
2号大土坑 第106図6 図版40	壺 火入れ	口径17.2 底径14.9 器高19.8	土師質土器		内外ナデだが、外面胴下位はケズリ 焼成良好 軟質 精良 黄橙色で、内面の煤付き顕著		蓋裾の重なる部分と内底は煤付少ほぼ完形	板東寺か	不明
2号大土坑 第106図7 図版40	鉢 火鉢	口径(22.0) 底径(20.4) 器高18.5	土師質土器		口縁部外面肥厚、外面ミガキ、内面は丁寧なナデ、下位はオサエ列 焼成良好 外面は黄灰白色		外面胴部と口唇部に線刻あり	蒲池	不明
2号大土坑 第106図8	火鉢	最大径21.4 底径17.2	土師質土器		外面ミガキ、内面ナデ 高台接合 外面型押しによる文様と凸線 外面黒灰色、内面にぶい淡黄灰色 焼成良好		第103図1と同范か	在地	不明
2号大土坑 第106図9	鉢 植木鉢	－	陶器	外面は飴釉の上に薬灰釉を流し掛け、内面は鉄釉を口縁部まで掛けその上に飴釉掛け 発色良 焼成良好	型押し成型で胴部が輪花状で、口縁部は逆L字で端部に鋸歯帯が貼り付けられている 無文			小石原	不明
2号大土坑 第106図10	皿	口径(22.1) 底径6.4 器高6.7	陶器	焼成良好 軟質 精良 長石釉の後、内面に黄茶灰色の灰釉、最後に緑灰色の灰釉を掛け分け 口縁部内湾しながら外傾する		見込みに蛇ノ目釉剝ぎ 外面胴下位露胎	二彩唐津	肥前	17世紀末 ～18世紀中葉
2号大土坑 第106図11	甕	口径(15.4) 最大径24.6	陶器	内外鉄釉 発色やや不良 焼成良	口縁部内面側肥厚 外面口縁下に段あり 外面胴部はタタキナデ消し、内面は格子目当て具痕			武雄	19世紀代
2号大土坑 第106図12	甕 甕転用の植木鉢	底径9，6	陶器	内外鉄釉	削り出し高台 外面は斜めにケズる 無文	底部は釉剥ぎし、外面は砂目付着、見込みには輪状にアルミナ付着 発色良 焼成良		武雄	不明
2号大土坑 第107図1	甕 大甕	口径50.0 最大径61.0	陶器	鉄釉内外面に掛かる 発色良好 焼成良好	内面に粘土積み上げ痕残る 内面の格子タタキ当て具痕を粗くナデ消し、外面は丁寧にナデ消し			肥前	19世紀代
2号大土坑 第107図2	甕 大甕	口径(38.0) 底径20.9 器高45.9	陶器	鉄釉外面に掛かる 発色良好 焼成良好	内外格子タタキ後ナデ 見込みは放射状タタキで縁をナデ窪み	外底に斜めに焼成不良部分がある 口唇部内面側釉剥ぎ 外面側拭き取り	内面の胴下位には接合痕らしい板状工具のオサエがある	肥前	17世紀後半
2号大土坑 第107図3	甕 半胴甕	口径33.2 底径15.7 器高37.6	陶器	高台削り出し 内外胴下位から底部は鉄釉ハケ掛け、内面口縁部から外面胴中位に白化粧土を刷毛掛け、胴下位は刷毛掻き取り、その後透明度の高い灰釉を内外胴中位まで掛ける	外面は葉を緑色の灰釉で、幹・枝を鉄絵で描いた松樹文	畳付は釉剥ぎ 内面に砂目跡が残るので別個体を入れて重ね焼きしている	底部穿孔は植木鉢への転用のためか 劣化は見られない	弓野	不明
2号大土坑 第108図1	染付 端反碗	口径(10.1) 底径4.1 器高5.6	磁器	透明釉・呉須の発色と焼成は良好	高台削り出し 呉須で外面によろけ縞文、内面口縁部に雷文帯、見込みに花文	畳付は釉剥ぎ	第108図2と揃い	有田	19世紀前葉 ～中葉
2号大土坑 第108図2	染付 端反碗	口径(10.2) 底径3.9 器高5.5	磁器	透明釉・呉須の発色と焼成は良好	高台削り出し 呉須で外面によろけ縞文、内面口縁部に雷文帯、見込みに花文	畳付は釉剥ぎ	第108図1と揃い	有田	19世紀前葉 ～中葉
2号大土坑 第108図3	染付 端反碗	口径11.2 底径4.9 器高6.0	磁器	透明釉・呉須の発色と焼成は良好	高台貼り付け 呉須で外面に楼閣と山水文、見込みに波濤文帯	畳付は釉剥ぎ、見込みにハリ目跡		有田	19世紀前葉 ～中葉
2号大土坑 第108図4	青磁 小碗	口径6.3 底径3.8 器高4.9	磁器	内外に青磁釉掛け	高台削り出し 無文	畳付は釉剥ぎ	第108図5と揃い	肥前	不明
2号大土坑 第108図5	青磁 小碗	口径7.3 底径3.0 器高5.0	磁器	内外に青磁釉掛け	高台削り出し 無文	畳付は釉剥ぎ	第108図4と揃い	肥前	不明
2号大土坑 第108図6	染付 碗 湯呑碗	口径6.8 底径3.3 器高5.3	磁器	呉須透明釉の発色 焼成良好	腰が張る器形 呉須で外面丸文にススキ	畳付は釉剥ぎ		有田	19世紀前葉 ～中葉
2号大土坑 第108図7	染付 碗 湯呑碗	口径6.5 底径3.0 器高5.6	磁器	呉須透明釉の発色 焼成良好	高台貼り付け 呉須で外面丸文にススキ	畳付は釉剥ぎ		有田	19世紀前葉 ～中葉
2号大土坑 第108図8	染付 杯	口径6.8 底径2.5 器高3.3	磁器	透明釉発色良いが暗い	高台貼り付け 呉須で外面崩れた蔦と折れ松葉文	畳付釉剝ぎ、砂目付	第108図9と揃い	有田	19世紀前葉 ～中葉
2号大土坑 第108図9	染付 杯	口径6.4 底径2.2 器高3.5	磁器	透明釉発色良いが暗い	高台貼り付け 呉須で外面崩れた蔦と折れ松葉文	畳付釉剝ぎ	第108図8と揃い	有田	19世紀前葉 ～中葉
2号大土坑 第108図10	小杯	口径7.0 底径2.6 器高2.9	磁器	透明釉・呉須の発色と焼成は良好	無文	畳付は釉剥ぎ		有田	不明
2号大土坑 第108図11	染付 中皿	口径(28.8) 底径(17.8) 器高4.6	磁器	呉須発色良い、透明釉の発色やや不良、焼成良	呉須で外面唐草文、外底に界線、裏銘の有無は不明、内面胴部花唐草文、見込みに芙蓉文	畳付釉剝ぎ		有田	18世紀初頭 ～前葉
2号大土坑 第108図12 図版40	染付 小皿	口径9.7 底径4.2 器高2.4	磁器	呉須透明釉の発色 焼成良好	高台削り出し 外面ケズリの段残る 呉須で内面二重格子文	畳付釉剝ぎ、見込みに蛇の目釉剝ぎ		有田	19世紀前葉 ～中葉
2号大土坑 第108図13	染付皿 輪花小皿	口径(13.7) 底径7.6 器高4.4	磁器	透明釉の発色不良	型押し成型 無文	外底蛇の目釉剝ぎ		有田	19世紀前葉 ～中葉

表 42　２次調査出土土器・陶磁器・瓦観察表９

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm,g) ( )は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見		
							特記事項	推定産地	推定年代
2号大土坑 第108図14	染付 小瓶	最大径(6.7) 底径4.3 器高4.	磁器	透明釉の発色は不良、焼成も不良で釉切れあり、呉須の発色は良	高台削り出し 呉須で外面上半に蛸唐草文、下半は源氏香文帯	高台蛇の目釉剝ぎ		有田	19世紀前葉 ～中葉
2号大土坑 第108図15 図版49	戸車	径5.1 厚さ1.0	磁器	側面の透明釉発色良い	輪切り後、平坦面をケズリ	上面はアルミナを剝いだか		有田	不明
2号大土坑 第109図1	瓦 軒丸瓦 瓦当	径(15.2)	瓦質		A14類 焼成良好 内外黒灰色		摩滅著しい	在地	不明
2号大土坑 第109図2	瓦 軒丸瓦	径14.4 厚さ1.8	瓦質		A1a類 凸面ナデ 凹面布目・摸骨痕 釘穴あり 焼成良好 内外灰黒色 瓦当面摩滅し砂粒多い		摩滅著しい	在地か	不明
2号大土坑 第109図3	瓦 丸瓦	連結部幅13.1 厚さ1.75	瓦質		凸面ナデ仕上げか 布目・摸骨痕ケズリ基部に布の撚り痕残る 発色良好 青灰色で銀化あり		焼成強すぎ器面にひび割れあり 胎が青灰色なのは焼成が強いため	在地	不明
2号大土坑 第109図4	瓦 丸瓦	厚さ2.05	瓦質		凸面ミガキ 凹面布目・摸骨痕ケズリ後タテナデ、先端ケズリ 穿孔あり 発色良好 黒灰色			在地	不明
2号大土坑 第109図5	瓦 丸瓦	下部幅14.0 厚さ2.35	瓦質		凸面ミガキ 凹面スダレ痕残る 摸骨痕ケズリだが、深い窪みあり 凸面側面側に沈線があり、先端基部側には変色のない部分がある 発色良好 黒灰色		凸面側端部と先端基部側の色調差は重ね部分の痕跡か	在地	不明
2号大土坑 第110図1	瓦 右鎌軒桟瓦 瓦当	幅(21.0) 瓦当厚3.7 厚さ2.1	瓦質		三葉文D類 顎の突出が目立つ 凹面ミガキ、凸面ナデ 焼成良好 内外黒灰色		幅が狭いので塀用か	在地	不明
2号大土坑 第110図2	瓦 右鎌軒桟瓦 瓦当	瓦当厚3.85 厚さ2.05	瓦質		モチーフが一部小さいが三葉文D類だろう　顎突出 ナデ 焼成良好 内外黒灰色		凹面ミガキ著しい	在地	不明
2号大土坑 第110図3	瓦 右鎌軒桟瓦 瓦当	幅(22.4) 瓦当厚3.95 厚さ2.1	瓦質		三葉文D類　凹面ミガキ、凸面ナデ 焼成良好 内外黒灰色		煤付着 摩滅なし 幅が狭いので塀用か	在地	不明
2号大土坑 第110図4	瓦 左軒軒平瓦 瓦当	瓦当厚4. 05 厚さ2.55	瓦質		菊花文A1b類 凹面ミガキ、凸面ナデ 焼成良好 内外黒灰色			不明	不明
2号大土坑 第110図5	輪違い瓦	下幅13.2 基部幅(8.4) 厚さ1.9	瓦質		凹面に摸骨痕らしい窪みあり 発色良好 淡黒灰色		摩滅著しい ほぼ完形	在地	不明
2号大土坑 第110図6 図版43	瓦 軒丸瓦 家紋瓦	—	瓦質		銀杏の分かれ目に逆ハート形の掘り込みがある 文様部分で剝がれている 発色良好 黒灰色		祇園守紋の一部	在地	不明
1号溝 第113図1	染付 小碗	口径7.8 底径2.7 器高4.0	磁器	呉須発色良い、透明釉の発色やや不良	厚手のくわらんか手 呉須で外面不明文	高台に砂目付き	見込みに灰被りのある不良品	波佐見	不明
1・2号溝混ざり 第113図2	鉢 焙烙	—	土師質土器		口縁部外面肥厚、口縁下は粗いハケの上にオサエ、内面は丁寧なヨコハケ 無文 焼成良、内面黄橙灰色だが、外面は炭化物付着			在地	不明
4b号溝 第113図3	鉢 焙烙	長さ(50.0)	瓦質土器		口縁部外面上半はオサエ列、下半はハケ、内面は丁寧なヨコハケの摩滅 無文 焼成良、内面暗青灰色だが、外面は暗灰褐色			在地	不明
4号溝 第113図4	鉢 擂鉢	—	瓦質土器		外面口縁部はナデ、胴部は板ナデ、内面はナデ	外面口縁下は灰白色、胴部は灰色、口唇部から内面は暗灰色で、重ね焼きの可能性がある	須恵質に近い胎土で、焼成方法も異なるので搬入品か	不明	不明
4b号溝 第113図5	皿	底径3.8	陶器	内面灰釉、外面は胴下位まで掛かる 焼成・発色良好	削り出し高台	見込みに胎土目4つあり 外底露胎	器壁厚い	肥前か	17世紀代
4号溝 第113図6	染付 碗	口径(10.0)	磁器	呉須発色良 透明釉の発色やや不良 焼成不良でガラス化しておらず貫入あり	厚手のくわらんか手 呉須で外面梅樹文			有田	18世紀前半
4号溝 第113図7	染付 皿 五寸皿	—	磁器	透明釉・呉須の発色良 焼成良	呉須で外面唐草文、内面口縁部界線明青花の唐草文様を簡略化したもの		第115図7とは別個体	有田	不明
4号溝 第113図8 図版41	瓦 軒丸瓦 瓦当	長さ27.2 径14.4 厚さ1.8	瓦質		A1a類 凸面ミガキ 凹面摸骨痕ケズリ 基部にスダレ痕残る 焼成良好 内外灰黒色		瓦当面の摩滅著しい 胎土に砂目多い 完形	在地か	不明
4b号溝 第113図9	瓦 軒平瓦 瓦当	瓦当厚4.3 厚さ1.5	瓦質		ナデ仕上げ 欠損のため主文不明のため分類不能 焼成良好 内外黒灰色		器壁厚い	在地	不明
4号溝 第113図10	瓦 輪違い瓦	厚さ1.7	瓦質		凹面基部ケズリ スダレ痕基部に残る 下部はナデ 発色良好 黒灰色			在地	不明
4b号溝 第113図11	土鈴	高さ4.4 幅3.4	土師質土器		型合わせでなく上部で絞っている 底部は平たく、上部は絞り 外面ナデ後、透かし孔を開けている 焼成良好で内外黄橙白色		他の土鈴と製作技法が異なるので、搬入品か	不明	不明
4号溝 第113図12 図版48	土錘 管状土錘	長さ4.6 最大径2.0 重量17.07	土師質		手捏ね成型 黄灰白色が変色している 焼成時のものか 焼成良		完形	在地	不明
4号溝 第113図13 図版47	土人形 騎人	高さ5.6 幅1.2 厚さ1.6	土師質		手捏ね成型 目口を刺突で表現 焼成良 黄白色で変色なし			在地	不明
4号溝 第114図1 図版41	瓦 軒丸瓦 瓦当	長さ27.7 径14.5 厚さ2.1	瓦質		A1a類 凸面ナデ仕上げ 凹面摩滅しており不明瞭 焼成不良でやや軟質 内外黒灰色		第114図2と同范 釘孔部に円形の被せ痕がある	在地	不明
4号溝 第114図2 図版41	瓦 軒丸瓦 瓦当	長さ27.3 径14.4 厚さ2.1	瓦質		A1a類 凸面ナデ仕上げ 凹面摩滅しており不明瞭 焼成不良でやや軟質 内外黒灰色		ほぼ完形 第114図1と同范 鉄線切り明瞭	在地	不明

表 43　2次調査出土土器・陶磁器・瓦観察表 10

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm,g) ()は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見		
							特記事項	推定産地	推定年代
7号溝 第115図1	瓦器椀	—	瓦器		内外ミガキ　無文　焼成良好			不明	12～13世紀
7号溝 第115図2	鍋	—	土師質土器		口縁部玉縁状に肥厚　無文　焼成良好 一部煤残存			在地	不明
7号溝 第115図3	風炉	—	瓦質土器		口縁部は大きく内傾　無文　内外灰黒色　精良　軟質		異質なので搬入かも	不明	不明
7号溝 第115図4	甕か	—	須恵質		外面格子目、内面タタキ当て具痕　内外灰白色で、焼成不良の可能性あり		第115図11の円盤形製品はこの土器片を利用	不明	不明
7号溝 第115図5	蓋	最大径(16.8)	瓦質土器		上面ナデ仕上げ　下面ハケ　受け部は貼り付け凸帯　無文　内外灰黒色　精良軟質			在地	不明
7号溝 第115図6	鉢 摺鉢	—	土師質土器		口縁部外面肥厚、口縁下は板状工具によるオサエ、内面は5条の摺り目　無文 焼成良、外面淡灰褐色		外面は内面炭化物付着	在地	不明
7号溝 第115図7	染付 皿 五寸皿	—	磁器	透明釉・呉須の発色良　焼成良	呉須で外面唐草文　明青花の唐草文様が簡略化したもの　内面口縁部界線	底部欠損のため	第113図7とは別個体	有田	19世紀中葉
7号溝 第115図8	染付 碗	—	磁器	呉須発色良い、透明釉の発色やや不良、焼成良	厚手のくわらんか手　呉須で外面二重網目文		小片でひずみの可能性があるので傾き不明	有田	不明
7号溝 第115図9	丸瓦	長さ29.0 連結部幅14.8 厚さ1.85	瓦質		凸面ミガキの工具端で段ができる、凹面スダレ痕と布目を軽くナデ消し　発色良好　黒灰色だが灰白色部分もある			在地	不明
7号溝 第115図10	瓦 軒平瓦 瓦当	瓦当厚4.25 厚さ1.95	瓦質		三葉文A2類　接合部で欠損している 焼成良好　内外暗青灰色　胎土に砂粒多い			不明	不明
7号溝 第115図11 図版49	甕転用瓦玉	長軸3.5 短軸3.2 厚さ1.5	陶器	内外橙色を呈する	タタキ当て具痕が残る甕の胴部片を転用			武雄	不明
9号溝 第116図1	摺鉢	—	陶器	内外鉄釉掛け　焼成・発色良	口縁部外面わずかに肥厚　単位不明の摺り目で、上端をナデ消している	口縁部片のため		武雄	17世紀末 ～18世紀前葉
9号溝 第116図2	色絵杯	口径7.7 底径3.0 器高3.6	磁器	透明釉・呉須の発色・焼成良	見込みに大黒を赤と緑で彩色	畳付は釉剥ぎ		有田	不明
9号溝 第116図3	染付 碗 筒形碗	口径(8.4)	磁器	透明釉・呉須の発色と焼成は良好	呉須で外面に若松文、内面口縁部に四方襷文帯			有田	18世紀後葉
10号溝 第116図4 図版40	染付 小杯	口径7.2 底径3.5 器高5.5	磁器	透明釉・呉須の発色良・焼成良いが全体に暗い	外面呉須で花文、外底に界線	高台蛇の目釉剥ぎ、砂目付		有田	17世紀後葉 ～18世紀前葉
12号溝 第116図5	皿	口径8.6 底径4.8 器高2.0	土師器		外底糸切り　内外1段ナデ無　内外黄灰白色～橙色で変色なし			在地	不明
12号溝 第116図6	皿 灯明皿	口径13.0 底径7.3 器高2.0	土師器		外底不明　内外ナデ　薄い仕上げ　内外にぶい暗黄白色		口唇部に油煙あり	在地	不明
12号溝 第116図7	京焼風 腰折埦	口径10.1 底径4.2 器高5.1	陶器	高台は深い削り出し　淡暗黄灰色の灰釉を高台以外に掛けた上に外面に鉄絵の笹文　焼成良好　発色良好		高台露胎		肥前	18世紀中葉
12号溝 第116図8	椀	口径9.6 底径3.5 器高5.7	陶器	灰釉を高台以外に掛け　焼成良好　発色良好	高台深い削り出し　無文	高台露胎	口唇部の内面の膨らみは釉溜まり	肥前	18世紀中葉
12号溝 第116図9	皿 灯明受皿	口径7.3 底径4.0 器高3.4	陶器	鉄釉高台以外に掛け　光沢あり　焼成良好	外底糸切り　板状圧痕あり　無文	底台露胎　口縁部にアルミナ付着		武雄か	不明
12号溝 第116図10	皿 灯明受皿	口径6.2 底径3.2 器高4.3	陶器	鉄釉高台以外に掛け　光沢あり　焼成良好	外底糸切り　板状圧痕あり　無文	底台露胎　口縁部にアルミナ付着	粘土粒痕は観察できない	武雄か	不明
12号溝 第116図11 図版41	瓶 京焼風	最大径9.8 底径6.4	陶器	外面白化粧土ハケ掛け後、透明土の高い灰釉を全面掛け 釉の発色焼成良好	外面鉄絵の笹文	畳付アルミナ塗布	図上接合	肥前	不明
12号溝 第116図12 図版41	小鉢 京焼風	口径9.4 底径4.6 器高2.8	陶器	内面から外面胴部に淡黄灰色の灰釉掛け　釉の発色焼成良好	輪花は型押し成型ではない　外面鉄絵と青色灰釉で花文	胴下位から底部は露胎		肥前	不明
12号溝 第116図13	鉢 京焼風 筒形	口径10.8 底径5.3 器高8.3	陶器	鉄釉を全面掛けた後に内面口縁部から外面胴部に淡黄灰色の灰釉掛け　釉の発色・焼成良好	高台削り出し　外面鉄絵の笹文	畳付釉剥ぎ、砂目付		肥前	18世紀後半
12号溝 第116図14 図版41	色絵 香炉	口径7.6	磁器	透明釉内面口縁部から外面に掛ける　焼成・発色良好	脚型押し成型貼り付け　中央部に円形高台　外面は赤彩で外郭線と花を描き脚を着色、緑彩で葉を描いている	底部欠損のため	胎から瀬戸の可能性あり	瀬戸か	18世紀後半
12号溝 第116図15 図版42	甕 半胴甕	口径(20.0) 最大径(22.2)	陶器	外面上半は白化粧の上に透明度の高い灰釉を掛け、その上に鉄釉を流し掛け、下半は鉄漿掛けた後、白化粧を上半に掛け、中位は描き取り 内面下半は鉄釉ハケ掛け　焼成良好、釉の発色良好		口唇部に重ね焼き痕あり	摩滅あり	肥前	不明
12号溝 第116図16	土瓶	口径9.4 最大径19.6 器高13.7	陶器	内面から外面上半に暗黄灰褐色の灰釉掛け	外底ケズリ　手捏ねの脚と型押し成型の把手と注口がつく　注口に穿孔3	底部露胎　口唇部釉剝ぎ 畳付にアルミナ付着	外底に炭化物付着	肥前	不明
12号溝 第116図17 図版42	鉢 片口鉢	口径30.4 底径9.9 器高12.7	陶器	外面は中位に白化粧櫛描き取り後下半は鉄釉ハケ掛け、上部は灰釉掛け、内面は白化粧ハケ掛け後上半は剥いで灰釉掛け　高台は逆三角形にケズリ　片口は手捏ね		高台釉剥ぎ　見込みに重ね焼き痕あり		武雄	18世紀第2四半期
12号溝 第116図18	摺鉢	口径(41.2) 底径(14.6) 器高14.2	陶器	内外鉄釉掛け　焼成・発色良	口縁部外面肥厚　底部削り出し　27本単位の摺り目で、上端をナデ消している	高台畳付は砂目付き、見込みには目跡痕5つ	目跡は剥離しているので胎土目か	武雄	18世紀中葉 ～19世紀中葉
12号溝 第117図1	染付 碗	口径8.6 底径3.4 器高5.6	磁器	呉須・透明釉の発色良	薄手　呉須で外面口縁部界線中位七宝文帯、内面に波濤に幾何学文帯、見込みに手描きの五弁花文	畳付釉剥ぎ	薄手の精緻な成形だが、焼成ひび割れあり	有田	18世紀中葉 ～18世紀後葉
12号溝 第117図2 図版42	染付 碗	口径10.0 底径3.8 器高5.5	磁器	透明釉・呉須の発色良いが滲む不良品　焼成良	高台削り出し　薄手　呉須で外面に山水文、内面口縁部に界線、見込みに波濤文を描く	畳付は釉剥ぎ		有田	18世紀中葉 ～19世紀初頭

表 44　2次調査出土土器・陶磁器・瓦観察表 11

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm,g) ()は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見		
							特記事項	推定産地	推定年代
12号溝 第117図3	染付 碗	口径10.0 底径3.5 器高4.5	磁器	焼成良で透明釉・呉須の発色不良	高台貼り付け　呉須で外面に松皮菱文	畳付は釉剥ぎ		有田	18世紀中葉 ～19世紀初頭
12号溝 第117図4	染付 碗	口径9.8 底径5.6 器高5.4	磁器	呉須発色良い、透明釉の発色良いが釉溜まりあり、焼成不良で別個体融着痕あり	厚手のくわらんか手　呉須で外面梅樹文と雪輪文、外底に崩れた「明」	畳付釉剝ぎ	第117図6と揃い	有田	18世紀前半
12号溝 第117図5	染付 碗	口径9.6 底径3.8 器高5.3	磁器	呉須発色良い、透明釉の発色やや不良、焼成良	厚手のくわらんか手　呉須で外面梅樹文と雪輪文、外底に崩れた「明」か	畳付釉剝ぎ		有田	18世紀前半
12号溝 第117図6	染付 碗	口径10.1 底径3.9 器高5.8	磁器	呉須・透明釉の発色良、焼成不良でヒビあり	厚手のくわらんか手　呉須で外面梅樹文と雪輪文、外底に崩れた「明」	畳付釉剝ぎ	第117図4と揃い	有田	18世紀前半
12号溝 第117図7 図版42	染付 碗	口径9.8 底径4.0 器高5.0	磁器	透明釉・呉須の発色良　焼成不良でヒビあり	厚手のくわらんか手　呉須で外面に若松文、雪輪文	畳付は釉剥ぎで砂目付	ひび割れているのに使用したか？	有田	18世紀前半
12号溝 第117図8	染付 碗	口径8.9 底径3.0 器高4.4	磁器	透明釉・呉須の発色良　焼成良　貫入あり	高台削り出し　呉須で　外面に若松文、雪輪文	畳付は釉剥ぎ		有田	18世紀前葉
12号溝 第117図9	染付 碗	口径10.0 底径5.4 器高5.1	磁器	呉須・透明釉の発色良、焼成ひび割れあり	厚手のくわらんか手　呉須で外面梅樹文と雪輪文、外底に崩れた波濤文	畳付釉剝ぎ、砂目付	ひび割れたものを使ったか	有田	18世紀前半
12号溝 第117図10	染付 杯	口径7.6 底径3.1 器高3.8	白磁	白磁釉発色・焼成良好	無文	畳付釉剝ぎ		有田	不明
12号溝 第117図11	染付 小碗	口径8.1 底径3.3 器高3.6	磁器	透明釉・呉須の発色良　焼成良　貫入あり	外面呉須で笹文	高台蛇の目釉剝ぎ		有田	不明
12号溝 第117図12	染付 杯	口径8.2 底径3.0 器高4.2	磁器	透明釉・呉須発色・焼成良好	型押し成型　外底の布目ナデ消し　呉須で外面笹文	畳付釉剝ぎ　外面に窯土付着		有田	不明
12号溝 第117図13	染付 筒形碗	口径7.4 底径3.6 器高6.3	磁器	透明釉下位は発色不良、呉須の発色と焼成は良好	呉須で外面胴部に山に草花文、下位は折松葉文、内面口縁部に四方襷文帯、見込みにコンニャク印判五弁花文	畳付釉剝ぎ		有田	18世紀後葉
12号溝 第117図14	染付 筒形碗	口径8.2 底径4.0 器高6.1	磁器	透明釉・呉須の発色と焼成は良好だが、外底にひっつきあり	呉須で外面に花文、内面口縁部に四方襷文帯、見込みに手描きの五弁花文	畳付釉剝ぎ		有田	18世紀後葉
12号溝 第117図15	染付 小皿	口径6.4 底径3.6 器高1.2	磁器	呉須透明釉の発色　焼成良好	高台貼り付け　呉須で内面帆掛船・松・波濤文	畳付釉剝ぎ	完形	波佐見	不明
12号溝 第117図16	染付 皿 五寸皿	口径13.6 底径7.8 器高4.0	磁器	透明釉・呉須の発色・焼成良	高台貼り付け　呉須で外面唐草文、内面笹文、見込みに五弁花文	畳付釉剝ぎ		波佐見	17世紀後葉 ～18世紀初頭
12号溝 第117図17	染付 鉢	底径11.9	磁器	透明釉・呉須の発色と焼成	高台削り出し　呉須で外面高台に凹凸文、外底に昆虫文、内面無文	畳付釉剝ぎ		肥前	不明
12号溝 第117図18	染付 鉢	口径13.6 底径8.2 器高4.8	磁器	透明釉・呉須の発色と焼成	型押し成型による輪花、高台削り出し　呉須で外面に唐草文　内面ダミで半芙蓉文、見込みにコンニャク印判五弁花文	畳付釉剝ぎ		肥前	18世紀前葉 ～18世紀後葉
12号溝 第117図19	染付 碗蓋	裾径9.1 摘み部径3.6 器高2.6	磁器	呉須の発色良、透明釉発色良	摘み部貼り付け　外面に呉須コンニャク印判による上がり藤文	摘み部端は釉剝ぎ		有田	18世紀前半
12号溝 第117図20	鉢 蓋付	口径13.2 底径6.8 器高7.0	磁器	透明釉発色良	呉須　外面芙蓉文・葡萄文	畳付釉剝ぎ	断面に膠があり、接合痕の可能性あり	有田	18世紀前葉 ～後葉
12号溝 第117図21	染付 段重蓋	裾径15.2 受け部径13.4	磁器	透明釉発色良好	外面は天井部に捩花文帯　天井部に型押し成型の橋状の摘みがつく	受け部釉剝ぎなので重ねて焼成している		有田	18世紀前葉 ～後葉
12号溝 第117図22	染付 蕎麦猪口	口径6.2 底径4.2 器高5.1	磁器	透明釉・呉須での発色良　焼成良　貫入あり	外面呉須で梅樹文	高台蛇の目釉剝ぎ		有田	18世紀前葉 ～後葉
12号溝 第118図1 図版42	染付 花瓶	口径4.6 底径5.0 器高11.4	磁器		型合わせ成型で扁平胴　山水文らしい陽刻の上にダミ	底部は釉剝ぎしているので立てて焼成	第118図2と同型	有田	不明
12号溝 第118図2 図版42	染付 花瓶	口径4.4 底径5.0 器高11.5	磁器	裾部は鉄釉掛け　透明釉の発色・焼成良好	型合わせ成型で扁平胴　山水文らしい陽刻の上にダミ	底部は釉剝ぎしているので立てて焼成	第118図1と同型	有田	不明
12号溝 第118図3 図版42	赤絵 水注	長さ4.0 器高7.5	磁器	着物などを赤彩　透明釉の発色・焼成良好	型合わせ成型で動物に乗る女児か　外底に布目痕あり		断面に漆付着している漆継か	有田	不明
12号溝 第118図4 図版42	土人形 大黒天	高さ5.5 幅3.9	土製品		型合わせ成形　淡赤褐色の胎で指で下から中空にしている		指で中空にする技法から水田人形だろう	水田	不明
12号溝 第118図5 図版42	土人形 土馬	高さ5.1 幅3.2 奥行8.2	土製品		鞍の造形はない　手捏ね成型　淡黄橙白色を呈する			在地	不明
12号溝 第119図1	瓦 軒丸瓦 瓦当	径11.65 厚さ2.35	瓦質		B7a類　ナデ仕上げ　焼成良好　内外黒灰色		キラコ多い　摩滅なし　小型軒丸	在地	不明
12号溝 第119図2	瓦 軒丸瓦 瓦当	径12.2 厚さ2.5	瓦質		B7b類　凸面にスダレ痕あり　焼成良好　内外黒灰色		均整なつくりで、瓦当接合痕が見える	在地	不明
12号溝 第119図3	瓦 軒丸瓦 瓦当	面径16.2 厚さ2.2	瓦質		A4類　ナデ仕上げ　焼成良好　内外黒灰色		胎にざらつきあり　搬入品か	在地	不明
12号溝 第119図4	瓦 軒丸瓦 瓦当	面径15.4	瓦質		B3類　ナデ仕上げ　焼成良好　内外黒灰色			在地	不明
12号溝 第119図5	丸瓦	長さ30.4 連結部幅16.4 厚さ2.0	瓦質		凹面布目とスダレ痕残る　凸面ミガキ、基部には網目痕が明瞭　発色良好　黒灰色　穿孔2		基部の段の面にカンナ痕がある	在地	不明
12号溝 第119図6 図版42	丸瓦	長さ26.0 連結部幅13.2 厚さ1.9	瓦質		凹面布目とスダレ痕を消さない　凸面ミガキ、基部には網目痕が明瞭　発色良好　黒灰色			在地	不明

表 45　2次調査出土土器・陶磁器・瓦観察表 12

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm,g) ()は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見		
							特記事項	推定産地	推定年代
12号溝 第119図7	丸瓦	幅11.0 厚さ2.1	瓦質		凹面ナデ、凹面スダレ痕跡り 基部端面取り 発色不良 内外灰白色		小型丸	在地	不明
12号溝 第119図8	瓦 軒平瓦 瓦当	瓦当厚3.9 厚さ2.0	瓦質		菊花文を主文とする唐草文と思われるが分類不能 ナデ仕上げ 焼成良好 内外黒灰色			在地	不明
12号溝 第119図9	瓦 軒平瓦 瓦当	—	瓦質		三葉文を主文とする唐草文だが分類不能 顎突出 顎接合部の格子目加工がある 焼成良好 内外黒灰色			在地	不明
12号溝 第119図10	瓦 軒平瓦 瓦当	瓦当厚4.15 厚さ2.05	瓦質		主文不明だが文様の特徴から三葉文B5b類とした 端にスタンプ 凹面は風化、凸面は丁寧なナデ仕上げ 焼成良好 内外黒灰色		スタンプは丸に二本直線	在地	不明
12号溝 第119図11	瓦 軒平瓦 瓦当	瓦当厚3.85 厚さ2.0	瓦質		三葉文を主文とする唐草文と思われるが分類不能 ナデ仕上げ 焼成良好 内外黒灰色			在地	不明
大溝1 第120図1	擂鉢	底径(13.0)	瓦質土器		内面に擂り目3本単位 胴下位と底部の接合部オサエ列 外面オサエ 内面ナデ 外底に板状圧痕 焼成良好で内外黄灰白色	口縁部片のため	須恵質 内外炭化物付着	在地	不明
大溝1 第120図2	碗	—	青磁		線に退化した鎬連弁文 焼成良好 発色良好			龍泉窯系	15世紀
大溝1上位 第120図3	瓦 軒平瓦 瓦当	瓦当厚4.45 厚さ2.1	瓦質		三葉文A1b類 顎突出 凹凸面ナ デ 焼成良好 内外黒灰色		摩滅著しい	在地	不明
大溝2 第120図4	瓦 軒丸瓦 瓦当	面径(16.4)	瓦質		A8類 焼成不良で表面がさらつく 内外黒灰色		摩滅著しい	在地	不明
落ち込み1 第120図5	埦 端反埦	口径8.6 底径2.6 器高4.5	陶器	内面から外面胴下位まで透明度の高い灰釉掛け 灰釉の発色良で貫入あり 焼成良	貫入を意匠 器壁均一 高台削り出し	底部は露胎		肥前	18世紀後葉
落ち込み1 第120図6	擂鉢	—	陶器	口縁部に内外鉄釉掛け 焼成発色良	内面口縁下の擂り目は残っていない 口縁部内面肥厚	口縁部片のため		武雄	17世紀中葉～末
落ち込み1 第120図7	擂鉢	—	陶器	内外鉄釉掛け 焼成・発色良	口縁部外面肥厚 内面口縁下の擂り目は残っていない			武雄	18世紀前半
落ち込み1 第120図8	甕 半胴甕	口径35.6	陶器	外面鉄釉を掛け、口縁部ナデ消し 焼成良好、釉の発色良好 内面に泥灰釉	内外肩部にカキ目、外面胴部に沈線	口唇部に重ね焼き痕あり		肥前	17世紀後半
落ち込み1 第120図9	染付 碗	口径(9.6)	磁器	透明釉の発色不良 呉須での発色と焼成は良好	厚手のくわらんか手で、小片でひずみの可能性があるので径・傾きは不確実 呉須で外面梅樹文	畳付釉剝ぎ		有田	不明
落ち込み1 第120図10	瓦 軒丸瓦 瓦当	径(16.2) 厚さ2.45	瓦質		B7類 凸面に布目痕あり 焼成良好 内外黒灰色			在地	不明
落ち込み1 第120図11	瓦 軒平瓦 瓦当	瓦当厚3.95 厚さ1.85	瓦質		菊花文C類 凹面ミガキ、凸面ナデ 顎が突出する 焼成良好 内外黒灰色			在地	不明
落ち込み1 第120図12	瓦 熨斗瓦	厚さ1.4	瓦質		凸面にヨコハケとタテハケが入る 焼成良好 内外黒灰色 胎土に砂粒が入る		胎土やハケ調整が特異なので、搬入品	不明	不明
埋甕 第120図13 図版43	大甕 便壺	底径23.4	土師質土器		外面は目の細かいハケをナデ消し、部分的に目の粗いハケが入る 内面ナデ 外底縁に沿ってハケ 内外面橙灰色で、焼成良好		外底の器面は荒れているが、胴部は荒れてない 内面にカルキ付着	板東寺か	不明
P2 第121図1 図版42	蓋 急須蓋	口径9.4 底径3.8 器高5.7	陶器	上面黒釉掛け	受け部と宝珠摘みは貼り付け ナデ仕上げ	受け部裾アルミナ塗布		不明	不明
P3 第121図2	染付 碗	—	磁器	透明釉全面掛け 呉須で発色良好	外面呉須で芭蕉葉文内面ラマ式連弁か明代青花の芭蕉葉文皿なのに内面にも文様がある	底部欠損のため	明代文様の写し	有田	17世紀前半か
P3 第121図3	染付 碗	口径10.0 底径5.4 器高4.8	磁器	透明釉全面掛け 呉須で発色良好	外面呉須でコンニャク印判と見られるダミの蔦文	畳付釉剝ぎ、砂目付		波佐見	18世紀初頭～前葉
P3 第121図4 図版47	土人形 観音像	高さ2.5 幅4.2 厚さ2.6	土師質		型合わせ成型で、側面は合わせ目を削る 下面は接合痕を残す 片面にのみ文様がある 焼成良	穿孔されているが、像内で止まっている		在地	不明
P11 第121図5	瓦 軒平瓦 瓦当	厚さ1.65	瓦質		弁の外郭線のある三葉文を主文とする唐草文だが、小片のため分類不能 顎小さい 焼成不良で軟質で摩滅する 内外黒灰色		摩滅著しい 異質搬入品か	不明	不明
P12 第121図6 図版43	小皿 変形小皿 二彩唐津	長軸12.4 底径4.6 器高5.4	陶器	内面から外面上半は灰釉 焼成良好	高台削り出し 型押し成型で平面隅切方形 内面に鉄絵 口錆あり	底部露胎で、見込みにハリ目跡4あり		武雄	不明
P13 第121図7	埦 端反埦	口径10.0 底径3.8 器高5.1	陶器	発色・焼成良	高台削り出し 内外上半部のみ透明釉掛け	底部は露胎		肥前	18世紀後葉
P13 第121図8	染付 端反碗	口径11.4 底径4.6 器高6.1	磁器	呉須で透明釉の発色やや不良焼成良い	高台貼り付け 呉須で外面幾何学文、内面口縁部に波濤文らしいもの、見込みにモチーフ不明	畳付釉剝ぎ		有田	19世紀中葉
P15 第121図9	輪違い瓦	連結部幅11.4 厚さ1.65	瓦質		凹面基部ケズリ スダレ痕基部に残る 発色良好 黄色がかる淡黒灰色を呈す		摩滅著しい	在地	不明
P18 第121図10	甕	口径(25.0)	弥生土器		外面はタテハケ、胴内面オサエとナデ無文 焼成良好 黄灰白色			在地	不明
P18 第121図11	丸瓦	厚さ1.95	瓦質		凸面ミガキ、凹面ナデ仕上げ 下部凹面ケズリ スダレ痕を消さない 発色良好 黒灰色		摩滅著しい	在地	不明
P19 第121図12	擂鉢	—	陶器	口縁部に内外鉄釉掛け 焼成発色良	口縁部内面肥厚 内面口縁下の単位不明の擂り目あり			武雄	17世紀後半

表 46　2 次調査出土土器・陶磁器・瓦観察表 13

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm,g) ()は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見		
							特記事項	推定産地	推定年代
P19 第121図13	瓦 軒丸瓦 瓦当	径11.45 厚さ2.45	瓦質		B7類　凸面に撫骨と布目痕あり　焼成良好　内外黒灰色		漆喰付着　小型軒丸	在地	不明
遺構検出面 第122図1	染付 端反碗	口径9.4 底径3.8 器高5.7	磁器	呉須で透明釉の発色　焼成良いが別個体との融着痕あり	高台貼り付け　呉須で内外面見込みに笹文	畳付釉剝ぎ	完形	有田	19世紀中葉
遺構検出面 第122図2 図版43	染付 仏花瓶	最大径5.8 底径3.8	磁器	呉須で透明釉の発色　内面露胎　焼成良好	呉須で外面笹文と樹文	畳付釉剝ぎ		有田	18世紀中葉 ～後葉
遺構検出面 第122図3 図版48	土錘 管状土錘	長さ5.0 最大径2.1 重量16.43	土師質		手捏ね成型　ナデの単位が残る　黄橙色を呈し、褐色パミス入る　精良		完形	在地	不明
黒色土包含層 第122図4	皿 馬の目皿	—	陶器	透明度の高い灰釉を全面掛ける　発色良好	外面は口縁部肥厚　口唇部は鉄釉の口錆、内面黒彩の渦文			瀬戸か	不明
黒色土包含層 第122図5	染付	口径11.2 底径5.2 器高6.0	磁器	呉須で透明釉の発色やや不良焼成良い	高台貼り付け　器壁薄い　無文	畳付釉剝ぎ		有田	18世紀前半
黒色土包含層 第122図6	染付 碗蓋	裾径9.8 摑み部径4.2 器高3.0	磁器	呉須では発色良、透明釉発色良	摘み部貼り付け　外面に呉須窓文と墨弾源氏香文帯、内面口縁部は雷文帯	摘み端部は釉剝ぎ	良品	有田	18世紀中葉 ～後葉
黒色土包含層 第122図7	染付 小皿	口径(11.5) 底径(8.2) 器高3.0	磁器	彩色・透明釉発色良好、焼成良好　良品	外面呉須で不明モチーフ、見込みに花と蓮文、裏銘「大清雍正年製」	畳付釉剝ぎ		有田	17世紀後葉
黒色土包含層 第122図8	染付 染錦の段重	口径7.6 底径6.6 器高3.2	磁器	彩色・透明釉発色良好、焼成良好	外面呉須で窓を描き、その上に黒彩で葉文、周囲に赤絵を入れる	口唇部と底部端釉剝ぎ		有田	18世紀後葉 ～19世紀中葉
黒色土包含層 第122図9	土錘 管状土錘 図版48	長さ4.8 最大径1.3 重量7.56	土師質		手捏ね成型　ナデで表面平滑　黄橙色を呈す		完形	在地	不明
整地層 第123図1 図版43	大甕 便壺	底径20.2	土師質土器		外面は目の細かいハケ、内面はナデだが部分的に目の粗いハケが入る　見込みもナデ　内外面橙灰色で　焼成良好		内面の底部付近以外はカルキが付着していない	板東寺か	不明
第2面整地層 第123図2	瓦 丸瓦	長さ25.3 下部幅13.2 厚さ1.95	瓦質	発色良好　黒灰色	凸面ミガキ、凹面ナデ仕上げ　凹面先端にケズリ　布の撚れの痕跡があるが、布痕は削る		摩滅著しい		不明
整地面 第123図3 図版47	ミニチュア瓶	最大径3.6 底径2.6	軟質施釉陶器	外面の胴中位以上に緑灰色の釉掛け　焼成良好	型合わせ成型で、内面オサエ　胴部に6つの面をもつ　外面胴部に不明モチーフのエンボス	胴下位は露胎		筑前か	不明

表 47　本町遺跡出土ガラス石製品観察表

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm,g) ()は復元値	特徴	遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm,g) ()は復元値	特徴
2次攪乱土坑1 第124図1 図版44	瓶 インク瓶	口径2.0 底径2.9 器高3.3	透明ガラスの型合わせ　外底に「SIMCO」のエンボス　気泡あり ねじ切れたコルク栓が残っていた	2次2号大土坑 第125図7 図版49	砥石	厚さ2.9	3面使用　天草石製
2次攪乱土坑1 第124図2 図版44	瓶 インク瓶	口径1.8 底径3.0 器高3.3	透明ガラスの型合わせ　外底に「不易」のエンボスが入る　ねじ切れたコルク栓が残っていた	2次1号大溝 第125図8 図版49	砥石	厚さ1.5	2面使用で使用痕が溝状に残る、側面は整形面　手持ち　天草石製
2次攪乱土坑1 第124図3 図版44	瓶 インク瓶	口径2.2 底径3.8 器高4.0	透明ガラスの型合わせ　外底に「BOHNINK」のエンボス　気泡あり　ねじ切れたコルク栓が残っていた	1次16号溝 第125図9 図版49	砥石	厚さ4.2	1面使用で、1面は整形面　天草石製
2次攪乱土坑1 第124図4 図版44	瓶 インク瓶	口径2.2 底径3.8 器高5.3	青ガラスの型合わせ　外底に分銅文、肩部に「BOIT IN INK」のエンボス　ねじ切れたコルク栓が残っていた	1次ピット51 第125図10 図版49	砥石	幅5.9 厚さ0.75	2面使用で、下面は欠損後の再利用　側面は整形面　頁岩製
2次攪乱土坑1 第124図5 図版44	瓶 インク瓶	口径2.75 底径5.2 器高8.8	青ガラスの型合わせ　外底に「不易」のエンボス　気泡あり	2次9号土坑 第125図11 図版50	石板	厚さ0.25	粘板岩製で、端面は尖らせて木枠に挿し込むようにしている　罫線の沈線がある
2次攪乱土坑1 第124図6 図版44	瓶 インク瓶	口径2.45 底径4.5 器高5.6	透明ガラスの型合わせ　外底に植物をデザイン化したエンボス　気泡あり　ねじ切れたコルク栓が残っていた	2次9号土坑 第125図12 図版50	硯 赤間硯	幅3.8 厚さ1.4	輝緑凝灰岩製で、裏面はアーチ形に掘り窪められた中に「赤間関」の線刻銘が入るが、「間関」だけが残っている。その上に「由布良口」と横に2度線書きされている　側面と裏面にも「由」が見られる　陸部上面にも傷があるが意味をなさない
2次攪乱土坑1 第124図7 図版44	瓶 インク瓶	口径3.0 底径5.7 器高6.5	透明ガラスの型合わせ　エンボスなし　気泡あり				
2次横木基礎2 第124図8 図版44	瓶 インク瓶	口径2.35 底径4.6 器高5.1	透明ガラスの型合わせ　外底に「SSS」のエンボス　気泡あり　コルク栓の上面に「BUHNINK」のエンボス	2次9号土坑 第125図13 図版50	硯 海部	幅7.9 厚さ2.8	使用のため中央部が溝状に窪んでおり、墨が付着する　天草石製
2次攪乱土坑1 第124図9 図版44	瓶 インク瓶	口径2.55 底径4.7 器高5.6	透明ガラスの型合わせ　エンボスなし　気泡あり　ねじ切れたコルク栓が残っていた	1次2号土坑 第125図14 図版50	硯 海部上端	幅7.4	粘板岩製で、縁に鍍金していたらしく、表面に赤漆を下塗りした金箔が残る
2次攪乱土坑1 第124図10 図版44	瓶 インク瓶	口径2.6 底径4.6 器高5.7	透明ガラスの型合わせ　エンボスなし　気泡あり	2次9号土坑 第125図15 図版50	硯 陸部	幅7.1 厚さ3.0	使用のため中央部が溝状に窪んでおり、墨が付着する　天草石製
2次攪乱土坑1 第124図11 図版44	瓶 のり瓶	口径3.0 底径5.6 器高6.4	青ガラスの型合わせ　エンボスなし	2次9号土坑 第125図16 図版50	硯 陸部	幅7.4 厚さ2.7	使用のため中央部が溝状に窪んでおり、墨が付着する　天草石製
2次攪乱土坑1 第124図12 図版44	瓶 薬瓶	口径2.0 底長軸5.2 器高11.7	青ガラスの型合わせ　胴部に目盛りと「柳河病院」のエンボス	2次7号溝 第125図17 図版49	石製円盤	長軸3.15 短軸2.9 重量7.0	周縁は平坦面を残して丸く加工している　片岩製滑石製模造品に似ている
2次9号土坑 第124図13 図版44	瓶 両口点眼式目薬瓶	口径2.3 長さ6.9 幅2.3	青ガラスの型合わせ　エンボスなし、蓋用のネジが上下に陽刻されている	2次4号溝 第125図18 図版49	石製円盤	長軸2.8 短軸2.6 重量7.9	周縁は平坦面を残して丸く加工している　片岩製　厚手
2次12号溝 第124図14	瓶 ワインボトル	口径2.8	紺ガラス　エンボスなし　口縁部はコルク栓の形態	2次2号大土坑 第125図19 図版49	石槽	厚さ4.2	箱形で、口唇部と底面に平坦面がある　阿蘇溶結凝灰岩製
2次9号土坑 第124図15	瓶 ワインボトル	底径7.0	紺ガラスで、上げ底　エンボスなし、蓋用のネジが上下に陽刻されている	2次遺構検出面 第125図20 図版49	石臼 上臼	径(32.2) 厚さ4.2～6.2	挿入口まで残っていない　下面は使用摩滅が著しく、摺り目の痕跡が残る程度　凝灰岩製
2次9号土坑 第124図16	瓶 ワイングラス	底径5.0	透明ガラス　エンボスなし	1次6号土坑 第125図21 図版49	碁石	径2.1 厚さ0.45 重量3.8	粘板岩製で、扁平な円盤形
2次P18 第124図17 図版48	おはじき	径1.75 厚さ0.4	白ガラスに青混じり　上面に「1」のエンボス	1次16号溝 第125図22 図版49	碁石か	長軸2.4 厚さ1.0 重量6.4	粘板岩製で、下面に平坦面のある礫を利用したものか
1次北東整地層 第124図18 図版48	小玉	径0.7 高さ0.6 重量0.54	表面が錆びているので本来の色調不明	1次15号溝 第126図1 図版50	石塔 五輪塔の空風輪	高さ21.8 最大径14.6 重量4180	凝灰岩製　基部に横方向の擦り傷あり　完形
2次10号土坑 第125図1 図版48	石筆	長さ3.0 径0.55	滑石製で、上下端が尖っているのは使用のためだろう	1次15a号土坑 第126図2 図版50	石塔 五輪塔の空風輪	最大径13.3	凝灰岩製
2次10号土坑 第125図2 図版48	石筆	径0.55	黒滑石製で、上部欠損　先端は丸くなっている　側面にも丸みがあり、平坦面は残っていない	1次4号大溝 第126図3 図版50	石塔 五輪塔の火輪	1辺(23.0) 高さ9.5 重量6180	笠の先端が反り上がる佐賀県に多いタイプ　上部に窪みあり　多孔質の凝灰岩製
2次10号土坑 第125図3 図版48	石筆	長さ6.9 径0.5	滑石製で、上部欠損　先端は丸くなっている　側面にも丸みがあり、平坦面は残っていない	2次9号土坑 第126図4 図版48	鹿角製ボタン	径1.6 高さ0.4 厚さ0.3	上面を楕円と半楕円を彫り込む　裏面の紐孔は欠損している
2次9号土坑 第125図4 図版48	石筆	長さ7.2 径0.6	滑石製で完形　未使用かだが、側面にも面があり、削ったのか細い	2次5号土坑 — 図版49	軽石製品	長さ6.8 幅5.9 厚さ3.3	不整形で浮きに使用したものか 26.9g
2次9号土坑 第125図5 図版48	石筆	長さ7.7 径0.65	滑石製で完形　未使用か　側面にも丸みがあり、平坦面は残っていない	1次1b号大土坑 — 図版49	軽石製品	長さ11.8 幅8.1 厚さ6.3	不整形で浮きに使用したものか 26.0g
2次9号土坑 第125図6 図版48	石筆	長さ3.0 径0.55	黒滑石製で、先端が尖る　平坦面は残っていない	1次18号土坑 図版49	石炭		

表 48　本町遺跡出土金属製品観察表

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ()は復元値	特徴
1次1号大溝 第127図1 図版44	銅銭 祥符通寶	径2.3 孔径0.6	大中祥符元(1008)年初鋳　楷書体　第127図1･2は同じ字体　銅質良い　摩耗している
1次1号大溝 第127図2 図版44	銅銭 祥符通寶	径2.3 孔径0.6	大中祥符元(1008)年初鋳　楷書体　第127図1･2は同じ字体　銅質良い　摩耗している
1次25号溝 第127図3 図版44	銅銭 紹聖元寶	径2.25 孔径0.8	紹聖元(1094)年初鋳　篆書体　3枚さし銭状態で出土したが、ほか2枚は融着しているため分離できず銭名不明　楷書体
1次1号大溝 第127図4 図版44	銅銭 元祐通寶	径2.4 孔径0.8	元祐元(1086)年初鋳　篆書体　裏文があるが判読できない　第127図5･10とサシ銭状態で出土
1次1号大溝 第127図5 図版44	銅銭 元祐通寶	径2.35 孔径0.65	紹聖元(1094)年初鋳　篆書体　銅質良い　摩耗している　第127図4･10とサシ銭状態で出土
1次1号大溝 第127図6	銅銭 洪武通寶	径2.1 孔径0.55	洪武元(1368)年初鋳　文字が太い　模鋳銭か
1次25号溝 第127図7	銅銭 洪武通寶	径1.9 孔径0.55	1368(洪武元)年初鋳　銅質良い　輪磨き
1次25号溝 第127図8 図版44	銅銭 洪武通寶	径2.2 孔径0.6	洪武元(1368)年初鋳　第127図4･5とサシ銭状態で出土　黒錆が残る銅質もよく模鋳銭ではない
1次25号溝 第127図9 図版44	銅銭 洪武通寶	径2.05 孔径0.85	洪武元(1368)年初鋳　銅質良い 小型品
1次1号大溝 第127図10 図版44	銅銭 洪武通寶	径2.25 孔径0.65	洪武元(1368)年初鋳　小型品　縮みか
1次1号大溝 第127図11 図版44	銅銭 洪武通寶	径2.1 孔径0.7	洪武元(1368)年初鋳　輪磨き
1次1号大溝 第127図12 図版44	銅銭 洪武通寶	径2.15 孔径0.7	洪武元(1368)年初鋳　良質
1次1号大溝 第127図13	銅銭 洪武通寶	径2.15 孔径0.7	洪武元(1368)年初鋳　彫りが深い
1次1号大溝 第127図14	銅銭 洪武通寶	径2.2 孔径0.65	洪武元(1368)年初鋳　銅質悪い　模鋳銭か
1次1号大溝 第127図15 図版44	銅銭 洪武通寶	径2.1 孔径0.65	洪武元(1368)年初鋳　摩耗している 「通」の位置が高すぎる　模鋳銭か
1次1号大溝 第127図16 図版44	銅銭 洪武通寶	径2.2 孔径0.7	洪武元(1368)年初鋳　銅質が悪く、模鋳銭の可能性が高い　遺存度悪い
1次1号大溝 第127図17 図版45	銅銭 慶長通寶	径2.1 孔径0.8	慶長11(1606)年初鋳　摩耗している
1次1号大溝 第127図18 図版45	銅銭 寛永通宝 文銭	径2.25 孔径0.7	寛文8(1668)年初鋳　銅質良い
1次13号土坑 第127図19 図版45	銅銭 寛永通宝 新寛永	径2.35 孔径0.7	元文4(1739)年初鋳　黒錆残る　質良い
2次7号土坑 第127図20 図版45	銅銭 寛永通宝 古寛永	径2.4 孔径0.6	寛永13(1636)年初鋳　依存度悪い
1次22号溝上位 第127図21 図版45	銅銭 寛永通宝 古寛永	径2.5 孔径0.6	寛永13(1636)年初鋳　黒錆残る　銅質やや悪い
1次整地層 第127図22 図版45	銅銭 寛永通宝 古寛永	径2.4 孔径0.6	寛永13(1636)年初鋳　黒錆残る　銅質やや悪い
1次整地層 第127図23 図版45	銅銭 寛永通宝 新寛永	径2.4 孔径0.6	元文4(1739)年初鋳　黒錆残る　銅質やや悪い
1次北東整地層 第127図24 図版45	銅銭 寛永通宝 新寛永	径2.3 孔径0.6	元文4(1739)年初鋳　黒錆残る　質良い
出土地不明 第127図25 図版45	銅銭 寛永通宝 新寛永	径2.2 孔径0.7	元文4(1739)年初鋳　銅質悪い
出土地不明 第127図26 図版45	銅銭 寛永通宝 新寛永	径2.35 孔径0.7	元文4(1739)年初鋳　質良い
1次攪乱 第127図27 図版45	1円黄銅貨	径1.9	昭和25(1950)年銘あり
1次16号溝 第128図1 巻頭図版5	煙管 雁首	長さ5.6 高さ2.1 径0.8	完形　合金製　中央部に小さい窪みあり　接合部は側面　金泥残る
1次土坑11 第128図2 図版45	煙管 雁首	長さ6.8 高さ2.3 径0.7	完形　合金製　中央部に浅い大きい窪みあり　接合部は側面　金泥の痕跡あり
2次ピット41 第128図3	煙管 吸い口	長さ5.0 径0.3～1.1	完形　合金製　木質一部残る
1次24号溝 第128図4 図版45	煙管 吸い口	長さ6.1 径0.4～1.2	完形　断面6角形で合金製　金泥の痕跡あり
1次13号土坑 第128図5 図版45	煙管 吸い口	長さ6.1 径0.4～0.8	完形　接合面残る
1次16号溝 第128図6 図版45	煙管 吸い口	長さ6.3 径0.4～0.9	完形　先端は細長く、端部は丸みをもつ
1次42号土坑 第128図7 図版45	煙管 吸い口	長さ10.2 径0.5～1.4	完形　断面6角形で合金製　金泥の痕跡あり　幅大きいのは変形しているため
2次11号土坑 第128図8 図版46	鉄釘 頭丸釘	長さ7.3 幅1.1 径0.2	頭の径は0.8cm　先端欠損しているが7cm程の長さだろう
2次2号大土坑 第128図9 図版46	鉄釘 頭折釘	長さ4.8 最大幅2.3 厚さ0.4～1.1	楔のような形の扁平な釘で、5.5cmほどに復元できる
2次10号土坑 第128図10 図版46	鉄釘 頭折釘	長さ8.2 最大幅1.5 厚さ0.4	頭部に両方に突出部を持つ釘で、7.5cmほどで、断面方形
2次9号土坑 第128図11 図版45	鉄釘 頭折釘	長さ19.1 最大幅1.9 厚さ0.7	頭部に両方に突出部を持つ釘で、先端欠損だが15cmほどで、断面方形
1次黒色土整地層 第128図12 図版46	鉄釘 頭折釘	長さ9.6 最大幅1.6 厚さ0.5	頭部に両方に突出部を持つ釘で、9.7cmほどで、断面方形
1次16号溝 第128図13 図版46	鉄釘 頭丸釘	長さ4.8 最大幅1.0 厚さ0.4	3度折れ曲がった釘で6cm程の長さだろう
2次10号土坑 第128図14 図版46	針か	長さ6.4 径0.25	基部は尖った先端を折り曲げ、先端は本来まっすぐだが、折れ曲がっている
1次1号大土坑 第128図15 図版45	環状製品	長さ3.0 最大幅1.3 厚さ0.15	本来径1.5cmほどの環状だったものが変形している　金泥あり
2次10号土坑 第128図16 図版45	引き出し把手	高さ1.8 幅7.3 厚さ0.4	完形　合金製　小型の箱用かミニチュア品
2次10号土坑 第128図17 図版46	吊具	高さ1.8 幅7.3 厚さ0.4	完形　合金製　先端は丸みをもち、基部は細くS字にしている
2次9号土坑 第128図18 図版45	五徳片か	径(20.8) 幅1.3 厚さ2.0	鉄製で、断面三角形の弧状であることから、本来径20cmほどの円形だったと思われる
1次13号土坑 第128図19 図版46	飾り金具	長さ(5.0) 幅(4.9) 厚さ0.15	合金製で、扁平な板状製品が長軸で折れているが、穿孔の位置から本来は横曲げ
1次21号溝 第128図20 図版46	飾り金具	長さ(14.6) 幅2.9 厚さ0.15	合金製の扁平な板状製品　表面に彫琢による文様があるがモチーフ不明
2次11号土坑 第128図21 図版45	火鉢箸	長さ28.2 径0.3	鉄製で、ほぼ完形だろう　長さ28cmで、断面円形
1次42号土坑 第128図22 図版45	刀子	厚さ0.7	錆による劣化が少ない
1次出土地不明 ー	刀子	ー	柄は真鍮製なため錆がない　刃部は末端が残る　整理段階で紛失
2次2号大土坑 第128図23 図版45	不明鉄製品	幅1.5 厚さ0.15	片方の端部のみ残っている　翼状の湾曲は本来の形態
1次16号溝 第128図24 図版46	不明銅製品	長さ(13.0) 幅0.4 厚さ0.15	扁平な細長い板状製品で、片方は先端が細く、欠損か　反対側は丸みを持つ
1次1号溝 第128図25 図版45	鍵	高さ(3.0) 幅(4.5) 厚さ0.1～0.35	合金製で、摘み部分を押し込んで固定するタイプ
1次1号大溝 第128図26 図版46	飾り金具	長さ5.5 幅1.3 厚さ0.1	合金製の扁平な板状製品で文様なし　平坦なまま使用するものだろう
1次2号溝 第128図27 図版45	金輪	外径4.3 内径3.1 厚さ0.3	合金製の扁平な板状製品で繋ぎ目を鋳かけて固定している　文様なし
1次20号溝 第128図28 図版45	切羽	長軸3.8 短軸2.3 厚さ0.1	合金製の扁平な板状製品で内部を穿孔している　文様なし
1次出土地不明 第128図29 図版45	不明銅製品	長軸3.4 短軸2.0 厚さ0.1	薄い楕円形の蓋形のもので、側面の平坦面の一部に方形の穿孔があるので、ここを臍孔にしたものか
1次10号土坑 第128図30 図版46	不明銅製品	長軸17.0 厚さ0.1	薄い板状の一端に針金を緊縛したもので、針金の穿孔は打ち掻き　板部は端部の欠損が多いため平面形がわからない　厚さ1ミリの合金製の針金を不規則に巻いている
2次横基礎3 図版46	ボタン ー	径2.15 高さ0.8～1.2	鈕まで残る完形品　桜花文を鋳出している　1つの花弁に入る雄しべは5本　裏面には2つ穿孔がある　中学伝習館の制服用ボタンか

表 49　本町遺跡出土木製品観察表 1

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm,g) ( )は復元値	特徴	遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm,g) ( )は復元値	特徴
1次42号土坑 第129図1	漆小皿	口径(14.2) 器高2.4	内外面黒漆で無文	1次15号土坑 第131図6	下駄 草履下駄	長さ17.3 幅5.9 厚さ1.7～1.9	台下面にはカンナ痕を残す　木釘は下面は2本単位だが上面は不均一で、貫通していないものもある
1次10号土坑 第129図2	漆椀蓋	撮み径(8.6)	内面赤漆、外面黒漆で完形	1次15号土坑 第131図7 図版52	下駄 連歯下駄	長さ23.2 幅9.1 厚さ1.5～4.4	完形で、片側の側面が斜めになっているが、平滑に仕上げられており、横緒孔の間隔を狭くしていることから、加工途中に欠損し、修正したもの　足の指の痕跡が残る　台上面に逆V字の線刻あり
1次17号土坑 第129図3	漆椀蓋	撮み径(5.8)	外面黒漆　内面赤漆　残り悪い				
1次13号土坑 第129図4	漆椀蓋	最大径(11.2)	内外面黒漆で無文　大振りで薄手				
1次10号土坑 第129図5 図版51	漆椀蓋	裾径(12.5)	内外赤漆塗り　外面体部に突帯1条	1次17号土坑 第131図8	下駄の挿し歯	高さ6.6 幅9.5 厚さ1.2	側面の端部を面取りしている　接地部分は擦り減っていない
1次13号土坑 第129図6	漆椀蓋	撮み径(6.8) 裾径(13.0)	内外面黒漆で無文　大振りで薄手	1次42号土坑 第131図9 図版52	下駄 連歯下駄	長さ23.4 幅8.2～9.4 厚さ1.5～5.9	台部は完形で、前歯が根元から折れている後歯は斜めに磨り減っている
1次16号溝 第129図7 図版51	漆椀蓋	撮み径(6.8)	内面赤漆・外面黒漆塗りで、外底に赤漆で「内」の一部が入る　12とセットになるか				
1次10号土坑 第129図8 巻頭図版5	漆椀蓋	撮み径5.1	内面赤漆、外面黒漆地に金彩で桔梗と若松文を描く　劣化と変形著しい	1次1a号大土坑 第131図10 図版52	下駄 刳り下駄 雪下駄	長さ22.7 幅10.6 厚さ1.5～4.9	ほぼ完形　下面の刳り込み加工痕が残る後歯が著しく磨り減っている
1次16号溝 第129図9 巻頭図版5	漆椀蓋	撮み径(10.0)	内外黒漆塗り　外面には折れ三葉と花文、天井部に折れ三葉が赤漆で描かれている	1次3号井戸 第132図1 図版52	下駄 露卵下駄	長さ21.2 幅9.2～11.0 厚さ2.4～7.3	ほぼ完形の挿し歯下駄で、台部が幅広で厚い　前壺の下面穿孔は長方形に繰り込んでいる
1次18号土坑 第129図10	漆椀蓋	口径(8.8)	赤漆を全面に塗布し、黒漆と金彩で内面に波濤千鳥文を、外面は金彩のみで描く　高台付杯の可能性もある	1次16号溝 第132図2 図版52	下駄 連歯下駄	長さ23.4 幅8.2 厚さ2.0～3.2	台はほぼ完形で、歯が磨り減っている
1次10号土坑 第129図11	漆椀	最大径(13.1)	内外面赤漆で無文　口縁部欠損	1次16号溝 第132図3 図版52	下駄 露卵下駄	長さ23.0 幅8.2～9.4 厚さ3.1	第132図4とセット　歯がほぼなくなっても使っていた
1次16号溝 第129図12	漆椀蓋	最大径(13.2)	内外面黒漆で無文　浅いが身だろう　外面体部に赤漆で太字で「内」と書かれている他は無文	1次16号溝 第132図4 図版52	下駄 露卵下駄	長さ23.6 幅8.1 厚さ3.0	第132図3とセット　歯がほぼなくなっても使っていた
1次16号溝 第129図13 図版51	漆椀	底径4.1cm	内面赤漆、外面黒漆塗りで、外面に赤漆で不明モチーフが描かれている　外底に「口口」と赤漆で書かれる	1次1号大溝 第132図5 図版52	下駄 連歯下駄	長さ21.2 幅8.8 厚さ1.1～5.6	完形　歯が斜めに欠けたため廃棄したもの
1次42号土坑 第129図14 図版51	漆椀	最大径(10.8)	内外黒漆塗り　無文	1次1号大溝下位 第132図6	下駄 連歯下駄	長さ15.6 幅9.0 厚さ2.3～4.6	大人の下駄を加工して子供用にしたもの
1次10号土坑 第129図15 図版51	漆椀	最大径(12.0)	内外赤漆塗り　口縁部欠損　無文　底部に穿孔あり	1次15号土坑 第132図7 図版53	栓	長さ17.0 幅2.7 厚さ1.7	完形で、基部まで残る　角は面取りしている
1次16号溝 第129図16 図版51	漆椀	口径(11.4) 器高7.9	内外黒漆塗り　ほぼ完形　無文	1次15号土坑 第132図8	栓	長さ4.5 上部径4.5 下部径3.0	ほぼ完形で、側面は丸く面取りしている
1次23号溝 第129図17	漆椀	最大径(11.2)	内外赤漆　高台欠損　土圧で変形している	1次1b号大土坑 第132図9 図版53	糸巻きの支え木	長さ12.7 幅3.2 厚さ1.3	端に棒状の枘があり、中央に円孔がある
1次1号大溝 第129図18	漆高台付椀	口径(15.0)	身が浅いので高台がつくタイプだろう　内面赤漆、外面黒漆塗りで、外面に赤漆で不明モチーフが描かれている	1次17号土坑 第132図10	把手部材	高さ3.0 幅19.4 厚さ0.7	断面方形の角柱の両端に繰り込み枘があり、左右の枘の長さが異なる　中央に方形の抉り込みがある
1次28号溝 第129図19	漆高台付椀	口径(16.6) 底径7.4cm	内外黒漆地に赤漆で不明文を描く　高台は厚く器壁は薄い	1次1号大溝 第132図11	把手部材	高さ2.1 厚さ0.6	上端面に浅い溝があり、下端面に木釘穴があるので、上下に組み合わさる部材がある
1次42号土坑 第129図20	仏壇部材か 巻頭図版5	厚さ0.5	金箔貼り板材　裏面には木目が見えないほど研磨されている　2本の細い沈線が縁に入り、楕円形の窓が開いている	1次10号土坑 第133図1	折敷脚部 蝶足膳	高さ7.6 幅8.0 厚さ0.8	黒漆塗布　斜めに剥離した面で接合する同一個体の可能性のある部材がほかにもある
1次3号大溝 第130図1 図版52	漆盤	口径(37.0) 底径(25.8) 器高3.6	外底碁笥底で、外面黒漆、内面のみ赤漆地に黒漆と金彩で草花文等を描く	1次3号井戸 第133図2	折敷脚部	高さ10.6 厚さ1.2	透かし孔の欠損ではなく、裾が長くなる台状
1次3号井戸 第130図2	漆盤	口径(36.8) 底径(26.6) 器高3.6	外底は碁笥底で、内外黒漆塗りで、内面は褪色のため色調不明の植物文がある　口唇部赤漆	1次15号土坑 第133図3	折敷片 衝重	長さ32.0 厚さ0.5	隅切りしたもので、端部に木釘がある　上面は黒漆、下面には膠が端部から4cm内側に残っており筒がつく
1次15号土坑 第130図3	蒸籠の目皿 図版51	外径(20.0) 内径(1.8) 厚さ0.5	円形の蒸籠と組み合わさるもので、多くの小孔がある	1次15号土坑 第133図4	漆箱側板	高さ12.5 幅18.4 厚さ1.4	外側のみ黒漆を塗布　第133図6・7と組み合わさる
1次16号溝 第130図4	楊枝か	高さ10.5 幅1.1 厚さ0.5	楊枝にしては幅が広いものの、先端を細長く斜めにカットしている　側面は面取りしている	1次15a号土坑 第133図5	漆箱側板	高さ11.5 幅7.7 厚さ1.2	外側のみ黒漆を塗布　第133図5・7と組み合わさる
1次10号土坑 第130図5	漆横櫛	高さ5.0 厚さ0.7	茶漆塗布　歯が長い　背部は丸みをもつ	1次15b号土坑 第133図6	漆箱側板	高さ9.5 幅19.5 厚さ1.3	外側のみ黒漆を塗布　第133図5・6と組み合わさる
1次10号土坑 第131図1 図版52	下駄 刳り下駄	長さ13.8 幅5.7 厚さ0.7～2.4	子供用　成人用下駄を加工したものではない　下面の前歯には逆V字の刳り込みがある	1次15号土坑 第133図7	箱側板	高さ13.6 幅22.6 厚さ0.6	反りは変形によるもの
1次10号土坑 第131図2 図版52	下駄 露卵下駄	長さ16.8 幅5.6 厚さ1.5～2.2	子供用　台部は完形　後歯の横緒孔は下面は方形に繰り込んでおり、上面からは円形に掘り込んでいる	1次15号土坑 第133図8	箱側板	高さ8.0 幅13.5 厚さ0.5	側縁を弧状に削り台状の脚としたか
1次10号土坑 第131図3 図版52	下駄 陰卵下駄	長さ23.6 幅8.8～11.2 厚さ1.4～10.2	台部はほぼ完形　前歯前面に刳り込みがあるので、繰り下駄との折衷形態　歯と台の接合は木釘による	1次3号井戸 第133図9 図版52	箱側板	高さ7.2 幅17.8 厚さ0.4	薄い板材の片側を両面から削って薄くして枘にする　その側面の一部を方形に繰り込む
1次10号土坑 第131図4 図版52	下駄 露卵下駄	長さ17.9 幅7.2 厚さ2.5～3.4	台部はほぼ完形で、前壺の位置が偏っている　前歯を木釘で補強している	1次26号土坑 第133図10	漆箱板材	高さ10.3 幅22.8 厚さ0.8	内外黒漆塗布　方形板の短辺側で別の側板と繋がっているが、木釘孔がない
1次15号土坑 第131図5	下駄の歯	高さ5.0 幅8.5 厚さ1.1	上面に枘がないので陰卵下駄の差し歯か	1次3号井戸 第133図11	板材	高さ11.0 幅29.4 厚さ0.8	大きさに比べて薄いので建築材か

表 50　本町遺跡出土木製品観察表 2

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ()は復元値	特徴	遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ()は復元値	特徴
1次16号溝 第133図12	箱側板	高さ7.2 幅12.9 厚さ0.7	長辺の両側縁を斜めにカットしている　第133図13とセットになる　表面は丁寧に平滑に仕上げている	1次26号土坑 第136図4	円盤形未製品		板材を円形に加工しようとし未製品　加工痕明瞭
1次16号溝 第133図13	箱側板	高さ8.1 幅12.9 厚さ0.5	長辺の片方の側縁を斜めにカットしている　第133図12とセットになる　表面は丁寧に平滑に仕上げている	1次10号土坑 第136図5	曲げ物底板		径に比べて薄い
1次10号土坑 第133図14 図版51	杓子	長さ12.7 幅6.7 厚さ1.5	内面赤漆、外面は茶漆の下塗りの上に黒漆を塗っているが、剥落している	1次10号土坑 第136図6	樽蓋	径17.8 厚さ1.0 孔径2.4	端部に穿孔あり　側面はカンナ痕残る
1次15号溝 第134図1	板材	長さ10.8 幅29.3 厚さ1.0	大きさに比べて薄いので建築材であろう　短辺側に木釘あり	1次16号溝 第136図7	曲げ物蓋	径11.6 厚さ0.5	仮名文字で3行の墨書があるが、文章が完結してないので判読できず、墨書板を円形に加工して転用したか　切り込みに桜樹皮を通している
1次15号土坑 第134図2 図版53	建築材か	長さ6.3 幅10.2 厚さ2.5	各面切断面で、意図的に加工された物か、残欠	1次5号溝 第136図8	曲げ物底板	径18.7 厚さ1.1	完形　側面の加工丁寧で上部に面取りあり
1次16号溝 第134図3	不明板材	長さ7.9 幅13.8 厚さ1.5	中央に方形の穿孔があるので、断面方形の棒と組み合わさるものだろう　木釘も3つあるので、支え板か	1次3号井戸 第136図9	曲げ物底板	径15.6 厚さ0.8	ほぼ完形　縁の一端に指で強く押さえたような窪みがある
1次16号溝 第134図4	正方形の板材	長さ12.3 幅11.9 厚さ0.7	建築材の残欠か　側端は欠損しているので本来は長方形の板材だろう	1次26号土坑 第137図1	木札か	幅3.8 厚さ0.4	平坦な1面の下方に墨がわずかに残る
1次16号溝 第134図5 図版53	不明木製品	長さ14.5 幅4.2 厚さ2.5	建築材の残欠か　先端を斜めにカットして尖らせている	1次3号大溝 第137図2 図版53	木簡	現存長11.8 幅1.9 厚さ0.4	039型式だが、本来は033型式か　表面は面を削った痕跡が明瞭に残るが、裏面は平滑　表面は「米壱斗六口」、裏面は判読困難
1次16号溝 第134図6 図版53	不明木製品	長さ13.0 幅9.7 厚さ1.2	建築材の残欠か　方形の板材の角を1つ残し、斜めに切っているが、平行でもない　湾曲は土圧による変形だろう	1次1号大溝 第137図3 図版53	人形	長さ11.3 幅2.2 厚さ0.8	釘がないが3枚の板の組み合わせ式で、体部の板には2ヶ所穿孔がある　墨書なし
1次15号土坑 第134図7 図版51	袴板か	高さ11.2 幅13.3 厚さ0.3	薄い正三角形の板	2次9号土坑 第138図1 図版55	木札	幅2.7 厚さ0.6	上下欠損で、表面と裏面で書く方向が逆になっている　1面は「為式」その下は2行に分かれてカタカナと漢字が入り、「ヲシテイマハ口」「口木」「各口〔年ヵ〕」とあり、漢籍の一部か
1次1号大土坑 第134図8 図版52	建築材の残欠	長さ33.0 幅10.0 厚さ4.6	一端に枘を加工した角柱で、1段削ってから側面を大きく削っている				
1次15号土坑 第134図9 図版53	建築材の残欠	長さ14.3 幅8.9 厚さ5.0	L次状の柱材に溝が入る板材で、溝は下広くなっているので、板を差し込んで固定するための物	2次2号大土坑 第138図2 図版55	木札	長さ13.7 幅3.4 厚さ1.1	札状板の上部に円孔があり、表面に「三番係」、裏面に「学」の焼印とその下の墨書は判読できない
1次16号溝 第134図10	木製品部材	長さ23.6 幅1.4 厚さ1.0	約1.0cm角の角柱の一端に枘を作っている	2次2号大土坑 第138図3 図版55	木札	長さ10.6 幅1.9 厚さ0.8	札状板の上部に円孔があり、表面に「古閑省三」と墨書されていて、裏は墨書なし
1次28号溝 第135図1 図版53	桶側板6枚	口径(18.4) 器高(15.0)	6枚の同一個体で、緊縛痕跡から隣接する板材を確認したが、すべては繋がらなかった　1枚の板の幅は2.5～3.2cm　上下2段の緊縛痕がある　穿孔は方形で把手がつくだろう	2次9号土坑 第138図4 図版55	木札	長さ15.6 幅4.2 厚さ0.7	上下側面欠損　表面は「口不口〔驕ヵ〕小人口」とあるので、漢籍の一部か　裏面は3文字の存在は確認できるが、判読できない
1次16号溝 第135図2 図版53	留め具	長さ20.1 幅4.7 厚さ3.8	径4.7cmの丸太材の先端を斜めにカットしているが尖らせておらず、基部は平坦面をなし、釘があるので留め具だろう　弧状の押圧痕が数条あるので、円形の釘隠しがあっただろう	2次9号土坑 第138図5 図版55	木札	厚さ0.4	1面は孔の右横に2文字、左横に3文字、中央に文字があって、その下に2行文字がある　裏面は構成も違うが、2度書かれている
1次16号溝 第135図3 図版53	留め具	長さ15.2 幅2.4 厚さ1.3	径1.5cmの丸太材の先端を断面方形にカットしているが先端は尖らせていないので杭ではなく留め具だろう	2次9号土坑 第138図6 図版55	不明木製品	長さ6.4 幅5.7 厚さ2.4	方板で、両面とも横罫線の間に漢数字があり、1面は「一～十六」、裏面は「一～廿五」が書かれている　教材であろうか
1次16号溝 第135図4 図版53	留め具	長さ21.2 幅3.7 厚さ3.7	先端を斜めにカットしているが尖らせておらず、基部は平坦面をなすので留め具だろう　側面の傷は固定した板の痕跡か	2次12号溝 第139図1	漆椀蓋	裾径13.2 器高3.2	赤漆が内外に掛かる
				2次7号土坑 第139図2	漆椀	口径(12.0) 残存器高6.6	外面黒漆　内面赤漆　残り悪い
1次16号溝 第135図5 図版53	留め具	長さ17.0 幅6.7 厚さ5.5	先端は縁のみ斜めにカットしており、基部は平坦面をなすので留め具だろう　側面はカットして平坦面を作っている	2次2号大土坑 第139図3 巻頭図版5	櫛	高さ3.55 長さ10.6 厚さ0.6	背部に金銅製のカバーが付いた木製櫛で、漆塗り　歯は3つの山形をなす
1次15号土坑 第135図6 図版53	杭	長さ17.0 幅6.7 厚さ5.5	径3.5cmの丸太材の先端を山形にカットしている　基部は平坦にカットしている	2次12号溝 第139図4 図版54	鏡箱底板	長さ26.8 径16.8 柄幅5.0	柄鏡形で、縁に木釘孔がある　内外下地は赤漆で、茶漆を掛ける
1次15号土坑 第135図7 図版51	刷毛柄	長さ14.5 幅9.5 厚さ0.9	2枚の板材を貼り合わせ、隙間に刷毛を差し込んで木釘で留めている　2条沈線あり　柄上部に穿孔あり	2次2号大土坑 第139図5 図版54	折敷転用まな板	長さ26.4 幅26.2 厚さ0.7	脚は板状で目釘孔3つで繋ぐ　脚の接合面に刃傷がある　縁の目釘孔は辺ごとに異なる　内外黒漆だが、下地に茶漆が掛かる
1次3b号大溝 第135図8 図版51	独楽	高さ4.3 径(8.0)	面取りの加工痕が残る　錆がないので木芯か				
1次42号土坑 第135図9	傘頭轆轤部	高さ11.2 幅13.3 厚さ0.3	やや歪みがあるため径は不確実	2次9号土坑 第139図6	曲げ物底板	径15.3～15.7 厚さ1.4	表面は削った痕跡があり　側面は平坦でなく、上面側が長く、下面側が短い山形をなし、加工面が残る　木釘孔はない
1次15号土坑 第135図10 図版51	不明木製品	長さ11.8 幅4.3 厚さ0.7	先端は平面V字形で尖っている　和裁道具の印つけだろうか	2次2号大土坑 第139図7 図版54	曲げ物蓋	径9.0 厚さ0.6	円板の中央に木釘孔があるので摘みがつくだろう
1次16号溝 第136図1	曲げ物底板	径8.8 厚さ0.8	完形で、側面に段がある　木釘孔が1つだけ、上面から打たれている	2次3号土坑 第139図8 図版54	曲げ物蓋	長軸16.5 短軸12.2 厚さ1.0	楕円形の板材で、変形ではない　木釘孔は中央のみなので、小型の摘みがあったか
1次10号土坑 第136図2	曲げ物底板	径8.8 厚さ1.1	側面の段があり、木釘が4つ側面から打ち込まれている	1次3号井戸 135図11	袴腰板	高さ7.5 幅(12.8) 厚さ0.15	薄い台形の板材で子供用か
1次6号土坑 第136図3	曲げ物底板	径15.3 厚さ1.0	完形　厚さが均一でない　木釘孔なし	2次2号大土坑 第140図1	下駄 連歯下駄	長さ23.4 幅13.4 厚さ3.6～3.6	鼻緒孔の周りに指の窪みがある歯の右側のすり減りが大きい　完形

表51　本町遺跡出土木製品観察表3

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ()は復元値	特徴
2次2号大土坑 第140図2 図版54	下駄 連歯下駄	長さ18.4 幅8.2 厚さ1.0～2.3	後歯の擦り減り方が著しい　後歯でも左側は段がなくなる　残りが良い
2次9号土坑 第140図3 図版54	下駄 連歯下駄	長さ22.5 幅9.1 厚さ0.8～1.8	左側の刃が擦り減っている
2次9号土坑 第140図4 図版54	下駄 連歯下駄	長さ20.8 幅8.0 厚さ1.0～3.0	左側の刃が擦り減る
2次2号大土坑 第140図5 図版54	下駄 陰卯下駄	長さ21.7 幅9.1 厚さ2.0～5.5	鼻緒が残存している　歯の表面が毛羽立ち、前歯が裂けるほど引きずられている
2次2号大土坑 第140図6 図版54	下駄 草履下駄	長さ22.4 幅7.4 厚さ2.4～5.7	側面に繰り込みあり　鼻緒部分に2個1単位の大型の木釘孔　上面はその部分を抉り取る　金銅製半頭鋲と鉄釘あり
2次2号大土坑 第141図1	把手部材	高さ24.1 幅3.3 厚さ0.6	板状の1側縁に丸みを持たせたもので、四隅と側面は面取りしている　上下端に木釘孔があり、一端には木釘が残る
2次9号土坑 第141図2	把手部材	長さ23.8 幅1.7 厚さ1.0	細長い板状の中央に方形刳り込みを入れ、片端に段を作って臍を作り、反対端は薄くしてい差し込み部として、両端に木釘孔を開けている
2次2号大土坑 第141図3	板材片	長さ8.0 幅7.5 厚さ0.9	板材を斜めに切断したもので、木釘孔がないのでこれ自体で部材をなすものではないか
2次9号土坑 第141図4 図版53	桶蓋	長軸29.8 短軸28.2 厚さ1.0	側縁を斜めに加工　上面中央に溝を掘り、木釘孔を溝の縁に不規則に空けている　溝中央には溝と垂直に2ヶ所木釘孔があり、木釘が残っている
2次9号土坑 第141図5	箱部材	長さ28.3 幅11.4 厚さ0.7	方形板材の2つの臍を設けている　側面に木釘孔はなく、差し込みのための削りも行っていない
2次3号土坑 第141図6	板材	長さ21.0 幅5.8 厚さ0.6	木釘孔がまったくない　側面は欠損ではないので、嵌め込み部材だろうか
2次9号土坑 第141図7	箱部材	長さ11.6 幅3.5 厚さ0.6	両面黒漆　側面は剥離したのではなく、組み合わせると表面には出ない面だからか　側面に臍があり、片側の臍には2つの目釘孔がある
2次9号土坑 第141図8 巻頭5・図版56	木札	長さ31.7 幅12.2 厚さ1.1	方形板の短辺中央に穿孔あり　表裏に墨書があり、片面は「弐番寮」、裏面は「子番寮」と読める
2次9号土坑 第142図1 図版57	不明木製品	長さ2.75 幅3.5 厚さ3.2	平面正方形の扁平な板材で、全面平滑な平坦面
2次9号土坑 第142図2	不明木製品	長さ2.85 幅3.5 厚さ1.0	平面正方形の扁平な板材で、側面の1面のみ水平でない
2次9号土坑 第142図3 図版57	不明木製品	長さ2.4 幅3.2 厚さ3.1	平面正方形の扁平な板材で、全面平滑な平坦面　1面の一部に漆が残る
2次9号土坑 第142図4 図版57	不明木製品	長さ2.6 幅3.0 厚さ2.9	平面正方形の扁平な板材で、全面平滑な平坦面
2次9号土坑 第142図5 図版57	不明木製品	長さ3.25 幅3.1 厚さ1.8	平面正方形の扁平な板材で、全面平滑な平坦面
2次9号土坑 第142図6	不明木製品	長さ3.4 幅3.7 厚さ2.6	平面正方形の扁平な板材で、切断面がある
2次9号土坑 第142図7	不明木製品	長さ4.5 幅4.5 厚さ1.0	平面正方形の扁平な板材で、1角が切断されている　あるいは面取りされた部材を薄切りしたものか
2次9号土坑 第142図8 図版56	不明木製品	長さ5.3 幅2.2 厚さ1.8	直方体の板材で、全面平滑な平坦面で、1面の中央から裏面に斜めに穿孔がある　釘穴だろうか
2次2号大土坑 第142図9	不明木製品	長さ2 幅2.7 厚さ2.3	直方体の板材で、面取りしている部分を持つ面は平滑だが、内面は切断面を残すので、部材を切った残欠
2次2号大土坑 第142図10 図版57	不明木製品	長さ7.5 幅6.8 厚さ2.7	平面正方形の扁平な板材で、1面のみカンナ痕らしい凹凸が残るが、他の面は平滑な平坦面
2次3号土坑 第142図11	部材残欠	長さ7.3 幅4.9 厚さ4.5	蒲鉾形の部材の凸面を一部だけ残したもので、凸面の円弧は平滑で、小口部には方形の繰り込みがある　反対側の小口部は切断時の段が残る
2次2号大土坑 第142図12	部材残欠	長さ8.8 幅2.9 厚さ2.0	直方体の板材の一小口部に段を作ったもので、段作成時のものと思われる沈線が残る
2次9号土坑 第142図13	不明木製品	長さ2.9 幅9.2 厚さ3.6	直方体の板材で、全面平滑な平坦面で、1面の縁は面取りしている
2次2号大土坑 第142図14	不明木製品	長さ7.8 幅4.0 厚さ1.3	平面方形の扁平な板材で、1面のみ端部に面取りがある
2次2号大土坑 第142図15 図版57	不明木製品	長さ4.1 幅4.1 厚さ2.8	平面正方形の扁平な板材で、1面のみ水平でない
2次3号土坑 第142図16	不明木製品	長さ12.8 幅8.7 厚さ5.6	方形板の一面に深い繰り込みが入り、その段差端の中央に斜めに木釘孔　その1cm横にも同様の孔　繰り込み部分に入る部材の留め具か
2次9号土坑 第109図17	部材	長さ14.2 幅10.9 厚さ3.2	平面台形の板材で、各面は平滑　切断した残欠なのか意図的な部材なのか不明
2次出土地不明 第142図18	桶側板把手部	長さ39 幅4.0 厚さ0.7	一端に方形穿孔のある把手で、先端に向かって薄くなる　断面弧状
2次9号溝 第143図1	柄杓柄	長さ77.4 幅2.8 厚さ1.7	断面方形で、先端が細く尖り、2つの木釘孔がある
2次2号大土坑 第143図2 図版57	建築材	長さ71.8 幅7.0 厚さ6.2	断面方形で、1面に刃物痕　反対面基部に段　反対面は鉄釘が7本　そのうち1本は折り曲げられている
2次2号大土坑 第143図3 図版57	建築材	長さ134.3 径8.0	丸木の2/3を使用し、表面は断面台形に面取り　方形臍孔2　平坦面側からの方形孔は貫通していない　下端切断し、側面を削って杭先にする
2次2号大土坑 第143図4 図版57	建築材	長さ131.8 径7.8	丸木の1/3を使用し、表面は断面台形に面取り　方形臍孔2　平坦面側からの方形孔は貫通していない　薄いため杭の加工なし
2次2号大土坑 第143図5 図版57	建築材	長さ135.8 径8.1	丸木の2/3を使用し、表面は断面台形に面取り　2つの方形臍孔があり、平坦面側からの方形孔は貫通していない　一端の一部を切断して細くすることで杭先の加工としている
2次2号大土坑 第143図6 図版57	建築材	長さ130.4 径8.2	丸木の1/3を使用し、表面は断面台形に面取り　2つの方形臍孔があり、平坦面側からの方形孔は貫通していない　杭にする加工なし　臍孔に組み合わせる部材が灰いており、一端は欠損しているが、反対面は平坦面を残す
2次2号大土坑 第144図1	桶側板 板材	長さ59.6 幅13.4 厚さ2.0	長軸側両側面に同様に木釘が入るが、位置・個数が一致しない　1面に繰り込まれた部分が2ヶ所ある
2次2号大土坑 第144図2 図版57	桶側板 板材	長さ64.9 幅12.4 厚さ2.0	長軸側両側面に同様に木釘が入る　1面に箍の緊縛痕あり　大きく繰り込まれた部分は緊縛痕が劣化したものか
2次2号大土坑 第144図3	建築材 板材	厚さ57.2 幅8.7 厚さ2.4	釘なし
2次2号大土坑 第144図4	建築材 板材	長さ63.6 幅13.6 厚さ2.0	穿孔や釘孔はない　0．5ミリほどの窪みが数条入る　何らかの理由で圧力を受けたものか
2次2号大土坑 第144図5 図版57	建築材 板材	長さ59.6 幅11.9 厚さ0.5	両端に釘孔があるが、片側が2つ均等にあるのに対して、反対側はランダムに入る　釘を打ち直ししたものか
2次2号大土坑 第144図6 図版58	建築材 板材	長さ65.7 幅12.1 厚さ2.0	断面蒲鉾状で、先端は斜めにカットしているまた先端には鉄釘が打たれている
2次2号大土坑 第144図7 図版58	桶側板	長さ6.45 幅11.6 厚さ3.1	長軸側両側面に木釘5本入る　断面がやや弧状をなす　凸面に箍の緊縛痕あり
2次2号大土坑 第144図8 図版57	建築材 板材	長さ102.5 幅26.5 厚さ2.3	木釘孔は両端にあるが、釘の位置から本来の幅はもっと広く、2つの釘で固定されていたものと見られる
2次2号大土坑 第144図9 図版57	不明板材	長さ35.9 幅14.5 厚さ1.4	方形板を羽子板状に側面をカットしている　木釘孔なし
2次2号大土坑 第145図1 図版57	丸太杭	長さ80.6 径8.6	切断面が残るのみで、杭にする加工ない　樹皮残る
2次2号大土坑 第145図2 図版57	丸太杭	長さ84.4 径7.1	一端を段を設け、そこに円頭釘があり、先端は倒されている　杭にする加工ないが、段のある部分が細いので杭先に利用している
2次2号大土坑 第145図3 図版57	丸太杭	長さ113.5 径6.2	切断面が残るのみで、杭にする加工ない　樹皮なし
2次2号大土坑 第145図4 図版57	丸太杭	長さ133.6 径7.3	切断面が残るのみで、杭にする加工ない　樹皮残る
2次2号大土坑 第145図5 図版57	丸太杭	長さ137.1 径6.9	切断面が残るのみで、杭にする加工ない
2次9号土坑 — 図版57	箒	高さ31.0 幅25.0 厚さ5.0	シュロ葉を4条の撚り紐で繋いだもので、基部は木質の柄がつくのか、シュロ葉をより合わせて柄にするのか不明

Ⅳ　まとめ

1　本町遺跡検出遺構の変遷

本町遺跡は遺構面が２面あり、上面は 18 世紀半後半～ 19 世紀後葉で、この面には同時併存しない新古の遺構群と、瓦の廃棄土坑である２次９・10 号土坑に代表される新しい遺構群がある。下面は 17 世紀後半～ 18 世紀前半で､下面は大溝遺構に代表される最も古い遺構群が存在する。したがって、大きく５つの時期があり、17 世紀後半を１期、18 世紀前半を２期、18 世紀後半を３期、19 世紀前半を４期、19 世紀中葉を５期とすることができる。

概観すると、１期は古絵図に見られない区画の時期で、２・３・４期は古絵図に見られる城下町の区画の時期、５期は文武館成立以降となる。

2　各時期と古地図との比較

１期（17 世紀後半）

１期の遺構は１次 15 号溝状遺構、１次１・３・４号大溝遺構、２次１～３号大溝遺構で、このうち１次１号大溝遺構と２次１号大溝遺構は同一遺構の可能性がある。１次３号大溝と１次 15 号溝状遺構は同一遺構にしては幅が異なるが、深さは同程度であり、１次１号大溝遺構と繋がっていた可能性がある。

この時期の遺構は、これらの規模の大きな溝状遺構のみで、溝で区画される内部は居住空間として利用されていなかったのか、遺物が少なく、明確な掘削時期はわからない。出土銅銭は宋銭や明銭が多く、中世の中国製磁器片や五輪塔部材など中世の名残を残しているものの、17 世紀を遡らないだろう。１期の遺構は意図的に埋め戻され、18 世紀初頭には整地されている。

こうした規模の大きな溝は城の堀の外部にあることから、城の堀ではなく、環濠集落の堀であったと考えられる。環濠集落の痕跡は現在でも柳川市北部や大木町に見ることができ、城下町としての事例では、佐賀県吉野ヶ里町姉川城跡（註５）に見ることができる。姉川城跡は、中世の環濠集落が城館を中心に広がり、「城下集落」的な様相を呈している。江戸前期の柳川城も家臣の屋敷地である環濠集落を城の周囲に配置するとともに、城の防衛施設としての機能も持たせていたのだろう。こうした入り組んだ大溝は、水運には利便性があるが、都市としては不便なので、18 世紀には多くの大溝を廃して、現在柳川城下町に見られる幹線水路のみ「堀割」として残したものと考えられる。

姉川城全体図（1/16,000）神埼町教育委員会1996『姉川城跡』より引用

第 146 図　１期の遺構と佐賀県姉川城跡との比較

２・３期（18 世紀前半・後半）

２期の遺構では、北東の２次１・２号溝状遺構と南東の２

次７号溝状遺構が同時併存しており、２次７号溝状遺構は２次10号溝状遺構・２次２号大土坑と併存する。南東の１次18号溝状遺構は、２次１・２号溝状遺構と一連の遺構の可能性もあるが、溝の規模としては１次4a号溝状遺構と同一遺構の可能性の方が高い。１次4a号溝状遺構と１次５号溝状遺構は道路状遺構の側溝として併存する。南西では１次28号溝状遺構が当該時期で、本遺構の東端は不明瞭だが、１次５号溝状遺構とは繋がらない。これらを概観すると、北東には２次１・２号溝状遺構の区画が、南東には１次4a号・18号・21号溝状遺構の区画が、北西には２次７号溝状遺構の区画があり、南西は１次28号溝状遺構が境界の役割を果たしていたようだ。

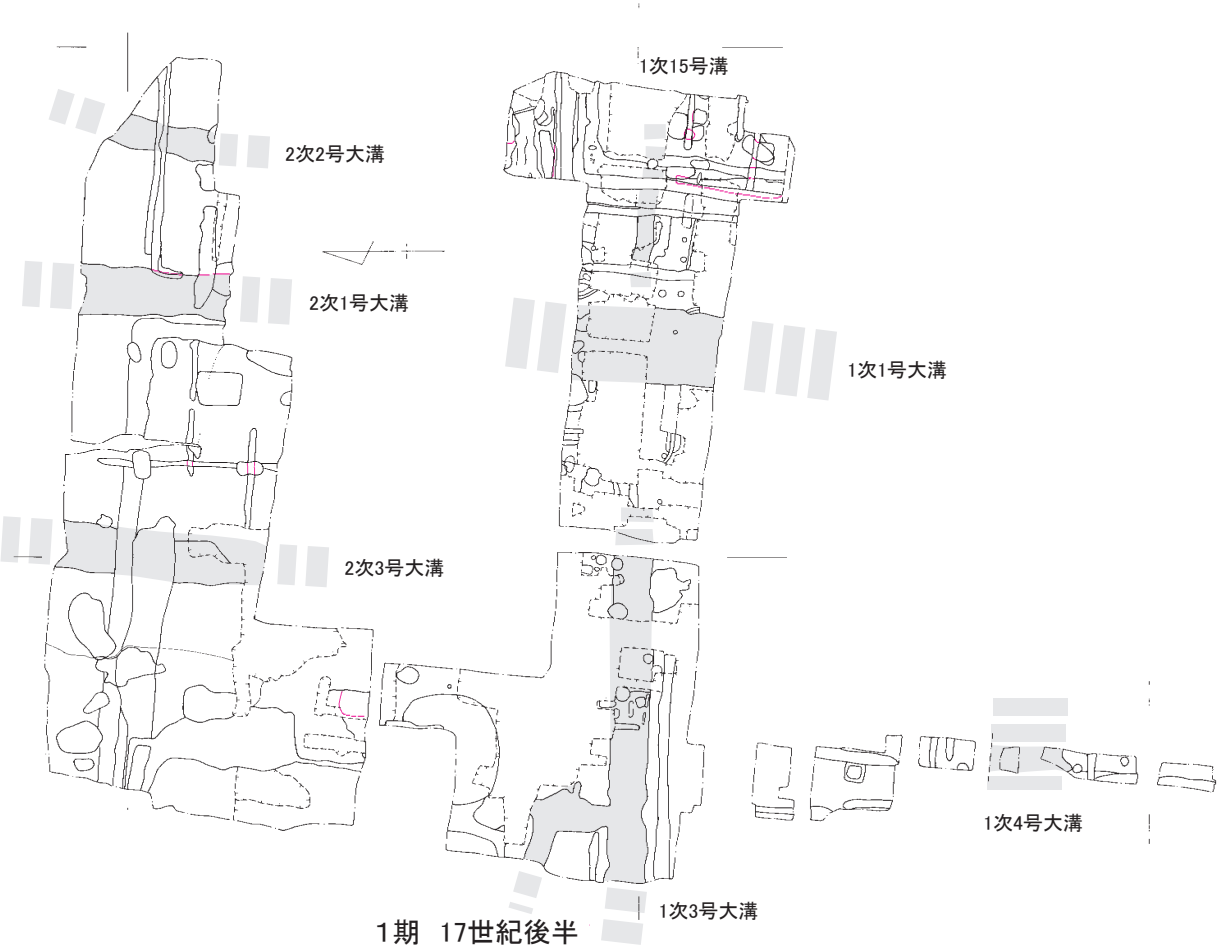
３期の遺構は２期の遺構を切る溝状遺構で、東部の１次調査の東西方向の道路状遺構と１次4b・５号溝状遺構を側溝とする南北方向の道路状遺構が１次１・20号溝状遺構と併存し、北東部は２次４ａ～ｃ号溝状遺構が北西部の２次12号溝状遺構と併存する。

これを第149図の寛政３（1791）年に作られた「御家中絵図」（註６）と比べると、東部の区画形状が３期と整合し、２期とは一致しない。２期は18世紀前半なので、18世紀後半の３期になって区画が変わったということだろう。この図によれば、南東の区画は18世紀後半の由布内記家、その南に矢嶋家、北西の区画は城家、南西の区画は屋山家であり、北東の小さな区画は第150図の文政８～９（1825～26）年に描かれた『柳河明証図会』辻御門周辺の絵（註７）によると「牢屋」と書かれている。明和から安永年間（1764～1781年）に作られた「近世後期柳河城下屋敷割図」（註８）では、城・屋山家は変わりないが、屋敷替えのためか由布内記家と矢嶋家の敷地には他にも多くの人名が併記されてる。辻門裏の２家は代々同じ家が引き継ぐことが認められていたようなので、この２家については、城家と屋山家であったとみて間違いない。

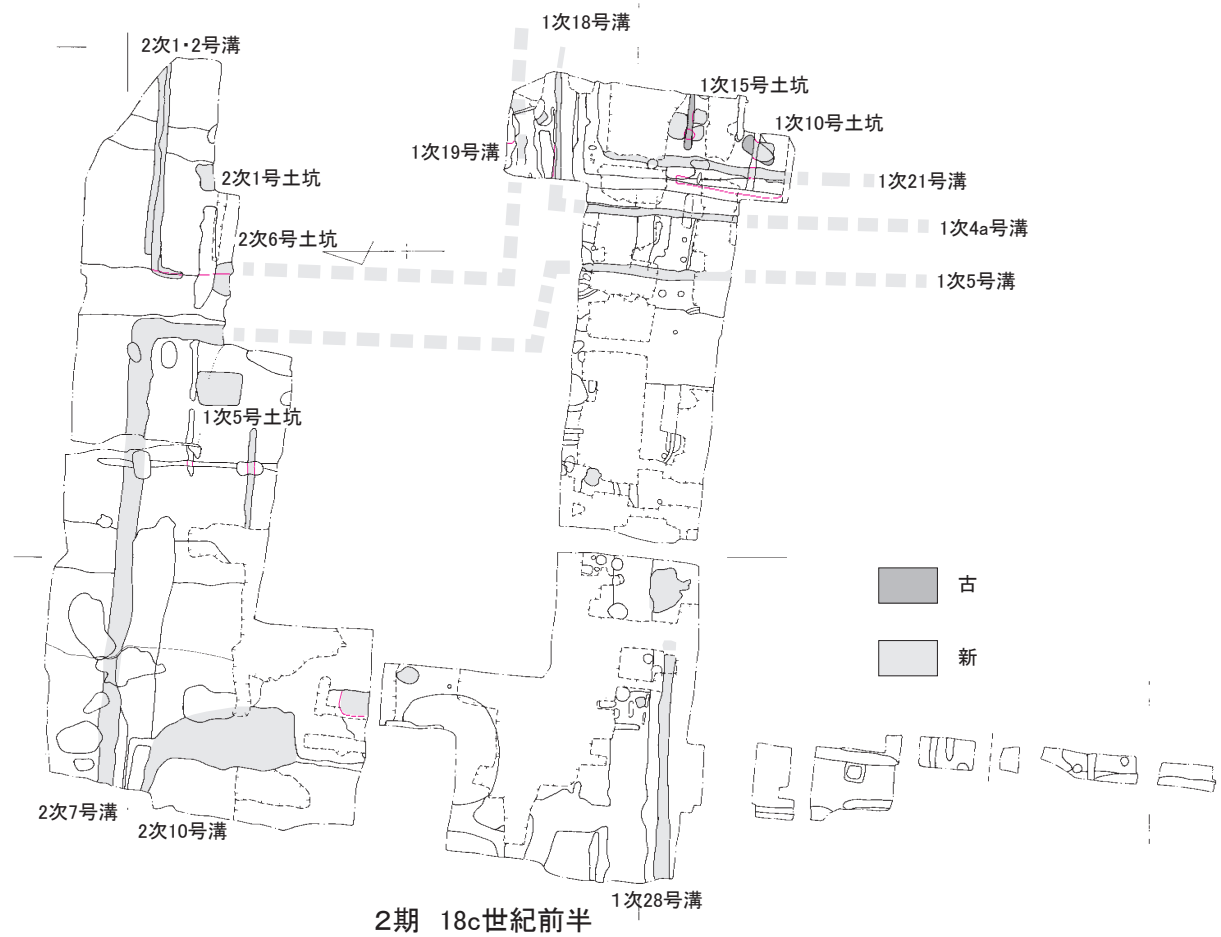
出土遺物を比較してみると、１次22号土坑で「屋山」銘の入った陶器片が出土しているが、ちょうど屋山家と城家の境界で発見されている。瓦は２次4a号溝状遺構と１次13号溝状遺構、２次７号溝状遺構の東部で集中的に出土しており、２次５号土坑では瓦が大量に廃棄されていた。このことから、２次4a号溝状遺構と１次13号溝状遺構の瓦は北東部の牢屋の屋根に葺かれていたもので、２次７号溝状遺構の東部と２次５号土坑の瓦は、城家の屋敷の屋根がすべて瓦葺きだとすれば瓦の廃棄土坑が少なすぎる。門のみが瓦葺きだったとも考えたが、『旧柳川藩志』「第十七章風俗」（註８）によれば、武士の家の門は藁葺きで、家老の門は瓦葺きが多く、生垣は竹垣が多かったが、寛政７（1795）年に柚子を生垣とすることが奨励されたためほとんど柚子垣になったという。後の幕末に書かれた「柳川藩御家中絵図」（註９）では、城家の門は調査区外に位置しており、辻御門を中心とする掘割沿いは白壁の塀で瓦葺の表現がなされている。また、『柳河明証図会』の辻御門周辺でも瓦葺に描かれている。したがって、牢屋の瓦と掘割沿いの塀の屋根瓦だろう。

１号墓と獣骨集中部は由布家敷地内にあたり、１号墓はイヌの墓で、ニワトリは解体されていないのでイヌ・ネコ・ニワトリは食用ではなく、愛玩用だったのだろう。由布家敷地内の廃棄土坑である１次10号土坑出土の内外赤漆塗りの杓や、１次15号土坑出土の漆器類からは、他の２家よりも豊かな暮らしぶりが窺える。

文政２（1819）年の侍帳では、由布内記家は200石、城家は150石、屋山家は100石取りである。由布内記家は宝暦７～安永４（1758～1775）年に編纂された「立花家旧記」に、立花（戸次）道雪が筑前立花城を居城としていた時の家老に、由布内記の祖として由布家續の名があり、譜代の家臣の家柄である。柳川藩では上級武士といえ、他家は中級武士にあたり、この差異が表れているの

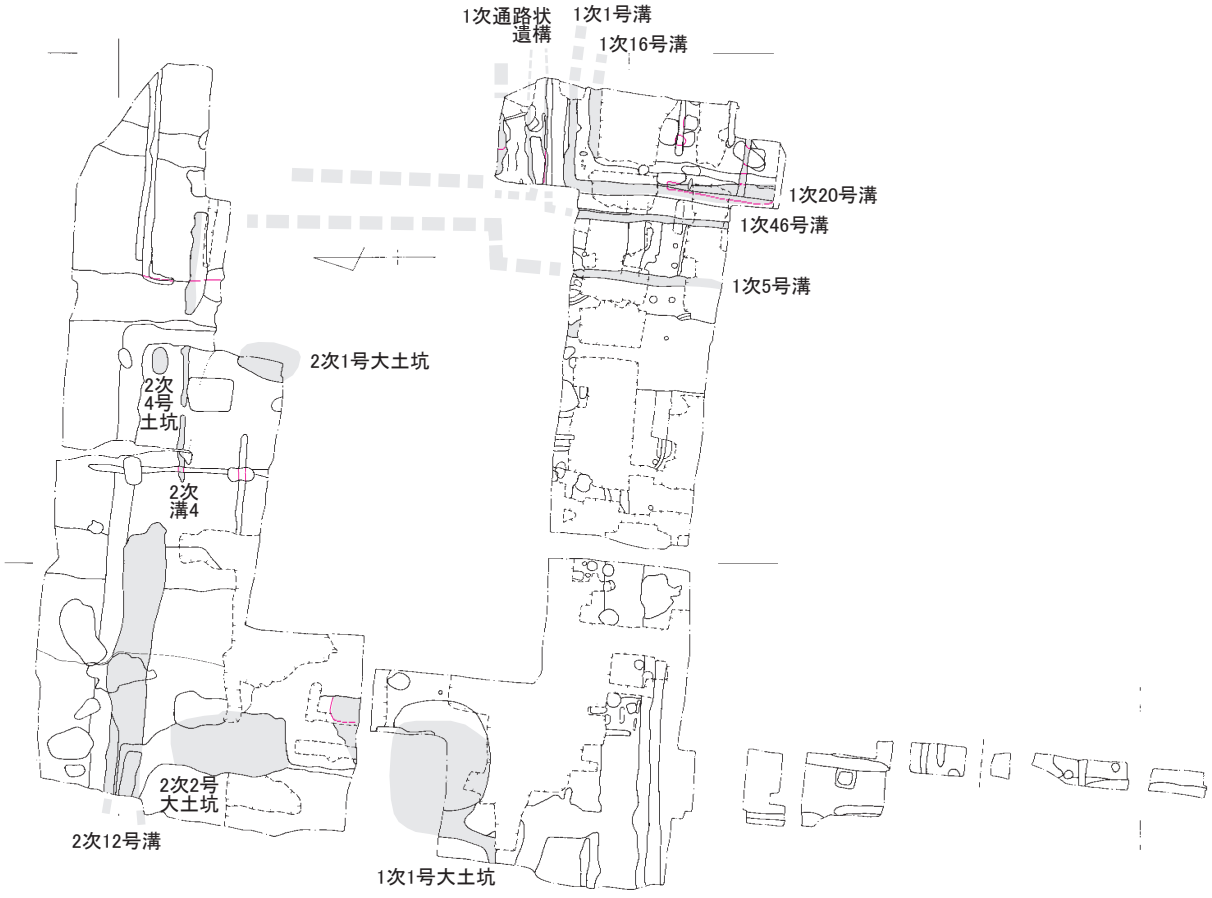


1期　17世紀後半

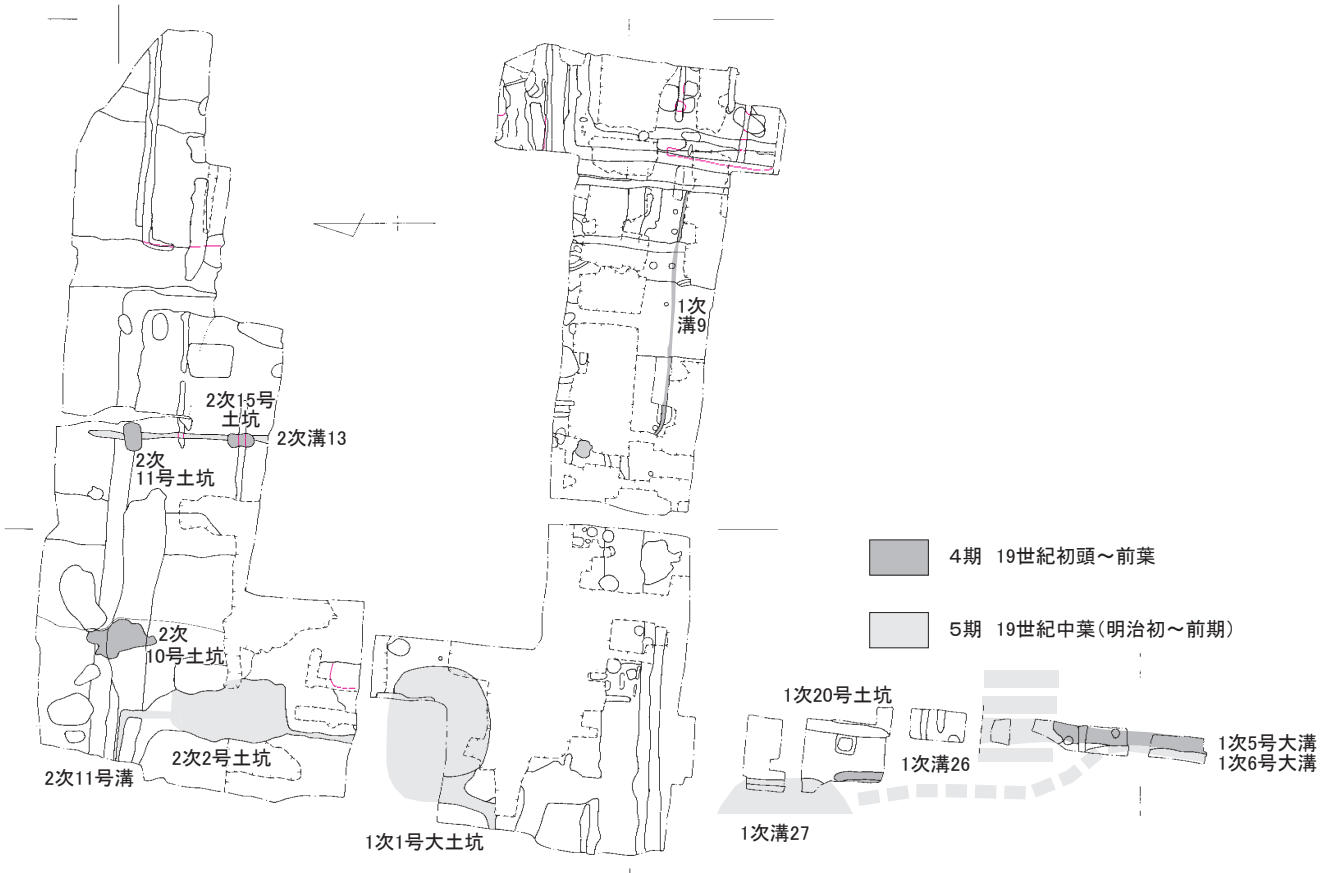


2期　18c世紀前半

第 147 図　本町遺跡遺構変遷図 1（1/800）

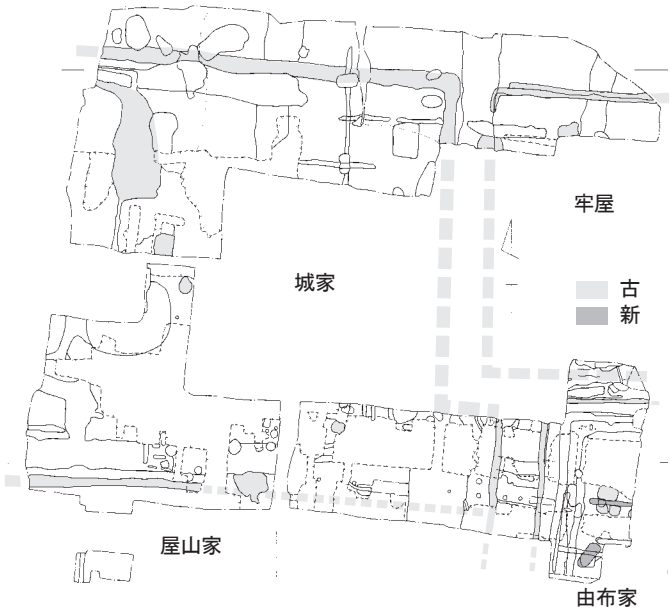


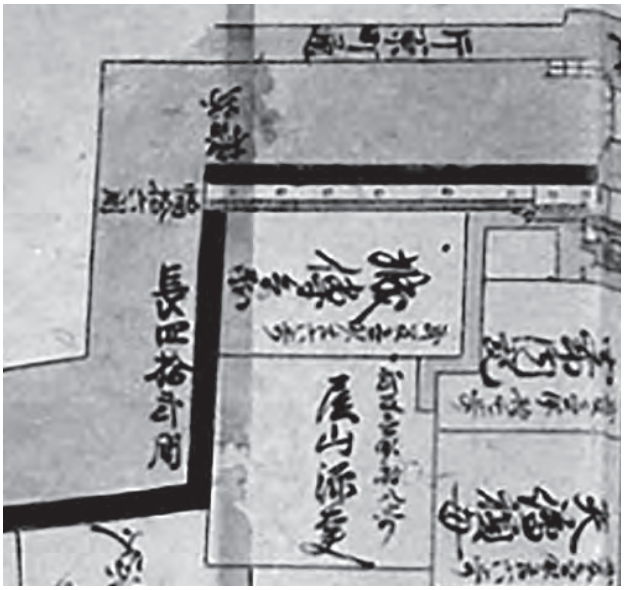
3期　18世紀後半



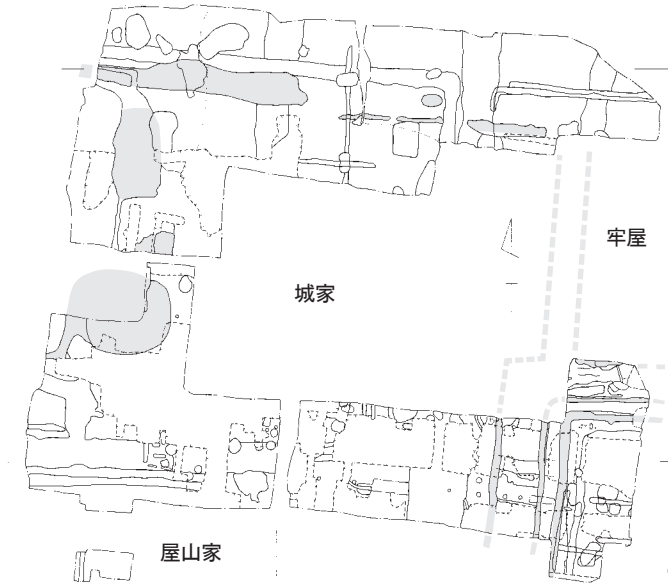
4・5期　19世紀初頭～中葉

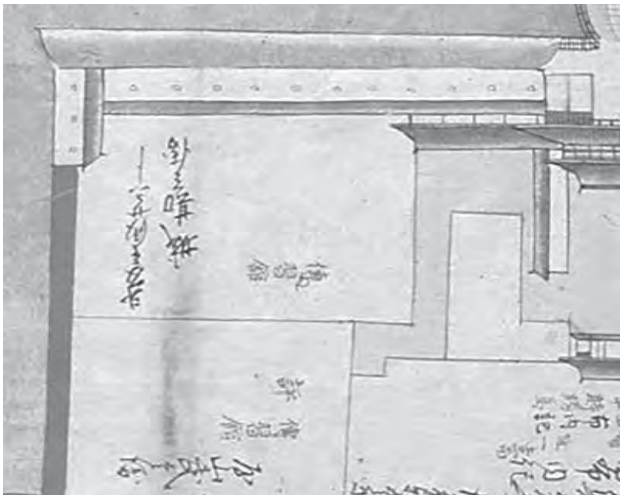
第 148 図　本町遺跡遺構変遷図2（1/800）



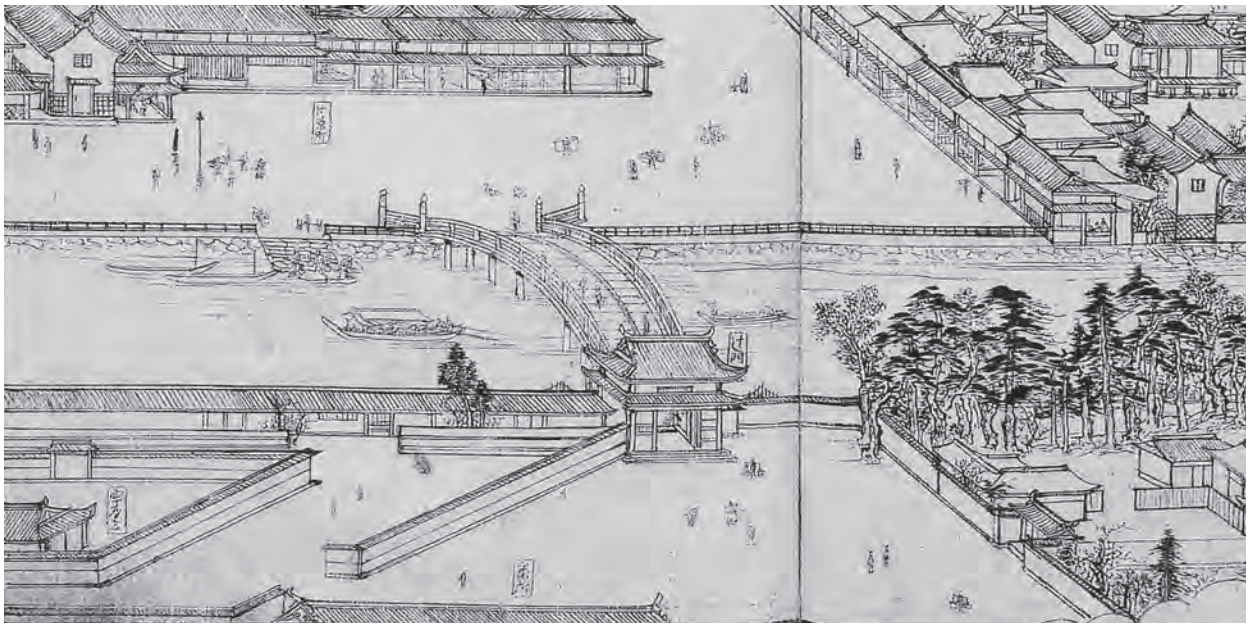


『近世後期柳河城屋敷割図』（渡辺家史料）の一部
明和～安永期（1764～1781）





『御家中絵図』（旧藩主立花家史料）の一部　寛政３（1791）年



『柳川名勝図絵』の辻門周辺の風景

第 149 図　2・3 期の遺構と古絵図との比較

だろう。一方、城家と屋山家が初見されるのは、寛永６（1629）年の「宗茂公御代諸士高附帳」であり、城甚蔵･屋山久馬助の名がある。屋山家は高橋紹運の家臣であり、立花宗茂が柳川藩主となって新規に登用されたようだ。明和８～安永４（1772 ～ 1775）年には屋山家は武兵衛（100 石）と郡右衛門（3 人扶持切米９石２斗）が併記され、分家として存続していく。（註 10）

寛政２～ 10（1790 ～ 1798）年のものと見られる「分限帳」では、矢嶋頼母が 300 石取りで記載されており､本小路沿いに屋敷を構えるに相応しい家格となっている。「文久･慶応･明治　家中変遷」では評定所前に尉右衛門に系譜をもつ角右衛門が、奥州小路には城家とともに屋山仙之助の名があるので、屋山仙之助が本家で、隣接地の後の評定所前に分家が置かれたのだろう。城家は屋敷地を分家に分けることなく存続し、屋山家は東西で分かれたものと見られるが、本調査区では屋山家の敷地が北辺がわずかにかかるのみで、その変化を捉えることはできなかった。

なお、2 期にはすでに石炭を使用していたことが確認できた。柳川藩が小野家に大牟田市鷹取山で石炭を掘削し始めるのは天保６（1835）年なので、それ以前に流通していたことがわかった。

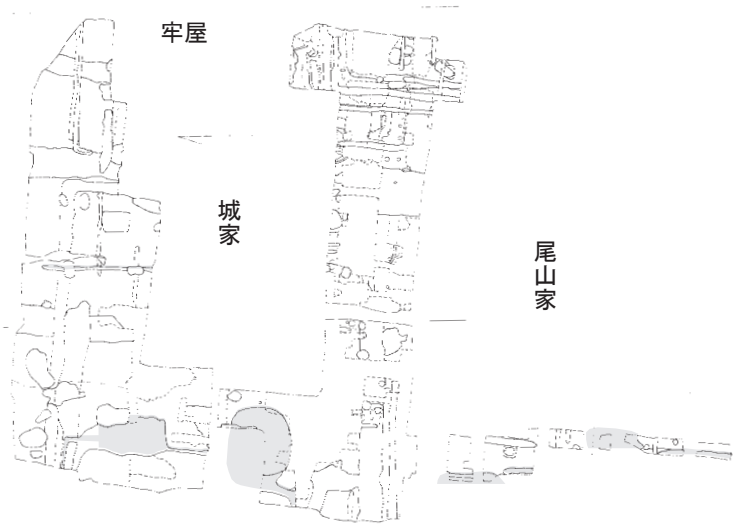
4 期（19 世紀初頭から前葉）

4 期になると、２・3 期と続いていた３軒の屋敷の区画溝が見られなくなり、2 次 13 号溝状遺構や 2 次 11 号溝状遺構のように規模が小さくなる。当該期の絵地図は幕末の「柳川藩御家中絵図」（註 11）だが、これには南西の 1 次 4 号大溝の堆積過程の上位溝が描かれている。さらに、これと垂直方向に走る 1 次 6 号大溝もあり、調査区外で 1 次 20 号土坑・1 次 26 号溝状遺構に繋がっていることがわかった。この絵地図との位置関係から、東部を見ると、屋敷区画が大きく変化し、由布内記家が南西に大きく張り出している。このことが、２・３期の区画溝が失われた原因であろう。

『旧柳川藩志』によれば、寛政６（1794）年に外町大火が起こり、辻町まで延焼し出門橋が消失している。「家中に及ぶ」とあるので、橋の近隣の武家屋敷も被害を受けたのかもしれない。（註 12）区画の変更はこれを契機に行われたと考えられる。しかしながら、調査区内には焼土面や火熱を受けた遺物など、火事の痕跡は確認できなかった。

この時期に検出された遺構と絵地図との比較で注目されるのは、北西部の 2 次 2 号大土坑と 1 次 1 号大土坑が、この絵図では緑色の楕円形に描かれている位置にあたり。1 次 20 号土坑もまた、同じ楕円形の位置にあたっていることである。この緑の楕円形はこの絵図では堀割の本城側にのみに樹木とともに描かれている。つまり、城内地区の防御に関わる施設として、武家屋敷に計画的に配置されたものと考えられる。2 次 2 号大土坑・1 次 1 号大土坑・1 次 20 号土坑に共通するのは導水施設であり、2 次 2 号大土坑･1 次 1 号大土坑は大型の土坑である。このことから、堀割から導水し、溜井に水を溜める溜井であったとわかる。柳川市域は海に近い低平地であることから、井戸に塩が混じるため、戦前まで堀割を取水源としていた。堀割を挟んで籠城した場合、取水に危険が伴うことから、籠城時の取水源として堀割の城側に面する屋敷地には、溜井の設置が義務付けられていたのだろう。

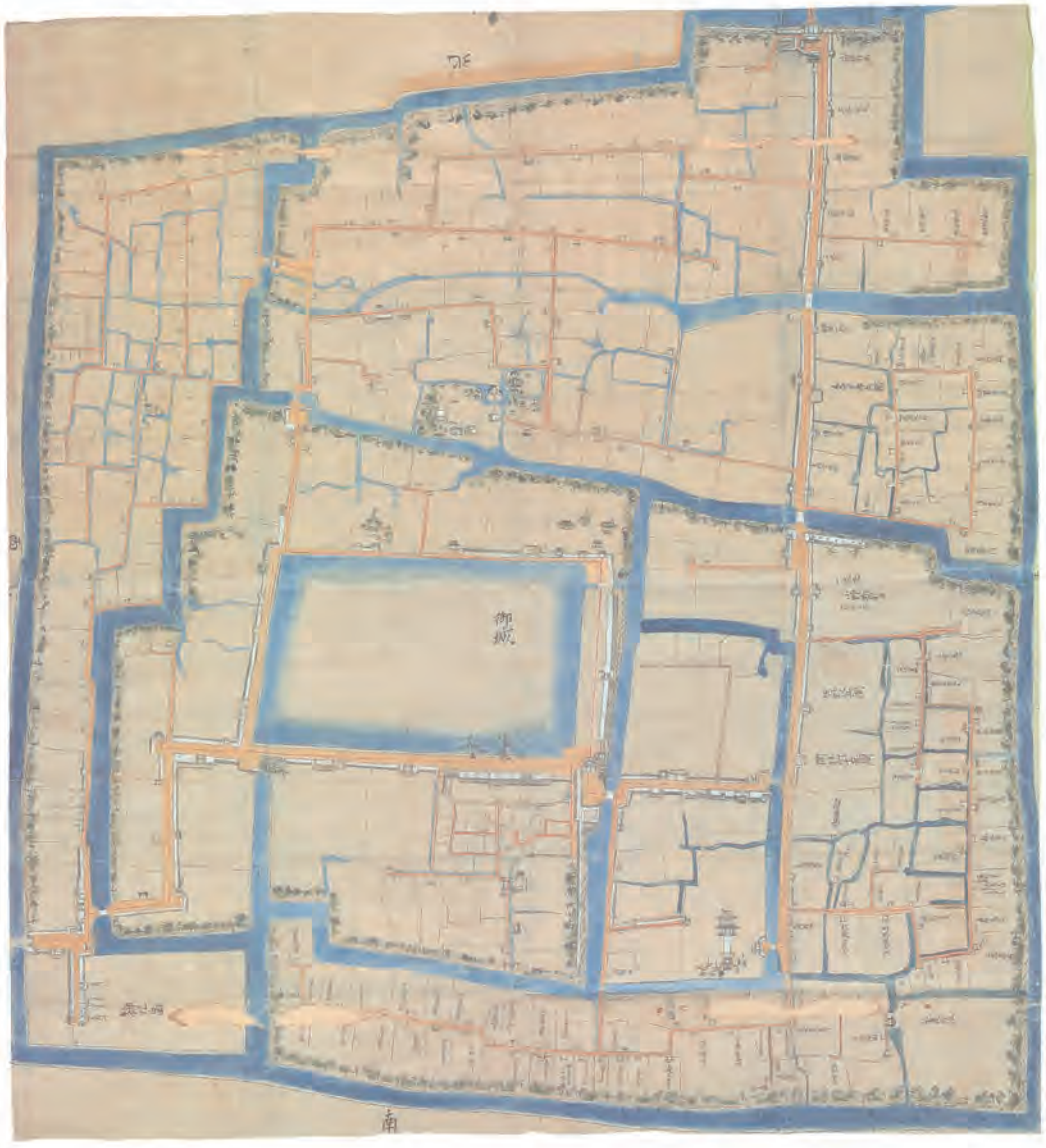
この溝が取水源だったと考えると、現在の井戸のように埋め戻す際には祭祀を行っていたのではないだろうか。1 次調査 28 号溝状遺構から出土したウシの肩甲骨から先の脚部は、食用に供されることなく溝底から出土した。28 号溝は西に直進すると川につながる溝であるので、水神への供物であったとすれば理解できる。



4期の遺構

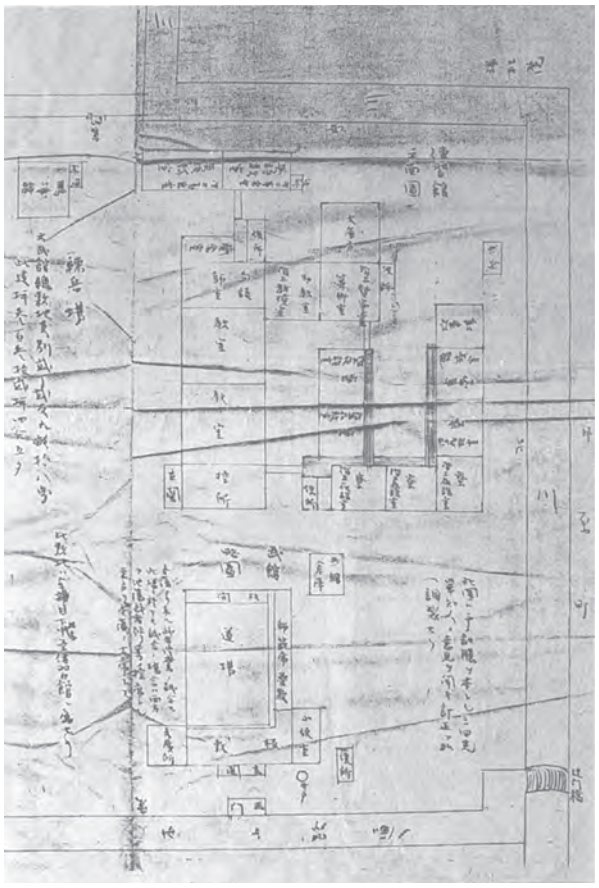
整合.部分

『御家絵図』部分（蒲池文書）

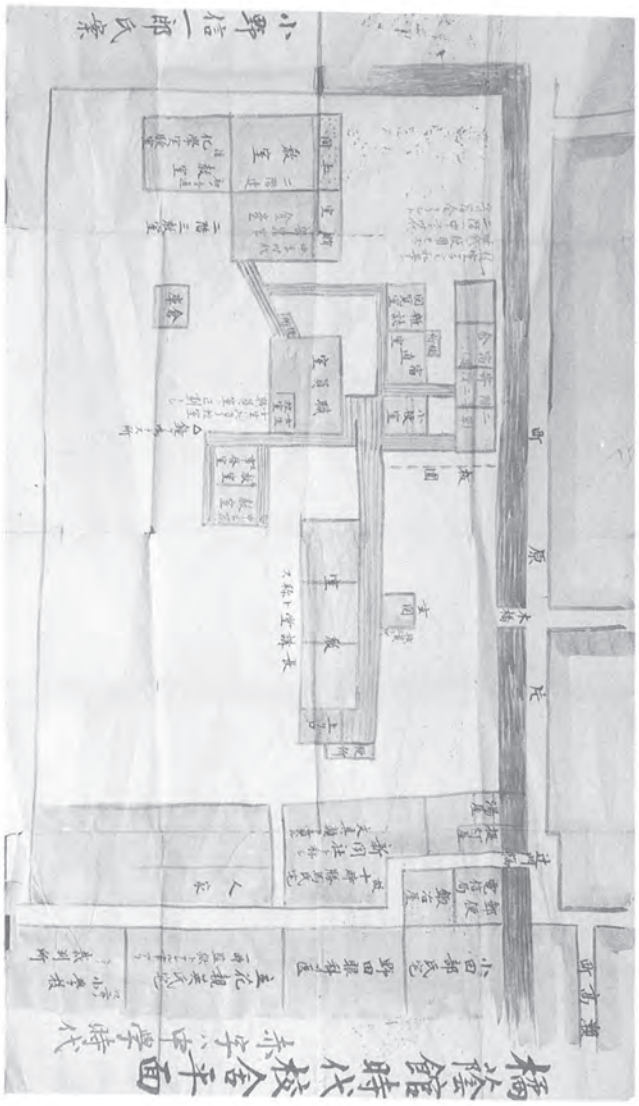


『御家中絵図』（蒲池文書）　城内地区の掘割内側に溜井が並んでいる

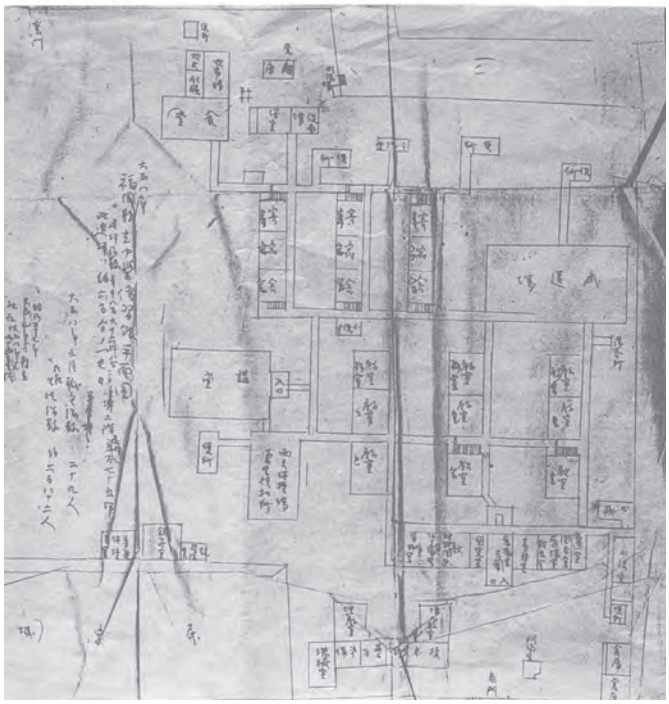
第 150 図　4期の遺構と古絵図との比較



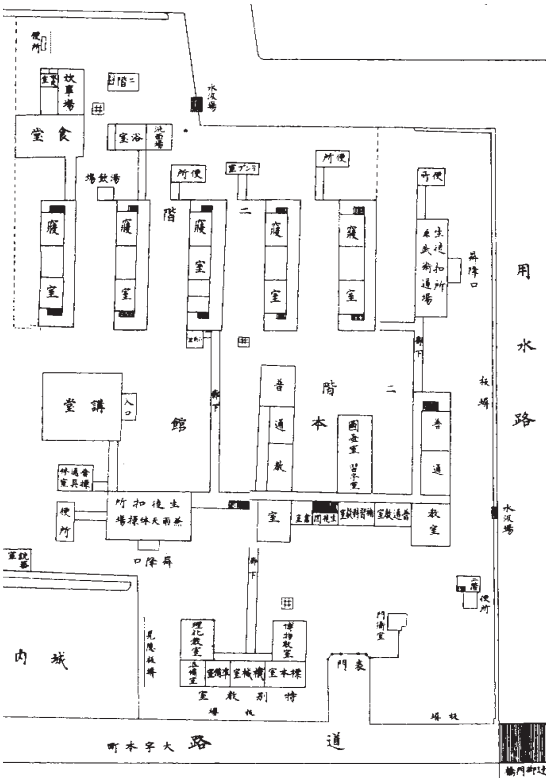
1　文武館校舎平面図
「明治２年文武館と呼ばれていた頃の伝習館の図」



2　橘蔭学館時代校舎平面図

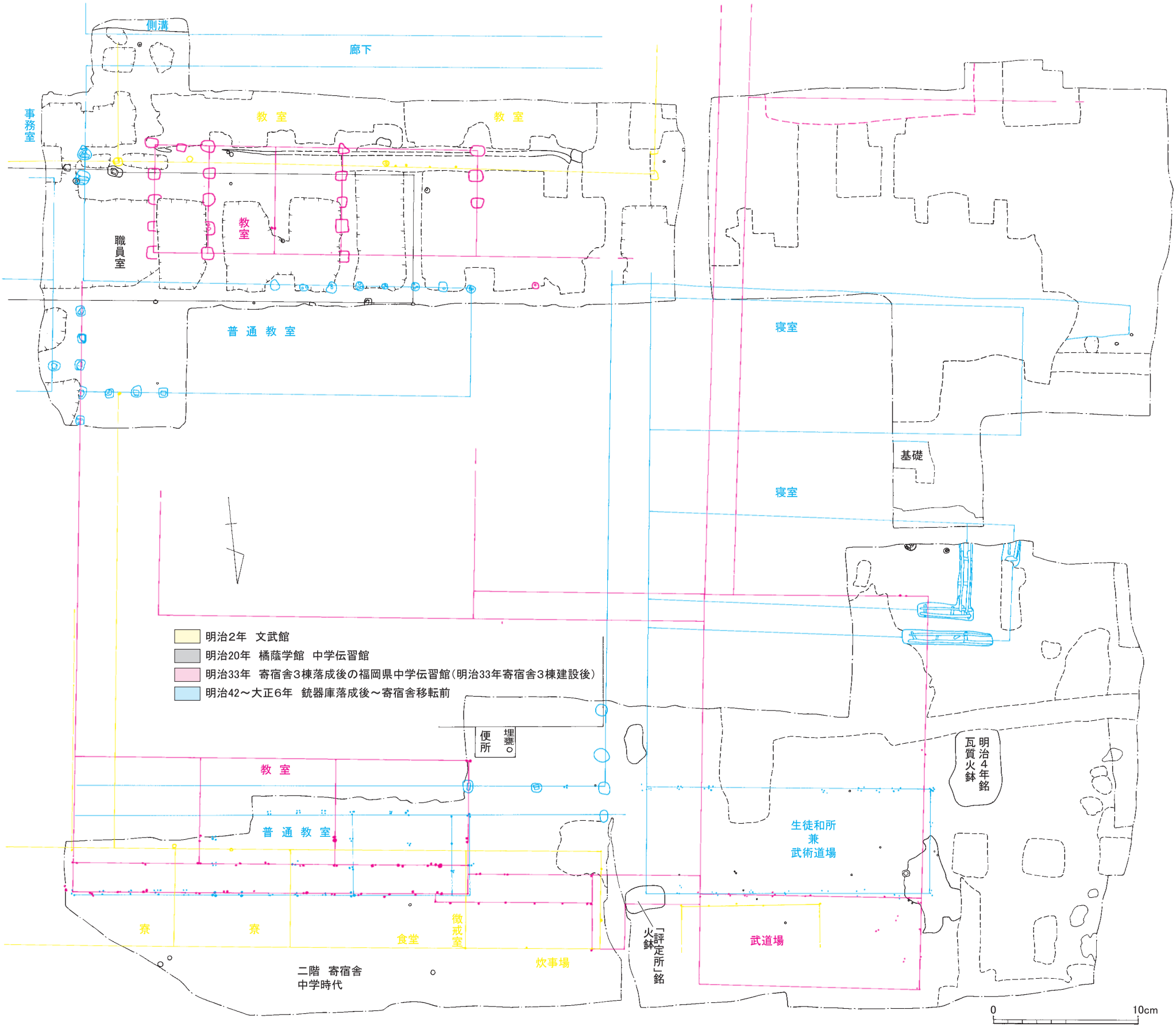


3　中学伝習館校舎平面図「昭和７年頃の伝承館の図」



4　福岡縣立中学伝習館平面図
『創立百七十周年県立移管百周年記念誌』より引用

第 151 図　県立伝習館高校敷地内における施設変遷図



第 152 図　本町遺跡明治・大正期遺構復元図（1/300）

5期（19世紀中葉）

５期にあたる２次９～11･15号土坑、２号大土坑上位からは瓦や文房具が多く出土することから、武家屋敷に伴うものではないことがわかる。これらの遺構からは、線刻文字の入った火鉢と墨書のある木札も多く出土しており、この敷地に置かれた教育施設の見取り図を比較しながら、遺構・遺物を検討してみる。

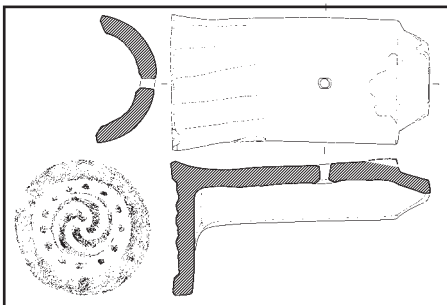
まず、11号土坑出土火鉢の口縁部の線刻文字には「北三番□□□□明治四年未十月五日□之北三番之火鉢」とあるので、明治４（1872）年以降であることは間違いない。また「評定所」の文字は、明治３（1871）年に文武館に置かれた「評定所」を指している。「訴状所」は記録にないが併設されたのかもしれない。文房具は、２号大土坑上位では硯だが、９号土坑では石筆と陶器製インク瓶があるので、時間差がある。したがって、２号大土坑上位出土の文房具は、武家屋敷廃絶後に最初に建てられた教育施設である文武館に伴うが、９号土坑はその後の施設に伴うといえる。10号土坑と９号土坑は瓦廃棄土坑であり、接合する土器もあるので同時期である。したがって、11号土坑と２号大土坑、９・10号土坑に２分できる。

11号土坑火鉢の線刻文字は「北三番」があるが、文武館の教室は直線配置なので、北教室と呼ぶものがなく、北側に寮があることから、「北三番」とは「北寮三番室」を指すのだろう。９号土坑出土の木札は「子番寮」「弐番寮」と書かれ、10号土坑の火鉢の線刻文字には「表寮」と書かれており、時期が近接した遺構なのに、寮の表示方法が異なっている。文武館時代は「北寮」であるが、その後の呼び方の順番は現段階ではわからないが、文武館と橘蔭学館の間の教育施設にも寮が併設されていたことを窺わせる資料である。また、火鉢に書かれた人名は寮生のものだろう。火鉢は「北三番」のように、各室に専用に置かれており、それを使用する人名も明記されていることから、火鉢の使用については厳しい規則があったのだろう。11号土坑の「里屋直□」は、柳川藩士であった里屋家の子息であろうか。（註13）

文武館の後の教育施設は、見取り図がないものの文武館の建物を利用していたとされているので、大きな建物の変更はなかっただろう。これに対して、明治20（1888）年の橘蔭学館の見取り図は、建物配置が文武館と大きく変わっているので、２次９・10号土坑は橘蔭学館建設に伴って、文武館建物解体時の廃棄土坑だろう。したがって、瓦は文武館のものだが、文房具は橘蔭学館直前の公立中学伝習館のものと推定される。ワインボトルやワイングラス、革靴の底などは明治６（1874）年の英学校のものかもしれない。９号土坑からは罫線で区画された中に漢数字が書かれた方形の板材があり、墨書が確認できないが同じような板材が多く出土している。当時の教材とすれば貴重な資料である。２次２号大土坑の木札には人名が書かれた物があり、在席を示す名札であろう。「三番係」という名札があることから、文館でも名札を使用していたのかもしれない。また、第85図７・８の「山田」銘は、評定所留役だった山田彦左衛門興孝を指す可能性が高い。（註14）

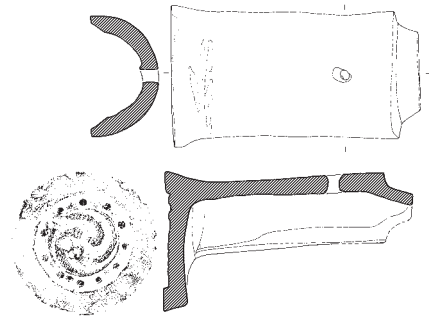
３　明治期の遺構について

１次調査では、東部に近代の礎石列が、中央部に礎石下の栗石入りの柱穴列が残っており、礎石下には沈下防止のため２～５本単位の杭が打ち込まれていた。（図版15）２次調査では、昭和のコンクリート基礎下の杭と分別し、１～５本単位に打ち込まれた杭が直線的に並んでいたことから、１次調査の礎石列とともに建物の復元が可能と考え、遺構図に記録し、復元を試みた。

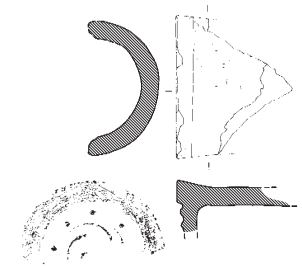


A1a 類
珠文13
珠文径　0.8cm
珠文間　1.3cm
面　径　14.5cm
第113図　2次４号溝
同笵　第77図1
第79図3･4　2次5号土坑
第109図2　2次2号大土坑
第114図2　2次4号溝

A1b 類
珠文13
珠文径　1.0cm
珠文間　2.2cm
面　径（16.0）cm
第66図17
1次1号大溝中位
同笵　第75図7　1次攪乱



A2 類
珠文11
珠文径　0.9cm
珠文間　2.8cm
面　径　15.1cm
第79図5



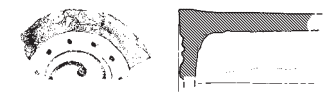
A3 類
珠文8
珠文径　1.0cm
珠文間　3.2cm
面　径　15.2cm
第55図2　1次16号溝

A4 類
珠文8
珠文径　長軸16.8cm
珠文間　3.5cm
面　径　16.0cm
第119図3　2次12号溝
同笵　第55図1　1次16号溝

A5 類
珠文12
珠文径　0.7cm
珠文間　2.6cm
面　径　（14.6）cm
第39図11　1次3号井戸
同笵　第14図17　1次11号土坑

A6 類
珠文13
珠文径　0.9cm
珠文間　2.1cm
面　径　（14.1）cm
第14図17　1次12号溝

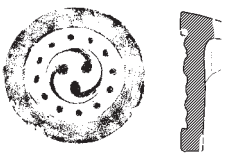
A7 類
珠文13
珠文径　0.7cm
珠文間　1.8cm
面　径　（15.4）cm
第39図7　1次2号井戸



A8 類
珠文10
珠文径　1.0cm
珠文間　2.6cm
面　径（15.9）cm
第73図7　1次北東整地層
同笵　第120図4　2次2号大溝

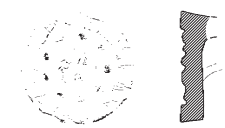
A9 類
珠文22
珠文径　1.9cm
珠文間　0.5cm
面　径（15.0）cm
第73図8　1次北東整地層

A10 類
珠文17
珠文径　1.3cm
珠文間　1.3cm
面　径（14.8）cm
第86図15　2次9号土坑



A11 類
珠文12
珠文径　0.8cm
珠文間　2.2cm
面　径　14.8cm
第87図2　2次9号土坑
同笵　第86図14　9号土坑
第87図1･3

A12 類
珠文9
珠文径　0.7cm
珠文間　2.6cm
面　径　14.7cm
第103図17　2次11号土坑



A13 類
珠文9
珠文径長軸1.1cm
珠文間　2.2cm
面　径　12.0cm
第100図1　2次10土坑
同笵　第86図16　2次9号土坑

A14 類
珠文10
珠文径　0.6cm
珠文間　2.6cm
面　径　12.9cm
第19図1　1次15a号土坑
同笵　第19図2　同上
第109図1　2次2号大土

A15 類
珠文8
珠文径　0.7cm
珠文間　2.4cm
面　径（12.1）cm
第59図7　1次20号溝

第 153 図　本町遺跡出土軒丸瓦分類図1

２次調査検出の杭で直線上に並ぶ組み合わせは、１本のみ、２本単位のみ・３～５本であった。この３種類の杭列は重複することから、同時併存しないと考え、３種類ごとに杭列と礎石の配置を組み合わせてみた。また、２次の埋甕遺構が便槽であることから、この位置に便所が作られたのは橘蔭学館の中央建物のみなので、これにより中央建物の位置が決まり、２次調査の杭列は北側の建物、１次調査の礎石列は東側の建物、１次調査の栗石入り柱穴列は南側建物と判断できた。これらの遺構と、教育施設見取り図の建物配置を参考に、復元したのが第 152 図である。

これにより、文武館時代には武家屋敷には使われなかった杭工法が用いられており、杭工法は杭１本のみが文武館、杭２本単位が橘蔭学館、杭３本以上が福岡県中学伝習館のものと考えられ、寮の重層化や教室の大型化など、建物の重量増大に伴い、杭工法が強化されていったことが想定できる。

４　本町遺跡出土瓦について

本町遺跡からは多くの瓦が出土したが、大きくは本瓦葺きと桟瓦葺きに分かれる。本瓦葺きに伴う瓦は東部に集中しており、桟瓦は２次９･10 号土坑に集中し、明確に分かれている。

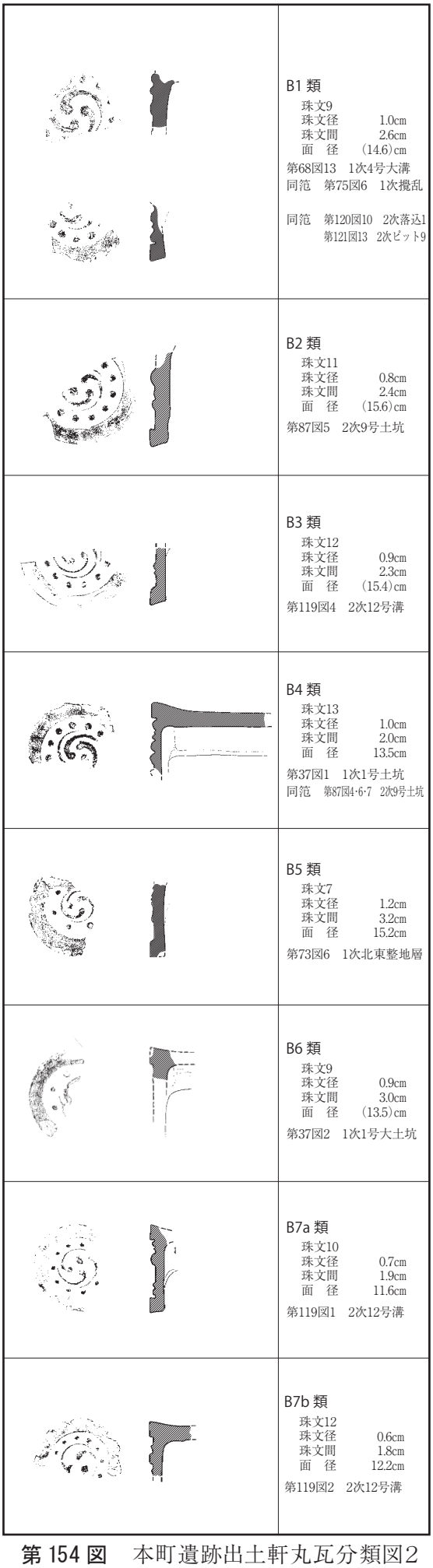
軒丸瓦

左巴文と右巴文に大きく分かれ、左巴文をＡ類、右巴文をＢ類とする。Ａ類が圧倒的に多い。

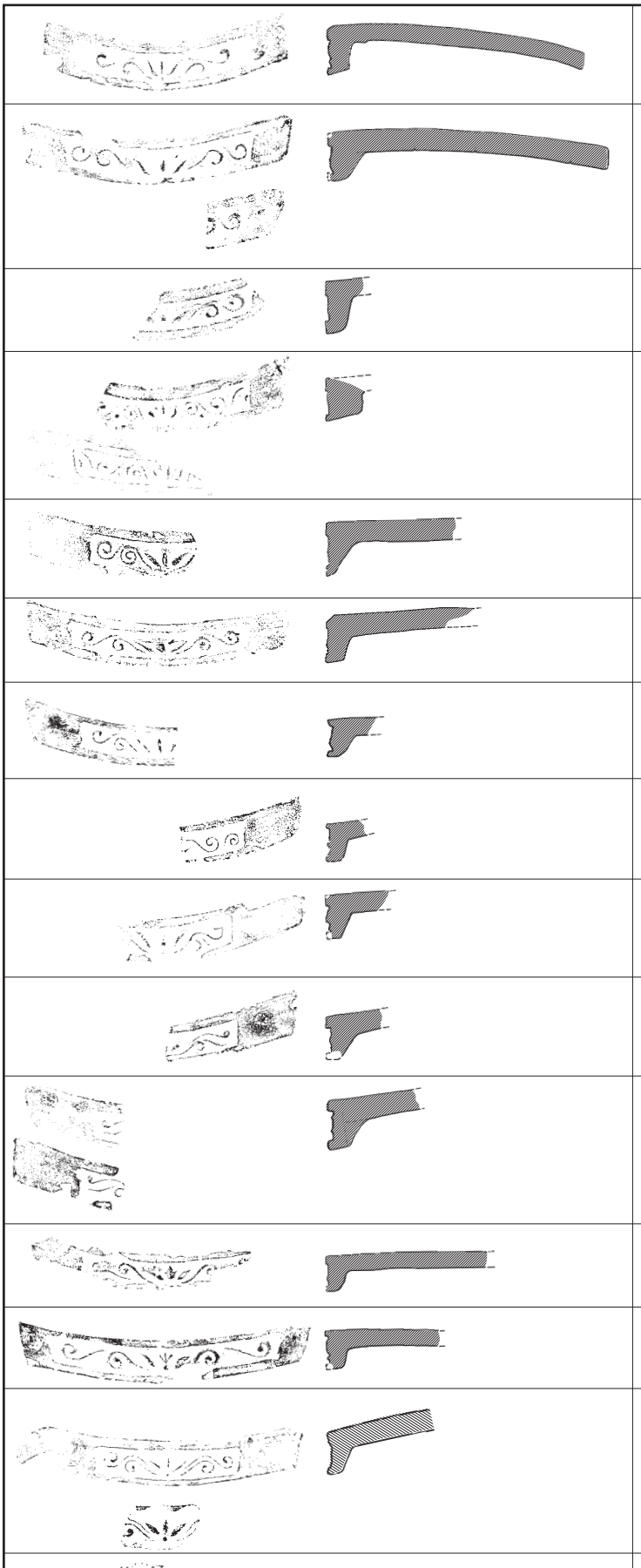
Ａ２類の２次５号土坑は２期、Ａ１類の２次４号溝状遺構と、A4 類・Ｂ２・３類の２次 12 号溝状遺構は３期のもので、位置関係からみて、堀割の塀の屋根瓦だろう。２期の牢屋を取り壊した際の廃棄土坑が２次５号土坑であろう。明治期の９号土坑からも本瓦葺きの軒丸瓦が出土しているが、桟瓦葺きの両端に丸瓦が１条づつ配置される葺き方だったのだろう。点数の少ない種類は整地層出土のものが多く破片も小さいことから、整地の際に持ち込まれたものだろう。

軒平瓦

軒平瓦は本瓦葺きの軒平瓦と、桟瓦に瓦当文がつく、軒桟瓦がある。ここでは､本瓦葺きの軒平瓦を分類する。



第 154 図　本町遺跡出土軒丸瓦分類図2



三葉文 A1a 類
瓦当厚 4.3～4.45cm　同笵　第77図9　1次北東整地層
下弦幅 21.9cm　第82図3　2次5号土坑
第82図2　2次5号土坑　第120図3　2次1号大溝

三葉文 A1b 類
瓦当厚 4.4～4.45cm　同笵　第39図13　1次3号井戸
下弦幅 25.0cm　第50図12　1次2号大溝
第82図4　2次5号土坑　第77図6･7　2次1号土坑
第77図7　2次1号土坑　第82図5　2次5号土坑
第82図6　2次6号土坑
第100図8　2次10号土坑
第113図9　2次4号溝

三葉文 A1c 類
瓦当厚 4.7～4.8cm　同笵　第103図18　2次11号土坑
下弦幅 －
第45図11　1次4号溝

三葉文 A2 類
瓦当厚 4.1cm　同笵　第73図16　1次北東整地層
下弦幅 (22.3)cm　第115図10　2次7号溝
第77図4　2次1号土坑
（本図に拓本のみ掲載）
2次5号土坑

三葉文 A3 類
瓦当厚 4.8cm
下弦幅 (25.4)cm
第73図13　1次北東整地層

三葉文 B1 類
瓦当厚 3.8cm　同笵　第67図8　1次3号大溝
下弦幅 24.0cm
第82図1　2次5号土坑

三葉文 B2 類
瓦当厚 3.45cm
下弦幅 (25.0)cm
第82図12　2次8号土坑

三葉文 B3 類
瓦当厚 4.1cm
下弦幅 －
第73図15　1次北東整地層

三葉文 B4 類
瓦当厚 4.0cm
下弦幅 (25.6)cm
第56図1　1次16号溝

三葉文 B5a 類
瓦当厚 3.7cm
下弦幅 －
第73図11　1次北東整地層

三葉文 B5b 類
瓦当厚 4.0cm
下弦幅 －
第119図10　2次12号溝
第34図18　1次1号土坑
スタンプあり

三葉文 B6 類
瓦当厚 3.2cm　同笵　第34図19　1次1号土坑
下弦幅 (25.4)cm
第59図8　1次20号溝

三葉文 C1 類
瓦当厚 3.5cm　同笵　第73図10　1次北東整地層
下弦幅 27.0cm　第20図6　1次16号土坑
第44図17　1次2号溝

三葉文 D 類（鎌軒桟瓦）
瓦当厚 3.8～4.1cm　同笵　第92図4　2次9号土坑
下弦幅 2.1cm　第93図6　2次9号土坑
第92図5　2次9号土坑　第110図1～3　2次2号大土坑
「嘉永」銘
第37図7　1次1号大土坑

第93図6　2次9号土坑

第110図2　2次2号大土坑

第 155 図　本町遺跡出土軒平瓦分類図1

三葉文を主文とする唐草文は、唐草の巻きが小さく、瓦当面が高いＡ類と、文様が横長いＢ類、唐草の巻きが2重になるＣ類がある。その他をＤ類とした。

Ａ２類・Ａ４類・Ｂ２類は2次5号土坑出土なので、A5類は2次5・6号土坑、4b号溝状遺構に同笵があるので、いずれも2期のものである。

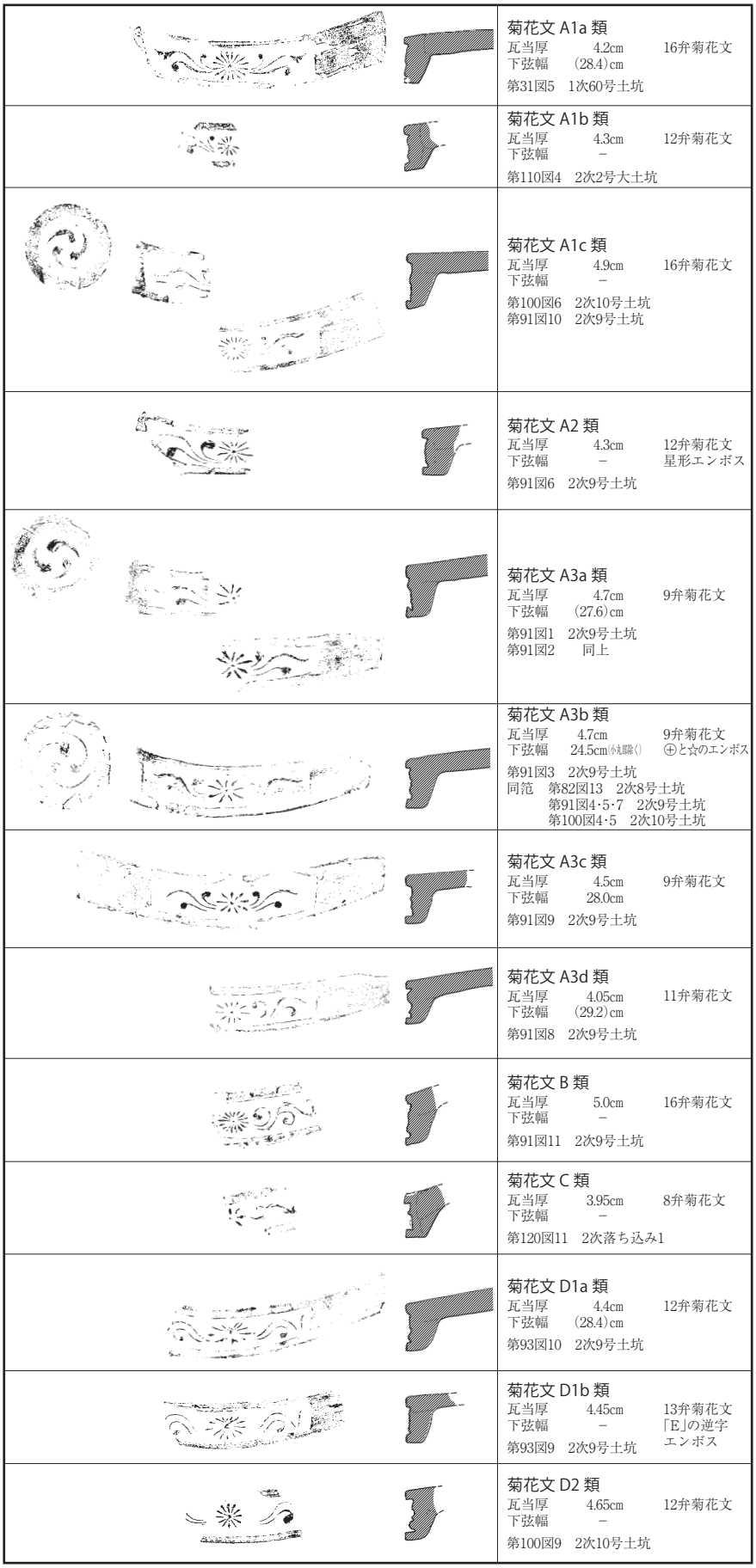
牢屋・掘割沿いの塀の屋根に最初に葺かれた瓦だろう。Ｃ２類も2次1号土坑で、点数が少ないので補修瓦だろうか。

3期に属する軒平瓦はほとんどなく、Ｄ類など点数の少ない小片は整地時に持ち込まれたものだろう。

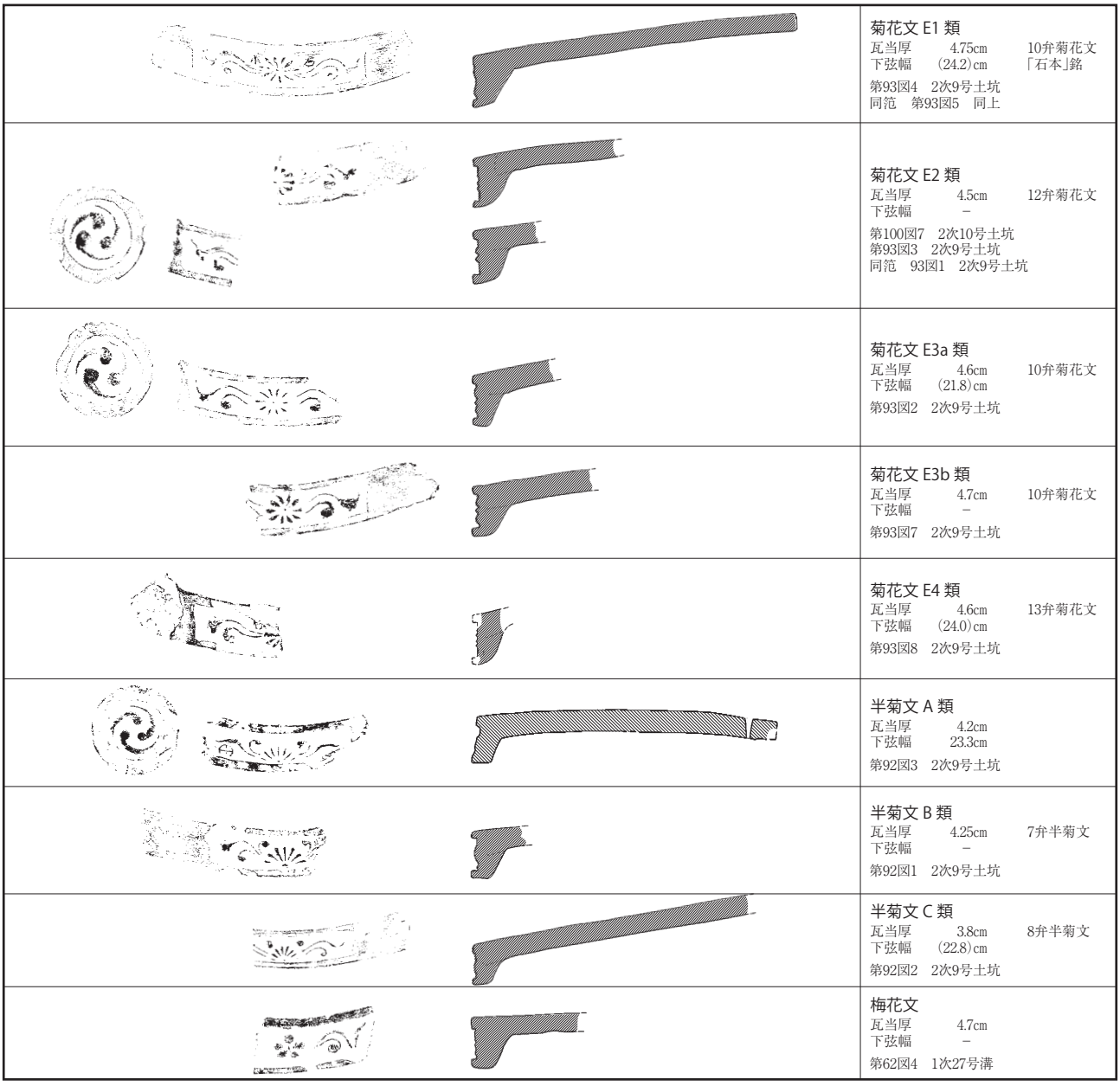
軒桟瓦

第75図5は桟瓦で、凹面に「嘉永」と線刻されている。嘉永年間は1848年から1853年で、この頃にはすでに桟瓦葺建物が出現していたことがわかるが、桟瓦は近代の9・10号土坑以外からはほとんど出土せず、嘉永年間に焼かれた瓦は、どこかの建物に使われたものが転用されたのかもしれない。

軒桟瓦は菊花文を主文とするものがほとんどで、三葉文を主文とするものがわずかにある。「嘉永」銘の瓦が三葉文なので、三葉文が転用瓦なのではないだろうか。菊花文



第156図　本町遺跡出土軒平瓦分類図2



菊花文 E1 類
瓦当厚　4.75cm　10弁菊花文
下弦幅　(24.2)cm　「石本」銘
第93図4　2次9号土坑
同笵　第93図5　同上

菊花文 E2 類
瓦当厚　4.5cm　12弁菊花文
下弦幅　－
第100図7　2次10号土坑
第93図3　2次9号土坑
同笵　93図1　2次9号土坑

菊花文 E3a 類
瓦当厚　4.6cm　10弁菊花文
下弦幅　(21.8)cm
第93図2　2次9号土坑

菊花文 E3b 類
瓦当厚　4.7cm　10弁菊花文
下弦幅　－
第93図7　2次9号土坑

菊花文 E4 類
瓦当厚　4.6cm　13弁菊花文
下弦幅　(24.0)cm
第93図8　2次9号土坑

半菊文 A 類
瓦当厚　4.2cm
下弦幅　23.3cm
第92図3　2次9号土坑

半菊文 B 類
瓦当厚　4.25cm　7弁半菊文
下弦幅　－
第92図1　2次9号土坑

半菊文 C 類
瓦当厚　3.8cm　8弁半菊文
下弦幅　(22.8)cm
第92図2　2次9号土坑

梅花文
瓦当厚　4.7cm
下弦幅　－
第62図4　1次27号溝

第 157 図　本町遺跡出土軒平瓦分類図3

を主文とする瓦は文様バリエーションが多く、数量的な偏りはほとんどない。つまり、近在に多数存在する小規模生産の瓦工房から調達したため、文様の統一性を欠いたのだろう。前述の通り、2次9・10号土坑の瓦は文武館に葺かれていたものと考えられるが、この瓦の調達方法からみて、急遽建設が決まったようなので、文武館の成立背景と合致する。

5　スタンプについて

本遺跡では2次調査9・10号土坑を中心に桟瓦小口部に刻印が多量に発見された。刻印には菊花形が星形とほとんどだがバリエーションが豊富にあり、このほかに円文、円の中に横棒、○に「文」が入るものなどがある。工房あるいは工人を示したものと考えられ、同じスタンプの瓦は同じ形態的特徴を有している。これらの小口部に押されるスタンプは整形後、小口部を上にして立てて乾燥する段階で押されたものと考えられる。同じ種の類のスタンプがほぼ同じ位置に押されているのはそのためだろう。ほとんどが左に凸部をもつ桟瓦に押されているが、稀に右に凸部をもつ桟瓦か平瓦に押されているものがある。

文字2類の「文」は、明治2（1869）年建設の藩校「文武館」のために焼いた瓦である可能性が高い。このほか、「筑後　柳川　村田製　散田」と製作所名と住所が書かれたものもわずかながらあった。「柳川散田」は現在の柳川市三橋町蒲船津地区にあたり、近世・近代には瓦生産が盛んにおこなわれていた。（註15）星形のスタンプは軒桟瓦に星形のエンボスを持つ菊花文Ａ２類やＣ１類と組み合わさる可能性がある。

6　瓦の分布と各期の屋根形態について

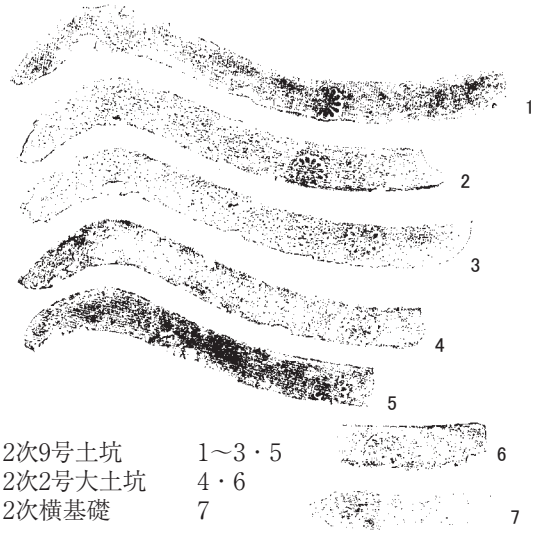
１～３で、検出された遺構がどのような施設・屋敷地に伴うものか検討してきたが、瓦の出土状況と分類結果を加えて、それぞれの建物の屋根形態に言及したい。

まず、調査区北東部の牢屋・掘割沿いの壁の屋根は本瓦葺きで、A1a類の軒丸瓦とA1a・b類の軒片瓦が組み合わさる。1次13号溝状遺構や4a号溝状遺構からは、完形に近い瓦が出土しており、雨落溝に瓦が落ちた物と思われる。A1a類の軒丸瓦とA1b類の軒片瓦が組み合わさる。

城家・屋山家ともに茅葺きだったと見られ、瓦の出土は北部・西部に限られる。なかでも長さが25cm前後の短い瓦が2次8・９・10号土坑、2号大土坑、12号溝状遺構にあり、堀割沿いの塀の屋根が瓦葺きだったのだろう。輪違瓦の分布もこれに近く、摩滅が著しいことから、堀割沿いの塀の屋根に使われたものだろう。Ｂ４類は瓦の横幅が広く、瓦当文が横に長く、主文も独特である。1次2号溝状遺構出土で、東部の由布家の区画に属する。由布家は本小路に面する屋敷地だが、瓦自体の出土数が少ないので、道路に面する塀だけが瓦葺きだった可能性が高い。

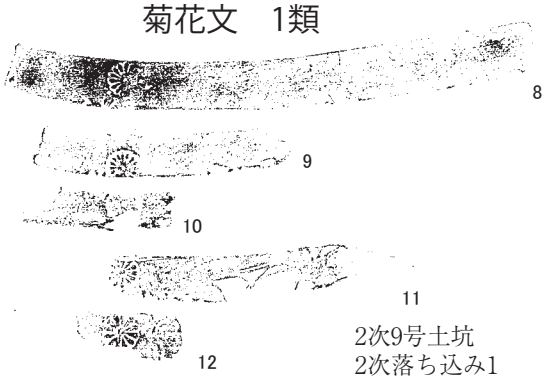
整地層からは類例の少ない型式の瓦片が出土することから、どこからか持ち込まれた物だろう。鬼板瓦や鯱瓦片も１次１号大溝遺構の埋め戻し土・整地層・包含層からの出土なので、調査区内の建物に置かれていたものではないだろう。

文武館に葺かれた瓦は、隅瓦があるので切妻型式で、左桟瓦が葺かれ、径の小さい丸瓦があるので、風切り丸が左右に配置され、棟瓦と鬼瓦と家紋瓦も置かれていたようだ。左桟瓦は少量なので、右桟瓦と小さい建物用だったのかもしれない。調査区北側に塀の痕跡や瓦の集中は見られなかったが、現在の伝習館高校の敷地外郭の石垣は、昭和前期の写真にも写っているので、石垣建設時に撤去されたか、堀割に倒壊したのだろう。

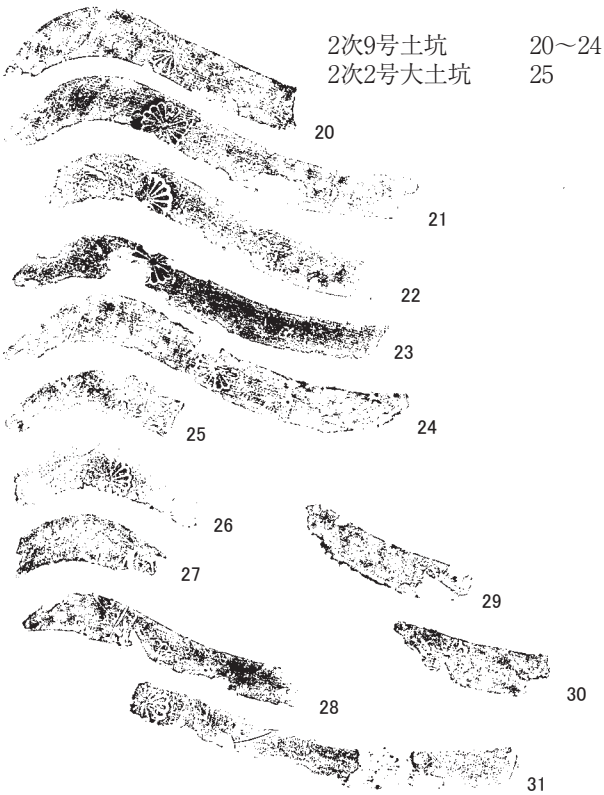


2次9号土坑　1～3・5
2次2号大土坑　4・6
2次横基礎　7

菊花文　1類



2次9号土坑　8・10・12
2次落ち込み1　11
2次黒色土包含層　9

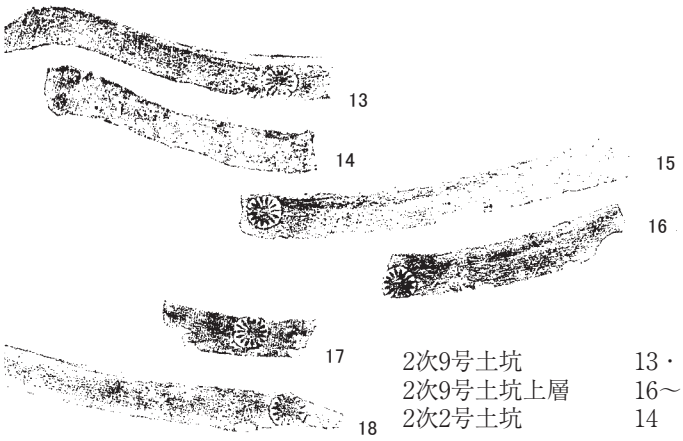


2次9号土坑　20～24
2次2号大土坑　25

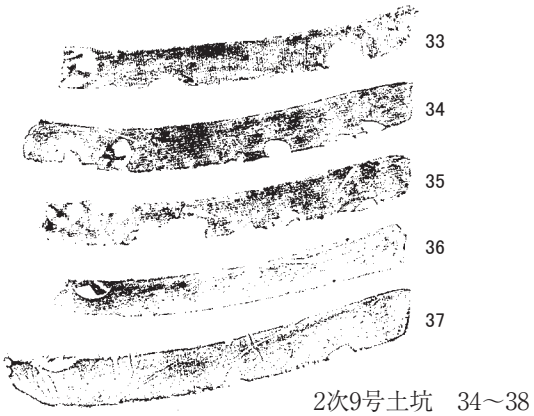
菊花文　5類

2次9号土坑

菊花文　6類



2次9号土坑　13・15
2次9号土坑上層　16～18
2次2号土坑　14



2次9号土坑　34～38

文字文　1類

菊花文　4類

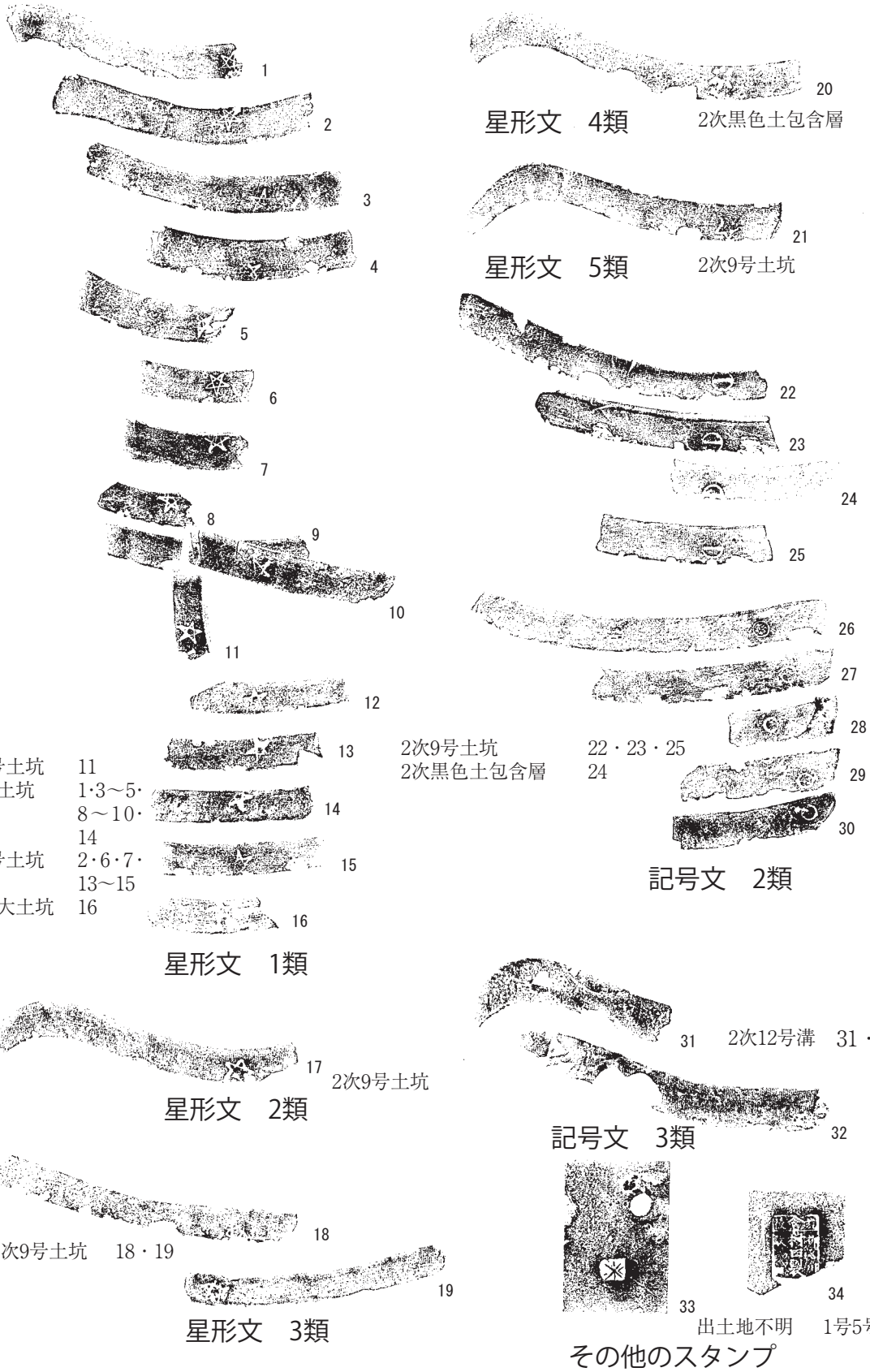
2次9号土坑　41
2次10号土坑　39・40

文字文　2類

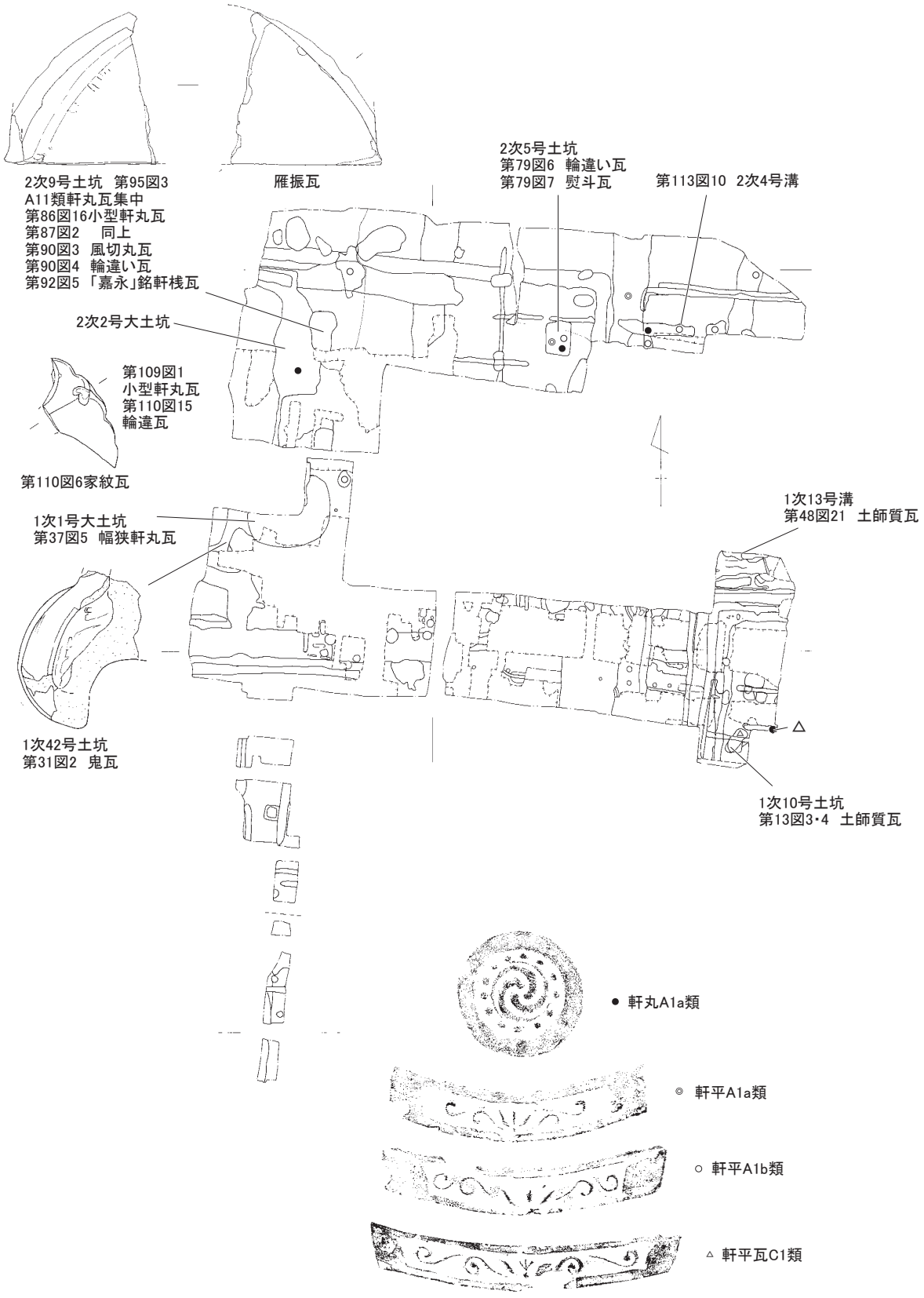
1次20号土坑　42・43

記号文

第 158 図　本町遺跡出土瓦スタンプ拓影1（1/3）



第 159 図　本町遺跡出土瓦スタンプ拓影2（1/3）



第 160 図　主要瓦分布図

註

1　福岡県立伝習館高校 1994『創立百七十周年県立移管百周年記念誌』

2　小川望 2001「Ⅵ江戸の生活文化　3　衣文化　温石」『図説　江戸考古学研究事典』江戸考古学研究会編

3　生田家は『亨保八年藩士系図』(亨保８年)には記載がないが、寛永６年には 100 石取りの生田半之丞の名がある。文政年間に俸禄が下がり、下級武士となる。２次２号大土坑の時期に対応するのは生田守治か、元治元年の御書院番格に名がある生田要助のどちらかだろう。

4　柳川市史編纂委員会 2009『地図のなかの柳川　－柳川市史　地図編－』別刷 45

5　神埼町教育委員会 1996『神埼町文化財調査報告書　第 50 集　姉川城跡』

6　柳川市史編纂委員会 2009『地図のなかの柳川　　－柳川市史　地図編－』別刷 10

7　西原一甫 1826『柳川明証図会』
嘉永６（1853）年山田興孝書写
柳川郷土研究会 1978『柳川明証図会』

8　渡辺村男 1980『旧柳川藩志』

9　柳川市史編纂委員会 2009『地図のなかの柳川　　－柳川市史　地図編－』別刷 41

10　屋山家の系図は『亨保八年藩士系図　第三分冊』に詳しい。「久馬助」と「角右衛門」の名は、屋山家に継承される名で、改名もされており、久馬助速重－角右衛門速之－角右衛門速保となっている。

以下、柳河市史編纂委員会 1998『柳川藩立花家分限帳』から、人名の記載のあった文書名を略し、製作年のみ(　)に記載する。角衛門速保の後、武兵衛（明和８～安永４年）－角右衛門（寛政 12 ～ 13 年・文政２年）－久米助（天保３年）－三助（天保 13 年・弘化２年）－角右衛門（嘉永７年・安政５年・文久元年）－三助（元治元年）という系譜がたどれる。

これに対して、分家は郡右衛門（明和８～安永４年）の後、尉右衛門の名前が幕末まで継承されており、どこで代替わりしているのかわからない。

城家は『亨保八年藩士系図』に記載がなく、甚蔵（寛永６年）－求馬之助（寛永 15 年）－五右エ門（万治 30 年）－平左衛門（延宝９年）－市右衛門（正徳元年）－勘兵衛（明和８～安永４年）－松九郎・後見伝兵衛－十郎太郎・傳兵衛（寛政 12 ～ 13 年）－静衛（文政２年・天保３年）－甚蔵（弘化２年・嘉永７年・安政５年・文久元年・元治元年）という系譜が追える。

11　前掲９

12　前掲８

13　里屋家は、四郎左衛門（文禄５年）－右衛門（慶長５年）－茂兵衛(寛永６年)まで 200 石取りであったが、安之丞（延宝９年）になって３人扶持切米９石２斗に減俸されてい。同一人名のうちに、減俸になっているので別の系譜ではない。明和８～安永４年の「家中住所付」では新田村に「里谷安之丞」の名があり、在村の「宅侍」となっている。その後、嘉永２年に東町に居住する「里屋安之丞」の名が見られ、下級武士として幕末を迎えている。

14　山田家については『柳川藩立花家分限帳　解説』に詳しい記載がある。山門郡下宮永の庄屋だったが、弥左衛門方教の代に扶持人株を取得し、藩役方の下役に就いている。その子の彦左衛門興孝は、文久元年に藩校伝習館御書物方に名があり、評定所留役の役職についている。蓋の「山田」の下が「彦」であれば、名の頭文字だろうか。

15　九州歴史資料館 2012「矢加部町屋敷遺跡Ⅳ　３矢加部町屋敷遺跡のまとめ」『矢加部町屋敷遺跡Ⅳ　蒲船津西ノ内遺跡　蒲船津水町遺跡』

	出土遺構	遺物番号	長さ	広端部幅	狭端部幅	厚さ	その他
1	2次９号土坑上層	116	116	－	－	2.0	右桟瓦　差し込み有無不明
2	2次９号土坑	402	402	25.5	－	1.9	軒左桟瓦菊花文C1類　穿孔･基部差し込み
3	2次９号土坑	405	405	－	－	2.2	左桟瓦　基部差し込み･菊花文５類スタンプ
4	2次10号溝状遺構	404	404	－	－	1.9	左桟瓦　基部部差し込み･菊花文１類スタンプ
5	2次12号溝状遺構	514	514	－	－	1.8	右桟瓦　基部差し込みなしか平瓦
6	2次12号溝状遺構	515	515	－	－	2.2	右桟瓦　基部差し込み
7	2次２号大溝遺構	516	516	－	－	1.9	右桟瓦　基部差し込みなしか平瓦
8	2次２号大土坑	517	517	25.4	－	2.1	左桟瓦　穿孔あり　基部差し込みなし
9	2次２号大土坑	518	518	－	－	1.9	左桟瓦　基部差し込み　菊花弁3類スタンプ
10	2次２号大土坑	519	519	－	－	1.8	左桟瓦　下部差し込み
11	2次９号土坑	520	520	25.5	－	1.8	左桟瓦　下部基部差し込みあり
12	2次９号土坑	521	521	31.0	－	2.0	左桟瓦　下部差し込みあり　菊花弁１類スタンプ
13	2次９号土坑	522	522	25.5	－	1.9	左桟瓦　穿孔あり　基部差し込みなし　基部面に胎土目
14	2次９号土坑	523	523	－	－	2.0	左桟瓦　基部差し込みなし
15	2次９号土坑	524	524	－	－	1.8	右桟瓦　基部差し込みなしか平瓦
16	2次９号土坑	525	525	－	28.2	2.1	本瓦葺平瓦
17	2次９号土坑	526	526	－	－	2.1	右桟瓦　基部差し込みなしか平瓦
18	2次９号土坑	527	527	－	－	1.8	左桟瓦　基部差し込みなしか平瓦
19	2次９号土坑	528	528	－	－	2.1	左桟瓦　基部差し込みなしか平瓦
20	2次９号土坑	529	529	－	－		左桟瓦　下部差し込み
21	2次９号土坑	530	530	－	－	1.9	左桟瓦　差し込みなし
22	2次９号土坑	531	531	－	－	1.9	左桟瓦　下部差し込み
23	2次９号土坑	532	532	－	－	2.0	左桟瓦　差し込みなし
24	2次９号土坑	533	533	－	－	1.8	左桟瓦　基部差し込み
25	2次９号土坑	534	534	－	－	2.0	左桟瓦　差し込みなし
26	2次９号土坑	535	535	－	－	1.8	左桟瓦　差し込みなし
27	2次９号土坑	536	536	－	－	1.8	左桟瓦　基部･下部差し込み　星形3類スタンプ
28	2次９号土坑	537	537	－	－	1.7	左桟瓦　基部差し込み　菊花文らしいスタンプ
29	2次９号土坑	538	538	－	－	1.9	左桟瓦　基部差し込み
30	2次９号土坑	539	539	－	－	1.8	左桟瓦　基部差し込み
31	2次10号土坑	540	540	－	－	2.1	左桟瓦　下差し込み
32	2次10号土坑	541	541	－	－	2.0	左桟瓦　下差し込み
33	2次10号土坑	542	542	－	－	2.0	右桟瓦　差し込みなしか平瓦
34	2次10号土坑	543	543	－	－	1.8	左桟瓦　基部差し込み
35	2次10号土坑	544	544	－	－	2.1	左桟瓦　下差し込み
36	2次10号土坑	546	546	－	－	1.9	左桟瓦　基部差し込み
37	2次10号土坑	547	547	－	－	1.7	右桟瓦　差し込みなしか平瓦

表 53　瓦計測表

V　自然科学系の分析

1　本町遺跡1次調査出土骨について

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

本町遺跡(福岡県柳川市本町に所在)では、建て替え工事に伴って発掘調査が行われ、その結果、18世紀頃と想定される土坑や溝跡、包含層から骨貝類が出土している。包含層にみられた骨は遺構として確認できないものの、骨が集中する箇所がみられている。そこで、今回、これら出土した骨貝類に関して、その種類を明らかにすることにした。なお、2次調査では分析に足る資料は出土していない。

1.試料

試料は、包含層中にみられた骨集中部、大土坑 1、大土坑 1b、土坑 9、土坑 10、土坑 11 と溝 12 の混ざり、土坑 13、土坑 15、土坑 16、土坑 17b、P21、ピット 21、ピット?、井戸 3、大溝 1、大溝 3、大溝 4、溝 1、溝 12、溝 28、墓 1 などで採取された骨貝類である。包含層中にみられた骨集中部は、発掘調査担当者により大分類がなされて、ある程度部位ごとにまとめられた状態で、犬骨、鳥骨2・3・4などの名称が付されている。

試料数は全部で 125 試料(No.1～124、113・124)の試料があり、1 試料中に複数の破片が含まれて総破片数は 673 片以上に及ぶ。大半は既にクリーニングされた状態であるが、No.106 のみ土ごと取り上げられている。なお、試料の詳細は、結果とともに表示する。

2.分析方法

土ごと取り上げられている No.106 は、表面に薄い骨が張り付いていたが、割れて破片となっており、これらはそのままの状態で土から取り外した。その裏面にも、骨がみられたため、これらは水で溶いた木工用ボンドを薄く何回も重ねて塗って保護した。その他の試料については可能な限り復元を試み、試料間を超えて接合関係がみられたものも、一般工作用接着剤で接合した。

これら復元した骨を肉眼および実態顕微鏡下で観察し、形態的特徴から種および部位を明らかにする。なお、骨格各部の名称はイヌを例として図 1 に示す。また、場合によっては必要に応じて、Drieach(1976)に準拠して計測する。鳥類の計測箇所を図 2、ネコ頭蓋の計測箇所を図 3、イヌ頭蓋の計測箇所を図 4 に示す。

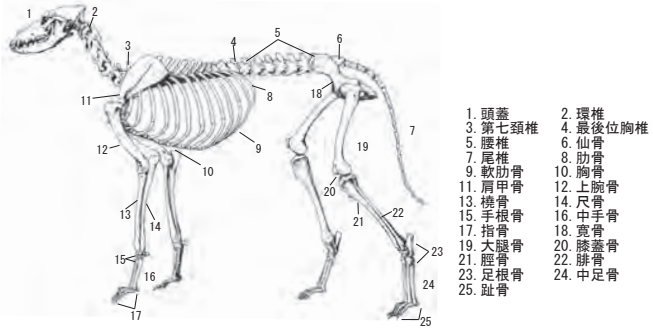


図1.　イヌの骨格各部の名称
(加藤・山内, 2003を改変)

3.結果および考察

検出された種類は、腹足綱 2 種類(ゴマフダマ、アカニシ)、二枚貝綱 4 種類(ハイガイ、カキ類、シオフキ、ヤマトシジミ)、硬骨魚綱 1 種類(ハタ科)、爬虫綱 1 種類(スッポン)、鳥綱 2 種類(ニワトリ、イヌワシ属)、哺乳綱 6 種類(ヒト、ネコ、ノイヌ、タヌキ、ニホンジカ、ウシ) である(表 1)。同定結果を表 2 に示す。

・腹足綱および二枚貝綱

土坑 10 でゴマフダマ(No.115)、大土坑 1b 下位でアカニシ(No.116)、土坑 10 でハイガイ左殻(No.118)、大土坑 1b 下位でカキ類の可能性がある破片(No.117)、井戸 3 でシオフキ左殻(No.119)、土坑 10 でヤマトシジミ左殻(No.114)、土坑 16 で二枚貝綱の殻片が検出される。

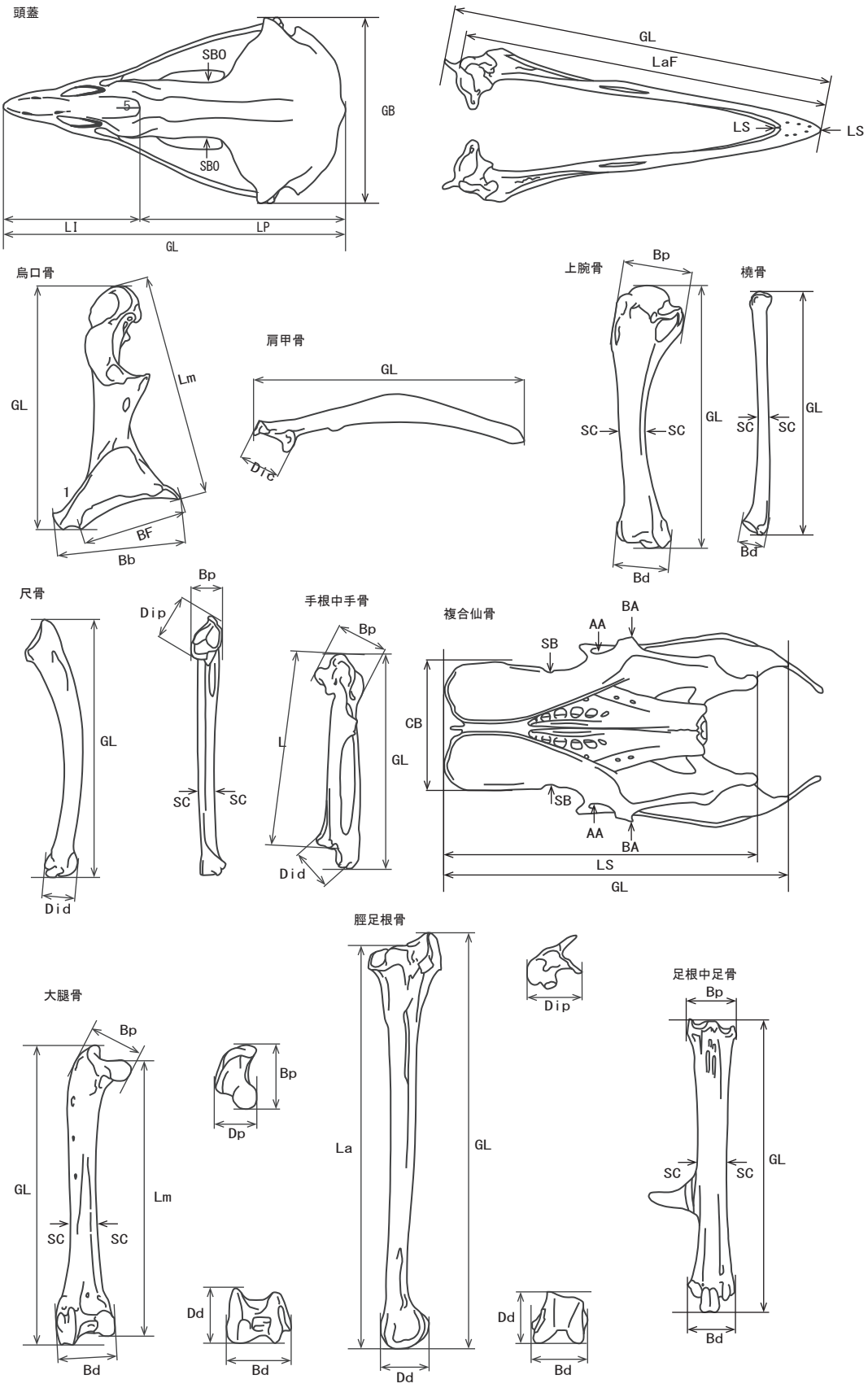


図２．　鳥類計測箇所（Deriesh, 1976 に加筆）

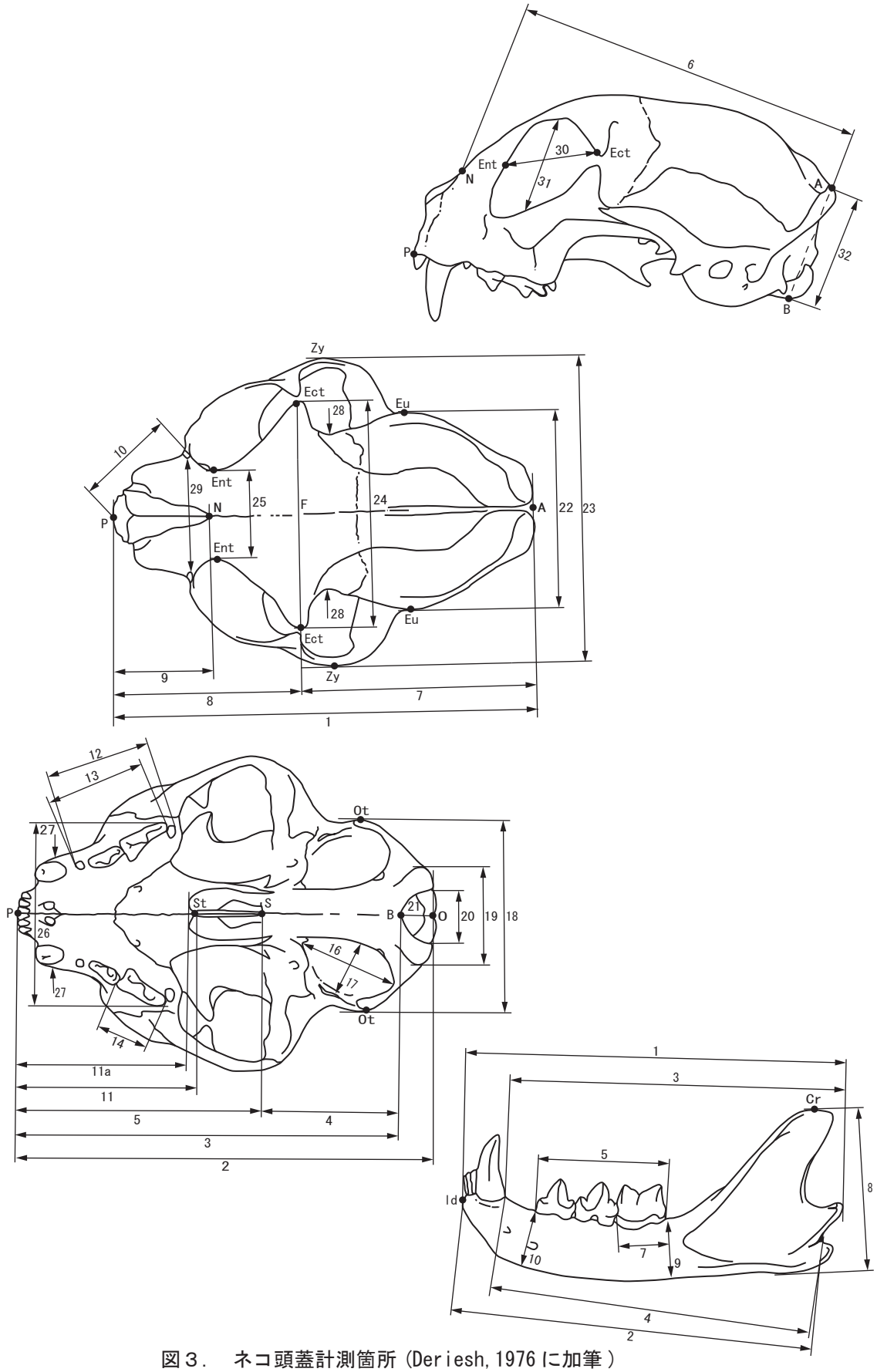


図３．　ネコ頭蓋計測箇所 (Deriesh, 1976 に加筆)

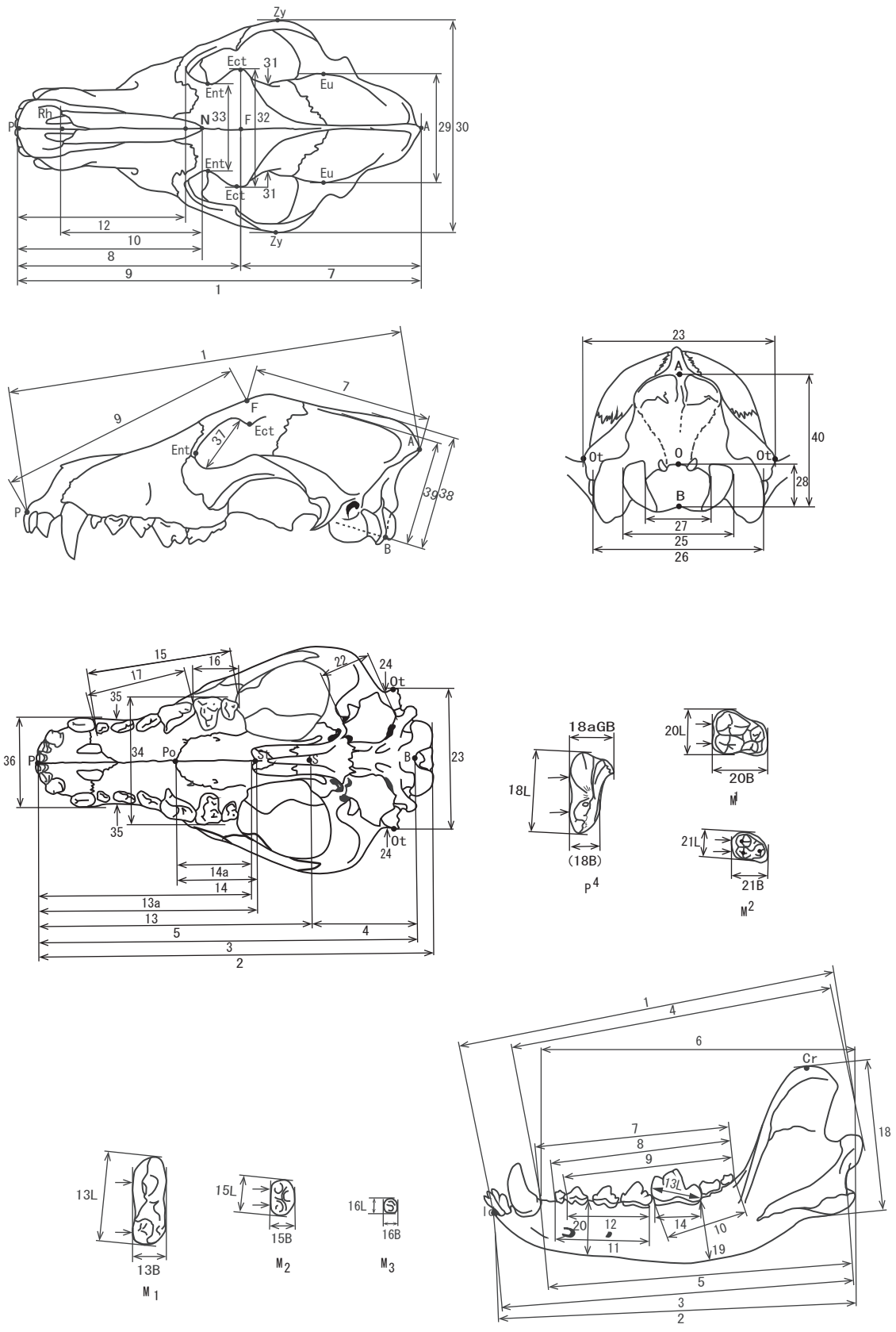


図４．　イヌ頭蓋計測箇所 (Deriesh, 1976 に加筆)

奥谷ほか(2000)、奥谷編著(2004)を参考とすると、ゴマフダマが潮間帯から水深 30m の砂泥底、アカニシが水深 30m 以浅の砂泥底、ハイガイが潮間帯～水深 10m の泥底、カキ類が汽水性内湾の潮間帯から潮下帯の砂礫底・泥底など、シオフキが潮間帯下部～水深 20m の細砂底、ヤマトシジミが河口付近の汽水域の砂底に棲息するとされている。

これら貝類は、いずれも食料資源となっていたと考えられ、有明湾内の干潟、およびそこに流れ込む河川の河口付近で採取され、遺跡内に持ち込まれたものであろう。土坑ないし井戸から検出されており、廃棄されたものと考えられる。

・ハタ科

土坑 15 で尾椎(No.94)が検出される。1 点は破損した資料であったためハタ科?とした。2 点とも比較的大型の個体と推測される。

・魚類

土坑 11 と溝 12 の混ざりで鰭棘(No.96)が検出される。本標本も比較的大型の魚類と考えられる。

・スッポン

溝 1 上位で右上腕骨(No.100)が、大土坑 1b で右第 2 肋骨板(No.107)が検出される。いずれもほぼ完存する。No.100 の右上腕骨は、全長 37.36mm、近位端幅 14.71mm、遠位端幅 11.52mm を測る。

特に解体痕はみられないが、食用とされていたとみられ、骨に被熱の痕跡がみられないから、煮るなどの調理法が用いられていたと考えられる。遺跡から出土したスッポンの出土例をまとめた鶴岡(2003)によると、スッポンは、その利用が縄文時代早期にまで遡り、スッポンの分布や食習慣が西日本を中心としていると述べている。また、同著では、福岡県内でも北九州市の楠橋貝塚、鞍手町の新延貝塚での出土例が報告されている。

表1. 検出動物分類群の一覧

- 軟体動物門 Phylum Mollusca
  - 腹足綱 Class Gastropoda
    - 前鰓亜綱 Subclass Prosobranchia
      - 盤足目 Order Discopoda
        - タマガイ科 Family Naticidae
          - ゴマフダマ *Natica tigrina*
      - 新腹足目 Order Neogastropoda
        - アッキガイ科 Family Muricidae
          - レイシガイ亜科 Subfamily Rapaninae
            - アカニシ *Rapana venosa*
  - 二枚貝綱 Class Bivalvia
    - 翼形亜綱 Subclass Pteriomophia
      - フネガイ目 Order Arcoida
        - フネガイ科 Family Arcidae
          - ハイガイ *Tegillarca granosa*
      - カキ目 Order Ostreoida
        - カキ亜目 Suborder Ostreina
          - カキ類 Fam. et. gen. indet.
    - 異歯亜綱 Subclass Heterodonta
      - マルスダレガイ目 Order Veneroida
        - バカガイ科 Family Mactridae
          - シオフキ *Mactra veneriformis*
        - シジミ科 Family Corbiculidae
          - ヤマトシジミ *Corbicula japonica*
- 脊椎動物門 Phylum Vertebrata
  - 硬骨魚綱 Class Osteichthyse
    - 条鰭亜綱 Subclass Actinopterygii
      - スズキ目 Order Perciformes
        - ハタ科 Family Serranidae
          - ハタ科 Gen. et. sp. indet.
  - 爬虫綱 Class Reptilia
    - カメ目 Order Testudines
      - スッポン科 Family Trionychidae
        - スッポン *Trionyx sinensis japonicus*
  - 鳥綱 Class Aves
    - キジ目 Order Galliformes
      - キジ科 Family Phasianidae
        - ニワトリ *Gallus gallus* var. *domesticus*
    - タカ目 Order Falconiformes
      - タカ科 Family Accipitridae
        - イヌワシ属 *Aquila* sp.
  - 哺乳綱 Class Mammalia
    - サル目(霊長目) Order Primates
      - ヒト科 Family Hominidae
        - ヒト *Homo sapiens*
    - ネコ目(食肉目) Order Carnivora
      - ネコ亜目 Suborder Fissipedia
        - ネコ科 Family Felidae
          - ネコ *Felis catus*
        - イヌ科 Family Canidae
          - ノイヌ *Canis familiaris*
          - タヌキ *Nyctereutes procyonoides*
    - ウシ目(偶蹄目) Order Artiodactyla
      - シカ科 Family Cervidae
        - ニホンジカ *Cervus nippon*
      - ウシ科 Family Bovidae
        - ウシ *Bos taurus*

・ニワトリ

包含層中の骨集中部から、左右肩甲骨(No.64)、左橈骨(No.64)、左右大腿骨(No.62)、左右脛足根骨(No.60)、左右足根中足骨(No.61)が確認される。また、No.67 の左右烏口骨、No.65 の右尺骨もニワトリの可能性がある。また、同地点から出土している椎骨(No.66)、複合仙骨(No.68)、上腕骨(No.63)、足根中足骨(No.65)、基節骨(No.65)、中節骨(No.65)、部位不明破片(No.67・69)も破片のため鳥綱としているが、これらもニワトリの可能性がある。

表2.　骨同定結果(1)

No.	遺構・取り上げ	種類	部位	左 右	部分	数量	CM	備考
1	鳥3	ネコ	上腕骨	左	略完	1		
				左	近位端	1		
				右	略完	1		
				右	略完	1		
		哺乳綱	不明		破片	1		
2	鳥3	ネコ	脛骨	左	近位端	1		
				左	遠位端	1		
				右	近位端	1		
3	鳥3	ネコ	大腿骨	左	略完	1		
				右	遠位端	1		
2+3	鳥3	ネコ	大腿骨	右	近位端欠	1		
4	鳥3	ネコ	橈骨	左	近位端	2		
				右	近位端	1		
				右	遠位端	1		
					破片	2		
5	鳥3	ネコ	尺骨	左	近位端	1 +		
				右	遠位端欠	1		
				右	近位端破片	1		
			第3中足骨	左	破片	1		
			第4中足骨	左	近位端	1		
6	鳥3	ネコ	肩甲骨	左	破片	2		
				右	破片	2		
7	鳥3	ネコ	下顎骨	左	破片	1		P3,M1植立
				右	破片	1		
					破片	2		
			歯牙		破片	2		
8	鳥3	ネコ	寛骨	左	破片	1 +		
		哺乳綱	不明		破片	1		
9	鳥3	ネコ	距骨	左	略完	1		全長14.35
				右	略完	1		全長14.22
			踵骨	左	破片	1 +		
				右	略完	1		全長26.06
			第3足根骨	左	略完	1		
			第4足根骨	左	略完	1		
			中心足根骨	左	略完	1		
10	鳥3	ネコ	手根骨?		略完	4		
11	鳥3	ネコ	胸椎		略完	7		
			腰椎		略完	4		
12	鳥3	ネコ	肋骨		破片	21		
13	鳥3	ネコ?	頭蓋骨?		破片	10		
14	鳥3	ネコ	第2足根骨	右	近位端	2		
			第3足根骨	左	近位端	1		
			第4足根骨	右	略完	1		
			第5足根骨	左	近位端	1		
		ネコ?	尾椎?		破片	2		
			中手骨/中足骨		近位端欠	2		
					遠位端	2		
15	鳥3	ネコ?	尾椎		略完	5		
16	鳥3	ネコ	第5中手骨	右	略完	1		
17	鳥3	ネコ	指骨?		略完	2		
18	鳥3	ネコ	基節骨		略完	5		
					近位端破片	1		
			基節骨/中節骨		遠位端	2		
19	鳥3	ネコ?	椎骨		破片	3		
20	鳥3	ネコ?	尾椎		略完	1		
		哺乳綱	不明		破片	1		
21	鳥3	哺乳綱	不明		破片	2		
22	鳥3	ネコ	中節骨		略完	4		
			基節骨/中節骨		遠位端	1		
23	鳥3	ネコ	中節骨		遠位端欠	1		
24	鳥3	ネコ	末節骨		略完	6		
25	鳥3	哺乳綱	頭蓋骨?		破片	12		
26	墓1	イヌ	大腿骨	左	遠位端	1		
					近位端	1		
					遠位端破片	1		
		イヌ?	不明		不明	2		
27	墓1	イヌ	上腕骨	左	遠位端	1		
					破片	1		
28	墓1	イヌ	腓骨	左	破片	1 +		
29	墓1	イヌ	脛骨	右	遠位端	1		
		哺乳綱	不明		破片	1		
30	墓1	イヌ?	寛骨		破片	1 +		

注)　C：犬歯　P：前臼歯　M：後臼歯　GL：全長　Bp：遠位端幅　Dd：遠位端最大厚

表2.　骨同定結果(2)

No.	遺構・取り上げ	種類	部位	左 右	部分	数量	CM	備考
31	墓1	哺乳綱	不明		破片	1		
32	墓1	哺乳綱	四肢骨		破片	2		
33	墓1	イヌ	踵骨	右	破片	1		
		イヌ?	距骨		破片	1		
34	墓1	イヌ?	陰茎骨?		破片	1		
35	墓1	イヌ	膝蓋骨	右	略完	1		
36	墓1	イヌ	肋骨		破片	7		
37	墓1	イヌ	腰椎		椎体	4		
			椎骨		椎体破片	3		
					破片	2		
			仙骨		破片	1		
			尾椎		略完	3		
					破片	1		
		イヌ?	椎骨?		破片	4		
38	墓1	イヌ	陰茎骨		破片	1		
39	犬骨	イヌ	切歯骨	左	破片	1		
			上顎骨		破片	3		
			下顎骨	右	破片	1		
					破片	1		
			頭蓋骨		破片	5		
			頚椎		略完	3		
					破片	1		
			胸椎		略完	1		
					椎体	3		
					破片	2		
			腰椎		略完	6		リッピング
					椎体	1		
			仙骨		破片	1		
			尾椎		略完	1		
			胸骨		破片	1		
		哺乳綱	不明		破片	7.44 g		
40	犬骨	イヌ	上顎骨	右	破片	1		
			下顎骨	左	破片	1		P3-M2植立
41	犬骨	イヌ	上顎第3門歯	右	破片	1		
			上顎第4前臼歯	左	破片	1		
			上顎第4前臼歯	右	破片	1		
			上顎第1後臼歯	右	破片	1		
			上顎第2?後臼歯	右	破片	1		
			下顎第4前臼歯	右	破片	1		
			下顎第3前臼歯	右	破片	1		
			下顎第2?前臼歯	右	破片	1		
			下顎第3?後臼歯	左	破片	1		
			犬歯		破片	1		
			末節骨		略完	5		
		イヌ?	歯牙		破片	1.38 g		
42	犬骨	イヌ	上腕骨	左	遠位端	1		
				右	遠位端	1		
					近位端破片	2		
					破片	4 +		
43	犬骨	イヌ	大腿骨	左	遠位端	1		
				右	遠位端	1		
				右	近位端破片	1 +		
					近位端破片	2		
44	犬骨	イヌ	肩甲骨	右	破片	1		
			脛骨	右	近位端	1		
45	犬骨	イヌ	肩甲骨	左	破片	1		
		イヌ?	肩甲骨		破片	3		
46	犬骨	イヌ	橈骨	左	略完	1		
				右	近位端	1		
				右	遠位端	1		
		残渣				0.26 g		
47	犬骨	イヌ	寛骨	右	破片	1		
48	犬骨	イヌ	第2中手骨	左	略完	1		GL53.87
				右	略完	1		GL54.78
			第3中手骨	左	近位端	1		
				右	略完	1		GL62.75
			第4中手骨	左	近位端	1		
				右	略完	1		GL61.42
			第5中手骨	左	略完	1		GL52.04
				右	略完	1		GL51.63
			中手骨/中足骨		遠位端	2		

注)　C：犬歯　P：前臼歯　M：後臼歯　GL：全長　Bp：遠位端幅　Dd：遠位端最大厚

表2.　骨同定結果(3)

No.	遺構・取り上げ	種類	部位	左 右	部分	数量	CM	備考
49	犬骨	哺乳綱	肋骨		肋骨頚付近	8		
					破片	10		
50	犬骨	イヌ	尾椎		略完	4		
51	犬骨	イヌ	腓骨		破片	1 +		
52	犬骨	イヌ	尾椎		略完	4		
					破片	1		
53	犬骨	イヌ	第2手根骨	左	略完	1		
				右	略完	1		
			第3手根骨	右	略完	1		
			第4手根骨	左	略完	1		
				右	略完	1		
			橈骨側手根骨	左	略完	1		
				右	略完	1		
			膝蓋骨	左	略完	1		
				右	略完	1		リッピング
54	犬骨	哺乳綱	肋骨		破片	4		
55	犬骨	イヌ	指骨?		略完	1		
56	犬骨	イヌ	副手根骨	左	略完	1		
				右	略完	1		
			第1中手骨	左	略完	1		GL19.29
				左	破片	1		
				右	略完	1		GL19.25
					破片	1		
			基節骨		略完	6		
					近位端	1		
			中節骨		略完	5		
57	犬骨	イヌ	舌骨		略完	1		
			第1手根骨	右	略完	1		
			第3手根骨	左	略完	1		
			尺骨側手根骨	左	略完	1		
				右	略完	1		
58	犬骨	イヌ	種子骨		略完	11		
		不明	不明		破片	1		
		礫				1		
59	犬骨	イヌ	尺骨	左	略完	1		
				右	略完	1		
60	鳥4	ニワトリ	脛足根骨	左	遠位端欠	1		
				右	遠位端欠	1		
61	鳥4	ニワトリ	足根中足骨	左	遠位端欠	1		
				右	遠位端欠	1		
62	鳥4	ニワトリ	大腿骨	左	近位端欠	1		
				右	略完	1		
63	鳥4	鳥綱	上腕骨		破片	3		
64	鳥4	ニワトリ	肩甲骨	左	破片	1		
				右	破片	1		
			橈骨	左	遠位端	1		
		鳥綱?	不明		破片	2		
65	鳥4	鳥綱	基節骨		近位端	1		
			中節骨		略完	1		
					遠位端欠	1		
			足根中足骨		遠位端破片	1		
		ニワトリ?	尺骨	右	遠位端	1		
66	鳥4	鳥綱	椎骨		破片	5		
67	鳥4	ニワトリ?	烏口骨	左	破片	1		
				右	破片	1		
			手根骨		略完	1		
		不明	不明		破片	11		
68	鳥4	鳥綱	複合仙骨		破片	1		
		鳥綱?	不明		破片	5		
69	鳥4	不明	不明		破片	12		
70	犬骨	イヌ	種子骨		略完	7		
71	犬骨	イヌ	中心足根骨	左	略完	1		
				右	略完	1		
			第3足根骨	左	略完	1		
				右	略完	1		リッピング
			第4足根骨	左	略完	1		
				右	略完	1		リッピング
			距骨	左	破片	1		GL25.78
				右	略完	1		GL25.66
			踵骨	左	破片	1		
72	犬骨	イヌ	踵骨	右	略完	1		GL41.55
73	犬骨	イヌ	尾椎		略完	1		

注)　C：犬歯　P：前臼歯　M：後臼歯　GL：全長　Bp：遠位端幅　Dd：遠位端最大厚

表2.　骨同定結果(4)

No.	遺構・取り上げ	種類	部位	左 右	部分	数量	CM	備考
74	犬骨	イヌ	末節骨		略完	5		
75	犬骨	イヌ	基節骨		略完	5		
					近位端	2		
			中節骨		略完	6		
			基節骨/中節骨		遠位端	1		
76	犬骨	イヌ	第1足根骨	左	略完	1		
			第2足根骨	左	略完	1		
77	犬骨	イヌ	脛骨	左	遠位端	1		
				右	遠位端	1		
					近位端破片	1		
					破片	3 +		
78	犬骨	イヌ	陰茎骨		破片	1		
79	犬骨	イヌ	第1中足骨	右	略完	1		GL39.48
		イヌ?	中手骨/中足骨		近位端欠	1		
80	犬骨	イヌ	第2中足骨	左	近位端	1		
				右	略完	1		GL68.89
			第3中足骨	左	近位端	1		
				右	近位端	1		
			第4中足骨	左	近位端	1		
				右	略完	1		GL60.20
			第5中足骨	左	近位端	1		
				右	近位端	1		
			中手骨/中足骨		近位端	5		
81	犬骨	イヌ	腓骨		破片	1 +		
82	犬骨	イヌ?	腓骨?		破片	1		
83	土坑17b	ヒト?	椎骨		椎体	1		幼児前半?
			上腕骨	左	遠位端	1		幼児前半?
				右	近位端	1		幼児前半?
			尺骨	左	近位端	1		幼児前半?
			腸骨	左	破片	1		幼児前半?
			座骨	左	破片	1		幼児前半?
			大腿骨	左	近位端	1		幼児前半?
			四肢骨		破片	6		幼児前半?
			不明		破片	5.72 g		幼児前半?
		礫				0.19 g		
84	鳥骨2	ネコ	胸椎		略完	5		
					破片	2		
			腰椎		略完	6		
			椎骨		椎体	2		
		ネコ?	肋骨		破片	1		
			基節骨		近位端	1		
			四肢骨		破片	1		
		不明	不明		破片	20 +		
85	獣骨集中部上位	ネコ	下顎骨	左	破片	1		C植立
				右	破片	1		
			歯牙		破片	1		
			胸椎		破片	1		
			大腿骨	左	遠位端	1		
			橈骨	右	遠位端	1 +		
		ネコ?	胸椎		略完	1		
					破損	1		
86	ピット21	ネコ	尺骨	右	近位端	1		
87	ピット21	ネコ	腓骨?		両端欠	1		
88	ピット21	ネコ	上腕骨?		両端欠	1		
			橈骨	左	遠位端	1		
			大腿骨	左	近位端	1		
				右	近位端	1		
			脛骨	左	遠位端	1		
89	ピット21	ヒト?	椎骨		破片	20		幼児～小児前半
90	ピット21	ヒト	側頭骨	左	錐体部	1		幼児～小児前半
				右	錐体部	1		幼児～小児前半
		ヒト?	不明		破片	2		
91	大溝3	ヒト	側頭骨	左	略完	1		
92	動物骨集中部 ニワトリ南の鳥骨	ネコ	尺骨	左	近位端	1		
				右	近位端	1		
93	動物骨集中部 ニワトリ南の鳥骨	ネコ	上腕骨	左	遠位端	1		
				右	近位端	1		
				右	遠位端	1		
			大腿骨	左	遠位端	1		
				右	遠位端	1		
			脛骨	右	近位端	1		

注）　C：犬歯　P：前臼歯　M：後臼歯　GL：全長　Bp：遠位端幅　Dd：遠位端最大厚

表2.　骨同定結果(5)

No.	遺構・取り上げ	種類	部位	左 右	部分	数量	CM	備考
94	土坑15	ハタ科	尾椎		略完	1		椎体径24.66,椎体長22.17
		ハタ科?	尾椎		破片	1		椎体長22.78
95	動物骨集中部 ニワトリ南の鳥骨	ネコ	橈骨	左	近位端	1		
				右	近位端	1		
		ネコ?	尺骨?		遠位端?	2		
96	土坑11と溝12の混ざり	魚類	鰭棘等		破片	1		
97	溝1	ネコ	上腕骨?		両端欠	1		
98	ピット?(ラベル不明)	哺乳綱	肋骨		破片	1		
99	溝1上位	ネコ?	橈骨?	左?	遠位端	1		
100	溝1上位	スッポン	上腕骨	右	略完	1		
101	大溝3下位	タヌキ	下顎骨	右	略完	1		P1-M1植立
102	土坑9	イヌ	下顎骨	右	破片	1 +		P4-M2植立
103	大溝3	ウシ	上腕骨	右	両端欠	1		
104	土坑13	ウシ?	上腕骨	左	両端欠	1		
105	大溝1下位	ニホンジカ	脛骨	右	遠位端欠	1		齧り痕,スパイラル状
106	P21	哺乳綱?	不明		破片	1 +		土塊状
107	大土坑1b	スッポン	第2肋骨板	右	略完	1		
108	溝12	ニホンジカ	橈骨	左?	遠位端破片	1		
			尺骨	左	遠位端欠	1 +		
109	溝12	ニホンジカ	中手骨	左?	近位端欠	1 +		Bd30.25,Dd21.02
110	溝12	ニホンジカ	橈骨	左	遠位端欠	1 +		
111	溝28	ウシ	肩甲骨	右	略完	1	○	頚部CM
			上腕骨	右	近位端破損	1	○	近位端未化骨
			橈骨+尺骨	右	略完	1		橈骨遠位端,尺骨両端未化骨
			中手骨	右	略完	1		遠位端未化骨
			橈骨側手根骨	右	略完	1		
			尺骨側手根骨	右	略完	1		
			中間手根骨	右	略完	1		
			副手根骨	右	略完	1		
			第2+3手根骨	右	略完	1		
			第4手根骨	右	略完	1		
			基節骨	右	略完	2		
			中節骨	右	略完	2		
			末節骨	右	略完	2		
			遠位種子骨	右	略完	2		
112	大溝4	ニホンジカ	大腿骨	左	破片	1	○	
113	大土坑1下位	イヌワシ属	烏口骨	左	略完	1		
				右	略完	1		
			鎖骨		破片	1 +		
			頚椎		略完	1		
			肩甲骨	左	破片	1		
			肩甲骨	右	破片	1		
			手根中手骨	左	略完	1		
			中節骨		略完	1		GL23.85
			腓骨	左	略完	1		
114	土坑10	ヤマトシジミ	殻	左	略完	1		殻長19.77,殻高17.77
115	土坑10	ゴマフダマ	殻		略完	1		殻高31.16
116	大土坑1b下位	アカニシ	殻		破片	1		殻高85±
117	大土坑1b下位	カキ類?	殻		破片	13 +		
118	土坑10	ハイガイ	殻	左	略完	1		殻長58.84,殻高50.22
119	井戸3	シオフキ	殻	左	略完	1		殻長33.58,殻高27.60
120	土坑16	貝類	殻		破片	1		真珠光沢有り
121	大土坑1下位	イヌワシ属	上腕骨	左	略完	1		
				右	近位端破損	1		
			橈骨	左	略完	1		
				右	略完	1		
			脛足根骨	左	略完	1		
				右	略完	1		
122	大土坑1下位	イヌワシ属	尺骨	左	略完	1		
				右	略完	1		
			大腿骨	左	略完	1		
				右	略完	1		
123	大土坑1下位	イヌワシ属	肋骨		略完	16		
124	大土坑1下位	イヌワシ属	上顎骨		破片	1		
			複合仙骨		破片	1		
			胸骨		破片	1 +		
113･124	大土坑1下位	イヌワシ属	頭蓋骨		破片	1 +		
			歯骨		破片	1 +		
			不明		破片	5		

注)　C：犬歯　P：前臼歯　M：後臼歯　GL：全長　Bp：遠位端幅　Dd：遠位端最大厚

食用として利用されていたものが廃棄されたのであろう。計測結果を表 3 に示すが、やや小型の大きさである。

・イヌワシ属

大土坑 1 下位(No.113・121～124)で、頭蓋、上顎骨、歯骨、頚椎、複合仙骨、肋骨、胸骨、鎖骨、左右肩甲骨、左右烏口骨、左右上腕骨、左右橈骨、左右尺骨、左手根中手骨、左右大腿骨、左右脛足根骨、左腓骨、中節骨などが検出される。

保存状態は良好で、主要な全身骨格が揃う。解体に伴うカットマークはみられない。出土状況等を考慮する必要があるが、イヌワシ属は鷹狩など狩猟に利用されることから埋葬された可能性もある。

・ヒト

大溝 3 で検出される左側頭骨(No.91)は、大きさから成人(16 歳以上)に達していると思われる。乳様突起が破損しており、性別は不明である。

ピット 21 で検出される左右側頭骨錐体部(No.90)は、大きさからみて幼児(1～5 歳程度)～小児(6～15 歳程度)の可能性がある。また、同遺構から検出された椎骨(No.89)は、大きさも小さく、椎体板が未化骨で外れているが、ヒトの可能性がある。

土坑 17b で検出される、椎骨、左右上腕骨、左尺骨、左腸骨、左座骨、左大腿骨、四肢骨などは骨端が未化骨で外れて骨体部のみが残存し、大きさも小さい。本標本もヒトの可能性があり、ヒトであるならば幼児前半程度の可能性がある。

・ネコ

下顎骨の計測結果を表 4 に、四肢骨の計測結果を表 5 に示す。包含層中の骨集中部、ピット 21、溝 1 でみられる。骨集中部で認められた骨は、「鳥 3」、「鳥骨 2」、「獣骨集中部上位」、「動物骨集中部ニワトリ南の鳥骨」、の 4 つに分けられている。

鳥 3 では、左右下顎骨(No.7)、下顎骨片(No.7)、歯牙片(No.7)、頭蓋骨とみられる破片(No.13)、胸椎(No.11)、腰椎(No.11)、尾椎(No.15・20)、尾椎の可能性がある破片(No.14)、椎骨(No.19)、肋骨(No.12)、左右肩甲骨(No.6)、左右上腕骨(No.1)、左右橈骨(No.4)、左右尺骨(No.5)、手根骨とみられる破片(No.10)、右第 5 中手骨(No.16)、左寛骨(No.8)、左右大腿骨(No.3,2+3)、左右脛骨(No.2)、左右踵骨(No.9)、左右距骨(No.9)、右第 2 足根骨(No.14)、左第 3 足根骨(No.9・14)、左右第 4 足根骨(No.9・14)、左第 5 足根骨(No.14)、左中心足根骨(No.9)、左第 3 中足骨(No.5)、左第 4 中足骨(No.5)、基節骨(No.18)、中節骨(No.22・23)、基節骨

表3. 鳥綱計測値

計測箇所	ニワトリ		イヌワシ属	
	左	右	左	右
頭蓋			No.113・124	
GB			49.74	
LP			52.93	
SBO			15.91	
肩甲骨	No.64		No.113・124	
Dic	11.44	－	16.30	16.27
烏口骨			No.113・124	
GL			54.88	56.45
Lm			50.46	49.56
BF			18.69	19.58
Bd			25.10	26.05
上腕骨			No.113・124	
GL			134.58	134.31
Bp			27.97	－
SC			9.97	9.94
Bd			24.12	24.31
橈骨	No.64		No.113・124	
GL	－		146.29	146.51
SC	－		3.97	3.89
Bd	5.57		9.88	9.57
尺骨			No.113・124	
GL			155.46	156.29
Bp			15.01	14.46
Dip			17.79	17.94
SC			7.44	7.37
Did			11.43	12.77
手根中手骨			No.113・124	
GL			73.46	
L			72.71	
Bp			18.17	
Did			11.32	
複合仙骨			No.113・124	
GL			90.26	
LS			75.85	
CB			31.77	
SB			17.94	
大腿骨	No.62		No.113・124	
GL	－	71.07	101.75	101.80
Lm	－	66.86	98.89	98.48
Bp	－	13.6±	19.43	18.92
SC	6.33	6.41	9.51	9.71
Bd	14.33	13.61	22.13	22.23
脛足根骨	No.60		No.113・124	
GL	99.47	98.24	145.07	145.51
La	97.75	97±	141.47	141.55
Dip	12.16	12.10	20.17	20.06
SC	5.53	5.30	8.20	8.21
Bd	－	－	16.57	16.38
Dd	9.85	10.24	10.88	10.77
足根中足骨	No.61			
Bp	－	11.64		

表4. ネコ下顎骨計測値

計測箇所	ネコ			
	左	右	左	右
下顎骨	No.7		No.85	
5	16.89	－	18±	－
6L	6.97	－	－	－
6B	2.83	－	－	－
7	6.57	－	－	－
9	10.58	10.32	9.95	－
10	8.45	8.32	－	－

/中節骨(No.18・22)、末節骨(No.24)、中手骨/中足骨(No.14)、指骨の可能性がある破片(No.17)が確認される。

この内、左右肩甲骨、左右上腕骨、左橈骨、右尺骨、右大腿骨、左脛骨、右第2足根骨、左第3足根骨は、それぞれ2点みられることから、少なくとも2個体は埋まっている。

鳥骨 2(No.84)では、胸椎、胸椎、椎骨が検出される。また、ネコの可能性がある肋骨、基節骨、四肢骨もみられる。

獣骨集中部上位(No.85)では、左右下顎骨、歯牙、胸椎、右橈骨、左大腿骨が検出される。また、ネコの可能性がある胸椎が検出される。最少個体数は 1 個体である。

動物骨集中部ニワトリ南の鳥骨では、左右上腕骨(No.93)、左右橈骨(No.95)、左右尺骨(No.92)、左右大腿骨(No.93)、右脛骨(No.93)が検出される。また、ネコの可能性がある尺骨片(No.95)も検出される。最少個体数は1個体である。

表5. ネコ四肢骨計測値

計測箇所	ネコ							
	左				右			
肩甲骨	No.6				No.6			
SLC	10.36	–			10.65	10.15		
GLP	11.51	–			11.64	11.88		
LG	10.19	–			10.50	10.41		
BG	8.04	8.15			7.91	7.75		
上腕骨	No.1	No.1	No.93		No.1	No.1	No.93	No.93
GL	89.67	–	–		88.21	89.72	–	–
Bp	13.61	13.99	–		14.06	14.49	15.45	–
Bd	15.43	–	16.92		15.42	15.98	–	16.51
橈骨	No.4	No.4	No.88	No.95	No.4	No.4	No.85	No.95
GL	–	–	–	–	–	–	–	–
Bp	7.39	7.84	–	–	7.12	–	–	–
Bd	–	–	–	–	–	11.55	11.07	–
尺骨	No.5	No.92			No.5	No.5	No.86	No.92
GL	–	–			–	–	–	–
SDO	8.76	9.71			8.83	8.42	8.22	9.71
DPA	10.52	10.76			10.05	10.04	9.53	10.67
寛骨	No.8							
GL	–							
LA	–							
大腿骨	No.3	No.85	No.88	No.93	No.3	No.2+3	No.88	No.93
GL	98±	–	–	–	–	–	–	–
Bp	17.75	–	–	–	–	–	–	–
Bd	17.07	17.02	–	16.67	16.96	16.66	–	16.65
脛骨	No.2	No.2	No.88		No.2	No.93		
GL	–	–	–		–	–		
Bp	16.27	–	–		16.99	17.08		
Bd	–	12.22	13.56		–	–		

ピット 21 では、上腕骨の可能性がある破片(No.88)、左橈骨(No.88)、右尺骨(No.86)、左右大腿骨(No.88)、左脛骨(No.88)、腓骨の可能性がある破片(No.87)が検出される。最少個体数は1個体である。

溝1では、上腕骨の可能性がある破片(No.97)、ネコの左橈骨の可能性がある破片(No.99)が検出される。

・イヌ

包含層中の骨集中部および土坑9で検出される。

骨集中部では、多くの部位が確認され、頭蓋、体幹、左右前肢、左右後肢と、ほぼ全身の骨格が認められる。

また、イヌの可能性がある歯牙(No.41)、椎骨の可能性がある破片(No.37)、肩甲骨(No.45)、寛骨(No.30)、陰茎骨の可能性がある破片(No.34)、腓骨の可能性がある破片(No.82)、距骨(No.33)、中手骨/中足骨(No.79)、部位不明(No.26)も検出される。

表6. 骨集中部におけるイヌの主要部位別数量表

		左				右				左/右
		略完	破片			略完	破片			
			近位端	骨体	遠位端		近位端	骨体	遠位端	破片
下顎骨				1				1		1
肩甲骨				1				1		
上腕骨					2				1	7
橈骨		1					1		1	
尺骨		1				1				
中手骨	第1	1		1		1				1
	第2	1				1				
	第3		1			1				
	第4		1			1				
	第5	1				1				
寛骨								1		
大腿骨					2				2	4
膝蓋骨		1				2				
脛骨					1		1		2	4
腓骨				1						2
足根骨	踵骨			1		1		1		
	距骨			1		1				
中足骨	第1					1				
	第2		1			1				
	第3		1				1			
	第4		1			1				
	第5		1				1			
陰茎骨		2								

骨集中部では、検出される部位も豊富で、数量も多い。そこで、主要部位に関して部位別数量表を作成した(表 6)。これでみると、左上腕骨遠位端、左第 1 中手骨、左右大腿骨遠位端、右膝蓋骨、右脛骨遠位端、右踵骨、陰茎骨が重なることから、最少個体数は雄 2 個体と考えられる。

頭蓋の計測結果を表 7 に、四肢骨の計測結果を表 8 に示す。四肢骨の計測値を長谷部(1952)と比較すると、No.40 の頭蓋と左右下顎骨が中型犬に相当し、No.46 の左右橈骨・No.59 尺骨が中型犬ないし中大型犬にあたる。また、山内(1957)を参考に四肢骨の計測値から推定される体高は、No.46 の左右橈骨・No.59 尺骨とも 46～47cm 程度となり、少なくとも 1 体は中型犬と判断される。

表7. イヌ科頭蓋計測値

計測箇所	イヌ			タヌキ
	左	右	右	右
頭蓋		No.40	No.41	
15		61.11	–	
16		16.31	–	
17		48.73	–	
20L		–	15.13	
20B		–	11.21	
下顎骨	No.40	No.39	No.102	No.101
1	–	–	–	80.25
2	–	–	–	82.89
3	–	–	–	78.72
4	–	–	–	71.54
5	–	–	–	70.23
6	–	–	–	74.51
7	74.34	–	–	44.19
8	68.69	70.75	–	42.79
9	62.92	63.58	–	38.55
10	32.46	32.40	33.56	20.62
11	37.45	37.97	–	22.37
12	31.63	31.51	–	18.30
13L	20.27	20.46	20.88	11.49
13B	8.04	8.66	8.65	4.79
14	18.91	19.46	20.33	10.35
15L	8.11	8.35	8.65	–
15B	6.43	6.98	6.58	–
16L	–	–	–	–
16B	–	–	–	–
18	–	–	–	32.45
19	25.62	26.63	22.73	11.92
20	21.58	–	–	8.78

表8. イヌ四肢骨計測値

計測箇所	イヌ				
	左		右		
肩甲骨	No45		No.44		
SLC	27.22		–		
GLP	29.76		29.14		
LG	25.47		26.17		
BG	17.82		17.92		
上腕骨	No.27	No.42	No.42		
GL	–	–	–		
Bp	–	–	–		
Bd	31.46	33.50	33.71		
橈骨	No.46		No.46		
GL	151.28		–		
Bp	18.96		18.86		
Bd	24.15		23.91		
尺骨	No.59		No.59		
GL	175.34		177.69		
SDO	22.45		22.48		
DPA	24.04		24.55		
大腿骨	No.26	No.43	No.43		
GL	–	–	–		
Bp	–	–	–		
Bd	31.28	31.05	30.48		
膝蓋骨	No.53		No.35	No.53	
GL	17.35		18.12	17.28	
GB	10.19		10.54	10.78	
脛骨	No.77		No.29	No.44	No.77
GL	–		–	–	–
Bp	–		–	34.19	–
Bd	23.89		22.83	–	23.09
腓骨	No.28				
GL	–				

検出される骨の中で、No.40 の左下顎骨は、第 3 前臼歯～第 2 後臼歯が植立することから、0.5 歳以上であると判断される。さらに、No.39 の腰椎、No.53 の右膝蓋骨、No.71 の右第 3・4 中足骨には、関節を構成する骨の周辺に余分な骨の突起が形成されており(表中ではリッピングと表記)、加齢に伴う変形性関節症を起こしていた可能性もある。

土坑 9 では、右下顎骨(No.102)が検出される。第 4 前臼歯～第 2 後臼歯が植立することから、0.5 歳以上であると判断される。

・タヌキ

大溝 3 下位で右下顎骨(No.101)が検出される。ほぼ完存しており、第 1 前臼歯～第 1 後臼歯までが植立する。1 点のみの出土であり、他から流されてきた可能性もある。

・ニホンジカ

計測結果を表 9 に示す。

大溝 1 下位で右脛骨(No.105)が検出される。遠位端が欠損し、スパイラル状に割れる。また、骨体表面には齧り痕がみられる。髄を採取するために割った可能性があり、廃棄後しばらく地表面に曝されていたために動物によって齧られたと思われる。

溝 12 で左側と思われる橈骨遠位端 (No.108)、左尺骨(No.108)、左側と思われる中手骨(No.9)、左橈骨(No.110)が検出される。No.108 の左尺骨、No.110 の左橈骨は関節し、同一個体と判断できる。また、No.108 の橈骨遠位端と No.110 の左橈骨は、破損し、接合関係がみられないが、おそらくは同一骨であろう。また、中手骨も同一個体の可能性が極めて高い。左前肢が埋まっていたとみられ、意図的に廃棄されたと考えられる。

表9. ニホンジカ四肢骨計測値

計測箇所	ニホンジカ	
	左	右
橈骨	No.110	
GL	–	
PL		
LI		
Bp	41.13	
SD	–	
Bd		
尺骨	No.108	
GL	–	
LO	–	
SDO	36.05	
DPA	41.27	
BPC	21±	
脛骨		No.105
GL		–
Bp		49.70
Bd		–

大溝 4 で左体大骨(No.112)が検出される。骨頭部に解体に伴うカットマークがみられ、股関節部で切り離されている。

・ウシ

大溝 3 で右上腕骨(No.103)が検出される。また、土坑 13 でウシの可能性がある左上腕骨(No.104)が検出される。No.103、104 とも両端が欠損する。

溝 28(No.111)では、肩甲骨、上腕骨、橈骨+尺骨、中手骨、橈骨側手根骨、尺骨側手根骨、中間手根骨、副手根骨、第 2+3 手根骨、第 4 手根骨、基節骨、中節骨、末節骨、遠位種子骨が検出される。いずれも右側である。保存状態は良好で、それぞれ関節することから、同一個体に由来する。頭蓋や他部位がみられないことから、右前肢のみが流通し、それぞれが関節したそのままの状態で埋まった可能性がある。

橈骨遠位端と尺骨の両端が未化骨、中手骨の遠位端も未化骨で、それぞれ癒合していない。これより 2～2.5 歳程度と推定される。肩甲骨の頚部と上腕骨の骨体に解体にカットマークとみられ、右前肢を体幹から取り外した行為がみられる。表 10 に四肢骨の計測結果を示す。西中川ほか(1991)を参考に四肢骨の計測値から推定される体高は、100～107cm 程度となり、若獣でもあることから小型サイズである。

松井(1997)、久保・松井(1999)は、ウマやウシの出土例を整理・分類し、自然死・事故死、屠殺(皮、肉、角の利用)、犠牲(祭祀など)に大別している。また、佐伯(1967)、松崎(2000)も、家畜として飼養していたウマ・ウシを土坑などに埋葬・埋納する、革などの原料として加工され溝や土坑に廃棄する、雨乞いなどの儀礼・祭祀に伴って殺し遺棄・埋納する、といった行為が推測している。今回の場合は、解体に伴うカットマークがみられることから自然死・事故死は省かれ、それ以外の用途としての利用であったと思われる。

表10.ウシ四肢骨計測値

計測箇所	ウシ
	右
肩甲骨	No.111
HS	267.86
DHA	258.61
Ld	149.19
SLC	41.37
GLP	56.58
LG	47.83
BG	40.47
上腕骨	No.103
GLI	242.87
GLC	218.51
Bp	68±
Dp	83.79
SD	26.64
BT	62.16
Bd	66.24
橈骨	No.111
GL	238.87
PL	227.51
LI	230.24
Bp	65.81
SD	31.29
Bd	63.06
尺骨	No.111
GL	296.94
LO	73.54
SDO	45.89
DPA	50.82
BPC	40.18
橈尺骨	No.111
GLI	314.47
中手骨	No.111
GL	172.03
GLI	168.29
LI	164.60
Bp	48.37
Dp	31.31
Bd	49.87
Dd	22.49

・哺乳綱？

No.106 である。地表面に現れた部分は細かな状態で復元することが不可能であったが、土中にも埋もれており、土塊ごと硬化させた。外れた破片でみると約 1～1.2mm 程度の厚さである。土中に埋もれていたものでみると、約 5cm×6cm の広がりをもち、彎曲する。表面および断面を観察すると多孔質である。緻密質部分がみられず、骨であるか判断がつかず、詳細不明である。

引用文献

Angela von den Drieach,1976,A Guide to the Measurement of Animal Bones from Archaeological Sites. Peabody Museum Bulletins 1.i-ix,1-137.

長谷部言人,1952,犬骨,埋蔵文化財発掘調査報告第一,吉胡貝塚,文化財保護委員会 146-150.

加藤 嘉太郎・山内 昭二,2003,新編 家畜比較解剖図説 上巻.養賢堂,315p.

久保和士・松井 章,1999,家畜その 2－ウマ・ウシ.西本 豊弘・松井 章編,考古学と自然科学② 考古学と動物学,同成社,169-208.

松井 章,1997,考古学からみた動物利用.部落解放なら,8,奈良県部落解放研究所,2-31.

松崎元樹,2000,武蔵国多磨郡域を中心とする古代牧関連の遺跡について.山梨県考古学協会 2000 年度研究集会 古代の牧と考古学 資料集,山梨県考古学協会,52-75.

西中川 駿・本田道輝・松元光春,1991,古代遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究.平成2年度文部省科学研究費補助金(一般研究 B)研究成果報告書,99p.

奥谷喬司・窪寺恒己・黒住耐二・斎藤 寛・佐々木猛智・土田英治・土屋光太郎・長谷川和範・濱谷 巌・速水格・堀 成夫・松隈明彦,2000,日本近海産貝類図鑑.奥谷喬司編,東海大学出版会,1173p.

奥谷喬司編著,2004,改訂新版 世界文化生物大図鑑 貝類.株式会社世界文化社.399p.

佐伯有清,1967,牛と古代人の生活.至文堂.

斉藤弘吉,1963,犬科動物骨格計測法.138p.

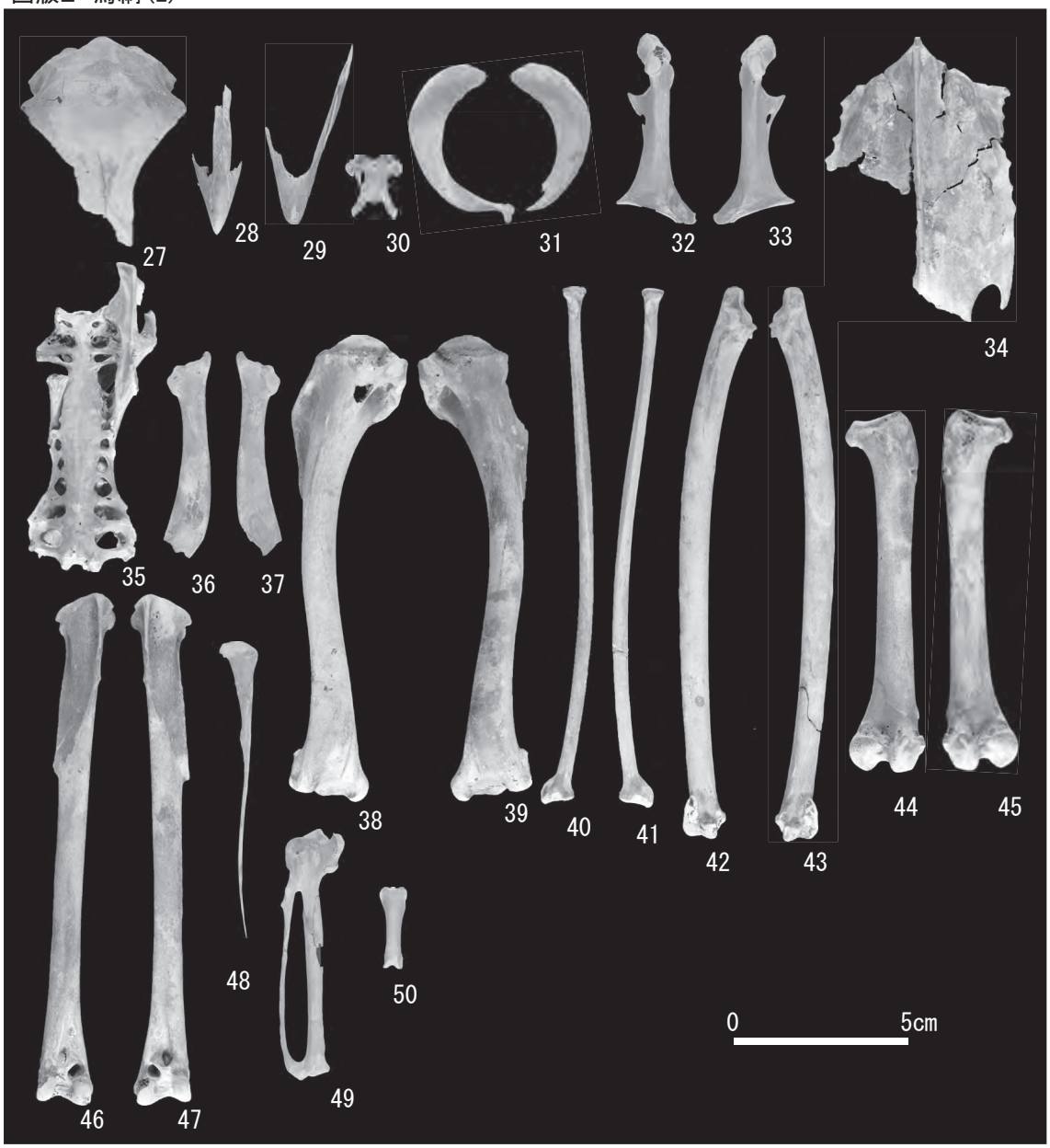
鶴岡英一,2003,関東地方におけるスッポンの利用－その開始時期と普及の要因をめぐって－.市原市文化財センター研究紀要Ⅳ,財団法人市原市文化財センター,p.11-25.

山内忠平,1957,鹿児島大学農学部学術報告,7,鹿児島大学農学部,125-131.

図版１　腹足綱・二枚貝綱・両生綱・硬骨魚綱・鳥綱 (1)

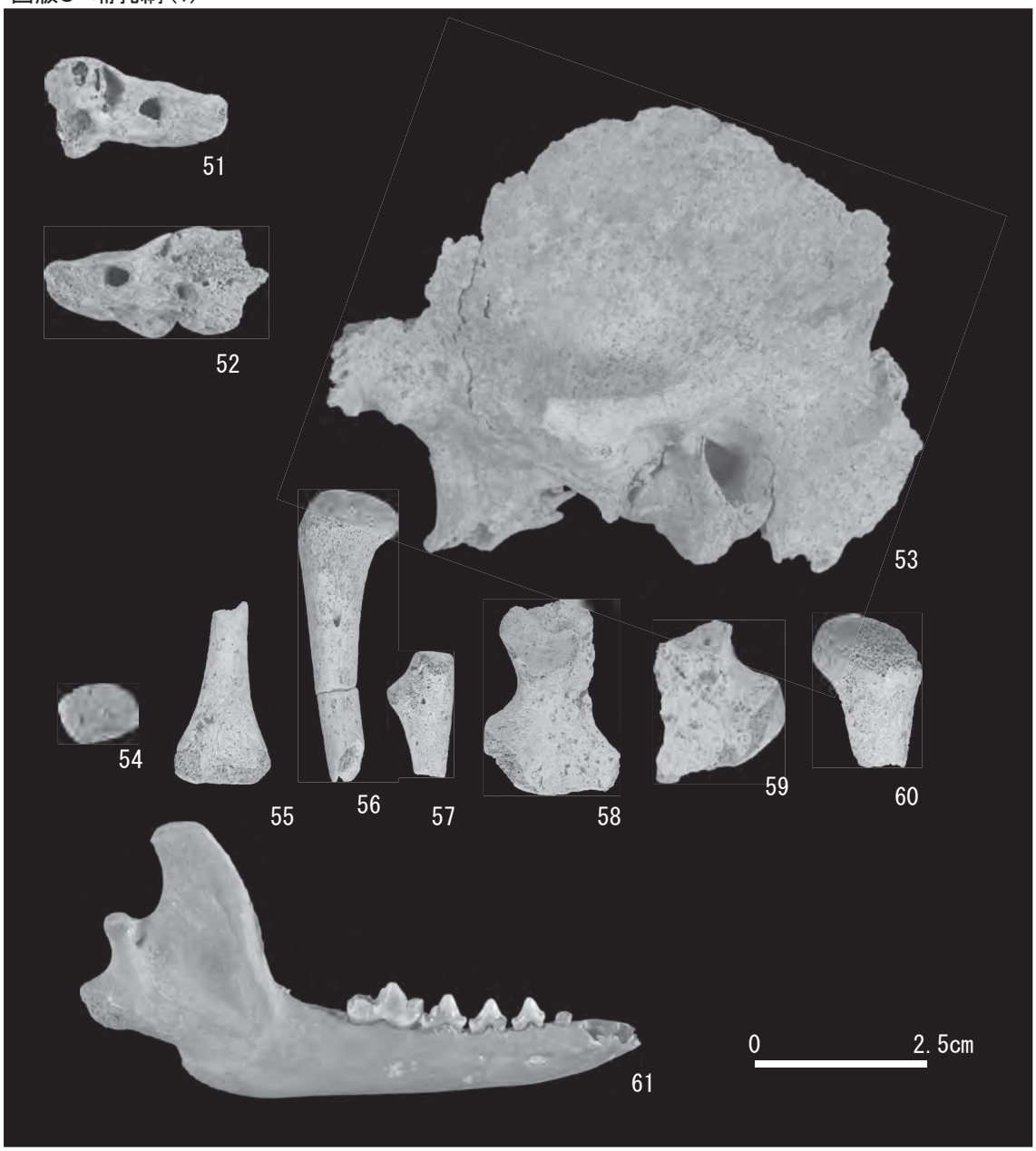
1. ゴマフダマ殻 (No. 115)
2. アカニシ殻 (No. 116)
3. ハイガイ左殻 (No. 118)
4. カキ類？殻 (No. 117)
5. シオフキ左殻 (No. 119)
6. ヤマトシジミ左殻 (No. 114)
7. 貝類殻 (No. 120)
8. 魚類鰭棘等 (No. 96)
9. ハタ科尾椎 (No. 94)
10. ハタ科？尾椎 (No. 94)
11. スッポン右上腕骨 (No. 100)
12. スッポン右第 2 肋骨板 (No. 107)
13. ニワトリ左肩甲骨 (No. 64)
14. ニワトリ右肩甲骨 (No. 64)
15. ニワトリ左橈骨 (No. 64)
16. ニワトリ左大腿骨 (No. 62)
17. ニワトリ右大腿骨 (No. 62)
18. ニワトリ左脛足根骨 (No. 60)
19. ニワトリ右脛足根骨 (No. 60)
20. ニワトリ左足根中足骨 (No. 61)
21. ニワトリ右足根中足骨 (No. 61)
22. ニワトリ？左烏口骨 (No. 67)
23. ニワトリ？右烏口骨 (No. 67)
24. ニワトリ？右尺骨 (No. 65)
25. 鳥綱複合仙骨 (No. 68)
26. 鳥綱足根中足骨 (No. 65)

図版2　鳥綱(2)



27. イヌワシ属頭蓋骨 (No.113･124)
28. イヌワシ属上顎骨 (No.124)
29. イヌワシ属歯骨 (No.113･124)
30. イヌワシ属頚椎 (No.113)
31. イヌワシ属鎖骨 (No.113)
32. イヌワシ属左烏口骨 (No.113)
33. イヌワシ属右烏口骨 (No.113)
34. イヌワシ属胸骨 (No.124)
35. イヌワシ属複合仙骨 (No.124)
36. イヌワシ属左肩甲骨 (No.113)
37. イヌワシ属右肩甲骨 (No.113)
38. イヌワシ属左上腕骨 (No.121)
39. イヌワシ属右上腕骨 (No.121)
40. イヌワシ属左橈骨 (No.121)
41. イヌワシ属右橈骨 (No.121)
42. イヌワシ属左尺骨 (No.122)
43. イヌワシ属右尺骨 (No.122)
44. イヌワシ属左大腿骨 (No.122)
45. イヌワシ属右大腿骨 (No.122)
46. イヌワシ属左脛足根骨 (No.121)
47. イヌワシ属右脛足根骨 (No.121)
48. イヌワシ属左腓骨 (No.113)
49. イヌワシ属左手根中手骨 (No.113)
50. イヌワシ属中節骨 (No.113)

図版3　哺乳綱(1)

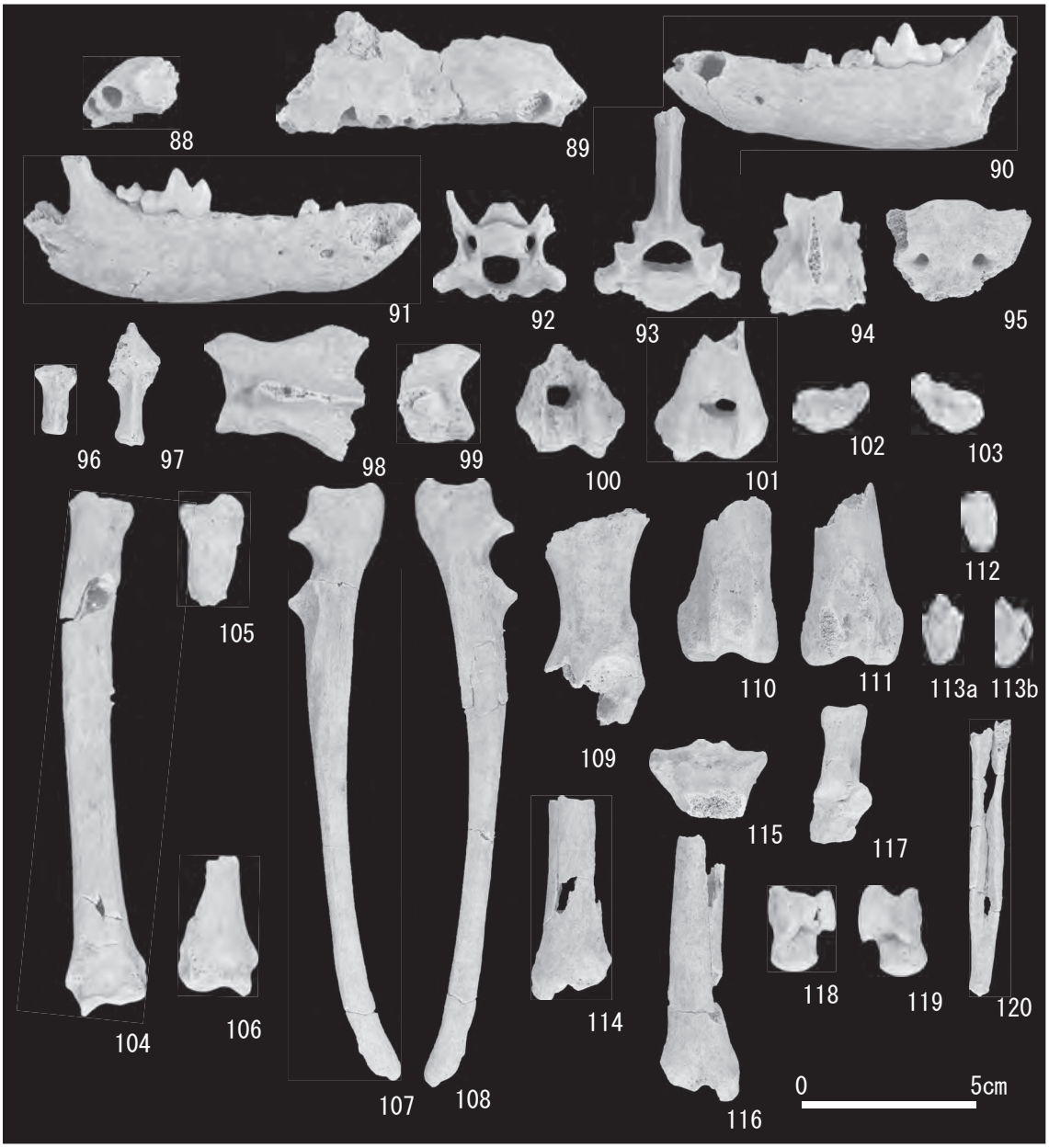


51. ヒト左側頭骨 (No.90)
52. ヒト右側頭骨 (No.90)
53. ヒト左側頭骨 (No.91)
54. ヒト？椎骨 (No.83)
55. ヒト？左上腕骨 (No.83)
56. ヒト？右上腕骨 (No.83)
57. ヒト？左尺骨 (No.83)
58. ヒト？左腸骨 (No.83)
59. ヒト？左座骨 (No.83)
60. ヒト？左大腿骨 (No.83)
61. タヌキ右下顎骨 (No.101)

図版4　哺乳綱(2)

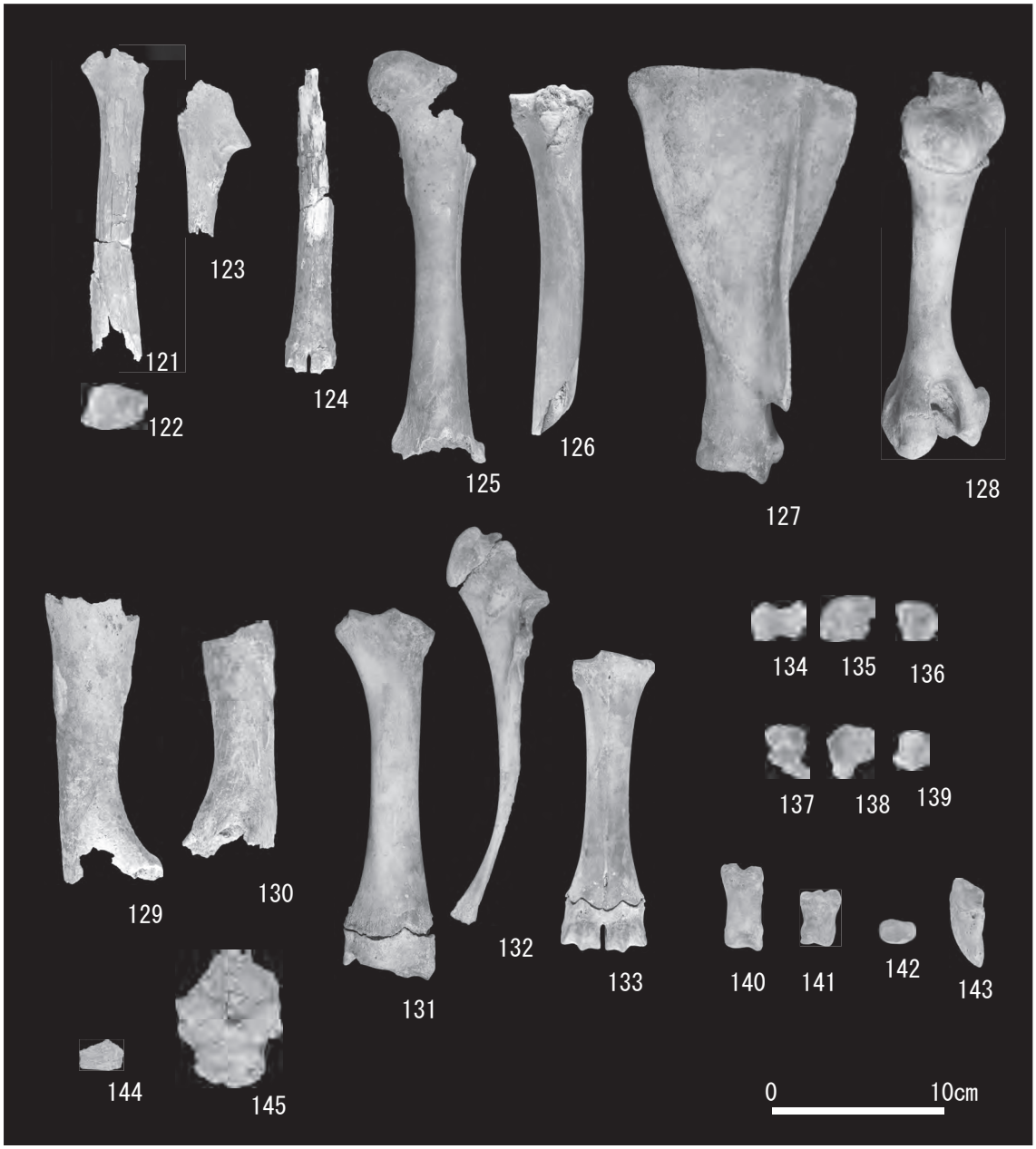
62. ネコ左下顎骨 (No. 7)
63. ネコ右下顎骨 (No. 7)
64. ネコ胸椎 (No. 11)
65. ネコ腰椎 (No. 11)
66. ネコ左肩甲骨 (No. 6)
67. ネコ右肩甲骨 (No. 6)
68. ネコ左上腕骨 (No. 1)
69. ネコ右上腕骨 (No. 1)
70. ネコ左橈骨 (No. 95)
71. ネコ右橈骨 (No. 95)
72. ネコ右橈骨 (No. 85)
73. ネコ左尺骨 (No. 5)
74. ネコ右尺骨 (No. 5)
75. ネコ左寛骨 (No. 8)
76. ネコ左寛骨 (No. 8)
77. ネコ左大腿骨 (No. 3)
78. ネコ右大腿骨 (No. 2+3)
79. ネコ左脛骨 (No. 2)
80. ネコ左脛骨 (No. 2)
81. ネコ右脛骨 (No. 2)
82. ネコ右踵骨 (No. 9)
83. ネコ左距骨 (No. 9)
84. ネコ右距骨 (No. 9)
85. ネコ基節骨 (No. 18)
86. ネコ中節骨 (No. 22)
87. ネコ末節骨 (No. 24)

図版5　哺乳綱(3)



88. イヌ左切歯骨 (No. 39)
89. イヌ右上顎骨 (No. 40)
90. イヌ左下顎骨 (No. 40)
91. イヌ右下顎骨 (No. 39)
92. イヌ頚椎 (No. 39)
93. イヌ胸椎 (No. 39)
94. イヌ腰椎 (No. 39)
95. イヌ仙骨 (No. 39)
96. イヌ尾椎 (No. 39)
97. イヌ胸骨 (No. 39)
98. イヌ左肩甲骨 (No. 45)
99. イヌ右肩甲骨 (No. 44)
100. イヌ上腕骨 (No. 27)
101. イヌ右上腕骨 (No. 42)
102. イヌ左橈骨側手根骨 (No. 53)
103. イヌ右橈骨側手根骨 (No. 53)
104. イヌ左橈骨 (No. 46)
105. イヌ右橈骨 (No. 46)
106. イヌ右橈骨 (No. 46)
107. イヌ左尺骨 (No. 59)
108. イヌ右尺骨 (No. 59)
109. イヌ右寛骨 (No. 47)
110. イヌ左大腿骨 (No. 43)
111. イヌ右大腿骨 (No. 43)
112. イヌ左膝蓋骨 (No. 53)
113. イヌ右膝蓋骨 (No. 53)
114. イヌ左脛骨 (No. 77)
115. イヌ右脛骨 (No. 44)
116. イヌ右脛骨 (No. 77)
117. イヌ右踵骨 (No. 72)
118. イヌ左距骨 (No. 71)
119. イヌ右距骨 (No. 71)
120. イヌ陰茎骨 (No. 78)

図版6　哺乳綱(4)



121. ニホンジカ左橈骨 (No. 110)
122. ニホンジカ左？橈骨 (No. 108)
123. ニホンジカ左尺骨 (No. 108)
124. ニホンジカ左？中手骨 (No. 109)
125. ニホンジカ左大腿骨 (No. 112)
126. ニホンジカ右脛骨 (No. 105)
127. ウシ右肩甲骨 (No. 111)
128. ウシ右上腕骨 (No. 111)
129. ウシ右上腕骨 (No. 103)
130. ウシ？左上腕骨 (No. 104)
131. ウシ右橈骨 (No. 111)
132. ウシ右尺骨 (No. 111)
133. ウシ右中手骨 (No. 111)
134. ウシ右橈骨側手根骨 (No. 111)
135. ウシ右第 2+3 手根骨 (No. 111)
136. ウシ右第 4 手根骨 (No. 111)
137. ウシ右中間手根骨 (No. 111)
138. ウシ右尺骨側手根骨 (No. 111)
139. ウシ右副手根骨 (No. 111)
140. ウシ右基節骨 (No. 111)
141. ウシ右中節骨 (No. 111)
142. ウシ右遠位種子骨 (No. 111)
143. ウシ右末節骨 (No. 111)
144. 種類不明破片 (No. 106)
145. 種類不明破片 (No. 106)

Ⅴ－２　本町遺跡出土種実等同定

株式会社 古環境研究所

１．はじめに

植物の種子や果実は比較的強靭なものが多く、堆積物中に残存する。堆積物から種実を検出しその群集の構成や組成を調べ、過去の植生や群落の構成要素を明らかにし古環境の推定を行うことが可能である。また出土した単体試料等を同定し、栽培植物や固有の植生環境を調べることができる。

本報告では、伝習館高校建て替え工事に伴う発掘調査で出土した種実等を同定し、当時の植物利用ならびに周辺植生について検討する。

２．試料

試料は、１次大溝３c（試料１）、１次溝 12（試料２）、１次出土地不明（試料３）、１次土坑 42（試料４）、１次土坑 10（試料５、９、10）、１次土坑 13（試料６）、１次土坑 14（試料７）、１次溝 13（試料８）、２次土坑３（試料 11）、１次土坑 11･溝 12 の混じり（試料 12）、１次溝 16（試料 13、18）、１次大溝１下層（試料 14）、２次土坑４（試料 15）、２次大土坑２（試料 16、17）、１次土坑 15（試料 19、20、21）より出土した種実である。

３．方法

試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行う。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示す。

４．結果

（１）分類群

樹木４、草本５の計９分類群が同定された。学名、和名および粒数を表１に示し、主要な分類群の写真を図版に示す。以下に同定根拠となる形態的特徴、写真に示したもののサイズを記載する。

〔樹木〕

マツ属複維管束亜属　*Pinus*　subgen.　*Diploxylon*　毬果　マツ科　　試料 4、17

黒褐色で卵形を呈す。種鱗先端の外部に露出する部分は扁平 5 角形であり、その中央にはへそがある。長さ×幅：38.72 ㎜×20.18 ㎜

オニグルミ　*Juglans*　*ailanthifolia*　Carr.　核（完形・半形）　クルミ科　　試料 21

茶褐色で円形～楕円形を呈し、一端がとがる。側面には縦に走る一本の縫合線がめぐる。表面全体に不規則な隆起がある。長さ×幅：30.70 ㎜×23.54 ㎜

ウメ　*Prunus*　*mume*　S.　et　Z.　核（完形）　バラ科　　試料 20

茶褐色で楕円形を呈し、側面に縫合線が走る。表面には小孔が散在する。長さ×幅：20.53 ㎜×15.40 ㎜

モモ　*Prunus*　*persica*　Batsch　核（完形・半形・破片）　バラ科　　試料 1、3、15、16、20

茶褐色～黒褐色で楕円形を呈し、側面に縫合線が発達する。表面にはモモ特有の隆起がある。長さ×幅：32.27 ㎜×22.75 ㎜

表１　本町遺跡における種実同定結果

	遺構･取り上げ名	分類群		部位	個数
		学名	和名		
1	1次大溝3c	*Prunus persica* Batsch	モモ	核　(完形)	1
2	1次溝12	*Benincasa hispida* Cogn.	トウガン	種子	6
				(破片)	1
3	1次出土地不明	*Prunus persica* Batsch	モモ	核　(完形)	1
4	1次土坑42	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属	毬果	1
5	1次土坑10	*Benincasa hispida* Cogn.	トウガン	種子	4
		Lagenaria siceraria Standl.	ヒョウタン類	種子	1
6	1次土坑13	*Benincasa hispida* Cogn.	トウガン	種子	3
7	1次土坑14	*Benincasa hispida* Cogn.	トウガン	種子	5
				(破片)	1
8	1次溝13	*Cucurbita moschata* Duch.	ニホンカボチャ	種子	1
9	1次土坑10	*Benincasa hispida* Cogn.	トウガン	種子	7
10	1次土坑10	*Cucumis melo* L.	ウリ類	種子	9
11	1次2次土坑3	*Cucurbita moschata* Duch.	ニホンカボチャ	種子	15
12	1次土坑11･溝12の混じり	*Benincasa hispida* Cogn.	トウガン	種子	1
13	1次溝16	*Luffa cylindrica* Roem.	ヘチマ	種子	1
14	1次大溝1下層	*Solanum melongena* L.	ナス	種子	518
15	2次土坑4	*Prunus persica* Batsch	モモ	核　(半形)	1
16	2次大土坑2	*Prunus persica* Batsch	モモ	核　(完形)	1
				核　(破片)	1
17	2次大土坑2	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属	毬果	1
18	1次溝16	*Luffa cylindrica* Roem.	ヘチマ	種子	84
19	1次土坑15	*Benincasa hispida* Cogn.	トウガン	種子	21
20	1次土坑15	*Prunus mume* S. et Z.	ウメ	核　(完形)	1
		Prunus persica Batsch	モモ	核　(完形)	5
				核　(半形)	1
21	1次土坑15	*Juglans ailanthifolia* Carr	オニグルミ	核　(完形)	8
				核　(半形)	2

ナス　*Solanum melongera* L.　種子　ナス科　　試料 14

黄褐色で扁平楕円形を呈し、一端にくぼんだヘソがある。表面には網目模様がある。長さ×幅：3.08 ㎜×3.26 ㎜、2.73 ㎜×3.49 ㎜

トウガン　*Benincasa hispida* Cogn.　種子（完形・破片）　ウリ科　　試料 2、5、6、7、9、12、19

卵倒形を呈し、扁平。周辺部の縁は平行に一段高くなる。長さ×幅：11.04 ㎜×6.39 ㎜

ヘチマ　*Luffa cylindrica* Roem.　種子　ウリ科　　試料 13、18

茶褐色で広楕円形を呈し、上端は「ハ」字状にくぼむ。長さ×幅：13.42 ㎜×8.72 ㎜、13.38 ㎜×8.54 ㎜

ニホンカボチャ　*Cucurbita moschata* Duch.　種子　　試料 8、11

茶褐色で扁平楕円形を呈し、周縁部はやや肥厚する。肥厚した表面は繊維状である。長さ×幅：15.22 ㎜×7.74 ㎜

ウリ類　*Cucumis melo* L.　種子　　ウリ科

淡褐色～黄褐色で長楕円形を呈し、上端は「ハ」字状にくぼむ。藤下によると小粒種子（雑草メロン型）、中粒種子（マクワウリ・シロウリ型）、大粒種子（モモルディカ型）がある。長さ×幅：7.40 ㎜×3.43 ㎜

ヒョウタン類　*Lagenaria siceraria* Standl.　種子　　ウリ科　試料 5、10

淡褐色で楕円形を呈す。上端にはへそと発芽孔があり、下端は波うつ切形を呈す。表面には縦に２本の低い稜が走る。藤下がヒョウタン仲間とするものには、ヒョウタン・フクベ・カンピョウが含まれ、このうちフクベ・カンピョウは食用になる。長さ×幅：11.83 ㎜×6.05 ㎜

（２）種実群集の特徴

１）１次大溝３c（試料１）

樹木種実のモモが同定された。

２）１次溝 12（試料２）

草本種実のトウガンが同定された。

３）１次出土地不明（試料３）

樹木種実のモモが同定された。

４）１次土坑 42（試料４）

樹木種実のマツ属複維管束亜属毬果が同定された。

５）１次土坑 10（試料５、９、10）

草本種実のトウガン、ウリ類、ヒョウタン類が同定された。

６）１次土坑 13（試料６）

草本種実のトウガンが同定された。

７）１次土坑 14（試料７）

草本種実のトウガンが同定された。

８）１次溝 13（試料８）

草本種実のニホンカボチャが同定された。

９）２次土坑３（試料 11）

草本種実のニホンカボチャが同定された。

10）１次土坑 11･溝 12 の混じり（試料 12）

草本種実のトウガンが同定された。

11）１次溝 16（試料 13、18）

草本種実のヘチマが同定された。

12）１次大溝１下層（試料 14）

草本種実のナスが同定された。

13）２次土坑４（試料 15）

樹木種実のモモが同定された。

14）２次大土坑２（16、17）

樹木種実のマツ複維管束亜属毬果、モモが同定された。

15）１次土坑 15（試料 19、20、21）

樹木種実のオニグルミ、ウメ、モモ、草本種実のトウガンが同定された。

５．考察とまとめ

本町遺跡より出土した種実について同定を行った結果、樹木種実のマツ属複維管束亜属、オニグルミ、

ウメ、モモ、草本種実のナス、ヒョウタン類、トウガン、ヘチマ、ニホンカボチャ、ウリ類が同定された。

樹木種実のマツ属複維管束亜属は温帯を中心に広く分布する常緑針葉樹で二次林種でもあり、周囲に生育または植栽されていたと考えられる。オニグルミは沢沿いなどの適潤地に生育し、有用植物で種子は食用となる。核となった果実の最内層の内果皮が残存しやすい。遺跡からよく出土しており、本遺跡のものは利用された残滓と考えられる。ウメ、モモは食用となる栽培植物であり、稲作とともに伝来した。弥生時代以降多くの遺跡から出土し、古墳時代にかけて多くなる。草本種実のナス、ヒョウタン類、トウガン、ヘチマ、ニホンカボチャ、ウリ類は全て栽培植物で食用となる。ヘチマ、ニホンカボチャは 16 世紀に伝来したとみられ、ヘチマも幼果実は食用になる。ウメ、モモ、ナス、ヒョウタン類、トウガン、ヘチマ、ニホンカボチャ、ウリ類はいずれも食用となった残滓と考えらえる。以上、本遺跡より出土した種実は人との関わり合いの深いものばかりで、栽培植物、畑作物が多い。

参考文献

笠原安夫（1985）日本雑草図説，養賢堂，494p.

金原正明（1996）古代モモの形態と品種．月刊考古学ジャーナル No. 409，ニューサイエンス社，p. 15-19.

藤下典之（1982）菜畑遺跡から出土したメロン仲間 *Cucumis melo* L.とヒョウタン仲間 *Lagenaria siceraria* Standl.の種子について．唐津市文化財調査報告第５集菜畑遺跡，唐津市教育委員会，p. 455-463.

藤下典之（1992）出土種子からみた古代日本のメロンの仲間、その種類、渡来、伝搬、利用について．考古学ジャーナル p 354，ニュー・サイエンス社，p. 7-13.

南木睦彦（1991）栽培植物．古墳時代の研究第４巻生産と流通Ⅰ，雄山閣出版株式会社，p. 165-174.

南木睦彦（1993）葉・果実・種子．日本第四紀学会編，第四紀試料分析法，東京大学出版会，p. 276-283.

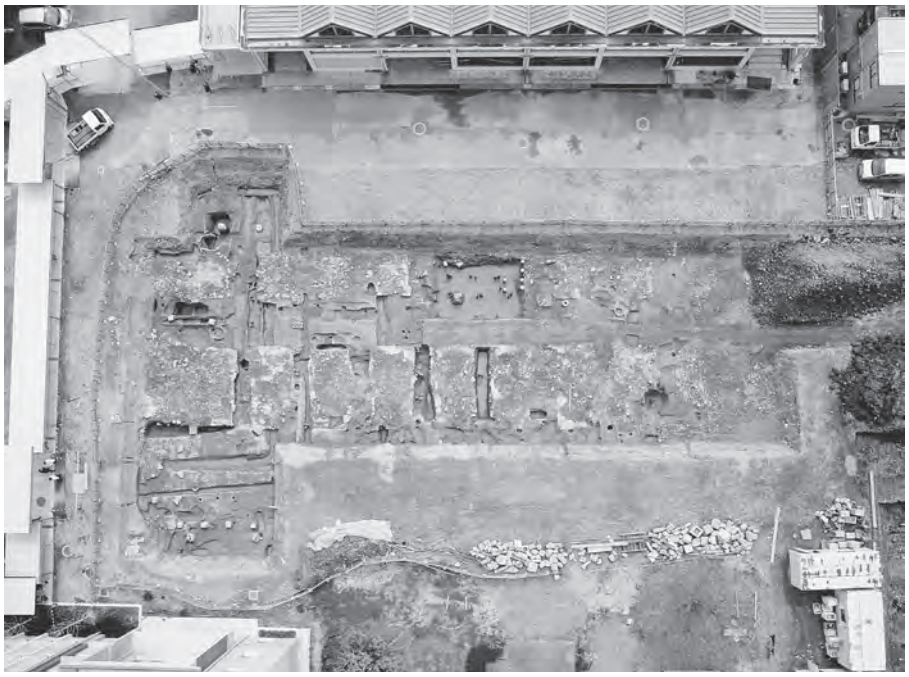
Ⅶ　おわりに

本町遺跡は、城下町柳川の城内地区北端に位置し、当時の幹線道路である本小路が遺跡中央を縦貫している柳川城下町の要所である。今回の調査区はその裏通りにあたり、柳川藩の中級武士の屋敷地と県立伝習間高校の前身となる教育施設を確認するという成果を得た。

古地図と文献という参考資料が豊富な中で行う整理報告は、遺構の性格や時期を捉える有力な材料であるとともに、地図と実際に掘った遺構を照合させるという困難さを伴っていた。それでも、先人が残してくれた古地図や見取り図が無ければ、到底言及できない部分が数多くあった。特に、遺物には線刻文字や墨書文字が豊富に見つかり、その解釈と文献記録の捜索・照合も行わなければならず、近世城下町遺跡の発掘調査の難しさを痛感した。

本書の作成にあたっては、時間的な制約もあり、柳川古文書館の学芸員の意見を伺う機会を得られず、解釈違いもあることと思うが、本書が今後の柳川藩史・柳川城下町研究に資することを期待したい。

図　版



1　1 次調査東半全景
（上空から）

2　同上　西半全景
（上空から）

3　同上 渡り廊下部全景
（上空から）

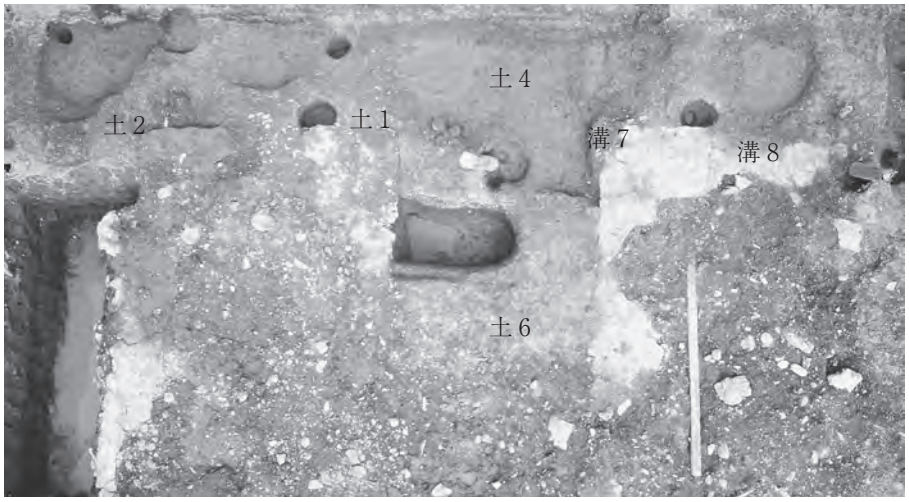
図版２

１　１次調査基本層序（南から）

２　１次調査北東部１面全景（北から）

１　１次調査１号土坑（南から）

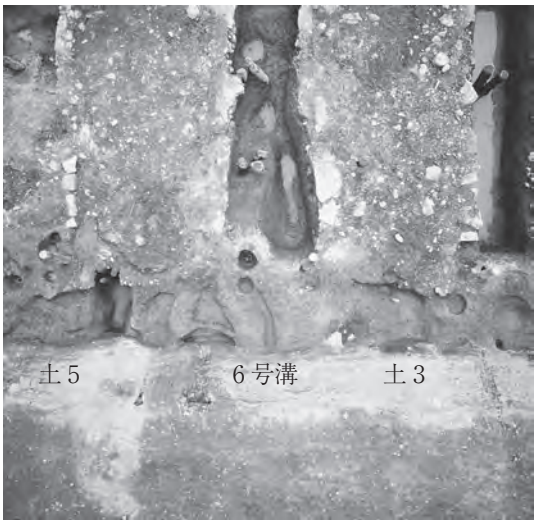
２　１次調査２号土坑土層断面
（南から）



３　１次調査１・２・４・６号土坑
（上空から）

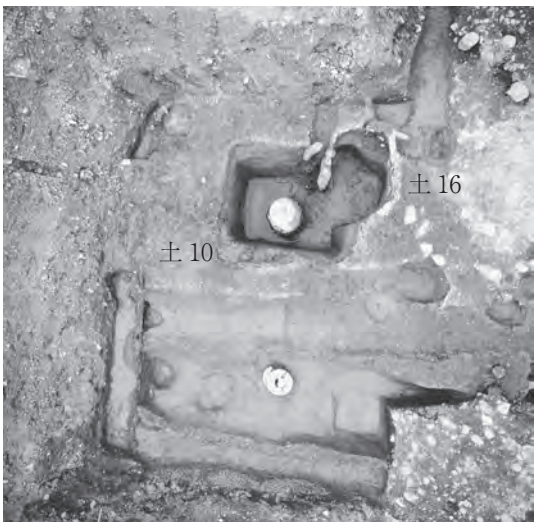
４　１次調査４号土坑土層断面（南から）

図版 4



1　1 次調査 5 号土坑・6 号溝状遺構（上空から）

2　1 次調査 6 号土坑土層断面（西から）

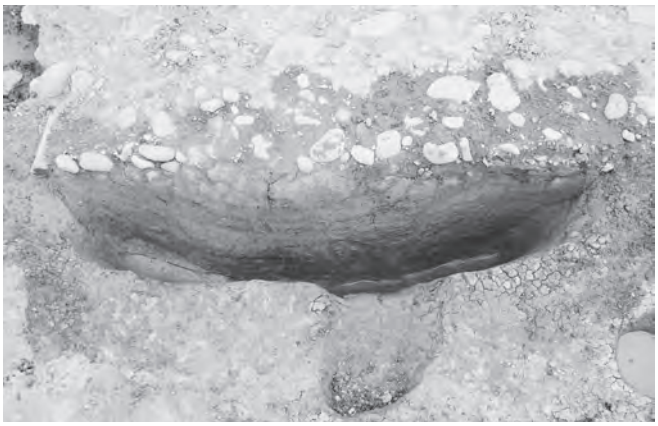


3　1 次調査 10 号土坑・16 号土坑（上空から）

4　1 次調査 15 号土坑（南東から）

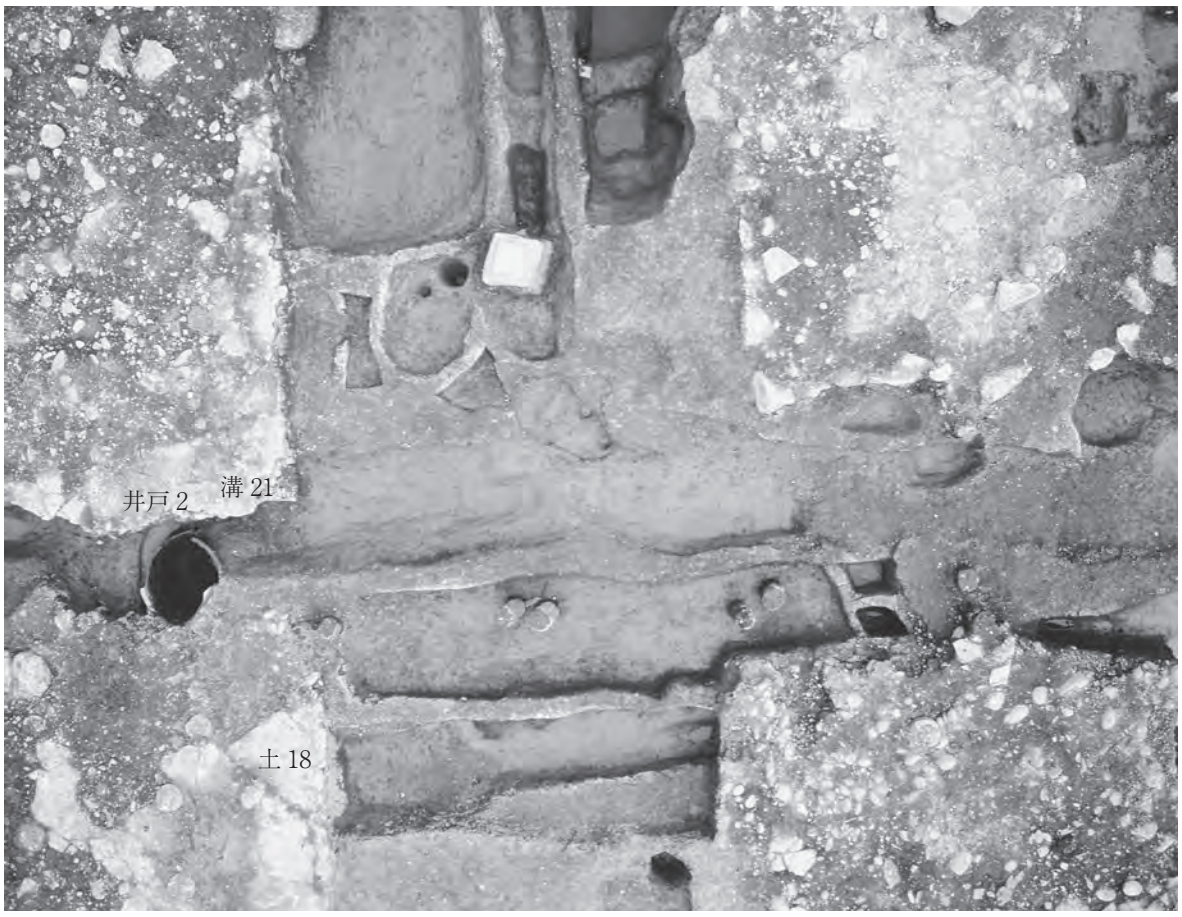
5　1 次調査 11 号土坑・12 号溝状遺構（上空から）

1　1 次調査 17 号土坑（西から）



2　1 次調査 17 号土坑土層断面（南から）

3　1 次調査 17 号土坑人骨出土状況（北西から）



4　1 次調査 18 号土坑・2 号井戸・21 号溝状遺構（上空から）

図版 6

1　1 次調査 16 号土坑（南西から）

5　1 次調査 21 号土坑遺物出土状況（南から）

2　1 次調査 18 号土坑・21 号溝状遺構土層断面（北から）

6　1 次調査 22 号土坑（南から）

3　1 次調査 19 号土坑（南から）

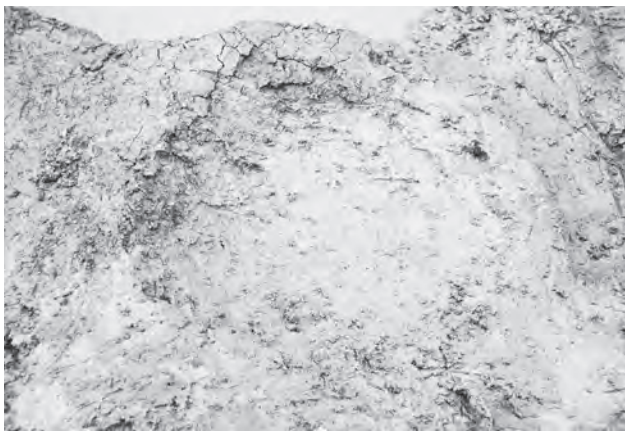
4　1 次調査 20 号土坑（西から）

7　1 次調査 21 ～ 24・26 号土坑（上空から）

1　1 次調査 24 号土坑（東から）

2　1 次調査 25 号土坑（東から）

3　1 次調査 58 号土坑（東から）



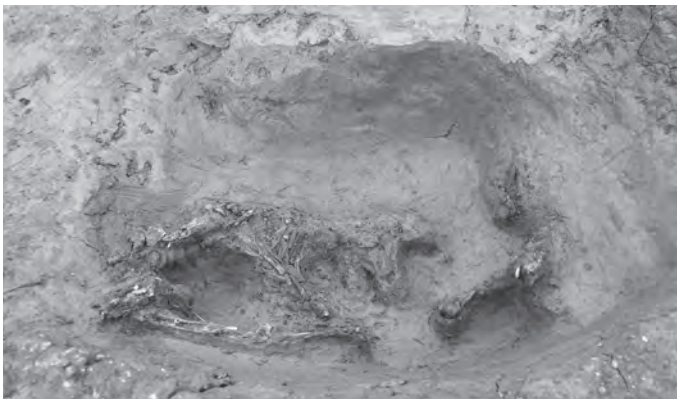
4　1 次調査 59 号土坑（西から）

5　1 次調査 4 ～ 6 号大溝（上空から）

6　1 次調査 60 号土坑（西から）

図版８

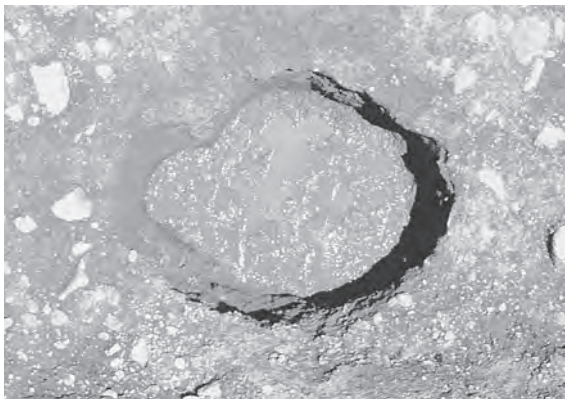
1　１次調査埋甕遺構（北から）



4　１次調査１号墓（北から）

2　１次調査２号井戸（東から）

5　１次調査獣骨集中部（南から）



3　１次調査３号井戸（上空から）

6　１号大土坑出土イヌワシ骨

7　１号大土坑導水施設状況（北西から）

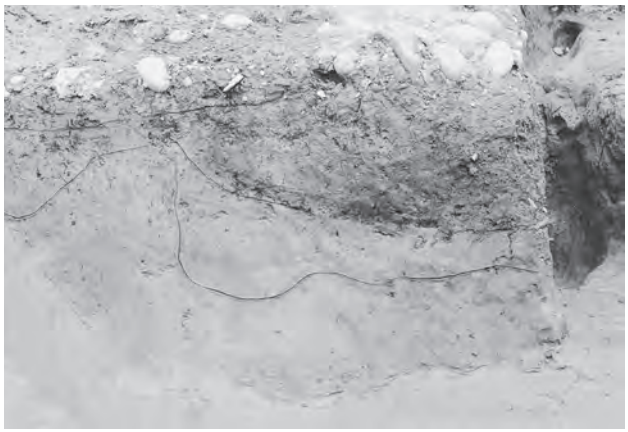
１　１次調査道路状遺構（上空から）

２　同上土層断面（南から）

３　１次調査方形周溝遺構（東から）

1　1次調査1号溝状遺構土層断面（北から）

5　3号溝状遺構土層断面（西から）



2　同上南部土層断面（南から）

6　1次調査4号溝状遺構土層断面（南から）

3　同上磁器出土状況（東から）

4　1次調査2号溝状遺構土層断面（西から）

6　同上土人形出土状況（西から）

1　1 次調査 4 号溝状遺構南部土層断面（北から）

2　1 次調査 9 号溝状遺構南部土層断面（西から）

4　1 次調査 15 号溝状遺構遺物出土状況（西から）

3　1 次調査 13 号溝状遺構瓦出土状況（南西から）

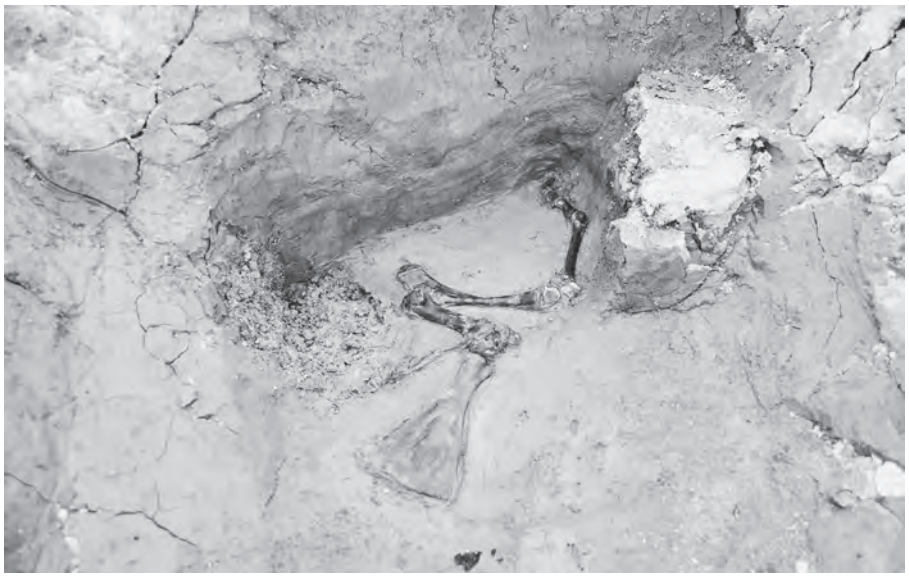
5　1 次調査道路状遺構・18 号溝状遺構土層断面（東から）

6　1 次調査 15 号溝状遺構土層断面（西から）

図版 12

1　1 次調査 28 号溝状遺構・3 号大溝遺構（上空から）

2　1 次調査 28 号溝状遺構（東から）



3　同上　ウシ骨出土状況（南東から）

1　1 次調査 32 号溝状遺構土層断面（東から）

2　1 次調査 33 号溝状遺構土層断面（西から）

3　1 次調査 34 号溝状遺構土層断面（西から）

4　1 次調査 35 号溝状遺構土層断面（西から）

図版 14

1　1次調査1号大溝遺構（上空から）

2　同上土層断面（南から）

3　1次調査3a号大溝遺構土層断面（東から）

1　１次調査３ｂ号大溝遺構漆器出土状況（上から）

5　１次調査礎石出土状況（北西から）

2　同上　４号大溝遺構土層断面（西から）

6　１次調査礎石下杭検出状況（南から）

3　１次調査５・６号大溝遺構土層断面（北から）

4　１次調査礎石下栗石検出状況（東から）

7　１次調査基礎転用礎石検出状況（南から）

1　２次調査東半全景（北上空から）

2　２次調査西半全景（西上空から）

1　２次調査東半全景
（上空から）

2　２次調査西半全景
（上空から）

1　２次調査南西部第１遺構面
（南から）

２　２次調査中央南部第１遺構面
（南東から）

３　２次調査東半第２遺構面
（上空から）

1　2次調査1号土坑
（北から）

2　同上瓦出土状況
（北から）

3　2次調査3号土坑
（南西から）

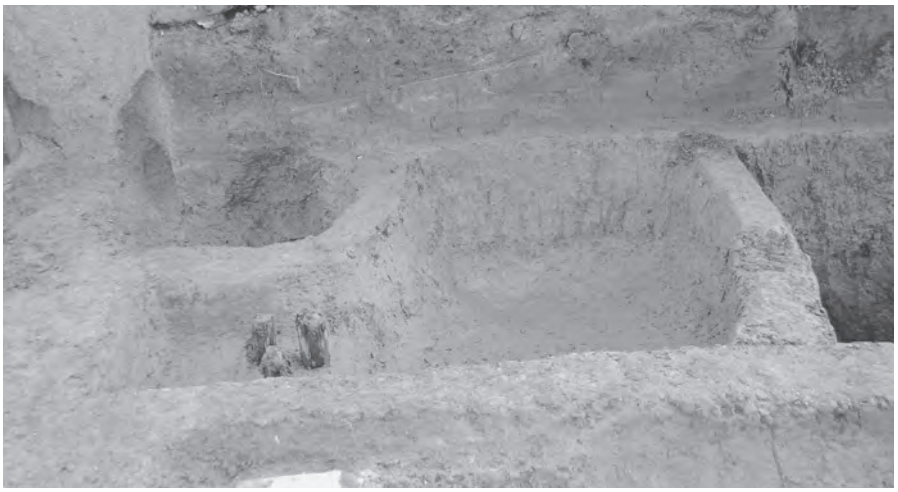
1　2 次調査 3 号土坑遺物出土状況
（南西から）

2　同上土層断面
（南から）

3　2 次調査 4 号土坑
（南から）

4　同上　土層断面
（北西から）

1　2次調査5号土坑
（上空から）

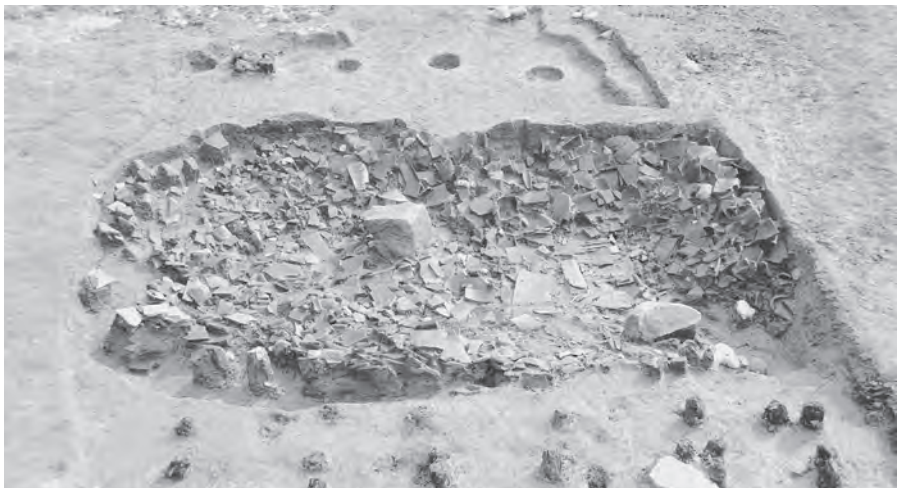


2　2次調査6号土坑
（北から）

3　2次調査7号土坑
（南から）

4　2次調査9号土坑上層
遺物出土状況（北西から）

図版 22



1　2 次調査 9 号土坑遺物出土状況
（西から）

2　同上（北から）

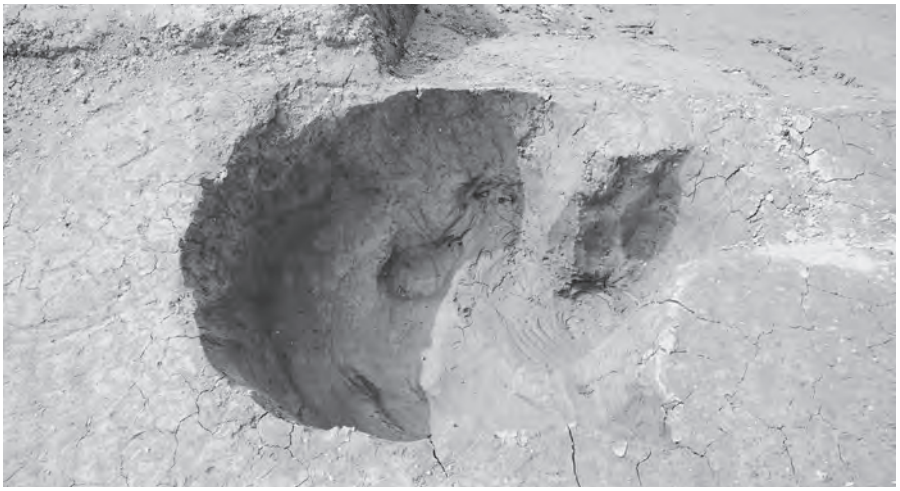
3　2 次調査 10 号土坑
（東から）

4　同上遺物出土状況
（南から）

1　2 次調査 11 号土坑
（東から）

2　2 次調査 13 号土坑
（東から）

3　2 次調査 15 号土坑
（東から）



4　2 次調査 16 号土坑
（東から）

1　２次調査１号大土坑土層断面
（北から）

２　２次調査２号大土坑
（上空から）

３　同上南側遺物出土状況
（東から）

1　２次調査２号大土坑土層断面
（北から）

2　同上杭列検出状況
（北東から）

3　同上土留板検出状況
（南西から）

4　２次調査埋甕遺構
（上から）

1　2 次調査 1 ・ 2 号溝状遺構土層断面（西から）

2　2 次調査 7 ・ 12 号溝状遺構土層断面（東から）

3　2 次調査 11 号溝状遺構（西から）

4　2 次調査柱 1（北から）

1　２次調査１号大溝遺構土層断面（南から）

２　２次調査３号大溝遺構（南から）

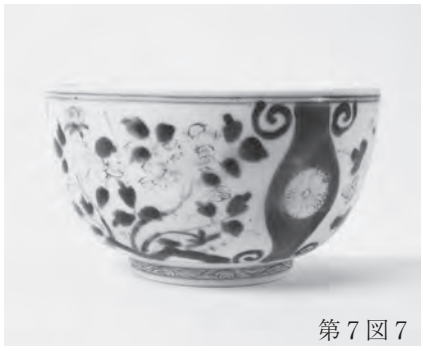
３　同上土層断面（南から）

４　２次調査礎石１（北から）

第 7 図 2

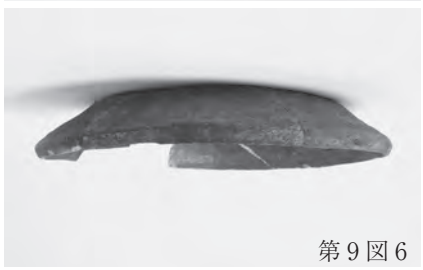
第 7 図 3

第 7 図 5


第 7 図 7

第 9 図 1

第 9 図 5

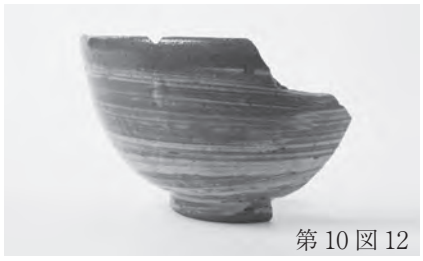

第 9 図 6

第 10 図 1

第 10 図 2

第 10 図 6

第 10 図 11


第 10 図 12

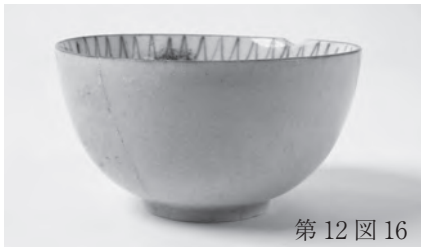
第 10 図 15

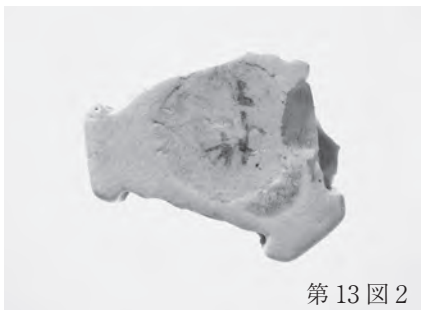
第 10 図 18

第 11 図 7

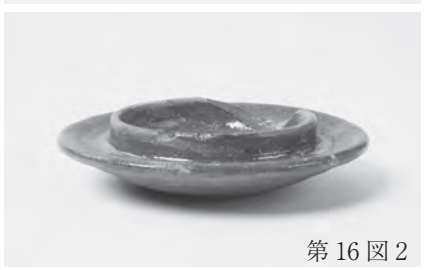
第 11 図 9

第 12 図 8


第 12 図 16


第 13 図 2

第 14 図 1


第 16 図 2

本町遺跡出土遺物 1

第 16 図 4

第 16 図 11

第 16 図 13

第 16 図 16

第 19 図 5

第 20 図 4

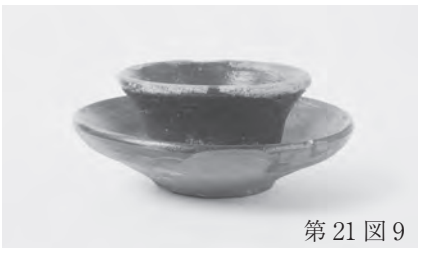
第 20 図 5

第 21 図 2

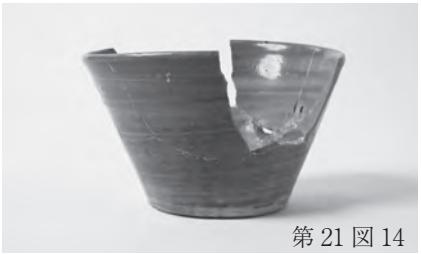
第 21 図 3

第 21 図 4

第 21 図 8


第 21 図 9

第 21 図 13

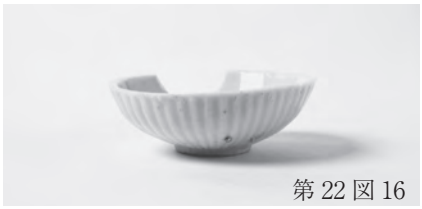

第 21 図 14

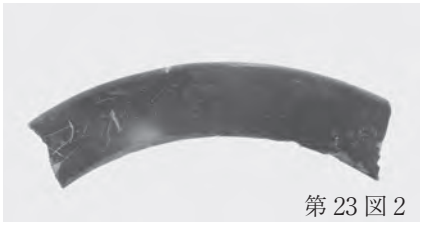
第 21 図 17

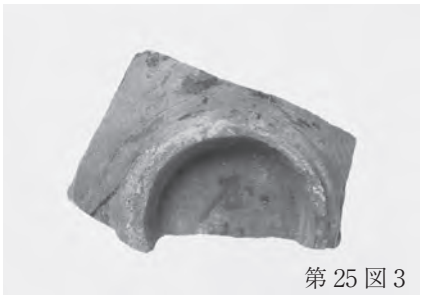
第 22 図 1

第 22 図 3

第 22 図 12

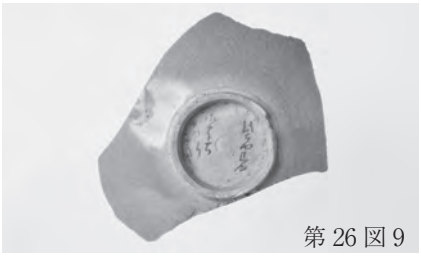

第 22 図 16


第 23 図 2


第 25 図 3

第 27 図 2

本町遺跡出土遺物 2

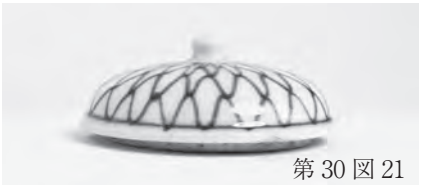

第 26 図 9

第 28 図 9

第 30 図 6

第 30 図 7

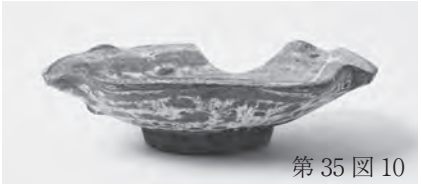
第 30 図 16


第 30 図 21

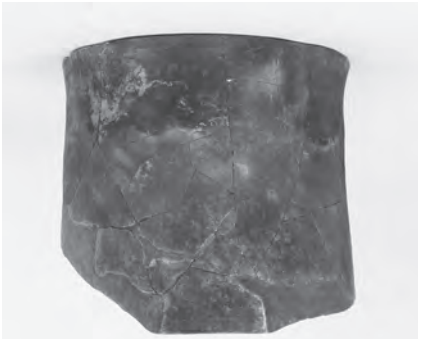
第 35 図 1

第 35 図 2

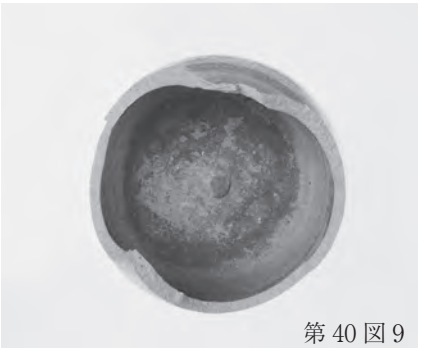
第 35 図 5


第 35 図 10

第 35 図 12


第 38 図 5

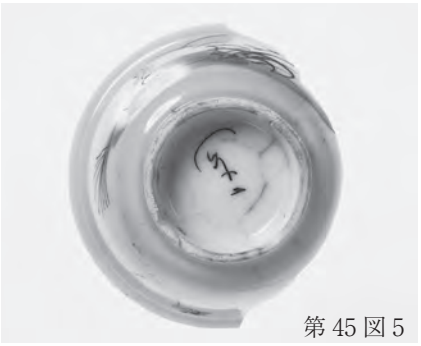
第 38 図 6


第 40 図 9

第 41 図 3

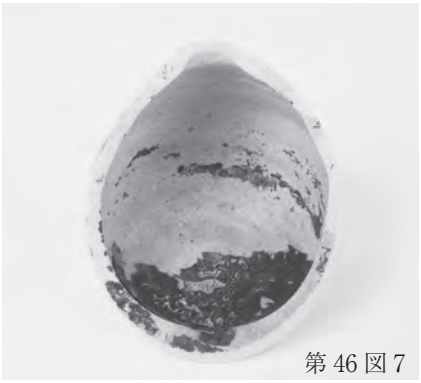
第 44 図 4

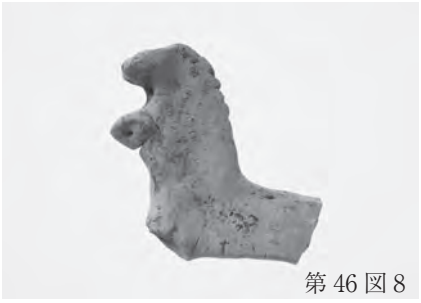
第 44 図 17

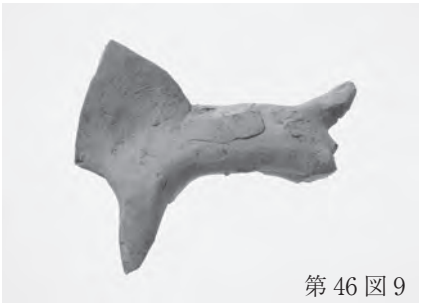

第 45 図 5

第 45 図 12

本町遺跡出土遺物 3


第 46 図 7


第 46 図 8


第 46 図 9

第 47 図 9

第 47 図 18

第 48 図 11

第 48 図 26

第 50 図 1

第 50 図 2

第 50 図 3

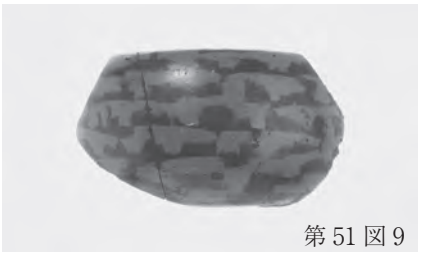
第 50 図 4

第 50 図 5

第 51 図 1

第 51 図 2

第 51 図 4

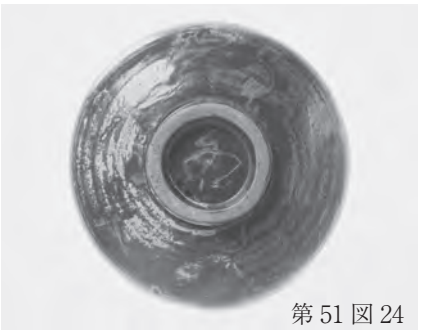

第 51 図 9

第 51 図 11

第 51 図 13

第 51 図 16

第 51 図 19


第 51 図 24

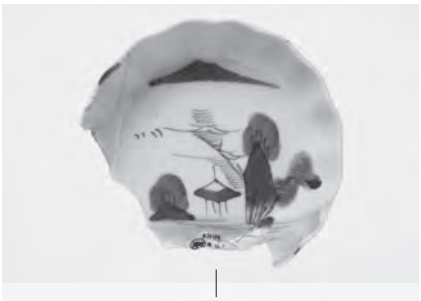
第 51 図 28

第 52 図 8

第 55 図 4

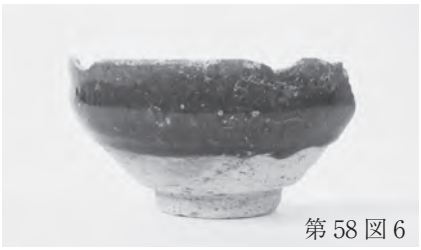
本町遺跡出土遺物 4

第 54 図 29



第 53 図 13

第 58 図 4


第 58 図 6

第 58 図 10

第 58 図 11

第 58 図 12

第 58 図 19

第 58 図 20

第 58 図 26

第 58 図 27

第 58 図 28

第 58 図 29

第 58 図 32

第 59 図 10

第 59 図 11

第 60 図 16

第 61 図 1

第 65 図 4

第 65 図 8

第 65 図 10

第 65 図 11

本町遺跡出土遺物 5

第 65 図 13

第 66 図 3

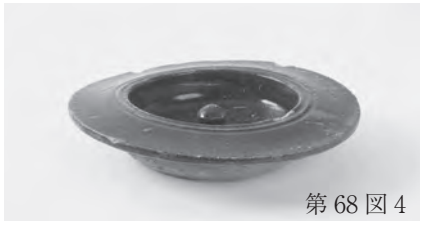
第 66 図 11

第 66 図 12

第 67 図 7

第 67 図 10

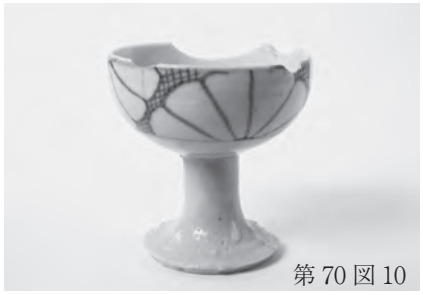
第 67 図 14

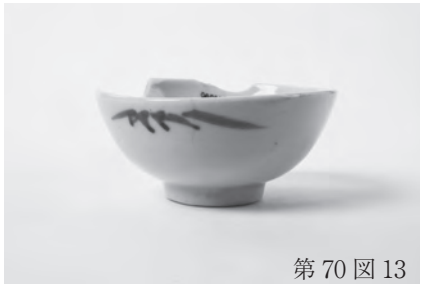

第 68 図 4

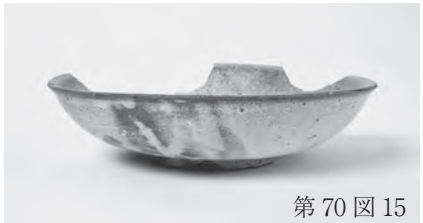
第 69 図

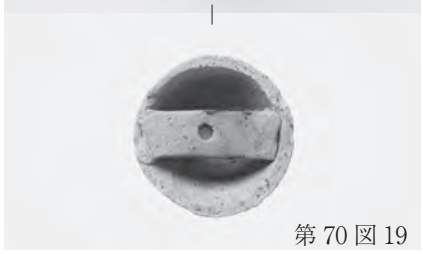
第 70 図 4

第 70 図 8


第 70 図 10


第 70 図 13


第 70 図 15


第 70 図 19

第 71 図 5

第 72 図 1

第 72 図 2

第 72 図 5

第 72 図 8

第 72 図 10

第 74 図 3

本町遺跡出土遺物 6

第 75 図 5

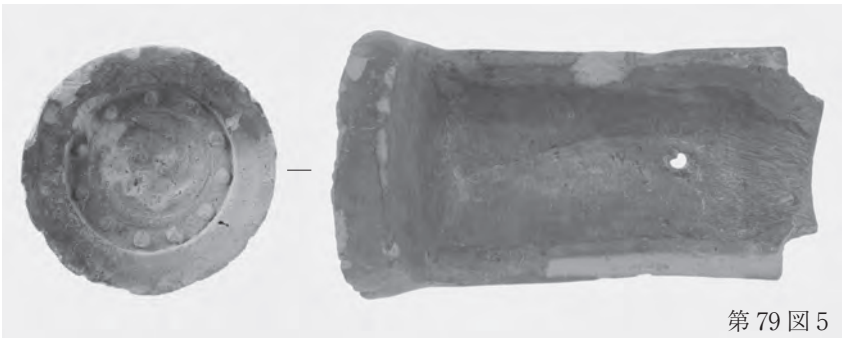
第 75 図 8

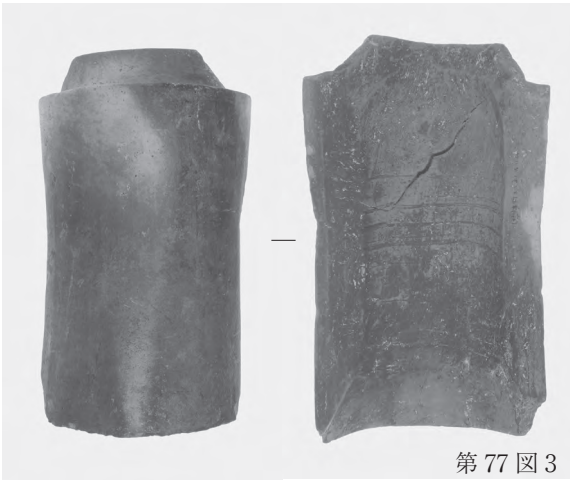
第 78 図 2

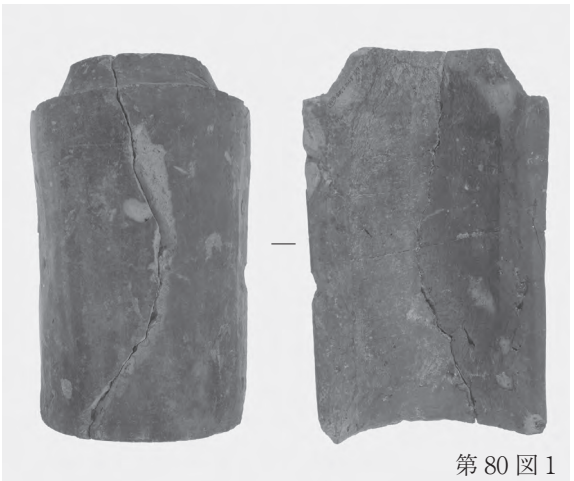
第 78 図 13

第 79 図 1

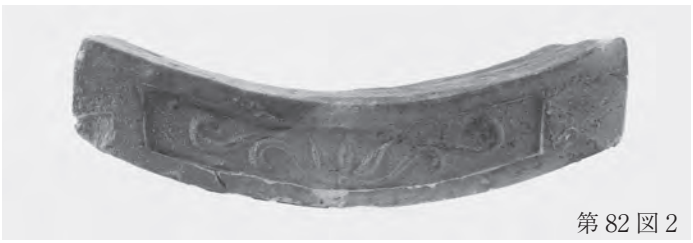
第 78 図 10


第 79 図 5


第 77 図 3


第 80 図 1

第 82 図 1


第 82 図 2

第 82 図 3

第 82 図 4

本町遺跡出土遺物 7

第 82 図 7

第 82 図 13

第 82 図 11

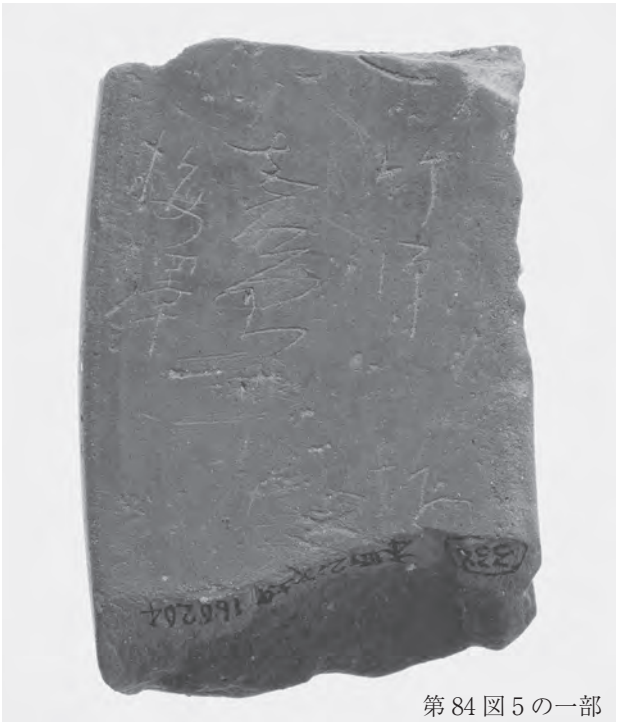
第 83 図 4

第 85 図 1

第 84 図 3

第 83 図 8

第 83 図 9



第 84 図 5 の一部

第 84 図 5

本町遺跡出土遺物 8

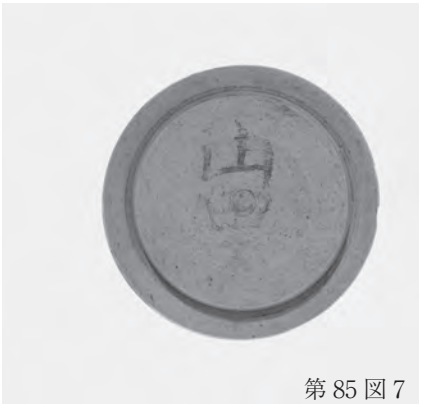
第 84 図 4

第 86 図 11

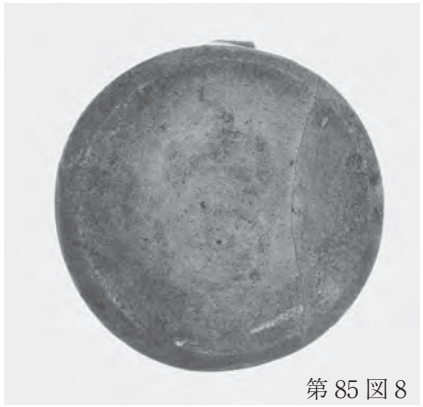
第 86 図 12

第 86 図 13

第 86 図 9



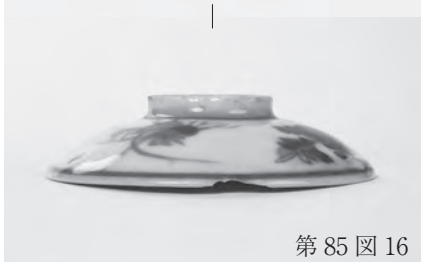
第 85 図 7



第 85 図 8

第 85 図 12

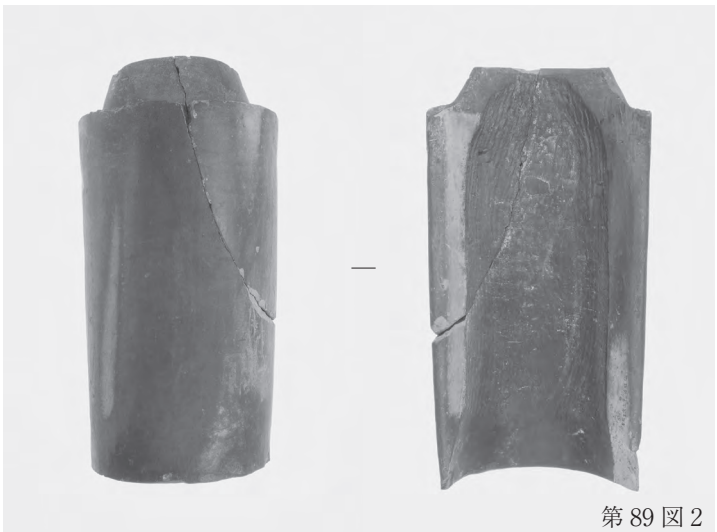
第 86 図 8



第 85 図 16

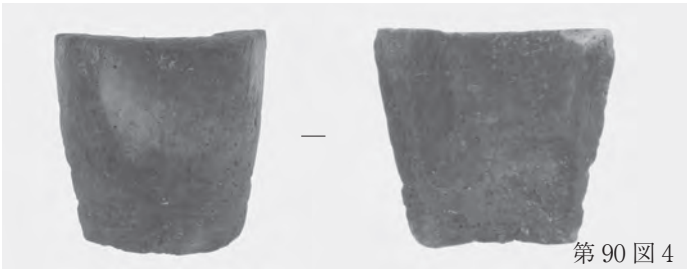
第 85 図 9

第 85 図 19



第 89 図 2

本町遺跡出土遺物 9


第 90 図 4

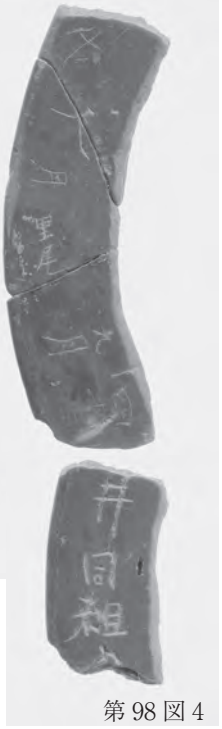
第 92 図 3

第 91 図 3

第 91 図 9

第 92 図 4

第 98 図 3


第 98 図 4

「嘉永」銘部分

第 92 図 5

本町遺跡出土遺物 10

第 98 図 5

第 98 図 6

第 102 図 3

第 99 図 4

第 99 図 16

本町遺跡出土遺物 11

第 102 図 4

本町遺跡出土遺物 12

第 102 図 5

第 102 図 1

第 103 図 3

第 103 図 13

第 106 図 7

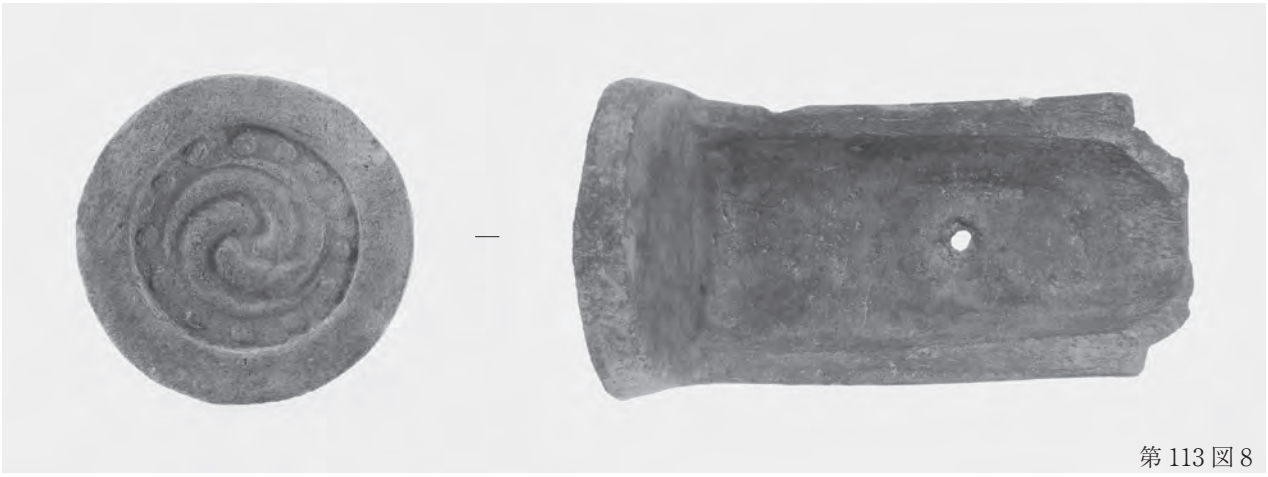
第 106 図 5・6

第 107 図 3

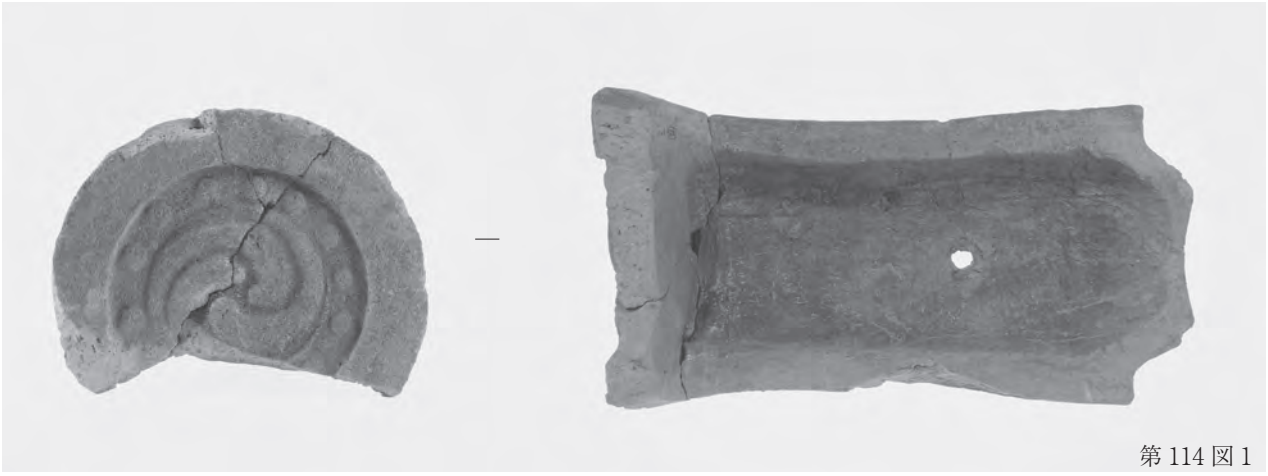
第 108 図 12

第 116 図 4

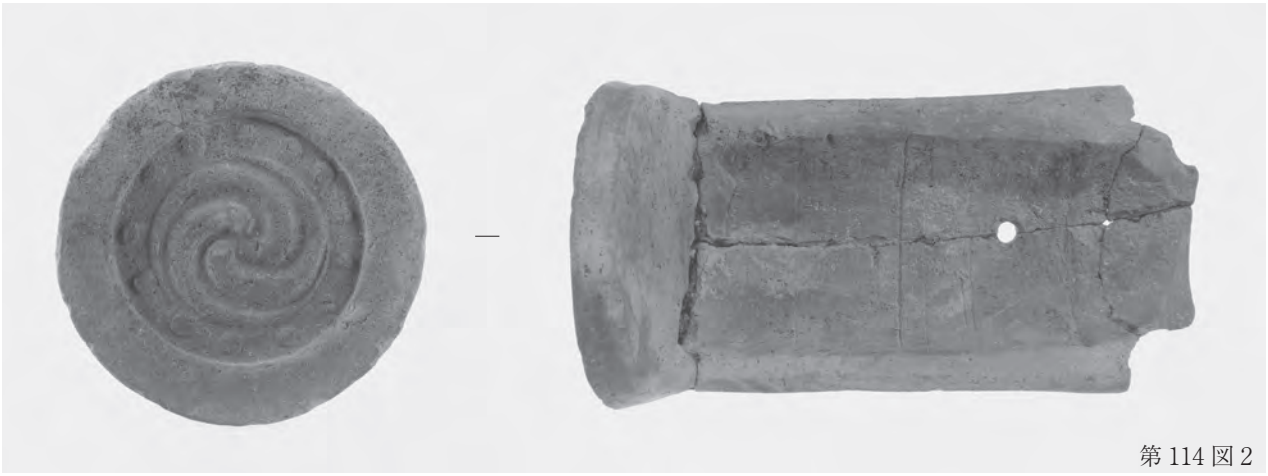
本町遺跡出土遺物 13



第 113 図 8

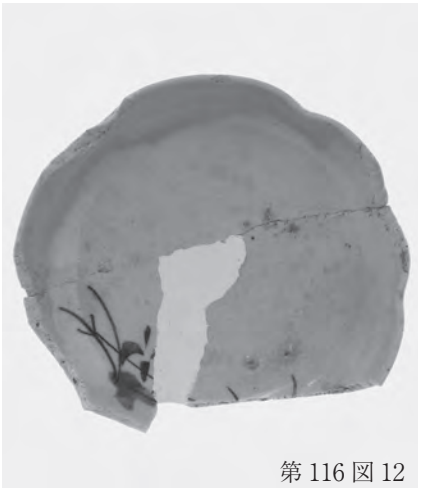


第 114 図 1



第 114 図 2

第 116 図 11

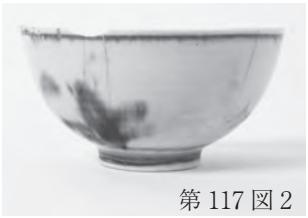


第 116 図 12

第 116 図 14

本町遺跡出土遺物 12

第 116 図 17


第 117 図 2

第 117 図 7

第 116 図 15

第 118 図 1

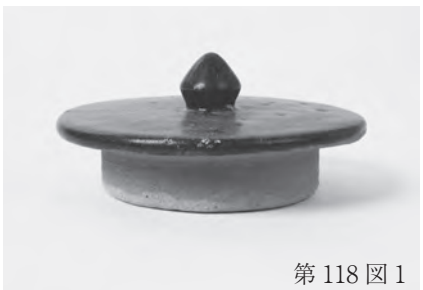
第 118 図 2

第 118 図 3

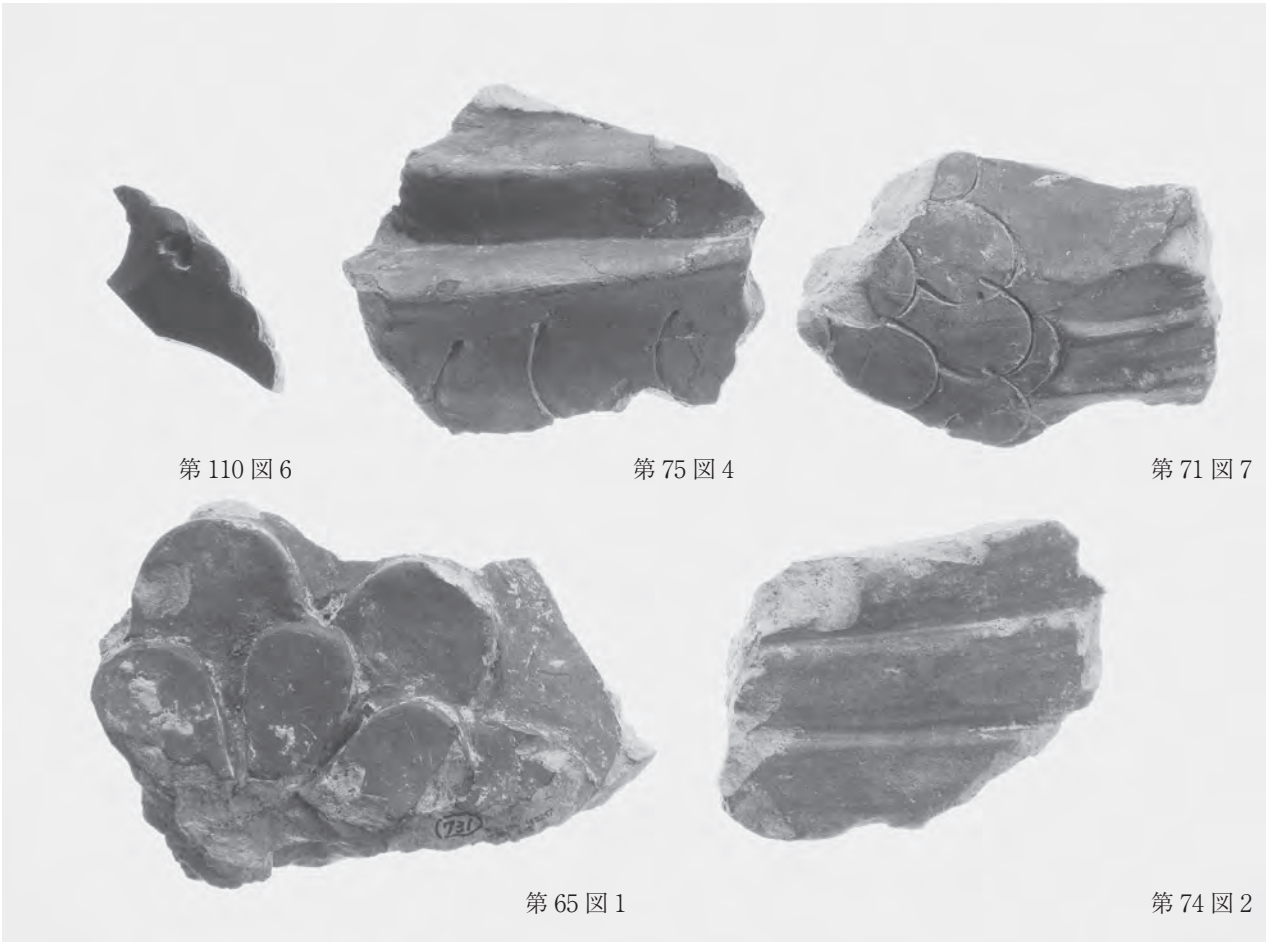
第 118 図 4

第 119 図 6

第 118 図 5


第 118 図 1

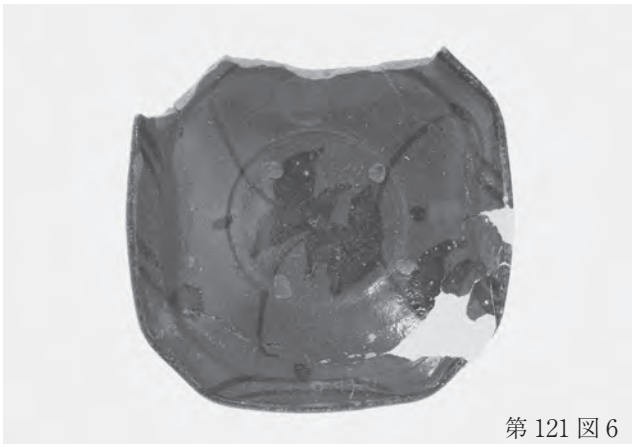
本町遺跡出土遺物 15



第 110 図 6　第 75 図 4　第 71 図 7

第 65 図 1　第 74 図 2

第 120 図 13



第 121 図 6

第 122 図 2

第 123 図 1

本町遺跡出土遺物 16

第 124 図 1

第 124 図 2

第 124 図 3

第 124 図 4

第 124 図 5

第 124 図 6

第 124 図 7

第 124 図 8

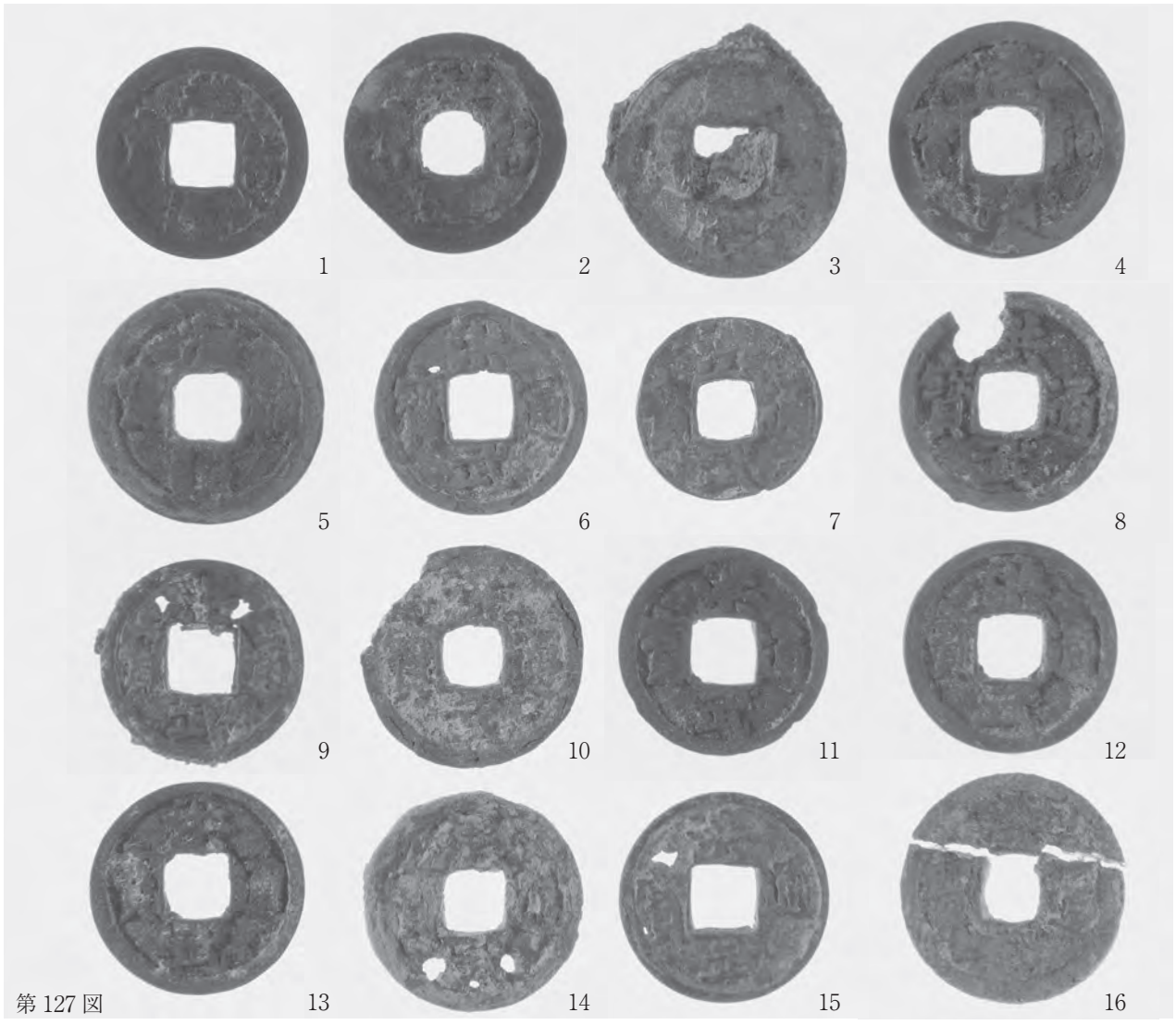
第 124 図 12

第 124 図 13

第 124 図 9

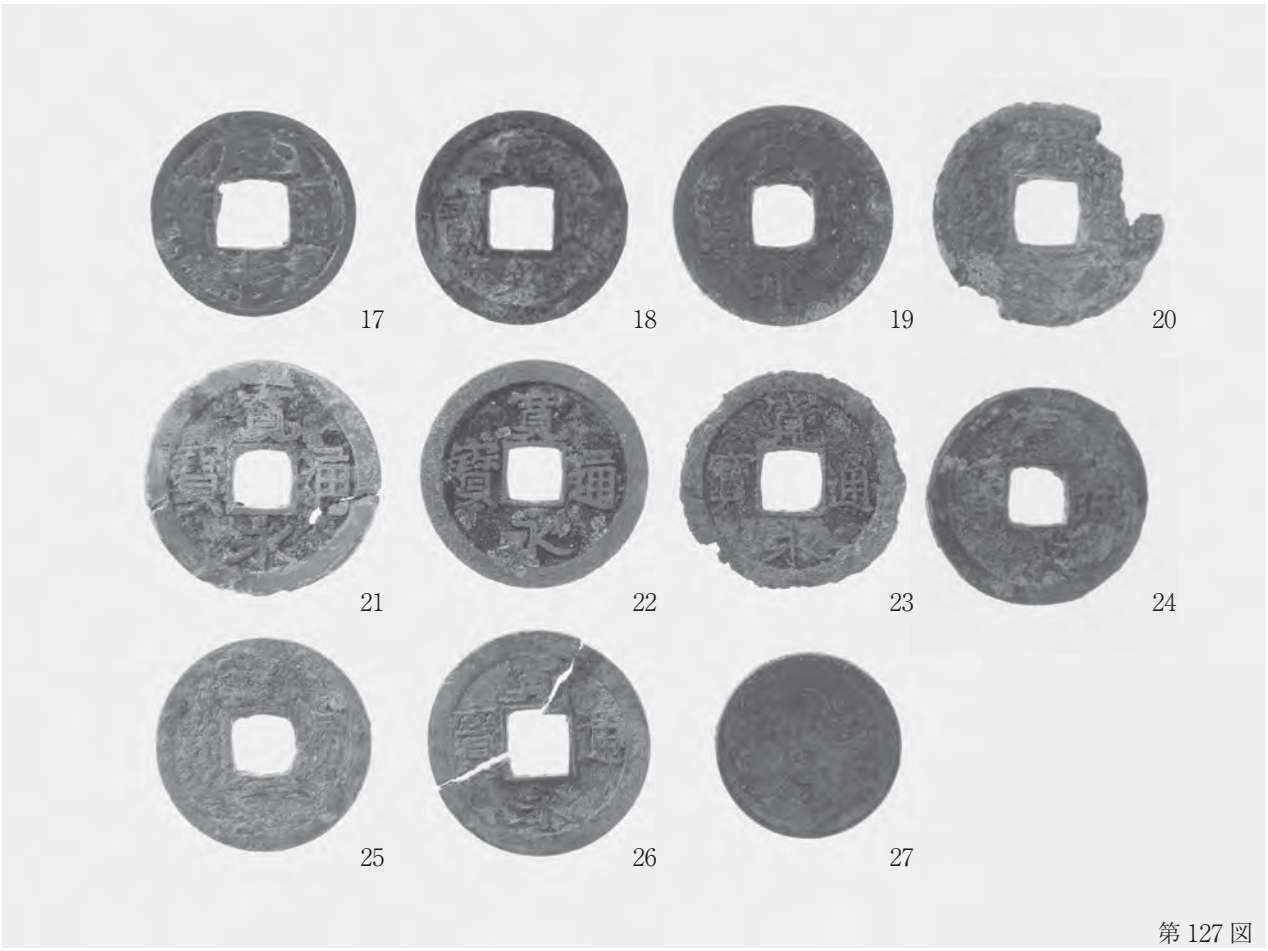
第 124 図 10

第 124 図 11

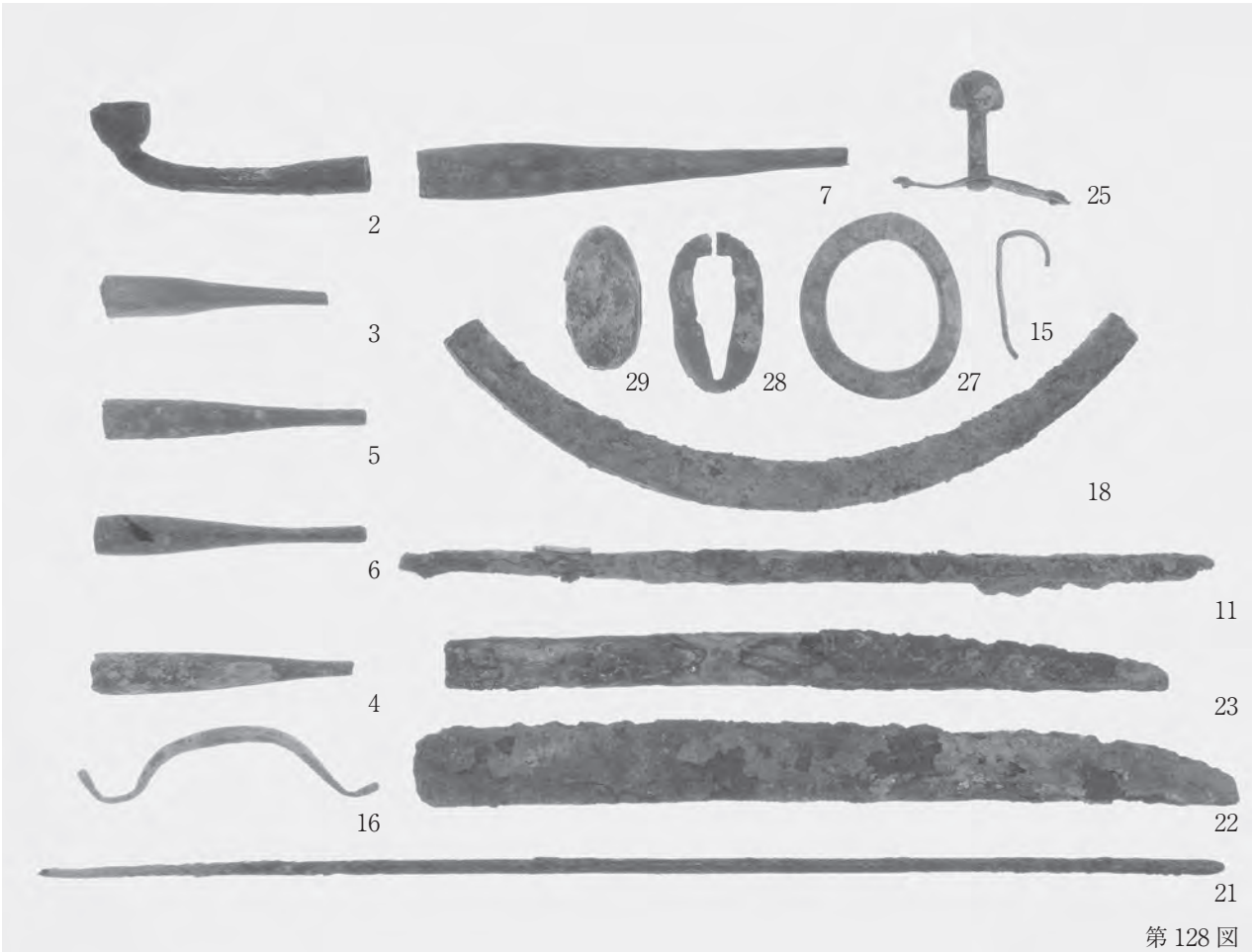


第 127 図

本町遺跡出土遺物 17

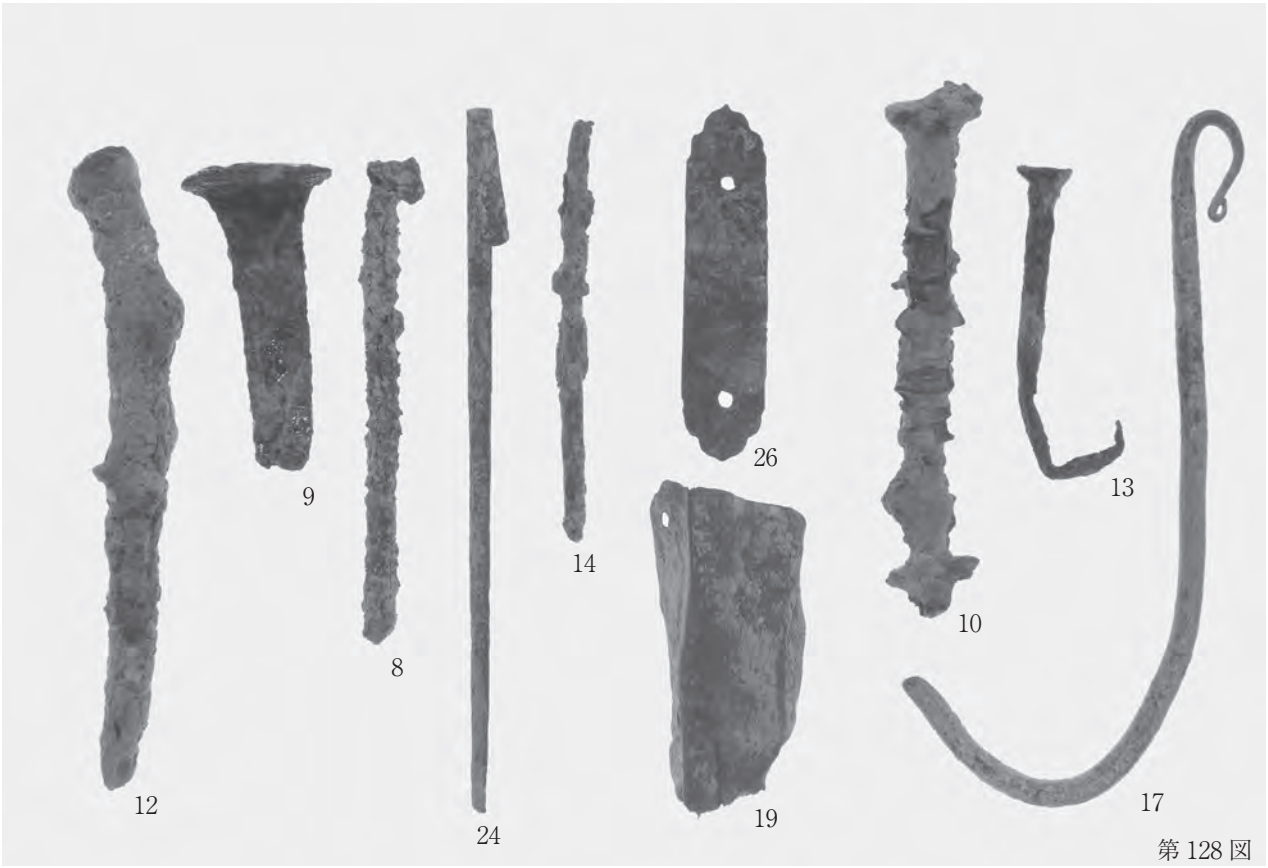


第 127 図

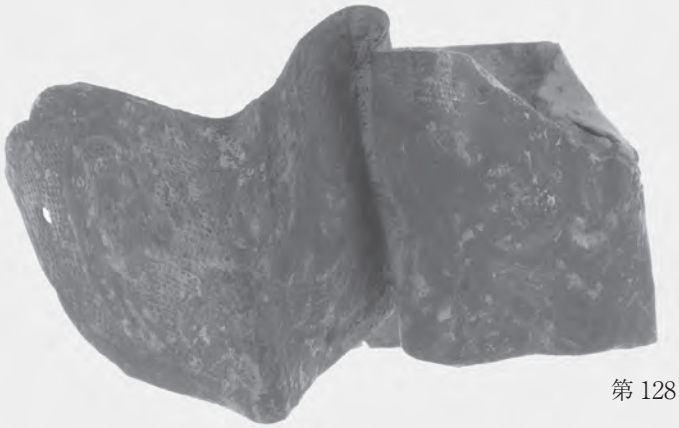


第 128 図

本町遺跡出土遺物 18

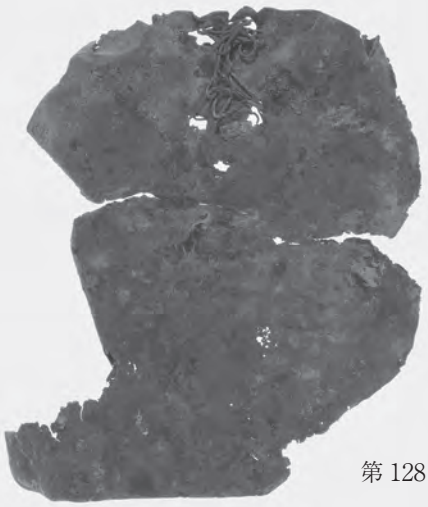


第 128 図



第 128 図 20

2 次横基礎 3



第 128 図 30

本町遺跡出土遺物 19

第 113 図 13

第 56 図 4

第 39 図 8

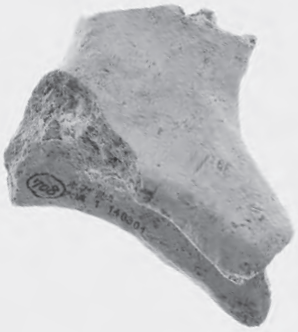
第 75 図 10

第 70 図 7

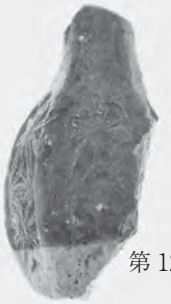
第 103 図 19

第 65 図 3

第 65 図 2


第 64 図 11

第 44 図 18


第 123 図 3

第 36 図 21

第 39 図 14

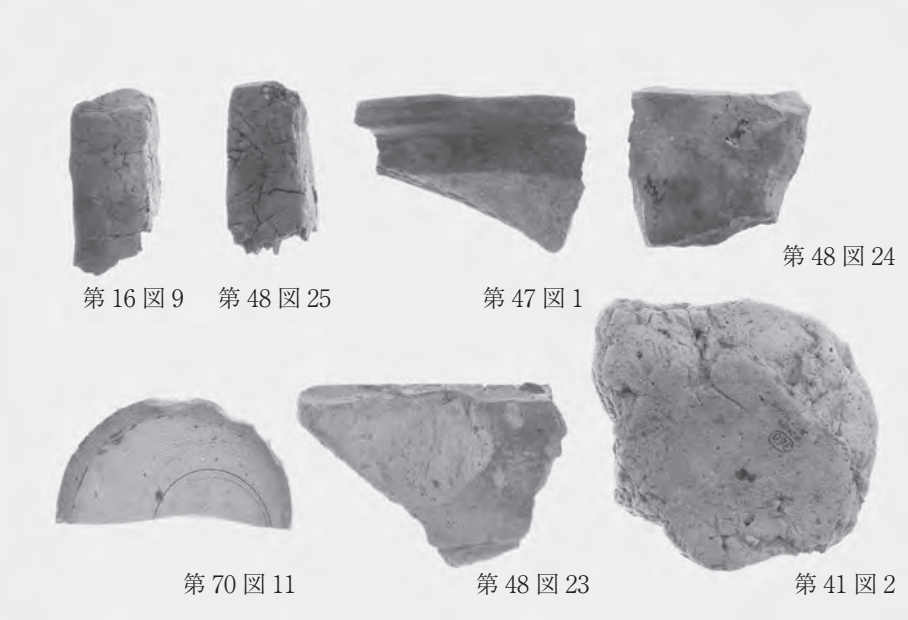
第 121 図 4

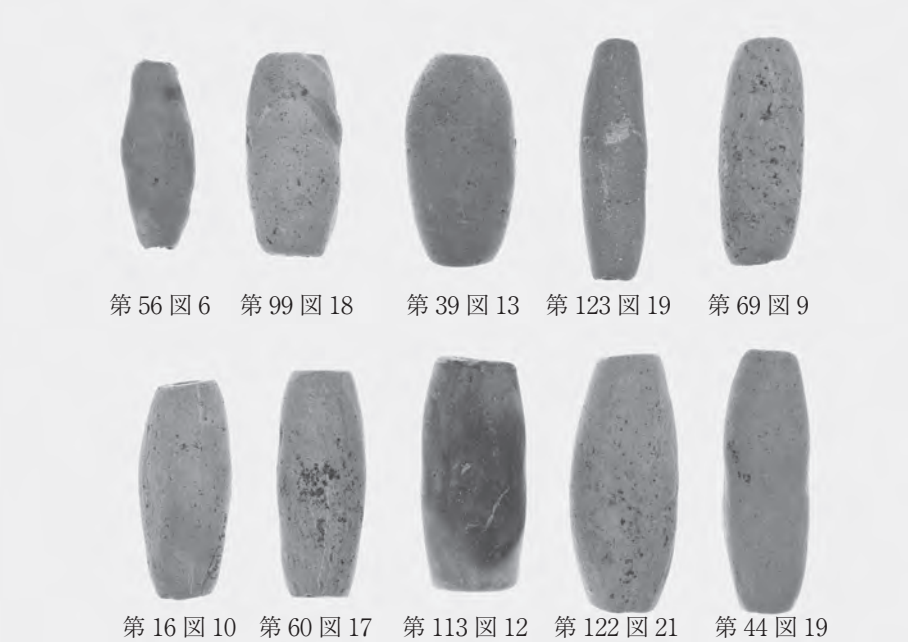
第 59 図 9

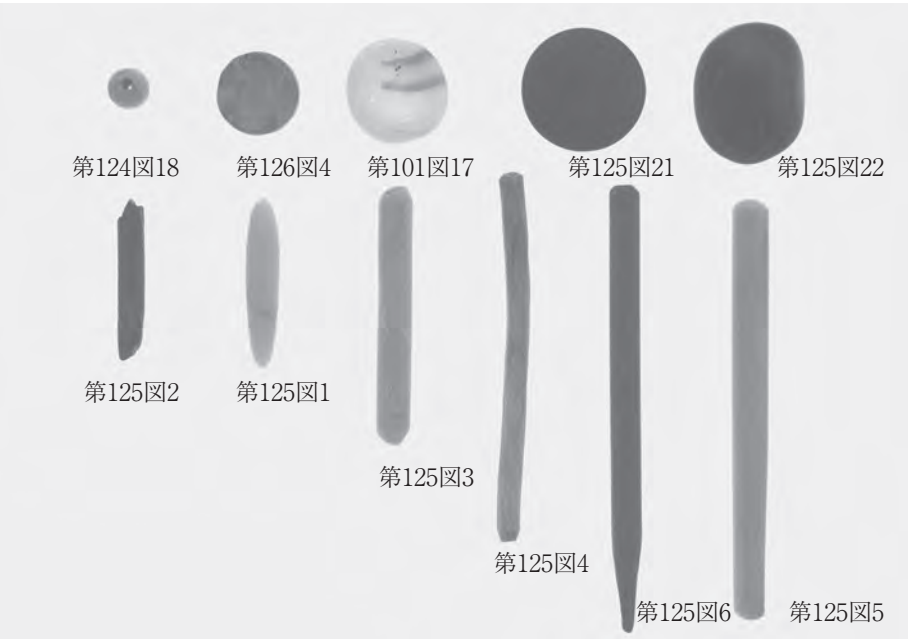
第 14 図 18

第 49 図 9

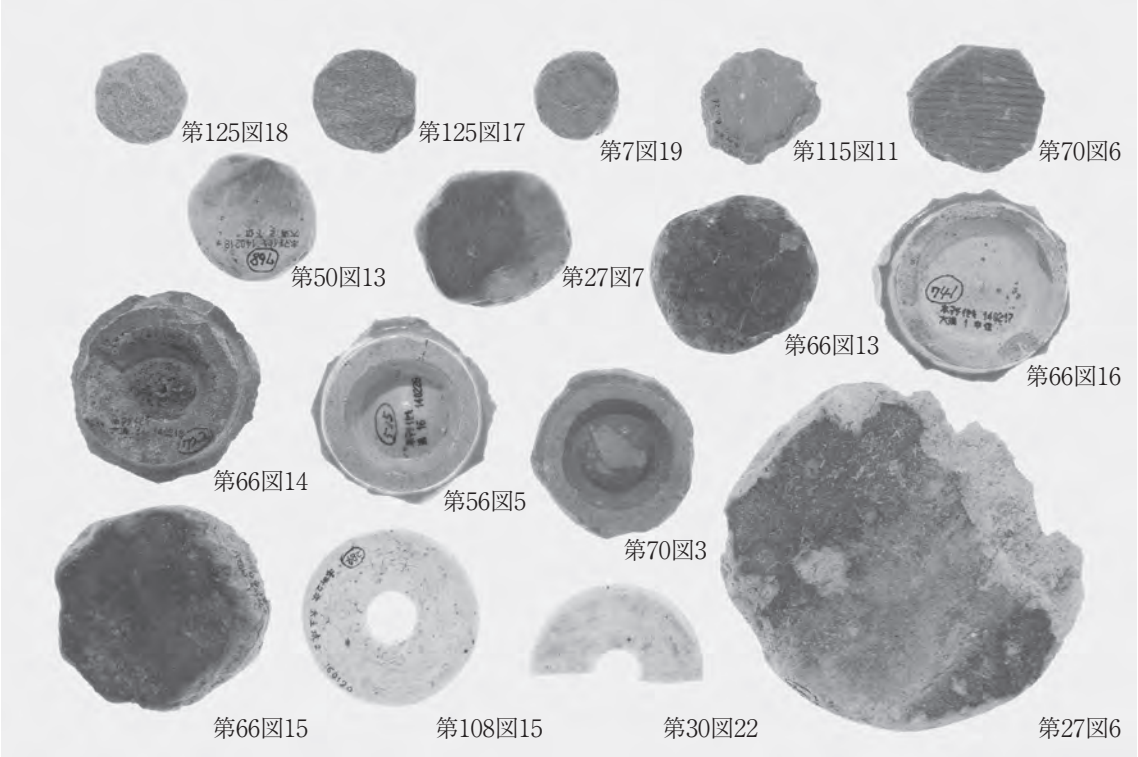
本町遺跡出土遺物 20

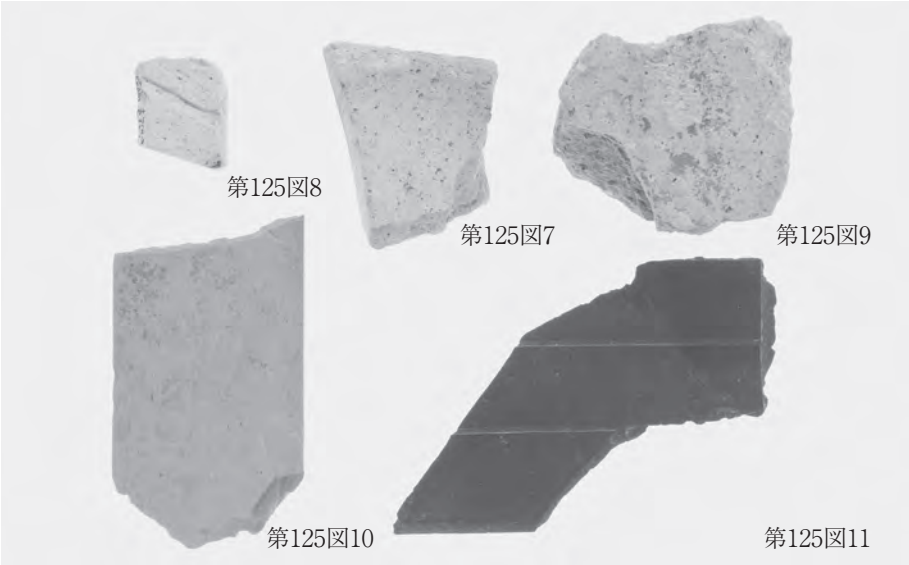

第 16 図 9
第 48 図 25
第 47 図 1
第 48 図 24
第 70 図 11
第 48 図 23
第 41 図 2

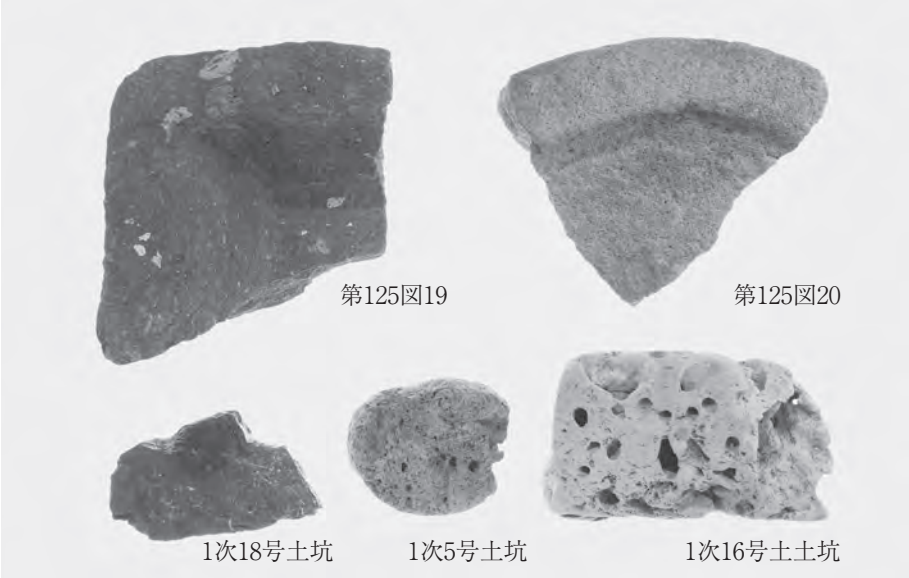

第 56 図 6
第 99 図 18
第 39 図 13
第 123 図 19
第 69 図 9
第 16 図 10
第 60 図 17
第 113 図 12
第 122 図 21
第 44 図 19


第124図18
第126図4
第101図17
第125図21
第125図22
第125図2
第125図1
第125図3
第125図4
第125図6
第125図5

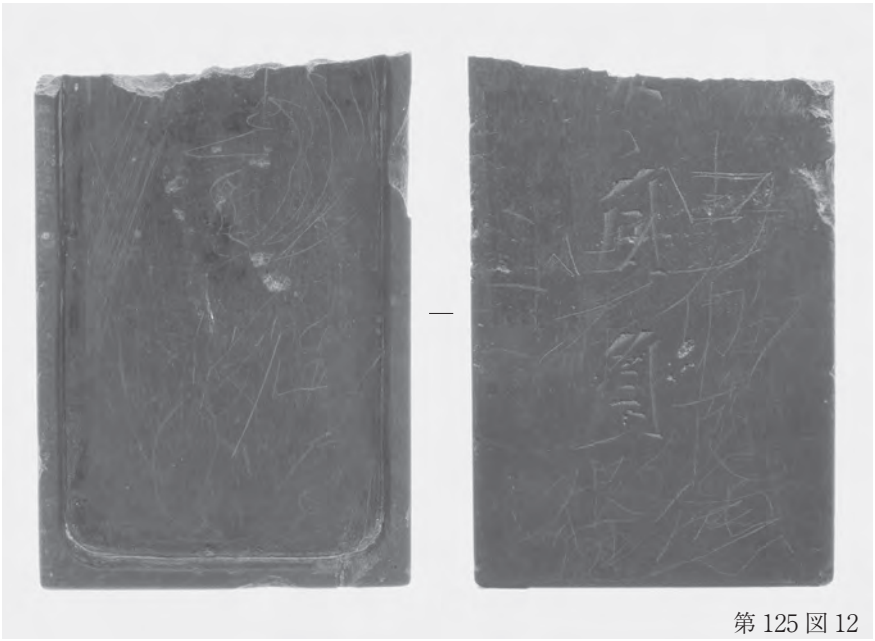
本町遺跡出土遺物 21


第125図18
第125図17
第7図19
第115図11
第70図6
第50図13
第27図7
第66図13
第66図16
第66図14
第56図5
第70図3
第66図15
第108図15
第30図22
第27図6


第125図8
第125図7
第125図9
第125図10
第125図11


第125図19
第125図20
1次18号土坑
1次5号土坑
1次16号土土坑

本町遺跡出土遺物 22

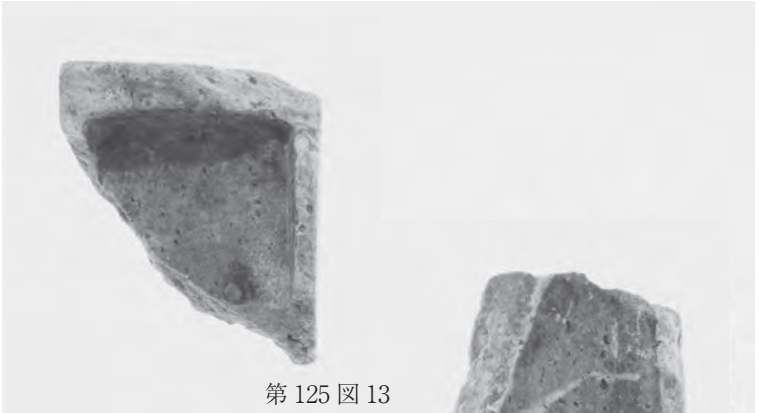


第 125 図 12

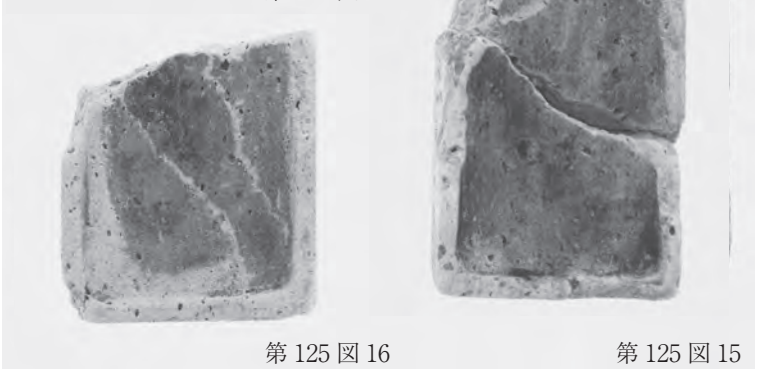
第 126 図 1

第 125 図 14

第 126 図 2



第 125 図 13



第 125 図 16　第 125 図 15

第 126 図 3

本町遺跡出土遺物 23

第 129 図 11

第 127 図 16

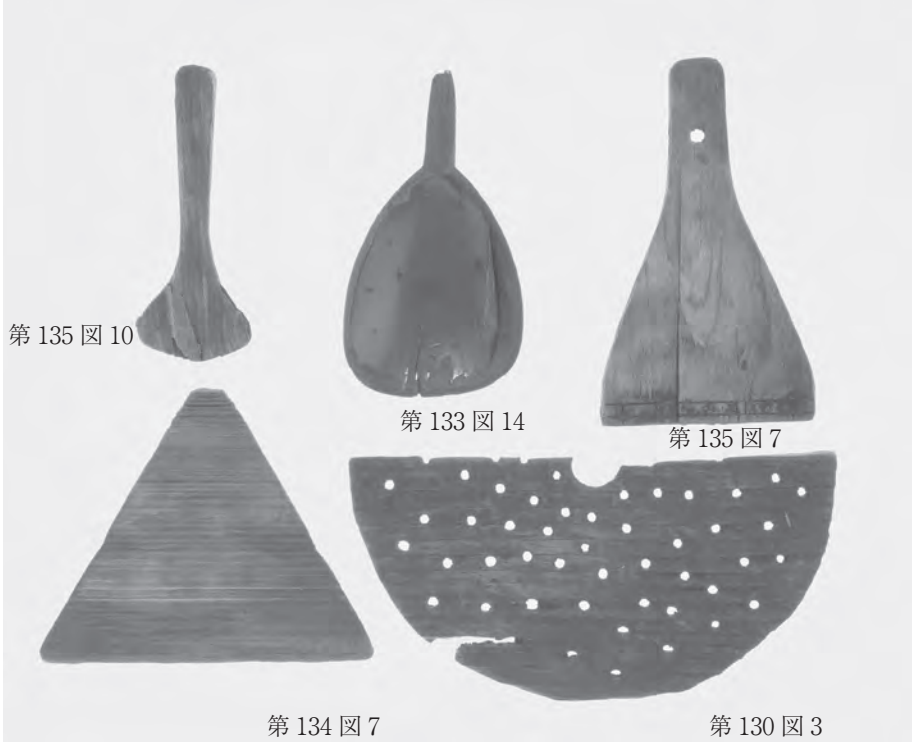
第 129 図 14

第 129 図 7

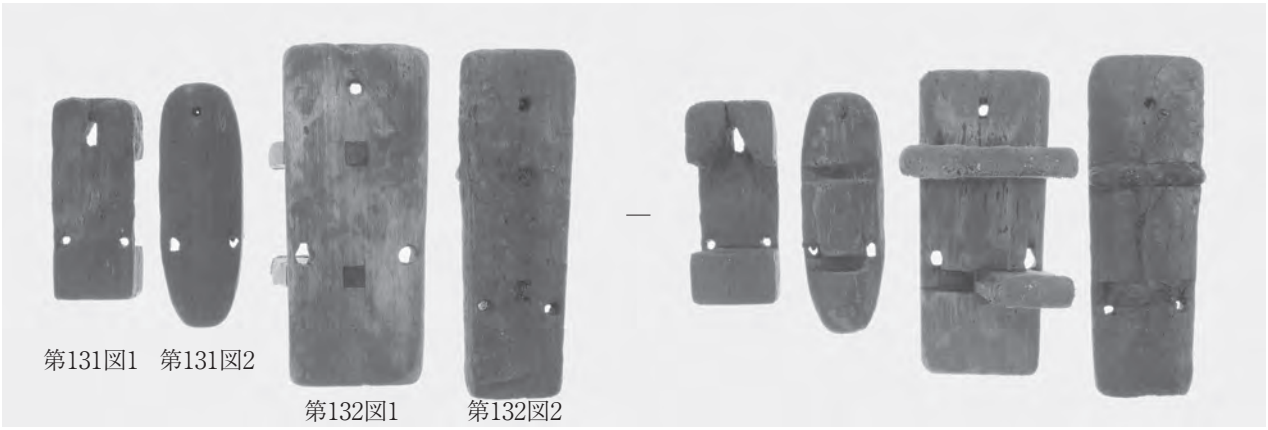
第 29 図 5

第 129 図 5

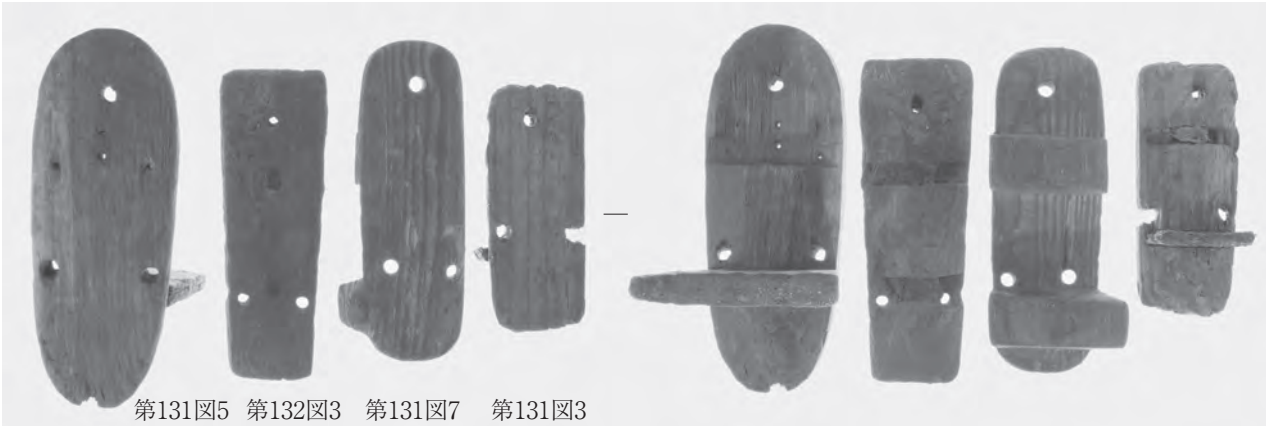
第 135 図 9


第 135 図 10
第 133 図 14
第 135 図 7
第 134 図 7
第 130 図 3

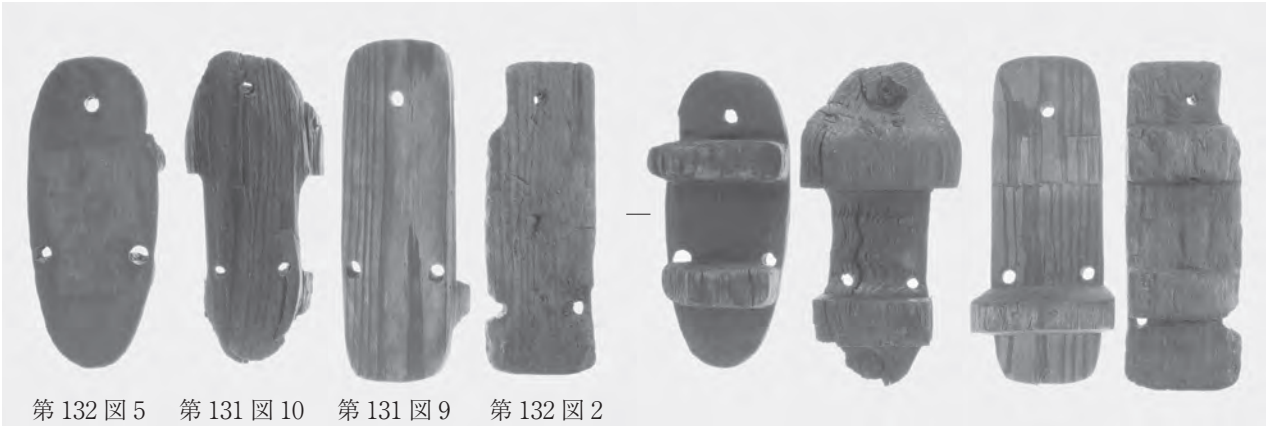
本町遺跡出土遺物 24



第131図1　第131図2　第132図1　第132図2

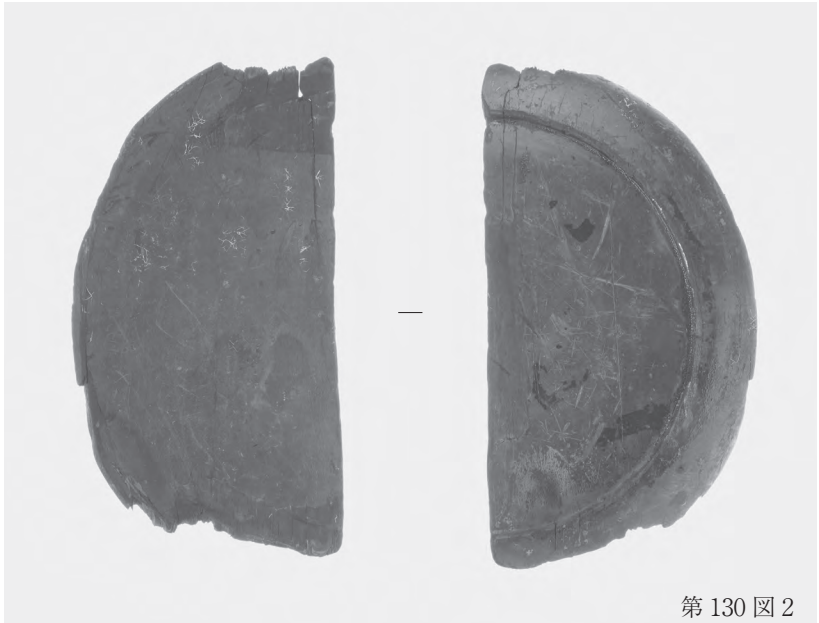


第131図5　第132図3　第131図7　第131図3

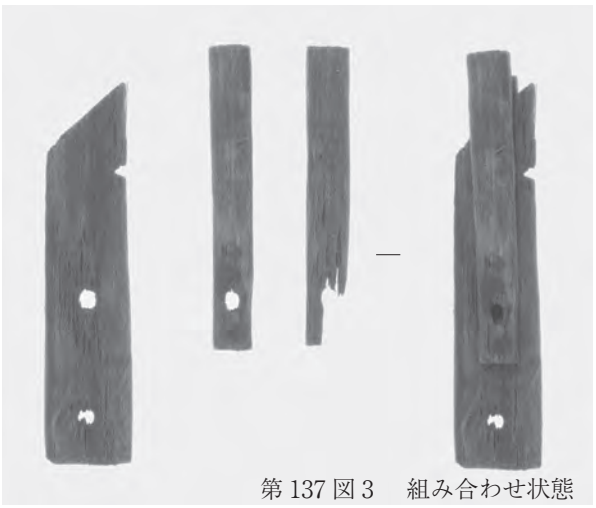


第 132 図 5　第 131 図 10　第 131 図 9　第 132 図 2

第 133 図 9　第 134 図 8



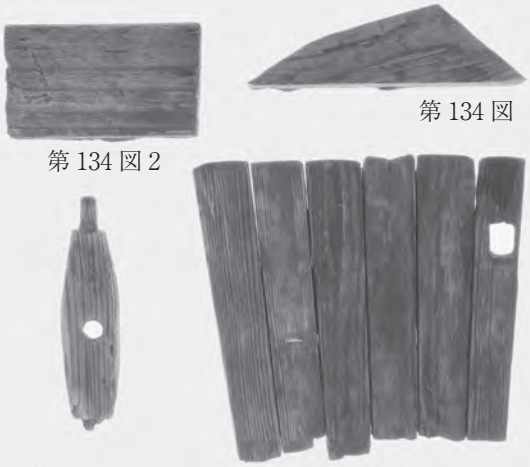
第 130 図 2



第 137 図 3　組み合わせ状態

第137図2

赤外線写真



第 134 図 2

第 134 図

第 132 図 9

第 135 図 1

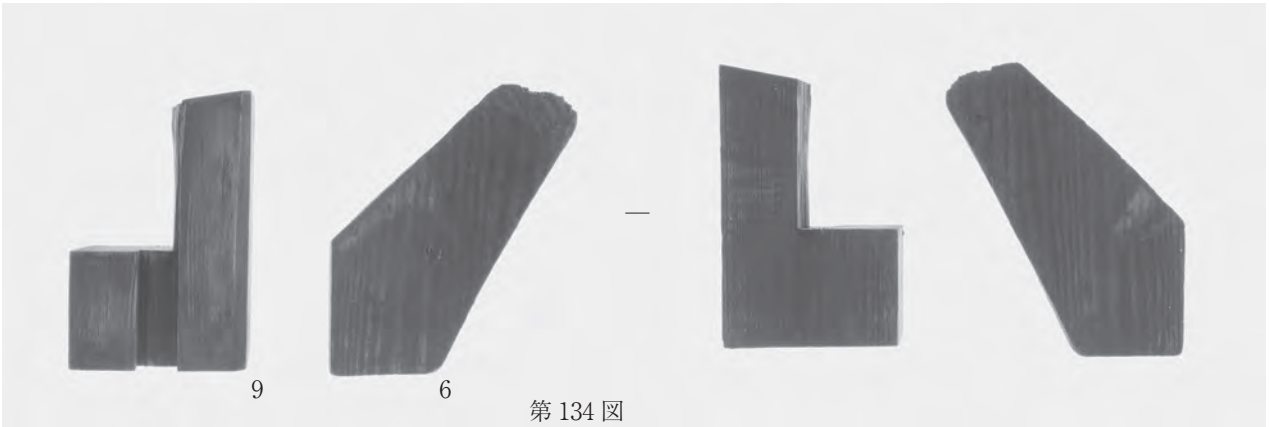
第135図6 第135図3

第132図7

第135図4

第135図2

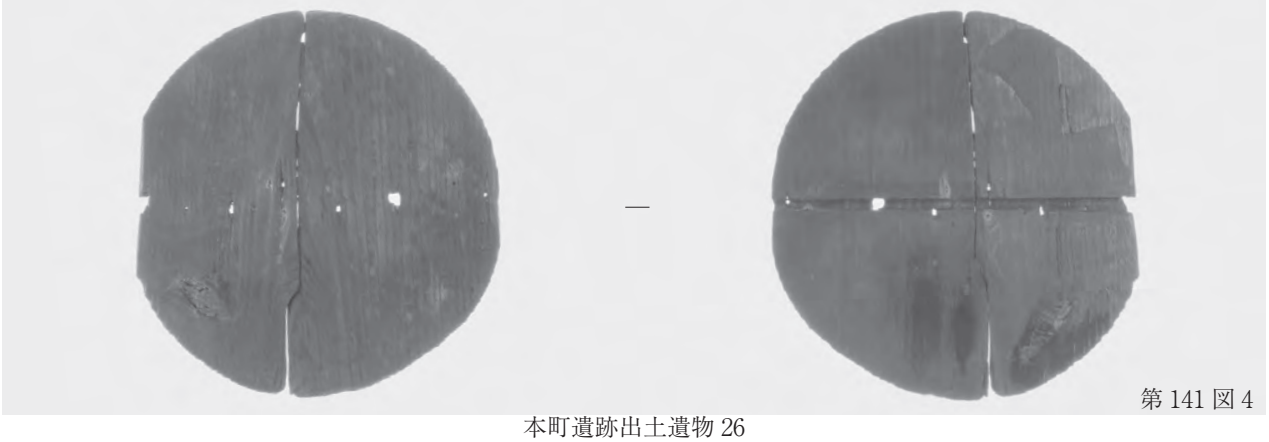
第135図5



9

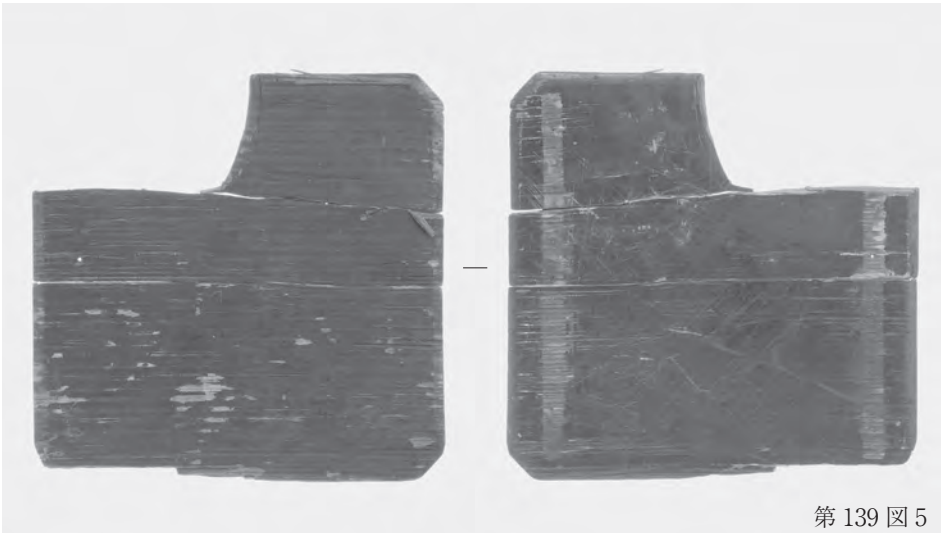
6

第 134 図

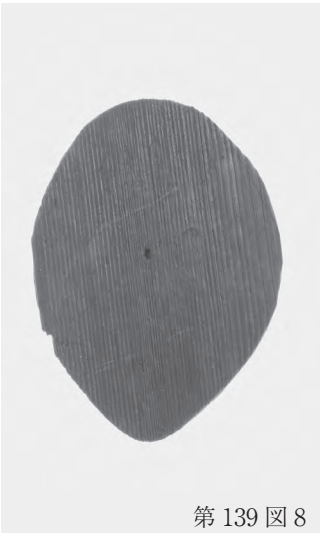


第 141 図 4

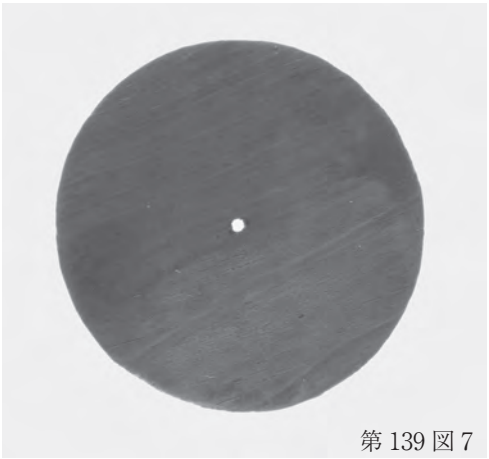
本町遺跡出土遺物 26



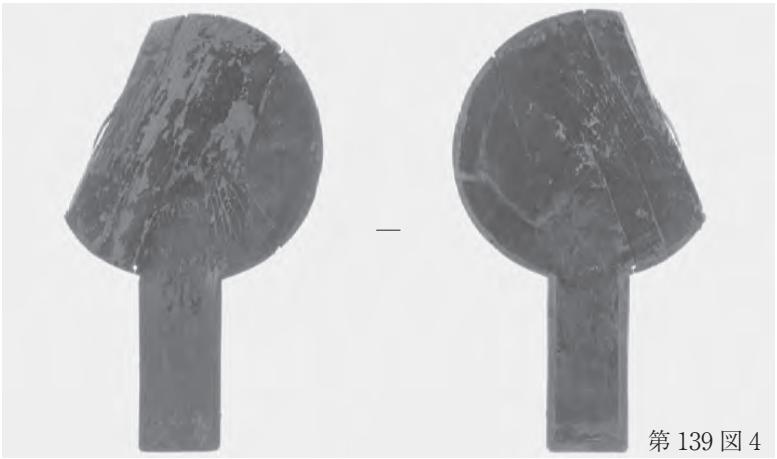
第 139 図 5



第 139 図 8

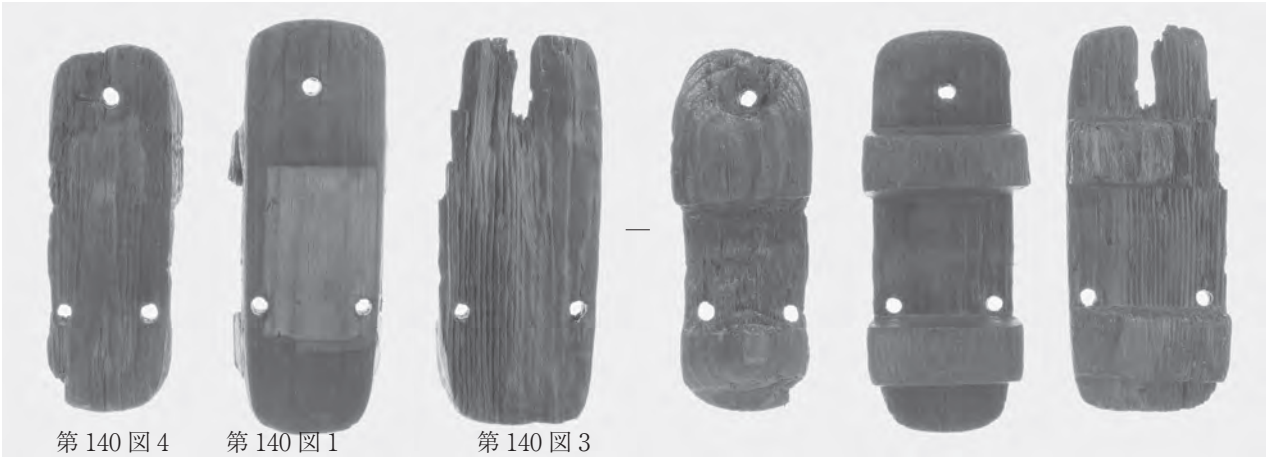


第 139 図 7



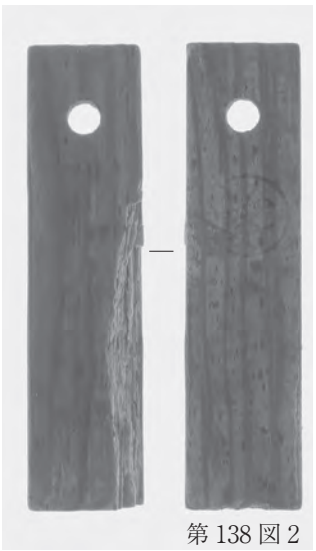
第 139 図 4

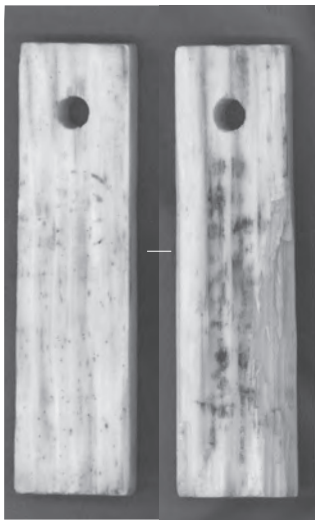
第 140 図 6　第 140 図 5　第 140 図 2



第 140 図 4　第 140 図 1　第 140 図 3

本町遺跡出土遺物 27


第 138 図 2

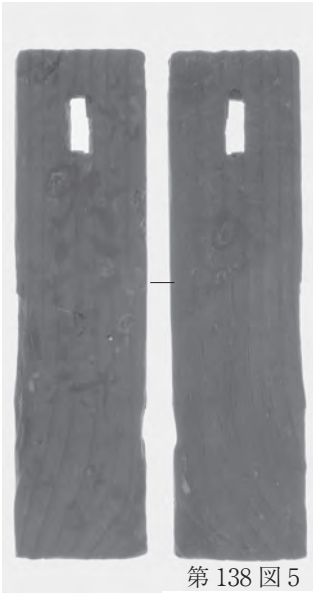

赤外線写真

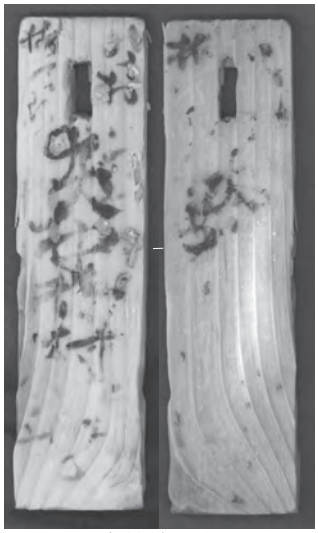
第 138 図 1

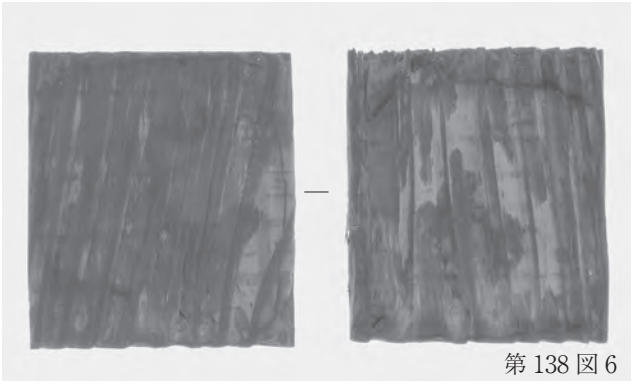
赤外線写真

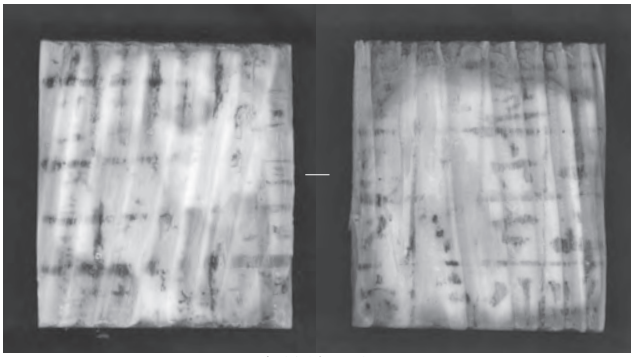
第 138 図 5

赤外線写真


第 138 図 5


赤外線写真


第 138 図 6


赤外線写真

第 138 図 4

赤外線写真

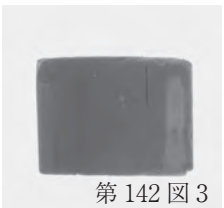
本町遺跡出土遺物 28

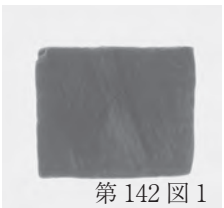
第 141 図 8

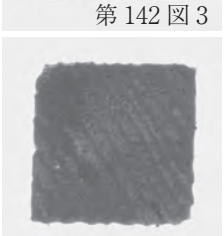
赤外線写真

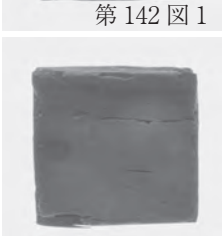
第 136 図 7

赤外線写真


第 142 図 3


第 142 図 1


第 142 図 4

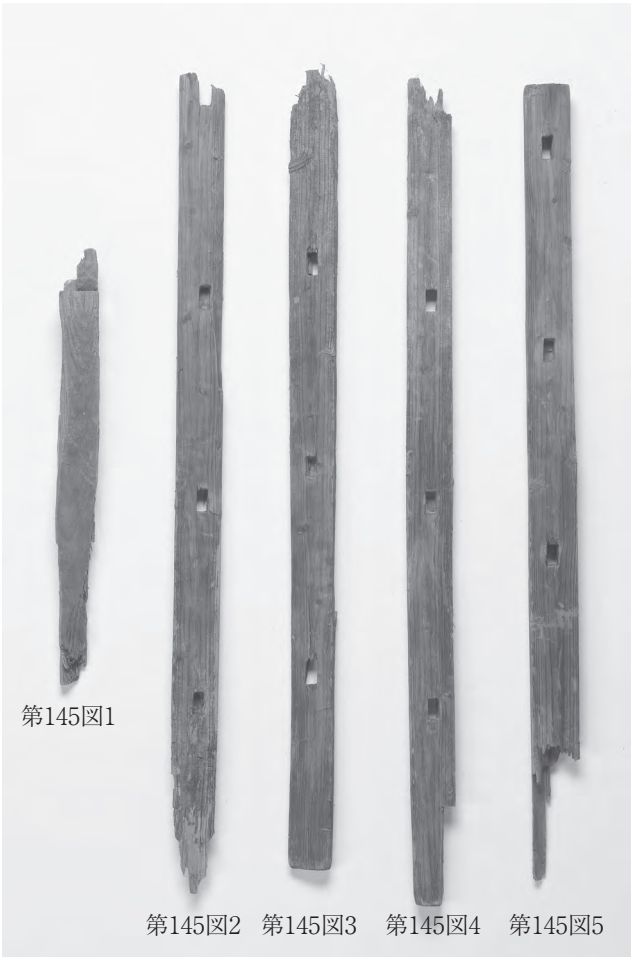

第 142 図 5

第 142 図 15

第 142 図 10

第 142 図 8

本町遺跡出土遺物 29

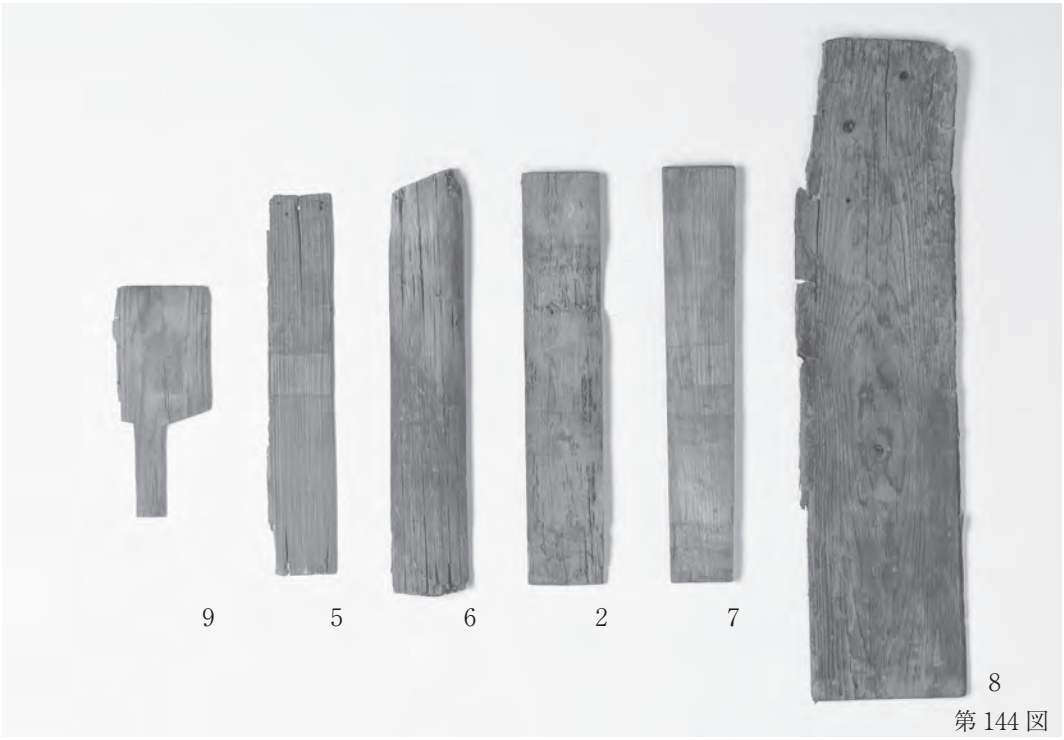


第145図1　第145図2　第145図3　第145図4　第145図5

第143図2　第143図3　第143図4　第143図5　第143図6

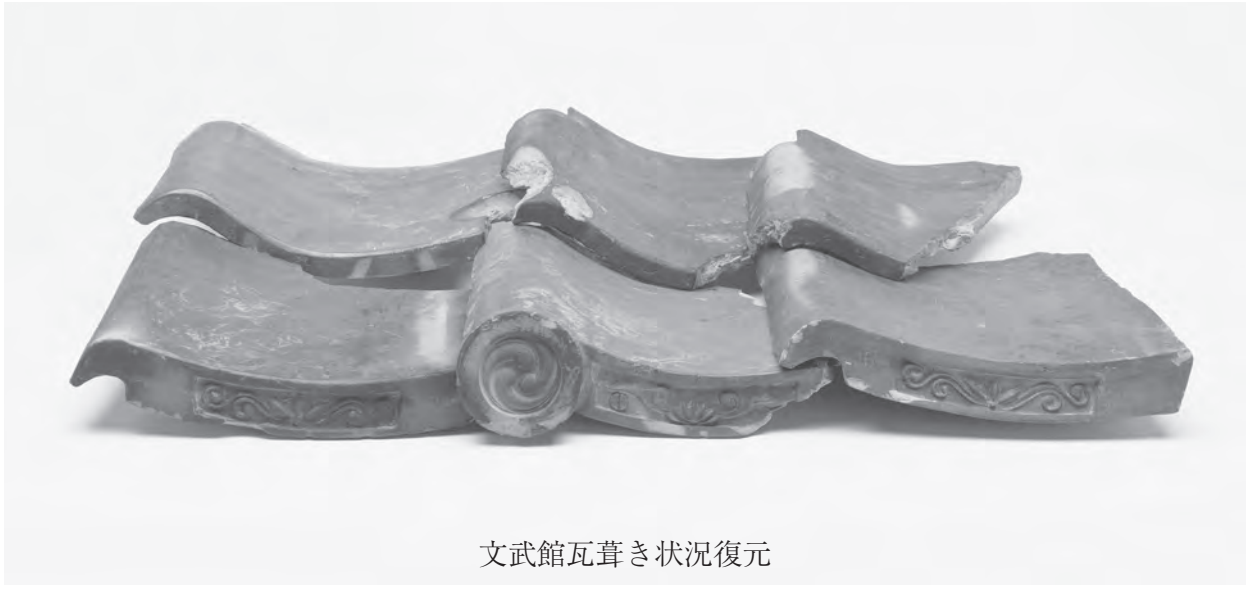
2 次 9 号土坑

本町遺跡出土遺物 30



第 144 図

辻御門西牢屋瓦葺き状況復元



文武館瓦葺き状況復元

本町遺跡出土遺物 31

報告書抄録

ふりがな	ほんまちいせき
書名	本町遺跡
副書名	福岡県柳川市本町所在遺跡調査の報告
シリーズ名	福岡県文化財調査報告書
シリーズ番号	第 265 集
編著者名	秦　憲二
編集機関	九州歴史資料館
所在地	〒 838-0106　福岡県小郡市三沢 5208 － 3 （Tel：0942-75-9575，Fax：0942-75-7834） HP：http://www.fsg.pref.fukuoka.jp/kyureki/、E-mail：kureki@pref.fukuoka.lg.jp
発刊年月日	2018 年（平成 30 年）3 月 31 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
ほんまちいせき 本町遺跡	ふくおかけんやながわしほんまち 福岡県柳川市本町	402079	080192	33° 9′ 60″	130° 24′ 23″	20091005 ～ 20101024	2,710㎡	校舎建て替え

所収遺跡名	種別	おもな時代	おもな遺構	おもな遺物	特記事項
本町遺跡	集落	江戸時代	土坑 49基 大土坑３基 溝状遺構 42 条 大溝９条 井戸３基 埋甕１基 土壙墓 1 基	土師質土器・瓦質土器・陶磁器・石製品・土製品・金属製品・木製品	溜井遺構
		明治時代	土坑 3 基 溝状遺構 1 条 埋甕１基		

要約

本町遺跡は、近世柳川城下町遺跡の一部である。城下町の中でも武士の居住区にあたり、古地図によると、調査範囲は柳川藩中級武士の居宅３軒分と、武士の居住区の入り口となる「辻門」に付属する牢屋の一部にあたる。城下町が形成された当初の 17 世紀前半段階の遺物は少ないが、大溝遺構はその時代に機能していたものと見られ、18 世紀の古地図にはない区画だった。18 世紀以降は武家屋敷跡が発見された。19 世紀中葉には藩校「文武館」が建設され、その後も教育施設同じ場所に作り続けられたことから、当該期の学校関係の遺構・遺物が出土している。

福岡県行政資料	
分類番号	所属コード
ＪＨ	2117104
登録年度	登録番号
29	0006

本町遺跡

福岡県柳川市本町所在遺跡調査の報告

福岡県文化財調査報告書　第 265 集

平成 30 年 3 月 31 日

発行　　九州歴史資料館

〒 838-0106　福岡県小郡市三沢 5208-3

印刷　　片山印刷有限会社

福岡県小郡市祇園 1 丁目 8-15

付図　本町遺跡遺構全体図（1/200）